現代日本文學全集

PL
816
A54
1929

Sakurai, Tadayoshi
Senso bungaku shu

East Asia

CALL NO:
PL
816
A54
1929

AUTHOR:
Sakurai,

TITLE:
Senso bungaku shu

EAS

VOL:

DATE CHARGED:
June 5/69

TO

TICK AND

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

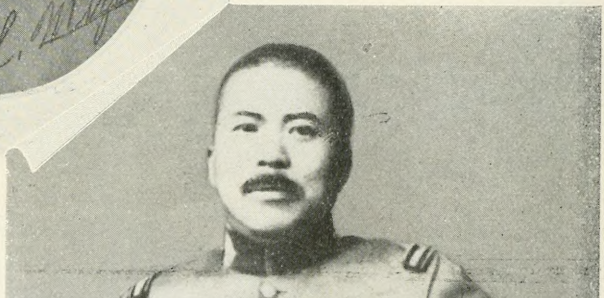
戰爭文學集

杉浦非水裝幀

改造社版

PL
816
A54
1929

LIBRARY
JUN 4 1969
UNIVERSITY OF TORONTO



「肉彈」執筆當時の櫻井忠溫氏（下）と
「此一戰」執筆當時の水野廣徳氏（上）

「戰爭文學集」目次

卷頭寫眞（照影）……二

序詞……二

櫻井忠温篇

扉（筆蹟）……三

自序（筆蹟）……四

肉彈……五

銃後……一〇五

著者の言葉……二三四

年譜……二三七

水野廣德篇

扉（筆蹟）……二四一

自序（筆蹟）……二四二

此一戰……二四三

著者の言葉……四五九

年譜……四六四

序詞

或る國土に棲む人々にあつて、國土を愛慕しないわけはない。それが愛國心である。けれども愛國主義がまことに自覺されて來たのは、きはめて近代である。委しく云へば、イタリイの獨立以後である。國家の對立といふ形式が、はつきり國民に認められて來てからである。國家意識が芽生え、國家の對抗意識が尖銳化されて來るとともに、國家の存亡を賭けるところの、戰爭もまた一層眞劍になる。わが國において、戰爭文學と呼ぶべきものが古くから無いとは云はない。――たとひ、それは大部分歷史の插話としての「軍記」としてであつたにしても――。けれども、颯爽として近代國家意識の尖端を、それだけ息づまるやうな國民感情を、初めて一字の微にすらも滿したものは、櫻井忠溫氏の『肉彈』、『銃後』、水野廣德氏の『此一戰』の出現を待たねばならなかつた。明治三十七八年の日露戰役は、日本あつて以來、日本國民の持つ純眞な國家意識が、戰爭を通じて、初めて最も潑剌に、最も熱烈に、電光ニュウスの如く、世界の大空に描き出されたものであり、二氏の戰爭文學は、明らかにその鮮明な電光線の役目をつとめたものである。明治二十七八年の日清戰役から、日露戰役までにかけて、わが國にも無數の戰爭小說は現はれた。けれどもこれは一つの小說に過ぎない。現實の戰線と戰士の血みどろな愛國心を捉へて、こんなに國民の胸を搏ち、こんなに力強く、心臟を鼓動せしめる戰爭文學は、二氏を俟つて初めて、國民の當面に提供されたのであつた。

第二に、近代戰爭の機構や內容は、この三部の戰爭文學において、初めて日本文壇に、いな、文壇のみならず、一般國民の前に、霧が晴れたやうに、精確に傳へられるのであつた。これは二氏が實戰の第一線上に立つたといふ好位置にあつたからばかりでない、二氏の奧深い專門知識と、一つ處に立ちながら、いつも全體の展望を見失はない洞察力とは、遺憾なく戰線の全貌を何人の前にも展開して吳れる。これは誰にでも望めることではない。日露戰爭は、いな近代戰爭の纖維は、二氏を得ることによつて、初めて絕好な記錄者を見つけ出したのである。

この三著は、出版後一千版以上を重ねた。どこがそんな國民からの需要であつたかは、以上の理由にもあるのであるが、もう一つ、どうしても、取り落せない一つの要因がある。それは主に二氏の、敍述の迫力によるものである。たとひ前の二つの要素があつたにしても、この第三因を缺いたならば、かゝる空前な、國民の感激を呼び起すことが出來ないであらう。と云つても、二氏の技巧や敍述の巧みさは、同じ惚れ惚れする巧みさであつても、全然違つて居る。水野氏の『此一戰』が、整然たる敍事詩であるならば、櫻井氏の『肉彈』、『銃後』は、情熱と血とで描いた一大敍情詩である。云ふまでもなく、文學は感情の高潮を捉へるものである。國家に對する信念や、生死の斷崖に立つた刹那ほど、人類を眞劍にし、それだけ最高度に感情を昂揚させるものはない。二氏の羨ましいほど自由な筆路が、この刹那々々を巧みにスナップして、息ぐるしいほどの實感を讀者に刺激する迫力においては、まことに驚嘆に値ひする。眞實の經驗ほど、卓逸した藝術美を作るものがないといふ敎訓は、此の三部を讀んで、今更に痛感されるのである。まして二氏のやうな藝術素の豐富な人々にあつて。……恐らくこの三部は戰爭記錄として、戰爭文學として、世界的に不朽な價値を持つであらう。

肉彈

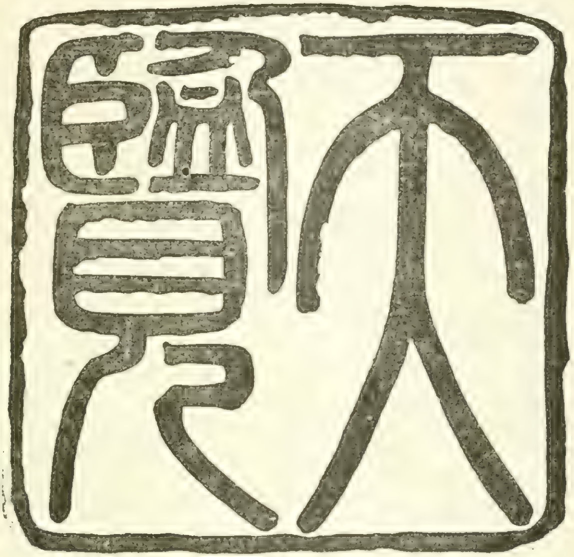
銃後

櫻井忠温

内地と銃後は、外地の若き日の句の記録である。それを再び新しい装いで世に送るになったことは、この上もないうれしさであり、若い当年の思出ともなるが、又醜い海を明るみへ出す恥しさよ堪えない。

忠沼

肉弾

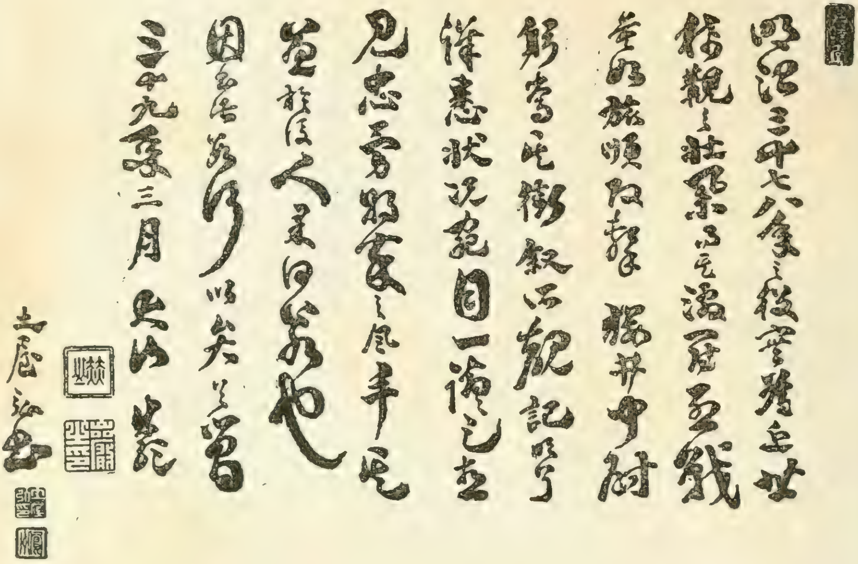

天人覽

卑著「肉彈」は侍從武官長男爵岡澤精閣下を
經て
天闕に達し、乙夜の覽を辱うす。光榮既に予の
身に過ぎたり。然るに又た
皇恩の隆渥なる、特に拜謁を賜はり、微賤にし
て
龍顏に咫尺し奉る。予、仰感俯愧、復た言ふ所
を知らさるなり。

明治三十九年六月二十五日

櫻井忠溫

恭しく　此書を獻して
陣歿戰友の忠魂を慰す


三十九年三月
土屋弘

壮烈
贈
櫻井中尉
希典

米國大統領ルーズヴェルト閣下書簡

The White House
Washington

April 22, 1908.

My dear Lieutenant Sakurai:

I wish to thank you for the two very beautiful copies of "Human Bullets," one in Japanese and one in English, which I have just received through the courtesy of Count Okuma. I already have a copy, which I have read not only with interest but with high admiration. I shall keep this copy always in my library. I have already read portions of the book to my two elder sons, for I feel that the knowledge of the deeds of wonderful heroism so graphically told by you should be an inspiration to every young man who may ever have to serve his country in battle. I wish to thank you, and at the same time to express my profound admiration for the army and navy of Japan.

With great regard, and renewed thanks, believe me,

Sincerely Yours,

Theodore Roosevelt

Lieutenant Sakurai,
Tokyo, Japan.

譯　文

大隈伯爵の厚意により寄贈せられたる美裝の和英文「肉彈」各々一部正に接手せり。予は既に一部を藏し、興味に加ふるに多大なる驚歎の念を以て通讀したり。予は此書を我家の書籍室に珍藏せん。予は既に此書の數章を我が二長兒に讀み聞かせたるが、貴下の實狀目睹するか如くに描寫せる驚絕すへき英雄的行爲を學ふは、一朝有事の時に際して、我國家の爲に奉公すへき義務ある一般青年の精神を鼓舞すへきものたるを感す。予は貴下に感謝し、併せて日本陸海軍に對し深厚なる驚歎の情を表す。貴下に敬意を表し、重ねて感謝の念を致す。

千九百八年四月二十二日

貴下の誠實なる　セオドル、ルーズヴェルト

於大統領官邸

櫻井中尉殿

近頃露國の退役將校て、ルッス新聞の通信員たるガーフィールド氏か來訪した。彼れは日露の釁端を開いた當時、哈爾賓に在つて通信に從事して居たか、軈て召集せられて旅順へ向つた。然るに最早其の時は我か軍の爲に通路を絕たれたので、更に浦鹽へ向けられた者てある。此の人の話に、露都から來る汽車の中には、夥多の勳章賞金等を積載してあつて、同車に充滿せる將卒等は、意氣甚た軒昂、文明の露軍は必すや半開の日軍を粉碎して、彼の燦たる勳章を佩ひ、爛たる黃金を懷にするのてあると、宛ら旣に戰勝ちて凱旋門に入る者の如くて、虎穴に入り死地を踏むの疑惧を抱いてゐ無かつたことを實見したか、日本軍は全く之に反して、男兒一度死を決して陣に臨む、復た焉ぞ生還を期せんやとの意氣て、君國の爲、鼎鑊に甘んし、犧牲たるを覺悟して驀然奮進した。なほ又た露軍は上下の一致和合を缺き、將は驕り、兵は倦み、將校は富み、兵卒は飢うるの有樣て、從つて彼等の間は犬猿も啻ならすとのことてある。然るに日本軍は軍紀の嚴正なるに加へて、戰友相互に父子骨肉の如くに親密てある。此れに由つて見るに、日露兩軍か勝敗の數は未た干戈を交へさるに已に業に決してゐたのてあると、ガーフィールド氏は斯く語つた。蓋し氏の說は肯綮に中つたものと云ふへしてある。

そもそも我か國の軍隊は軍紀嚴肅にして、上下融睦し、以つて君國に奉せんことを競ひて、獻身犧牲の精神か大いに發動してゐる。是れか大和民族の本領てある。而して此の壯美なる精神の最も盛んに發揮せられたのは、卽ち旅順の攻擊てある。物質的に打算したならは、此の攻圍軍の損害は隨分多大てあるか、然し乍ら又た之れか爲に反映した精神的活動の方面から云つたならは、其の利益は莫大なるものてあつて、確かに我か大和民族の歷史に一大光榮を添へてゐる。下級の兵卒に至る迄か、死

生の巷に出入し、旦にして夕を圖らさるに當つて、意氣凜然、死を見ること歸するか如してあり、而も亦た勇者最も情ありて、身矢石を冒し彈雨に浴するか中に、必すや感慨禁せす暗に愁[illegible]を灑いたこともも幾度かてあつたらう。又た同時に名譽と任務とを敬重嚴守して、傷を蒙つて將に死せんとするに臨みて、天皇陛下の萬歲を絕叫するなと、蓋し斃而已の日本武士の本領を發揮してゐるのてある。彼等の精神や行動は、彼の勳章や賞金を賭けられて、戰線へ出たものとは同日の論て無いのてある。

櫻井中尉は予か友人櫻井彥一郎氏の令弟て、自ら旅順に實戰の慘苦を嘗めた人てあり、又た文章の才に富んた軍人てある。予は中尉かなほ戰場に在つた時の書信か、戰爭の表裏、又た其の間に現れたる人情の機微を傳へてゐるのを讀んて、少からぬ興味を感してゐたことてある。後、第一回總攻擊の際重傷を蒙つた事を聞いて甚た悲しんたか、今や中尉は、敵彈の前に辛うして全きを得たる左手を揮つて、實戰の跡を敍て、戰場の壯烈又た悲痛なる狀態と、勇者も亦た淚ある奥床しき人情の消息とを傳へ、旅順てふ大活劇を多感なる筆に描き出して、此の書を公にするに至つたことは、予の最も喜ひとする所てある。皇軍連戰連捷の眞因を闡明し、忠烈なる無名の英雄の逸事を表彰し、遼東の野に白骨を晒したる幾多勇士の忠魂を慰する事は、曩には旅順の勇士たり、今は又た文士として、最も多趣味なる戰爭文學に先鞭を着け、而も大に成功せる、櫻井中尉に俟つ所甚た少からさるものてある。

明治三十九年四月

大隈重信

予、もと一介の武辨、文事を以て世に見ゆるの選にあらず。されど不肖皇恩を荷うて、死生の巷に出入し、矢石の間に立ちて、勇將猛卒の壯烈に感じ、又た腥風血雨の慘酷に泣けり。今や干戈既に戢まりて、皇師玆に凱旋するの盛事に際し、予たるもの豈に竊に既往を追憶して、再び旅順の烈戰を夢想せざらんや。予の禿筆を呵して此書を成すは、蓋し之が爲なり。

此書旅順役の一面を描くに過ぎずと雖も、讀者或は之によりて、同役辛慘の一端を追記し、又た戰爭の壯事及び其の悲劇の消息に通ずるを得ん乎。

此の卑著を公にするに當りて、乃木大將閣下の題辭を辱うしたると、又た負傷以來深厚なる恩眷を垂れ給へる大隈伯爵閣下の序文を賜はりたるとは、予の感謝に禁へざる所なり。又た字句の删正と出版とは、家兄鷗村の勞に賴れり、併せ記して謝す。

明治三十九年四月

著者しるす

目次

口繪（九）
元帥陸軍大將公爵大山巖閣下題字（一一）
陸軍大將伯爵乃木希典閣下題字（一一）
米國大統領ルーズヴェルト閣下書簡（一三）
同　譯文（一三）
伯爵大隈重信閣下序文（一四）
自序（一六）

一　戰友流血の地……一八
二　大命下る……一九
三　征衣上途……二三
四　日本海上……二五
五　いよいよ上陸……二七
六　旅順の價値……三〇
七　南山へ……三二
八　戰後の南山……三六
九　敵狀偵察……四〇
一〇　俘虜の初狩……四二
一一　初陣……四四
一二　劍山の占領……四六
一三　逆襲……四八
一四　髀肉の嘆……五一
一五　幕營生活……五五
一六　警戒線の夜嵐……五七
一七　太白山の激戰……六〇
一八　陣頭の「君が代」……六四
一九　戰場の跡……六七
二〇　繃帶所……七一
二一　長驅追擊……七四
二二　大孤山の攻略……七七
二三　旭旗飜る……八〇
二四　戰場の訣別……八三
二五　總攻擊……八六
二六　肉彈又肉彈……八九
二七　必死隊……九四
二八　死中再生……九八

肉弾

一　戰友流血の地

日露戰爭局を結び、忠勇なる将卒は凱旋した。

　雄々しき其の風采よ。喜び勇める其の姿よ。されど十有八ケ月の間、天日に焦げ、風雨に曝され、硝煙に燻りたる其の顔に浮べる嬉笑の影には、陛下の御爲、御國の爲、荒涼たる満洲の土と化し、露と消えて、今や共に凱旋の樂しみを分つことの出來ぬ幾多の戰友を歎く思ひが潜みて、竊かに暗涙を絞らぬものは無い。

　日清戰役の終りに、かういふ話があつた。将に歸國せんとした某部隊が、戰歿者の墓前に別の手向せんとして整列した時、一兵卒あり、日頃愛し親しんだ戰友の墓標を撫しつゝ、泫然と涙を流し、

「オイ加藤、俺はモウ國へ歸るぞ。お前と一しよに村を出て、一しよに戰に來たが、お前は天晴な打死、俺は、此の面で歸る。……お前を獨り此處へ殘して歸るのは心殘りだ。……だが喜んでくれ、遼東半島は日本のものになつたぞ。お前は死んでも骨は矢張り日本に埋まつてゐるのだぞ。安心してくれ。イ、か、加藤……俺はモウ歸るぞ……」

と、彼れは恰も生けるに語るが如く、一言一句に眞心を吐きて、亡友の忠魂を慰めたのであつた。稍あつて彼れは堰き敢ぬ涙をおし拭ひ、水筒の水を手向けて、胸に餘る悲しさを押へつゝ墓前を去つたといふことである。嗚呼、誰れか此の言葉を聞いて腸を斷つの思ひなきものがあらうか。誰れか此の可憐なる兵卒の心事に涙を濺がざるものがあらうか。凱旋は嬉しい、嬉しさの極みには相違無いが、相共に寒暑と戰ひ、飲食を共にし、硝煙彈雨の間を馳驅した戰友の記念とて、蕭然として立てる墓標に對しては、どんなにか名殘惜しくも又辛い思ひをしたことであらう！　十年の昔に此の情で泣いた将卒が、十年の後、また同じ土地で同じ思ひに堪へぬものが多かつたらう。不幸負傷の爲、半途にして戰列を退いた予の如きも、生きて歸れる戰友の目出度き凱旋を迎へて喜ぶと共に、一しほ死せし戰友の面影が淋しく眼に映つて、涙を誘ふのである。

　扨て十年の昔、遼東のある港を船出した凱旋部隊が、途中で、萬骨を枯らして占領したる遼東半島は再び支那に還附せられたと聞いた時の其の無念さ！　腕を扼し胸を打つて悔んだのも道理。笑つて瞑したる加藤の忠魂を慰藉した彼の兵卒は、那許りか歎いたことであつたらう。戰友が忠義の骨は遂に日本の土に埋められたるものでなかつたことを思へば……

　然るに此たびの大戰！　遼東の空に迷つた昔の戰友の英魂は、嚮ふ處敵無き皇軍を迎へて那許りか喜んだことであつたらう！　予等が始めてこゝに上陸して、一歩二歩と踏み〆めた時に覺えず、

「これも矢張り日本の土地だ！　戰友の骨を埋めし處だ！」

と叫ばざるを得なかつた。予は出征中常に、十年前戰歿者の墓碑の片破れでも殘つてゐること

かと、注意を拂つてゐたが、勇士を記念すべき朽ち果てた木片すら認め得なかつた。されど彼等勇士の靈は、必ずや再び奮ひ立ちて、予等と共に戰場に馳驅したことであつたらう。

「この下には戰友の骨があるぞ！　此の上には戰友の魂が迷つてゐるぞ！」

とは予等が常に部下を激勵するために用ゐた言葉であつた。

優渥なる天詔と、陛下の御稜威とにより、皇軍は嚮ふ處、海に陸に大敵を打破つて、我が武惟れ揚り、我が威維れ振ひて、大八洲の國の光輝を中外に輝かした。而して遼東は再び日本の地となり、久しく祀を絶つた戰友の墳墓の地を取り返した。而して是れが爲に血を濺ぎ骨を枯らしたことは先に幾倍せしか。我が軍の將卒は舉りて義あり、勇あり、大敵に當りて毫も屈せず、勝たずんば止まざるの意氣にて、さしもの露軍を破つたのであるが、この勝利を獲んが爲には、家を棄て、國を去り、死を決して前後出征したる一百萬の日本武士が、遼東の山、滿洲の野に、はた黃海、日本海に如何ばかりの艱難を具にしたか。また之れが爲に幾許大の價を拂つたか。これは國の歷史が詳に記し、後世子孫をして永く忘れざらしむべきものである。

日露大戰爭記——之れは史家、文豪の靈妙なる筆を俟うて始めて成るべきものである。予の如き唯だ一個微々たる軍人として、素より其の任に堪へぬ。併し自ら戰場の人となつた予には砲火の間より得たる實感も少からずある。殊には戰史上未曾有の劇戰、難戰として錄せらるべき旅順の攻圍軍に參加して、親しく經歷したるよりこゝに其の事實を記し、一面には予が從征の記念とすると共に、一面には我が子孫に傳へんとするのである。もしこの一書が幸に讀者を得て多少の利益を與ふることが出來るならば予が望外の幸福である。

二　大命下る

明治三十七年二月、日露の國交遂に破裂し、干戈を以て相見ゆるに至り、既に仁川に旅順に我が海軍は露國の海軍を畏懾せしめた。宣戰の大詔は渙發せられた。動員令は此處彼處の師團へ下つた。而して予等軍人は今更の如くに骨鳴り血湧くを覺えた。動員令！　動員令！　嗚呼、如何にその待遠しくあつたことよ。今日は第何師團へ動員令があつた。明日は第何師團に下るといふ噂だが、一體我が師團は何時頃動員せらるゝであらう？　何でも早く戰地へ往かねばならぬ。他師團の者に早く出られて、後からノソ〳〵と往くやうなことでは面白くない。とは云へ大命無くんば如何せん。大君の御言かしこみ水にも火にも入るべき軍人である予等は、たゞ出でよ進めの大御言を待つべきである。アア其の大御言！　其の動員令！　それを待つ予等は大旱に雲霓を望むが如しで、動員令とは異様な文句であるが、雨乞ならで予等は實に動員乞をなし、彼方へ往つても動員、此方へ往つても動員、暫くは丸で動員の噂で持切つてゐた。

然るに武士の心の色に薫る櫻の春、四月の半ばのある日一通の電報が飛び込んだ。これ待ち焦れた動員令である。大命は遂に下つた。これによつて我が師團が活躍すべき時機いよ〳〵到來したのである。當時聯隊旗手であつた予は聯隊長青木大佐に、

「只今動員令が下りました！」

と報告すると、聯隊長は唯だ、

「アゝさうか」と輕く頷かれたばかりであつたが、「占めたり」といはぬ許りの嬉しさは、素より笑顔でよまれた。嗚呼、此の日ほど愉快なる時は無かつた。予は外に飛び出て、各中隊の將校に此の事を觸れて廻ると、忽ち聯隊中唸るやうな騷ぎで、誰も彼も我れ一人で、露西亞を引受けくれんずとの元氣で、魂は既に遠く遼東の檜舞臺へ馳せて、修羅の巷の快戰を夢みつゝあつた。

忽ち召集令狀は町に商ふ人にも野に耕す人にも飛んだ。軈て東より西より南より北よりゾロ〳〵と兵營を指して集まつて來た。自分が居なければ、妻子を養ふことの出來ぬ窮夫もあつたらうし、命旦夕に迫れる父母の看病に疲れた孝子もあつたらう。百人が百人、千人が千人、皆夫々止むを得ない公事私事を持つてゐたらうが、併しながら、一旦緩急あらば義勇公に奉ずるの志は乃ち此の時に發揮せらるゝぞ。今更家を思ひ、私に拘うて、婦女子の態を學ぶべき時ではない。男子國難に殉ず、正に此の時に在りと、幾百の健兒勇躍して軍旗の下に馳せ集まつた。

中村某と云ふ豫備上等兵があつた。家には長煩ひの妻と三歳になる子供との三人暮し、その日その日の細き烟も立てかね、中村が居なければ、見す見す妻子は餓死しなければならぬ有樣であつた。さりながら此の大事に臨んで、一家の私事を考へてゐらるべき。夫が出發の前夜に、病める妻は、元氣を粧ひ、町に往きて僅か二合の米と、一錢の薪木とを買つて歸つた。

アゝ、僅かに二合の米、一錢の薪、これぞ夫の目出度き出陣を祝する爲、病妻が心ばかりの馳走であつたのである。さてもいとしの妻よ、みじめなる夫よ。父子夫妻が一生の哀別ほど悲しきは無きに、而も夫が身を挺して國難に赴くに當り、妻は病み、子は飢う。嗚呼何等悽慘悲慘の狀ぞ！　かくて中村某は夜半妻子に暇を告げ、村民の一人にだにも見送らるゝこともなく、涙ながらにも勇ましく召集部隊に驅け付けたのである。かやうな哀れな話は啻に彼れ中村の身の上にのみ限らず、全國に亙りて多く其の類があつたらう。されど仁あり義ある我が國民は、この類の哀れないぢらしい勇士の家族を能く救濟し、出征者をして後顧の憂なからしめたのである。

豫後備兵が入營して、扨て身體檢查となり、不合格と決定された者は、見る目も氣の毒な程ションボリとして歸つて往く。

「どうかして連れて往つて下さい、郷里を出る時分、盛んな送別會をして貰ひ、萬歲の聲に送られて、生きて歸らぬ覺悟をして來たのに、體が惡いので除られたと言つては、どうして歸られませう。どうか御願ですから、連れて往つて下さい。」

などと、健氣に云ふ。されど體が惡くては致し方がない、氣の毒でも、可哀さうでも、宥めて歸らせたのであつた。

「後の事は心配するな、しつかりやつてくれ、好いか？」

「大丈夫だ、露兵の首の十や二十は御土産にするわい！」

「ヤイ作、病氣などで死んでくれるな、死ぬなら戰死だぞ、阿母のこたア心配するな！」

「生きて再び日本の土地を踏まない覺悟だ、俺が戰死したと聞いたなら、喜んでくれよ。」

「皆樣ドウもこゝまでお送り下さいまして、御丁寧に有難う御座います。屹度目覺しい手柄を立てて御覽に入れます。」

「萬――歲」

此等は皆應召員控所に起つた壯快なる響であつた。國民に此の覺悟があり、軍人には此の決心があつた。

動員の完結するまで、予等は目の廻る程忙しかつた。野戰隊に編入する者、補充隊に殘す者、それ〲に區別して、動員は即ち完了し、何時なりとも出發の出來るやうに整頓した。

補充隊に編入せられたものの失望落膽は見る目も氣の毒であつた。知合の將校などに直々泣き付いて補充で殘されたのは殘念だ、どうか野戰隊へ廻してくれなどと賴んだりする、人員に限りのある事とて、一々それを取上げることもならず、中隊長等は其の決心覺悟を賞讃しつゝ、彼等を慰撫したのである。

「假令補充隊に編入されたにしろ、今度は非常の大戰爭だから、半年や一年で片付くわけのものでなし、それに一度戰爭をすれば、直ぐ補充が要るのだから、其の時には一番懸に戰地へ來られるやうにしてやる、落膽するな、何も早く戰地へ往けないからとて軍人として一つも恥づる所は無い、殊に最後の勝利を占むるものは、汝等補充隊のものの上にあるのだ。精々勉強して戰地へ來られる時を待つてゐよ。」

などと云ひ聞かせたのである。かゝる健氣な兵卒の心中を思へば一しよに戰地へ連れて行きたいとは山々思つたが、致し方も無い。或は賺し、或は戒めて、無理にも壓へつけるやうにしたのである。如斯くに熱烈なる兵士の氣魄、これあればこそ、我が軍は戰へば必ず捷ち、攻むれば必ず取つて、世界の人をして日本軍隊の忠勇義烈なるに驚歎せしめたのである。

我が聯隊の動員完結後に一つの勇ましくも亦た哀れな珍事が起つた。觀音寺と云ふ寺院に宿泊してゐた補充隊の二等卒宮武藤吾なる者は、自分が補充隊に殘されたのを悔しがり、郷里を出る時、親兄弟や村の人に、先登第一に出征して目醒しい働きをすると誓ひ、生きて再び歸らぬと覺悟を決めて來ながら、オメオメ補充隊に殘つて何の面目があるか、戰爭はたとひ長くかゝるにしろ、いつ戰地へ行かれる事か分らぬ、生恥曬してゐるよりか、なまじひに死んだ方が増しだ、疊の上でノタレ死をするのは殘念だが、是れも同じ國を思ふ眞心だ、體は死んでも、魂は朽ちぬ、死んでも魂になつて、早く戰地へ往き、御國の爲に忠義を盡さう。と斯く哀れにも藤吾は狹き心に思ひ詰めて、或夜戰友の寢靜まつた際を覗ひ、硯引き寄せ、

「私せんちへ行けぬのが、ざんねんでなりません。どんなに賴んでもつれていてもらへませんから、死んで忠義をつくします。」

と云ふ悲壯な遺書を認めて、兼ねて用意の白鞘の短刀を拔き放ち、頃は五月十二日、さらでだに物悲しき古寺の一隅、軒端を傳ふ雨の音に一しほ淋しき夜半、藤吾は「天皇陛下萬歲」の聲微かに、眞一文字に腹を掻切つた。さりながら、天安んぞ此の可憐なる丈夫を棄てんや、彼れは直ちに戰友の認むる所となつて病院に送られた。負傷の經過良好で、やがて全治し、一旦除隊になつたが、後再び徵されて出征した。

四角な道理から云へば藤吾の所業は愚と評すべし。早く戰地へ往かれぬから自殺するとは淺慮である。されど君國の爲と思ひ通つた彼れの心の中や可憐ではなきか。藤吾の稚氣は、却つて全軍の勇氣と誠心とを卜すべきものではなかつたか。

是れに反して、國の廣きを以て居り、兵の多き

きを以て誇り散らした露國は、ツアールの德下に普からず、有司の苛政民を虐するが故に、人民は奉公の志薄く、コサック騎兵は鉄鞭で威かしつけ、忌み嫌がる國民を驅り集めて、滿洲へ送つたと云ふ次第であつたから、其の兵はよし強くとも——なかなかに強いけれど——戰鬪第一の要素たる士氣に於いて缺くるところがあつた。こゝに於いてか、大和魂の所有者なる我が日本人は既に[illegible]は[illegible]して僅に敵兵を[illegible]するに餘りあつた。五の數は十の數に敵せぬ。しかし我等は常にこの原則を破つて小數を以て大數に勝つた。即ち精神力の旺盛なるもの常に勝利者であることを證據立てたのである。

南阿戰爭に於いて如何なりしか。世界の最大強國として自負せる英人が、彈丸黒子の地に割據したるボア人と戰端を開いた時には、世界は擧りて、是れ恰も鐵槌を以て卵子を碎くが如きのみと信じてゐた。然るに意外にも、英軍の敗報連りに天下を驚かしたは何故か。乃ちボア人の勇敢慓悍なると、彼等が祖先以來英人に對する歴史的敵愾心と、又た其のスパルタ的精神教育とに基因したことは云ふまでもない。

動員に關する總ての事務は、平素よりの計畫に從ひ、極めて短少なる時日の間に整頓せられて、予等は出發命令の下るべき日を、今か今かと待つてゐた。抑々軍隊の事務は、何事も快速にして、而も綿密なる處理を要するもので、殊に動員となると、一分一秒を爭うて、速に整備せられなければならぬものである。千八百七十年佛蘭西軍がワイゼルブルヒの初陣に、見ん事獨逸勢の爲に打破られて、千秋の恥辱を殘したのは、即ち動員の完結が不十分なりしにも拘らず、兵を動かすの已むを得ざりし結果に外ならぬのである。

我等は既に動員完結し、出發の用意整ひ、今日か、明日か、と出發の日を待ちつゝ、アゝもしてやらう、カウもしてやらうと色々に空想を畫いて居た。半宵月影の兵舍を照す時、露滴る軍刀を一揮再揮して微笑を洩した勇士もあつたらう。

動員の完結した後で、我が聯隊長は一般の武裝檢査を行はれた。さしもに廣き練兵場の端から端までは、戰時要員を充したる三千の健兒、撰りに撰つたる精鋭なる將卒で塡まつた。これが日ならず旗鼓堂々として海を越え、飛彈爆鳴を冒して、敵の金城湯池を壓倒すべき勇士である。是れが日ならず硝煙彈雨の裡に在りて、共に艱難を嘗むべき我等が兄弟である、我等が戰友である。

嚠喨たる喇叭の響と共に、名譽ある軍旗は迎へられ、森嚴なる儀式は聯隊長に依つて行はれた。並みゐる勇健敢爲なる將卒三千、彼等の行動を指麾し、彼等の生命を掌握する聯隊長の、此の時の得意想ふべしではないか？聯隊長は、武裝と軍容とを檢するに當りて、歡極まつて又た言ふ所を知らずと云はれた。此の式が濟むと聯隊長は頗る滿足の面ざしにて、部下一般に訓示を與へられた。其の語や痛切また悲壯、吾人の心膽に沁み渡り、上は將校より、下は兵卒に至るまで、手に汗を握り、脣を固く結び、踴躍將に天を衝かんとするの意氣を示した。

武裝檢査後數日、旅團長山中少將は我が聯隊に對して、一篇の剴切なる訓示を與へられた。

「我が聯隊の軍旗は既に日清の役に於て赫々たる偉勳を奏せり、其の勇名は世の齊しく知る所なり。諸士は此の名譽を保持するの

責任を有すると共に、又た益々其の武威を發揚すべき責任を有す。其の名譽を發揮し得ると得ざるとは、諸士の覺悟如何にあり、若し一度不覺を取り、苟くも汚名を受くることあらば、再び之れを雪ぐの機會は容易に來るべきにあらず。加之ず、初戰以來巳に輝かしたる軍旗の光榮をも消滅するに至るべし。深く戒心すべき事とす。常に、陛下の股肱、國家の干城を以て自ら任ずる吾等が、此の重大なる責任を盡すの途他なし。厚く、勅諭の五事を服膺し、一誠以て各々其の本分を盡すにあり、平生の覺悟を實際に發表するにあり。然るに今又た、陛下は卿等の忠誠勇武に倚頼し、其の目的を達し、帝國の光榮を全うせんことを期せよとの、勅語を賜へり。此の優渥なる勅語に對し奉りて、恐懼言ふ所を知らず。余は諸士と死力を竭し、速かに此の敵を討滅して、上は、宸襟を安じ奉り、下は國民の信頼に背かず、以て國家を富嶽の泰きに置くを得ば、吾等の微忠も亦た效果ありと謂ふべし。」

我等の責任は重きが上に重きを加へられたのである。アヽ吾等は如何にして此の責任を盡して、大元帥陛下の御信頼に應へ奉り、且つは我が軍旗の光榮をして益々赫耀たらしめんとしたるか？

三　征衣上途

動員令のあつた日から殆ど一ケ月目、乃ち五月二十一日は、これぞ生涯忘るべからざる日である。

我等が此の日の來るを待てる間に、九連城方面の捷報は、連りに我等を狂喜せしめたと共に、またかう云ふつまらない心配も起した。斯うドシ〱と勝つて行けば、イザ我等が出發と云ふ時に、戰爭はモウ濟んでしまひはせぬか、第何師團は此の二三日内に出發をするといふ噂だ、我等は何時まで手を束ねて待つてゐるのだらうか、グヅ〱してゐる中に、吾等の樹つべき戰功は、他の師團の者等に奪はれてしまふ、早く行かなければ、戰をしようにも場所が無くなるだらうと、逸雄の我等は一日たりとも早く日本の土地を離れなければ、折角力瘤を入れた腕前を示すことが出來ぬかの如くに思つてゐたのである。愈々近日目出度く戰地へ行けさうだとなると、サア半時でも一刻でも早く出發しなければ安心がならぬと、立つても坐つても居れぬやうに思つてゐた。

待ちに待ちたる出發の日、其の五月二十一日は決定せられて、午前六時、城内練兵場に整列すべく命令せられた。

日頃の熱望は茲に達せられた。我等の喜びや限りなかつた。されど此の喜びあるに伴ひて、又た暗涙の竊に襟を霑すことが無くてゐられたらうか？　丈夫涙無きに非らず、されど別離の間に灑がずとか。無論、今更戀々として家を顧み、後に心が殘るではなかつたが、されどかゝる決心のあればある程、これが父子兄弟今生の見納めなるかと思へば、鬼の目にも涙の譬。眼底涙の湧くを禁ずることは出來なかつた。女々しといつて笑ふ者は笑へ、予にもこの涙があつた。

出發の前夜、予は舊友の寫眞を出して見たり、机の中を片付けたり、死んだ後でも、遺族の者に、何一つ分らぬ事の無きやう、それ〲に整頓してから、疊の上での最後の眠を求む

べく寝床に就いた。

暫し假睡みし程に、金鶏城頭より打出す三發の號砲は、いざ出發用意との午前三時を報じた。スハと跳ね起き、清水を浴びて身を潔め、晴れの征衣を着飾りて、大君在ます東の空を伏し拜み、臣今征途に上ることを奏した。最後――實にこれを最後と信じた禮拜を、先祖代々の靈前に捧げた時には、全身冷水を浴びた如くであつた。

「汝は、陛下の御爲、粉骨碎身進んで難に赴くべし。卑怯な振舞して、祖先の位牌を傷つけるな。」

と戒められるやうな感じを喚び起された。而して又た一族の者等は、予を圍繞して別れの酒觴を擧げ、皆々予の出陣を祝つてくれた。

「後のことは少しも心配するに及ばぬから、思ふ存分働けよ。其の方の戰死は此の父も覺悟してゐる。立派な功名して家門の華を咲かせよ。」

「私の事は決して御心配下されぬやう。武門の誉として、これ程嬉しい事は御座りませぬ。多病の御身、折角御大切に。」

と斯の如きは啻に予のみでなく、今日出征の家々に於いて殆ど同時に、親子兄弟が永別に臨んで繰返された悲壯の言葉であつたらう。

やがて時迫りしかば、予は神前に備へありし軍刀を腰に佩き、母が汲み給うた別れの水杯飲み干して、返らじと誓ふ心の梓弓、勇みて最後の足並輕く、我が家の軒を後にした。

或る友人は、門出と云ふ其の前夜になつて、何たる不幸ぞ、最愛の妻は乳吞子を殘して、死出の旅へと赴いた。されど野邊の送りを營むべき隙もあらず、決然、涙を揮つて征途に上つた。壯なり、偉なり、此の男兒、國難に臨んで私愁を斷ちは斷つたものの、嘸かし血を吐くの思ひであつたらう。彼れが冷き露營の夢は、恐らく蕭然たる妻が記念の木の邊に、又た母を亡つて泣く孤兒の枕に迷つたであらう。

午前六時、聯隊は整列を終へ、軍旗は幽玄壯重なる―足曳―の曲の吹奏に迎へられ、之れを麾いて胡沙朔風に飜すべき聯隊長を仰いだ。我等勇氣鬱勃たる精兵は聯隊長の手足なり、我等はまた既に家もなく親も無し。聯隊長は我等の父にして、漠々たる滿洲の原頭は我等の家とすべき處となつた。率ゐる者、率ゐらるゝ者が、此の時相互の間に催したる感慨や那許りなりしぞ!

聯隊長は隊伍を睨一睨して、耳朶を劈くばかりに、故國を去るに臨みての最後の訓示を朗讀せられ、終ると、其の發聲にて、衆は一同に、大元帥陛下の萬歳を大聲三唱した。

あゝ益荒雄の伴は起きぬ。我が大君の御言のまに〳〵戈執り競へり。嚮ふ處、天も裂くべし、地も碎くべし。

「第一大隊より前進!」

これぞ進軍に臨んで、青木聯隊長が、部下に下された最初の號令であつた。これよりして我等は、聯隊長一たび號令を發すれば、如何なる堅壘に對しても、如何なる猛火に對しても、常に〳〵前進しなければならず、冒進しなければならなくなつた。

長蛇の如き我が聯隊は、國民の熱心誠意より迸り出づる萬歳の聲に送られて、一歩一歩に前進した、遠く消えゆく靴の響、靜かに靡する銃劍の音、これ等は熱せる國民の耳朶に那許り勇ましく聞えたるか? 遠くまた近く響き渡る喇叭の聲は、即ち至愛たる同胞に對する暇乞であつた。老いたるも若きも、手に手に國旗を振翳しつゝ、天地を轟かす萬歳の聲!―我等は

此の至誠に報いずしてあるべきか？　曾て敵壘に向つて、耳も聾する喊聲を揚げて突撃した時には、背後で國民の萬歲の聲が、潮の如くに湧き起るやうに感じたのである。我等が喊聲も、蓋し亦た國民の聲の反響に外ならぬのである。巨彈耳を掠むる戰場の旦にも、凜として膚寒き露營の夕べにも、我等が決して忘るゝ能はざりしものは、國民が熱血を絞りし萬歲の聲であつた。

予は數ならぬ身を以て、名譽ある軍旗を捧持するの重任を荷ひて出征したのである。路傍に群立せる人々が、軍旗に向つて手を擧げ帽を振り〳〵熱叫する萬歲の聲は如何に予を激勵せしめたか？　而して如何にして此の重任を全うすべきかを恐れしめたか？

行進の途中、曾て五年の長き懇篤なる薫陶を垂れたまひし兒島先生は、予を見るや、欣躍措く能はざるものゝ如く、二步三步予の傍に忍び寄り、低き聲にて、

「櫻井シッカリやれよ！」

と、肺肝より絞り出した此の最後の訓戒、予は戰場馳驅の間、常に此の語を繰返して、師恩に背かざらんことを期してゐたのである。

可憐なる幼稚園の兒童が無心の軍歌は、いかばかり我等を感奮せしめしぞ！　道に蹲る老媼が、珠數爪繰りつゝ伏し拜み、

「御大師樣が守つて下さいます。兵隊さんお賴みいたします。」

嗚呼、これ等がいかばかり痛切に我等の肝を刳りしことなるぞ！

鹿兒島丸、丹後丸等の運送船は、遙かの沖に碇泊してゐた。兵員は續々乘船を始めた。通船は海を蔽うて往復する、陸には市より村より人々が黑山の如くに群り來つて、國旗を打振り、歡呼の聲を放つた。聯隊長が、訣別の握手を知事と交はした時の、名狀すべからざる悲壯沈痛なる光景は、今なほ目に浮んでゐる。

乘船悉く終り、軍旗を甲板上に樹てゝ國民に最後の別を告げると、運送船は舳艫相銜んで、黑煙漠々、何處を指すか波濤を蹴つて、西へ〳〵と航進した。時しもあれ一天掻き曇りて、雨は緩より急となつた。

嗚呼、熱誠なる國民よ！　嗚呼、狂喜せる國民よ！　諸君は彼の時、雄心勃々軍旗を押立てて出征した數千の健兒が、やがて打揃ひ、凱歌を奏して目出度く歸り來るべしと豫期してゐたであらうか？

四　日本海上

國民が萬歲の聲の、何ほ遠く近く耳朶に響くが如くに感ぜられつゝ、心には山河千里の戰場を夢想しつゝあつた我等を乘せて、船は西へ西へと馳せた。されど知らず、我等は何處に向つて行くのであつたか、何處へ上陸するのであつたか、孰れの方面に於いて戰鬪するのであつたか。これは輸送指揮官たる聯隊長と、內命を受けたる船長との他には、一人として知り得なかつたのである。又た聯隊長や船長とても、其の時々の命令を受けるのであつたから、上陸地點や、戰鬪方面は前以て詳かに知つてゐなかつたのである。上陸地は或は眞南浦であるとか、或は鴨綠江口であるとか、吾等は海城方面へ行くのだとか、イヤ旅順の攻撃をやるのだらうとか、たゞとり〳〵の噂をしてゐたのであつた。さり乍ら、大命の指す處、軍旗の進く處、南下北上、孰れに向はんも、我等は何の關するところぞ！　たゞ滿身の勇氣を發揮す

るの時、一分一刻に近づき來るのを思うて、我等は甚だ壯快の感に堪へなかつた。
　二十一日の天將に暮れなんとする時、馬關の海峽を過ぎた。これが愈々日本の國土の見納めなるかと思ふと、何となく名殘が惜しかつた。
「いざさらば我が日本の地！　さらばよ我が故郷！」
　日本海上の夜、波も騒がず、朝來の驟雨は殘り無く晴れて、四面唯だ寂寞、こゝに幾千の勇士は靜かに眠りに就つた。出征第一夜の彼等が夢は何方に馳せしぞ？
　穩かなる波の聲、靜けき機關の響、また折々聞ゆる咳拂ひの音など、一しほ凄涼の感を催さしめた。
　明くれば二十二日、一天拭ふが如く、半片の雲も見えない。これぞ眞の日本晴の空であつた。凡ての船は恰も此の時、六連島の沖を、合ひつゝ離れつ、遙かに對州の山を望みつゝ航進した。
　時しもあれ、一羽の鷹は、我等が船の甲板に舞ひ下りた。兵士等は彼方に追ひ、此方に追ひ、嬉々として此の瑞兆を祝した。鷹は暫く此の船を離れ去らんともせず、或は檣上に或は甲板に、勇ましく飛び翔りつゝ、我等の多望なる前途を祝福したる後、次の船へ飛び行きしか、我等は其の影を見失つた。
　一日と暮れ、二日と經つと、予等は追々退屈となつた。只だ之れを慰むるは、各々の祕藝に訴ふるにありて、或は自分の經歷談が出る、さては怪談、落語、源氏節を語る、祭文を唸る。
　彼處の隅に一群、此處の隅に一團、おもしろ可笑しう賑ひ出した。時には甚句踊の一つも出るいきほひ、やがては天狗連の面々が、鼻高々、背嚢を見臺に見立て、扇子を怪しう捻りながら、チョボを語る。サハリをやる。大向うの拍手喝采は船中の狹き天地に轟き渡る。太夫殿滿面に得意の色。サア、興が乘つて來た。薪を積んだやうに折り重なつた彼方からも此方からも、囃し家が出る、手品師が現はれる、孰れを見ても皆軍服姿の太夫殿だから可笑しい。
「かはりあひまして御機嫌を伺ひます。成るべく御耳新しいところを一席辯じまして、引き下らうと云ふ事に……」
などと得意氣に張り上げる愛嬌聲。其の同じ喉からして、やがて激浪の如く敵地に疾驅して敵陣に突撃し、敵兵を頭から丸呑にするやうな銅鑼的喊聲が出たのである。
　敵地を指して進み行き、往きては還らぬ此の船旅は、上は隊長より下は一兵卒に至るまで、親しきこと一家族の如く、和氣靄々として其の情曖かに、面白可笑しう打興じ、有りもせぬ智慧まで絞り出しての競くらべ、笑聲は絶えず潮の如くに船中に湧いた。
　漠々たる雲烟の中々に晴れやらぬ對州を見送つて、我が船は遠く朝鮮の連山互峰を眺めつゝ、淼々たる海波を北へ北へと針路を取つた。昨日も今日も義太夫、講釋は例の如く、又た笑ひ聲が少しく收まる時は、或は怪しき手付でピアノを彈いたり、或は甲板に出て、胴間聲の軍歌を吶鳴る、あるひは碁を圍むやら、腕角力をやるやら、それも飽足ると、今度は我等の本職に立ち戻り、黑幕の緞帳が切り落され、戰場なる舞臺に上つた上は花々しく大立廻りを演じて世界の者に一泡吹かさうと軍議を凝らす時もあつた。
　忘れもせぬ五月二十三日の事であつた。船長は末代までの記念の爲、一同の自署を欲しいと云ひ出した。これも無聊をやるの一興と、予は一枚の半紙の上方へ、鹿兒島丸航海の粗畫を描き、其の下方に青木大佐始め、各將校が一々

官姓名を書き並べた。嗚呼、此の一葉の紙片に名を署したる三十七人。其の中生あるものは僅かに數名に過ぎざるに至つたと思へば、これぞ實に尊き記念物である。胡國に赴きし蘇武は、再び漢土の月を眺めたけれど、勇士は屍を滿洲の野に曝して、幽魂復た還らず。今は有つて却つて仇なる此の記念、生殘の予の如き之れを見て感慨幾許ぞ。さりながら屍を馬革に包むは丈夫の本懷、彼の勇士等は潔く其の本懷を遂して英靈は永く九段坂上に留まり居るのである。

神がきになみだ手向けて拜むらし
　　かへるをまちしおやも妻子も

の御製を拜誦する時、殊更彼の連名戰友を追慕して、なまなか生き殘りて腑甲斐無き我が身を喞つのである。

二十四日の午前、我が船は長山列島附近を航進してゐると、遙かなる水や空の間、並行線状に細き黒煙の、幾線となく漂ふのが見えた。是れぞ即ち我が聯合艦隊の集合してゐるのであつて、幾十隻の艨艟は、波濤を蹴つて進み來る運送船を迎へてゐたのである。其の壯景偉觀、我等をして筋骨皆躍々たるの概あらしめた。頓て一隻の巡洋艦は煤烟を揚げて近づき來り、何事かの命令を齎して、運送船と共に進行した。

此に至つて我等は愈々上陸の機の近づきたるを知つた。戰場の活劇舞臺に於ける、予等の出幕にも程無きを知つた。されど猶ほ未だ知らず、我等は何處の地點に上陸するのであつたか、そして何處へ向つて前進するのであるかを。

衆は等しく期して望めり、旅順方面！

五　いよ〳〵上陸

上陸地點？　これぞ我等が祖國の海岸を離れてから此の方、常に疑問に附してゐた事であつた。或は北、海城、遼陽を突かんが爲の大孤山上陸か、或は直ちに渤海灣に進んで、營口に上陸するものなるか。又た或は遼東の一海岸に上陸して、南下、旅順の堅塞を衝くものなるか。其の孰れなるやは素より知らず。我等は只だ思ひ〳〵の判斷を下す、それも船の前進するに連れて、おのづから變つてゐた。然るに今や海圖を見れば、船はいよ〳〵長山列島の南方を駛せつゝあるので、我等は確かに旅順に向ふを目的として、某の一角に上陸するものなりと悟つた。

護衛艦と運送船とは舳艫相銜んで、盛んに煤煙を吐き、白波を蹴立てゝ、上陸地點に向つた。稍や暫くすると、向うに暗灰色の細く長き陸地が、濃煙の裡に髣髴として横はつてゐる。嗚呼これぞ實に遼東半島！　十年の昔に、日本男兒が忠義の骨を埋めたる墳墓の地にして、これより又た我等が屍を曝すべき處である。而して昨夜來天色暗澹とし、鼠色の雲霧は切れては結び、結びては切れ、海風は檣頭に荒み、波浪は艦端に碎けて雪と飛び花と散つた。後を顧みれば、萬里の雲と水、かの雲のあたりや、日本の空か？　されど國民が萬歳の歡呼、老婦が珠數爪繰る音、兒童が無心の軍歌、これ等はなほ風に傳はり來つて、耳に響くが如く覺えた。

上陸すべき地點は、遼東半島の東海岸で、貔子窩の西南なる鹽大澳と云ふ一灣であつた。灣か、澳か、蓋し漫々たる支那海の、一曲浦に過ぎない。東海岸は、只だ一つの大連灣を除きて、

他にこれぞと云ふべき良港が無い。されど大連は猶ほ敵の有なり。故に如何なる困難危險を冒しても、戰略上此の地點に上陸しなければならぬ。元來此ノ近海は潮流波濤險惡にして、少し強い風が吹かうものなら、上陸はおろか、碇泊する事さへも覺束ないのである。殊に遠淺で、船は陸より一里餘の遠き沖に投錨せねばならず、而も烈風の時は數里の沖へ流されると云ふ有様である。されば斯くも困難で危險なる上陸地點に於いての輸送指揮官の盡力は察するに餘りがある、又た其の苦心はどれほどであつたらう。親鳥の雛を護るが如く、護衛艦は遠く近く、警戒をさ〳〵緩み無く、我等の上陸を援助してゐる。されど朝來の風は愈々烈しくなり、怒濤激浪山岳の如く、運送船や艀船は木の葉の如くに動搖し、彼方に躍り此方に舞ひ、天下の壯觀を極むとでも形容が出來よう。艀船として雇はれた支那船は、帆檣林の如く、烈風之れを掠めて飜弄するの状は、恰も蒙古襲來の大活畫を現出したやうであつた。

此の狂瀾怒濤を冒して、無事に上陸が出來るものであらうか。又た敵前上陸をなすべき情況であるのか。我等は更に左右の事情を解し得ない。斯の如きは、我等の生命を掌握せる聯隊長のみの關知する所、我等は唯だ上陸！前進！此の二つの外は何事も知らなかつた。稍や少時すると命ありて、上陸開始となつた。數百隻の傳馬、ボート、又た何處より現はれ來たか、夥多の小蒸汽、盛に煙を吐き、櫂を操りつゝ、皆輸送船を取卷く。我等はそれに乘り移る。劇浪は或は高山の如く、或は深谷の如く、思ふがまゝに小舟を弄び、水煙飛沫を跳らして、我等を一呑みにせん勢であつた。予は恭しく軍旗を捧じて聯隊長と共に端舟に乘り移つた。幾多の小舟は珠數の如くランチに繋がれ、轉ぶが如く疾風を切り抜けつゝ！全力を揮つて海岸へ向け急駛した。予の乘つた舟は、幸にも轉覆の危險を免れ、軍旗を烈風に飜しつゝ怒濤を冒して、遂に恙無く上陸することを得た。嗚呼此の一歩！嗚呼其の二歩、祖國を離れしはツイ昨日と許り思ひしに、夢ならで今は現に、嬉しや敵地に踏み入りたり。

「これも日本の土地、同胞の骨を埋める處」なる遼東半島に、勇ましや、陛下大稜威の旭日の御旗を押し立てたり。

強風は益々強く、怒り狂へる波浪は天を浸した。猶ほ艀船にあるものは進まんも能はず、退かんも能はず。危險、危險、其處にも此處にも顚覆するものがある。

筑土大尉は、六十餘人の部下を載せたる艀船に長として、小蒸汽に曳かれつゝ本船を離れた。然るに中途にして、暴風は怒濤を負うて、艀船を弄ぶこと玉を轉ばすが如く、遂に一寸だも進むこと能はずして、渦浪の中に旋回し、海若の暴威は、健兒を呑んで水底に葬らずんば止まざるの状に陷り、剩へ小蒸汽は危險を恐れて、無殘にも纜を解いて艀船の自由行動に任した。千里を驅る猛獸も水に入りては如何にせん、ましてや之れは片々たる小舟なり。今は唯だ劇浪の弄ぶに任せて、勇士徒らに魚腹の餌となるの外は無し。救助の途は絶えたり。これも天命ならば如何にせん。死は素より覺悟せり。されど敵を眼前に控へて、一太刀をも加へず、一發の彈丸だも放たずして、おめ〳〵水の藻屑と消えんこと、如何にしても無念。大尉は血湧き、肉躍り、髮逆立ちて、百方部下を救はんとすれども、怒れる浪は愈々狂ひて、今は絶對絶命、恰も過ちて野中の古井戸に落ちたる

人の、沈みもやらず、上りも果てず命の綱と辛うじて取り縋りたる蔓の端を、野鼠の嚙むが如き窮狀となつた。

遂に大尉は決然身を躍らして海中に飛び込んだ。部下を救はんとする一念に、荒浪も物の數かはと、拔手を切りつゝ岸邊を指して泳いだ、心は剛に、氣は逸れど、怒濤は大尉の身を、或は呑み、或は吐き、揉みに揉んで弄んだ。遂には大尉も力盡き息塞がつて、人事不省に陷つたが、幸なるかな、天は未だ此の勇士を棄てず、彼れは海岸にて救ひ揚げられ、漸く己れに還つた時は、身に寸布をも纏はず、かくても部下を思ふの初一念はいかでか減却せん。其の姿で直ちに碇泊場司令部へ驅け込み、泣くにも涙は乾き、言ふも聲は嗄れ、辛うじて意を通じ救助を訴へて、やうやく部下の命を全うすることを得た。

之れと同じく渦浪中に卷き込まれたる、行李駄馬を載せた小舟も遂に顚覆して、不愍にも其の中の一頭の馬は沖へ沖へと泳ぎ出た。輸卒某は、我が身を忘れ、此の馬を追うて泳いだが、遂に達せず、馬は溺れる、彼れも亦た激浪に卷き込まれて其の姿を失つた。あはれ忠勇なる輸卒よ、彼れは馬を愛するの情より、之れを激浪の中に尋ねて、遂に自ら死するに至る。感泣何ぞ禁へんや、彼れは彈丸に斃れざるも、任務の爲に名譽ある戰死の魁をなしたものである。

あらゆる空想に空想を畫きつゝ、待ち草臥れた上陸地、日清の役に當り、一旦日本男兒の血を以て購つた其の土地は、果して豫想したるごとき處なりしか。否！ 夢にだも想ひ及ばざりし荒涼索莫なる土地であつた。砂漠、砂原、これが即ち此處に適當なる名詞であらう。見渡す限り幾百里のウネリ〳〵とした大荒野、一面にセピアを溶いて流したやうな、單調無味なる書面、之れを昨日まで見馴れた極彩色の日本繪と比べたら、何だか淋しい感じを起さずにはゐられぬ。まして幾百の土民が、馬を追ひ、車を曳いて、上陸地附近へガヤ〳〵と集まれる狀態は、何とも云へぬ景色だ。人か、獸か、彼等は底氣味の惡い面構をして、何事をか呟くのであつた。彼等は最初、日本人を畏れ、驚きの眼を見張つて居る許りで近寄らず戰き震へて逃げ隱れしたものもあつた。これも蓋し露兵が到る處として、財を掠め、婦女を辱め、有りとあらゆる亂暴狼藉を働いて、民を虐げた結果であらう。されど我が軍の上陸以來、秋毫も犯すところ無く、常に土民を慰撫して、其の業に就かしめたがため、後には簞食壺漿以て皇軍を迎ふるに至つた。さり乍ら元々金儲にかけては拔目の無い奴等ばかり、金銀の爲には生命もいらぬと云ふ根性だから、我が軍の彼等が爲に不慮の災難を招き、敵ならぬ彼等に苦しめられたことも實に度々であつた。

「アタ！ アタ！ ウオ！ ウオ！」

これは戰地に於いて絶えず耳にした異樣の響で、土民が牛馬を追ふ時の懸聲である。彼等が牛馬を御することの巧妙なるは、迚も日本人の及ぶ所で無い。牛馬は恰も己れの手足を動かすが如くに、此の聲に應じ直ちに或は右し、或は左し、鞭を打つに及ばず、頤使のまゝに自由自在に動いてゐる。之れを譬に取るのは異なものだが、軍隊にても長上の命ずる所、部下たるものは、たとひ火の中、水の中、如何なる處でも、長上の手足となつて、自由自在に活動しなければならぬ。決して鞭撻叱咤せらるゝが爲でなくて、部下が長上を神の如くに尊敬するによりて生ずる任意の服從でなければならぬ。

露西亜の軍隊が勇猛大膽、常に頑強なる抵抗を試みたにも拘らず、殆ど一戰として勝を制した事の無きは、要するに上下の秩序が、日本軍隊に於ける如くに整はず、服從の精神に缺乏してゐたからであると思はれる。

我が若干部隊が上陸した後で、怒濤は愈々八ツ當りに當り散らすので、止方なく上陸停止の命令が下つた。而して予は聯隊長、副官、通譯、布敎師、又た若干の護衛兵とで、漠々たる荒原を辿りて、今夜の宿營地と定められたる王家屯を指して行つた。地圖と磁石とが命にて、通譯は土人を相手に連りに方角を尋ねる。予も「日淸會話篇」を繰り出して色々と會話を試みたが矢張り通用せぬ。通譯を介して、「俄國兵來了麼」（露兵は來ないか）と尋ねると、「上旅順口逃去了」（旅順へ逃げ込んだ）と答へたので、一時も早く露兵と對面したいと心許り焦つた我々荒武者は、何だか拍子拔けた工合であつた。

砂原七里。踏み鳴らし〳〵、何の風情も無く、風凄じき夕暮、雨さへ加はりて、見馴れぬ群鳥の塒をさして歸る頃、野邊の橫路分け行きて、暮れ行く楊柳の隙、王家屯へ着いた。

まぬけ顏の老爺、洟垂れの小坊主は、彼の家からも此の家からも、蟻の如く這ひ出て、物珍しげに我等を見る。長い煙管をダラリと嚙みしめ、天下泰平に構へて居る。其の呑氣さ加減は寧ろ哀むべきであつた。家屋の汚穢と土民の不潔とは、何とも御話にならぬ。土地馴れぬ我等はいつも鼻を掩はずにはゐられなかつた。名こそ舍營だが、實に軒端の雨宿、鼻持のならぬ異樣の臭氣は、到る處から舞ひ上り、大蒜臭い大人、小介が、豚の如くにゴロ〳〵鎮座ましますに至つては、迚も堪へ切れぬ程であつた。山海の珍味よりも有難しと戴いた大事の握飯、胃の腑が喜ぶ暇もなく、一陣の臭氣プーンと來ては、忽ち嘔吐を催さずにゐられなかつた。

上陸の出來た部隊は、此の夜此の附近で、遼東第一夜の露營をすることとなつた。定めし地下の戰友は玆に彼等を迎へ、彼等の夢に通ひて、千秋盡きざるの恨を物語らんとしたであらう！淋しき天幕の端に、夜寒の風の侵すとも知らず、露しげき黍殼の上で無心の鼾に耽る者、時々洩らす微笑は如何なる夢をか結びつらん。石垣の陰に飯盒を吊し、玉蜀黍の殼を焚いて、ツクネンと坐り、餞別の殘物を摺りつゝ、目ばかり光らしてゐるもの、彼等が思ふ所は果して何の邊ぞ。夜色沈々また悽愴、悲風蕭々として樹に動き、雨露團々として草に落つ。遼東の第一夜斯くて更け行かんとせし乎、否か？：：

夜將に更けなんとして、忽ち起る西天一角の電光雷鳴！　否、電光に非ず、火焔なり、雷鳴に非ず、砲聲なり！　凄味は加はる風の音。殺氣を孕む空の色。

嗚呼、愉快！　これぞ南山の激戰なり。今は立つても坐つても居られぬ！

六　旅順の價値

明治三十八年一月一日は吉日なり、末世末代までも必ずや忘るべからざる日なり。戰捷の風、目出度く吹きて、都も鄙も新玉の年立つ春を祝ふ其の時、何たる慶福ぞ。何たる吉祥ぞ。曰く皇孫殿下の御降誕、曰く旅順口開城、千古未だ嘗て斯くの如く慶賀すべき新年を迎へし例はあらず。

旅順開城、これぞ世界の史上に一時期を劃すべき大事蹟である。されど忘るゝ勿れ、事玆

に至るには、幾千斛とも量られぬ膏血を流せしことを。往年クロパトキン將軍は、旅順は如何ほど猛烈なる攻撃を受くとも、優に三年を支へて餘りある堅城なりと自負した。然るに我が軍の一旦之を攻むるや、江河の決する如く、山嶽の崩るゝが如くに、猛然驀進して、逐次幾千萬の彈丸を雨注し、順次幾萬の精兵を驅つて、肉彈また肉彈、突撃縱横、實に二百四十餘日の間、一日として攻撃を休止したる事無く、死屍は積んで山を築き、鮮血は流れて河を成し、列國をして殆ど其の陷落を疑はしめたが、我が軍は阿修羅王の勢もて、不撓不屈、息をも次がず乘越え攻め戰ひしより、遂には難攻不落と誇りし、さしもの堅城も白旗を樹て、守將自ら出でゝ降を我が軍門に乞ふの止むを得ざるに至つた。南山以來、人命を抛つ事幾許なるを知らず。されど謂はゆる發しては萬朶の櫻となり、凝つては百錬の鐵となる大和魂は、眞に此の時に於いて、愈々其の價値を發揮したので、之れに對しては、あらゆる機械的の防禦も、能く其の效を全うすることが出來なかつたのである。然れども亦た旅順を守備したるステッセル將軍以下の頑強勇敢なる防禦に至つては、實に感歎せざるを得ない。將卒相次いで斃れ、糧食彈藥亦た殆ど缺乏を來せしにも拘らず、殘餘の部下を激勵し、百方策を廻らして、西天落日の如き孤城を死守し、其の任務のために、飽くまで決死の日本軍に抵抗したる其の勇武は、大いに之れを賞讃せねばならぬ。外人が「能く攻めた、而して能く守つた」と評したのは、洵に妥當の言である。

日清戰役以來、旅順口なる名は、世界の注目する所となり、殊に露國が十年の日月を重ね、數億の資を投じて、此の地に堅壘を築きてより、戰略上最も重要の地點となつたのである。されば恰も露土戰爭がプレヴナの陷落によつて、勝敗の數の全く決したるが如く、旅順さへ陷落するならば、日露戰爭の全局面は終りを告ぐるかの如くに考へられてゐたのも當然である。旅順の地たるや、市街と港灣とを抱き込み、二百乃至四五百米突の高地が逶迤として引廻され、自然の防禦陣地を形成してゐる。既に此の天嶮あり、加ふるに築城工事にかけては世界で有名な露國が、彼の山、此の丘と到る處に各種の砲臺を築き、之れに無數の巨砲、機關銃、小銃を配置して、正面側面自由自在に射撃を指向し得る如くし、地雷、狼穽、鐵條網等を始め、あらゆる防禦材料をば、蟻の這ふ隙間も無く布設して、如何程猛烈なる日本軍の砲火に對しても、如何程精鋭なる逞兵の突撃を被つても、此の要害こそ敵を制するに間然する所無き、難攻不落の堅城なれと自信してゐたのである。之れに反して我が軍の攻撃正面は如何なる地形なりしか。即ち嶮しき山か深き谷か、さも無くば敵の陣地に向つて、自然に緩徐なる傾斜を以て登らねばならぬのであつた。旅順口一帶の地利は即ち守るに易く、攻むるに難きにあつた。殊に糧食彈藥等は、他よりの供給を仰がずとも、十分に持久の籠城が出來るだけの永久經營は殆ど完備してゐたのであつた。

されど何の要塞でも、永久に抵抗してゐた先例は無い。遂には力屈して城を他に讓るゝか、又たは城を開け渡して降服するかの二途その一に歸着するもので、要塞の陷落せぬ事は恐らく無い。唯だ飴細工の城を打ち毀すやうに、容易く行かぬ迄の事である。セバストポールは三百二十餘日の間、英佛聯合軍を支へてゐたが、彈藥は破壞せられ、砲臺は爆發せられ、市街は見る影も無く荒されて後、始めて陷落した。又た、

カースでは、勇敢なるウイリアム将軍が、僅かに三ケ月間の糧食と二十日間の弾薬とを以て、土耳古兵と共に、五萬の露軍に抵抗せしこと七ケ月にして遂に陥落した。其の時敵将ムラヴイエフは、此の「カースの英雄」に向ひ「天下後世は閣下の勇武と訓練とに驚異すべし。願くば我等をして人道を害ふこと無くして、戦争の要求を満足せしむる事に就き商議するの光栄を有せしめよ。」と感嘆したと云ふことである。又た普魯西軍が巴里を包囲すること百三十二日を要したが遂に佛軍は支へ切れなかつた。此等は戦史上最も著名なる例であるが、昔から何れの要塞でも遂には陥落してゐる。されど凡そ要塞の任務は、一日でも長く包囲軍に抵抗して、敵全軍の作戦を阻害するにある。然らば旅順要塞の任務は何であつたか。即ち日本軍を一兵でも多く、一日でも長く南方に牽制して、北満洲に於けるクロパトキンの作戦を有利に導かんとするにあつた。此の重大なる任務の為に、ステッセル将軍は世界無比の堅塞を固守して、飽くまでも攻撃軍を拒止せんとしたのである。假りに旅順が、奉天の大会戦まで持続したものとしたら、我が軍に取つてドウであつたらう。

旅順の価値はしかく大いなるものなれば、彼れは此の価値を失はざらんとし、我れは此の価値を奪はんとし、彼れに死守あれば、我れに死攻あり、而して乃木将軍ついに能く幾萬精兵の犠牲を拂つて此の価値を購ひ、而して旅順の価値をして益々大ならしめたのである。

三年をも支へ得べしと誇れる此の堅城を抜くに、僅かに八ケ月を以てしたること、既に其の攻撃戦の如何に惨烈なりしかを察するに余りあるのである。旅順戦は古今の最惨戦である。近世の惨戦を云ふもの、これまではプレヴナの要塞を称し、彼のマカロフ提督と共に旅順港に沈んだ露國の大畫家ヴェレスチャギンは、其の惨況を畫いて百世に傳へてゐるが、若し彼れをして生あらしめて、旅順攻撃を睹るを得せしめたなら、彼れの靈筆は忽ち動いてプレヴナ以上の大惨畫を描き来り、以て天下後世をして戦慄せしめたであらう。従軍記者ケナン氏は、此の攻撃戦を評して、阿鼻叫喚の地獄を此の世に現出したものだと云つた。而して此の大悲劇を演ぜしめたものは、元はと云へば全く旅順要塞の価値その者に外ならぬのである。

旅順は如何にして攻撃せられたか？　これぞ予が語らんとする眼目なのであるが、之れを語るに先だち、茲に少しく旅順の価値を説明して置くことを必要と認めたのである。

七　南山へ

予等は遼東上陸の第一夜、西天の一角に當つて、旅順の關門たる南山の砲火を聞いたのである。

電光か？　雷鳴か？　あらず、南山方面は戦正に酣なり、火光砲聲は、益々劇しくなつた。戦況は如何に？　我れに有利か？　少くとも、我等は此の戦――我等の為には初陣たるべき此の戦闘に参加するの光栄を荷はねばならぬ。未だ前進の命令は下らぬか？　我等は気苛ち、心は既に南山に奔馳してゐた。然るに後続部隊の上陸が無事に出来たか出来ないか、それすら判然せず。連絡の為に派遣した傳令は一晝夜を過ぎても還らぬ。聯隊長が手元に提つてゐる兵員は僅に五百を過ぎず。實に心細い。しかしいつまで待てば来るとも分らぬ。今はそれを待つてゐてどうする？　前進！　前

進！今は寸時も猶豫すべきでない、と狂氣のやうになる。聯隊長が冴えぬ顏をしてゐると、迚も駄目だと思ひ、ニコ付けばそれ前進だと早合點する。死にに行くにも氣のもめることである。戰局の前途は遼遠なり、序幕が開いたばかりの此の南山で大切りになる譯のものでは勿論無いが、既に敵地に入つて、敵とすることを得ず、戰既に酣にして、遠くから其の音を聞いてゐるだけは情無いことであつた。

などて我等が此の憾みの通ぜざるべき、果然、恩命は發せられ、續いて前進の命令が傳へられた。

「第二軍司令官の指揮下に屬し、南山に向つて急行せよ。」

と、勇氣と喜悅どの滿面に溢れた聯隊長の口より、日頃の命令に彌增して勇ましく且つ嚴格に達せられた。我等は天來の福音を傳へられたやうに感じた。やがて前進を起すと飛ぶがやうに足を伸ばした。前進、否、猛進！ 出來るだけのスピードで踏破急行、山野村里幾許里なるを知らずと雖も、敵が目にちらついて、足の痛みなどは少しも覺えず、流汗瀧の如く砂塵と混じて、顏に泥の面を塗りつけても毫も意とせず、水筒の水は既に飲み干して、一滴の流水口を潤すべき無くとも、唾腺乾涸して呼吸も塞がらんとしても、一兵の隊列を離るゝもの無く、盛んに起る砲聲は、疲勞、困難はた疼痛を打消して、一意專心、敵の陣地と覺しき方角を睨んで、驀地に奮進した。

「南山はまだ落ちないか。」

「まだ〳〵、今が最中です、早くお行きなさい。」

これは途中で、戰場から歸つて來る人夫等と、前進する兵士との間に交された問答であつた。可笑しいやうだが、我等は、自分等が戰場へ到達する迄は、南山の占領せられざらんことを希望し、また新手の我々が出なければ迚も陷落はしないだらうなどと一人天狗をきめ込んでゐた。途で我兵が俘虜將校二三名を護衛して後送するを見て、一つには初めて敵に見參するのだから、珍らしくもあり嬉しくもあつたが、又た一つには若しや既に陷落したのではあるまいかと心配も起きた。

序ながら話したい、凡そ軍隊では、何事に由らず、出來得る限り便宜自由を與へ得べき事柄と、又た如何やうなる事があらうとも、決して許すべからざる事柄とが、判然と區別せられて居る。行軍に於いても、それが旅次行軍とて、敵と懸引のない行軍ならば、出來得るだけの休息を與へ、給養を豐かにするが、戰備行軍となると、火が降らうが、槍が降らうが、飲水も無く、食糧も無くとも、ドシ〳〵行軍を續けねばならぬ。兵卒は各々十貫目程の重荷を負つてゐて、水筒の水一杯を命の親とも頼み、それを飲み盡したら、後は一滴の喉を潤すべきを得ない。篠突く雨の夜も、石を飛ばす風の夕べも、火のやうに燒けたる街道も、雪の曠野も、尚行軍を續けなければならぬ。疲勞痛苦すとも決して容赦は無いのである。汗を拭ふ隙も無く、顏一面は鹽汁のやうな汗で石灰を振りかけたやうになり、呼吸は喘ぎ苦しみ、今にも絕えなんばかりである。之れを顧みざるは頗る殘酷なやうであるが、任務の爲とあらば致し方が無い。戰鬪に當つて、一銃をも減じてはならぬ。一兵だも殘してはならぬ。而して斯くの如く困難なる行軍の後では、直ちに激烈なる戰鬪に從事するのである。されば行軍の強弱を以て、既に勝敗の數を判斷することが出來る位である。それで平時よりの訓練が肝要なので、

無水行軍とか、夜行軍とか、急行軍とかの演習は、實際の戰場に於いて、忽ち其の價値を現はして來る。

扨ても南山の初陣に加はらん事のみ考へてゐた我等が部隊は、勇みに勇み、否、寧ろ狂ひに狂つて、遂に戰場の眞近くまで前進した。見れば此處の山陰、彼處の樹下に、方錐形の天幕が、幾個ともなく重なり合つてゐる。これは云はずとも知れた、我が軍の野戰病院である。其の數の多きよりして、我等は戰鬪の經過が氣に懸る、殊に見る／＼中に、負傷者を載せた擔架が、陸續運搬されては入り交り立ち交り、其の擔架は更に再び戰線さして急ぐのであつた。又た歩行の出來る負傷者は、喘ぎ／＼數限り無く來る。擔架に横臥せるものも、歩行して來るものも、軍服も顔も泥と血とに塗れて、其の勇戰苦鬪を舌よりも能く物語り、眞白き繃帶の朱に染みたるが、殊に目立つて此の中にも名譽の傷を包んでゐるのであることを思はしめ、又た擔架を透してポツリ／＼と地に印する血潮は、靈光を放つが如くに思はれ、我等は尊く有難く、覺えず頭が下つた。

恰も此の時、これより先命令受領の爲に前進した聯隊副官は馬を飛ばして歸り來り、復命して曰く、南山は既に陷落したり、總豫備隊は鐘家屯附近に宿營して後命を待つべしと。

嗚呼これ何事ぞ、上は隊長より、下は馬卒の面々に至るまでも、孰れも張り詰めてゐた腕を撫し、殘念なりと地蹈鞴踏むのであつた。敵が咽喉と頼んでゐた南山が早くも陷落したことは、爾後の作戰に、何程莫大な效果を生ずるか知れないのであるから、此の報を聞いては踊り上つて喜ぶべき筈であり、勿論大いに嬉しく思つたが、上陸地から一息も吐かずに、唯だ何でも早く南山へと意氣込んで驅け付けた我等の身になると、目的地に近づくや否や、唯だの今陷落したと聞いて、ガッカリしたのも無理は無からう！

モウ坂一つ、之れを越さば、即ち血の河、屍の山なる修羅の戰場、これ迄來ると今の今迄耳を聾せしめた砲聲はハッタリと絶えて、山谷は靜まりかへつた。唯だ負傷者のつぎつぎ後方に送られ來るを見るのみ、予等は逢ふ毎に其の痛苦を慰め、其の勞を謝しつゝ、一先此の坂の上り口にて休憩した。其の休憩地に、此の戰闘に加はつた一馬卒が居て、さも得意氣に其の激戰の状を物語る。手眞似身振で、當時の我等になほ目新しかつた敵兵の水筒などを見せびらかし、自分一人で戰をしたやうに、からして、あゝしてと、鼻蠢かして手柄顔に吹聽した。之れを聞く我等―未だ一度も銃に塡裝せず、軍刀の鞘を拂はざるは何だか恥かしく、きまりが惡いやうであり、戰闘員ではない此の馬卒さへが何と無く豪く見えて、其の働き振を賞揚しつゝ、いろ／＼な問題を持ちかけて、其の詳しい得意な戰況談を聞かせて貰ふのであつた。

奥第二軍司令官の直接指揮下に屬せし我が總豫備隊が、今夜宿營すべく下命せられた鐘家屯へは、此處から元の道を一里半も引き返さねばならぬのであつた。其の行軍の張合の無かつた事！　人も馬も共に首を垂れて、トボ／＼と歩を拾ひ、空に舞ひ上る黄塵を浴びて目も鼻もザラ／＼、黄粉餅と云ふ鹽梅、先きの急行軍には、砂塵の雨の中も、敵と云ふ目當があつたから、足の痛みも物かは、一途に勇み狂うたが、今や戰場から後返りしての宿營と來ては、先の勢のあらばこそ、平時の機動演習でも、サア銃砲聲が起るとなると、足の痛も體の疲も、遽に忘れて飛び立つ、並足は速足となり、速足は

知らず知らず跣足となつて、韋駄天走りに敵の陣地へ突き込む迄は、丸切り夢中となるものだが、一度背進となると、そろ／＼足は重くなる、轍の跡も小石も一として癇癪に障らぬは無く、それは／＼元氣も何もあつたものではない、これは日本人の特質の一たる、進むを知つて退くを知らぬ精神からして斯うなのか。由來露國兵の退却の機敏なるに反し、日本兵は退却は下手だ。されど前進となると、彼れに一歩も負は取らぬ。我等は斃るゝまでは唯だ前進あるのみとの氣質を遺傳的に得て、更に之を訓練されてゐる。我が軍が常に頑强なる露軍を壓服したのも、斷乎たる決心を以て前進を勵行して、敵に肉薄し、銃劍を使用したる、勇敢なる攻擊精神が最大原動をなしてゐたことは云ふまでもない。

遲々として鐘家屯に着けば、荒村細流の邊、此の夕べ月冷かに星稀に、自然は如何に將卒をして、黍殼引き結ぶ假の枕に、感慨多き一夜を與へしことぞ。夜既に更くとも、此處に彼處に眠りもやらぬか、眼許り光らしてゐた者は、萬感交々胸に迫りしが爲ならん。一聲二聲闇を縫ふて飛ぶは何の鳥ぞ。誰が口ずさみなるか、微かに聞ゆる琵琶歌一曲。嗚呼、實に悲壯沈痛の一夜であつた。

予等は遺憾ながら、南山の戰鬪に從事するを得なかつたが爲、實は當時の激烈なる戰況を語るの權利をもたぬ。只だ切めて、予の實見した戰後の光景を少しく物語つて、それより序を追ひ、章を重ねて、旅順要塞攻擊の實戰談に移らう。然るに今此の章を終らんとするに臨んで、予は玆に一勇卒を紹介して置きたい。

予等が下家屯を出發する際、我が隊の任務と後續上陸部隊爾後の行進とに就いて、楠武市なる、自轉車傳令使を、上陸地點の鹽大澳へ派遣した。楠武市は平素から、かゝる特別任務に服するに、常に其の堪忍と豪膽とに依つて成功したのであつた。それで出征の際には、特に彼れを聯隊本部附の傳令卒として選拔して置いた。されば上陸後初めての此の大切な傳令勤務も亦た之れを武市に命ずる事となつたのである。彼れは日暮獨り自轉車に飛乘つて上陸地點へ向つたが、元々我等が下家屯に來た時、道無き原野の中を踏み迷つて、ヤットの事で到着するを得たほどであつたから、武市たるもの素より安々と目的地へ達し得ることを期してはゐなかつた。踏み馴れぬ支那の地、勝手知らず、言葉は通ぜず、彼れは唯だ北極星を目當にして進んだ。受けたる任務は重大なり、彼れにして一刻でも遲れるなら、卽ち後續部隊の動作が一刻遲れるわけである。若しも南山戰鬪の經過が豫定通り都合能く進捗せぬ時は、豫備隊たる我が聯隊は、一兵でも多く、一銃でも多く戰鬪線へ出さねばならぬ。此の豫備隊を聯隊長の手許に取纏める事の命令を握つてゐたは卽ち楠武市で、彼れが任務達成の如何は、全隊の動作に多大の關係を有つてゐたのである。武市も出發の際に、隊長から能く／＼其の事はいひ聞かされてゐて、重き任務だとは百も二百も承知してゐたが、內地とは異なり、西も東も知らぬ遼東の野の八里九里の道、剩へ道無き眞の暗、今は自轉車も却つて邪魔物となり、遂には之れを負うて一心不亂に目的地を志したが、不幸にも彼れは方角を誤つて、どうしても到着する事が出來ぬ。翌朝天明更に一考したが、扨々何處が我が隊の所在地なるやの見當も付かぬ。忍耐にして誠實なる武市は食ふに食無く、飮むに水無きも、我が任務のため犧牲と覺悟し、之れを遂行せねば死すとも犬死、兎やせん角やせんと焦るは心ばかり、身體遂に疲れ果てて、

後には一歩も足を運ぶ事さへ出來ぬ程になつても、武市は自轉車を負うたまゝ、彷徨しては休み、休みては彷徨し、目當もなく、唯だ彷徨に彷徨して所屬隊を求め得るの萬一を冀ひつゝ、猶ほ其の任務を忘れなかつた。その夜幸にも憲兵の通過するに出逢つて、親切に道を敎へられ、且つ一飯を惠まれたるに漸く力を得て、時刻こそは遲れたれ、遂に目的を達することを得た。

讀者諸君は平時演習の際、鐵蹄輕く砂塵を飛ばして傳令と聲掛けつゝ急馳する兵卒あるを見たりや、又た徒歩ながら、同じやうに隊伍を切拔け驅拔け、彼方此方へと馳せ廻る者あるを見たりや。彼等が即ち傳令使である。彼等は他の多くの兵士よりも、一層重大なる責任を有してゐるのである。將帥が幾萬の大兵でも、自由自在に頤使する事の出來るのは、傳令使の任務遂行に待つところ甚だ大なるものがある。されば此の兵卒の雙肩には、全軍に關する重大なる責務が荷はされてあるので、此の任に當るものは、勇猛にして堅忍、思慮あつて果斷なる性質を具備してをらねばならぬ。而して楠武市、彼れこそは實に完全なる傳令使として、大いに敬重すべき兵卒にてはあらざるか？

八　戰後の南山

南山は金州半島の咽喉に當り、峻しからずと雖も、畝々とした丘陵で、守備するには便宜の好き處ではあるが、防禦陣地としての眞價から云へば、其の後の南關嶺に劣つてゐる。日清戰役の時には、支那兵が一時此の南關嶺によつて抵抗を試みたことがある。然るに露國が南關嶺を棄てゝ南山を選んだ理由は、彼れに取つて最も大切な不凍港の青泥窪(今の大連)のあるが爲であつた。露國は大連灣頭で柳樹屯の對岸なる地を卜し、此處に青泥窪なる大市街を建てて、遼東唯一の商港とし、東清鐵道の起點としたのである。而して之れを擁護せんがために後方南山の地形を選びて、半永久的の築城工事を施したのである。されば十年以來旅順要塞と青泥窪市街との經營に、幾億萬かの資を投じて、無辜なる露國農民の膏血を絞ることを厭はなかつたと共に、此の陣地にも出來るだけの力を注いで設備を盡したのであつた。故に當時敵の參謀將校にして我が軍の俘虜となつた者が云つた通り、露軍では、南山は日本軍から如何程猛烈なる壓迫を蒙るとも、優に半年以上を支へ得べしと信じてゐたのである。然るに第二軍の之れを攻むるや、威を揮つて驀地に進み、困厄に撓まず、犧牲を顧みずして、あらゆる障礙を排し、一晝夜にして金州及び南山を陷れ、青泥窪を奪つた。それから推しても此の戰鬪の劇烈なりしことが想像される。二十七八年役でも、南關嶺の蹴破、旅順の占領が、必ずしも赤子の手を捻る如くに容易であつたとは云はれぬが、當時此の方面の戰鬪に與つた將校で、此の度も攻圍軍中に加はつた者が、南山の防備を見た時、十年前の戰爭は眞の戰爭ではなかつたと語つた。それ程防禦堅固の南山であれば、之れを陷るゝが爲に、我が軍は實に四千餘人の死傷者を出したのである。されば其の戰後の光景も亦た一通りの慘狀ではなかつた。尤も是れとて後の旅順總攻擊に比ぶれば其の慘烈の度遙かに及ぶべからずではあるが、予は南山に於いて、戰の緒切つて以來初めて激戰後の光景を實見したので、一しほ強く心の悸動を感じたのである。

予等は鐘家屯にて、兎角の一夜を明かした翌

朝、更に命令に接して、南山の麓なる閻家屯の村落へ宿營を移す事となつた。そして我が聯隊の第五第六兩中隊は南山の守備を命ぜられた。

予等は南山へ來た。見渡す限り一帶の丘陵逶迤として起伏し、右に金州を控へ、左に大和尙山の嶮を望んでゐる。嗚呼此の地、劇戰の巷となつて、砲聲喊聲天地を撼かし、幾百の勇士は此處に屠られ、幾千の健兒は彼處に傷つけられた。今予等の此處に來つて、其の後景に接するに、酷烈酸鼻の狀覺えず目を蔽はしめた。戰後の光景は唯だ「悲慘」の二字を以て言ひ表はすより他に言葉があるまい。

打ち見れば、山の一角に、白煙天に舞ひ上り、異臭地を拂ふものがある。これぞ卽ち我が軍戰死者の火葬場であつた、國難に殉じたる尊き犧牲を焚くの祭壇であつた。幾百忠義の魂は、此の煙に包まれて遠く天外へ昇つたことであらう。ア、故山には、絲繰る嫗が、隙間洩る風に手を休めて愛兒を憂ひ、征衣を縫ふの妻が、懐に乳兒を撫して良夫を思ふの時、安んぞ知らんや、其の時既に其の良人、其の愛兒は、肉飛び、骨摧け、流るゝ血潮は草を染めて、今又た茲に荼毘一片の煙と化し去りたりとは！

朱に染まつた繃帶の切端を見るすら、決して心持の好いものではない。然るにましてや此の谷、彼の岩陰に死屍累々として黑く、紫色と變じたる血の塊は全身を染め、顏は青黑く、瞼は膨れ上がり、頭髮は血と埃とに固まり、白き齒を四五枚輕く脣を嚙んで、軍服の赤き襟のみ目立つてゐるのを見たならば、誰しも悚然として戰くことであらう。予の如きも實に戰慄せずにはゐられなかつた。而して我が身も明日は斯くなり果つるのかと思つた。死骸に近づいて委しく見詰める者とては、恐らく一人として無かつたらう。退いては指ざして、其の凄じい有樣に心を寒くしたのである。到る處、血に塗れた脚絆や、軍服や、襦袢の切片、さては帽子などが散亂し、腥き風は絶えず鼻を掠め、鬼氣人を襲ひ、戰鬪の如何許り猛烈であつたかを偲ばしめた。無數の彈藥箱や藥莢が、散兵壕の附近に堆積してあるのを見ても、如何に敵は必死となり、彈丸の數を盡して我れに雨降らせたかが察せられた。敵の死體を見て、少くとも憐愍の情を呼び起さぬ者は無かつたらう。敵とは云ひ乍ら、彼等も國の爲に殪れた勇士、されど戰敗の悲しさには、設令我が軍の鄭重たる埋葬を受けても、姓を知られず、名も殘らず、ムザムザ犬死同樣となつたのである。故郷の空には親もあらう、妻もあらう、子もあらう。されど其の父たり、其の夫たり、其の子たる者、何地で戰死したか、多くはそれだに知らずして、彼等は待ち佗びてゐるであらう。

敵の死體の孰れを見ても、十字架を胸にするとか、又たは聖像を手にするとかしてゐた。彼等は神の手に導かれて其の福祉を享けつゝ瞑目したのであらう。

敗軍の死傷者ほど哀れなものはない、赤十字條約の規定によつて彼等も其の敵から平等無差別の取扱を受くるものなりとは云へ、ア、敗戰はなすまじきものぞ！　戰で敗れた恥辱の上に戰友とは離れ、言葉も通ぜぬ敵の手に落ちたる負傷者の心中を察すれば實に憐愍の情に堪へぬ。されど彼等はまだ〳〵幸福である、彼の戰死者に至りては、實に哀の極である。認識票といふものがあつて、番號で姓名を引合はすやうになつてゐるから、其の認識票の分るだけは敵軍に知らせてやる筈であるが、それさへ判明せぬ場合も數次ある。遂に何處の誰れなるか

知れず仕舞ひになるものも數多くあつた。
閻家屯に先づ假の宿營設備が出來た夕方、予等に當てられた民家に來ると、其の隣戶でしきりに人の呻き苦しむ聲がした。予は急ぎ驅け込んで見ると、これが眞に地獄の苛責とでも云ふべきものであらう。我が軍の重傷者十五六名と、敵の負傷者一名とが、庭に打倒れたまゝ重なり合つて藻掻いてゐるのであつた。眞先に予を見付けた一兵卒は、手を合せて予に救助を哀願した。何の拜むことがあらう！　何の賴むことがあらう！　我等の戰友が、かくも人知れずに悶えてゐようとは、ツヒぞ知らなかつた。早く知つたらば、早く手當も出來たらうに。直ちに軍醫を招いて、彼等の救助に力を合せた。軍醫が手當の間にも、彼等に絕えず、御恩は忘れませぬ、有難うございますなどいひながら、目は一杯に涙ぐんでゐた、問へば既に一日の間、一粒の飯、一滴の水も口にするを得なかつたとのことであつた。孰れも重傷ならぬはなく、足の折れた者、手の摧けた者、又は頭部や胸部に彈創を蒙つた者、中には最早半時の命の覺束無き者も交つてゐたが、己れの苦痛を忘れて互に勞り慰め合つてゐた。見るからに、其の傷しさ、其の哀れさ。如何に名譽の負傷者とは云ひながら、とても不憫の有樣よ。其の中の二名は見る／＼顏色灰色に變り、呼吸も微かになり行いたので、予は走り寄りて打戍りゐたるに、涼しき眼は次第に瞑ぢ、軀は遂に動かなくなつた。側なる戰友は淚ながらに、彼の中の一人は、國に唯だ獨りの老母を殘して出征したのであることを語つた。

慘又た慘なる戰場にて、殊に哀れにして、目を惹くものは、或は傷つき、或は斃れたる軍馬である。彼等は遠く海を渡つて、住馴れぬ關北の野に、彈丸爆煙の間を馳驅したのである。日頃愛育せられた高恩は、此の時にこそ報いべきであると、鐵蹄輕く主人を負うて走り、能く其の重任を助けたのである。日頃訓練せられた技倆を表はすべきは此の時こそと、重き荷物や多くの彈藥を運搬したのである。而して毫も其の苦痛を訴へざるのみか勇みに勇みて、兵兒の志氣を鼓舞したのである。實に戰場に於ける軍馬の苦勞は一通りや二通りの沙汰ではない。戰鬪の經過が幸運であるのは、素より勇敢なる將卒の力に賴るのではあるが、又た忠實なる軍馬のあることを記憶せねばならぬ。南山に於て、某砲兵隊の馬は敵の砲彈が腹部に命中して臟腑が露出したに拘らず、それを引ずりながら砲車を牽いて砲兵陣地へ驅け上がつた。第一發の砲彈を打つと馬はバッタリ僵れてしまつた。之れを思うても戰勝の幾分は實に軍馬の功績に歸せねばならぬのである。然るに彼等は常に粗末な秣や、濁れる水に甘んじ、雨の晨も、雪の夕べも、露天に曝されて、僅かに主人の慰撫を無上の喜びとしてゐるのではないか。其の重大なる任務の爲に勞苦するに至つては、殆ど兵士と變りが無い。されど畜生に生れた悲しさには、傷つけども訴ふること能はず、のたうち倒れて、悲しき嘶聲を此の世の名殘に絕命するのである。死して又た葬られず、屍は其儘打棄てられて、狼の喰ふところとなり、鴉の啄むところとなり、太く逞しき骨は、荒野の風に吹き晒されて朽ち果つるのである。彼等忠實なる軍馬も、又た其の本分の爲に斃れた名譽の戰死者である。將卒が悲慘なる戰場の記念と共に、厚く之れを弔ひ、深く之れを感謝すべきではなきか。されば陣歿軍馬のため、永く追善供養を施して其の靈を慰めんが爲に、馬上觀音を建立せんことを企圖したる僧中林活輸あり。又た兵士の

爲に赤十字條約のあると共に、軍馬の爲にも又一種の赤十字條約なくんば、人道に反し動物愛護の道に缺けてゐると主張し、此の議を萬國平和會議に提出して、列國の協贊を求めんとて奔走した某氏のあることも聞いた。

予は又た陣地の配備を視察せんが爲に南山へ登つた。流石は築城に得意なる露國のやつた事とて、防禦の配置に殆ど手落が無い。鐵條網、地雷は素より、堅固なる散兵壕はグルリ〳〵と幾重にも山を取卷き、機關銃の銃眼は到る處に穿たれ、多數の重砲は砲臺の上に其の砲門を現はしてゐる。そして半永久的の築城であるから、兵營もあれば倉庫もある。倉庫の中には冬期使用すべき、凡ての被服類が充滿してをる。輕便鐵道もあれば、食麪麭の製造所もあつた。予は又た敵の司令官の位置せし建築物の中へ入つた時、彼れが如何に贅澤で吞氣な生活をしてゐたものであるに、一驚を喫せざるを得なかつた。殊に甚だ奇怪に感じたは、女の化粧道具や、それに子供の衣裳などが散亂してをつたことである。妻子引率の出陣とあつては、誠に恐縮せざるを得ぬ。

雙眼鏡を手にして遠く東海岸を望めば、無數の人馬が波打際に斃れて、灰色の波に洗はれてゐた。これぞ即ち敵の騎兵旅團が、老虎山方面に屯在して陣地の右翼を警戒してゐたるに、我が第四師團が西海岸からして、敵の側背に逼つた爲、退路を遮斷せられて立ち場を失ひ、遂に海中へ追ひ落されて、殆ど一騎も剩さず水葬になつたのである。これは己が陣地の堅固なるに依賴した爲、退却の時機を失ひ、自滅を招いたので、實に可哀さうなものである。

山の中腹に探照燈の破壞せられたのと、光彈が無數に積重ねられてあるのを見た。我が攻擊軍が、夜陰を利用して敵に接近せんとするに當り、いつも其の運動を阻害せられたものは、即ち探照燈と光彈とであつた。此の探照燈は占領の後、兵卒が只だ憎いが一ぱいに銃床を以て鏡面を叩き壞したものである。

無限の悲愁は予の胸裡に往來し、見るものとして傷心の種ならざるは無く、聞く事として斷腸の媒介とならざるは無かつた。戰死者の忠魂を弔ふ假の木標は、此處彼處に建て增されて、昨日まで英姿颯々たりし若武者の記念に、手向の涙を濺がしめた。南山より金州に赴く途中に一堆の土が盛られて、上に一本の竹が建ててあつた。唯だ何心無く之れを踏むと、土は潰れて露兵の死骸が現はれた。人の死骸を踏んだは是れが抑々の初めてで、ギョッと膽を冷した。要するに當時予等は、まだ一戰もせず、殺氣滿々たる戰場の光景にも馴れてゐなかつた爲に、自ら其の悲慘と其の罪惡とに戰慄したので、今となつて考へると、實に不思議なやうである。然るに彈丸の下を潜る數が殖えるに從つて、先きには悲慘と感じたものも、後には左程に思はなくなるし、先きには見るに堪へなかつた事も、後には冷々と見流しにするやうになつた。

我が軍能く十六時間の激戰に耐へ、猛烈なる十字砲火を冒して、數度の突擊を試み、遂に多大の價を拂つて、南山を陷れたる其の效果によつて、金州半島活殺の權を我れに收め、敵の連絡を絕ち、大連灣は掃海に着手せられ、旅順要塞の攻擊に要する凡ての準備も、遺憾無く此處に整へられて、其の死命を制するを得るに至つた。南山の勝利は世界の戰史のレコードを破つたものである。此の大捷を致したる所以のものは、全く銃砲彈藥の力にのみ賴るにあらずして、堅忍不拔なる兵士の精神に依ること最

も大なるものであつた　攻撃中、突撃に結果意の如くならざりし時、奥司令官は勵聲叱呼「大和魂とは何だ！」と云はれた。すると全軍俄かに奮ひ立ち、破竹の勢を鼓して、一氣に此の南山を乘り取つたとの事である。英國大使マクドナルド氏は、日本軍が連戰連捷の最大動力は「銃後の人」に在りと云はれたが、此の戰役に於て、南山は先づ此の「銃後の人」の力を著大に證明したものである。

九　敵狀偵察

予等が闍家屯を出發して、第三師團の守備隊と交代せんが爲に、張家屯といふ寒村へ達したのは丁度五月の二十八日であつた。南山以後、予等の師團は第二軍と分れて新たに編成せられた第三軍、即ち乃木將軍の指揮せられた旅順攻圍軍に屬したので、それで第三師團と交代することになつたのである　さて闍家屯より張家屯に至る間の行軍は、さして遠い距離ではなかつたのだが、今日となつても、其の日の行軍を思ひ出さずにはゐられぬ。旅順附近の岩石地を除く外は、このあたり凡て一面糠のやうな又た灰のやうな土質で、迚も眞向に歩かれたものではない。黃塵萬丈とは、蓋し如斯きを形容した語であらう。砂塵は怒濤の如く卷き起り、長蛇の如くうねりうねつて行軍する我々を吞み込まんとする。一寸先も見えないほどの土煙である。時とすると隊の連絡を失はんとしたこともあつた。目も鼻も口も皆灰砂で埋まる、目が見えぬ、耳が遠くなる、蓋をした飯盒の中の大事の飯までが、埃に蔽はれてゐたといふ有樣であつた。平時予等は十五里も二十里も晝夜兼行で行軍したこともある。驅足で數里の道を急行したこともある。一滴の水さへ口に入れず行軍したこともある、鼻を摘まれても知らぬ程の暗夜に行軍したこともあつたが、未だ嘗て如斯き苦しい行軍をしたことは無い。これが即ち戰地に來た價値であらう。戰地に在つての困苦は素より覺悟の上であるが、切つたり、突いたりすることのみが戰と思つてゐると、こんな行軍が何だか餘計なもののやうに思はれてならなかつた。しかしいつしかそれにも馴れて、行軍露營何でも御座れといふやうになつた。否、高梁畑や岩の陰の、天地廣闊たる座敷で明月を仰ぎ蟲聲を聞くは、金殿玉樓よりか洒落てゐるぞと呑氣な事を云ふやうにもなつた。

五歩にして小憩し、十歩にして大歇するは長袖の人のなすところ、我等はドシドシと行軍を續けて張家屯に達し、第三師團と交代した。予等が初めて此の師團の兵士共を見た時には、何となく氣恥かしく、身が縮まるやうに感ぜられた。彼等で見れば怒龍奮獅の勢を以て、南山の強敵を壓倒した名譽あり、光輝ある經歷を備へてゐる。それに引換へ、我等は如何？發車に乘遅れた田舍者のやうに、アングリ口を開けて、殘る煙を眺めてゐると同樣、腑甲斐無い有樣であつたではないか？　彼等の戰袍はさぞや裂け破れて血を印してゐるであらう。彼等の膚には名譽の傷が生新らしく包まれてゐるであらう。また埃塗れの帽子、血染の脚絆などを見ることよりして、實に慕はしく尊げに仰がれた。彼等の容貌と、彼等の擧止とは、言葉無くとも勇ましく其の戰功を語るものの如くに見えた。

我が部隊の警戒正面は、敵の警戒線に對する高地であつた、軍の全般から云へば、安子山より毛頭子峠を經て、臺子山に亙る一帶の地點で、延長實に二十五吉羅米突（六里强）に陣伍

を張つてゐた。而して我が隊の占めた陣地は、右は李家屯と云ふ村の南の毛頭子峠より、左は河を隔てて于家屯と云ふ村の南一帯の丘陵に至る間で、此處に堅固なる工事を施し、外には專ら敵を搜索し、内には攻撃の諸準備を整へつゝあつた。斯くする中、乃木將軍は幕僚を率ゐ、鹽大澳に上陸せられて、同地の西北方約三里を距てたる北泡子崖といふ一部落に達せられた。これで先づ軍の編成は一通り出來上つたのである　扨て是れよりして我等は如何なる事をして、初戰の時機の來るのを待つたであらうか？

南山で大敗北した敵は、青泥窪に未練は殘つたけれど、詮方なく之れを棄て、取るものも取り敢ず、先づ婦人小兒を載せて走り、三十里堡といふ村を燒き拂つて、袋の底の旅順方面へ逃げ込んでしまつた。而して要塞からは前面に盤頭、亂泥橋、歪頭、雙頂などの山々を嚴重に守り連ね、警戒線を作り、我が軍と三千米突乃至五千米突の處で對峙してゐたのである。これは我が軍が斥候を派遣し、又たは偵察隊を出して、漸く大體の形勢を突き止めたのであつた。

予等は守備線に就くと、其の日からして、十字鍬や方匙で工事にかゝり、此處が砲兵陣地、彼處が第何大隊第何中隊と、それぞれに區劃せられて、受持の區域に、夜となく晝となく工事を急いで散兵壕を築く、其の間には絶えず斥候を敵方に派遣して、動靜を搜索せしめてゐたが、まだ何の模樣も知れなかつた。其の中工事は日々に進捗して、第一線たる散兵壕や砲兵の掩壕は、立派な堡壘を築き上げ、青泥窪から種々な布地や袋類を取寄せて土嚢を作り、それで胸牆（散兵壕の堤防）を固めた。また簡單な鐵條網も張られる。見事な新道路が開ける。各隊を連ねる近道は蜘蛛の巣のやうに造られ、終に殆ど半永久的とも稱すべき程に堅固な守備線が出來た。各部隊はあらゆる人家を利用し、庭先や檐の下には天幕を張つて宿營も整ふ。先づこれで可なりと云ふことになつて、それから、愈々多數の斥候や偵察部隊を四方に派遣して、敵の動靜、其の兵力等を詳細に搜索せしむる事となつた。

觀兵式や平時の演習では、軍隊は華々しくて呑氣なやうに見えるが、戰場は敵を相手の眞劍勝負だ。互ひに睨み合つて動かぬときでも一寸の油斷もならぬ。夜だとて安眠を貪る事能はず、寒いからとて火など焚いて安閑としてはゐられぬ。否、夜間が殊に大切なので、一層眼を張り耳を飛ばしてゐなければならぬ。即ち警戒線にある歩哨や、前方に出る斥候は、寂として草木既に眠り、銀河天に漲つて夜氣凄然たる時も、晝の疲れが如何に甚だしからうが、目を張つて前方を注視し、飛禽走獸と雖も見遁しにはせぬ。耳を澄まして蟲聲さへも聞き流しはせぬ。息を殺し、頭を冷かにして、後方にある全軍の爲に、靈活慧敏なる耳目の働きをなすのである。人と戰爭を云ふ時、多くは戰線に於ける兵士の勇壯なる働き振りを稱するが、又た警戒線に在る時の彼等の辛勞と重任とをも察してやらなければならぬ。「歩哨の睡眠は即ち是れ死なり」と。身輕くして任重きは寔に歩哨である。

「止れ！　……！　誰か？」

斯く歩哨が淋しく誰何する聲が微かに聞えて、夜は益々寂寞になる。忽ち歩哨線の方向に當つて闇を破る一二の銃聲、多分敵の斥候を認めたのであらう。やがて再び寂寞にかへる。空はいよいよ更ける。一團の雲は北より南より起り、次第に延びて、滿天に墨を流したやう、雨

は早やポツリ〳〵と降り出す：：予等は斯く物凄き警戒線上にあつて、敵を監視してゐたこと殆ど三十日であつた。

我が守備線の整頓した頃になると、敵の斥候も續々と頭を出しかけた。それで一夜として我が歩哨線の近傍に於て銃聲の起らぬことは無かつた。

「中隊長殿、敵の歩兵斥候五六名、前方約五六百米突の谷地に出沒します。」

此の種類の報告は日に何十回となく繰返されるやうになつた。其内には我が歩哨線で追々と色々の工夫をして、敵の斥候を捕獲せんとするに努めた。から云ふ事もあつた、歩哨線の前方二十間程の處へ繩を一線に張り、其の繩から更に一條の繩を歩哨の足許に引いて、これに鑵詰の空殼をつけた。若しか敵の斥候が、我が歩哨線に來たならば、其の繩に引かゝつて、歩哨の足許でグヮラン〳〵と音を立てて知れると云ふ近頃の思付であつた。ところが或時果して歩哨の足許に信號が傳へられたから、ソレ！と云つて捕へに行くと、向に敵らしいものは見えないで、一疋の大きな黒犬がグヮンと吠え付いた！

一〇 俘虜の初狩

我が軍の斥候は續々派遣せられてゐた。そして大抵は小斥候と遭遇して、之れを撃退するか、又たは敵の稍密集せる部隊の所在地を發見して歸ると云ふ工合に、毎も能く成功した。殊に予等は敵と初對面の事であつたから、彼等がどれ程の腕前を持つてゐるか、力競べをして見んと、我れも我れもと競爭して、斥候に出ることを希望してゐた。

六月二十日頃の事であつた。土岐少尉の將校斥候は、部下半小隊ばかりを率ゐて、亂泥橋附近の敵情搜索の爲に出發した。其の日は不思議に敵の斥候と出逢はなかつたから、一分隊の後衞を備へて歸途に就いた。ところが突然後衞と少尉の連れた隊との間に、敵の斥候が二名現はれた。スハと之れを取圍んだ。彼等は中々頑強で、銃劍を揮つて抵抗し、容易に降參しない。小癪な奴と、二三發ドン〳〵と放つて彼等を倒した、併しまだ死にはしない。殊に最初の俘虜であつたから、訊問して敵情を知らねばならぬ、それで蓮の急造擔架に彼等を載せて、凱歌の中に、聯隊本部から少し距つた、小川の側へ連れて歸つた。何が扨て俘虜の初獵であつたから、其處からも此處からも、どんな顏をしてゐるか見てくれんずと、人々黒山の如くに集まつて來た。頓て旅團副官と通譯とが來て、此の二名の俘虜を別々に分けて置いて、各々に訊問を始めた。凡て俘虜に就いて敵情を知らんとするには、各人各個に場處を違へて訊問し、彼此言ふ所を對照して、情況の眞僞を明かにするものである。而して其の訊問には、先づ其の兵の所屬部隊、高級指揮官の氏名、士氣の振衰等を糺すのであるが、悉く其等を問ふの暇無き時でも、彼れの所屬部隊だけは必ず聞かねばならぬ。これは其の部隊を知るに由つて、敵が如何に兵力を分配してゐるかが判明せらるる故である。譬へば狙撃歩兵第一聯隊だと云へば、即ち此の隊は誰れの指揮に屬して、どういふ配備にあるかといふことが推測が出來るのである。

軍醫は彼等俘虜に手當を施し、色々と勞つて、

「心配することは無いから、氣を靜かにし、訊

問に應じて、眞の事を答へよ。」

と懇切に云ひ聞かせた。而して又た軍醫が云ふには、此の俘虜は二人ながら胸部の貫通銃創で、今より一時間の生命が覺束ないと思ふ。成るべく氣の確かな中に要點だけ訊問したが宜からうとのことである。訊問者は先づ其の一人に向ひ、

「汝は何處の第何聯隊であるのか。」

彼は苦しさを忍んで、

「狙擊步兵第二十六聯隊。」

「お前の軍團長は誰れか。」

「知らぬ。」

通譯は更に念を推して、

「知らぬことはあるまい。お前が自分の軍團長を知らぬ筈は無い。」

彼れは誠實の色を顏に呈して、其の語の虛僞ならぬことを示してゐた。そして呼吸は頗る苦しげに口からは頻りに血の固りを吐いてゐた。

「水を飲まして下さい。」

傍に在りし予は一杯の清水を求めて彼れに與へたが、それを見向きもせずして、

「私の水筒に、沸かした水が入つてゐるから、それを飲ませて下さい。」

予は乃ち求むるまゝに之を與へつ、而して彼れが息將に絕えなんとしても、決して敵の與ふる水を口にしないと云ふ精神なるや否やは知らねど、此の時に當つて尙ほ生水は決して呑まぬとの心掛を忘れざりしことを感嘆した。これ位の男だから、豪膽にも能く我が斥候隊に敵し、劍を揮つて最後まで戰つたのである。されど軍團長の氏名を知らなかつたのは無理もない。露兵の多くは之れを知らないのであつた。予等後に至つて多數の俘虜を訊問した時、多くは同樣の答を得た。而も何の爲に戰ひ、誰れの爲に戰つてゐるか、それは知らぬ。唯だ何だか分らずに驅り立てられて來たのだと云ふものが十中の八九であつた。

最早彼れに向つて重ねて審問するの時間が許されなくなつた。彼れは色益々白く、呼吸は次第に切迫して、頓に臨終と見えたから、軍醫は、

「苦しいか！ 何も言ふ事は無いか？」

彼れは此の情ある問を喜んで、僅かに頭を擡げ、淚を落しつゝ、

「國に妻と一人の子とがゐます。どうぞ私の死んだ有樣を知らせてやつて下さい。」

と云つて間もなく息は絕えた。ア、彼れが何のため身を犧牲として戰ふものなるやも知らずに、遙かに此の地に驅り送られて、不運にも敵手に陷り、故鄕の妻子を偲びつゝ、荒涼たる原頭の露と消えたるは、敵とは云へ予等をして切なる同情の淚を催さしめた。彼れは死後厚く弔はれ、布教師の供養を受けて、十字架墓標の下に葬られた。

殘る一人は、右の可哀さうな俘虜とは打つて變つて、其の態度と云ひ、其の口上と云ひ、面憎きこと限りなしであつた。如何に敵なりとは云へ、彼等個人に對して何の怨恨も無いのであるから、其の心の哀れむべきは哀れみ、其の愛すべきは愛するのであるが、此の俘虜に至つてはかうだ。通譯が、

「お前の聯隊は、今何の方面に宿營してゐるか？」

「やかましい、知らぬわい！ スープがあれば飲ましてくれ、煙草をくれ。」

先づかやうな面憎さ加減であつた。これは敵前に膝を屈せぬ豪毅の精神といはゞ知らず、予は唯だ之を橫着といつてやりたい。後日の俘虜も多くは彼れの徒であつた。是れと云ふが、彼等は南山で大打擊を受けたとは云へ、まだ十分に

日本軍の腕前を知らず、殊に後に金城鐵壁の旅順を控へてゐたのを鼻に懸けて空威張をしてゐたのである。彼等は又た我が軍が九連城方面にて大捷を奏し、鶏林八道より露人の足跡を絶つた事を一向に知らず、話して聞かせても更に信じなかつたのである。國の大なると兵の多きとを以て誇つてゐた露軍、彼等の迷夢は果して何の時に覺めたらうか？

我が隊は如斯くに、日々夜々、敵情を知悉せんことに勉めてゐた。或時の如きは大隊長の率ゐる一個大隊の偵察隊を放つて搜索したが、果然敵の騎兵一隊と衝突して其の多くを斃し、乘馬を生擒したこともあつた。敵からも亦た絶えず偵察をなし、遙か歪頭山では、展望哨が、頻りに黒い旗を振つて信號してゐるのも見えてゐた。時には又た支那人の服裝をした斥候を放つて、我が前哨線を窺はしめたこともあつて、最初は馴れぬことであつたから、此方では唯だの支那土民だと油斷してゐた中に、突然哨兵の撃たれたことさへあつた。それで後には前哨線でも一層の警戒を加へ、たとひ支那人でも決して我が第一線を出入せしめぬことにした。それで或時、前哨線に住む村長が、出入を禁ぜられては甚だ困るから、線内へ避難をさせてくれろと哀願した。よつて旅團司令部では別に委員を命じて、愈々疑ひの無き者で、家族か親戚かのある者に限つて之れを許可することとした。だが支那人と云ふものが中々以て氣の置けない奴等で、中には露兵から金銀の後光を拜ませられて間諜をなし、我が軍に不利を與へた者も少くなかつた。

かくて我が軍は又た、内に凡ての準備を急いでゐたが、未だ機會の熟せざりしと、一つにはある軍略上の理由があつたのとで、姑らくは敵の行動に任せて、自ら攻勢を取らず、唯だ來襲の押へをしてゐるのみであつた。此の時分又た敵の軍艦は、近く小平島、黒石礁附近に、出沒して、我が陣地を擦り撃ちにしてゐた。かくする中に、時は愈々來り、六月二十六日を以て攻圍軍は活動を起し、予等の部隊の擬ふ處は、歪頭山及び劍山の戰となつた。

二　初陣

殆ど半永久的の陣地に就いて、敵と絶えず小闘合をなしつゝ、對峙してゐたこと、實に三十日にも及んで、戰機の熟するのを待つてゐたが、茲にどうしても棄て置くべからざることがあつた。それは敵陣地中の高地からして、我が陣地の内部を觀望することであつた。彼れには高さ三百七十二米突の歪頭山と、三百五十二米突の雙頂山と、又た此等に優つて高峻堅固な無名山（後に劍山と命名せらる）とがあつた。此等の山は敵の陣地中でも殊に要害の地で、而して遠く我が地域内を展望して、居ながらに偵察が届くのであつた。敵は此等の高地に精巧なる望遠鏡を備へて、我が陣地、大連灣、青泥窪等に於いてする作業を瞰望するので、我が軍の不利は夥多しきことであつた。若し一日たりとも永く此等を彼れの占領區域として放棄しておくならば、我が軍は爲に後方の緊要なる作業に遲滯を生ずるのみならず、又た時としては進軍發展の機を失ふかも知れぬので早く此等の地點を一括占領して、彼れが地の利を奪ひ、我れの不利を掃蕩せねばならず、併せて敵艦の屢々出沒する小平島を我が占領地區内に包み込んで、大連灣の掩護を確實にせねばならぬのであつた。是れ即ち予等が最初の戰闘として、歪頭

山を攻撃するに至つた所以なのである。

　歪頭山の戰は無論激戰と稱すべき程のものではなく、唯だ此の高地に占據せる敵の若干部隊を驅逐すれば足るのであつた。殊に要害を賴んで著しき防禦工事も施して無かつたから、之れを攻むるにさしたる困難も無いのであつたが、兎に角、予等に取りては是れが最初の火蓋を切るのであつたから、予等の決意も亦た格別であつた。

　二十五日即ち守備最終の日の夜はいたくも更け、露營の篝火も既に消えて、折々驢馬の淋しき嘶きを聞く時に至つて、祕密の命令は傳達せられ、予等は直ちに戰鬪準備に取りかゝることとなつた。何故眞夜中になつて斯樣な命令が達せられたかと云へば、これは取りも直さず、土民に對する顧慮に基づいたものであつた。實は二十四日に既に前進攻擊を開始する筈であつて、出發の支度に、露營地の設備を撤去する事を始めたところ、土民が直ちに敵に内通したらしい兆候があつた爲、其の日は止め、愈々二十六日拂曉攻擊と定まり、今夜は何喰はぬ顏して、土民に感付かれるのを豫防してゐた。予も其の夜は中々眠られないで、彼方に寢返り、此方に起き返り、或は明日の戰鬪を想像して見たり、或は隣枕の戰友とたわいもない事を話したりなどしてゐたが、向うの方でも闇中にチョイ〳〵煙草の火が淋しく光つてゐるのを見ると、予と同じく眠りもやらで考へに耽つてゐるものの少からざるを知つた。

　頓て露營地は何となく活氣を呈し來り、將卒悉くヌッと起き上り、音のせぬやうに、聲を立てないやうに、天幕を疊むやら、外套を卷くやら、兎角音のする背嚢もヤンハリと背に負ひ、草に摩する靴の音にも心しつゝ、叉銃線に集合した。折しも空は墨を流したるが如く、夜色朦朧として、唯だ光れるものは、銃劍と帽子の星とばかり、眼だけは眠むさうであつたが、衆は皆云ふに云はれぬ活氣を帶び來つて、威風凛乎として犯すべからざるものがあつた。

「忘れ物は無いか。」

「火の氣は無いか。」

　暫くして全線は無言に列伍を組み、「靜に行進」の號令で、ソロ〳〵前進を始めた。何でも此の部落を出る迄は、土民に覺られないやうに、彼等が朝起きて見て、オヤア！と驚くやうにしてやりたかつたので、平素から訓練せられてゐる謂はゆる靜肅行進をなして出發したのだ。さり乍ら守備の三十日もしてゐた事であるから、此の土地を何となく第二の故鄕位には思はれて心が殘らぬでもなかつた。一樹の蔭に宿り一河の流を汲むだに他生の緣はあり。茲に土民の中に、張殿甲と呼べる明朝遺民の子孫で、これ迄至極まめやかに、我等のため、朝の水から夕べの火まで、甲斐々々しく世話してくれた老翁が、我等の出發と心付いて、前夜は一睡もなさず、何から何まで世話して、いざ前進と云ふ時には、部落の出口まで見送つてくれた。されば彼れと予等とは多少の因緣去り難く、其の後も折に觸れては、此の忠實なる老翁が予等の話題に上つてゐた。

　曉霧模糊として太陽未だ東天に昇らず、旭旗皇軍を麾いて進むの時、遙かに右翼の方面數發の銃聲を聞く、戰端正に開かれたるか？

　軍の左右兩縱隊此の時みな動く。右縱隊は盤道西南方高地の敵を攻擊すべく、左縱隊は北、亂泥倫東方高地より標高二百六十八高地を經て、黃泥川大上屯の東北方高地に沿ひ、南、雙頂山に亙る一帶の敵を攻擊すべく、部署はそれ〳〵定められてあつた。

　歪頭山を攻撃すべく部署せられたる我が左縦隊の中央部隊は、隊伍粛々各軍枚を啣み、馬に箝し、旗を巻き、矛を伏せて逼り進んだ。既に接近するや、敵は山上より猛烈なる一齊射撃をなして頑強なる抵抗を試みた。我が隊はスハとばかり、劇烈なる急射撃を以て之に應じ、盛んに彈丸を送つたが、敵は山上、味方は山脚、敵彈は夕立の雨の如くに、バラ〳〵と我が頭上に浴びかゝり、足許の砂を煽り、石を飛ばした。戰闘の序幕は切り落された。飛び來る彈丸、撃ち返す銃砲、一刻は一刻よりも、一彈は一彈よりも益々激烈となつた。無煙火藥の爆發瓦斯は、一種の惡臭を放つて戰線を蔽ふ。銃の遊底を開閉する音。グワラリ〳〵と飛び跳ねる藥莢の音。ヒュン〳〵と唸る小銃彈。ゴウ〳〵と轟く大砲彈。傷つく者、斃るゝ者、劇なり慘なり。「前へ！前へ！」の號令は右隊左隊に起る。嶮しき山も、劍なす岩も何のその、踏みしめ踏み鳴らし、足を速めて馳け登る。藥盒の中で丸が騷ぐ。劍が跳る。心が躍る。進むわ、撃つわ。撃つわ、進むわ。敵彈は篠突く雨。味方の彈は砂を卷く風。いよ〳〵烈しくなつて來た。

　銃劍を揮つて敵の胴腹を突き拔くまでは、先づ火力を以て壓倒せねばならぬ。銃劍は最後で、火力は戰闘經過の大部分を占めてゐる。一たび戰闘となると、頭の尖から足の尖まで躍り立つ。夢中になる。沈着の動作は中々に得難い。如何に戰闘悲慘の景況であるとも、銃の引鐵を引かんこと、恰も夜寒に霜の落つる如くならんには、一發は一發の成功あるべく、無暗矢鱈にガチリ〳〵と引かんには、彈丸は空を吹く風の如くである。さて彈丸が旨く中れば、敵はバタバタ倒れる。それで突貫する。凱歌を唱ふ。君ケ代を吹奏して萬歳を歡呼するのだ。

　我が散兵線の士氣は益々振つた。戰場は愈々活氣を帶びた。負傷兵は續々出來る。アツと叫んでバタリと仆るゝものは、最早何事をも知らぬ。

　戰機は愈々熟したり。敵は既に動搖の色を示して、銃口は我れに向くとも、足は逃げる支度をして居る。サア突貫！　突貫！　かうなるとモウ破鐘を叩くやうな聲で、ワアワアと喊を作つて突き込むべき時だ。果して起る、豪雨の急射撃！　續いて起る百雷の吶喊！　山谷爲に動き、天地爲に震ふ。各兵は叫喚、舞躍、銃劍を銜いて一齊に敵陣に乗り込んだ。此の時早く彼の時遲く、敵は我れに背中を見せてドン〳〵潰走した。跡には銃器、彈藥、軍帽の類ばかり殘されてゐた。逃げるにかけては、其の早い事、巧みな事、流石は退却に妙を得たる露兵なりけり！

　歪頭山は確實に占領せられた。さして戰と云ふ程の戰をしたのでもなかつたが、初手柄のこととて先づは目出度し目出度しと、萬歳の聲いと高らかに朝の風に轟き渡りし時ぞ、是れ正に六月二十六日午前八時！

三　劍山の占領

　歪頭山が容易く我が手に落ちたので、勇みに勇める數千の精騎鋭卒は、更に敵の退却に追尾して、陵水河子より標高三百六十八米突の高地、即ち劍山に通ずる長隘路を前進することとなつた。これぞ即ち同處に據れる敵兵を攻撃せんが爲なので、唯さへ昂れる我が軍の士氣は愈々張り裂けんばかりとなり、一擧直ちに劍山の壘を拔くことを得べしと確信してゐた。

　劍山は岩石嵯峨たる奇峰で、我が正面の傾斜は極めて急峻、致る處斷崖絶壁ならざるは無

く、屹として天空に聳え、所謂一夫險に據れば萬卒を防ぐに足るべき、このあたり稀に見る山一大難關である。元無名の山で、但し露人は之れを「クイン山」と稱してゐたさうであるが、劍山とは、占領後に乃木將軍が、聯隊所在地の有名な劍山、劍ケ峰に因み、其の聯隊の名譽を傳へんが爲に命名せられたのである。當時此の天險を守れる敵の兵力はまだ十分には知れなかつたが、十數門の砲を配備せられてあつた事は探知してゐた。

　此の時我が聯隊は歪頭山に廻り、海岸に近き畑の中に開進して、總豫備隊となつてゐた。此の頃の遼東の地は燬くが如き炎暑で、口を潤さんにも小川の水さへあらず、命と頼まん木蔭さへ部落の外には絶えて無く、一本の灌木だにあるでもない。殊にこの豫備隊の位置は、青草さへ見えぬ畑の中であつたから、燒火箸のやうな太陽の光線は、帽子を突透して頭を溶かしてしまふのではないかと思はるゝほどであつた。されど此處に居るのも少時の間であらう、今に前進すれば、此の苦しい火攻を遁れて、愉快な戰鬪が出來るだらうと辛抱してゐたが、トウ〳〵其の日の朝の九時頃から午後の三時頃まで、日中の最も熾んな光線に射られづめであつた。遙か左方に當つては、水波渺瀰たる東海岸が見えたので、水に渇した予等は、アヽ一杯の水が欲しい、さらばモウ此の世に思ひ殘すことはないぞ、とは少し仰山であるが、全く遠方から出もせぬ涎を垂らして水を眺めてゐたのは辛かつた。

　斯くする内に、左方、小平島附近に敵の砲艦が現はれ來つて、我が豫備隊を目がけてドン〳〵撃ち出した。煙の輪を天空に渦卷きつゝ飛び來る砲彈は、予等の開進地にドッタン、グワンタン！と、凄じい響を發して落ちる。一發又た一發、續いて五六發、岩角へ突き中つたものは、ピカリと、火花を散らして硝煙漠々、岩は粉碎せられて四方へ飛ぶ。遠くで見てゐるだけならば眞に壯快であるが、我等群集の中へ見舞はれては堪つたものにはあらず。盛んに撃込んで來る砲彈は、殆ど過たず我が隊の開進地の近くまで達したが、幸に一人をも傷つけなかつた。其の中、劍山の方面に當つて、銃砲聲が殷々として起る。愈々攻撃は開始せられたのだ。我等が渾身の血は湧いて、前進の命令を今や遲しと待つてゐた。すると、

―前進！―

此の命令の下に忽ち起ち上つた兵士は、皆一齊に聯隊長の顏を仰いだ。凡そ聯隊長の勇敢なる動作は部下の模範として尊敬せらるゝもので、殊に劍電彈雨、危急切迫、勝敗の將に岐れんとする瞬間の如きは、即ち隊長の儼然たる態度と、不動の視線とに依つて、勝を制することが出來るほどである。

　いよ〳〵前進となつた。重い背嚢などは可成持たぬ方が運動に便利であるから、兵士は大急ぎに一日分位の食糧を背負袋に詰込んで、外套を肩へ斜に懸けた。予は一袋の煙草の中から二三本を引拔いて前進した。誰れが命ずるともなしに、一歩一歩、漸々急速の步調となり、唯だ銃砲聲の起る處を指して、一條の道路を何處までもと前進した。第一線の喧擾は次第に近くなり、いよ〳〵戰場へと近づくと心は益々跳つた。

　峻嶮無比なる要害は矗々として眼前に立塞がつたが、我が第一線は既に盛んなる銃砲火を交換しつゝあつた。戰が劇しくなればなるほどに、負傷者は更に多く、ズン〳〵後方へ運搬された。擔架の上にて血に染む士卒、銃を杖つ

き傷に惱みつゝ、辛うじて過ぎ行く兵士、此等を見る度に、新手の予等が憤激の念はいよ〳〵昂まつた。

戰鬪は刻々に劇烈の度を增した。我が砲兵は敵砲を沈默せしめんと頻りに砲火を放つ、步兵は一進一止、逐次峻坂を攀ぢ登りつゝ、絕えず猛烈なる彈丸を放つた。空は一面に灰色の雲に包まれ、白き黑き砲烟は簇り揚り、榴彈は霰の如く雹の如くに地に降り注いだ。暫くして優勢なる我が砲兵は、確實に敵の三四門を沈默せしめた。步兵は既に敵に肉薄したが、俄然三個の地雷火が、黑烟を噴いて爆發した。漠々たる土砂の烟に卷き込まれた我が進擊兵は、必ずや少からぬ損害を受けたに相違無いと思つたところ、意外！ 硝煙の晴れ散つた跡には、我が兵は一名だに斃れてゐなかつた。敵は徒に多量の火藥を用ゐ、土砂を跳らせたに過ぎなかつた。

敵は斯く地雷を爆發して、我が前進を阻止せしのみならず、又た山頂よりは、盛んに得意の一齊射擊をなす。それが一分一刻も絕間なしであつたから、我等は中々以て眞向きに顏を擧げてゐる事は出來ぬ程であつた。されど我が軍は怖めず臆せず、唯だ「前へ！ 前へ！」と一途に進み、先頭隊は鏖殺にならうとも恐れずして斷崖を攀づる。其の勢について後から一擧に突き込むと云ふ算段であつた。地雷火坑を踏み、小銃、大砲の縱射側射を冒して攻め登る動作は、其の危險、其の困難、實に名狀すべからざるものであつた。敵は死力を盡し、此の劍山ばかりは、日本軍に渡してならうかと頗る頑强に抵抗した。

鬨の聲は我が全線に起つた。將校は軍刀を翳し血眼になり、奮勵叱咤、部下を提げて敵に突入した。茲に於いて劍尖相打ち、彈丸猛射し、喚き叫んで攻め戰へば、戰友右に斃れ、部下左に躓く。されど大勢は既に定まつた。敵は斯く最後まで頑强なる抵抗を敢てしたにも拘らず、遂に幾多の死傷者を殘して退却するに至つた。再び三たび起る、萬歲の聲！ 歡呼の響！ 劍山の險は正に確實に占領したり。日章旗は山巓高く風に飜つた。

一三 逆襲

劍山の既に我が有に歸するや、續いて雙頂山方面また陷り、漲り渡る硝煙の間に、我が軍旗は搖々として占領部隊の上に飜り、凱歌の聲は風を壓して轟いてゐた。蓋し此の雙頂山たるや、劍山と共に是非とも陷れて置かなければならぬ地點であつたが、元々堅固なる防禦陣地と云ふ程でも無い。敵も烈しく抵抗を試みなかつた爲、我が軍は直ちに之れを占領することが出來たのである。實に一雁驚いて全軍亂れ、一陣動いて全軍皆潰ゆ。敵の此處大事と賴んだ劍山が突破られてから、響の聲に應ずるが如くに、雙頂山も難無く破れ、小平島もまた我が軍の手に落つるに至つた。此の小平島は、雙頂山の南麓に當るところで、前にも述べた如くに、敵艦は屢々此の邊に出沒して、側面から我が軍を惱まし、橫腹から槍を入れるやうな有樣だから、中々に效力があつた。會々我が外洋艦隊の驅逐する所となつて、一先は手を引いて旅順港へ逃げ込んだこともあるが、又た復た機會を見て出擊する。二十六日の戰鬪にも、現に敵の砲艦三四隻が此の附近に徘徊して、劍山並に雙頂山の我が攻擊部隊に一通りならぬ妨碍を與へたのである。されば我が軍は早く此の小平島を占領區域内に收

めなければならなかつたので、即ち左縦隊の左翼隊は、之れに向つて難無く占領を遂げた。これで旅順に於ける敵の第一防禦線は、今や全線我が有ならざるは無く、日章旗は到る處に飜ることとなつた。

二十六日に於ける我が軍各部隊の攻撃は悉く其の目的を達したので、今後の作戰上、運動の發展に、殆ど測り知るべからざる程の宏大なる利益を占むるに至つた。嘗ては我が陣地内部の諸動作を敵から瞰望せられてゐた不利益は、今や忽ち顚倒して、我れが反つて敵の行動を窺知するに頗る便利な位置に立つこととなつた。

されば敵軍が、如何にもして、此の地點を恢復せんことを企てたのは當然の策なので、ステッセル將軍は、普く全軍に令して、劒山は旅順の防禦上缺くべからざる要地なり、幾許大の犧牲を供すとも、必ず之れを恢復するに努めよと命じたさうであつた。さもあらん、さりながら一度我が有とした上からは、如何なる反撃に遣はんとも、如何なる詭計を加へられんとも、やはか再び敵に委してなるべきか。彼れが多大の犧牲を顧みざらんか、我れにも亦た其の覺悟はある。勇あらば來れ、來つて覆轍の恨を増せよ。彼等は無念やる方なかりしか、二回又た三回逆襲に轉ぜしことの笑止さよ。

永き夏の日も西に傾いて、薄墨色の天地は、戰後の凄々たる氣を孕み、生暖かき風は血染める草葉を拂ひ、先きの喧囂はハタと靜まつて、一しほ物寂しく感ぜられた時、折々思ひ出したやうに起る一發二發の銃聲が、鈍き音をして空を切る。これぞ敵が未練の盲撃、それも却つて戰後の一興であつたが、時しもあれ、雲油然として岫を出で、見る見る一天掻き曇り、電光閃々、雷霆殷々、鐵砲玉のやうな雨がザア〳〵降つて來て、天は再び奮撃殺到の景を繰返すものの如くであつた。遙か麓で嘶く馬の聲の殊更淋しく聞ゆる中に、戰後の雨は一しほ悲愁の感に堪へぬ。我等は雨に浴しながら、戰後の一夜の假の宿を求めたのである。

凡そ劇戰の後では必ず疾雷急雨が來るものである。戰闘酣なる時、砲煙高く渦巻き揚つて天地は晦瞑の凄じき色を呈す。忽ちにして盆を覆すが如くに大粒の雨が、雷鳴囃でザア〳〵降つて來て、戰場の血を洗ひ去る。これが勝つた者の嬉し涙、負けた者の悔し涙、そして又た幾多戰死者の弔ひ涙なのである。かゝる大雷雨の夜こそ、好機逸すべからず、楠狹間の二の舞を喰はしてくれんずとて、敵の逆襲のあるが殆ど常例であつた。さり乍ら此方からも、毎度御苦勞樣と門前拂にするのであつた。戰闘に勝つたからとて、決して氣を弛めることは無い。雷が鳴らうが、雨が落ちようが、一寸も油斷せぬ。一度占領せば、猶更嚴重な警戒線を張つて、敵の逆襲に備へる。勝つて兜の緒を締めるとは即ちこゝである。

我が軍が劒山より雙頂山に亙る一帶の要地を占領してから、既に一週日を過ぎたる後、乃ち七月三日の日中を以て、敵は大逆襲の態度を執り、多勢の兵を驅つて、我が劒山に向ひ來つた。敵の歩兵千餘は、王家屯から一直線に猛進し、其の砲兵は大石洞附近に放列を布いて、一時にドヽヽと撃ち出した。豫てかくあるべしと待ち構へたる事なり、何條驚くべき、我れは盛んに銃砲火を迸り、前進した歩兵を目掛け、集束彈の猛雨を浴せかけた。それにも屈せず撓まず前進した敵の歩兵は、中々の剛の者なり。さりながら、優勢なる我が火力には敵し難く、丸で將棊倒の如くに打ち殪れた。先頭を進んで來た敵の將校は、長劒を揮ひつゝ奮

進したが、忽ちパタリと斃れた。撃たれては僵れ、撃たれては僵れ、秋の木の葉の風に散るが如く、殘兵は勢力遂に敵し難しと見て、四方の谷へ潰亂し、バラ〳〵と退却してしまつた。かく歩兵は既に退却したが、砲兵は中々沈默せず、暫くは猶ほ踏み止まつて、烈しく我れを砲撃してゐたが、これとても後には、遁げて歸る歩兵を見ては、遂に力が拔けたか、二發は一發と減じ、最後の一發は不發彈なり。其の愉快！其の壯快！　我等は覺えず萬歲を歡呼した。

敵は劍山を奪はれた無念さに、之れを取返さんものと、氣ばかり切りに苛つたけれど、一向に效能が無かつた。

露軍の執拗なる、此の大打撃を受けてから間も無く、又た約ぼ前と同數の歩兵が太白山方面に現はれ、盛んに軍樂を奏しつゝ、堂々と我が第一線に進撃し來つた。彼我の距離僅かに七八百米突に迫ると、彼れは全線を廣く展開し、ウラーア！　の叫聲喧囂しく、鼓の音、笛の音に鼓舞せられつゝ突撃したが、我れは猛烈なる急射撃を以て之れを迎へ、進む者を斃し、退く者を撃ち、且つ一部隊を動かして攻撃に轉じたので、敵は爲に辟易し、又もや背後を見せて、元の太白山方面へ退却した。かく到底我れに敵はぬことは知れ切つてゐたに、一敗屈せず、二敗なほ撓まず、逐次精兵を繰つて、飽くまでも劍山要害の恢復を圖つた其の不撓不屈の氣力は、流石にと感歎せざるを得なかつた。我れには大和男兒の忠勇あれば、彼れにもスラヴの剛氣あり、されば虎龍の雲を呼び風を起して鬩ぎ戰ふが如く、彼我實に修羅場裡の好敵手であつた。

翌四日の午前一時と云ふに敵は眞夜中の闇を破り、又もや決死隊を驅つて、我れを劍山に襲撃した。彼等の運動の敏活にして且つ巧妙なる、草の根、岩の角にも心しつゝ、巧みに此の峻嶮を攀ぢ登りて突然我が哨兵を殪し、劍を振り、銃を舉げて、ドッと吶喊肉薄し來つた。是に於いて乎、混戰亂搏の活劇は開かれ、暗夜の格鬪に彼我の區別も分り兼ね、唯だ斬つては薙ぎ、突いては倒し、盲目滅法界の亂射亂撃、劍電閃く處ドサリと手に應へて何者かを殪したことを知るのみであつた。これでも「時」は戰鬪の輸贏を決するから、不思議といはねばならぬ。我が防禦の手痛きに、流石決死の露兵も遂には失望し、山を下つて退却した。其の剛膽、其の不屈、如何に我が軍の勇敢なるを以てしても、又た驚を喫せざるを得なかつた。彼等の遺棄した負傷者さへ、猶ほ銃劍を揮つて抵抗を試み、又た一人の重傷兵の如きは、氣息奄々として、其の蒼白き顏を擡げた時にも、決意の眼は血走つてゐた。

敵は此の巧妙奇智なる襲撃を試みても成功しなかつたので、最早絶望したらうと思ひの外、彼れは中々以て劍山恢復の初一念を斷たず、如何にもして奪取せんものとて、此の日の拂曉、更に大兵を舉げて進襲に轉じ來つた。此の時の逆襲は就中猛烈であつた。これ迄の戰鬪の作法とは異つて、敵も今度は能く〳〵の大決心を起したと見え、堂々と多數の砲兵を以て連續絶ゆる事無く我が陣地を砲擊しつゝ、歩兵を前進せしめ、逐次其の第一線を增兵し、此處ぞ分目の戰と奮勵の勇を鼓し、劇烈なる射撃を我れに送つた。如何に地の利に據つて、屢々逆襲隊を潰走せしめた我軍なりとて、此の大兵の襲來に對しては、これまでのやうに造作も無く叩き潰す譯にはいかない。だが我軍でも已に兵力を增加し、出來る限りの工事を施して、今日の大逆襲あることを期待してゐたのだから、イザ

來れ、目に物見せてくれんずと、爰に劍山攻擊以來の激戰を演じ出した。

敵の優勢なる砲兵は、愈々其の砲數を增加して、王家屯、毛道溝、安子嶺等の一帶の高地を占領し、主力は我が劍山を砲擊し、併せて一帶の我が步兵陣地に向つて、榴霰彈の火の雨を降らし、其の勢は疾雷急雨の如く此處を先途と戰ひ、命中效力の如きも至つて確實で、彈子は驟雨の如く寸砂の間隙さへも無かつた。我が砲兵も步兵も、有らん限りの力を揮つて、朝來絕えず急速なる射擊を以て、前進を阻害し、固より一度我が有に歸したる此の陣地は、寸尺の地たりとも敵の足跡に委せざるべしとの決心を示してゐた。殊に劍山守備の部隊は、敵の猛火の中に立ち、儼然たる態度、正確なる照準を以て、彼れの突入を支阻し屢々危險に陷らんとしても、屈せず撓まず、指揮官は陣頭に立つて部下を激勵し、怒眼キツと敵を睨んで「擊て！擊て！」と口角泡を飛ばし吹鳴りに吹鳴る。部下は驚きもせず敵を視つめて、銃の遊底と引鐵とに少しの休憩を與へず、根限り力限り、ドシドシと擊ち放すのであつた。

今は彼我の射擊益々急劇となつて、幾千萬の彈丸は、彼方より此方より左に入り混り、濁れる空氣を摺つてズル〳〵と音喧しく、天地は宛然阿修羅の狂ひ猛るが如く、戰いつ果つべしとも見えなかつた。敵砲の威力は非常大で、曳火彈は束となつて飛び來り、正しく我等の頭上に開きて、殺傷を逞しうする。榴彈の爆發は散兵線の前後に土砂を捲き上げて、濃烟白く黑く渦卷き漲つた。之れに對する我が砲兵の苦戰も一通りや二通りで無かりし爲、或る場合の如きは、遂に一時其の陣地の變換を行ふの止むを得ざるにさへ至つた。斯くして勝敗の數は未だ決せず、敵は益々優勢たる精兵を逐つて、次ぎ〳〵攻擊に轉ずる。我が軍よりも總豫備隊の一部を戰線に增加し、尚ほ又た重砲數個中隊を、盤道より黃泥川大上屯附近に前進せしめ、且つ海軍の陸戰重砲隊をして、南、沙河口附近に陣地を占めさせて、茲に堂々たる戰勢を張つた。されど戰鬪は益々劇より慘に、拂曉よりの銃砲擊は、黃昏に至つて少しも衰へず、而も敵は機を見ては奇襲に轉じ、砲の效果あるを見ては襲擊に移らんとする有樣であつた。敵が斯く猛烈であればある程、我れも十分の警戒をなし、十二分の打擊を與へた。

慘憺なる戰場は、ドンヨリとした夕日の影に淡く照らされ、暗灰色の背景を負うて、一しほ增し加はりし物凄さは、爲に戰鬪の成行を疑はしめんばかりであつた。ア、此の日の戰鬪は遂に其の局を結ばざるまゝに休止せんとしたか？　否々、日既に暮れたりとて、敵は何條其の計畫を放棄すべきや。彼れは今夜を期して大襲擊をなさんと思ひたればこそ、天明より日沒に至るまで砲擊の絕間無く、先づ以て我が軍に大打擊を加へ置かんとしたのである。されば豫て斯くと覺つた我が軍、夜に入つては益々守備警戒を嚴密にし、手に唾し腕に捻をかけて、來るなら來いと待ち構へてゐた。すると果然深更に及び敵は全線を擧つて大逆襲に轉じ、一擊直ちに劍山を拔かんとした。闇夜に閃く劍尖の光は、陸離として氷霜の白日に映ずるが如く、ウラーア〳〵！の喊聲は百獸の吼ゆるが如し。スハこそ御參なれ、日本男兒此處に在り！これを見よと、一時にドッと擊ち出したる手練の彈は殆ど一發の空打だに無く、流石の敵もこれには色を失はずには居られない。果してウラーア〳〵！の聲も次第に細り、[illegible]また闇に消えゆきて、遂には戰場闃として夏草に

すだく哀れな蟲の音と、敵の負傷者の呻き苦しむ聲とが、手に取る如く聞ゆるに至つた。空を仰げば密雲重々低く垂れて、今にも降り出しさうな模樣にあつた。

戰後に諸情報を總合して見ると、天明の頃我れに向つた敵は約千餘人と計せられたが、漸次に其の兵數は增加して約五千人となり、遂には一萬以上に及ぶの大兵となつたのである。加ふるに敵の砲艦若干隻は、龍王塘附近の海岸に顯はれて、我が軍の中央隊及び左翼隊に向つて盛んに砲擊を加へ、海陸を並び合して、其の威力を逞しうしたのであつた。されど再三再四の逆襲も其の效を奏せず、あらゆる奇策を廻らし、あらゆる詭計を用ゐて襲擊を試み、前日の怨を返さんとしたけれども、遂に一回として其の目的の一部をも達成することを得なかつたのは實に笑止の沙汰である。これがため敵もトウ〳〵根氣負けしたと見え、此の後は大逆襲を試みることも無く、劍山恢復の初念も絕みて、只だ專ら我が陣地の偵察に勉め、每日每夜緩徐なる砲擊を我れに與へ、時々の小夜襲を試みつゝ、其の間に太白山一帶の高地に防備工事を急いでゐるものの如くに見えた。

一四　髀肉の嘆

實に髀肉の嘆である！　守備ほど閑なものは無い。氣旣に滿ち、力旣に足れりと雖も、進軍の機に遭遇しなければ是非が無い。腰間の軍刀は無聊を喞ち、鞍馬の筋骨は無事を嘆ずるかなれど如何せん。されど守備は乃ち進軍發展の端緒で、嚴密なる守備線に於いて、有らゆる手段を講じて、精細確實に敵情を偵察し、彼れの配備の如何を知るに由つて、我れの作戰計畫が一々定まり、それで愈々前進攻擊となるのである。されば即ち守備は蛟龍の池中に潛む時で、前進は雲霧を呼び起して、大空に躍るの時である。

十四個大隊の精鋭を擧げ、二十四門の火砲を提げて、激戰奮鬪我れに抗した頑強なる敵兵も、遂に劍山に宿怨を晴らすこと能はず、ステッセル將軍が所謂「如何なる犧牲」を拂ふとも、其の目的を遂行することを得なかつたので、彼れは遠く軍を收めて、更に北、雙臺溝、安子嶺より南の方、太白山、老座山に亙る一帶の高地に堅固なる防禦工事を施し、劍山の失態を恢復せんことを企ててゐた。而して我が軍は依然守備して、北、安子嶺より亂泥橋、劍山、黃泥川大上屯を經て、南、雙頂山に達する一帶の線上に在つた。予等の聯隊は即ち此の黃泥川大上屯の東北に偏れる高地を警戒する事になつて、當日から直ぐに十字鍬や圓匙で、カッチン〳〵と土工をする事となつた。先の張家屯附近とは違つて、敵と接近もしてゐたし、且つは劍山占領後、敵はよし數度の逆襲に失敗したりとて、なほ機を見て襲擊を試みんとするは知れ切つた話であつたから、これに備ふるには出來得るだけ堅固な陣地を構成しなければならぬ。戰局發展の今日は部下の勞苦を顧慮してはゐられぬ。勇氣の兵卒等も亦た毫も安息を思はないで、晝でも夜でも、石の細道、草の根、岩の角を這ひ傳ひつゝ、先の張家屯に殘した土嚢や、鐵條網の材料を運搬しつゝ、少しなりとも堅固なれかしと、工事に寸暇も無く働いた。

陣地は百丈の山、千仞の岸、錯然として横たはり、一樹の蔭も無く、一椀の水さへ容易くは得られない處であつた。唯だ遙かに霞める老鐵山の砲臺や、近き嶺々山々の堡壘を眺めては、

日ならず緞帳が切り落されて、いよ〳〵大活劇を演ずるのだ、那許り壯快であらうぞなど、色々な想像を浮べつゝ、昨日も暮れ、今日も亦た暮れに行つた。

半宵月無く、闇の帷の四圍を包む時、一隊の黑影が山を登つて行く。之れは何ぞ！　即ち晝間の工事に疲れた兵卒と交代して、夜間作業なすべき一隊である。かくて夜間までも働かなければならぬのか？　然り、此の守備地では夜間の作業こそ主なるもので、晝間には敵の砲兵が搜り擊ちに擊つため、工事が捗取らない。止むを得ず夜業をしなければならぬ。圓匙の音、十字鍬の響が丁々發々、石を積む、砂を運ぶ、土嚢を詰める。鐵條網の杭を打ち込む、それも音の立たないやうに、敵に聞えないやうに、勿論煙草一服喫ふことはならぬ。其の火光を見付けられるなら忽ちズドンと一發面喰はされるのであつた。兎角する中に、夜は徐々闌更に、二時となり三時となる。雨が降らうが、風が吹かうが、兵士は絶えず丁々發々！　アヽかゝる中にあつて、それを辛いとも思はず、苦しいとも思はず、苦しいとも云はず、ひたすら君の御爲、國の爲にと骨身を惜しまず働いて居る。

夜はいたくも更けた。工事の一隊も霎時手を休めた。されど此時もなほ塑像の如くに直立し、銃を腕にし、眼を瞠つて敵方を睨むは、彼の步哨である。肌寒き夜風に吹き晒されつゝ、

「オヽ、今宵はメッキリ寒いぞ。いつものやうに、夜襲でもして來るかナア……」

と片頰に微笑を洩した彼れは、三更寂寞の此の時、嘸や望鄉の念の起ることもあつたらう。アヽそれも無理は無い。

何處に居るのか、定かに分らぬ敵の砲兵は、時々予等の幕營してゐた谷地に向つて、搜り擊ちに擊ちかけた。七月の十五日頃であつたらう。或る時、巨大なる砲彈が飛んで來て、凄じき音を立てて爆發し、岩を碎く、石を飛ばす、黃黑い烟がムッと舞ひ上がり、大地は震動した。予等はこれまで野砲彈ばかりに馴れてゐて、こんな巨彈を喰つたは、これが初めてであつたので、ギョッとせざるを得なかつた。是れは多分敵が海軍砲を龍王塘に引揚げて、我が陣地を攻擊したものであつたらう。敵はなほ劔山に未練が殘つてゐたと見え、絶えず巨彈を射かけたので、我が各大隊では毎日時間を定めて、何時より何時までの間に、孰れの方面には何發來たと云ふことを報告するやうにしてゐたほどであつた。敵が用でもなきに、劔山の岩角を砲擊して、我れを威嚇せんと試む。離れた處から榴霰彈が破裂するのを見ると、恰も煙火のやうだ。かやうに砲火を浴びせかけられて、其の下にゐるのは存外氣持の良いものではなかつた。而して又た茲に、予等の毎も怪訝に堪へない一事があつた。それは毎日殆ど時間が定つて、敵は盛んに砲擊をなし、都合能く我が幕營地を犯して、時には思ひ掛なき死傷者を出すことであつた。これには何か祕密があるに相違無いと思つたが、扨て容易に知れぬ。色々と研究の末に、漸く次のやうな驚くべく又た憎むべき事實を發見したのである。

それは支那土民が牛や羊を牽いて我が警戒線の後方の山に登つて、遙かに敵に信號する事であつた。例へば黑牛を牽いて登つたら、どの方向を擊てとか、羊群を追うて上つたら、此の村を擊てとか、ちやんと敵と暗號を定めて、我れの不利を圖つたのである。金銀の爲に生きてゐる支那人の事だから、素より彼等の油斷のならぬことは、張家屯の守備に於いて既に實驗したのであるが、さりとて我が第一線を出入りする

でもなく、平気の平左で牛や羊を追うて悠長に山道を行くのが、敵と、暗號通信であらうとは夢にも知らなかつたのである。彼等は老蒙昧の愚民で、食を貪ること無く、唯だ金銀の貴きを知つて、大いなる利害得失を思はず、日露戰を交へて彼等の田園を荒すは何の爲なるか、また其事は無論少しも見る事も無い。それで屢々累を我れに及ぼし、見付かると厳刑に處せられたとは憫然至極である。人間も斯く迄に利欲の奴隷と墮落しては濟度が出來ぬ。

この月の二十日頃であつた、我が將校斥候が深く敵の前哨線を潜つて、其の下士哨を驚かしたことがあつた、首尾能く其の任務を達成して歸る途中に、敵の歩兵斥候三四名に端と遭遇した。ソレ捕れよと追ひ廻すと、彼等はドンドンと二三發死物狂に射撃して、遂に其の姿を隠したが、中の一名はトウ／＼道路を失つてマゴ／＼してゐたのを難無く押へ、將校斥候は凱歌を唱へて歸つて來た。例によつて訊問となつたが、彼れは歩兵の伍長であつて、何事でも自状いたしますから、命ばかりは御助けをと、ペコ／＼頭を下げてゐた。情無い奴かな！　義は山嶽よりも重く、死は鴻毛よりも輕しとする日本男兒の魂を爪の垢ほどでも煎じて飲ましてやりたい。嘗て聞く、旅順に於て敵手に落ちた我が一兵卒は、守將の面前に引き出された時、滿面朱を濺ぎ怫然として彼れを罵つたと云ふ。之れに反して彼の露兵が、敵に捕はれて命が惜しさに、漏らすべからざる秘密をも漏らした其の根性は、實に見下げ果てたものではないか？　彼れは我が警戒線上に突き出され、敵の配備を指示せよと命ぜられて、何の躊躇するところも無く、右は何隊、中央は何隊、又た左方は何隊と、頗る明瞭にスラ／＼と答辯した。これまでの偵察の結果によりて知れてゐた敵の配備表と照合するに、彼れの語に些かの誤謬も無かつた。我が軍の此の露兵によつて益したことは少くないが、彼れは丈夫の道に背するは恥づべき事柄である。

序でに、劍山攻撃の一夜岩陰に隠れて居た一人の露兵を捕へて、之れを訊問した話をしよう。其の問答はかういふ風であつた。

「お前等は昨今日本軍の攻撃を如何に思つてゐるか。」

「今にも日本軍が大攻撃をして來るだらうと心配してゐた。」

「上官はお前等を愛してくれるか。」

「旅順へ來た當座は、色々と勞つてくれたが、近頃は給料も滿足にくれず、この三ケ月ばかりは、三分の一しか渡さないし、弾薬も半減して、殘はみな、將校が懐中に入れてしまふ。」

「南山で敗れた者等は旅順へ歸つたか？」

「南山の敗兵は要塞内へ入れない、食糧も渡すのが無いから、自活して第一線で働くことを命令せられてゐる。」

「お前等の同胞が多勢、日本へ送られてゐることを承知してゐるか。」

「知つてゐる、先頃は自分の戰友も俘虜になつて松山へ往つた。」

上官たるものが部下を愛惜しないのに、何として部下が上官を畏敬して、心からの服從をなすべきぞ。將校は兵卒を吾子の如くに慈しみ、兵卒は將校を親の如くに慕はなければ、戰場生死の間に如何にして、本分を全うすることが出來ようか？　剰へ將校が兵卒の給料を奪ひ、食糧を私して、彼等を飢餓に導くやうな所業をしては、などて生死を共にすることが出來ようか？　而して露兵が到る處に土民の財を掠め、食を奪ひ、婦女子を辱しめたといふ

は、彼の俘虜の洩らした消息によりて、其の所以を推察せらるゝではなきか。

我が警戒線の工事は、日を逐うて着々堅固に構成せられた。此間敵は相變らず五月蠅い程に小夜襲を試みては其の度ごとに追拂はれた。砲彈は亦た絶えずヒュー／＼と空を掠めて、そして氣の毒な程效果が無く、無益な事をして彈藥が竭きはせぬかと心配して遣つた。されど何處ともなく飛び來る小銃彈のために、折々意外の死傷者を生ずる事もあつた。晴れの戰の舞臺でなら遺憾は無いが、守備の間に流彈の傷を負ひ、命を殞し、近き日の大快戰に參加する光榮を棄てゝ、後方へ轉送せられるのは、何程殘念だか！

「私はドウしても歸りませぬ、繃帶所へは往きませぬ、」負傷者の無念な言葉は、實に道理至極で、其の心底の苦痛は同情に堪へぬのであつた。

二五　幕營生活

せめて雨露だけは凌ぎ得らるゝよう頼んでゐた天幕も、情なや、今は風に破られ、雨に朽ちて哀れな姿となり果てた。予等は上陸以來殆ど六十日になる今日まで幕營を以て唯一の宿營法としてゐたのである。凡ての情況が舍營を許さぬ。それに支那の村落では多數の家が一團となつてゐることが甚だ稀で、此處に二三軒彼處に四五軒と散在してゐるのだから、大部隊の舍營などは思ひも寄らぬのであつた。偶々運好く豚臭い、大蒜臭い檐下にでも、一夜の露を凌ぐことが出來ると、立派なお座敷に寢るよりも一層有難いくらゐであつた。幕營は殆ど常住の宿、天幕・營衣、我等の爲に風を防ぎ、雨を凌いで、露繁き野原で土砂を褥とするの苦難より免れしめてゐたが、今はこれさへ僅かに日の光を蔽ふに足るのみとなつた。つれなき雨は、何の咎あれば我等を惱ますぞ、怒れる風は、何を恨みて我等を苦しむるぞ。蔭と頼める天幕は、容赦も無く雨を洩らす、さては風に吹き捲られる、大事の大事の携帶口糧が濡れる、武器の藥室に水が溜る、實に泣くに泣かれぬ始末となつても、さりとて他に宿らん家も無く、頼まん蔭も無きに、何を嘲てばとて仕方が無い。雨に打たれ乍らも、夢みるくらゐが樂しみにスヤ／＼とたわい無く寢るのであつた。人あつて試みに眠りに就ける我等の顏を覗いたならドウであらう？　着のみ着の儘、頭髮は伸びる、髯はムシャムシャ、顏の色は垢黒くなつて、丸で山賊か乞食よろしく、誰れも彼れも窶れて見る影もない姿なるに驚くであらう。

樂しみは食ふに在り、暇さへあれば、何か食ふものの工面が付かぬだらうかなどと考へるより外に何も考へることがない。

「何か甘い物は無いか―」

「貴樣の所に、甘い物があるだらう。少しよこせ。」

などとは、いつも我等が出會頭の挨拶であつた。口が淋しくてたまらぬと、果ては大豆や玉蜀黍を炒つて、コツリ／＼と頬張ることもあつた。

我が軍は青泥窪を收めてよりは、一般の給養上や極便利を得たのであつて、戰鬪間の外は、先づ不自由を感じないで日を送ることが出來た。兵士は原料の分配を受けて、各自携帶の飯盒で炊ぐのであつた。岩の蔭や、付近の高粱殼を焚いて、くすぶる煙の中で飯はまだかと待兼ね顏の無邪氣さよ。副食物の主なるものは、胡

瓜、干大根、薇、牛蒡、鑵詰等であつたが、これ等は度々、硬い病物を唾で咽へ運んだり、半煮飯に舌鼓打たねばならなかつた仕合の我等に取つては、忝けない程の御馳走であつた。

此の守備區地は、張家屯に比べると、少しは青々とした草木も見え、時々は草間に愛らしき花も咲いてゐたので、敵の砲彈の殼に生けて思ひだし、胸に插して其の香を喜ぶこともあつた。フォルガツト、ミー、ナツト(忘れな草)と覺えた瑠璃草の小さく可愛らしい花が此處彼處に咲いて、遠征の人をして憶を故山の空に馳せしむるの媒介となることもあつた。

予等出征軍人は、露軍の他に、更に一大敵を控へてゐたのである。即ち風土てふ強敵であつた。あたら勇士が病魔の襲ふところとなつて、戰線を下るは、實に無限の恨事であつた。風に晒され、雨に濡らされる。するとそれより惡疫が發生する。此の附近の地區には樹木と稱すべき程のものは無かつたが、幸に草が多かつたので、いつも之れを刈つて、天幕代りの急造廠舍を造つた。しかし之れとて雨や風に對しては一向役に立たず、破れた天幕よりも一層烈しく侵入するのであつた。予等は火力の敵に勝つことを得ても、天力の敵は到底防ぐことが出來ず、兵士の全身は濕潤し、下腹は冷却し、加ふるに、晝夜の勞働の激しかりしと、飲用水の最も不良なりしと、又た睡眠の不足せしとよりして、腸胃の傳染病が發生して、露營生活に一大不幸を現出するに至つた。予も實に此の恐るべき傳染病に侵された一人であつた。日に數十回の下痢を催したので、肥え太りて岩疊なりし予も日々に肉落ち力衰へた。病氣は素より苦しいものだが、手當の行屆きかねる戰地で、病に侵されるほど情無いものはない、殊に戰機日を追うて熟し、何時前進攻撃の命令に接するかも知れない場合に此の病氣に罹り、若しイザとなつて、これが爲に戰列に加はることが出來ないやうだつたら、何程無念かと、それで一層心を苦しめてゐた。予は此の事を記するに當つて、二個の恩人の名を忘れてはならぬ。即ち安井、安藤の兩軍醫と、當時予の從卒たりし高尾文吉とである。

兩軍醫は、予が斯くも忌はしき傳染病に侵されてゐながら、之れを意とすることも無く、予の身邊に附添ひて、懇切に藥餌を與へ、心籠めたる看護を盡してくれた。又た面白可笑しう色々の雜談をなして、予の病める心を慰藉し且つ勵ました。此の懇切なる介抱に、予の病も幸に輕快し、晴れの攻撃にも恙無く參加して、我が任務を全うすることを得たのである。

戰場に臨みては、皆互に親子兄弟のやうであつたが、予は此の事ありて以來、著しく兩氏と親密を加へた。此の守備中いつも同一の場處で暮したのが何より愉快であつた。離合集散は戰場の習であ。何時何時別れたるか知れず、況して要塞戰の常として、前方に進む者のみ斃れ、後方に在る衞生官が無事とは限らぬ。而も軍醫は、死傷者收容の爲に、屡々危險を冒して第一線に前進せねばならぬのであるから、互に今をも測られぬ命である。若しも君戰死して我れ全からんには、我れは君の遺物を收めて永く戰場の契の片身とせん、我れ斃れて君安からんには、願くは血に染める我が衣の一片を收めて末代の語草とせよ、唐紅の血潮は、我が大皇に捧けし微忠のしるしぞ、又た君を思ふ赤き心の色なるぞと、斯くも深く予等は相契つて莫逆の友となつた。されど紛糾亂麻の戰場なれば、何處に斃れしか、屍を收めんにも在所を

だに知らぬが大方の習なれば、萬一の邂逅は不思議の奇緣で、素より之れを豫期し難し。然るに第一回總攻擊の將に開始せられんとした時、予は今生の永別と覺悟して、兩軍醫と最後の握手をなしたる後、望臺の敵壘中にて四肢を碎かれしが、不思議にも一勇卒の救ふところとなつて虎口を免れたれど、出血の甚だしきが爲に、遂に人事不省に陷りしに、再び息を吹き返した時、予を收容して、予の碎けたる手に接吻して「よくやつた、しつかりせい。」と云つてくれた者こそ、實に安井、安藤の兩軍醫であつた。

從卒高尾文吉、彼れは予の曾て敎育した兵卒である。其の忠實なると熱誠なるとに感じ、予が聯隊本部に轉勤した時に、特に從卒としてゐた者である。平時でも將校と從卒との間柄は格別の親しみのあるものだが、殊に戰場へ出で生死の境に立つては、一層の情交が湧いて、既に主從ではなくて、兄弟である。予は何事にあれ高尾を賴りにする。高尾も亦た予を慕ふ。飯も焚いてくれる、汁も沸かしてくれる。何處からか水甕を拾つて來て、遠くから水を運びて風呂を立ててくれた事もあつた。彼れが曾て予の家族に送つた書狀の中には次のやうなことが書いてあつた。

「出征以來無事にて兩人共に勤め居り候。少尉殿の御身の上に付きては、氣を付け居り候ふ間御安神被下度候。戰の事に候へば、何時御別れ申すかは知れず候へ共、死しても少尉殿を御守り申すべく、御恩は決して忘れ申さず候。」

誠實の情實に掬すべきではないか？予が病に罹つた時の如きは、彼れは身の疲れを厭はず、晝夜一睡もせずに、予の胸を摩り足を撫で、食を求むれば、彼れは叱りつけるやうに、我が兒を賺すやうに「今は何も食つてはいけません、快くなられたら、どのやうにもして上げます。」といふやうに、何から何まで細かな注意で手落ち無く看護してくれた。予は彼れが熱愛の情を思うて感謝に堪へなかつた。後日予の負傷した時には、高尾は最早予の從卒ではなかつたが、彼れも傷を蒙つたため後送された途中で、予の負傷したことを聞いて、此處彼處の野戰病院に予を探したけれど、遂に廻り合はずして大いに悲しんだとの事であつた。

高尾文吉が心の誠は、神も守りたまひてや、彼れは運強く、遂に凱旋の名譽を荷つて歸つてくれた。されど彼れは負傷せしこと二回、出征せしこと實に三回、彼れは忠實なる從卒にして、又た戰場の勇者であつた。屢々重大なる傳令勤務に服し、其の剛膽と機敏とを以て、常に之れを達成したのである。

哀れなる露營地は、斯く或ひは風雨の爲、或ひは炎熱の爲、又た或ひは惡疫の爲に絕えざる襲擊を受け、而も敵彈の飛來日を逐うて益々劇しくなつた。されど此の間にも將卒の元氣は益々旺盛となつて、ひたすら守備を出でて攻勢に轉ずべき時機の一日も早からんことを渴望してゐた。

一六　警戒線の夜嵐

孤軍重圍に陷りたる旅順の敵は、日々其區域を縮められたので、如何にもして、我が軍の一角を破つて、運動の範圍を擴張せんとしたるは、素より自然の策であつた。されは劍山にて幾度かの敗北を重ねて、最早大舉逆襲を試むるの勢を失ひたるが如くなりしに拘らず、

我が警戒線の各所に向つて、多少の襲撃を加へたことは、殆ど一日として中絶しなかつた。而も彼れは一度として有利なる戦鬪を交へた例無く、徒らに彈藥を消耗し、兵員を減殺するに終つた。

七月十日頃よりして、我が軍は其の陣地の前面に接したる、頗る峻險なる山岐、俗に岩山と命名した地點に前進哨を派遣することになつた。此の地點には、屢々敵の斥候が出沒して、我れの防禦線を窺つたので、我れは直ちに之れを驅逐して、別に警戒線を張ることとなつたのである。時は七月十六日、射干玉の闇夜に、岩山の前進哨に任ぜられたは、杉村少尉の率ゐた一小隊であつた。夏とはいへ大陸の夜の肌寒き風は闇を拂うて、此方の歩哨の面を掠め、彼方の草叢を騒がせる頃、連日の睡眠不足で、肉落ち頬骨は尖つても、心ばかりは彌增して鋭き彼等歩哨は、今宵こそ敵は必ず襲撃して來るならんと、目を皿のやうにして、闇を透し睨み、時々大地に耳を付けて敵の足音を聞き出さんとしてゐた。果して歩哨の闇を破つて「敵襲！……」の聲が鋭く聞えた。沈着にして大膽なる杉村少尉は、此の緊要なる陣地の守備を全くせんが爲に、勇ましく此の進襲を迎へた。敵は三面より包圍し來り、其の數率より知るべからざりしも、我れに數倍するものなることは認められた。而も敵は側面に得意の機關銃を運び來つて急切なる射撃を加へた。機關銃！これぞ露軍が防禦上第一の武器として頼んだもので、此の利器は既に南山に於いても甚だしく我が軍を惱まし、多くの我が兵を屠つたものである。此の兇器を有する多勢の敵に對し、悠然長劍を揮つて、寡兵を指揮しつゝあつた杉村少尉の勇猛なる態度を想ひ見よ。三面に敵を受けたる前進哨の運命は、一に少尉の手に繋がつてゐた。然れども少尉の剛膽なる、又た部下の勇敢なる、彼等は能く二時間の交戰に耐へ、數倍の敵を支へて寸尺をも讓らなかつた。敵は遂に力及ばずと知つたか、一齊に手を退いて、闇中に其の姿を沒してしまつた。されど噫！我が沈勇なる杉村少尉は終りまで健全ではなかつた。敵の機關銃の彈丸は彼れの頭部をかすつた。されど一念の徹する所、彼れは猶ほ號令を絶たず、鮮血迸りて兩眼に注げども、敵が退却するを見屆けるまでは、依然奮鬪を續けたのである。

敵は死屍十數を跡に殘してゐた。夜來の腥風曉天に吹いて明くれば十七日の早朝、敵は平氣な顔で赤十字旗を立て擔架を運び來つて、我が哨兵線に接近し、甚だしきは僅かに五十米突の距離に進み寄り、屍體を拾ふに假託して、卑劣にも我が陣地内を窺はんとした。これぞ彼れが白旗や日の丸の旗を利用して我れを欺かんとした類似の奸策であつて、而も彼等は意氣地無いことを度々繰返したのである。或時かう云ふ事もあつた。ある地點に於いて、歩哨は前面より確かに一個の黒き影の進み來るを見たから、

「止れ！　止れ！　誰か？」

と例の如く誰何したれば、其の黒き影が低き聲にて、

「我が軍の將校……」

と答へた。それで歩哨は我が軍の將校斥候が歸つて來たものと思つて、

「通れ！」

と云つた。すると彼の黒影は、忽ち叱咤銃劍を突いて歩哨に擬した。欺かれたるを曉つた歩哨は、「何を小癪な！」と叫びながら、銃床で毆り飛ばした。敵は何時の間にやら少しの日本語を覺えて、それで我れを欺かんとして失敗したのは心地が良かつた。如斯くに敵は男らしく

も無き小策を弄し、奸智を廻らすこと多大なりしがゆゑに、我が軍たるものは常に細心密慮の注意を要してゐたのである。

杉村少尉が收容せられて、民家の納屋へ横へられた時、其の從卒伊藤福松は、慈母が我が子の病を護るが如くに、顏色は蒼ざめ、眼には一杯の涙を浮べつゝ、少尉を慰安してゐた。其のいぢらしき看護のさまは、視る者をして漫に涙を流さしめた。少尉が野戰病院へ送られた後にも、伊藤は暇ある毎に遠き道をも意とせず、而も難路を越え往きて、少尉の傷を看護してゐた。或日予が公用あつて旅團司令部へ行つた歸り途にて、重き鞄を肩に負ひ、喘ぎ喘ぎ山坂を登つて來る一兵卒のあるを見た。近づけば之れぞ即ち伊藤福松であつた。予は彼れに、

「杉村少尉の傷はどうか？」

「ハイ、非常に惡くて困ります。今日は何もお分りになりません。」

「さうか。お前が感心に能く看てくれるので、杉村も嘸かし喜んでゐるだらう。」

とて伊藤を慰めると、彼れは忽ち涙をホロリと落して、

「私は少尉殿と一所に傷を受けなかつたのが殘念でなりません。今日までの御恩返しもせずに、お別れ申すのかと思ふと、何故一所に斃れなかつたのかと思ひます。昨夜でした、少尉殿が苦しさうに私の手を握られて、世話になつたよ、と云はれた時には、少尉殿の御供がしたくてなりませんでした……」

予は最早伊藤の顏を打戍るに忍びなかつた。彼れは、「早く往つて見ませう。」と云ひて、蒼々と歩を運んだ。

杉村少尉負傷してより、將卒皆共に憤慨の念を高め、早く前面なる太白山なる敵を攻撃して、幾多の戰死者の弔ひ戰をせずしてあるべきに非ずと競うてゐた。されば猶ほ警戒線上に在つて、あたら無殘の最期を遂げた者の如きはみな悲憤の涙を流しつゝ瞑目したのである。而して彼等が臨終の言葉には痛恨人の腸を刺すものがあつた。予は玆に其の悲壯なるものの一つとして、山下兵吉なる一卒を紹介せん。山下は平素より、何事を爲すにも熱心で從順で、聊かも勞を惜しまなかつた。されば彼れが戰友等も、常に彼れを敬愛して兵卒の模範としてゐた。彼れは戰場に在つて、或日容を正し、日頃最も親しくしてゐた一戰友に向ひて、

「俺は決して生きては還らぬ……が俺には一人の兄があつて、貧苦に暮してゐる。わしが死んだらどうぞ兄だけには知らしてやつてくれ。」

と云つたさうである。其の後程無く、彼れは或る命令を受けて傳令勤務に服したが、其の任務を達し、歸つて之れを中隊に報告せんと急ぐ途中で、敵の流彈の爲に腹部を貫通せられた。山下憤慨叫んで、

「ナニ糞！　これしきの事！」

と云つたが、遺憾なり、彼れは復た起つこと能はずして、繃帶所に收容せられた。軍醫は眉を顰めつゝ迚も助からぬと云つた。聯隊長は彼れを見舞ひて、

「氣を確かにせよ。心を大丈夫に持たぬといけぬ。」

と慰められたが、聯隊長の目には一つぱいに涙が浮んでゐた。そして、

「名譽の負傷だ。良くやつてくれた……」

といはれると、此の慈言の耳に通じた山下は、細く目を開き、苦痛の中にも力が籠つた聲を出して、

「聯隊長殿、すまんことを致しました……ど

うぞ仇を取つて下さい……」

彼れが手は震ひ、舌頭は何も物云ひたげに動いたが、やがて縡切れ、遂に歸らぬ黄泉の客となつた。山下、彼れは不日花々しき戰場を待たで敢無き最期を遂げ、唯だ「仇を取つて下さい」といふ一語を此の世の名殘として瞑目したとは不愍至極であつた。其の翌日戰友は彼れが遺骨を戰場に葬り、遠山布教師は懇切に彼れを弔ひ、釋忠勝の法名を授けた、其の墓標は旅順へ面して建てられた。

予は今こゝに筆を改めて、此の露營地に於いて戰死者の追悼會を營んだことを語らねばならぬ。劔山攻擊以來、我等が部隊の戰歿者は兎に角少からぬ數であつたから、我が師團長は、彼等の英靈を祀り、其の忠魂を慰せられた。日は七月一日、雲打ち烟る夕まぐれ、陸水河子の畑地に、形ばかりの祭壇を設けられた。机の上には白き布を敷き、布教師が持合の阿彌陀佛の畫像を祭つて、其の前に四寸角ほどの箱に納められた遺骨を幾つも積み重ね、又た燒香の備へもしてあつた。其の祭壇は亦た旅順の方向へ向けられてあつた。薄暗き蠟燭の光は物悲しげに、遠近の蟲の音は無常を告ぐるが如く、楊柳の枝を梳りて、靜かに降り濺ぐ村雨は、一入の哀れを增した。師團の各將校は祭壇前に環形をなして立ち、兵卒は其の後に整列し、布教師の讀經が終ると、師團長は靜かに進み出でて香を焚き、默し、禮拜された。當時は頭を擡げられなかつたは、定めし無限の悲愁と感謝の念とが、其の胸裡に往來してゐたのであらう。口の中では「能くやつてくれた！」と念じられたことであらう。亡き人も心あらば、此の將軍の麾下を離れたことを悲しみ嘆いたであらう。又た我が部下の靈を祀る中隊長や小隊長の思ひや如何に！ 花々しく戰つてくれた、能く汝の本分を盡してくれた、能く陛下の股肱たる精神を貫いてくれたと、嘆きの中にも感謝してゐたであらう。入營以來同じ枕に寢ね、同じ務に勵みたる兵卒等は、故友の健氣の最期を羨み、自ら死に後れたるを嘆じたであらう。靈前に禮拜する將卒の袖に宿りし露の雫は、たゞ空の村雨の降りかゝるのみではなかつた。

戰死者忠魂碑と記された記念の標木の前に額づく戰友等が、鑵詰の殼に青き草葉を挿して手向となし、又た水筒の水を注いだ其のやさしき心根！ 中には「戰死の魁」など云ふ文字を記して供へたものもあつた。かく厚く弔はれて、亡き魂も嘸や嬉しく感動したことであらう。

一七　太白山の激戰

顧みれば、劔山に敵の大逆襲を擊退してより以來、我が陣地は益々堅固なるを加へた。內には各般の進擊準備を講じ、且つは南山にて分捕りたる大砲十二門を亂泥橋附近の高地に配置し、又た海軍重砲六門を西部猪圈子溝の西方高地に配備し、而して外には屢々有力なる偵察隊を派遣して、敵の前進陣地に於ける一帶の防備を知悉するに努めた。此の時主なる陣地は北、營城子より廻り、雙台溝、安子嶺を經て、南、太白山及び老座山に至る一帶の峻嶮なる山陵であつた。而も彼等は此の天險に據つて、歲月を厭はず費用を惜しまず、あらん限りの堅牢なる設備をなして、我が軍をして一步も南地へ進む能はざらしめんとしてゐた。されば之れを拔き之れを陷れんことは、眞に容易の業ではなかつたのである。然るに我が軍の滿を引いて未

だ放さず、將卒みな髀肉の歎をなすこと實に一閱月、今や進軍發展の機は十分に熟し、士氣亦た愈々振ひたるを以て、遂に七月二十六日を期して、諸隊等しく陣地を發し南方進撃の戰端を開いた。

予等の屬する聯隊の攻撃すべき唯一の目標は、卽ち敵が前進陣地中の最要地點と賴んで防備最も堅固なる太白山一帶の高地であつた。攻撃開始の前夜に當りて、凡ての部署に關する命令は發せられ、旅團長よりは特に、這般の戰鬪は實に旅順攻圍第一着歩で、敵の堅固なる前進陣地を攻略することであるから、將校以下各員奮起努力して、飽くまで奪略せんことを期せよと勵まされたのであつた。聯隊長に於いても亦た部下一同に向ひ、我が聯隊全部が勢を揃へて戰鬪するのは、今回が初めてである。凡そ戰爭終極の勝利は、初戰に於いて既に決を見るものである。聯隊長たる予は既に汝等の生命を貰ひ受けて居るのだから、あらゆる手段の下に汝等を吝まず犧牲とするぞ。又た汝等が日頃錬り鍛へたる武士道の精神を發揮するは眞に此の時である。汝等は予が平素の訓戒と、殊には出發の日汝等に授けた訓示とを善く心肝に銘じて、一途に陛下の御信賴に應へ奉らんことを期せよ、我が名譽ある軍旗の下に悉く殪るゝの覺悟をなせよと、斯くもいと嚴格たる訓示を與へられたのである。而して又た大隊長は各中隊一般に、中隊長は各小隊一般にそれぞれ諭告して、各員舉つて聯隊名譽の爲に努力奮闘せよと云つたのである。斯の如くにして、予等は豫ての覺悟の上に、更に大決心を促されて、英氣益々勃々、雄心愈々磊々、未だ戈を交へざるに、各員の意氣は既に太白山の敵勢を壓してゐた。

進發前夜の幕營内に於ける光景は一種沈痛の觀を呈した。戰友互に何事をか囁き合ふものあり。輕く銃を摩して獨り苦笑を洩すものあり。死恥殘さじと、晴の襦袢と着換へするものあり。さては天を仰いで微吟するものあり。而して此の時予等が心底には如何なる思ひが往來してゐたらうか？

七月二十六日の天未だ明けず、夜來の驟雨は漸く晴れたるが如しと雖も、霧深くして咫尺を辨ぜず、涼風征衣を拂ふの時、幾千の貔貅は闇に紛れて、長蛇の如く徐々に動き出した。午前三時といふに例の岩山の麓へ到着した。此處が聯隊の豫備隊の位置で、此の山上は散兵線、右の方の山稜が砲兵陣地と部署せられ、而して戰闘開始の合圖があるまでは、一兵も頭を出すことはならず、銃に裝塡し、彈藥盒の口を開いて、ソレ擊て！との聯隊長の號令を待つてゐた。聯隊長は岩山の最頂點に雙眼鏡を手にして立ち、副官は地圖を開く。小行李の彈藥駄馬は山麓に寄り沿ひ、輸卒は手に唾して待ち構へてゐた。而して今に合圖の砲聲がある筈であるから、我等は時計を出して、今五分か今三分と、針の進むに連れて胸を躍らせてゐた。

午前七時四十九分、待ちに待つたる第一發の砲聲は曉天の雲を破つて左翼隊の方面に轟いた。是れが卽ち老座山及び太白山一帶の敵に向つて、攻擊を開始する最初の砲聲であつた。守備三十日間、我れよりは未だ曾て一發だにも砲擊を加へなかつたものだから、此の砲聲には敵も流石に驚いたのであらう。頓て彼れよりも周章てて擊返した砲彈は、如何にも眠さうにブルーンと空を掠めた。我等の戰闘方略は、左翼部隊先づ老座山の敵に當りて之れを破り、然る後に予等の部隊は之れと並列して前進すると云ふのであつたから、予等は暫く手を束ねて、老座

山方面の戰鬪の如何に成り行くかを氣遣つてゐた。やゝあつて我が海軍砲は、耳を劈くばかりの巨音を以て發射を始めた。此の勢なら、敵は造作もなく敗れて、彼れの前進陣地は容易に我が手に入るだらうと思つたが、どうして〳〵敵もさるもの、我が攻撃の前に、蜘蛛の子の如く散るものではなかつた。

　老座山方面の戰鬪は益々劇烈となり、我が各砲門は老座山の北西斜面に在る敵の重砲隊に集中して、此れを沈默せしむることに努めた。稍や暫くして敵の砲火漸く衰へたるを見ると、我が左翼隊の歩兵は、砲兵の掩護に依つて前進を始め、直ちに正面二千米突許りなる新月形の高地を占領し、續いて時を移さず、左方に轉回し、十時頃老座山の北方稜部を占領した。元來敵は此の方面に對して、防備に多大の力を加へなかつたものと見え、若干抵抗の後に其の大部分は老座山の主要地點を捨てたけれども、稍ほ中々に頑強で、我が歩兵の既に山頂を占領した時となつても、一部の敵は其の南方斜面に占據し、我れの野砲彈の集中火の下に佇立して、死守の態度を取つて居た。此れがため意外に長時間の戰鬪を要した。されど左翼隊は此の敵を壓迫して此の地點より逐ふことを得たかなれど、敵は後に龍王塘の入江を控へて、所謂背水の陣を成してゐたもので退却することが出來なかつた。されど彼れ此れする中に我軍の追撃に逢うたので、多くの死傷者を棄てゝ、殘兵はジャンクに乗つて對岸へ隱れてしまつた。

　左翼部隊の成功既に斯の如くであつたので、我が聯隊たるものは即ち此に於いて、攻撃開始の機會に逢着したのである。由て聯隊長は、各大隊長を招いて、

「ヨシ！　全線射撃を始め！」

と號令した。忽ち第一大隊と第二大隊とは右方に、第三大隊は左方に、全線は豫定の陣地で揃つて頭を出した。豆を炒るやうに、パリ〳〵プス〳〵と撃ち出した。我れが撃ち出すが早いか、敵の彈丸は夕立の雨の如くに、大粒で、バタリ〳〵と前後へ落ちて砂を煽る、石を蹴れる、耳を掠むる音はヒューッと鳴り、空を切る聲はブルーンと響く、一連の鎖のやうに繋がつた散兵線には、段々と空隙が出來る。擔架卒は彼方に走り、此方に驅けて、死傷者を繃帶所へ運搬してゐた。小流彈の霰ばかりか、巨大の砲彈が頭上で白煙を噴いて爆裂する。其の彈子はポテ〳〵〳〵と地上に落ちて砂を蹴り、又た散兵を頭から突き通した。それのみか砲彈の空筒は山を越して、豫備隊の中へドンと落ちて來るほどであつた。予が猶ほ豫備隊の位置に就いてゐた中に、一兵卒で敵の砲彈殼を受け、右の腕を切り飛ばされて即死したものがあつた。後で其の砲彈殼を見ると口元には外套の片、其の下には上着の片、襦袢の片、それから肉に骨、その先には前と反對の順序に、襦袢、上着、外套と血に染んだ草や石を交へて、恰も一個の罐詰を成してゐた。

　斯くして戰鬪を持續せしこと數時間であつたが、敵の銃砲は甚だ優勢で、我が軍は爲に容易に前進の機會を得なかつたのみならず、死傷者は續出して、擔架は迚も間に合はず、而も後方に在つた繃帶所までが、敵彈を蒙つて、一旦收容した傷者が、再び傷ついて斃れると云ふ有様で、苦戰一方ならぬのであつた。それで更に豫備隊を前進せしめて、砲兵陣地の左翼に位置せしめ、イザとならば突撃縱隊となつて、前進の出來るやうに用意しておいた。此の時予は軍旗を奉じて、此の豫備隊中にゐたのが、其の位置が一つには砲兵陣地であつたのと、又た一

つには軍旗てふ大目標を敵に與へたのとで、忽ち王家屯附近にあつた一隊の敵は、此の地點に向つて凄じ砲撃を開始した。其の集中火は命中實に確實で、前に後に頭上に盛んに爆發する。其の彈子は横毆りの散雨の如く、硝煙の飛散した跡には、只の今まで勇壯に指揮を取りつつあつた小隊長が、早や半身朱に染んで死んでゐる。砲車長も手足其の處を異にし、腦漿は湧き出で、臓腑は血泥に塗れてゐる。豫備砲手が其の補充に就かんとすれば又た斃れる。其の壯烈悲慘の狀は實見者ならでは、殆ど想像も及ばぬことであり、予の筆は到底能く之れを盡すことが出來ぬ。

敵が砲彈の襲撃に、我が豫備隊も亦た尠からざる損害を蒙りしより、今は只だ向ふ見ずに驀然猛進するの一途あるのみとなつた。一分でも長く此の位置に止まらば、一人でも多く損傷されるのであつた。扨て先の程より空は黒雲低く垂れて物凄き有樣となつてゐたが、やがて疾風は硝煙と共に吹き來り、狂雨は彈丸と共に斜に降り出した。其の中で我等豫備隊は命令によつて、直接、聯隊長の位置へ轉進することとなつた。されば直ちに砲兵陣地を棄てて、左方岩角傳ひに行進を起したが、疾風は軍旗を高く半月形に吹き揚げて、卷けども卷けども、又た裂け破らんばかりに吹き飛ばした。此の時恰も一發の砲彈は予の頭上に破裂して、其の破片がシューッと響いたと思ふ間に、軍旗を護衞の兵一名を殪して、遠く後方の谷間へ落ちた。

我が聯隊長の占めたる岩間の絶頂には、此處ぞ必ず主腦の在る處と、敵は切りに榴霰彈の霰を降らしかけたが、その中に在つて青木大佐は仁王の如く又た不動の如く、屹と敵を睨んで立ち、予が近づいて軍旗の裂けたることを報告すると、唯だ「サウか！」との一言があつたのみ。稍やあつて、

「丸で機動演習のやうぢやないか！」

聯隊長その人の膽や斗の如く大に、其の勇氣凜々たる態度は不言にして衆を激勵し、稍ともすれば臆心せんとした兵卒も之れを仰ぎ見て、更に數層の勇を鼓して奮闘するのであつた。

既に午後二時にも及んだが、大勢は未だ定まらず、我れは刻々に損害を増加せらるゝの苦境であつたが、此の時左翼隊の一部は、山を攀して更に前進を起した。山を下る隊伍の先頭に立つたは大隊長であつたらう。軍刀を閃かして奮進するのが見えた。そこで我が隊も「前へ！」の號令を發するや、全線は黒き柵の如く、一度に起ち上つて、敵の銃口前へドシ／＼と前進した。敵彈は俄かに其の數を増して、土砂降りに降つて來る。爲に進む者は斃れ、進むものは斃れた。

小隊長八田少尉は敵彈の爲に胸部を貫かれたが、彼れは毫も屈せず、なほ「前へ！　前へ！」の號令を叫び、迸り出づる血潮を意とせず、負傷せしことを部下にも告げず、唯だ一心に目ざす敵陣さして猛進せしこと實に千米突、遂に第二の占領線に近づくや、微かに萬歳を唱へて息は絶えた。

勇將の下に、豈に弱卒あらんや。八田少尉の部下たりける一兵は、小隊長に先だち、敵の砲彈の爲に右の腕を劈かれたが、それでも後へはひかぬ。小隊長が繃帶所へ下れと勸めても聽かず、「ナニ、これしきの傷、またまた戰は出來ます。大丈夫です」と、水筒の水を傾けて傷口を洗ひ、手拭を縛り付け、左手に銃を握りて、息を吐き／＼散兵と共に前進したが、最後の線にて、小隊長と同じ枕に討死した。而して彼れは決して武士の魂たる銃器を放さな

かつた。彼の八田少尉と云ひ、此の一卒と云ひ、孰れ劣らぬ大和心の華である。彼等の覺悟は實に斃れて尚ほ已まざるに在つたのだ。

遂に聯隊長の手許に在つた豫備隊は、纔かに歩兵の二個小隊と、工兵の一個小隊とになつた。之れに由つても如何に困難なる戰闘を交へたるかが推せらるゝのである。朝來我が砲兵は苦戰に苦戰を重ねたれども、優勢なる敵砲を威壓すること能はず、而も堅固なる敵の陣地に對しては何等の效果をも奏せず、遺憾此の上無き事であつた。我が歩兵は敵前實に五六百米突までも押し揉んで逼つたかなれど、砲兵の榴彈が能く敵壘の工事を破壞してくれなければ、盲進は單に斃死部隊を曝すこととなるのみであつたから、多大の恨を呑んで、ヂッと其處で敵と對峙したまゝに、夏の永き日脚は遂に沒して、悽愴たる黑幕は戰場を蔽ひ包んだ。

雨は小歇となりたれども、夜色淒然、幾多勇士の死屍は、彼の山に重なり、此の谷を埋め、敵壘は高く闇中に屹立して、堅牢拔くべからざるを誇るが如き觀を呈してゐた。されど我等の士氣は毫も衰へず、反つて憤慨の火の手は益々熾んなるを加へ、明日を期して必ずや大いに此の勁敵を破らんものと決心してゐた。夜間銃砲火は一時も絕えず、死屍の運搬は擔架のみにて事足らねば、天幕を代用して此等を谷間に集めた。負傷者は又たそれ〲衞生隊に收容せられた。予等は、靜かに横たはれる勇士の屍に凭つて、徹宵一睡をも貪らず、明くる日の早かれかしと祈つてゐた。

一八　陣頭の「君が代」

明くれば二十七日、今日こそは必ず敵陣を奪略せずしてあるべきかと、拂曉よりして既に我が砲兵は協力して砲火を放ち、以て、歩兵突撃の通路を開かんことに努めてゐた。前日よりも一層猛烈に砲撃したが、敵の之れに對する應射も亦た前日に比すれば一層劇甚であつた。斯く怪しくも堅固なる敵の陣地は、そも如何なる構成であつたかと云ふに、一帶の高地には悉く岩石を以て堡壘を築き、木材を以て掩蓋を作り、銃眼を穿ちて、敵は我が砲彈の爆發に耐へつゝ、身を匿して十分に射撃が出來るのであつた。速射砲、機關銃等を各方面に配備して、縱横自在に射撃が出來る。而して此等は堅固なる材料と工事とに依つて、隱蔽せられてあつた。加ふるに山の前岸對岸共に岩石峭立せる峻嶮の谷地であつて、降ることも攀づることも中々に容易でない。此の怪險なる山谷を越え、敵の集團火を冒して前進するのであつたから、我れの被害の多大なるは當然の事であつた。

砲兵は未だ奏效せず、小銃火は無論何等の效力をも現はさぬ。如何としても敵の機關銃を根本的に撲滅せずんば、我れは徒らに斃死の大部隊となるばかりだとは知つたが、今は致し方がない。火力にして效無くんば、即ち最後の唯一手段は、人間を擲つ肉彈にありだ！　大和魂の塊つた此の肉彈、如何でか敵壘を破らざるべき！　果して命下る。即ち我が第五、第七、第十の三中隊は坂落しに谷を下つて突撃を開始した。すると今迄我が砲兵と對戰してゐた敵の砲兵は、忽ち目標を變換して、此の突撃縱隊に向つて火焔を吐き、榴霰彈を打ちかけた。同時に機關銃は固より、各壘の歩兵火は悉く射撃を我れに集中した。突撃隊は之れにも萎縮まず、喊聲を放ちつゝ疾風の如くに猛進した。其の聲は銃砲聲と相合して、百雷の一時に轟く

ばかり、突貫！　突貫！　猛りに猛り、狂ひに狂ひ、隊長傷つけども顧みるの遑無く、部下斃るゝとも最後の握手を爲すに由無し。死屍を踏み越え踏み越え、遂に敵前僅かに十數米突まで肉薄した。されど地形の嶮なるは之れを爽ぐることを得ず。屏風の如き峭崖は巍として前面に立塞がり、後を顧みれば、山腹悉く死屍ならざるはなく、部隊の半は既に殪れてしまつた。それで是非も無く、此處で敵と睨合つて對峙するの止むを得ざるに至つた。此の突撃縱隊が、敵の砲彈を浴びつゝ前進した時の狀態は、實に壯烈また慘澹を極めた。彼等は硝煙濛々たる内に包まれて、淡く薄き影の如くに見えつゝ奮進してゐた。中には時々砲彈に跳ね飛ばされて宙に揚がる者も見えた。後で死體を收容した時に、唯だ一つの彈痕も無きに、全身紫色に變つてゐた者もあつた。之れは即ち敵の砲彈に跳ね飛ばされ、礫のやうに擲け付けられたものなのであつた。

敵の抵抗は斯の如くに頑强にして、我が火力は單に針を以て大磐を撞くが如く、何等の痛痒をも感ぜしめたらしくなかつた。若し此の勢で荏苒久しきに彌らば、戰鬪の終局は殆ど期し難く、或は遂に不幸なる戰況に陷るやも測り難し、今は全滅と覺悟して、飽くまでも奪取を圖らねばならぬのであつた。果然我が旅團長より次の要旨の命令が下つた。

一、前日來の將卒の勇敢なる動作を歎賞す。

一、旅團は本日午後五時より太白山東方一帶の敵を攻擊する爲、全砲兵を以て砲擊を加へ、左翼隊は砲擊の熟するを待つて前進、敵を攻略せんとす。其の聯隊は此の好機を逸せず、死力を盡して當面の敵陣を占領すべし。―

然り我等は必ず敵を破らんものぞ！　今更の事ならねども、今日こそ如何な事あつても、軍旗を敵陣に翻して、前日來凱歌の聲を聞かずして斃れたる幾多勇士の忠魂を慰藉せずしてあるべきか。

機の熟するを待ちつゝ軍旗の下に集まつたる一團の將校、孰れも昨朝以來の戰況を語り合つて、

「敵も中々豪いね！　敵の將校で胸牆の上に立つて指揮してゐたものがあつたよ。」

「敵も隨分苦戰してゐるのだ。今日こそドウしても拔いて見せねば承知せぬ。」

などと盛んに氣焰を吐いて、敵の頑强なるは機械の效力のみならず、又た其の動作の勇敢なるに由るのだなどと批評を下しつゝ、憤激の念は愈々勃發し、攻擊精神は復讐の情と共に益々高まつてゐた。時に一人の少士官が、一瓶のビールを提げて來た。予等は昨日來殆ど食はず飲まずの狀態であつたし、それに此の戰場でのビール一瓶は、如何にも珍しく思はれたので、けげんな顏をして此の士官を見た。此の人こそは菅中尉とて、時の大隊副官であつた。中尉は如何にも壯快な口調で、

「オイ、ビールを飲まぬか、昨日から、太白山を取つたら祝杯を擧げようと思つて腰に吊るしてゐたのだが、今日は愈々諸君と別れの杯を酌まうと思ふ――諸君には長々世話になつたが、今日と云ふ今日は目出たく戰死ぢや……―

と至極眞面目になつて、一種のアルミ製湯呑にそれを酌んで出した。予等は順次に飲み廻した。別杯終るや、菅中尉は空瓶を高く差し擧げて、

「諸君の健康を祈る！―

と云ひ棄てゝ、戰死者の遺骸を埋葬する爲にと

立去つた。嗚呼、これぞ實に菅中尉が別れの杯であつた。彼れは之れより程も無く、敵陣に凱歌を唱ふべき時をも待たずして、名譽なる戰死者の列に加はつた。中尉と予とは同郷竹馬の友で、彼れは日頃予を弟の如くに愛してくれたのである。されば戰場で邂逅ふごとに、互に手を握りしめて「丈夫でゐたか？」と云つて、泣く程に嬉しがつたのであるが、彼の時これが愈々の永別なりとは夢にも曉らねば、しみ〴〵と是れ迄の禮も云はず、これも戰場の習、飽かぬ間に盡きせぬ名殘となつた。後にて聞けば中尉は死骸の埋葬を監督して、

「丁寧に土をかけてやつてくれよ。おれも今少しすると、此のとほりにして貰はねばならぬのだからなあ！」

と云つたさうであるが、中尉は自ら命の盡くのを悟つたものか。曩に戰死した八田少尉も前進に當りて、思ひ出したやうに、衣嚢から一包の勝栗を出して、從卒に、

「これは母が神前に供へたもので、戰の前には必ず戴けと云はれた。おれも戴くから、おまへも一つ戴け、モウこれが別れになるかも知れぬ。」

とて押し戴いて兩人で齧つたとか。予等も常に死ぬ覺悟し、逢うた時が即ち別れだと思つてはゐたが、イザ眞の別れとなる時には、何か目に見えぬ不思議の緣が、心に前兆を傳へ來るものであるか？

午後五時は來つた。我が全砲兵は一齊に砲口を開き、歩兵も亦た全力を擧つて射撃を始めた。天地は忽ち硝煙の雲霧に鎖された。飛彈爆鳴は山谷を劈かんばかりであつた。今度こそは決戰であつたから、其の猛烈なりし事、其の慘烈なりし事、之れを形容せんにも言葉許さない。我が歩兵は擊つては進み、止まつては撃ち、猶進又た躍進、されど嵐に霙の敵彈は眞向きに前進するのを阻む。さり乍ら今は此等の障境、慘狀を氣にかけてゐるべき場合でなく、一歩でも前進して敵陣に逼らねばならぬ。旅團長の命令には何とあつたか、死力を竭せとあつたではないか？唯だ進め、進みて死せよ、今は半歩も止まる時でないぞ！　將校は軍刀を揮つて、戰線を彼方に走り此方に驅けて士氣を鼓舞してゐた。豫備隊たりし二個小隊も工兵も亦た第一線に增遣せられた。遂に我が第一大隊は、敵前實に十米突の近くまで肉薄したかたれども、前に立塞がれるは屛風の如き岩山で、殆ど一つの足場も無ければ、如何に急つても攀ぢ登ることが出來ず、側面よりは敵彈がバラ〳〵飛んで來る。正面に向つた第二中隊は只だ唯だ敵の機關銃の標的となるばかりで、見る見る內に、バタ〳〵と仆れる。一彈は松丸大尉の刀身を貫き左眼を掠めた。而して又た我が砲兵の射撃は花火のやうに空中で破裂しただけのことで、敵の防禦工事に對しては、殆ど何一つの效力をも奏したらしくなかつた。榴霰彈では役に立たぬ、榴彈を打ち込んで、敵壘の掩蓋を碎破せなければならぬ。早く榴彈を發射してくれと、砲兵隊へ切りに傳令を派遣したが、一人として歸つて來ず、みな途中で仆れた。工兵の小隊長に、爆藥を送つて來いと命じたが、それも焦眉の間には合はなかつた。

七時も過ぎ、八時、九時ともなつたれど、形勢は依然として捗らず。第一大隊は一時進撃を停止するの止むを得ざることとなつた。又た第二大隊方面にては、大隊長玉井少佐は重傷を蒙り、副官菅中尉は突撃進路の偵察中、後を振り返つて「傳令！」と呼び掛けた其の刹那、頭部を貫かれて即死した。第三大隊方面に在つ

ては、只だ敵と接近したばかりで、その上如何ともし難く、死傷者は續々增加するの苦境に陷つた。我等は恰も鰐魚の口に呑み込まれんとする細鱗のそれで、此の末如何に成り行くべきかを疑はしめた程であつた。されど不撓不屈は我が軍の精神なり。敵が頑强なれば我れも亦た然り。我が各大隊、就中第一大隊方面にては、十字鍬を以て岩を缺き石を積んで、足場を造ることに勉めてゐた。敵は絕えず、我れの作業に極力妨害を試み、カチンと音がしても、忽ち火焰の舌を出して嘗め廻すのであつたから、これも容易に成功しなかつた。しかし此の困難を冒して、足場を略方造ることが出來たらば、一擧に突入せんとの計畫であつた。

夜は已に更けた、物凄き下弦の月は薄絹を引きたらんやうに戰場を照らして、陣地の半面を朧に露はしてゐた。此の時左翼隊なる第三大隊長內野少佐より聯隊長に宛て、左の意味の一通報が來た。

「我が大隊は今より全滅を期して突擊に移らんとす。貴官も共に攻勢に轉ぜられんことを希望す。予は攻擊の實施者が、予の最も敬愛する吉木聯隊長にして、旭日東天に朝するの時は、卽ち名譽ある聯隊旗が、赫灼として敵壘に飜るの時なるを祝す。予は茲に謹んで告別の敬意を表す。」

と、折しもあれや、遙かに左翼の方に當つて、嚠喨たる「君ケ代」の吹奏が聞えた。月影細き空を傳ひ、餘音微かに長く曳いて、予等の腦裏に一しほ深く染み渡つた。「君ケ代」の喇叭の聲は恰も　陛下御身親から「前へ！」と號令せらるゝかの如くに感ぜられて、將卒は皆自然に身を引きしめ、勇氣更に十倍し、忽ち奮躍、彈雨を犯し岩石を攀ぢて猛進し、大喊聲を放ちつゝ敵壘に突入した。眞黑に固まつた一團の先頭に立つたる松村少佐は怒眼叱咤、

「突き込め〳〵！」

「君ケ代」の吹奏はなほ盛んに起つた。各隊は續いて萬歲々々の聲に天地を轟かして聲援を與へた。山上には劍尖相摩して火花を散らし、接戰格鬪、打ち込む太刀に鮮血の河を流し、伏屍の山を築き、慘は慘なりしかど、窮苦の餘始めて敵を破つたる我等が愉快の情は那許りなりしぞ！　津波の如き一團の後からは、又た一團と、我れは續々兵力を增加し、敵は遂に此の猛烈なる攻擊に耐ふること能はず、なほ暫くして逡巡しつゝも、接戰格鬪を續けたが、我れは益々勇を鼓して奮鬪し、時は七月二十八日午前八時、東天紅を染め出したる頃、我が軍は確實に太白山一帶の高地を占領した。

軍旗はヒラ〳〵と陣頭に飜り、萬歲の聲は潮の如くに湧いた。

一九　戰場の跡

我が軍が太白山一帶の敵陣地を占領するの成功と名譽とを得るに至つた迄のあひだ、上は師團長より下は一兵卒に至るまで、その堅忍と勇氣とは眞に非常大であつた。天險と戰ひ、地利と戰ひ、堅固なる工事と戰ひ、食はず、飲まず、眠らざる事、實に五十八時間の長きに亙つて、而も頗る頑强なる勁敵に對して、遂に多大の成功を收めたることが、爾後の作戰に幾許大の重要なる效果を產んだであらうか。四千餘名の死傷者を出したる彼の南山の戰鬪は、これまでも最激戰と稱へられてゐたが、それとて此の太白山の戰鬪に較ぶれば、更に低廉なる價を拂つて贏ち得たる賜物なりと云はねばなら

ぬ。南山では、敵は前面に展開したる緩斜面の地帯を控へて、我が攻撃部隊を掃射したものであつた。然るに太白山一帯の地形は全く南山と異なり、一切の山谷を以て成れる處で、敵の彈丸に對しては死角（急斜面の内側にて、彈丸の中らぬ箇處）に據ることも出來れば、掩蔽も出來た。然るに南山と殆ど同數の死傷者を出した。之れでも其の攻撃の困難なりし事が判定せられる。

難戰苦鬪三日に亙りて、敵と殆ど尺寸の地を爭うて對抗してゐたのであつたから、無論糧食は後方から少しも運搬されず、將卒は纔かに携帯口糧の麪麭を齧り、一滴の水も飲むことは出來ず、小便も其の位置に垂れ流し、無論一睡たりとも假眠むことならず、されど滿腔の憤激に、氣は張り裂けんばかりであつたから、眠いとか飢じいとかの考へも浮ばなかつた。敵に於いても亦た同樣であつたと見えて、占領後、其の散兵壕を見れば、到る處大小便にて汚されてゐた事から思ふと、敵も亦た一歩も動くことが出來ずに、五十八時間の間ヂッと齧り付いてゐたものなることは確かである。只だ彼等の遺棄したる黒麪麭、角砂糖の類が、隨分と我が兵士の枯腸を肥したくらゐであつたから、敵は糧食の點に於いては、別に不自由を感じなかつたものだらうと察せられた。

それで、連日眠らなかつた我等は占領後、眠くて堪へられなかつた外、何の慾氣も起らなかつた。彼處に一團、此處に一群、始めは誰が戰死したとか、誰がカウであつたとか色々な壯快悲痛なる話をしてゐたが、軈てコクリ〳〵と眠り出して、たわいも無く、敵の棄てた掩蔽下に横臥するのであつた。其處には敵の死骸もあれば、生々しい血が一杯に流れてゐたのに、それさへ一向無頓着で、食ひたいとも飲みたいとも何とも思はず、唯だ鼾聲雷の如くに起つて、折々何か思ひ出したやうにヒュウと空を切る敵の未練弾をば、最早蚊の唸聲ほどにも氣に留めなかつた。

戰爭の壯觀は彈丸雨注の中に於いて之れを見る事を得るが、戰爭の悲慘は戰後にあらずば之れを知ることが出來ぬ。公平なる「死」の影は、敵とも云はず、味方とも云はず、等しく襲ひ來りて、凄じかりし戰鬪のハタと止みたる草の蔭、石の間に、血潮に塗れて長く横たはれる無數の死屍。其の顏の奥には如何なる深き意味の潜めるやらん。予等が曩に南山に於いて死屍に逢うた時は、目を掩うて見るに忍びなかつたが、今此處でゴロ〳〵斃れてゐる屍は、素より酸鼻の狀を極めたものではあつたが、之れを見るとも昨日の如くに戰慄するのではなかつた。頭から顏へ掛けてグヂャ〳〵に碎かれ、腦味噌が湧き出してゐるものもあつた。腸が飛び出して血の滴つてゐるものもあつた。されど予等は爲に先の如くに眉を顰めるのではなかつた。是れぞ、前日の未だ戰場を踏まず、たゞ僅かに其の跡を弔つたばかりの時とは異なり、今は連日苦しみに苦しみ、戰鬪慘劇の場裡を往來して、其の酷烈なる殺戮の光景に慣れたせゐであつたらう。

而して又た敵兵の死屍に向つて同情を寄せた昨日の心は、今や一變して一寸憎惡の念を生じたくなつた。死したる者に何の罪かある。彼等も等しく其の任務の爲に斃れた勇士であつた。されど劍華彈雨の間に見えて、幾多の愛すべき部下を殺された我等の情よりすれば、此奴等岩に隠れ、穴から鐵砲を突き出して、我が兵を屠つたのであるかと思へば、轉がる銃や劍までも面憎く思つた。これは恐らく實際其の場に立つた

人でなければ考へ及ばぬことであらう。されど之れは謂はゆる端たない愚擬に過ぎぬので、健気な最期を遂げてゐた彼等敵兵の、いかにも勇敢なりしことは、之れを賞嘆せねばならぬ。能く數十時間の苦闘に耐へて、我が軍を採み惱ましたる其の働き振りは、流石は强兵を以て誇るだけの技術が確かに發揮せられてゐた。一人の敵兵の頭部を繃帶したまゝで、散兵壕に斃れてゐたのを見た。彼れは最初の一彈に屈せず、傷に繃帶を施して、依然戰闘を繼續してゐたが、第二彈を腹部に受けて終に斃死したものだと見られた。又た胸牆前に散亂せる敵屍は、我が突撃に遭うたとき、壕を跳り出して、我れに劍尖を挑したる勇士の名殘であつたらう。

或者は胸に妻子の寫眞を抱いて死んでゐた、其の寫眞は一面に血の塊で塗れてゐた。戰場に戀々として妻子の寫眞を抱くなどとは、女々しい奴、廢れた奴だと罵る者あらば夫れ迄だが、されど萬里遠征の空、殺氣滿々たる戰場の裡、而も孤軍途絶えて、故郷の雁の音信だに無き彼等の胸中には、果して何等の情が往來しつゝありけん。情を山川に寄せ、目を風月に委ねて、家郷を望むは人情の常、戰場に猛き武士とて此の情に何の差異があらうぞ？　最も勇敢なるものは最も柔和に、最も愛情あるものは最も剛毅なりとさへ、詩人は歌つたではないか。嗚呼、彼等露兵、身は虐政の笞に狩り立てられ、家を去りて萬里の異郷に苦厄を嘗む、其の心事や誠に憐むべきではなきか。

戰爭が一先落着すると、予の從卒は眞先掛に敵の雜嚢一個を拾つて來た。之れを開けて見ると、たゞ支那土民の服が一着押込んであつた。予は實に意外の感をしたが、然り、之れなのだ、曾て警戒線上へ、支那服を着した露兵の斥候の近接した事を思ひ合はすと、さては彼等は之れを貴重なる商賣道具として使用してゐたのだな、イザとなれば直ぐに早替の藝當をやるのだなと心付いた。米國獨立戰爭の時に英軍の歩哨が、山羊の皮を被つた敵の爲に、每夜殺されたと云ふ事であるが、露兵は正に此の故智を襲うたにも似たり。偵察の爲に彼等は如何なる狡猾手段を廻らすかも知れなかつたのだ、戰場には決して正味の露兵ばかりは出て來ぬ。化物も折々飛び出したとは、寧ろ一奇ではないか、戰場の跡には又た彼等の使用したと思はるゝ、日本國旗も落ち散つてゐた。

扨て機關銃であるが、これぞ我等の最も恐るべき火器であつた。此の度の戰闘の後で破壞せる機關銃を分捕つたが、それを見ると、略ましの仕組は、楯とも見るべき厚き鐵板を通して照準を取り、上下又は左右に動かしながら引金を引くと、自動的に一分間に六百餘發の彈丸が繰り出されるのであるから、丸で彈丸の棒が銃身から出るやうなものである。又た恰も唧筒で水を撒くやうに、動かし方次第に依つて、廣くも狹くも、遠くも近くも彈丸を發射することが出來る。それであるから、一度機關銃の掃射の標的となつたなら、續けさまに三發でも四發でも同じ處を貫かれて、大きな疵口を開くのである。其の彈丸はと云へば小銃彈と同じものであるがそれが長い一連のヅック製の帶に幾發となく插入せられてあるので、此の帶を機室に裝塡するなら、活動寫眞のフイルムが旋轉するやうに、瞬く間に無數の彈丸が飛び出す。其の凄じい氣味の惡い音は、近くで聞けば、夜更けてカタ〳〵〳〵と響き、遠くで聞けば、人の寢靜まつた頃に、遠く隔つた處の鍛冶屋の鐵槌がタッ〳〵〳〵と鳴るかと同じやうだ。敵は之れを以て無二の火器と頼み、防禦上には實に多大

の殺傷力を有してゐたのである。露軍の又た之れを使用するに巧妙なるは大いに驚くべき事で、我が兵が突撃して、五六間と云ふ處に迫り、將に喊聲を揚げんとする瞬間に、彼等は例のカタ／＼を振り廻す。すると薙いで掃いたやうに、忽ち斃死部隊の黒山を築くので其の效力や實に多大であつた。此の太白山の戰に、我が第三中隊、決死斥候の一兵卒にて、兵頭なる者が占領後敵の陣地内に斃れてゐたのを發見したるに、彼れが身には正に四十七彈を受けてゐて、右腕のみでも二十五發であつた。又た隣接聯隊の某兵卒は七十餘彈を蒙つてゐた。機關銃の殺傷力の莫大なることは此の通りであつた。斯の如くに數十彈を受けてゐるものに對しては、創の名稱を一々數へ立てる事も出來ぬので、軍醫は之れに全身蜂巢銃創なる新名稱を附してゐた。我が軍が一たび敵の陣地に向つて攻撃を開始するや、最も多く苦しめられ、最も多く惱まされたものは、孰れの戰鬪に於いても、實に此の恐るべき機關銃であつた。

此の陣地内には敵の軍犬が四五頭戰死してゐた。逞しき筋骨の、茶褐色の毛の短い、又た額の鋭い犬であつて、我が砲彈の爲に見事に殺され、畜生ながらも名譽の討死を遂げたものであつた。敵は平素よりして軍犬を訓練して、戰場に於いては之れを使役し、時としては步哨の勤務さへも取らせたとの事であつた。

予は慘烈なる戰場の跡を一々詳しく見廻つて、一帶の地形が如何にも都合よく、而して其の配備の如何にも堅固なるに、兎にも角にも能く之れを占領し得たるものかなと、我れながら寧ろ怪しまるゝばかりであつた。我が工兵の掘り出した地雷も幾個となく並べられてあり、鐵條網も破壞せられてあつた。敵は此の戰に非常大の損害を受けたので、多數の死屍を陣地に、又たは退路に遺棄し、辛うじて收容し得たる死屍を牛車數十輛に滿載して、鶴家屯より旗嶺方面へ逃げ散つたのである。

予は今暫く悲慘なる戰場を離れて、此に我が軍が敵に那許りの感觸を與へたかを語り、又た嘆賞すべき一二兵卒を紹介せん。此の戰後に予等の部隊で、敵の師團長フォック將軍の手記したる紙片を拾つた。それを飜譯すれば次の如き意味の文句があつた。

「日本軍は前進を知つて退却を知らず。一の陣地に向つて一たび攻撃を開始するや、猛烈頑固に前進を續行するは、予も同意する所なれども、情況の之れを許さゞる時には、退却も却つて有利に導かれ得る場合勘からず。然るに日本人は常に損害の如何を顧みずして攻撃を持續す。日本の戰術書は退却に就いての研究を示さゞるものならん。」

果して野猪の勇か、我れは知らず。道播は我國古武士の擯斥せし所、今の軍人も亦た進取あるを知つて退却あるを知らず。之れを卑怯と云はゞ云へ、敵に後を見するは武士の恥づる所、之れ實に日本國民の本領である。敵將をして此の言を吐かしめたるは、即ち我が軍の決死百鬪的の精神を表彰したるに外ならぬのである。我れの百戰百勝は退却を知らざりしに基づき、而して退却も時として有利に導かれ得るてふ策術を信じて、豫定の退却を誇としたる敵は、畢竟幾許の有利なる戰鬪を交へたか？

敵將をして此の言を發せしむるに至りたる我が軍の士氣、兵士の精神を證せんが爲、茲に一二の例を擧げんに、二十七日の事であつた。松本祐市なる者、斥候となりて、銃砲火を冒して

前進しつゝありし時、フト頭部より流れ出づる血潮が顔に傳はつた。彼れは我れ知らず、「しまつた！」と叫び、續いて「しまつた！しまつた！」を七八回も繰返したが、遂にドッと倒れた。分隊長野本伍長は駈け寄つて、諸市を抱き起し、

「しつかりせい。」

と勵ませば、諸市は無念さうな目を開き、伍長の手を握つて、ニツコと笑みながら、

「ナニ大丈夫です。進んで下さい！」

と云ひ終るや、眠るが如くに息は絶えた。彼れは絶命せんとする刹那にも、なほ大丈夫と叫んで、他兵に前進を促したのである。

又た第八中隊に仙波と云ふ軍曹があつた。彼れは優れて勇敢なる分隊長であつた。過ぎし劔山の戰にも、先驅の功名を顯はしたる剛の者であつた。彼れは前進中絶えず、「仇はおれが取つて遣るぞ！安心せい〳〵！」と叫んで、敵彈を冒つて死に瀕せる部下を慰めつゝ、前進するを常としてゐたのである。されば部下は兄の如くに慕ふ仙波軍曹の傍で一所に死ぬる事ならば、毫も遺憾は無いと思つて、我れも我れもと軍曹に從はんことを競うた。小隊長はくた仙波を我が手足の如くに愛して、彼れ一人は百兵にも勝ると信じ、困難なる任務は、必ず此の軍曹を選拔して遂行せしめ、常に彼れの沈着と勇氣とに依つて成功してゐた。扨て二十七日の猛烈なる前進を始めると、彼れは其の部下の兵を手許に固く握つて、遂に前進し、例の如く、「仇はおれが取つてやるぞ！安心せい〳〵！」と、右に斃れ、左に躓く部下の死傷者に對して引導を授けてゐた。兎角する中、彼れ軍曹も亦た遂に小隊長の前で躓き仆れた。之れを扶け起さうと抱き上げたる小隊長の手には、生温かき血が傳つた。「アヽしまつた。此の軍曹もか……」と小隊長は痛恨の情に堪へず、

「しつかりせよ、仙波軍曹！分隊長！」

軍曹は喉元に込み上げる鮮血をプップと吐きながら、兩眼に涙を浮べて、

「小隊長殿！旅順が……」

彼れは軈て縡切れて、勇魂遂に此の土を辭した。「旅順が……」の一句は、自ら旅順で決戰するに及ばずして死するを遺憾に思つたのでもあらうし、又た旅順の一日も早く我が手に落ちん事を祈つたのでもあらう。命脈將に絶えなんとしても、誠忠なる仙波軍曹は、旅順の他さらに何事をも考へなかつたのである。

二〇　繃帶所

黄泥川大王屯の東北高地に、第一發の火蓋を切つてより此の方、戰鬪の焔に熱せられて、餘事を考ふる遑も無かつた予は、今や友人安井軍醫の身の上を思ひ出でて、彼れは無事に此の度の戰鬪を經過したか、戰後幾千の傷者に對して、朱に染みながら、之れが手當に、目の廻る程でゐるであらう、などと獨言ちつゝ、物淋しき二十八日の夕間暮、雲行き惡しき空合を眺めながら、今夜の露營地と定められたる太白山下細流の邊、楊柳の蔭を歩みつゝあつた時に、一人の將校が靴の踵をカチンと音して立止まつた。

「安井君か！」

「櫻井君か！」

「元氣でゐたか？」

二人は握手して、互に分れたことを話の始めとして、それより戰鬪の劇烈なりし事、悲慘なりし事など、悲しく、また嬉しく語つた。

先に負傷した松丸大尉も亦た此處に在つて、彼の刀身に圓窓を貫かれて「く」の字なりに曲つた軍刀を眉にして、戰鬪の模樣を話してゐた。

予は安井軍曹に才ねるに繃帶所に於ける悲惨の光景如何を以てしたれば、彼れは詳に當時の状を縷述した。

此の戰鬪中、敵の砲彈は絶えず、假繃帶所に充てたる民家の附近に落ち來つて、其の危險なりし事は一通りでなかつた。或る時の如きは砲彈が屋根を突き抜いて、内庭で爆發したため、傷者の大部分は粉微塵に碎け、壁や柱には血の塊、肉の片が附着して、目も當てられぬ惨状を呈した。又た或る時は、擔架卒がヤットの事で戰線から收容して歸つて庭前へ下す間も無く、其の傷者は敵彈に中てられて即死してしまつた。彼等は戰鬪線にて花々しき働をなし、名譽の傷を負うて還つて來てから、この不憫極まる最期を遂げたのである。敵彈は實に何處までも追つて來て、我が勇士を殺したのである。

繃帶所の惨烈なる光景は、到底名状すべからざる事で、地獄とはコンナものであらうかと想はしむるのであつた。負傷者が戰線から送られて來るや、誰れ彼れの區別無く、軍醫や看護手は片端から、直ぐに應急手當を施す。戰線の銃砲火が熾烈の度を加ふるに從つて、負傷者はいよ／＼増加する、手當が中々間に合はない。此方で手當をして居る中に、彼方で息が細くなり、顏色の變つてゐる者が目に付く。それッと云つてブランデーの數滴を唇に落してやる間に、此方では早や息が切れる。一人に救急手當を濟ましたかと思ふと、其の内に又た十人も十五人も舁がれて來る。軍醫の身邊は瀕死の負傷者を以て一杯に埋められる。軍醫は襦袢一枚となつて、全身血糊に染みながら、繃帶を巻いたり、手足の折れた者には副木を副へたりする。素より一時間に合せの手當ではあるが、其の忙しい事と、悲惨の光景とに逼られて、精神も錯亂せんばかり、氣ばかり急れども、業は一向に捗どらぬ。

されど此の家、彼の庭に横たはれる者は皆一廉の剛の者ばかり、繃帶所の手當が行屆かぬからとて、何の不平を訴ふるでもなく、何の望むところがあるでもなく、而も戰場の熱が醒めてゐないから、戰線の喧噪が耳朶に響き、飛彈が空を掠めて響くと、彼等は其の身の痛手を忘れて、再び戰線へ駈出さうとする、軍醫は周章て之れを止めると云ふ有様。頭部を撃たれて精神に異状を呈した者は、何事か呟きつゝ足元危く彼方此方を走り廻る。軍醫が、之れを引き押へると、「コラ露助」などと囈言吐いて狂ふ。狂つた末は出血夥しく、遂に程なく息を引取るのであつた。

二十七日は殊に負傷者が多かつたため、繃帶所の前の畑地は、端から端まで一杯に彼等を以て埋まつてゐた。一人を手當してゐる間に、後から軍醫のズボンの裾を引くものがある。振返れば、軍醫の膝に凭れかゝつて、スヤ／＼と子供の眠るが如くに息の絶えるものがある。右からも左からも引張つて、「迚も助からぬから、早く殺して下さい。」と頼むものがある。

かう云ふ事もあつた。一人の軍曹が折れたる足を引ずりながら這うて來て、涙ながらに、

「軍醫殿、あの向うに居るのは、私の部下であります。息が苦しさうですから、最早駄目だとは思ひますが、モ一度診てやつて下さい。」

と云つた。彼の軍曹が部下を愛するの一念に、我が重傷の痛みを忍んで、人の爲に救を乞うた其の心根は實に神々しいではないか！ 又

た息の將に絕えんとしても、早く癒やして戰場へ出して下さいと云ひ、自分は宜いから、戰友の手當をして下さいと賴んだのも少くない。其の美しい心は何を以て譬ふべきであるか？ 彼等勇士は氣息奄々として顏色蒼白に變じ、血に塗れ砂に蔽はれてはゐたが、其の確乎たる武士的精神は、決して流血と共に逝し去るのではなかつた。

何某と云ふ兵卒は、二十七日の朝方、ボンヤリした顏付で繃帶所の前に佇んでゐた。軍醫は彼れを見て、「どうしたのか？ 負傷したのか？」と尋ねたが、彼れは何事をも言はず、唯だ俯頭を震はしながら、モグ／＼してゐるのみであつた。軍醫は更に「どうしたのか？ どうしたのか？」と言つたが、彼れは猶ほ何事をも答へなかつた。軍醫は之れを訝り、彼れの顏を瞶つてゐる間に、フト氣付いたのは、其の額に少しの血が付いてゐることであつた。善く／＼見れば、彼れは右の蟀谷から眞一字に敵彈の貫通する所となつて、目も見えなければ耳も聞えないのであつた。斯くと知るや、軍醫は應急の手當を施さんとて、彼れを勞りつゝ、其の手を取つたが、彼れは齒をギリ／＼鳴らして、「仇を……」と云つたきり、五體は忽ち固くなつて、此の世の別れとなつた。彼れは其の死の逼れるをも知らで、これしきの事で斃れては、如何にも無念や殘念やと思ひ、齒ぎしり嚙んだ其の心は聞くだに涙のこぼれる健氣さ！

或る時かう云ふ事もあつた。一名の負傷兵が大手を振りながら繃帶所へ驅け込んで、

「今が激戰の最中で中々愉快です！ 今直ぐに占領です。」

と云つたので、軍醫は、

「お前は負傷したのか？」

「腰を少々やられました。」

軍醫は戰鬪の經過が大に氣懸りであつたので、

「敵を大分殺したか？ どちらに死傷者が多いか？」

彼れは此の時聲を低くして、

「矢張、我軍の方が多いのです。」

軍醫はさうかと聞き流して、彼れの腰にあると云ふ傷を檢したところが、其の傷の甚大なるに驚かざるを得なかつた。砲彈の爲に右背部の肉が殆ど全く削ぎ取られてゐたのであつた。彼れは滾々たる血潮が彼れの生命を奪ひ去りつつあるを知らず、頗る壯快に、頗る元氣に戰況を物語つたのである。軍醫は彼れに「ヨシ、繃帶が出來たぞ、後へ下れ！」と命じて立たせたが、彼れは最早歩行する事が出來なかつた。戰鬪の熱は斯の如き重傷者をも一旦は活動せしめる。然しながら衞生隊に收容せらるゝと、猛き心が弛むとでも云ふのでもあらうか、俄かに傷が痛み出すものだ。其の實例は多く之れを見た。而して予も後日亦た實に其の一人であつた。戰場に倒れてゐた一日間は少しも傷の痛みを覺えなかつたが、收容せられて繃帶を施された時の痛さ、こんな事なら何故死ななかつたのだらう……。萬死に一生を得たとは實に予の事であつたのだけれど、予は決してそれを有難く思はなかつた。天は何故に予を一思ひに殺さずして半死半生の苦痛を與へたのかと恨んだのであつた。

戰鬪の間、此處彼處に翻へる赤十字旗は、博愛の風を學んで、戰線に倒れたる負傷者を拯ひてゐた。[illegible]の下に[illegible]を避けた勇者猛者は、此の恩惠に浴せず、[illegible]に倒れて[illegible]が、身に餘る鄭重な手當を受けるとは、死んだ勇士に濟まぬ譯のやうだと、予は何もさう考へ

てゐた。

　戰鬪が開始せらるゝと、彼の擔架卒たる者が、擔架を舁いで戰場を往來し、傷者を拾集して、繃帶所へ運搬する。彼等も亦た直接戰鬪に從事する兵卒と同じく、勇敢且つ機敏でなければ、其の任務を達成する事が出來ぬ。彼等は劍華彈雨の間を冒し、傷者を尋ねて、之れを安全なる地に收容することの、博愛にして大膽なる行動に任ぜられてゐるのである。己れの乏しき食を折半し、貴き水筒の水を配分して、勞はり慰めつゝ、輸送するの任務に當つてゐるのである。擔架卒の其の勞、其の德は特筆して感謝すべきものではないか。

　內地の病院に轉送せられたる傷病者は、白妙の病衣に包まれて、慈愛忠實なる醫官又たは看護婦に看護慰藉せられる。予も正に斯る厚遇に感泣した一人であつた。內地では此の如くであるが、戰場では果して如何？折しも夏の事なりければ、幾千とも數知れぬ傷兵は、蠅の大軍に攻め立てられる。口や鼻に蛆蟲が湧いてウヅ〳〵してゐても、手の利かぬ悲しさに、之れを除き去ることの出來ぬ者もあつた。さりとて之れを除いて惠むべき看病人は、傷者百人に對する纔かに一人位であつたから、手が屆かぬ。而も炒り付けるやうな白日の炎天にも、夜陰の雨露にも、一枚の被ふ物さへ無くて、全く露天に曝されてゐた。大小便の自由も利かず、或る時の如きは、傷者を小川に侵し、藁箒で大便の汚れを洗ひ去つて、始めて繃帶を施したことさへあつた。これと云ふが全く、戰鬪の經過上、意外の多數の傷者を出した爲なので、蓋し止むを得ないのである。一時でも早く手當して、一日でも早く後送して、早く快癒させて、又た之れを戰鬪員に加へねばならぬとは、その衝に當る者の熱願ではあつたが、如何にせん、二百人を收容し得る一野戰病院に、千人以上の傷者が輻輳したやうな場合であつたから、當然斯の如き慘めな狀態となつたのである。

二　長驅追擊

　天嶮を誇つた太白山の堡壘すら、遂に我が軍の拔く所となつたので、流石の露軍も、今は我れの甚だ侮り難き勁敵なるに驚いたであらう。されどなほ彼れの背後には鐵嶺要塞の本防禦線を控へてゐたので、彼れは如何でか僅かに一二の戰敗に屈すべきや。敵は更に退いて千大山一帶の高地の防禦工事に着手して、第三次の抵抗を試みんとしてゐた。而も急速に其の工事に從事してゐるのであつたから、我が軍に在つては、一日たりとも、攻擊を忽せにすることは出來ない。一日を忽せにせば、即ち敵に一日の利を與へて、其の險を增加せしむるのであつた。されば我れは連日の劇戰に疲れたる足を休むる暇も無く、恰も海嘯の勢を以て、長驅敵の備への尙ほ薄きに乘じて、彼れを要塞內に壓迫せんがため、直ちに追跡の隊形を以て攻擊を開始した。二十九日は彈藥の補充をなし、隊伍の整頓を行ひ、且つ敵狀の偵察に勉めて、愈々七月三十日を以て、各隊ともに前進を起すこととなつた。

　我が聯隊は二十九日の夜、何家屯附近の谷地に假の露營設備をしてゐたが、夜半三時に、旅團司令部からして、攻擊命令受領の爲急いで來いとの事であつたから、予は即ち一名の傳令卒を從へて、河原の一里半を驅け、王家屯なる司令部に到着したのは、丁度四時前であつた。然るに午後五時攻擊開始と示されたから、急い

で命令を筆記し、歸路に就くべく韋駄天走りに飛び出した。攻撃時間に遅れたとあつては騒動だ。斯ういふ時には輕裝に限る。傳令之を持つて來いと予は軍服をスッカリ脱いで渡し、シャツ一枚となり、拳銃と軍刀とのみを摑んで、宙を飛んで駈け出した。夜明にはまだ間があつたので天地は暗い。方角を違へては大變だが、此の河原を眞直に突き拔けさへすりや歸れると、只だ一目散に駈けた。途中で糧食の運搬に當つてゐた三島主計の聲を聞き付けたので、予は走りながらに、

「飯どころの騒ぎぢやありません。今から又た攻撃！　攻撃！」

と云ひ終つた時は、既に遠く後で主計の聲が聞えたくらゐであつた。幸に方角も誤らず、道も迷はずに、露營地へ歸つたのは、正に四時と五十分であつた。直ぐ樣集合を命令して、攻撃命令は達せられた。然るに先に予が軍服を預けた傳令は未だに歸つて來ない。夏の曉天の事なれば、これも却つて涼しくて宜いとは云ふものの、裸では誠に困る。首尾能く任務は遂げたといふものの、裸の戰もなるまい。それで更に一人の傳令を後方へ送つて、先の傳令を搜索させたが、中々に見付からなかつた。兎角する内にモウ前進を始めることになつたので、予も甚だ閉口してゐたが、眞晝になつて彼れは歸つて來て、予も裸合戰の不樣だけは免れた。今から考へると實に滑稽沙汰だが、其の時は予も中々心配であつた。

斯くして最も痛快なる前進攻撃が、豫定の如くに行はれた。此の戰闘は全く野戰と同樣の感じのしたものであつた。平時に野外で演習する如く、第一線にては散兵がズンズン前進する。後から豫備隊が續いて行くといふ工合であつて、要塞戰にては中々見られぬ戰闘であつた。是れまでは奇岩怪石を攻撃地帶とし、近く敵に齧り付いてゐて、時機を見て堡壘内へ躍り込むのであつたから、正規の隊形を保つて攻撃する事は無論出來なかつた。然るに我が軍が一度太白山を乘越えてより後、逶迤起伏の地形であつたため、此の度の如く、未だ曾て踏まざりし愉快な野戰的戰闘を實施することが出來たのである。殊に我が軍は敵の虚に乘じて、急速に襲撃に轉じたのであつたからして、敵は當初頑強なる抵抗を試みたかなれども、漸次一歩一歩と後退を始めた。聯隊は二個中隊を豫備とし殘しただけで、餘は全線擧つて第一線となり、漸次に包圍の隊形を取つたから、敵は右に避け、左に迎へ、中堅破るれば左右に開くの狀で、各個各個に擊破せられた爲、勢ひ退却せざるを得なかつた。

最後の陣地へ到着した前、予は軍旗を奉じて、高粱畑を分けてゐたが、丁度其處で内野少佐に邂逅つた。炯眼鷹の如く、頰骨高く張れる少佐は、軍刀を杖ついて岩角に立つてゐた。内野少佐とは出征前まで同じ聯隊本部で職務を執つてゐて、予は最も多く其の感化を受けた一人であつた。少佐の明快なる戰術上の意見と、確乎不拔の精神と、又た凛々犯すべからざる風采とは、予の最も欽慕する所であつた。果せるかな、太白山攻擊の最苦戰中に、告別の辭を我が聯隊長に送り、二個中隊の精鋭を選つて、太白山の東北角に向つて率先突進し、先づ敵の頭上に一大痛棒を加へて、他隊の攻擊動作を容易ならしめたる當時出色の隊長である。今此の勇士と高粱畑で出逢つた時、相見ざる事既に久しかりし予は、昨の少佐の武者振を想見したと共に、又た懷しさの情に堪へずして、「内野少佐殿」と叫んだ。少佐は予を一瞥して唯

だ、軍旗の光を揚げよ」と奨勵の言葉を與へられた。予は覺えず感謝の低頭をなして、此の際閣下の如くに少佐の壯快奇拔なる談話を聞くの遑も無く、今相見えて、忽ち永久の別れとなりぬべきは戰場の習ひなれば、予は纏綿たる名殘を惜しみつゝ更に前進した。

此の時敵は我が緊迫に堪へ兼ねて、ジリ／＼後退をなし、遂には龍頭附近の最後の抵抗線を棄てゝ、大孤山方面に退却した。カウなると追撃だが、此れほど壯快なるものはない。逃げる後から追ひ撃ちにするのだから、敵は秋風に木の葉のバラ／＼と散るが如くに倒れた。かゝる愉快事たるや、大方は苦戰難闘の後に得らるべき賜物なのであるが、今日は僅々三十餘名の死傷者を出しただけの戰闘の後で、此の追撃となつたのである。かやうな事は又たと望まるべきものではなかつた。

此の日正午、我が軍は全く豫定の陣地を占領した。此は土城子南方一帶の高地より、南は大孤山東方高地に至るまでを佔有する事が出來た。而して今此の占領陣地に立つて、雙眼鏡を手にすれば、レンズに映じた所のものは果して奈何なる光景であつたらうか？

窺し見る、難攻不落と誇りたる鐵圍の旅順要塞、其の本防禦線は連綿として、南は黄金山より起つて、北、雲烟の間に連亙し、見渡す限り砲壘ならざるなく、散兵壕ならざるなく、ニュッと頭を突き出して、此方を睥睨するが如く、今にも飛び懸らんずる勢を示しておるものは、即ち重砲である。點々八重十重の線を引いて、遠く霞めるものは即ち鐵條網である。敵の斥候らしき者、又たは展望哨らしき者も、點々此處彼處に見える。二十人三十人と固つて鐵條網の作業をしておるのも見える。嗚呼、之れぞ實に予等が最後の決戰地に非ずや？ 寤寐忘るゝ能はざりし檜舞臺ではなきか！ 千秋の恨を吞んで、「旅順が……」と云ひ、「仇を……」と叫んで絕命したる、彼の勇士等をして、今猶ほ生きてあつて、此の光景を見せしむるを得たらば、其の喜び如何許りなりけん！

予等は此の日より、龍頭附近に滯留して、先づ敵の右翼前に當れる大小孤山を攻略したる後、之れを攻撃の據點として、更に本防禦線の攻撃に着手せんが爲に、茲に于大山一帶の高地に沿うて堅固なる工事を施しつゝあつた。

予は今茲に謹んで記す。畏こくも 大元帥陛下は、七月二十六日より同三十日に亙れる戰闘に對して、左の勅語を下し賜はり、微小なる予の如きも之れを拜するを得るの至大なる光榮を擔つた。

攻圍軍ハ旅順要塞ノ前進陣地ニ對シ、屢バ險要ヲ冒シ、劇戰數日ニ亙リ、遂ニ敵ヲ其ノ本防禦線ニ擊退セリ。

朕深ク其ノ勇武ヲ嘉ス。

皇后陛下よりは、又た次の令旨を下賜せられた。

攻圍軍ハ旅順要塞ノ險ヲ冒シ、連日猛擊激戰、次テ其ノ功ヲ奏スル趣 皇后陛下ノ聞ニ達シ、我ガ將校下士卒ノ忠勇ナルヲ、深ク御感賞アラセラル。

軍司令官は又た此の令旨に對しそれ／＼奉答文を捧げられた。微功だに無き草莽の卑臣、如何にして克く宸襟を安じ奉ることを得べきか。皇恩の萬一に報ぜんこと甚だ難し。連日の劇戰も何かある。然るに畏こくも優渥なる勅語令旨を拜するに至つては、予等唯だ恐懼慚愧禁ずる能はず。誰か聖慮の深大仁慈なるに感激せざりしぞ？ 幾多の忠勇なる陣歿將卒も、若し靈あらば、地下に之れを拜して感涙を濺ぎし

ならん。

聖勅下れり、將卒爲に感銜し、士氣愈々旺盛なり。峻嶮前に横たはり、勁敵之れを守るとも、我が大君の爲ならば、いかでか之れを破つて叡慮を安んじ奉らざるべきや！

三　大孤山の攻略

旅順要塞の東海岸に方り、突兀として天空を衝き、巉巖層々相重なりて崛起し、遠く之れを望めば老虎の嵎を負うて踞するに似たるもの、之れ即ち大孤山にして、其の南に連りて、近く螃蟹嘴砲臺と相對せるもの、即ち小孤山である。大孤山は標高百八十八米突の孤立せる山にして、其の西南面は旅順の諸要塞を俯視し、北西面は我が左縱隊及び中央縱隊の包圍線内を瞰下し、攻圍の作業、各隊の行動、砲兵の位置等一々之れを目睫の間に收むる事が出來る。而して我れに面せる斜面は殊に巉巖絶壁の險を成して、殆んど攀登すべからず。恰も嘗日の劍山、太白山に髣髴せし形勢に似て居た。大小孤山は斯の如くに敵味方の陣地を瞰視すると同時に、又た兩陣地の目標視線より免るゝこと能はざるものであつた。我が師團長は大孤山を評して斯く言はれたことがある。

「大孤山は夫れ雞肋の如きか。之れを敵の手中に委せば、我が陣地を瞰射せらるゝの不利あり。之れを手中に收むれば、敵より仰射せらるゝの危險あり。取るに難くして、棄つるは惜しきものぞ。」

實に險要斯の如き陣地、之れを拔くこと固より容易ならざるのみならず、幸に萬難を排し、之れを占領し得るとも、此の陣地は、附近に屹峙せる敵の各砲臺より砲火を集中せらるべき地點なるを以て、之れを維持するの難きは、之れを奪ふの難きよりも更に難きものがあつた。されば帷幄の議は、地形上、戰略上、夙に之れを攻略するの必要を認めて居たが、只だ時機の到來するを待ち、敵の砲擊の絶ゆること無かりし間を、忍びに忍びて唯だの一發も應酬せず、專ら内部の攻圍作業を急いで居た。

八月七日に至りて、愈々前進攻擊と決定せられた。我が野戰砲兵及び攻城砲兵即ち榴彈砲及び臼砲を有する一隊は、既に敵に隱して、其の陣地を構成して居た。此の日午後四時頃大小孤山一帶の陵線を目標として一時に砲門を開いた、砲聲殷々として白煙渦卷き揚り、高く天空に漲るや否や、大小孤山の敵壘は固より、後方なる盤龍山、鷄冠山より螃蟹嘴に至るまでの各砲臺は齊しく起ち、砲火を以て我れに應じた。見渡す限り一面は忽ち漠々たる硝煙を以て掩はれ、萬雷の一時に落つるが如き響は、暗澹たる空の、今にも雨の降り出さんずる重き空氣に傳つて、ドロ〱〱といふ音、暫時も止む事なかつた。殊に我が砲彈が大孤山の岩角に突當るや、淡黄白色の閃光を放つて、岩を碎いて飛ばす、其の凄じさ、其の壯快なる、之が即ち戰爭の一大壯觀といふものである。然れども敵の砲力の我れに優りしは勿論、而も險要を恃んで以て、我れを見下しに擊つたのであつたから、我が砲兵は非常の苦戰であつた。然し乍ら敵の砲兵は我が軍が谷底に配備した臼砲及び榴彈砲の陣地を知らなかつたものの如く、專ら砲火を縱隊固有の砲兵及び我が步兵に集中したのであるから、臼砲は一つも障害を受けず、日沒に及んで其の效果益々現はれ、大孤山の敵砲は爲に稍や沈默したかの如くに見えた。而して、我が本隊は、午後四時に至つて警戒地を引

排つて前進し、砲兵の效果の現はるゝの時機に乘じて、大孤河を渡り攻擊に轉ずるの命を受けてゐた。

予は今此の激戰を記するに先だち、予自ら戰に臨まんとして、如何なる考を起し、また如何なる事をなしたか、それを少しく話したい。之れも強ち予のみにあつた覺悟といふ譯ではなく、戰鬪前に於いて、誰れしもあるべき事であつたから、恥晒しも厭はず、此に述べる次第である。予は五月二十四日に、足を遼東の地に入れて以來既に三閱月、數ならぬ身を以て、陛下の御身代、聯隊の生命たる軍旗を奉ずるの重任を負ひて、劍山に、太白山に、又た干大山に、硝煙彈雨の中に立ちし事、前後三回、然るに幸か不幸か、未た微傷だに蒙らず、幾多の勇士は華々しく軍旗の下に斃れ、軍旗も亦た敵彈に劈かれて、尺寸の地に一兵の生命を奪ひたるに、抑々武運の拙きが故か、予は尚ほ全きを得たり。然るに此の時既に予が戰死の報は連りと郷里へ傳へられ、予が負傷の虛說も亦た新聞紙上に掲げられたのである。予は戰地に於ても亦た之れを耳にした。其の一說は、上陸の際風波險惡なりしがため、端舟は遂に轉覆して、身は狂瀾に卷き込まれ、口に軍旗を啣みて數町を泳ぎたれども、怒れる浪は遂に予を海底に葬つたと云ふ事、又た他の一說は、上陸後直ちに敵と衝突して、戰死を遂げたと云ふ事。斯の如き訛傳は、ありもせぬ予の手柄を吹聽してゐた。其の後も受けもせぬ負傷の詳報が、屢々一犬虛を吠えて、萬犬實を吠ゆると云ふが如くに傳へられてゐたが、己れを省みれば、未だ寸功無くまた微傷無し。何たる腑甲斐無き事ぞ。予は斯く思ひつゝ常に煩悶の情に堪へなかつたのである。さらば此の度大孤山の戰にこそ「唯だ一死ある而已」と覺悟し、攻擊の前日、從卒を招いておれもこの度こそはドウヤラ戰死らしい。お前にはこれまで那許り世話になつたか知れぬ。おれが死んだと聞いたならば、それがお前に對する恩返しでもあるのだと思つてくれ、お前も亦た立派に戰をしてくれよと云ふと、從卒は淚ぐみて、少尉殿が死なれるならば、私も死にたいと健氣に答へる。予は更におれは遺骨を納める箱を造つて置くから、おれの骨を其の箱に納めてくれ、若し骨も取れない程立派に討死したなら、爪と髮とをおれだと思つてくれと云つて、彈藥を挾んであつた板片を集めて、從卒が削つた竹釘で打ち合はし、三寸角ほどの不恰好な小箱を造つて、其の中に、爪と髮と、又た遺骨を包むべき半紙や、蓋を仕舞ふ竹釘まで遺れなく添へて容れた。箱の表面には「故」の字を冠して姓名を記し、釋賢誓といふ法名まで書き添へた。

嗚呼予の入るべき骨箱は用意せられたのである。今は一死以て君恩に報ぜずんば、生きて何の面目かある。然るに予は、遂に此の箱に白骨を納むるの榮を荷ふこと能はずして、其の箱は徒らに物笑ひの種となつた。

予は此の夜一書を認め、東京なる家兄に寄せて戰況を報じ、且つ明日は大孤山の攻擊なり、予固より戰死なり、兄上、姉上、御機嫌克く」と暇乞を告げた。而して此の日又た予は實に家兄の書を得た、其の中には、左の一句が記してあつた。

「一名譽を思ふな、戰功を思ふな、唯だ汝の義務を守るべし。

ネルソンがトラファルガーの海戰に名譽の戰死を遂ぐる時、告げて曰く、

"Thank God, I have do no my duty."

天に謝す予は予の義務を盡したり」と。」

予は將に進撃の第一步に轉ぜんとして、實に此の語を得た。而して予は之れが爲に多大の激勵を得、一層の覺悟を新たにせられた。

時は維れ八月七日午後五時、大雨沛然として降り、砲聲は雷を成し、さらでだに暮れ行く空の淋しさは、暗澹として物凄く、迷霧咫尺を辨ずべからざるの天地となつた。其の時予等は大孤河の前面丘阜に集合して、イザ前進せよとの命令の早からんことを待つてゐた、雨は益々降りしきり、空は眞の闇、時々照らす敵の探照燈は、山々谷々を白く青く隈取つて、我が歩兵の前進を阻礙する。瞰制射撃の篠突く彈丸は、豪雨と混じて異響を傳へつゝ、刻一刻と烈しく注いだ。而して一枚の外套に包まれてゐた林少尉と予とは、時々思ひ出したやうに、語を交へるのであつた。

「何時貴様と別れるかも知れぬぞ。」と林は何か覺悟のあるが如くに改まつて云つた。

「さうだなあ。」

林は更に、

「長く貴様と一所に暮したな。」

最早發言を交ふるの暇無く、林と予とは右と左とに別れなければならなくなつた。彼れは予の親しき友で、故郷に在りし頃は、久しく寢食を共にしてゐた位の間柄であつた。又た嚢に太白山最後の突撃に、先づ劍を揮つて敵壘に躍り込んだ者は、實に此の林少尉であつた、而して今此の戰場にて右左に別れた瞬間は、實に彼れと我れとの最後の見納めであつた、其の握手は最後であつた。

我が砲兵は前述の如く、日沒より追々に效果を奏したと見えたから、茲に我が隊は愈々前進となつた。狂雨は愈々益々劇しく、行手は泥田と變じ、行進頗る惱みたれども、膝を沒しつゝ前進した。然るに沈默と思ひの外、大孤山の敵砲は濛雨の內に我が前進を發見するや、一齊に砲火を放つて其の勢を盛り返した。我等は強雨を冒し、彈雨に浴し乍ら前進して、大孤河に達すると、濁流滔々として漲り溢れ、其の深さ幾尋なるや測り知られぬ。是れぞ敵が此の猛雨を利用して、下流を堰止め、氾濫を作りて我が前進を阻止せんとしたのである。されば、如何に我が軍剛勇と雖も、この障碍に對しては稍や躊躇せざるを得なかつた。敢て之れを冒さんか、乃ち彈丸に斃れずして、只だ溺死者を積み重ねるのみであつた。然るに我が工兵の決死隊は猛然として此の濁流中に跳び込み、一擧に其の堰を破壞して氾濫を潰決したから、見る見る滔々たる流水は減退して、我が兵の前進を許した。是に於いて乎、全軍河に投じ、流を亂し、威を揮つて驀進した。されど敵彈は風雨と共に益々猛烈にして、中流に斃るゝもの算なく、死屍相重なつて左右なく前進すべくもあらず。然るに我が軍は死屍を橋梁となし、之れを踏み、之れを越えて、多大なる戰死部隊を殘しつゝ彼岸へ達した。

我が隊は斯くして漸く大孤山の麓に達したるも、なほ是れより更に鐵條網を破壞し、地雷を踏み破らねばならなかつた。一難過ぎて又た一難來るの狀であつた。されど、今は一歩も猶豫すべき時にあらざれば、岩を攀ぢ崖を辿つてジリ〳〵と前進したが、一寸先きも見えぬ暗さと、益々狂ふ暴雨とには那許り苦しめられたことか。洪水を渡り強雨に浴した爲に、全身は水浸となりて、運動も任ならざりしのみか、漸次敵壘に近づくに從ひ、敵は頭上より霰彈を注ぎ、岩石を擲げ、木材を投じたから、我が躍進の困難は實に言語道斷となつた。隣接隊は既に

半腹なる馬蹄形の散兵壕に近づき、我が隊も亦た山腹の岩石に漸く足場を止めて、此の機に乗じて夜襲に轉ぜんと、これが準備をして居た。されど敵は絶えず探照燈を照らし、光弾を放つ等、凡そありとあらゆる方策を廻らして、我が襲撃を妨げたため、夜襲は到底不可能の事と決定せられ、此の上は拂曉を待つて攻勢に轉ずることとなり、今夜は敵と睨合つたまゝ、小休みなき雨に浴しつゝ天明の至るを待つて居た。

天漸く白みたりと雖も、前夜來の雨は未だ休まず、顧みれば大孤河附近の一面には戰友の死屍散亂し、且つ敵の眼下に在ることなれば、之れを收容する事は勿論、河を隔てて對岸に傳令を派遣することも出來なかつた。それにも拘らず勇を鼓して進んだ傳令は、餘さず敵弾に斃されてしまつた。今は殆ど策の施すべき無く、突撃の目的を成就せんことは、果して何れの時に在るかと疑はざるを得なかつた。大孤山の麓で倒れて居た飯野曹長は、腹部を貫通せられて悶え苦しみ、足掻きに足掻いて、傳令の通過する度毎に、手を合して、「殺してくれ、殺してくれ」と頼んで居たさうである。嗚呼今は如何にせばこれ等勇士を慰むることを得べきか、意徒らに焦せて時機の未だ到らざりしを如何にせん。それのみか鹽廠附近にはノーウイク以下十一隻の敵艦現はれ、背面より大小孤山に向へる我が歩兵に對して、猛烈なる砲撃を加へたから、我が兵は唯だ彼れの標的となつて、其の欲するがまゝに多くの生命を貢がざるを得ず、我れを蔽すべき地物あるなく、唯だ無念の切齒をなして睨んでゐたばかり、絶體絶命、前門に虎を防げば、後門に狼の進る狀態であつた。

二三　旭旗飜る

漠々たる砲煙は怒れる濤の如く、濛々たる驟雨は狂へる獅子に似たり、見あぐれば峻岳天際を摩して屹立し、木梢を傳ふ猿猴の巧も猶ほ攀づべからず。一歩を登れば一歩は更に危く、一崖に攀づれば一崖は更に險し、而して今や猛狡此の天險に據りて我れを待す。大孤山頂には、八面よりする我が砲火集注し、之れに對するに、彼れの前面には巨砲の紅舌を吐いて、火烟簇り揚るあり、背面には艨艟の波を蹴つて逆り來るあり。此の天險、此の鐵壁、我れの之れを陷れんことは、蓋し容易の業ではなかつた。されど不幸にして、之れを占領する能はざらんか、啻に我が軍が旅順要塞の攻撃の進捗は、茲で食ひ止めらるゝのみならず、而も其の攻撃の據點を失ふべし、故に幾許大の犧牲も、又た幾許大の困厄も、之れを厭ふべき場合ではなかつた。

扨も我が聯隊は、前夜以來、豪雨と銃砲弾とを浴びつゝ、空しく山腹に停止してゐたが、此の日午後三時頃よりして、我が攻城砲兵の、敵艦を砲撃して、一時之れを逃走せしめ、我が威力の益々擴大せらるゝに至りたるより、此の機逸すべからずとなつた。其の時、旅團長から、左翼隊は今より大孤山に向つて突撃を實施する筈なり、其の聯隊も之れと連繫して、北斜面に突撃せよとの命令に接した。これと同時に、左翼隊長よりも左の通報を受けた。

「我が聯隊は損害の如何を顧みず、今より突撃を實行す。貴隊も共に突撃を實施し、以て大孤山を占領せられんことを望む。」

此の大突撃命令が傳へらるゝや否や、兩翼再び起ち左右相應じ、我れは鬼神の勇威を揮ひ

て、彼れが魔王の嚇怒を意とせず、天險を犯し、砲火を冒して、攻めかけ攻めかけ、乘り越え乘り越え、喊聲轟々として敵中に突入した。敵は山上の大石を搖がして轉々墜下せしめ、爲に千仞の溪谷へ跳ね飛ばさるゝものもあれば、幾丈の岩石に壓潰されるものもあり、肉破れ骨碎け、喚き叫ぶ聲、狂ひ猛る音、慘たる其の光景や、實に此の世の態とも覺えられなかつた。鷄冠山及び二龍山より發射する重砲彈は、其の命中を過たず、山上一連に爆發飛散し、榴彈、地雷彈の榛束は、東西に亂れ南北に引き通うた。軈て萬歲の聲は、峰にも尾にも相應じて、山も搖がんばかりに起つた。何事ぞ、何事の起りしぞ？ 見よ。濛々たる硝煙の間に翩飜たるは、我が日章旗に非ずや！ 軍旗は既に進んで、山頂の岩角に飜つた。予等は之れを見て喜び極まつて泣いた。實に泣いた。

淡灰色の硝煙に包まれたる大孤山は實に我が有に歸した。されど此の嶮要の一度我が陣地の主點となりしや、敵の各要塞は、一齊に砲火を開いて、我が頭上に集中せしめた。水雷大の重砲彈は、汽車の唸るが如く、地鳴りの如く、空氣の大破動を起して飛び來り、轟然爆烈するや、白煙の蒸すところ怪光煌き、黑煙の起るところ岩石を碎く、地軸震駭し、死屍寸斷せらる。其の形勢や頗る不穩、占領部隊は殆ど其の位置を支ふるに難からんとし、剰へ敵は必ず逆襲を計るべきも、我れは山上に於いて如何にして之れを迎擊し得べかりしぞ。首を伸ばして敵の斜面を望まば、忽ちにして砲彈を見舞はれる。されば一歩も動くことが出來ぬ。唯だ只だ辛うじて石を積み岩を重ねて、我が散兵線を强固ならしむるに努めたのみであつた。山巓にあつた野砲六門を捕獲した後、之れが監視として立つてゐた某兵卒は、敵の一彈を喰つて、見ン事チリ〴〵に引裂かれ、只だ殘れる肉の一片のみが、予等の頭上を掠めて、後方の岩角にピッシャリと喰ひついた。又た一砲彈は我が密集部隊に落下して、一擧に二十六人を微塵に粉碎した。又た之れが爲に崩壞したる岩石は、三人の者を生きながらに埋葬し了つた。

こゝに瀨川中尉は、此の日敵彈の爲に腹部を貫通せられたが、此の夕べ生命の既に殆く見えたるより、從卒など寄添ひて彼れを介抱してゐた所へ、斯くあらんとは夢にも知らぬ其の兄瀨川大尉が、偶々此處に來合はした。

大尉は靜かに弟に近づき、

「オイ國男：：」

兄たる大尉の聲が中尉の耳に響くと、豫て思ひ侘びてやありけん、苦しき息の中にも眼を見開き、微かに大尉の顏を打守り淚を浮かべつゝ緊と其の手を握り暫時は言葉も無かつた。軈て大尉は、

「國男！ 能くやつてくれた。何も言ふことは無いか？：：」

大尉は弟の顏を拭ひつゝ、水筒の水を傾けて口に注ぐと、中尉は打頷き、

「兄さん：：：」

と微かにたゞ一聲を名殘に遂に黃泉の人となつた。噫、兄なる人の心の中や如何なりけん。側なる人々すら竊かに哀しみの淚に咽せびしものを。然るに之れより二週日の後、即ち八月二十四日の第一回總攻擊に際し、瀨川大尉も亦た愛する弟氏の跡を追うて、還らぬ人の數に入つた。嗚呼、今回の戰役に當り一家兄弟みな國難に馳せて、身を鋒鏑に委ねたるもの少しとせず。蓋し之れを以て美事と云はんか。予は寧ろ天無情に訴へて、[illegible]の[illegible]を彼等が[illegible]に運しくしたるを歎かざるを得ない。

本防禦線の骨子として頼んだ大孤山も亦た、日本軍の爲に奪略せられたので、敵は嘸かし無念と思つたであらう。されば如何にもして之れを回復せんずと、絶えず逆襲を企て、押掛け押掛け攻撃して來たかなれど、我が軍の堅忍なる逆襲は、常に彼等を失望せしめたのであつた。恰も占領後數日なるある朝であつた。突然山上に在りたる我が監視兵の一名が、敵の斥候の爲に射殺するところとなつた。スハ來たぞと、守備中隊は山頂へ躍り上りたるに、眼下僅かに十數尺の地を敵の將校が劍を揮ひ、七十餘名の兵卒を從へて登つて來るところであつた。何かは以て躊躇すべきぞ、忽ち猛烈なる急射撃を浴せた。彼等は事の餘りに急なりしに驚きたるならん、周章て狼狽き踵を返して轉ぶが如くに逃け出した。中隊は狙ひを澄まして、彼等を只だの一名も餘すこと無く悉く斃した。其の死骸はズラリと山腹の一面を黑く蔽うた。其の時又た敵の優勢なる後續部隊は遙か小孤山に通ずる道路と、我れに通ずる道路との交叉點に集合してゐた。多分兩方の山へ先遣隊を出して、效力のありさうな方へ、どちらへでも急行逆襲を試みんとするの計略であつたらう。されど斯の如き股較樂主義は決して奏效するものでない。

されど既に屢々云つた如くに、露兵の常に頑強であつた事は、往々我等を驚かしたのである。或る陣地を攻撃せられて、甲の地點が陷れば、乙の地點に在るものは、地形上退却をなされば、只だ犬死するか、俘虜となるか、二つに一つの外途無き場合ですら、彼等は決して退かぬ。生命を取らるゝ迄も、頑然として死守の態度を改めず、味方は已れ唯だ一人となつても、矢張射撃を續け、我が兵が近づき迫れば、銃劍を揮つて之れを拒し、敢然として戰つてゐるのであつた。是れは劍山でも太白山でも、又た此の大孤山でも其の例には乏しくなかつた。聞く、ならく、南山にては、我が軍の占領後、何處ともなしに飛び來る敵彈に、意外の死傷者を生じて、其の數が十餘人に上つた。それで色々と銃聲の來る方角を搜索した後、炊事場に隱れた敵兵僅かに一名が窓から銃を突出して、一所懸命に射撃してゐるのを發見したと云ふ事であつた。俘虜に對し、何故汝等は斯くも頑強なるかと糺して見たれば、大抵の者は、

「命令だ。」

と答へた。露兵は上官に對して、絶對的服從をなすものなる事は豫て聞いてゐたが、果して實戰に際しても、彼等は絶對の服從をなし、死に至るまでも、其の任務は忘れなかつた。是れは由來、露國軍隊の將校と下士卒との關係が、中紀に於ける貴族と平民との間柄の如きものであるから、自然斯の如き氣風を生じてゐるのであらう。而して日本軍隊の上下互に親和し、赤心を舉げて服從するの精神とは、其の由つて來る所を全く異にしてゐる。英國の一將軍で、數ケ月の間、我が滿洲軍に從軍してゐた人が、日本軍隊の最特色、最美點として賞讃すべきは、其の上下の親睦融和せる事である、斯の如きは他國の軍隊に於いて決して見るべからず、英國と云ひ、又た彼の平民主義なる米國に於いてすら望むべからざる事であると語つたと聞いた。我が軍隊の強味は蓋し此の特色から結果してゐると稱すべきか。然し乍ら露兵の頑強、之れは確に侮るべからざる美點で、彼等が旅順要塞に籠城して、糧食彈藥共に缺乏を來し、幾多の生命は奪はれて、恰も風前の燈火に異ならざる窮境に陷つても、殆ど少しも其の態度を改めず、頑然として孤城落日の悲運

を墨守してゐたのは、即ち彼等の特質たる頑強の精神に外ならぬのであつた。平素彼等は如何なる精神教育と、如何なる訓練の下に養成せられてゐるか。……

「戰勝の月桂冠は、銃劍と喊聲とを以て勝ち得らるべし。汝等にして彈丸盡くれば、銃床を以て敵を打撃せよ。銃床折るれば、拳を以て打つべし。拳折るれば歯を以て噛むべし。」

と教へてある。之れに由つて考へても、彼れの氣風は蓋し頗る其の故がある。

露兵は實に勇敢であつた。されど又た何のために戰ふかも知らざる彼等は、其の勇氣がたゞ權力者の脅迫に基くのであつて、鞭で打たれて狂ひ廻るに過ぎなかつたのである。或る俘虜は斯う云つたさうである。

「予には最愛の妻あり、彼の女は那許りか余の身を憂慮してあるならん。我が將校は、日本軍は塑像の如くに脆しと云つた。然るに何ぞ計らん、彼等が鬼神の如くならんとは。戰つて生命を犠牲とせんよりは、予は我が妻の爲に之を惜しまざるべからず。我れ死さば、最愛の妻は那許りか悲しむべし。彼の女は狂せん。予は到底日本軍に敵し得ず。日本軍に屠らるゝを知りつゝ戰ふは愚の極なり。」

と、彼れは愛する人のために命を惜しまなければならなかつた。しかし鞭のためにも動かねばならなかつた。

予等は此の守るに難き大孤山を警戒して、幸に毎も敵の逆襲を撃退した。それで敵も終には回復の念を絶ちしか、ひたすら本防禦線の工事を彌が上にも強固ならしむるに努め、又た各砲臺の重砲を以て、絶えず我が軍の攻圍作業を妨害してゐた。同時に我れにあつては、大孤山に蔭蔽して、着々攻城材料を集め、重砲陣地を堅固に構成し、又た常に有力なる斥候を派遣して、地形の位置、鐵條網の强弱、行進地區の敵彈に對する效力等其の他凡ての事柄に就いて、攻撃地帶の偵察に從事してゐたが、其の諸準備も全く整頓するを告ぐるや、遂に八月十九日を以て、第一回の總攻撃に轉ずる事となり、予等は重要なる目標として、東鷄冠山砲臺を與へられた。此の度こそ旅順の死命を制すべきの時なればとて、我が軍は最も愼重なる態度を以て、最も精密に攻撃に轉ずるの計畫を立ててゐたのである。

二四　戰場の訣別

故郷を去つてより既に百有餘日、故山の百花我が戎衣に薫じ、春風輕く征旗を吹いて、我れを雲濤萬里の異郷に送りしより、日月速かに流れて、今や青葉の蔭に鎧の袖を片敷く頃となれり。銃を枕の夕べにも、矢玉の霰降りしく晨にも、忘れぬものは、一死皇恩に報ぜんと欲するの念なれども、時は未だ我れに滿たず。大孤山こそ、我が討死の草莚なれと覺悟しながらも、遂に幾多の戰友に別れて殘る所となりぬ。いで此の度の總攻撃こそ、我が死すべき晴の戰なれ！

予は八月初旬に中尉に昇進したことが、此の時に至つて達せられた。青木聯隊長は予を招いて、いと嚴かに、且つ情ある言葉にて、

「昇進を祝す、中尉は出征以來、軍旗を奉じて戰鬪せり。今や其の職を解くと雖も、更に努めよ。總攻撃は愈々明日と決定せり。予は中尉と親しく寢食を共にしたり。今別るゝに忍びず、然れども予は君の成功を思うて玆に

に喜んで訣別す……」

と言はれた。實に予は出征以來、聯隊長と共に寢ね共に食ひ共に戰つたのである。それが今其の膝下から離れなければならなくなつたのは堪へ難い情であつた。予は常に、我が聯隊長は、昨日まで暖かき蓐に夢を結ばれた身で、今日は荒野が原の慣れぬ草枕に、若しや恙のありはせぬかと一日も氣の休まる時はなかつた。三千の生命を握れる聯隊長の一身は、千鈞の重きにも勝りて尊きものぞ。聯隊の士氣の振衰は、隊長の健康に由ること多きものなれば、予は思ひのたけの萬一をも成し難き戰場なれど、なほ出來得る限りの心を盡して、聯隊長に仕へてゐた。曩に張家屯に在りて、出征以來初めて水甕に湯を沸かして入浴を勸めた時、聯隊長が心から喜ばれた其の顔色は、今もなほ目に浮ぶやうである。斯く親とも賴める隊長の許を離れなければならぬ事となつた予が、當時の辛さは如何であつたらうか。固より麾下を去る譯ではなく、其の隊に屬してゐるのだから、眞の別れではなかつたけれど、何となく之れで遠くへ別れ往くもののやうな感じがした。予は聯隊長の此の言葉を聞くと　涙が喉を堰いて、暫時は頭を擡げかねた。また昨日まで砲煙彈雨の裡に捧持したる軍旗に永別せねばならぬ事の心苦しさ。聯隊長の左側に懸れる、色褪せ且つは裂け破れたる軍旗を拜すれば、同じく此の旗風に競ふ三千の將卒中、予たる者聊か他人と異なりたる情の之れに添はずしてあるべきか。

軍旗と聯隊長の身邊を離るゝが悲しさに、予は暫く頭を垂れて思ひに沈み、青木大佐も亦た、盡きぬ名殘を惜しまれてゐたが、斯くてあるべきにあらねば、予は容を正して、

「聯隊長殿、屹度立派な戰をして御覽に入れます……」

予は最早他の何事をも語り得ず、徐に踵を廻らして從卒の側へ來た。予は從卒に向ひ、

「おれは今から中隊へ往くことになつた。それでお前は交代せねばならぬ。おれは決してお前の恩を忘れぬぞ。お前も亦た何の世までも、おれを眞の兄とも思つてくれ……最早何も言はぬぞ。立派な戰をしてくれよ……」

高尾は男泣きに泣いて、

「どうしてもお別れしなければならぬのでありますか。」

と云ふ。別れはいやだが、これも止むを得ない。お前は善く上官の命令を守つて、人に負を取らぬやうにせよ。大孤山の戰の前に、お前と共に作つた骨箱は、いよ／＼今度は役に立つ事となつたぞと、心強くもいひながら彼れと別るる事の悲しさに、胸は裂け破れんばかりであつた。

今茲にて別るゝとも、再び逢ふ事もあらうぞ。イザ行からと、予は思ひ切つて去らんとしたれば、彼れは予が軍服の塵を拂ひ、脚絆の紐を締め直して、「中尉殿、それでは……」と云つたが、最早予を見るに堪へずやありけん、其の顔を蔽うて背けた。予は、「高尾！　平素言ひ聞かした事を忘れなよ」と云ひ棄てたまゝ、遙かに遠き第三大隊の位置に赴かんとして歩み去つた。

予は軍旗に別れ、聯隊長に別れ、又た從卒に別れて、孤り淋しく野原を過ぎりつゝ、情無き空の雲を仰いで、斷腸の思ひに堪へかねてゐたが、不圖心に浮んだは、安井軍曹に會ふ事と、同郷の先輩松岡大尉に別るゝことであつた。それで直ちに踵を轉じ、遠く數町の道を迂回して、先づ大孤山北麓の地隙に松岡大尉を訪ねた。大尉は一枚の天幕の下に孤坐してゐたが、予の到るのを見て、喜び迎へて、

「暫く逢はなかつたが、機嫌でゐたか？」

「御蔭で中尉に昇進しました。此度は第三大隊へ往く事になりました。何分よろしく。」

大尉は何思ひけん、

「さうか、それは目出度い。併し今逢つてもいつ別れとなるかも知れぬの。」

予も亦た、これが恐らくお別れでせう、御互に鷄冠山の絶頂で白骨を晒しませうなどと語りて後、それではお別れと云ひながら立ち上つた時、大尉は、

「その腰の物は何か？」

といつた。予は微に笑つて、

「私の棺桶です。」

「ハア丶丶これは用意が早い！」

之れを別れの言葉と殘して、予はそこを出たが、思へば此の時こそ實に大尉との生別でありまた死別であつた。それより予は鞠家屯附近の岩蔭にあつた第一大隊本部を尋ねて、安井軍醫に會ひに行つた。到着すると間もなく、一二發の敵彈が凄じき音をして、幕舍前に落ち來つた。續いて四發五發。されど之れに馴れた予等は格別意にも留めなかつた。予は大隊長が、大孤山の戰鬪に負傷を負はれたと聞いてゐたから其の見舞を述べ、且つは昇進の挨拶をした。

安井軍醫は予を彈藥箱の側へ招いて、暫く會はなかつた、同じ戰場に在りながら膝を交へて語らふべき折も無く、高粱を吹く風にも、夕暮の空飛ぶ鴉にも、若し君の音信やあると、思ひ佗びてゐたとの情ある言葉、予も、今まで御互に無事でゐたは實に不思議だ、されどこんどといふこんどは、固より萬死を期してゐる、最早明日をも知らぬ命の露の間だに、一度君に逢ひて、死出の旅路の別れを告げんと思つて、斯くは廻つて來た、曾て黃泥川の破家で盟つた事は、既に目前に迫り來つた、共に斃れたら其れ迄だが、君に若し命があるなら、血に染める予の軍衣を切つて片身となせよ、是ぞ實に契淺からぬ君と我れとが、今生の永別なるぞとて手を握りしめ、互に功名手柄を祈るぞと言ひ交して、盡きぬ名殘の淚の中に、右と左とに立ち別れた。惜くて互に見返り／＼ながら、予は此の天幕を辭して、大孤河を渡り、要塞に面する方の斜面を攀ぢて、旅團司令部に到り、旅團長に挨拶を述べたる後、第三大隊本部に着いた。恰も其の時副官が病氣で一時靜養中であつたから予は代つて其の任に當ることとなつたが、暫くして後、第十二中隊附の小隊長となつた。

いよ／＼攻擊の始まる十九日の前夜に、予は炊事當番が持つて來た二通の郵便を受取つた。郵便が此のやうな場合、このやうな場處に來る筈は勿論ないのであつたが、不思議にも只だ此の二通だけが、彼方此方に傳はり傳はつて、予の手に屆いたのであつた。此等は家兄より寄せ來つたもので、其の一は豫て强請つて置いた萬年筆を封入したもの他は二人の姪女の寫眞で、姉の律子四歲、妹の順子三歲、其の可愛い顏が、「叔父さん」と呼ばんとするものの如くに、予の目に映じた。されど寫眞の二兒の影も心あらば、予の憔悴せる姿を見て、恐らく泣き出したであらう。朝な夕なに只だ見るものは、むくつけき戰友ならずば、裂けたる肉か、碎けたる骨。曾て草間に笑ひし花も、今は踏み躙られて見る影も無き此の戰場、而も攻擊の前夜と云ふに、俄かに二姪の來臨を得たることは大いに予の荒ぶれたる心を慰めて、實に嬉しかつた。

予は其の愛くるしき眼元口元に接吻し、

「母の膝下を離れて遠く萬里の波を渡り、砲煙彈雨の此の戰場に來りし事の健氣さよ、叔父は汝等を伴ひて、明日よりの戰鬪に敵の首

をとらせんぞ！」

此の夜硝煙沈んで、星斗爛たり、予は陣中に一燈を挑いて默り、又た此の夜は殊更に、彼のネルソンの絶命に臨みの思ひ出でられ、且つは出征に臨んで、嚴父に書き殘したる、一擲僕之榮、七生之忠、の一句を繰返した。蜀魂を原頭に曝して、七生の忠鬼とならんことは、明日か明後日か、我が時は將に滿たんとせり！

當時山本なる上等兵があつた。彼れは爪と髮とを切つて母に贈り、添ふるに左の遺書を以てした。これは實に彼れが絶筆であつた。

私も最早是迄に二回決死隊に參加致し候へ共、矢張笠の蔕を保持し居り候。誠に戰友に對しても氣の毒千萬の至りに御座候、我が中隊に於いて二百餘名も有之候ひしが、今や生殘りたる健康者は僅かに二十名に候。幸か不幸か自分も其の中に列し、實に萬死の一生に數へられ居り候。

然れ共人世僅か五十年、早く捨てざれば捨處なし、何れ一度は捨つる命、瓦と成りて存せんよりは、玉と爲りて碎けん覺悟……彈が來ようが、突かれようが、命さへ無きや死にはせぬ。右の戰友はコロリと殪れ、左の士官は首が飛ぶ、中に立ちたる此の身には玉も當らず怪我も無く、之れは不思議と、我身を抓つて見れば痛みあり、矢張生きては居るらしい。

未だ死ぬ時は來ないのか、遺恨重なる露スキー奴、今に目に物見せずと心は矢竹にはやり立つ、土百姓の茶が畑の上にてクタバルよりも、花々しく戰死を遂げたなら花は櫻と謠はれん……

天皇陛下萬歲々々々々

故山本上等兵

彼れは自ら我が名に「故」の字を冠し、また從容笑つて死地に入るの覺悟が紙面に横溢してゐる。されど蓋し斯の如きは、當時に於ける將卒の悉く拘持してゐた決心である。山本は予等の胸中を率直に代辯したものである。

二五 總攻撃

・露國新聞ノウェ、ウレミヤの通信員は、旅順の防備を視察して「一宛ら雲梯もなほ攀づべからざる猛鷲の巣の如し」と評したが、見渡す限り、山と云ふ山、丘といふ丘、悉く砲臺たらざるはなく、堡壘ならざるはなく、旅順は唯だ是れ鐵壁を以て、十重二十重に圍繞せられたる金城湯池である。而も之れを守るは老將ドラゴミロフの訓練に成れる露國最強最鋭の猛將勇卒であつた。予等は今日迄の間に已に、此の金城湯池を控へてゐたのである。而して八月十九日は即ち此の旅順の死命を制すべき總攻撃の第一日であつた。世界の戰史上に、最難最慘の戰鬪として特記せらるべき旅順攻撃は、實に此の日を以て其の端を開いたので、これよりして四ヶ月餘、我れ死攻すれば、彼れは死守し、我が軍は多大の犧牲を價とし拂つて、旅順の山谷を焦土とし、彈丸の巣窩として、遂に之れを屠り、之れを陷れ、環睹の列國をして、大和魂の發揮せる肉彈の效力を驚愕せしむるに至つたのである。

予等は大孤山麓に在りて、攻撃に關する凡ての準備を急いでゐた。殊に敵が副防禦中の最有力なるものとして賴んでゐた鐵條網——我が軍が、かの棒杭と其の鐵線との爲に、幾多の生命を奪はれたか、其の鐵條網破壞の研究に怠らな

かつた。見渡す限り、一面の連亘たる山陵は大小高低を問はず、遠く望めば黒線の如くに取巻いてゐるは、即ち鐵條網である。予等は之れを踏み之れを壞して進まねばならぬ。之れを破壞するのは工兵の任務なりとは云へ、其の人員には限りがあつて、鐵條網には殆ど限りが無い。されば歩兵も亦た之れが破壞に努めなければならなかつた。それで我等は大孤河の南岸を利用して、鐵條網を假設し、工兵から其の破壞方法を教へられたりした。始めに、先づ鐵鋏隊が前進して直ちに鐵線を切る、續いて鋸の一隊が進んで杭を揺つて仆す、仆れなければ鋸で引き仆すといふ工合にして、此の網の一部を破つて突撃隊の進路を開くのであつた。

予等は鐵條網破壞が眼前に迫つた第一の仕事であつたから、一所懸命に其の下稽古をしてゐた。されど愈々實地に臨みしや、鐵條網破壞の爲に突進したる我が歩工兵の決死隊は、恐るべき機關銃の銃先で仕事をするのであつたから、殆ど一名の生還者も無かつたのである。それは又た敵の鐵條網には電流が通じてゐる事が探知せられてゐた。併し之れには二說あつて、一つは強力なる電氣を通じて、觸るゝ者を殺傷するものなりと云ふ事、他は微弱なる電流によつて我が突撃隊の破壞の爲之れに近づいた事が、直ちに首腦部たる司令部へ通報せらるゝのだと云ふのであつた。其の孰れにしても電流が通つてゐる以上は、之れを從來の鋏で切斷することは出來ぬので、竹を其の柄に縛り付けて、電氣を手に導かぬやうにしてゐた。されど實際其の電流は頗る強烈なものであつて、我が兵は爲に電殺せられたり、又は手足を[illegible]の如くに引裂かれた。鐵條網の研究と共に梯子を以て敵の塹壕を渡る方法も稽古してゐたが、實地に臨んでは、此の梯子も深くして廣き塹壕に對しては、殆ど何等の效力をも表はさなかつた。

地雷、之れは又た敵が一面に埋設してゐたので、之れを破壞するのは工兵の力に依るものであつた。即ち其の導火線を切斷するのであつた。雙眼鏡で見ると、此の十九日まで、敵はまだ此處彼處に一團を成して、頻りに十字鍬などを使つてゐるのが見えたが、是れは即ち地雷を布設してゐたのであつて、我等は地圖と對照して、一々其の個處に記號を付しておいた。鐵條網の杭は、槌で何回打込んでゐたとか、何處の谷には何個の地雷を埋めてゐたとか、斯の如き事までも、我等は洩れなく記憶してゐた。又た偵察隊の探知した所によれば、我が歩兵の由つて肉薄し進むべき地隙には、悉く地雷が埋めてある。而して其の布設方法は中々に巧妙であつて、地隙の最も狹い處には踏落し地雷が埋めてあつた。突撃隊の先頭が之れに引懸ると其の爆聲猛烟に、後續者は自然地隙の兩側へ身を避ける、忽ち其の兩側の地雷が爆發する、それで突撃隊は殘らず地隙に埋沒せらるゝと云ふ工合に仕掛けてあつたので、予等たるものは容易に前進する事は出來ぬのであつた。加ふるに各砲臺、各散兵壕の銃砲彈は、如何なる地隙、如何なる牆壁をも射撃し得べく、十字火で我れに集注して一兵だも生きては還さじ、斃さでは止まじとの設備か、殆ど非難の打ち處が無いほどに出來てゐたのである。

八月十九日の拂曉、我が全砲兵は第一發の砲火を開き、攻擊目標たる東鷄冠山北砲臺、他の諸砲臺に向つて一連に砲擊を始めた。これは即ち我が軍が總攻擊に轉ずるの端緒であつて、これより我が突擊各縱隊は砲擊の援助に賴つて逐次躍進して敵壘に近接し、砲火の效力の表はるゝを待つて、一氣呵成に突入するの計畫であ

つた。されば我が砲兵は全力を傾注して、砲臺を破壞し、堡門を撲碎し、又た敵の散兵壕に破牆口を開いて、我が歩兵の突貫の起るべき時機を作らんことに努めてゐた。

我れより第一發の火蓋を切るや、敵の全砲臺も亦た直ちに一齊の火焔を吐いて、我が砲兵を撲滅し、我が歩兵の前進を阻害せんと計つた。彼我の重砲が互に巨彈を交換する、其の凄じさ！ 四斗樽大の地雷彈、又た榴彈は空氣に大震動を起し、其の唸聲は雷霆の威を輕んじ、砲彈の火光は稲妻を散らし、爆煙は雲と蒸して一帶の戰場を蔽ひ、苟くも生ある者が此の間に呼吸する事を得べきかを疑はしめた。予等は敵の砲彈を「汽車彈」と唱へてゐた。恰も汽車が煤煙を吐いて、ステーションを出る時と同じやうな唸聲をしたからで、近く此の唸聲が聞えると、間もなく大地は搖ぎ、凄じき響の内に、人も、馬も、岩も、砂も、みな粉々に碎かれて巻き揚げられる、乃ち此の汽車と衝突したものは、何一つ餘すところなく潰し込まれるのであつた。其の破片は一たび落ちて又た跳ね上がり、あたり構はず馳け廻つてゐるもののやうであつた。嘗て何某小隊長は彈片に首をカチリと切られて、僅かに皮一枚でブラ下つてゐた。又た或る兵卒は之れが爲に、兩腕を根元からブッリ切り取られた事がある。

此の日は唯だ砲撃を以て終るのみであつた。是れは最初からの計畫であつて、二三日の間は、砲戰を以て十分に敵を掃蕩し、然る後に歩兵の突撃に移る手筈であつた。其の夜、予は所用あつて師團司令部即ち我が砲兵陣地の在る位置へ往つたが、折から暗夜の事であつて、彼我の砲火は、白き青き火道を作して空に閃き、これが地獄の街道筋の景色でもあらうと思はしめた。敵の探照燈は、鷄冠山、白銀山など目指す方より、十文字に我が砲兵陣地を照らし、グルリグルリと睨め廻しては、着々肉薄しつゝあつた我が歩兵の行進を妨げんとしてゐた。我れよりも亦た分捕の探照燈を耀かして、敵燈の光力を減殺せんとし、且つ敵砲を照らしてゐたが、光力は遙かに彼れに及ばないのであつた。又た光彈即ちマグネシウムの花火は續々に打揚げられ、兩國の花火よりも一入明るい光を放つて、恰も空中に大アークライト燈を吊り下げたやうで、一面を白晝の如くに輝らし、蟻の匍ふのも見えるくらゐで、突撃縱隊の運動を妨害するに、此の上も無き威力を現はしてゐた。即ち光彈の照らす處、部隊の行動は手に取るが如くに見え透かされて、忽ち側の機關銃が見舞つて來る。それ故に、光彈がパッと空中で開くと、予等は「伏せ〳〵」と互に戒めるのであつた。

師團長以下幕僚は砲兵陣地に立つて、此の不夜城の光景を眺望してゐられた。探照燈がピカリと敵砲臺に見えると、あれを擊て、あれを壞せ！と命令してゐた。參謀長は、兩手を拱き煙草を吹かしながら、

「花燈を見るやうだなあ、から目映しく輝らされちや、恥づかしくてならぬわい！」

此の夜、予が中隊は楊家溝まで前進したが、着くや間もなく砲彈落下して、凄じき響の内に、硝煙簇り起り、予が身邊にピシャリと何か落ちて來た。

「誰かやられたな！ 誰だ〳〵？」

煙の霽れた後には最早四五人の死人が横たはつてゐた。其の内の二人は、ツイ四五日前に到着したばかりの補充兵であつた。而も其の一人の死狀は誠に殘酷の極であつた。腰から下半身は、肉一片、骨一片も留めず、上體は眞黒に

焦げて、眼球は飛び抜け、血がゾロ〳〵と流れ、丸で魚を料理つたやうで、目も當てられぬ有樣であつた。今一人の補充兵も足を碎かれ、血は噴水の如くに迸り出てゐた。中隊長が彼れの側に寄つて、

「シッカリせい！　傷は淺いぞ！」

と勵ますと、彼れは中隊長を見上げて、

「中隊長殿、まだ一度も戰をしないで、やられたのは殘念でたりません。早く快くなつて來ますから、中隊へ入れて下さい。」

「承知した。早く快くなつて復た來い。」

彈丸の中る中らぬは、實に不可思議な定めで、數度の劇戰に彈運？　のいゝものは微傷さへ負はぬ者もあれば、彈丸が探して來るやうに、引つ付くものもある、漸く上陸したばかりで、まだ敵の顏も見ず、彈丸がドンな味のものやら知りもせぬ内に、何が何やら分らずじまひになるものもある。又た中りだすと、一人で四十五十も引受けるものもある。是れが俗に云ふ人の運不運に由るものか。十九日に師團司令部が大孤山の北斜面へ移轉した時、中央に師團長、兩側に參謀が立つて、敵方を觀望してゐると、忽ち砲彈が來て破裂したのに、師團長は微傷だに受けずして、兩參謀は無殘や即死を遂げた。殊に要塞戰であれば、前方にゐる者は無論命中の公算は多かつたが、後方にゐた者とても、彈丸を受けた事は野戰より甚だしいのであつた。

ナポレオンは「彈丸は汝を狙ひ、汝を追ふものではない。若し汝を追つて來るとすれば、地下千丈の底に避けても、矢張命中するぞ。」と云つた。然り、彈丸は魔物であつて、其の命中如何は人力の能く左右する所に非ず、いはゆる天運である。しかし中には眞に追つかけて來るのかと思ふほどよく中るのがある。

太白山の戰後に、退却する敵の五六名が、駈歩もせず、大手を振つてノソリ〳〵と歩いてゐた。其の所作が餘りに呑氣で面憎く思はれたから、誰れ彼れとなく能く狙ひを付け、射撃場で射撃する通りに、銃を据ゑて撃つたが、どうしても中らぬ。或る將校は、おれが射止めてやると力んだが、とう〳〵中らず仕舞で．彼等は矢張りノソリ〳〵と歩いて、遂に姿を隱してしまつた。其の後も度々敵の中で、砲臺の上に立つて半巾を振廻したり、甚だしきは胸牆を越えて、我が軍の方向に尻を突き出し、大便をするやうな大膽不敵な奴もあつたので、小癪千萬と、極めて精密なる射撃を加へても、更に手ごたへ無く、敵は悠々閑々と用便しすまして、壕内へ入つてしまふやうなこともあつた。

凡て數度の戰場を踏んだものは、次第に圖太くなつて來る。まだ慣れぬ時にはヒューンと唸つて來る小銃彈にも、覺えず頭をチョイと下げたものである。

「誰か？　敵の彈丸に敬禮するのは！」

と怒鳴る御當人も、同じく敬禮してゐるのであつた。しかし彈丸亂射の中に立つと、モウ一々敬禮してはゐず、甚だ横着になる。銃砲彈の唸も響も、耳に慣れて何とも思はなくなる。ヒューンとかゴウとか耳に聞える時は、既に彈丸が通り過ぎた後であるのを知ると．段々に度胸が据り、先に恭しく敬禮してゐた者も、今は胸牆の上に立つて、握飯を喰ふやうな呑氣沙汰をやる。彈丸は割合に斯る横着者を避けて通るものだ。

二六　肉彈又肉彈

勇士の死屍は山上更に山を築き、戰士の碧血

は凹處に川を流す。戰場は墳墓となり、山谷は焦土と化す。實に第一回總攻擊の結果を回想すれば痛恨腸を斷つの思ひがある。

英國新聞スタンダードの一記者は、「日本軍の喊聲は露兵の心臟を貫けり其の腸を刳れり。」と云つた。然り日本軍の喊聲は敵の心臟を貫き、腸を刳つたに違ひない。併し其の喊聲は一日々々と薄れて敵壘前山と死骸を積んだに過ぎなかつたのである。幾許の鐵彈を抛ち、幾許の肉彈を費しても、彼の堅牢無比と誇つた敵壘に對しては殆ど何の效果をも奏せざるに終つたのである。否、其の後數回の大突擊も、肉彈又た肉彈を投じて、勇士の血を涸らし骨を碎きしに止まつたのである。乃木將軍は涙を拂つて犧牲を擲ち、部下は死を甘んじて殊死決戰、奮つて肉彈となつて敵壘を擊つたのであるが、全滅又た全滅を重ねるのみであつた。

第一回總攻擊は失敗に了つたと云はねばならぬが、これが爲に費した肉彈は、先づ堅壘を破壞すべき第一次の導火線となつて、遂に陷落の期を招致したのであることを思へば、この多大の犧牲も畢竟徒費ではなかつたといはねばならぬ。

十九日以來、我が砲兵は敵の諸砲壘、就中予等の目標としたる東鷄冠山に痛手を與へたと見えたので、茲に二十一日の夜、吉永大隊長先づ突擊前進することとなつた。工兵の決死隊の鐵條網破壞は幸にも奏效して、少しく步兵の進路を開いた。それで吉永隊長は令して一彈をも放たしめず、一言をも發せしめず、闇に紛れて進み、不意に立つて敵壘を襲うた。不意を喰つた敵兵は、一齊に數十步の後へ退いたが、忽ち後方で機關銃のけたゝましい響がしたと共に、多數の增援隊が現はれ來り、退却兵を押し進めて我れに逆襲し來つた。吉永大隊長は此處一步も退くなと奮鬪叱咤しつゝ、此に大格鬪起り、銃劍の火光は電光と散り亂れ、切りつ切られつ、互に此處を先途と戰つてゐたが、天なり、命なり、胸牆に寄つて猛然指揮しつつあつた吉永少佐は、一發の敵彈に其の胸板を擊拔かれてドサリと倒れた。大久保大尉代つて指揮すれば、又た忽ち仆れ、代る人も代る人も皆仆れ、啻に幹部のみか、部下も殆ど皆斃れて、而して來るべき筈の後續隊は未だ來らず、敵の集中火は益々劇烈なり、由つて殘兵は一先鐵條網下の地隙に退いて、後續隊を待つてゐたが、遂に一兵の增援し來るものも無く、怨を呑み齒を嚙んで、翌二十二日の黄昏に及んだ。彼等は敵の直下僅かに十數尺の近きに在つて、實に十三時間、只だ銃を握りしめて、敵方を睨んでゐたのである。

二十二日の夜、更に武富大隊は前夜の怨恨を報ぜんものと、一隊肅々、前夜押破つたる鐵條網を越して、猛然突擊に轉じたが、松岡大尉先づ傷つき、其の大腿は切斷せられて復た起つ能はず、三宅中尉は砲彈の爲に背部を掠められて、肺臟が飛び出した。慘は更に慘たるを加へ、烈は更に烈なるを增し、前夜の成功に誇れる敵は、我れ此處に立てり、汝を待つことや久しと云はん許りの心憎き振舞である。探照燈はクルリ〳〵と轉映して、我が突擊隊を照らし、光彈は切りに頭上に白光を耀かせて、我れは見す〳〵敵の目標と露出する。これにも屈せず敢然としては突擊したる御川大尉の勇ましかりし武者振よ、光彈の光に透かし見ると、半面は唐紅の血潮に染み、右手に軍刀を閃かせて切つて切つて切りまくる姿の勇ましさよ。併し此の大尉の壯烈なる聲は最早再び聞えなくなつた。打ち込み打ち込む白刃は暗に閃いて、亂

る丶葦の如し、併しそれも次第に消え、先の喊聲はハタと止み、只だ敵兵のワア〳〵と罵る聲のみが、堡壘の間に聞えてゐた。其情なさ！敵は勝ち誇りて胸牆上に狂喜舞躍する。我れは悉く殪れて、唯だ山成す屍、川成す血、嗚呼、何等の恨事ぞ！

先に重傷を負ひたる松岡大尉は、切斷せられた大腿より、血は瀧と流れ、呼吸次第に迫つて來た。大尉も自ら命の至れるを知つて、懷にした機密地圖を裂き、鐵條網に纏つたまゝで、天晴とは云ひながらも、無殘なる最期を遂げた。大尉を收容せんとして、往きし者も往きし者も皆還らず、共に大尉の傍に寄添ひて、永遠に眠つた。又た彼の柳川大尉は數ヶ所の手疵に屈せず、喊聲を放つて眞先驅に突入したが、今一歩にて敵壘へ乘込む其の一刹那、又たもや一彈を蒙つて起つこと能はず、遂に胸牆に倒れたが、大尉は無念や、豺狼に等しき敵人の刃に掛つて弄殺しにされた。

旅團は愚か、よしや師團が全滅となつても、目ざす敵の致命點に一槍突き入れねばならぬので、數度の失敗に毫も怯まぬ我が軍は、愈々二十四日の朝まだ暗き午前三時と云ふに、更に一大突撃を行ふ事となつた。これ迄予の中隊は楊家溝の地際で連日露營してゐたが、今夜二十三日、愈々此の地を撤して、吳家房なる集合地點へ轉進することになつた。それで中隊長川上大尉は予等小隊長を集めて、

「今に及んで諸君に云ふべき言葉は無い。いよいよ骸骨の棄場は極まつた。別れの水盃を受けてくれ玉へ。」

中隊長から言はるゝまでも無く、予等も固より、此度こそは一命の盡くる時ぞと、豫て覺悟してゐたことなれば、中隊長の差出す水筒より別れの水を受けて默然としてそれを口にした。この水盃をした場所はゴロ〳〵した石の轉がつてゐる狹い地隙であつて、今もそれが目に見えるやうである。

中隊は靜かに露營地を去つて、川端の黒き楊の蔭に整列した。嗚呼、これぞ隊長部下相見ゆるの最後だと思へば、予等は既に相互の爲に暗涙を浮べざるを得なかつた。やがて隊伍は徐々に行進を始めて、暗黒なる並木の下を通過してゐると、前日來收容せられた負傷者が、擔架で舁がれて後送せられつゝあるに出會つた。其の列は實に長く〳〵連續して、何處が果であるか知れぬ程であつた。

予は歩みながら問うた。

「オイ、何處をやられたか？」

「脚をやられました！」

「腹です。」

「皆よくやつたなア。……靜かにして行けよ。」

中隊は象の背のやうな山の後の河へ出たが、物の文目も分らぬ闇夜の事とて、先が少しも分らぬ。地圖を手搜つて、吳家房と覺しき方角へ行進してゐる中、目の前で何かガヤガヤ騷がしく人聲がするので、予は軀を屈めて、闇中を透して見ると、一帶の河原に長々と負傷者が列べてあつた。非常な數の負傷者かなと心を痛めながら行進するのに、暫くは彼等の數が盡きぬ。其の唸る聲、苦しさうな息、此の露深き夜中に、何一つ被物も無しに曝して置かれるとは、如何にも不愍やと、予等は一方ならず悲愁の感に打たれた。

兎角する中、予等の中隊は道を失つて、ドウしても吳家房へ達することが出來ずして、遂に第九師團司令部に突き當つた。其の時、大島將軍は夏乍ら、上下眞黒の軍服を着け、純白の兵兒帶を引き結んで、大刀を横たへられてゐた。

予は凜然たる將軍の威風を仰いで、古武士に逢ふの感を起した。第九師團が盤龍山を占領する際に、將軍は陣頭に立つて、唯だ一人黑き目標を示しつゝ、全軍の士氣を鼓舞せられてゐたとの事である。扨て予等は參謀に途を尋ねて、中隊は其の方向へ引返したが、どうしても志す方へは出ぬ。又た聞けば右の方だと云ふし、右の方へ行けば元の道の方だと云ふし、遂に何方へ行けば宜いのやら、丸で途方に暮れてしまつた。集合時間は夜の一時と定められてゐる。然るに最早其の一時には數分を餘すのみとなつた。若しも此の數分間に集合地へ着くことが出來ぬならば何の面目があらうか？中隊長は固より、予等も殆ど此の際の處置に苦しんでゐたが、丁度其の時に工兵隊の一兵卒に出逢つたので、吳家房の方角を尋ねたれば、彼れは丁寧親切に、此の先で今工兵が對壕作業をしてゐる處を通つて行くなら、其處へ出られるだらうと敎へてくれた。中隊は敎はつた方角を指して行く中に、果して對壕があつた。之れを傳つて稍や少時進み行くと、切目があつた。それよりさき少しの程は何一つ陰蔽の無き裸々たる畑の中であつたから、驅足で飛び出したが、ピカリと一閃、探照燈で照らされた。「伏せ！」と云ひさま、息を殺して其の光の消えるのを待つてゐたが、更に消えない。其の內、後の小隊との連絡が切れる。兎角して漸く集合地點と豫想した場所へ來て見たが、我が軍は一向に集合してゐるとも見えず、復た眞黑な死骸が其處にも此處にもゴロ〳〵轉がつてゐるのを見るばかりであつた。察するに我が軍は既に攻擊の樞軸となる盤龍山東砲臺の下へ集合したのではあるまいか。時計の針を透して見れば、午前一時は既に數分前に過ぎ去つてゐた。暗中に我が本隊の所在を模索したが、更に知れない、嗚呼、時は既に遲れたのか？中隊長の苦痛、予等の煩悶、嗚呼、時を失したる爲、此の大突擊に拱手傍觀の位置に立たねばならなくなつたのか？中隊長は、

「僕は腹を切つても申譯が立たぬ。」

と嘆じたが、單だ獨り中隊長のみでない。予等にして若し此の夜本隊に合する事が出來ないならば、腹を切る位は何の事でもない。されど中隊の蒙るべき不名譽は、何の日にか能く之れを雪ぐことが出來ようぞ？

連絡斥候、搜索斥候等、樣々なる名の下に、各方面へ斥候を派遣したが、それも暗に鐵砲玉、何の答も無ければ、何の報告も齎し還らぬ。さりとて最早一刻も躊躇すべき時でなかつたから、中隊は先づ盤龍山へ往いて最後の動作をなすの最良なるを思ひ、且つは本隊の戰鬪が始まらば、先づ彼の地點に在つて其の動作に連繫すべしとの考案で、かの機關銃が折々カタ〳〵と音を立てるのは確かに盤龍山だ、此の地隙は其の山に通ずる道路だらうと、大方の目星を付けて、吳家房から一條に通ずる土地の割目を利用して前進することとなつた。

嗚呼、此の地隙！僅かに幅二間足らずの一條の隘路、此處ぞ昨は第九師團及び後備第九旅團の苦戰奮鬪したる處、其の跡や何の狀ぞ？擔架の一つも、藥籠の一つも運び來らるべき地位ならねば、死傷者は累々として此の地隙に堆積し、彼方にも傷に唸く者、此方にも擔架を呼ぶ者、唯だ靜かなるは已に絕命せる戰死者の骸である。死屍は地を塞めて予等が足を立つべき空隙も無い。これぞ地獄の街道である。右へ避くれば、傷つける同胞を踏み、左に地を求むれば、地には非ずして、闇中に色を辨識する能はざるカーキ色の戰友の屍である。一死骸を

踏むな！」と予は部下を戒めたが、予も亦た忽ち水膨になつて護謨の如き弾力のある死者の胸許を踏み付けた。長き隘路に長く續ける死屍、負傷者の事なれば、之れを踏み、之れを越えずには、到底前進することが出來なかつたのである。

地隙が將さに盡き、今や一歩にして鐵條網に近づかうとする位置にて、予等が一旦停止すると、忽ち左側面からカタ〱と、闇中に火焔を吐いて見舞ひ來るは、例の機關銃である。又た忽ち轟く砲車の響、顧みれば我が砲門が此の地隙を經て、盤龍山に押上がらんとて前進し來るのであつた。狹隘なる此の一地隙には歩兵、砲兵が入り交つて僅かに敵弾を防いでゐたのである。

既に此の山麓に達したが、我が本隊らしきものは一兵だも認められない。予等の痛恨は那許りなりしぞ！　本隊は何處に在るか、攻擊は中止となつたか？　煩悶と苦慮を重ねた末、中隊長は再び元の呉家房へ引返して、後命を待つべしとの決心を起した。これぞ實に中隊長が窮苦の末に出でた策なので、予等小隊長としては、悄然として其の意に從はざるを得なかつた。又たもや地獄街道を後へ引返すこととなつた。さうして我が戰友の死屍は、再び予等の蹂躙する所となつた。予等は暗中に死屍負傷者を透し見れば、更に一層の慘憺たる有樣となつてゐた。予等が先に通過した後で、我が砲兵も亦た止むことを得ず、此の地隙を進んだ爲に、幾多の我が同胞は無殘や砲車の輪の下に押潰された。今の今まで尚ほ辛うじて蟲の息でゐた負傷者も、鐵の輪に命を絶たれ、今が今まで腫れ上つてゐた死骸は、車輪の刃で寸斷せられた。黒き腕、大きな脚、唇を噛みメめたる白き齒、死して尚ほ瞑せざる眼、半身土中に埋もれたるもの、碎けたる骨、破れたる肉、流るゝ血、折れたる劍、裂けたる銃、これらの相混じて散亂せる狀よ！

元の地點、即ち地隙の入口に歸つて待つこと稍少時にして、暗中に黒影の隊伍がゾロ〱と進んで、百人二百人と次第に集まつて來たは、これぞ我が本隊で、予等の喜びは極點に達した。聞けば絶えず探照燈又たは敵彈に前進を防止せられて、豫定の時間に、集合することが出來なかつたのであつた。何にせよ漸く本隊に合することが出來たので、予等はホッと胸を撫で下した。其々に名譽ある第一回總攻擊の決死隊となるを得たるを喜んだ。扨て此の集合地點たるや、決して敵彈を遮蔽し得べく、且つは地區の廣い場所ではなく、僅かに敵の瞰視を遮り得るだけの崖下であつた。

此の時予等と共に集まつてゐた將校の中、松村少佐は、曩に大孤山の戰鬪で敵の逆襲に抗して見事之れを擊退したる勇者であつて、當時右足を捻挫したが、毎も負け嫌ひな少佐は、これしきの傷に大隊長たる重任を棄つることを諾ぜず、杖を突きながら重大なる任務の爲に、身の不自由を忍んでゐたので、此の時も猶ほ未だ平癒せざる脚を、柳の枝に支へて先頭に歩み來り、予の側にドッカと腰を卸して、

「愈々だね……」

又た曩に大孤山に於いて、令弟瀬川中尉と悲慘なる死別をした瀬川大尉も亦た來り、又た曾根少尉は藥盒を佩び銃を携へてゐた。餘りに異樣の扮裝だから、譯を問ふと、前夜の偵察に軍刀を失つた爲に、此の武裝を撰んだとの事であつた。此の外數へ來れば夥多の將校ともに會して、互に成功を祈りつゝ、暫く默笑してゐたが、嗚呼、數時間の後、彼等は皆名譽の肉彈

となつて盡き、唯だ僅かに生殘つたものは、松村少佐と予との二人のみとなつた。之れを追憶すれば、逝ける勇士の面影や、當時の話振などが髣髴として、予は目のあたり彼等と接してゐるやうで、悲しくも亦た壯んなる感覺が胸一杯になるのである。

二七　必死隊

嶮しき崖の下に、勢揃をし終つて、予等は前進の命を待つてゐた。其の時人より人に傳はつて、一枚の紙片が予の手に達した。之れを開けて見ると、

本田安吉は十九日に砲彈で撃たれました。水を飲まさうとしたら、涙を流して櫻井中尉殿へ宜しく云つてくれと、何遍も云うて死にました。

高尾文吉

と認めてあつた。本田安吉とは、一年程以前に、予の從卒を務めてゐた忠實なる兵卒であつた。彼れが今生の別れに臨んで、他事を云はず、唯だ薄恩の舊主たる予に宛て、暇乞の傳言を賴んだばかりであつたとは、予は何んの辭を以て能く彼れに感謝することが出來ようぞ？予は今もなほ彼れに最後の訣別をなすの機會を得ざりしことを殘念に思ひ、若しも親しく一言の別れを彼れに告げ與ふることが出來たなら、彼れも何程か喜んだであらうにと思うて、竊に暗涙を浮べたのである。

予は部下の小隊を手許に集めて、

「お前等と此に最後の別れをするぞ。お前等は思ふ存分にやつてくれよ。此の戰でどうでもかうでも旅順を拔くのぢや、此の水は予がお前等に與ふる末期の水ぢや。」

斯く云ひて、予は部下一一〇の生命を賭して辛うじて汲み得たる、貴き水筒の水を傾け、分隊長の水呑に分けて、水盃を取交した。やがて盤龍山の中腹まで前進すべしとの命令があつて、ゾロ〳〵と動き出したる予等は、既に引導を授けた部下を從へて、再び例の慘憺たる地隙を前進した。此の地隙を往來すること、是れにて三度、されど四度此の地點を歸り來らうとは素皆固より期してゐない。必ずや軍旗の翩飜たる陣頭に屍を晒して、天晴の功名手柄をしようとは、即ち各員の覺悟であつた。愈々前進となつた時には、成るべく輕裝し、麪麭の如きも二三日の命を支持し得るだけに止めて、餘は後に殘して置くこととした。予の身支度としては腰に國旗をブラ下げ、首に手拭を卷き、足袋裸足で、携帶品としては軍刀と水筒と三枚の麪麭だけ、これが死出の檜舞臺に現はるべき扮裝であつた。

想へば今も肌に粟を生ずる此の地隙！予等は累々たる死屍を踏み越え乘り越え、拔足差足、鼻口を蔽うて前進したが、戰友を脚下に踏み蹂ることは如何にも辛い。一人の負傷者が片隅に小さくなつて唸いてゐたから、予は彼れに傷所を尋ねた。すると腰部の骨折で、既に三日の間、一粒の食、一滴の水も口にすることが出來ず、それに擔架は來ぬので、戰鬪以來今迄此處に只だ斯うしてゐる許りで、死ぬるのを待つて居ると云つた。予は彼れを慰めて、之れを食つて待つてゐよ、今にも衞生隊が前進して來るからとて、彼の三枚の麪麭を與へたれば、彼れは予を仰ぎつゝ手を合し、涙ながらに予の姓名を聞かしてくれなどといつた。此の慘狀に予も一方ならず悲しみを催し、唯だ早く元氣になれよ！」と云ひ殘して、更に前進して、いよ

いよ盤龍山の鐵條網へかゝつた。

此の砲臺は既に第九師團が、血を灑ぎ肉を屠つて占領し得たる處で、是れぞ我が突撃縦隊が據つて以て、東鷄冠山北堡壘、並に望臺に向つて大攻撃を實施すべき重要なる地點であつた。されば此れを占領する迄に大島將軍麾下の兵兒が活躍奮鬪、幾許の艱苦を具にしたことか？　乃ち彼の地隙の慘状を以て之れを想見せしむるに足るものであり、又た予等が鐵條網の破目を詭け通つた時、暗き中にも幾多の歩兵や工兵が、或は鐵條に纏はれたまゝ、或は棒杭を抱へたまゝ、或は鐵鋏を握つたまゝで、折り重なつて斃れてゐるのが見えた。

予等が盤龍山の中腹に集合した時に、嘗て奉じたりし軍旗が、將棊倒のやうに重なり重なつて集まつてゐる予等の頭上に、黒く淡く飜つてゐるのを見たので、一方ならぬ感慨に胸を躍らせた。予は軍旗の樹てる處まで匍ひ上ると、曩に大孤山の麓にて、盡きぬ名殘の内に別れを告げたる聯隊長に礑と出逢つた。

「聯隊長殿、櫻井中尉であります！」

青木大佐は予を見て、懐かしさうに、

「櫻井か？　成功を祈るぞ！」

時に山嶺の方より聲して、予を呼ぶ者があつた、それで予は聯隊長の身邊を離して登り行けば、同國の友なる吉田中尉が、獨りツクネンと坐つてゐるのであつた。中尉が第九師團に屬して、旅順方面の戰鬪に從事してゐることは聞いてゐたが、ツヒぞ廻り合はなかつたのに、圖らざりき、今や、予等が將に強襲を行はんとした場合に至つて、此處で邂逅せんとは。實に思ひがけないことであつた。中尉は、

「櫻井、酷いね！…………」

予は吉田中尉が此處に在るのを訝つて、

「君は獨り、此處で何をしてゐるのだ？」

「マア此の死骸を見てやつてくれ！…………」

予は予の身邊に黒く集合せるものは、悉く、我が聯隊の生兵なりと許り思つてゐたのに何ぞ圖らん、此の密集せるカーキ色の兵士は、實に中尉の部下にして、而も悉く死傷せるものであつた。嗚呼、何等の慘ぞ！　其の死骸は二重三重と重なり、四重五重と積み、或者は手を敵の銃臺に掛けて斃れ、或者は既に乘越えて、敵の砲架を握れるまゝに死したるあり、さも苦しさうな呻き聲の深き地の底より起るが如くに聞えるのは、疊み重なつた下に在る負傷者が發したのである。勇壯なる此の突撃縦隊が、味方の死屍を乘り越え踏み越え、近く敵壘に肉迫して、魚鱗掛りに突き入ると、忽ち敵の機關銃で、攻め寄る者毎に一々掃倒された爲、死屍は數層の低を打つて、敵壘直下に斯くは悽慘なる死骸を積んだのである。戰友の討死に憤激して、イザ弔ひ戰せんと馳せ行く者も、馳せ行く者も、皆亦た斃れて、悉く敵彈の犧牲となつたは、實に無慙ではないか？　吉田中尉が、死せる部下を棄て去り難く、獨り死骸番となつて此に殘つてゐる、其の胸中は如何なりしぞ？　中尉は其の後十月二十七日未明に、二龍山に於いて壯烈なる戰死を遂げたが、此の時の對面は實に予との生別又た死別であつた。

集合が悉く終ると、聯隊長はやをら立つて、

「我等が報國の事、實に此の一戰に在り、旅順の死命を制するも亦た此の一夜に在り。我が精鋭なる突撃隊は、即ち決死隊に非ずして必死隊なり。汝等斷じて成功を期せよ。」

との訓示を授けた。然り我等は故國を去つて、前進の第一歩を運びし時、既に生還を期せず。

戰に臨む者は固より死を決す、然るに今回の事、死を決するは未だし、必ず死せずんばあらず。我等は實に必死隊であつて、必死隊の名稱は予等に一層の奮闘を與へ、又た副官が讀み上げたる、陸軍大臣より「成功を祈る」との電文は、予等をして意氣更に軒昂たるものあらしめた。

予は今より總攻撃の壯狀と又其の慘況とを語らう。さり乍ら僅かに一小隊長として、當時丸で夢中で戰鬪した予は、只だ暗中に物を探るが如くで、微かに記憶を存してゐるだけの事を縷述するの外、仔細に戰況を語ることは出來ぬ。而して此の物語が、予の自慢話か、手柄話の如くに聞えてはならぬ。寸功だも無き予は、安んぞ自ら誇り、自ら高うするの勇氣が有らうぞ。唯だ讀む人に與ふるのに、旅順の總攻撃は斯くも慘烈であつたものかとの感想を以てせば、予が事は足れるものである。

必死隊の兵兒は靜かに立つた。悠然として死地に踏み行いた。累々たる死屍を分けて、此の盤龍山を越えた、五名又た六名宛、逐次に跳り越えて木柵ある斜面に取り付いた。予は聯隊長に、

「それでは：：。」と別れを告げて立ち上る途端に、グザと死骸の頭を踏み付けた。扨ても我等の目指す處は、東鷄冠山砲臺であつた、又た望臺であつた。

先づ敵の第一散兵壕に於いて、爆藥戰が開かれた。我が兵の擲げ込む爆藥は見事に爆發して散兵壕は忽ち火事場の如く、板が飛ぶ、土嚢が吹き出す、頭が飛ぶ、足が捩切れる。火焔は黑煙と共に煽り上つて、赤き火は予等の顏を輝らして物凄く、戰線は一時に騷がしくなつた。斯くする內、敵は叶はじとや思ひけん、此の地點を棄てて何處へか逃げ去つた。ヨシ！とばかり予等は勝ち誇つて勇み進んだ。中隊長川上大尉は軍刀を翳して、「前へ！」中隊長と並んでゐた予は、「櫻井小隊、前へ！」と令した。

予は斯く叫びつゝ、進路を見屆けんが爲に中隊長の左側を驅抜けて、壘道を進んだ。前に立塞がつた黑き大の者は何ぞ？　北堡壘下の塹壕であつた。後を顧みれば一兵だに從ひ來らず。しまつた！　連絡を切つたのかと、予は左方に身を避けつゝ、我が第十二中隊を呼ぶと、

「櫻井中尉殿！」

と連りに呼ぶものがある。聲を賴りに歸り來れば、伊藤曹長が聲を揚げて泣いてゐた。

「何で泣くか？　どうしたのか？」

曹長は涙をハラ〳〵と流しながら、予の腕を確と抱へて、

「櫻井中尉殿、あなたは今大事な軀です：：：」

「泣く事はない、どうしたのか？」

彼は予に耳語して、

「中隊長殿が戰死しました。」

予は之れを聞いて愕然とした。中隊長が「前へ！」の號令は、只の今の事である、予が中隊長と離れたも亦た只の今の事である。然るに大尉は既に亡き人となつたのである。一瞬にして川上大尉と予とは幽明を隔てたのである。夢か現かと疑へば、伊藤曹長の指示する處、中隊長の遺骸は、僅か二三間離れた壘道の中に斃れてゐた。予は走り寄りて大尉を抱き起し、

「中隊長殿：：：」

予はかういつたきり胸へ何ものかが込み上げて來た、されど斯くてあるべきならねば、予は中隊長の持てる機密地圖を取りて、猛然として奮起し、第十二中隊は是れより予が指揮するぞと叫んだ。而して中隊長の死骸は負傷者の中にて之れを收容して下れと命じた。一人の傷兵

が中隊長を舁ぎ上げんとすると、又たもや急所を撃たれ隊長に寄凭つて死んだ。代る者も、代る兵も皆傷つき斃れた。

予は二宮少尉を呼んで、小隊は悉く纏まつてゐるかと尋ねたれば、然りと答へた。予は又た伊藤曹長に連絡を絶つ勿れと命じ、予は散兵線の中央に在ることを示した。されど暗夜の事とて、如何なる地形なるか、孰れの方面より進むべきか、更に辨別出來ず。暗き空にヌツと聳えたるは、望臺と北堡壘となり、天嶮は前に横たはり、身は釜中に在るに等し。かくても尚ほ一隊は袖を連ねて前進せんとした。

「第十一中隊、前へ！」

予は歩を右方に取つて進んだ。丸で夢中、實に當時の情況は殆ど何事をも明かに記憶せずと云ふの外はない。

「連絡を切るな、切るな。」

これぞ予が此の時に叫んでゐた唯一の言葉であつたのだ。暫くにして手足と頼んだ伊藤曹長の聲も聞えなくなつた。暗に閃く劍尖も次第に薄らぎ、黒山を築きつゝ進んだ部下も今は餘す所數人となつた。忽ちにして予は棍棒もて毆られたやうで、バタリと四這に倒れた。

予は遂に傷ついた。予は右手を撃たれたのである。此の時盛んに打揚げられてゐた敵の火箭の光に、累々たる部下の死骸を見ながら、予は傷ついたる右手を差上げた。見れば腕關節より碎けて、ブラリと垂れ下り、血は止め度無く迸り出てゐる。予は豫て繃帶包を解いてゐたから、直ちに三角巾を卷きつけ手巾にて包み、敵壘に樹てんものと誓つてゐた日の丸の旗もて頸に吊した。

見上ぐれば望臺は谷一つを隔る彼方に、空を摩して峙つてゐる。水を銜まんと欲して腰を搜れば、水筒は既に無く、吊革のみが足に纏つた。さうして突撃兵の聲は次第に靜まつた。是れに反して憎き敵の光彈の光と、機關銃の凄じき響とは、愈々烈しくなつた。予は靜かに兩脚を撫でて、未だ傷つかざるを知つたるより、再び起つて軍刀の鞘を打ち棄て、白刃を左手に杖突いて、此の山を下り、團壁を飛び越して望臺に攀ぢ登つた。

長大なる重砲はヌツと前に聳えた。今や部下幾人かある？　黒く群がるものは皆死屍なり！

「生きてゐる者は尾いて來い！」

と呼はつても、答ふる者とては幾許もない。恐らく他隊も等しく損害を蒙つたのであらうと思ふと、予は實に心細くなつた。最早續き來らん援兵も無し。一人の國旗を持ちたる兵卒を堡壘上に登らせて、之れを樹てしめんとしたが、忽ち聲も立てずに斃れた。この時俄然此の世の聲とも思ふべからざる、凄じき叫聲が四面から起つた。

黒き木柵の如き敵の一隊が、堡壘の左側に現はるゝと見るや否や、忽ち予等を取圍んで喊聲を揚げた。地利の惡しき悲しさには、之れに敵する由も無く、寡兵の悲しさには、之れに刃向ふ力無し。予等は峻坂から跳ね落された。敵は歩み乍らに射撃した。而して予等は先の團壁に達するや振り返つて敵に面した。茲に一大混戰が演じ出された。劍尖入り亂れて戰つた。敵は機關銃を引き出して、縱横無盡に撃ち放す、敵も味方も諸倒れとなつた。併し予は其の場の現狀を委しく語ることが出來ぬ。何となれば予は已れの存在を自覺しなかつたからである。唯だ予は夢中に軍刀を振り廻してゐたのである。又た手應へもあつたやうだ。しかしまたいつの間にか喊聲も立たなくなつた。忽ち予の軍刀は

一響きして折れた。左手は貫かれたのである。倒れて復た起ち上らん隙も無く、一彈來つて又右臂を擂いた。踏みしめて起ち上らんとしたれば、物の崩るゝが如くに、力なくバタリと轉倒した。

この時一兵卒あり、予のあるのを見て、

「櫻井中尉殿、一所に死にませう……」

予は彼れを左腕に抱いた。さうして無念！無念の切齒をなしつゝ、此の接戰を打戍つた。心は狂へど、身は又た起つこと能はざるものとなつた！

二八　死中再生

八月二十四日の朝は白々と明け放れた。戰場は彼我の死傷者を以て埋められてゐた。予は抱ける兵士を顧みれば、彼れは曾て予が部下なりし一等卒小野伊助であつた。小野は右眼を失ひ、横腹を刳られてゐた。彼れは最早命の非なるを知り、予を見て共々に死せんと叫びしことの健氣さよ。彼れを抱ける予の左手は、赤き血の塊を吐き出して、彼れの頸元に注ぎ込んだ。彼れは靜かに手を動かし、繃帶を取り出して、予の左手を包んでくれた。予は斯く敵圍に陷りたるが上、この重傷を蒙りたることなれば、所詮此の場を立退かんことは思ひも寄らず、今にして命が絶えなければ、おめ〳〵敵手に陷つて、死に勝る恥辱を受くるは知れ切つた事である。されば今は直ちに潔く腹掻き切らんと、心は急つたが身には寸鐵をも帶びず、四肢も亦た用を辨ぜざるを如何にかせん。只だ無念の涙に咽え苦しんだ。

「小野、おれを殺して歸れ！　この有樣を報告せい！」

と予は彼れを促して命を絶てよといつたが彼れは諾はず、血は兩眼を盲しながらも固く銃を握つて、

「一抵抗します〳〵」

といひ續けてゐた。

予は彼れを諭すに、敵は逆襲に轉じて、予等は其の包圍に陷り、而も昨夜來、非常な深入をしてゐるから、此の儘にてあらんには、唯だ敵の俘虜となるばかりだ、さうなつたらドウするか？　おれは手足が立たぬのだから早く殺して、汝は遁れ歸るのが慈悲だぞと云へど、彼れは既に正氣でなく、唯だ一抵抗します〳〵とのみ云ひつゞけてゐた。予は最早成すべきやうなし、此の上は天命に任せて、息の盡くるのを待つの外無しと思つたが、でもドウにかして小野を助け歸したく、且つは現下の戰況を、あるか無きか知れぬ聯隊長に報告したくもあつた。

「擔架を持つて來い、歸るから。」

と促し立てた。先の地隙へすら、擔架の運び來らぬものを、今、此の敵圍中に何とて之れを持ち來ることが出來ようか。予はそれを承知してゐた。されど若し彼れにして幸に生きあつて本隊に歸ることを得たら、この戰況と且つ予の戰死――實に數時間の後に予の息は絶えた――を傳へ申べしと信じて、かくは彼れに命じたのである。固より夢中の彼れは、斯くと聞くや忽ち、「待つてゐて下さい！」と云ひたり、圍壁を跳り越して其の姿を失つた。彼れは果して首尾能く敵圍を脱して遁れ歸りしか？　後日、予は彼れと病院に於いて再會し、互の奇運に驚くのみであつた。

予は幾多の死傷せる部下(？)に取卷かれて孤り横たはれり。此の時ほど我身ながら、神の如

く清く嚴かなる時はなかつた。予は家兄の寄せたるネルソンの語を幾度も繰返して、事假令成らざりしも、予は茲に一代の務を終へたることを喜んだ。他には何事をも考へず、唯だ止め度無く、迸り出づる血潮が滾々に、享年二十五歳の生命を奪ひ去りつゝありしを知るのみにて、負傷の痛苦は毫も之れを感じなかつた。敵の若干は予の前方二三間の壕内に右往左往に馳せ、一人で五六挺づつもの銃を引受けて、我が殘兵に向つて射撃しつゝあつた。予は目を見開いて彼等の動作を打戍つてゐた時、後を振向いた一人の敵兵は、予が尚ほ生きてゐるのを見て、他兵に目配せし、忽ち三四發ドン〱撃ちかけた。而して劍を揮ひ跳り上つて進み寄つた。

予は目を閉ぢた。

予は將に突き殺されんとしたのだ！　嗚呼、此の身は鐵石に非ず、而も四肢擱けて戰ふべき力も盡きたる予は、何とて之れを禦ぐことを得よう。予は正に豺狼の毒牙に劈かれんとしたのである！　然るに天は尚ほ未だ予を棄てざりしか？　嗚呼、此の刹那、嗚呼、此の瞬間、予は遂に近く接戰の聲を聞くのみにして、敵の劍尖より免れたのである。敵兵が予を目掛けて跳り上つた咄嗟に、我が負傷兵の五六名が飛び掛つてこれと格鬪して皆そこに斃れたのである。斯くして唯だ死を待つばかりなりし予の息の根は、戰友の生命を以て購はれて、辛うじて繋ぎ止められた。

折しもあれ、阿修羅王の勢にて、ドッカと闖壁に立ち上がり、劍銃高く差上げ喊聲を放ちつゝ、敢然として躍り込んだ一兵卒がある。予は彼れの猛勇と剛膽とに喫驚した。嗚呼、されど彼れは何處よりか飛び來りし敵彈に、撃止められて、崩るゝが如くに予の右側に倒れかゝつた。彼れは寧ろ死を求めんが爲に、最後の喊聲を張り揚げ、健氣にも、唯だ一人敵中に躍り込んだのである。

稍あつて、我が軍よりする銃彈は、盛んに予等の頭上に破裂し始めた。着發彈は予等の身邊に落下して血煙を揚げた。或は足、或は手、或は首が、眞黑に寸斷せられて飛散つた。予は觀念の眼を閉ぢて、我が銃彈のため一思に粉碎せらるゝことなら、それこそ望んでもなき介錯なれと念じてもゐたが、予は尚ほ其の碎破するところとなるを得ずして、小破片のみが予の手足を傷つけた。予が左足の邊にゐた一負傷兵は、この砲彈の破片で、顔の眞向から唐竹割に劈かれて、足搔き藻搔き、虚空を攫んで苦しんでゐたが、頓て俯伏になつて息は絶えた。

予は半死半生で一氣に死にもせず、さりとて再び戰ふことも出來ず、只だ一分刻みにされるとは何たる因果ぞ！　予は又た頭上にて、「日本萬歳」と叫ぶもののあるのを聞いた。目を開いて微かに一瞥すれば、嗚呼彼れも亦た傷つける狂者であつた。彼れは頻りに萬歳を唱へ又た、「日本兵、來い〱！」と絶叫してゐた。彼れは叫び狂ひ、狂ひ疲れて、やがて其の聲も聞えなくなつてしまつた。

數個所の傷口より流れ出づる予の血潮は、殆ど全身を朱に染め成した。繃帶を卷き付けたのは唯だ兩手ばかり、他は其の儘に打棄ててあつた。予は目を閉ぢては靜かに思ひ、目を開いては四方を見廻した。予は左方を顧みたるに、翩翻たる日章旗の下に斃死せる二人の我が兵あるを見た。思ふに此の地點は此の兩軍の中立地帯となり、我が兵到らば敵の砲火に碎かるべく、敵兵現はるれば我が銃彈の斃す所となつ

たのであらう。嗚呼、日章旗を樹てゝそこに斃れある二人の兵士、蓋し是れ一篇好個の活ける詩ではないか？

此の戰場の詩景を認めて微笑を催したる間も無く、予は生來最も無念に堪へざる一事に出逢つた。嗚呼、文明の人よ、仁義の士よ、冀はくは此の一事を記憶せよ！　予は嚢に負傷の柳川大尉を虐殺したる粗野の露人が惡逆を怨んだが、今は又た目睫の間に於いて、彼れが殘忍を横暴にするを實見したのである。予は一人の傷つける敵將校が、連りに手招ぎして、己れの脚を指しつゝあるを見た。其の時これも亦た傷を蒙れる我が看護手一名が這ひ上つて來た。敵將校は彼れに向つて、脚を繃帶せんことを求むるが如くに手眞似した。看護手は彼れに近づき、腰なる嚢より繃帶を取り出だして、敵の脚に纏うた。彼れ看護手は能く仁俠博愛の道を守つて、敵とは云へ、傷つける者に何の恨も無し、之れも等しく國事に勞したる士だと思つたから、甲斐々々しく、其の傷つき惱める脚を繃帶し與へたのである。如何に殘忍獰惡なる敵とても、此の仁義の看護に感謝するに涙を以てせねばならぬのである。然るに彼れ敵將校は、此の恩人に酬ゆるに果して何を以てしたか？　握手なるか？　感涙なるか？　否々、決して然らず！　咄、彼れ暴戻なる將校は、此の仁俠の看護手に報ずるに、拳銃の一彈を以てしたのである！　文明の人よ記憶せよ！　仁義の士よ忘るゝ勿れ！　看護手が繃帶を巻き終ると共に、敵將校は、忽ち腰なる拳銃を拔いて、一撃以て恩人の生命を奪ひ去つたのである。此の狀を目擊したる予が悲憤の念は那許りなりしぞ？

悲憤禁ぜず、怨恨制し難き予は目を閉ぢ歯を噛んだ。既にして予は息苦しくなつた。絶命の期も最早遠からじと覺つた。時に予の胸倉を攫んで引き上げたものがある。しかし須臾にして又た放たれた。予は微かに目を開けば、二三の露兵が坂を登り行くのであつた。嗚呼、予は既に俘虜たるの恥辱を受けんとしたのである！　予を攫み又た予を棄てたる此の一刹那、これぞ生死のけぢめ、榮辱の境であつた！　敵は一旦予を攫み上げたが、最早死せりと信じて打棄てたものであらう。さもありなん、予の全身は悉く朱に染んで居たのである。

時に何者か一人、予の左側にチヨコ〳〵走り寄つて、無言の儘に仆れ凭つた。死んだのかと思へば、さにあらず、死者の眞似をしてゐたのだ。稍あつて彼れは予に耳語して、

「歸りませう！」

予は絶え〴〵に苦しき呼吸の中に、彼れを見れば、ツヒぞ見知らぬ一兵卒である。其の頭には繃帶を施してゐた。予は彼れの忠言に答ふるに、予は今の場合、迚も生還することは出來ぬ。願はくは予を殺して歸れと頼んだれば、彼れも予の生命を全うして連れ還ることは覺束無いが、死骸だけでも取つて歸る、敵中に棄て置くことは出來ぬと云ひつゝ、予の左手を握つて其の肩にかけた。其の途端、先の程より予の右側に仆れて唸いて居た彼の勇卒が、苦しき息の下に、涙聲で、

「末期の水を飲まして……下さい。」

予が胸は張り裂けんばかりになつて、再びドッカと彼れと共に仆れた。彼れは予の部下なりしならん、予を呼んで末期の水を求めた。予は部下を棄てゝ獨り歸る心になれなかつた。

「おまい、水を持たぬか？」

予は予を背負つた兵の左側にあるに尋ねたれば、彼れは己れの水筒を取り出し、予の胸を濕し

て、靜かに臨終の兵の口に注いだ。すると彼れは碎けた手を合して、微かに「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛」と唱へて、やがて息を引取つた。

彼の兵は又もや予の左手を握つて擔ぎ上げ、一息に走つて鬪壁を飛び越すと共に、バタリと倒れた。あたりに落ちてゐた外套を手早く拾つて、予に打ちかけてから、予の右に伏した。かくて予は見知らぬ一兵に救はれて塹壕を出たが、其の時胸壁の右角に脚が觸れて、始めて劇しき創の痛みを感じた。

「彈丸が今大分に來ますから、少し待つてゐませう。」

と、暫く死者の眞似をしてゐたが、やがて彼れは已れの銃劍を拂つて、手拭もて予の折れたる右脚に副へて縛り付けた。其の時予は喉が渇いて切りに水を求めたので、彼の兵は已が水筒を傾け盡して予に與へつゝ、「澤山飲んではいけませぬ。」と云ひ、又た「今少し辛抱して居て下さい。」と屢々慰めてくれた。又た予の傍には幾多の戰友が唸き苦しんでゐたので、彼れは親切にも、落ちたる水筒を拾つて、彼等の口に注ぎ與へた。予は未だ此の義俠なる兵卒の名を知らなかつたので、

「おまいは何と云ふか？」

彼れは微かなれども、力籠めた聲で、

「近藤竹三郎と云ひます。」

「何處の聯隊か？」

「高知の聯隊であります。」

予は實に部下にもあらず、同聯隊の兵にもあらず、未だ嘗て一瞥だにせしこと無き、他聯隊の兵士の救ふ所となつたのである。彼れと予と、予と彼れとは、如何なる宿縁の絲にて結ばれたるものなるかを知らない。されど我が軍隊に於ける上下の關係の親密なる事は、此の近藤の如き、士卒の龜鑑、勇士の美談として千古に傳へらるべき人を産んだ所以である。予は救ひ出だされてから數時間の後、人事不省に陷つたが、再び蘇生した時、先づ予の念頭に浮んだものは、即ち近藤竹三郎といふ慕はしい名であつた。

竹三郎は、先づ予を望臺の敵壘中より救ひ出だしたかなれど、我が軍の在るべき地點へ到らんには、前途尚ほ遠く、剩へ白晝敵前に機關銃火を冒して歸らねばならぬのであつた。此の場合、彼れは自らも負傷せる事とて、到底存命の覺束無き予を打棄てて、早く安全なる地に遁るゝの方法を求むれば好きに、彼れは「助けます」との一言を守り、千難を排し、萬苦に耐へ、而も炯敏なる智慮を廻らして、如何やうになりともして、由來何の恩義の係ることも無き予を救ひ出さんとしたのである。彼れは身を以て予を蔽ひつゝあつたが少時してのち、

「今又た彈丸が澤山に來だしました。だが夜になつたら、敵が突殺しに來ますから、今から行きます。死んだものと思つてゐて下さいよ。」

彼れは予を外套に包みて、而して近傍に在つた一傷兵を手招いた。傷兵は匍匐し來りて、予を見るや、

「櫻井中尉殿ではありませんか？」

彼れの誰れであつたかを覺えない。されど予の名を知つてゐたからには、我が聯隊の兵であつたらう。彼れは予に「ひどくやられましたなア」と云ひ、又た竹三郎と何事か密語いた。予はこれより此の二人に舁かれて、今は懷かしき戰友が無殘の墳墓となつた望臺を後にした。二人は五歩にして伏し、十歩にして休れ、其の都度死人の眞似をして、首尾能く敵の目を眩きつつ、予を舁ぎ往いた。而して予は未だ傷の痛み

を覺えなかつたが、挫けた骨の相摩する毎に、得も云はれぬ痛みを覺えた。[illegible]胸髀も[illegible]くべき日光直射の眞晝中に、[illegible]山下と覺しきあたりの鐵條網下の地點まで運ばれた。

此處に棄てられた稍少時にして、予は次第に昏睡状態に陷つて、何事をも知らぬやうになつた。予は出血の夥しかつた爲めに、遂に人事を辨ぜざるに至つたのである。此の時に於いて予は既に戰死者の數に算へられ、郷里に在つては、我が師村井氏の如きは此の報を聞いて、曾て予が戰地から先生に贈つた端書を佛壇に供へて、香華を手向けられたとのことである。

予は一旦絶息して數時間を此の地點で過した。されど未だ死なかつた……予は再び息を吹き返した……其の時恰も重砲彈が程遠からぬ處にてグワツタンと破裂して、石と砂とを飛散せしめ、予も其の砂時雨を浴びた。

この響に予て我が魂は再び此の土に呼び返されたのだと覺えた。再び我れに還ると、俄かに劇しき傷の痛みを覺え出した。試みに比較的健全であつた左足を動かしたが、少しも動かぬ。血は流れて固つてゐた。此の時又た、[illegible]を去らずして、予が頭の上に圍んで日蔭を作り、予を打[illegible]つてゐるのを見た、予は[illegible]なくして彼れを見ることは出來なかつた。

彼れは予を[illegible]つた外人[illegible]に縛り付けて、折から集まり來つた四五人の負傷者に、是非とも、予を助けて、繃帯所まで送りくれよと頼んだ。彼れは予の顏を覗き見るやうにして、

「中尉殿、私の傷はたいした事でもないやうですから、未だ後へは退りませぬ。中尉殿の傷は重いのですから、御體を大切にして、早く快くなつて下さい。」

かくて近藤は遂に予を去つた。これより復た再び彼れと相見ず！

予は彼れと握手して、其の熱き義俠に感謝することを得たるか、嗚呼、予は之れを能くし得なかつた。唯だ予は心中無限の感謝を以て、彼れの恩義に泣いたのみであつた。一樹の蔭、一河の流、皆是れ他生の縁なりとは云へ、自ら好んで身を釜中に投じ、瀕死の予を救うて敵圍を脱せしめたる彼れは、實に予が再生の恩人である。然るに、彼れ近藤竹三郎は、これより後一ケ月ならずして、戰死を遂げたことを知つた。之れを聞いた予の悲痛は如何ばかりであつたか。予は泣きて彼れに謝せず。彼れは英魂既に遠く去つて、自ら千辛萬苦の餘に救ひ出したる予の今日あるを見ることも出來なくなつた。想うて此處に至ると、予は泣かんと欲しても聲を成さず、語らんと欲しても辭を成さぬのである。

此の夜、暗中を利用して敵前を忍びつゝ、四五人の兵は、予を擔いで繃帯所を搜り索めた。予はなほ氣が遠くて、殆ど夢の地であつたから、何事も能くは覺えぬが、たゞ途中で今まで運ばれて來た儘に、擔架に移し載せられたことだけを記憶してゐる。而して遂に忙がはしく人の馳せ廻る地點に据ゑ置かれた。これぞ實に繃帯所であつた。斯くと知つた予は思はず、

「安井君はゐるか？ 安藤君は？」

と叫んだ。すると、

「おれが安藤だ！ 安井も居るぞ！」

との答があつた。予は兩氏が此處にゐようとは、固より承知してゐたのでなく、只だ慕はしきまゝに兩氏の名を叫んだのに、淺からぬ友の縁の絲は、予を茲に導き寄せ、離合集散の

常無き習の戰場に在つて、圖らずも、今は此の兩軍醫の手によつて救護せらるゝに到つたのである。嗚呼、天は實に不思議の邂逅を予等に許したのである。予は思ひがけなくも二氏の聲を聞いて、胸が迫つた。

「安井君！　安藤君！」

兩軍醫は予の手を取り、予の額を撫でて、

「能くやつた…能くやつてくれた！…」

見れば我が大隊長上村少佐の死屍も我が左方に横たはつてゐた。少佐は第一散兵壕を攻擊する時に、最先頭に立ちて予等を激勵してゐたのに、今や魂無き骸となつて、安らけく此に眠り、其の從卒は屍を擁して、聲を限りに泣き喚いてゐた。予はやがて繃帶を受けて、後方へ送り返された。折角不思議に廻り合つた兩軍醫とも、云ふに云はれぬ泣き別れをして…

後日安井軍醫に逢つた時に、氏は予を收容した當時の狀況を語つて云ふやう、

「假繃帶所の位置は、我が隊の傷兵の來るべしと豫想せられた處でないのに、君を救ひ得たのは、實に不思議中の不思議であつた。歸り來つた負傷者に、君の安否を尋ねたが、誰れも皆、多分戰死したのだと答へ、中には鷄冠山の鐵條網下で戰死してゐたと答ふるものもあつた。されば君は到底生きては還らぬものと思つたが、切めては死體だけなりとも拾ひたいものと思つて、君が何處に斃れてゐるかと樣々に搜したけれども、更に知れぬ。其の內、宗岡と云ふ軍曹が戾つて來たので、又た君の事を問うたれば、鷄冠山の地隙に死んでゐたと答へたから、早速看護手を督勵して、擔架を持つて迎へにやつた。けれど暗さは暗し、剩へ敵彈が尙ほ烈しくて、進み行く事が出來なかつたため、空しく途中から引返して來た。されど打棄てゝはおかれぬと、又たも擔架を送ると、思ひがけなくも、まだ息の通つてゐる君を載せて歸つたので、予等は豫想外の喜びをした。だが其の時に一見して、君は最早數時間の後に絕息するだらうと思はれて、安藤軍醫と顏を見合せたのだ。だから君を野戰病院へ送つた時には、予等は暗に君と長の暇乞をした積であつた。扨て予は其の後、君を救つた近藤竹三郎なるものに會つた。然るに因緣は不思議なものだ、其の時から恰ど一ヶ月後の事、或日一人の兵卒が、圖嚢を肩にして、予等の繃帶所の側を通つてゐると、忽ちパッタリと仰向に仆れた。予は直ちに走り寄つて見ると、君を敵圍から救ひ出した近藤竹三郎であつた！　予は君を救つた人だと思へば、懷しくもあり、又た可哀想でもあり、もはや蟲の息になつてゐたが、予が腰なる水筒の水を飲ませ、君を救つた禮をいふと、彼れは微笑を洩したまゝ、安らかに絕命した…」

嗚呼、予が再生の恩人たる近藤竹三郎は、其の貴き生命を流彈の爲に殞したのである。

第一回總攻擊は、斯の如き慘劇を演じて、其の局を結んだ。二回三回又た四回と重ねたる總攻擊も亦た慘烈の極であつた。されど我が軍は毫も之れに屈せず、益々鋭氣を鼓し、愈々手段を盡して、死守の强敵を攻めに攻めて、遂に之れを攻め拔いた。予は第一回總攻擊後の旅順攻圍に就いては、之れを語り之れを筆にするの權限を有せず。之れを語らん事必ずや他に其の人があるであらう。實に予は其の後病床に在りし事殆ど三百日、手は動かず、足は立たず、痛苦の裡に、只だ思ひを遙かに遼東に馳せて、忠勇なる將卒が陣頭の武者振を夢想するのみであつた。然るに時も時、折も折、明治三

十八年の初春を迎へた第一日、蘇士以東第一の堅城と唱へられたる旅順大要塞——露國が東亞侵略の策源地と頼んだ此の地は、遂に長く皇軍の猛威を支ふること能はずして開城し、守將自ら出でて乃木將軍の旌下に命を乞ふに至つた。此の報を得た予——否、予のみならず、苟くも攻圍軍に參加した凡ての負傷者は、喜んだと云ふよりは、寧ろ泣いたのである。旅順の山谷を埋めた我が軍勇士の白骨も、此の時に齊しく起つて舞躍したであらう。「仇を……」と叫び「旅順が……」と呼びつゝ、無限の怨を含んで斃れたる忠義の靈魂も、茲に初めて其の安慰を得たであらう。

嗚呼、武運拙くして、多數の部下を戰場に殺したる予は、如何にして、其の忠魂に謝することが出來ようか？ 幾多の同胞を棄て、只だ獨り救はれ歸つた予は、何の顏あつて家郷の人等に見ゆることが出來ようぞ？

戰は休んだ。嵐は靜まつた。勇士の貴き血もて此の平和を購つたのである。旅順の山は竟に夷かなる秋もあらう。遼東の河の竟に涸るる日もあらう。されど過ぎにし大戰に際し、わが 大皇の御爲に身を捧げ、わが祖國の爲に命を殞したる、忠勇義烈なる將卒の偉勳は、永遠に青史を照らし、其の英靈は萬づ代にわが豐榮のぼる日の本の 礎 を護るものである。

銃（じう）後（ご）

明治三十七年八月二十四日作者は[illegible][illegible]臺にて傷き、七年後の同じ頃古戰場を訪づれ、最後の場所に立ちて戰友の靈を弔ふ、雜草の上中央に立てるは作者、背景は望臺砲臺である。

「銃後」はこの草の上より生れた。

櫻井大尉か先年「肉彈」を著したとき、我輩は之れに序文を與へて、聊か世上に紹介するの勞を執つた。しかるに其の書か明治天皇の叡感を蒙り、大尉は破格を以て拜謁を賜はつたので、我輩は實に天徳の厚きに感し、また大尉か無限の光榮を祝したのてある。

而して其の書かまた英文に譯せられたとき、我輩は著者に代りて、之れを締盟國の元首に進獻したか、當時の米國大統領ローズベルト氏は大尉と我輩とに宛て、各〻一通の書面を贈られ、此の書によりて、いよいよ深く日本人の忠勇義烈に感すといはれた。また英國先帝は皇弟コンノート親王に「肉彈」の一讀を勸められたとも承はつた。其の後「肉彈」は各國の語に飜譯せられ、露語にも譯せられて、彼の國民をして、戰敗の眞因に自覺せしめたといふことてある。蓋し「肉彈」は日露戰爭によりて露はれたる日本人の强盛なる精神を眞率に語り傳へたるもので、著者其の人は既に劍を取つて勳功を樹てた上に、また其の筆によりて我か國民性を世界に明示するの功を奏した。蓋し國民は之れに對して大いに感謝するところかなくてはならぬ。

櫻井大尉は更にまた砲火の背後に活動したる將士、國民の消息を傳へんかため、爰に此の「銃後」を著すに至つた。そもそも戰爭の勝敗を決するは、兵數の多寡、兵器の巧拙如何にもよるは素よりの事てあるか、されと其の最大動力は、兵士の意氣てある。精神てある。かの旅順の堅壘を碎いたものは、實に銃後の人たる乃木將軍以下將卒の力てあつた。大尉の筆は之れを明かにするか爲てあつて、また死生の巷に立つて、最も美しく流露せる人情を描き出したものてある。且つ我を知ると共に敵をも知らさるへからすの主意て、露軍の勇敢にして、是れまた人情に厚きの消息をも併せ傳へてゐるの

である。

由來戰爭ほど人の眞情の現はるゝ場合はないので、これには一點の虛飾も混へず、眞の最も眞なるものである。これを戰爭美とも謂ふべきか。この美を捉へ來り、飾らず、僞らざる筆を以て、巧に描き出すのが、戰記文學の重んずべき所以である。櫻井大尉の「肉彈」は此の點に成功して、日露の大戰が文學上に與へたる甚だ貴重なる書物である。然るに大尉が之れに加ふるにまた「銃後」の一篇を以てせんとすると聞いたとき、我輩は大いに之れを贊同して、乃木將軍はじめ其他の將軍達にも話しておいたことで、いづれも其の書の早く世に出でんことを待ち望んでゐられたやうである。さうして大尉は一昨年旅順の戰跡を訪うて、戰友の墳墓を弔うたと聞いたが、其の折の感慨は那計りなりしぞ。想ふに大尉は之れによりて、必ずや大いなるインスピレーションを得たことに相違ない。嚢には自ら死生の巷に立ちて身に數創を蒙つたことの新たなる經驗を以て「肉彈」を著し、今は戰跡の訪弔により、深く往時を追憶して、この「銃後」を語る。かの「肉彈」と此の「銃後」と、此の二書は相俟ちて共に世界に向つて、永へに日本民族の精神を語り傳へるものたるべきを信し、我輩はまた玆に此の新著を天下に紹介するに至つたことを喜びとするものである。

大正二年一月

大隈重信

銃後題言七則

一

櫻井忠溫君は肉彈の後を承けた此書に銃後と題した。明治三十七八年役に勝を決したのは、銃後の人たと云ふ意たさうた。肉彈の名か旣に奇警てあつた。この銃後の名は警拔な上に雅馴てある。予は先つ此書の命題を褒めなくてはならぬ。

二

大戰役か大藝術品を産まなくてはならぬと云ふ期待は誤つてゐると、Baudelaire か云つたやうに記憶する。それに拘らす、日本國民か肉彈と銃後とを得たのは多幸てある。

三

若し「眞に個人を寫すものは小說以外に無い」と云ふ論か是なら、肉彈銃後も亦小說として看ることか出來よう。これは史記を司馬遷の小說たと云ふとは違つて、新しい觀察てある。現に小說は架空なものた、事實て無いものたと云ふ見解は、次第に破れて行くては無いか。

四

Tolstoi の「戰爭と平和」は一八一二年役を書いたものてある。併しあれは或る奇僻な立脚地から銃後の人を見たに過きぬ。傾向的なものて、或は議論を行るに小說を以てしたと云つても好いかも知れぬ。肉彈銃後は「戰爭と平和」に比へると、逈かに客觀的てある。

五

同し人の Sebastopol は戰爭小說の最も優れたるものとして推されてゐる。あれか一尉官として從軍した Tolstoi の手に成つたやうに、肉彈銃後も亦同一境遇の櫻井君の手に成つた。

六

明治三十七八年役は彼に於いて Andrejew の「赤い笑」を產み、我に於いて肉彈銃後を產んだ。肉彈銃後の着實に比へると、「赤い笑」は「巧妙なりと雖、浮華なることを免れす」と云ひたい。

七

肉彈銃後には我を勇なりとし彼を怯なりとする、廉價な筆法か一切斥けられてゐる。これは櫻井君の書の褒むへき廉の主要な一つである。肉彈銃後には目覩した事以外に、出來得る限り廣く銃後の人の逸事か網羅してあつて、其書に記錄としての價値か賦與せられてゐる。櫻井君の著述は此方面からも褒めなくてはならぬ。

大正二年二月

森　林太郎

「銃後」の著述に就いて

予は七年目に再び旅順を訪うて、其の殘壘に立つた。さうして墓場の如き戰跡を彷徨し、往事を憶うて涙を嚥つた。歸來筆を此の「銃後」に取つて、今日之れを發表することになつた。

「銃後」の名は、元英國大使マクドナルド氏の、「日本軍か戰捷の最大動力は蓋し銃後の人にあり」といつたことに取つたのである。卽ち兵の勝敗は器にあらずして、人にあることを書いたのてある。

「旅順戰はドンナ成行てあつたか」「この時露軍はドウしてをつたか」といふのも興味のあることたから、其の大體たけは書いた。旅順戰の表も裏も、之れてあらましの模樣か分るつもりてある。

露軍側のことについては、旅順行を機會として、可なり手を入れて捜索した。騾馬を追ふ支那人の私語にも、露軍の無念の歴史か添つてゐると思つて耳を傾けて之れを聞いた。吾人の露軍に學ふへきことは頗る多い、卽ち特に此の點について讀者の注意を求めるのてある。

予か「銃後」を著述しつゝあつたことは、乃木將軍も承知してゐられた。今日之れを上梓するに際して、將軍の既に亡きは、予に取りて多大の遺憾てある。

將軍其の人か既に偉大なる銃後の人てあつた。予は此の書か幸に何等かの印象を讀者に與ふることか出來るならは、予は將軍の志に對して多少の安慰を捧くることを得るものてある。

大正二年一月

著者しるす

目次

口繪（一〇五）

伯爵大隈重信閣下序文（一〇六）

陸軍軍醫總監森林太郎閣下序文（一〇八）

自序（一一〇）

第一　再び旅順へ……一一四

第二　昔の事ども……一一六

第三　思ひ出……一二〇

第四　大連の今昔……一二三

第五　御伽噺の旅順……一二八

第六　陷落の日……一三一

第七　隊舍の夕……一三四

第八　紙の砲臺鐵の砲臺……一三七

第九　內輪もめ……一四〇

第十　無間地獄……一四三

第十一　攻擊精神……一四六

第十二　海上の念佛……一四九

第十三　ウオッカと三鞭酒……一五三

第十四　ヽヽーの家……一五四

第十五　露西亞の兵隊……一六〇

第十六　戰友の有難味……一六五

第十七　犬と馬……一六九

第十八　蚊と蠅……一七二

第十九　高粱の蔭……一七五

第二十　天幕長屋……一七八

第二十一　戰場の子別……一八〇

第二十二　死時の安心……一八四

第二十三　泣いて戰ふ……一九〇

第二十四　彼我共に危し……一九七

第二十五　殘壘に立つ……一九九

第二十六　流血の地……二〇二

第二十七　南川の里……二〇五

第二十八　懷爐の殼……二〇九

第二十九　人道の敵……二一四

第三十　死の隧道……二一七

第三十一　靑年の國……二二一

第三十二　腕の電柱……二二四

第三十三　少年密使……二二七

第三十四　慘中の人道……二二九

銃後

第二　再び旅順へ

「ドウもあの雲がよくありません、玄海では大ぶんやられませう。」などと心細いことを天草丸の機関長はいふ。

「低気圧の中心は、船の右にありますか、左にありますか。」と聞くと機関長は「左の方ですが、マアこの船も中心に近い方でせう。九州の西部は大分やられてをりませう。」などと、容赦なく心細いことをいふ。ところへ事務長も来て、「ドウもこれでは危いやうですから、今から六連島で風を待つことにしました。」といふ。海上は轟々と唸り、風矢の如く、雨横に飛び、此の船も今にどうなることかと思はれるほどであつた。

乗客は大分多いので、室には少しも余裕が無かつた。一等船客たるところの予は——薩摩守を極め込んだのだから余り威張られはせぬが——サルンに毛布を持ちこんだり、食堂の隅へ積んだりといふ始末であつた。「こんな時化に会つて、いつ出るとも分らんものなら、なまじ門司へ引返したら、良ささうなものだ。」といふ人もあつたが、事務長は、「一旦港を出た以上は、どうしたとて引返すことは出来ません、入港手続などが面倒ですからなア。」といつたりした。そして「お客様さへお構ひなくば、いつでも船は出しますが……」などと嚇かされた。船に乗つては、モウ手も足も出された始末でない。マアおとなしくしてゐるのが勝だ。

四十三年の秋であつた。郷里へ帰つて、予は故中隊長の墓詣りをしようと思つて、丸山といふ陸軍墓地に往つたことがあつた。遠目にも雪の降つたやうに白くなつてゐるのは、皆新しき墓標である。如何に多くの戦死者があり、そして如何に多くの戦友が死んだかといふことを思うて、戦場生残りの予が、之れを訪ねて行くといふのも既に感慨が深かつた。山へ上つて片端から中隊長の墓を探して行くうち、図らず、右にあるのは我が大隊長の墓であり、左にあるのは某の墓であり、かれを見ても、これを見ても、そこらあたり皆我が戦友の墓であるので、予はいひ知れぬ悲哀を感ぜずにはゐられなかつた。そして一度は戦場の跡を弔はねばならぬと思つたのが、此の度の旅順行の動機とも成つてゐる。

往年予は鹿児島丸の甲板に立ちて、雨にかすめる故国の山々をながめながら、これが日本の見納めかと思へば、何となく名残惜しかつたが、あの時も雨、今日も雨、行く先も同じ旅順と思へば、当年共に此の海を渡つた戦友の事などを思ひ出して、予は淋しき感慨に耽つた。

いつの間にやら、時は早や七年も立つてしまつたが、今は固より往いて還らぬ船旅ではないけれど、スクリュウの音も、汽笛の音も、昔のまゝのやうに聞えて、波濤を蹴つて関門海峡を出る時は、ツイ鼻先に敵が銃尖を揃へて待つて居るやうな気がしてならなかつた。

緒方船長は頬鬚の生えた、鼻の赤い、眼の小い、腹の太い、それは愛嬌のある人であつた。船長は尺八の名手(?)と見えて、上甲板の自室

では、斷えず、よくも根氣にあれ程吹けるものだと思はれるほど、吹いて／＼吹きまくつてゐた。失禮ながら、あまりお上手の方でもないやうに思はれた。あれでは海若の威も鎭まるまい。却つて船が感動したり、お客が醉つたりするだらうなどと、いらぬ心配もした。

六連島で十六時間の碇泊。十七日六時錨を拔いて出ると、直ぐ玄海灘。荒の後で波が高い、船は夥しく動搖する。二千五百十九噸の天草丸も少々やられた。元氣さうな顏をして、「ナニ君、醉ふと思ふと醉ふのだよ、平氣でゐたまへ。」などといふ先生からして、割合平氣でなくつて、いつの間にやら寢室へ退却せられた。縱になつて寢るよりも、横に寢る方が醉はぬなどといふ人に限つて、頭が上らなかつた。飛行船にでも乘つたやうに、スーゥと船が持ち上がると、金盥をさげて、「コリャどうもならぬ。」などと、青くなつてサルンへ轉げ込んだ將校もあつた。「陸軍の方は總別船にお弱いですなア。」と船長が象のやうな目をしていつたが、全く陸軍も海へ來てはからきし駄目であろ。拔山の勇はあるか知らんが、こんなにゲー／＼いふやうでは、踏海のとの字も覺束ない。食堂も初めの内は顏揃ひがしてゐたが、追々減つて來た。引込んでしまふのは、大かた陸軍の將校であつた。どこに居るのか、出發以來顏を見せたことのない人もあつた。それでも船にはゐたのである。料理番もカウしいけては大分儲かつたであらう。コンナことをいふものの、予も弱い方では大抵負けてはをらぬ方であつて、「甲板に立つて大空を眺めて、口をあけてゐさへすれば醉はぬ。」といふと、君は強いのだよといはれたこともあつたが、いくら大空を眺めて、口を鰐のやうに開けてゐても、天草丸では利目がなかつた。尤も海というても、瀬戸内海より知らぬ予であるから、餘り當にはならぬ。出征で此の海を同じく渡つたときは、海といふ觀念も、船といふ觀念もなかつたやうに思はれてならぬ。今から考へて見ると、コンナに搖れる船といふものに乘つて行つたのであらうかと思はれるくらゐである。船長のいふことには、任務が無いと船員でも醉ひます、海軍將校は船に醉ひさうもないやうなものの、矢張りお客樣として汽船にお乘りになれば、大抵人並には醉はれます、責任といふものはエライものです、船がひつくり覆るやうになつても、持場に在るものは、中々醉ふことはできませんといつたが、成程予等も出征と見物とは、其處に大變な違ひがあるだらうと思つた。

情ない譯だが、寢室の無い予はサルンに齧りついたきりであつた。芳名錄を引つ剝がして見ると、勝手放題な落書がしてある。「人生如船」などと書いてある。成程人生はコンナ船のやうでもあらう。「旅立の金の工面も七發島、親に背いて今ぞ黃海」だの、何だの、譯の分らんことが書いてある。

此の夜は朝鮮多島海を縫ひ、濟州島を左に見て、孟骨水道を取り、七發島を目標として航海してゐた。狹窄水道を取るのが近道なさうだが、此の夜は霧のために之れを捨てたのである。夜の引明けに巨文島を見てからは、もう山を見たくも見ることが出來ぬ。多島海は霧がかゝると災難である。鐵嶺丸は大連から歸りに、こゝで霧にやられて、岩へのしあげて沈んでしまつたのである。

「こゝへかゝると、鐵嶺丸のことを思ひ出して身震ひがします。」と船長は上甲板の欄干に凭つて、暗い空を望み、墨の如き島影をすかし見ながらいふのであ

つた。予は船長と共に吹き曝しの甲板に立つてゐた。緒方船長は鯨獵などにも經驗のある人らしかつた。何が話の緒口であつたか、確とは覺えぬが、鯨は非常に子を可愛がるもので、南海で子を生むと、牡鯨と牝鯨とが並んで、其の間の鰭の上へ子を乘せて黑潮を流れてやつてくる、子持鯨を見ると、もう占めたもので、獵師は早や手にはひつたもののやうに喜ぶ、彼等は巧みに綱で子鯨をからんで引き廻すと、親鯨は狂氣のやうになつて、子について行く、程よしと見たところで、銛を打ちこむ、頭に銛を打たれ、血潮を吹きながら、なほ子に引かれて行くのは、人情として、二目と見られたものでない、實に可哀想なものだと、船長はキラキラと鱗のやうに閃く波の上に眼を落しながら語つた

こんな話から始めて、かれこれと話が切れなかつた。夜氣濛々たる甲板上に立ちて、予はエンヂンの響と、時々船室から洩れる咳拂ひとを聞きながら、海上の征服者の如くに意氣軒昂として船長に向つてゐた。

天草丸といふのはもとアムールといつた露西亞の病院船で、旅順港内に繫いであつたが、我軍が二百三高地より擊つた二十八珊砲彈のために擊沈せられてしまつたのである。尤も病院船といふものの、港口を封鎖せられてからのちは、船も明家になつて、鼠一疋をつたといふわけでなし、軍艦の舷側にピッタリ凭して、其の楯にしてあつたさうである。どこでも擊つて來いと、大手を廣げてゐたのであるから、沈沒も謂はゞ名譽の戰死で、何の不思議もないが、時移り、事變り、今は名こそ天草丸であれ、紛れもないアムールが、大阪商船の持船となつて黃海を渡つてゐるといふのも、世は樣々なものである。曾て旅順の海に沈沒して居た露國の船に乘つて、旅順へ行くといふのも、また面白い廻り合せである。

第二　昔の事ども

松山に居つた露國將校のいつたことがある。「日本兵はなか〳〵工夫を凝らしたと見えて、戰場には、「諸君の友人は、日本の松山といふ、山秀で、水清きところにあり。諸君はかゝる極樂郷を望まずや。」などと、まづい露語で大いに挑發的な文句をならべ立てて、つまり無益な抵抗をやめて降參しろと書いた引札みたやうなものの落ちてゐるのを見たこともあつたが、コンナ手ぬるいことで降參する露兵もないが、さて僕も不運にして囚れの身となり、評判の松山へ來て見ると、山水の美は御吹聽の通りかも知れぬが、要するに日本人は甚だ薄氣味の惡い一種の魔物である、早い話が日本人は宙を飛ぶやうに歩き、火事場へでも驅けつけるやうに落着いてゐない、子供は我等と摺れ違ひざまにギロッと睨んで通る、中には敬禮をする子供もあつたから、感心だと思つて擧手の答禮をする間に、早や手を下して活潑に步調を取つてゐる、竹を擔いだり、日の丸の國旗を振つたりして、堤防へ向つて突貫してゐる――元氣な兵隊だ、練兵場では、軍服を着た年寄りの百姓兵が、家鴨のやうな足付で練兵をしてゐる、キモノを着た田舍漢、幾千の腕白者が群集してゐる、色の黑い將校が一歩あゆめば、その群集は一歩ついて行く、二歩あゆめば二歩ついて行く、サアベルの後へゾロゾロついて行く、練兵場の一方には、鑿や、鉋の音も賑やかにバラックを建てゐる、粗末なことは云ふまでもない、こんな

にバラックを建てて、まだ善良なる露西亜人を捕へて來る積りか知らんが、御苦勞なことだ、提灯行列があるたびに、我等の胸はドキ〳〵してゐたが、日本人は萬歳々々と歡呼して、何千とも知れぬ紅い提灯が、どこまでも續いて、濠の水も血を流したやうな美觀――凄じい光景を我等は見せられた、笛や太鼓でワーワーとバラックを襲撃して來るやうに、行列はバラックの傍まで來たこともあつた、我等の中には之れを見て憤慨し、同情無き市民と絶叫して、大いに喰つて掛かるべしなどと暴れ廻つたものもあつた程である、といつた。軍服を着た百姓兵――なるほど家鴨のやうな足つきをしてゐる百姓兵でも、女優を連れて戰爭見物に來てゐた露國貴族や、細君を連れて砲臺の窓から覗いて居た將軍の眼玉をギョッとさせたのである。

露紙ノーウォエ、ウレーミヤは曾て「日本軍隊は國民と一體同心なり、吾人は日本に於いて『徴募』なる言語の矛盾せる音響を了解するに苦しむものなり。小學校は只管兒童の軍事的精神卽ち尚武的氣風の啓發に全力を傾注し、國民の皇帝に對する服從心、祖國に對する愛念の如きものが、戰爭の爲に殊に深甚の意義を有するものなることを了解せしめ、之れを其の心裡に固定せしめんとしつゝあり。」との一節を記してゐたが、こゝが彼の國に於ける立場とは少しく異なつた點である。クロパトキン將軍も、今回の失敗は固より自分が惡いのではあるけれども、併し此の責は國民も半ば分たなければならぬといつてゐる。

武村少尉が或る時可愛い手紙を見せた。少尉は戰に召された小學校の先生である。手紙は生徒からの慰問狀で、尋常三年生總代としてあつた。その先生の出征を思ふところの情は、讀むものをして皆泣かしめた。そして其の一句が又頗る振つたものである。これは彼の「日本を解釋することの遲かりし。日本人の如何なるものかを熟知してゐたならば、かゝる無謀なる戰爭は惹起さなかつたであらう。」といつたところの露國某將軍に讀んで欲しいやうな氣がしてならぬ。それはかうであつた。

「……けれども先生、いくさは十年間かゝつて下さい。さうすると私等は二十になりますから、先生と一しよにキット旅順を落します。」とかう書いてある。旅順は今日にも落ちるか、明日にも落ちるか、日淸戰爭では半日で取つた旅順が、今度に限つてなぜ落ちぬか、何を愚圖愚圖してゐるのだらうと、明けても、暮れても、早く陷落の報を聽かんものをと、待ち焦るゝ中に、少國民は十年ののち成人して、先生に加勢して旅順を乘取らうといふ。戰場に打つて出るのは、必ずしも髭男のみではない。予は之れを少年兵とでも言はう。少年兵の加勢は、實に百萬の援兵を得たよりも、尙賴もしい。當時十歳の少年は、早や十七の血氣熾んな靑年となつてゐる。彼の少年、今はいづこに健在してゐるか。

或る露國將校は砲臺の陰で兵卒に、日本人は男といふ男がみな出拂つてしまつて、もう大連では腰の曲つた老人や、腹の膨れた女までが來て働いて居る、日本兵を殺し盡してしまつたら、日本人といふ日本人は、今朝生れた赤ン坊まで、旅順へ引きよせて殺してやるのだと、大層恐ろしい氣味の惡いことをいつた。ところがソンナ減らず口を叩いて居る口のまだ閉ぢない内にグツタンと一發喰はされて、今朝町で買つたカフス、ボタン迄叩き潰されてしまつたといふことであるが、砲彈の我等の庭園に落つる日

があらば、竹槍でも、出刃庖丁でも、火繩銃でも引つ張り出して、腰の曲つた隠居でも、お腹のふくれた奥様でも、それこそ今朝生れた赤ン坊でも、祖國の爲には、祖國の血を最後の一滴迄も流すことを辭せぬものなることを一言して置かねばならぬ。

予が戰場を離れて、大連赤十字病院にあること七日、ガラ／＼と馬か荷物かのやうに、擔架のまゝ吊り上げられて、博愛丸の病室に運ばれるまで、砲聲が何耳についてゐた。予は時々耳を澄まして砲聲を聞かんとした。ドーン、ドーンといふ音が耳から離れなかつた。そして四肢みな繃帶で卷いてあつて、血がにじみ出てゐるのを見て、そこに一種の誇があつた。けれども大連を立つのは實に厭であつた。總ての負傷者は內地へ還らずとも、こゝで良くして戴けませんか。モウ一度第一線へ出たうあります。」といつたものである。ガラ／＼と車を卷いて梯子を上げて波止場を離れると、浮游水雷が海月のやうに轉けてをり、旅順口の驅逐艦が迷子のやうに迂路ついてゐるけれど、それが爲ではないがどうしても後へ送り還されるのは厭だと思つた。戰場を退くこと、戰友を殘して歸ることなどを思ふと、俄かに繃帶の誇も無くなつて悲しくなつた。そして停車場で國旗を振つて歡呼する人や、學校で先生から戰話を聞く兒童や、田圃に鍬を立てながら、出征兵士を乘せた汽車を眺めてゐる農夫や、帝國萬歲などと、首を傾げて書いてゐる提灯屋や、命から二番目の髮の毛を切つて、戰捷を祈願する若い女などが、廻燈籠のやうに、應接に遑なく眼前に展開して來て、今朝送つて出て、まだ草鞋も解かぬ內に、早や負傷者が歸つて來て、之れを迎へねばならぬ國民は、あまりに無慙であると思つた。

再び見ることはないと思つた故國の地に入つても、何も見られなかつた。門司が見えるといふ聲も、病室で橫臥したまゝで知らなかつたが、宇品で初めて戰場とは打つて變つた故國の山水を見た。宇品であつたか、廣島のツイ近くの船着場であつたか、確とは覺えぬが、何んでも苫を葺いた船が澤山かゝつて、山形の印や、軍だのいふ字がチラホラ見えて、陸軍の追送品であらうが、それをヤレコラセーと人足が放り込んでゐた。予の艀舟はこれらの船と船との間を縫うて、石垣の崩れたやうなところへコトンと着いた。なんでもモウ日の暮れがたであつた。船が着くと、小倉の服を着た爺さんが提灯をつけて「お迎へにまゐりました。」といつた。艀舟に乘つて來た醫員が、「病院からか？」といつたら、「ハイハイお迎へで御座います。」と、それは優しさうな爺さんであつて、提灯には「廣島豫備病院」と書いてあつた。予は「病院からお迎へ」を受けるやうになつたかと思ふと急に悲しくなつた。

予は手も足も利かなかつたから　五六人の人がエンヤ／＼と腫れものに觸るやうにして船から揚げた。そして病院の擔架に移されて、爺さんの提灯を先頭に、二人の人夫に擔がれて連れられて行つた。

病院へ行く道筋には、提灯を點してズラリと人が並んで、丁寧にお辭儀をしたり、「バンザイッ！」と手を擧げたり、中には御苦勞で御座いますなどといつたりするのを見聞きして、無量の感慨に打たれ、深き感謝を表したことである。彈丸に中るといふのも、何か前世の宿緣であらうに、戰線を退いてまでも、かゝる優遇を受けようとは、實は期してゐなかつた。提灯には、「大手町有志者」「本町有志者」「青年後援會」

「帝國陸海軍萬々歲」などがあつて、中には祝出征などいふのもあつた。

予の手術を受けたり、足のギブス繃帶をされたりしてゐる内に、一ケ月が過ぎ去つて旅順には第二回總攻撃があり、「東郷さんがあまり追ひつめるので、魚形水雷が山へあがつた。」などといふこともあつて、彼れ是れする中、第三回が計畫されてをつた。予は善通寺の豫備病院へ轉送されることになつて、廣島驛から汽車に乘つた。

窓が高いので、予は外を見ることが出來なかつた。予は矢張り擔架に乘せられてをつた。驛へ着く毎に、人がドヤ〳〵と窓の際に寄つて來て、「水を差上げます。」「お茶を召上がれ。」といつて茶碗と土瓶とを持つて廻つてをる人もある。「着物の綻びはありませんか。」といつて、針に絲を通して持ち廻つてをる婦人もあつた。同行者は十五六人もあつたが、足の達者なものは元氣だから、皆予の擁護者であり、車窓の外の光景の説明者であつた。ヤア〳〵柿がウント生つてるナアー、なんどいふ報告がある、覗かしてくれといつたところで、擔架を擔いで上げる程の健康者は一人もなかつた。田圃に鍬を立てて居る姉さん冠りの農婦は、手拭を取つて默禮した。踏切で萬歲といふ聲が聞えたかと思ふと、もう見えなかつた。子供を負つた、どこかのお神さんが丁寧に禮をした。負はれた子はフンゾリ返つて小さな手を擧げた。ガランガランと鉄力鑵が鳴ると、雀がバタバタと稻叢から逃げたなど話す。鑵詰の殼！　戰場では前哨線の信號にもなり、煙草盆にもなり、漬物桶にもなり、あれ程調法なものはなかつたのだと、コンナ混雜した思ひ出がある。

「尾の道！　尾の道！」ゴーッ！　ワーッ！　と騷然たる鳴動の中に、予の擔架は車外に擔ぎ出された。

腰の曲つた婆さんが、無花果を持つて予が擔架の傍へ來て、「御苦勞で御座いますナ！　お摘みで御座んせうナア。」といひ〳〵、無花果の皮を剝いて予の口に薦めた。予は柿は好きでも、無花果は嫌ひである。併し折角の親切を、嫌ひですといふ譯にも行かず、一生の勇を揮つて大いに舌鼓を打つたところが、「モウ一つ召上がれ。」と、早や皮を剝いて用意してをられる。これには困つたと思ふところへ、尾の道は無花果の名所と見えて、右からも無花果を、左からも無花果を、引つ切りなしに無花果の襲撃を受けたので、これには閉口したけれども、其の志には泣いた。

それより予の擔架は無花果と色々の贐とを乘せて、波止場に向つて運ばれた。道は祭日が立つて、塵一本もなしに掃き清められてゐた。軒頭には國旗がヒラヒラと飜つてゐた。此の年月、國旗は、一日として竿頭から取り去られなかつたであらう。

赤き傘、紫の傘、若き女、老いたる女が擔架を取巻いて、葬列に從ふ如く徐々として歩んだ。「生きながら死したる」予は、棺桶の如くに街衢を練つた。

「お痛いでせうナア。」

「お水を差上げませうか？」

予は何といつてよいか分らなかつた。一言口を利いたら、擔架は直ぐ止まつて、さうして「どうかなさいましたか？」と尋ねられるのであつた。

波止場は黒山を築いてゐた。汽船は何處に居るのか、黒山の人垣に隱れるほど小さなものであつた――まさかそんなでもなかつたが――この擔架がどこから入るだらう、網で舷側へ吊り

上げておかれた方が、結句樂であらうなどと、コンナことも考へたりしてゐた。

　こんな手輕な汽船でも、汽笛だけは恐ろしく大きい。猛獸の咆哮するやうな音を遙かに立つるのが、予の傷に響いて痛む。この時より早や神經痛が兆してをつた。

「右へ寄せた、オイ少しそちらへ引いた。」と、擔架を上甲板のサルンへ横たへられる。右脚はギブス繃帶――漆喰でぬり込めてあつたから、鐵の玉でも括りつけてあるやうな重みを感じて、自分の足だとは無論思へない。兩手も繃帶で縛りつけられてあつたから、丁度息の通つて居る木像を轉がしたやうなもので、随分厄介な代物なのである。傍には病院から貰つた葡萄酒と例の無花果とが整頓してある。

　再び猛獸のやうな唸りを揚げた。見送りの人は「どうぞ御大事に」「御氣をつけなさい。」「ボーイさん、氣をつけておあげなさいよ。」「御不自由なものはありませんかナ。」と窓から波止場から、梯子から、あちらからも、こちらからも浴せかけられる。予は只「ハイ、ハイ、イーエモー」といふより外に答へることが出來ない。

船員が持場について、船がモウ岸を離れようとするときに、洟を垂らした十二三になる紺飛白の着物を着た袖はピカ／＼と鼻汁で光つてゐる男の子が、チョコ／＼と入つて來る。「坊！モウ船が出るガイ、なにするのぞ。」と、誰かがいつたやうだが、子供は振り向かない。そして予の側へ來て懐から紙袋を出して、「兵隊さん、これ上げよー。」といつて枕元へ置いて出て行つた。後でボーイが開けて見たら煎豆であつた。これは非常に嬉しかつた。この親切は今に忘れない。

　予は天草丸に搖られながら、コンナ昔のことを思ひ出してゐたのである。

第三　思ひ出

　出征の思ひ出は、何に觸れても直ぐに出る。忘れようとして忘れられぬのは、出征の思ひ出である。

「櫻井！　俺ぢや……」

といふ聲が、黑山の如き堵列の外から、予の耳に達した。その聲は松浦先生の聲である。予は十五の年から先生の弟子となつて繪を習つた。

先生は甲斐々々しく草鞋を穿き、袴の股立をとつて、隊の行進するに連れて、田の畦を小走りについて來られる。

「櫻井！　俺ぢや……バン……ザイぢや……

バン・ザイぢや、俺ぢや／＼。」

　先生が七十近い老體を以て、かゝる姿で見送つて下さる有難い志を思うて、予は目禮をしただけで、一言も言葉をかけることは出來ない。先生が「バンザイぢや。」「俺ぢや。」といはるゝ、その「ぢや」の中には千萬無量の教訓があると思つて、軍旗を捧持する手も震へた。先生は眼を拭うて、丁寧に頭を下げられた。

　予が負傷して、善通寺の豫備病院へ後送された時であつた。先生は直ちに予の病床を見舞はれた。それは予が重傷のため烈しき神經痛を起して、一人遠く離れた病室に寢かされてゐる時であつた。

　先生は病室にはひると、曩の日とは打つて變つて窶れたる予の顔を見詰めながら、ボンヤリ立つて言葉が出ない。先生は予の右の手の血に入染んだ繃帶の上を撫でて、はらはらと熱き涙を落される。先生は予の右の手が最早や繪筆を取るに堪へないであらうと思うて、それも一つ

の嘆きであつたのではあるまいか。予も此の時は先生の顏を仰いだまゝ、

「先生はよく、此の遠方を、わざ／＼見舞つて下されて、私は御禮の申しやうも御座いません。先生は船で御出でになりましたか。」といふと、先生は、

「何の、何の、御前、俺や歩いて來たよ。」と言はれる。予は驚いて、「先生、先生は、此の遠方まで歩いて御出でになつたのですか。」と、予は曩の日の事など思ひ出して、自然と涙が落ちた。先生は、「御前が難儀をして來たのに、俺が車や舟に乘つて來ては勿體ない。俺や歩いて來た。」と云はれたときに、予は先生を拜して男泣きに泣いた。先生は、予が出征の其の日の如く、草鞋を穿いて、實に五十里の嶮道を踰えて來られたのである。また先生は斯う云はれた。

「お前はモウ繪をかくことは出來まい。これから俺がかいて送つてあげるから、それを見て樂しむやうにしなさい。」と、それからといふものは、幾枚となく繪を送つて下された。予は先生の畫を壁に貼つて、傷の痛みも忘れるほど嬉しく思つてゐた。

先生はかやうに情深い人である。しかし天は無情か、此の善人に幸することが、いかにも薄い。奧さんには先立たれる。それに大次郎といふ働き盛りの息子さんも、其の嫁さんも、皆死んでしまつた。今は先生が二人の小さな孫を抱へて、漸く一管の畫筆の先で、淋しき晩年を送つてゐられる。予はいつでも、先生の身の上に思ひ到ると、堪へられなくなるのである。

親も元氣なら、妻も元氣、子も元氣、揃ひも揃うて無病息災、借金も無ければ、貸も無し、疊替へもしたし、障子も張つたし、鼠も居らぬ、心頭に掛る雲も無しなどと、人の一生はさう旨くは問屋が卸さぬ。離れ難きを離れ、棄て難きを棄て、愁を斷つて、君國のため水火の難に赴かねばならぬときもある。そこが日本男兒だ。そこで予は哀れにも亦勇ましき兵士辻金藏の身の上話をせねばならぬ。

ある日曜日のことであつた。金藏は歸營時間に遲れたため、營倉を申付けられた。平素模範兵の模範たるところの金藏が懲罰に處せられたと聞いて、誰も驚かぬものがない。中隊長は、これには何か深い仔細があるのではないかと訝り、或る寒き夜、彼を營倉より出だして、聯隊の北西の隅の石垣の蔭へ連れて行つた。古城の松にかゝれる一輪の寒月は、廢墟の下に佇む兩人の袖に物凄く輝き、ホーホーと鳴く梟の聲、叢に潜る狐狸の音――死の額の如く冷かなる其の夜、中隊長は他に洩れてはならぬと、わざわざ此處まで金藏を連出して、身の上を聞いたのである。

金藏は世にも哀れな若者といはねばならぬ。彼の父親は近郷に聞えた無賴漢で、酒は浴びる程飲むわ、人を強請るわ、賭博は打つわといふ風で、手にも齒にも合はぬ惡徒であるから、誰も相手にするものがない。毛蟲のやうに嫌はれると、それを結句幸にして、いよ／＼我儘が增長して手のつけやうがない。然るに哀れなるは金藏の母親である。榮養不良のために鳥目にはなる。足の腱は痺つて少しも歩けぬ。それのみならず、彼が一人の弟は盲である。憐むべし、父親はこの不幸なる母と弟を虐待して、日夜罵る。近所の人は「又か」と思ふだけで、手を出すものがない。見るに見かねて、口を利くものも無いではなかつたが、擲つかれたり、ひどい目にあつたりしたから、それ以來家の割れるやうな騷動があつても、皆口を噤み、耳を蔽うて知らぬ振りをしてゐた。金藏はかゝる悲慘

なる家庭に成人して、遂に兵營の人となつたのである。盲の弟は、ある醬油屋の倉番になつた。盲の子が貪婪饜くなき父のためには、酒手を得なければならず、病める母のためには藥を求め、粥を薦めなければならぬといふ悲慘な事になつた。けれども目の見えぬ倉番は、無論長くは勤まらない。三日とたゝぬ内に、倉から追ひ出されてしまつた。

不幸なることの續けばつゞくものである、金藏が入營してから間もなく、父親は賭博犯で捕はれ、獄舍に繫がれてしまつた。盲の弟は村を彷徨うて、里の犬に追はれつゝも、人の門戶に立つて食を乞うた。一家の窮苦は既に其の極に達した。世に神や佛といふものがあるならば、彼等は其の加護から洩れてゐた。

金藏はこゝに至つて絕望の淵に沈んだ。兵舍の燈火影暗くして、雨窓をうつ夜にも、月影庭の砂に冷かなる夕べにも、獄裏にある父のこと――身寒うして蔽ふべきものもなき母のこと――飢ゑたる狗のやうに門から門に追はれる弟のことを思うて、悲しく、つらく、恨めしく、泣くにも泣かれぬ有樣であつた。

金藏は僅かな給料も母に送つた。戰友が談笑する間にも、金藏は如何にして母と弟とを養ふべきかに苦悶してゐたのである。遂に金藏は休日には出でゝ車を挽いて、賃錢を得るの外道なきことを知つた。

金藏は軍服を脫いで、破れた法被を着て荷車を挽いた。銃を取る其の手に轅棒を握らなければならなかつた。劍を佩ぶる其の腰に繩帶を締めなければならなかつた。さうして「歸れ歸れ！」と喇叭の鳴り響くときには、佩劍の音、軍靴の響勇ましく營門を潜つた。金藏が車を挽いてゐることは、誰も知るものが無かつた。

或日のことであつた。重い荷物を積んで遠き町まで行つたが、歸營時間までに仕事が濟むと思つたのが、不運にも齟齬し、彼は遂に遲刻してしまつた。彼が營倉に入れられたのは即ち此日のことである。

かやうに悲慘な金藏の身の上話を聞いた中隊長は、大いに彼れの境遇に同情を寄せ、孝心深き彼の心根に感じ、彼れの肩に手を置いて熱き淚を流した。

金藏は罪を解かれた。中隊長の夫人や、多くの將校の同情は、彼が滿期になるまで、毎月手當を母に送ることになつて、其の家は救はれた。

それから間もなく、ある日四五十人の兵が監獄を參觀に行つた。作業場の前に來ると、看守は「敬禮」と令した。囚人は仕事の手を措いて、皆頭を下げた。中に隊が通り過ぎた後まで、まだ頭を上げなかつた一人の囚人があつた。看守が、ナゼ頭を上げぬかと聞いたら、其の囚人は、

「私の倅も入營をして居りますが、今日兵隊さんの御出でになつたのを見まして、さぞ、あれは私見たやうな親を持つて、肩身が狹いだらうと思ふと恥しくなつて、頭が上りませなんだ。」と答へた。その囚人こそ金藏の親であつたのである。如何な彼も、金藏の孝心に感じて改心したのであらう、また改心せずにはゐられまい。

彼れ此れする內に動員があつた。金藏は予等と共に出征した。獄にある父、病に臥す母、目の見えぬ弟を殘して。

予が最後に金藏を見たのは、東鷄冠山の地隙に、夏草の生ひ繁れるが中に、死骸となつて毛布に包まれてゐる時であつた。金藏の頭は柘榴のやうに碎けてをつた。

第四　大連の今昔

話は天草丸に戻る。

南三山島は大連灣の外郭を成して居る。頭の上らなかつた先生も、こゝまで來ると俄かに元氣を出して「割合穩かでしたねえ。」なんどといつて居る。割合も無いものである。青くなつた癖に、こゝまで來ると、モウ船は沈む氣遣なしと思つたか、コンナことをいつてゐる。

紺青の水を拔いて、突兀として富士形を成してゐる山は大和尙山だ。その右にダラダラと起伏してゐるが南關嶺だ。彼の南山は其の間に在る。大和尙山は、鶴が首を立てて聳えてゐるものなら、南山は龜が甲良を乾してゐるに似てゐる。「感慨黃海の水よりも深し。」とサルンの何か雜誌の端に落書してあつたが、全く其の通りである。予は大連港頭に於いて此の南山を見て、既に感慨の情に堪へざるものがあつた。見覺えのある山々が「ヤー暫く！」といつた風に迎へてゐる。「御機嫌好う。」といふところでもあらうが、あの禿げた南山はあまり御機嫌の好い山ではなかつた。日本軍もあれでは大分迷惑をした。

検疫官が來て、色の蒼さうなのを見て廻るときは、誰も船で醉ひましたといふやうな顏はしないで力んでゐる。三等客の中に、花やかな紫色のコートを着て、髪の毛をモシャ〳〵させてゐた女がゐた。「あれはハルピン向きだよ。」と誰かがいつた。大連三界はコンナ女の巾を利かす處であるさうな。砲火の青泥窪たりし大連も、大分變つたものだと先づ感じる。

大連の埠頭には、露軍が數十個の地雷を装置して、今にも破壞しようとしてゐたのが、思ひもかけぬ日本軍の急追に會ひ、電氣の釦一つ押す隙も無かつたのである。「まだ〳〵大丈夫！」などと額を鳩めて負惜しみをいつてゐる中に、早や日本軍が押して來たから、其の周章さ加減たらなかつたのである。

陸上には、帽子を振つて「オー君！」なんどといつて挨拶をしてゐる。「ヤアー有難う。」などと言つてゐる。大連も大ぶん變つた。お迎への人の中には赤い蝙蝠傘などが交つてゐるやうになつた。予のお迎へには苦力が似合ひごろで、あれを見ると予は愉快でたまらない。予はあの苦力が大好きである。

一體波止場で黑い服を着て、金釦をつけてゐるものを「波止場鴉」といふさうだが、大連へ來ると、お役人が皆カーキ色で、飽くまで我黨のカーキ色を發揮してゐる。獨り赤帽の苦力は大いに光彩を放つてゐる。滿洲の空氣には、この紺青の服がよく似合つてゐる。夕日のやうな濃紅の帽子は殊に引き立つてゐる。船が着くまでは、皆胡坐をかいて餘所事のやうに眺めてゐる。あの群集の中へ一發砲彈を落してやつたら見事なものだらうと、兵隊は兵隊らしい考を出す。船が愈々河岸のやうな棧橋に着くと、蜂の巣をつゝいたやうになる。モーゥと油ぎつた埃が渦卷く。全く砲彈が落ちて來たやうな騷ぎである。長髄彥が穿いてゐるやうな靴や、無造作に赤帽の上へ捻ぢ卷いてゐる辮髮は、誰でも氣に入らざるを得ぬ風采である。予等は苦力も、大人も、子供も、お神サンも、ごつたまぜに「你」といふ。不思議な一階級を與へて、總て彼等を唯「ニーイ」と呼んでをつた。そして此の無茶苦茶な「ニーイ」は「支那人」といふことにも「オイコラ」といふことにもなつてゐるから奇妙だ。凡て予等は牛か

じりの支那語を使つて、無理往生に通用させてゐる。支那人は支那語に似た日本語といつてゐるから可笑しい。

そのいゝニー君が雑然混然たる中を、八月十八日午前九時、予は飄然として上陸したのである。

第二軍が南山の敵を撃退して南方に壓迫し、予等が鹽大澳に上陸して、第三軍の尻押をなし、血腥い南山の跡を通つて押すな／＼で青泥窪へ入つた時は、いゝニーが空屋へ亂入して、火事場泥棒を働いてゐたときである。動物園の珍鳥奇獸も悉く網を破つて食つてしまつた。流石に虎だけには手を出せなかつたと見え、彼は世の中の騒動も知らぬ振をして欠伸をしてゐた。薔薇はそのあたり一面に馥郁として咲いてゐた。いゝニーの日には花も香もあつたものでない。唯食ひさへすればいゝのである。予等は潜伏兵捜索の目的を以て、こゝには御馳走があらうか、彼處には旨いものが轉がつてゐようかと、處々へ飛び込んだが、二階へ上つても、三階へ上つても、螺旋のやうな階段を登れるところまで登つて見たが、何にも無かつた。ある家などは、花の種が室一面に散亂して、足の踏みどころもなかつた。此等も一應は持つて逃げる積でゐたと見える。波止場へ出て見ると、トランクや、勲章や、ピアノや、玩具や、ウォツカの樽やなどが、そこらあたり一面に散亂して居つた、露軍は南山がアンナに早く落ちようとは夢にも思つてゐなかつたのである。青泥窪では、負けた露西亜兵が亡者のやうな顔をして戻つて來て「負け負けた。」と町内を振れ廻つたが「冗談おやないぜ、おどかすない。」などと、テンデ耳を傾けるものが無かつた。そして人民は平日の如く、硝子窓を張りかへたり、植木を植ゑたりしてゐたといふことである。けれども間もなく、露軍が海嘯のやうに總崩れになつて背進したので、初めて俄かに煮え返るやうな騒動になつたのである。日本軍が南山を占領してから、僅かに二時間立つか立たぬ中に、青泥窪は火の消えたやうになり、親子夫婦で、鍋釜やランプを提げて旅嚢をさして逃げていつたといふことであるから、隨分機敏に引き拂つたものである。海岸へ行つて船を望んだものもあつたらう。停車場へ驅け付けたものもあつたらう。けれども大抵は駄目であつた。停車場は避難民の叫喚、怒號、罵詈の聲で、車掌が鎮撫の暇も耳に入らなかつた。車掌は老人と婦人と子供とにあらざれば拒絶せんとしたが、避難民は涙を流して、兄弟を姉妹より引き離し、夫を妻より分離するのは、生木を裂くやうなものだといつて憫みを乞うた。そして客車の外側にも、屋根にも、汽鑵車の頭にも、葡萄のぶら下つたやうに縋りついて往つてしまつた。荷物は、擔ぎ出しては見たものの、皆海岸や停車場に棄てて行つた。馬車を引き出して戸外に待たしてゐる内に、馭者の頭を張り飛ばして、何者とも知れぬものが乘つて行つてしまつた。泣く／＼いゝニーに追はれながら徒歩で、泣く子の手を引いて逃げて行つた。いゝニーは思ひも寄らぬことから腹を膨らかし、お客樣を逐ひ出してからは、辻に集まつて、穴のあいた錢を並べて賭博を打つてゐた。見かけ倒しの支那巡警は、棒を小脇に抱へて、大道を關羽よろしくといふ顔で悠々と濶歩し、この群集の傍に立つて眺めてゐる。いゝニーが錢を手のひらに乘せてやると、關羽先生は静かに頷き悠々と錢を數へながら、又あちらの群集へ行く。予等を見て「露國兵ポコペン、日本兵ヨロシイ／＼。」などと愛嬌を振りまいてゐる。辻々では豚の臟腑や、蹄を燒いて、鼻

持ちのならぬ臭氣を販賣してゐる。それをニーが鼻をスコ〳〵鳴らしながら、しやぶつてゐるといふ有様であつた。

昨は住民安堵して青泥窪に止まるべく命令し、旅順に移住することを嚴禁したに拘らず、翌日のしかも夜半に至つて警官と敗兵とは、俄かに市中を狂驅し、眠れる市民に、「金州、南山は落ちたり。我軍悉く旅順に退却せり。」と警告するに至つたのであるから、着のみ着のまゝで、哀れな姿で飛び出してしまつたのである。翌朝日既に高き頃は、饑餓に疲れ果てて、路傍に喘ぐものが數知れずあつたといふことである。

南山において、フォーク將軍は總豫備隊を率ゐたまゝ、遂に戰場に臨まなかつた。ステッセル將軍は、この時南山に來てをつたといふ話もある。或る露國將校がコンナことをいつたことがある。南山へは旅順の兵隊といふ兵隊は皆出拂つて往つてしまつて、旅順は丸で空屋同然であつたのであるから、日本軍が鳩灣から軍艦で南山の背後を打ち、鐵道も毀して置いて、旅順へ上陸して、砲臺の大砲で逼げて來る露軍を撃つたら嘸面白かつたらうと、後で旨いことを教へてくれた。ステッセル將軍が南山に來てゐたことは事實とするものである。南山の防備に依賴し、日本兵何かあらんと思つてゐた將軍は、意外の結果で、夏家子に來て見ると、人間の長い列が煤煙を吐いて走つてゐるやうな汽車を見てビックリして、乘馬も間に合はず、テク〳〵歩いて旅順へ歸つたといふことである。併しステッセル將軍が南山に來てゐたといふことは謊である。來なければならなかつたのに、來なかつたさうである。

大連はいふ迄もなく、露國が滿洲の策源地として建設したる地で、啻に滿洲、西比利亞のみならず、遠く歐洲までも聯絡する大鐵道の末端である。これが一時的のものであつたならば、コンクリートで固めた大埠頭や歐洲式市街を建設する必要も何も無かつたであらう。又手もなく日本軍の手に落ちるやうなら一つ煉瓦を積んではウォッカを飲み、二つ煉瓦をつんではウォッカを飲んでゐる隙も無かつたであらう。けれどもこれが流石に露國の大國的たるところで、人一代で築き上げるやうな考は標準でなかつた。永遠の計畫を立てて、黄色の惡魔を滿洲より追ひ出さんとの決心であつたのである。

大連は舊市街を取り拂つて、思ひ通りに市區改正をして、世界的のものにしようとしてゐた。英國大通には監督教會を建てた。佛國町にはカトリック教會を建てた。ドンナものが入り込んでも、モウ入れませんなどといふ、そんなシミッタレた計畫ではなかつた。もと〳〵極東大守アレキシーフは旅順經營の主張者であつたのである。併しウイッテ伯は、大連を以て東亞の商戰地とし、歐洲人十六萬人を容るゝの計畫で、とう〳〵アレキシーフの戰略的計畫を破つて、あんな大きな波止場まで作つたのである。

予は大連を見て、荒野にあれほどの材料を何處から持ち込んで來たかといふことを疑はざるを得なかつた。遙々歐露から、持つて來ては積み、持つて來ては積み、釘と木片、土塊、煉瓦等が路傍に堆積して、苦力が驢馬を逐うて走り、將校を乘せた馬車、哥薩克騎兵の蹄の音が高く此の間を縫うて居た樣子が目に見えるやうだ。一戰爭は少し早かつた。どうせ取るくらゐならスッカリ出來上つて取つたら好ささうなものだ。釘や煉瓦をもらつて、日本はどうするつもりだ。町には犬ばかり步いてゐるぢやないか。—

と、或る露西亞人が親切に忠告をしてくれたさうだ。

七年の後、大連の日本橋に立つて四顧すれば、こゝが曾て露兵を逐うて來たところとは受取れなかつた。橋の下には幾筋となく軌條が潛つてゐる。貨車も見覺えのある貨車であるが、今は南滿鐵道の極印が押してある。あの貨車に積まれて、負傷者櫻井中尉はこゝの病院まで送られて來たのである。當時予は其の病院を教會堂だと思つてゐた。熱心に祈禱を捧げつゝありし露國の兵隊や、聖壇に跪いて祈禱するところの僧侶が思ひ出されたものであつた。そこが今は赤十字病院となつてをる。

日本橋の袂に交番がある。その後に公衆便所がある。どちらも同じ型の同じ色合の建物である。どちらを交番にしようか、便所にしようかといふ評議があつたさうだが、とう／＼橋に近い方が交番になつた。なんでも便所の方へ巡査がはひつて居たこともあるさうな。便所と間違へて交番へ飛び込んだものも折々あつたさうな。

小池主計正の東道で電氣公園を視た。白塗の建築物が強い日光を受けて、目の眩む程光つてゐる。滿鐵の經營で、遊園場である。大きな金網の中に、猿が十五六疋もゐる。中に一疋大きな、一等目に立つて肥えてゐる猿が、中央の水溜に近く陣取つて四方を睥めてゐる。見物人が眞桑瓜を投げると、みな此奴が取つて食つてしまふ。投げても、投げても、皆外の猿君の口へはひらない。ヒョット間違つて、外の奴が取らうものなら凄いものである、一睨みで引つたくつてしまふ。雜兵は皆チリ／＼して、絕大の權力者たる大猿を遠卷にして、恐ろしさうに又怨めしさうに眺めてゐる。大猿が動き出すと、皆天井へ飛び上つて小さくなつてゐる。予は大猿は征服者であると思つた。夫婦連れの支那人が感心したやうな顏付をして眺めてゐたが、何かの謎ででもあるやうに思つた。

苦力と馬賊と塵埃とは滿洲の名物である。予はこゝにこの一項を附記して置く必要を認める。

一度足を滿洲に入るゝものは、垢面、襤褸、一種の臭氣を放ち、二六時中あらゆる苦役に從ひつゝある輩を見るであらう、これが苦力である。苦力は多く山東、直隸からの出稼人で、金を溜めて故鄕に歸るといふを樂しみに働いてゐる。働くといつたら、それはよく働く。さうしてよく金を溜めるものである。宵越しの金は使はぬといふ日本勞働者のやうに、アッサリしたところはないが、日本勞働者のやうに使ひにくいこともない。勞銀が頗る安くて使ひ易い。奴隸と距ること遠からぬところの一種の動物だなどとは、酷い評だが、成程眞裸で、毛布に穴をあけて頭をつき出してゐたり、南京米の袋を着てゐる、垢と臭氣とを以て光彩を放てる、憫れむべき彼等を見ると、あれでも人間かと思はれる程である。

よく働いて少しく食ふのは苦力である。一日の生活費僅かに五錢以內。仕事の片手間に、玉蜀黍の饅頭に葱の生をかじつて食事をすましてゐる。豚の頭や、臟腑や、骨や、蹄を旨さうにしやぶるのが、大牢の滋味と心得てゐる。湯も吞まず、水も吞まず、簡單なること實に驚くべきものである。夜は大道や、軒下や、車の下に獸類の如く橫たはつて、悠々と安臥してゐる。深夜道を歩くと、黑いものが橫たはつて、土饅頭のやうになつてゐるのを見るは、いづれも苦力である。

賃錢はと聞くと、もとは一日五六十錢であつ

た。それが戰爭のため著しく高くなつて、壹圓から、壹圓貳拾錢位までになつた。食ふものは食はないでも、體は元氣で、毆つたつて死ぬものでないから、金はドシ〱溜まる一方である。中には爲替手形にするものもあるが、大抵は胴卷にして、死んでも放すものでないと縛りつけてゐる。芝罘で十餘の支那爲替店が支拂ふ年額は、無慮二千萬圓に達するといふのであるから、苦力の勢力も亦豪いものである。「日露兩國は多大の償金を淸國より取つたが、南京蟲のやうな苦力が喰ひついて、皆啜ひ取つてしまつた。」といつた人もある。

苦力に次いで有名なのは馬賊である。予が大連に着いた二三日前に、馬賊が大連滿鐵の本社裏の酒保を襲うて、店の夫婦を殺害したさうである。酒保は露軍の貨車の輪を取り外して、其の儘野原へ置いた小屋——箱であるので、夜暗には至極淋しさうなところである。又殆んど同じ頃、四平街を去る南方四哩の廟子溝堀割附近で、我が鐵道守備隊の巡視兵が、約三十名の馬賊に包圍襲撃せられ、我兵は大膽にも賊中へ躍り込んで猛撃したので、流石の賊も高粱畑へ逃げ込んでしまつたといふことである。

滿洲といへば必ず馬賊を聯想する。一種荒涼殺伐の意味を有する滿洲の厄介者は馬賊である。昔は紅毛の髯を用ひ狀貌怪異、一見人をして畏怖せしむる如き扮粧をしてゐたから、紅髯胡子と呼んでゐたといふ事であるが、これを以て考へると、或は元は西比利亞より滿洲に土着した露西亞人のことをいつたのではあるまいか。しかし淸祖奴兒哈赤が七大恨の旗を飜して、滿洲に崛起した時、之れに從つて戰鬪したものの餘黨が、馬に乘つて神出鬼沒、大仕掛の泥棒を働いたから、馬賊といふやうになつたといふ說もある。要するに食詰めものである。

中には罪人もあらうし、燕趙悲歌の士もあらうし、或は鄕曲に武斷し、善にも強い、惡にも強い集團もあらうが、慓悍無賴の徒たるに至つては皆一である。一群の魁首たるものは、大膽不敵の輩ならざれば、好漢豪傑を以て匪徒の推すところとなつてをる者である。彼等の行動は頗る急速で、其の來るや迅雷耳を蔽ふに遑なく、其の去るや疾風の如く、良民は遙かに馬賊の響を聞くときは、直ちに難を避けて、其の爲すがまゝに任さなければならぬ。彼等は人質を取つて、何月何日何時、金何萬兩を持つて、どこへ受取りに來い、時を遲れたら其の場で叩き斬つてしまふから、さう承知せいなどと、馬賊に襲はれたが最後、それこそサン〲な目に逢はされる。

汽車の中でも、馬賊は普通の乘客に混つて、いくらでもゐる。夜に入ると、徐に懷から拳銃を出して隣の客を脅かす、大ビラ切つての追剝であるからたまらない。首尾克く目的を達したら、汽車の窓から飛んで、高粱の蔭に隱れてしまふ。此の間他の客は見ても見ぬ振をしてゐないと、とんでもない災難に遭ふ。其の復讐が恐ろしい。野を分け草を分けても、六親眷族皆誅戮しなければ止まぬのである。討伐隊も出んではないが、軍隊の力でも之れを掃ふことが出來ぬ。一時之れを掃ふとも復來る、掃へども掃へども復來る。遂には官より和を講じ、金錢を給し、又は官職を授けて、一時の無事を圖ることもある。泥棒に追錢どころでない、大變な優遇である。馬賊は之れを撲滅し盡せぬ事情もあらうが、實に滿洲唯一の苦惱は馬賊の跳梁跋扈である。生命も財産も賭けて彼等に一掃せらるゝの非運は、遂に滿洲人をして絶えず戰々兢々として、朝に夕べを計る能はざる

窮民たらしめたのである。
高粱がのびると、馬賊が滿洲の黄色い塵埃を蹴立てて行動を始める。苦力と塵埃と馬賊とは、いづれも滿洲第一の名物である。

第五　御伽噺の旅順

關東倉庫の馬車を驅り、石川參謀と同乘して、汽車にて旅順に赴くべく、大連車站へ行つた。馬車といつても、ニーの驅つてゐる辻馬車よりは少し上等であるが、いづれも露西亞の置土產であるから、あまり威張れぬ方である。ニーの辻馬車は、大連の到る處の辻々に客待をして居る、「大人……車！」などといつて客引きをしてゐる。予はニーが大いに氣に入つてをると同一の意味に於て、此の馬車なるものが、亦大いに會心の物である。馬車は驢馬と並んで歩いたら、丁度脊丈が、同じくらゐの、頗る脊の低い、頑丈作りの幌馬車である。それでも馬が引く、苟且にも二頭立の馬車である。ニーが馭車臺に乘つて、長い鞭を揮り轡を取つて、ホーホーといつて、黄いろい塵埃を搔き交ぜながら疾走するところは、何ともいへぬ愉快なものである。馬車は二人乘りであるが、三人でも、四人でも、また馭車臺にも乘れば乘れぬことはない。それで一人でも、四人でも賃銀は同じだから便利なものである。大勢乘らぬと損なくらゐである。夜になると、歩哨のやうに車の左右に角ランプを點すから、威勢の好いものである。尤も支那人の挽く人力車にも、左右に角ランプをつけてゐる。人力車に二つのランプは餘計なことであるが、露西亞人がランプと石油とを夥しく殘して置いたのであるから、使はれるだけ使つてゐるのであらう。いくら上等のランプをつけてをつても、あんなボロ車に乘るものはなからう。人力車のニーは大抵欠伸をしてゐるけれども、辮髮を振り立てゝ驅つてゐるのは面白い趣好である。それだけでゝ乘つてやる價値はあると思つた。

馬車は馬車だが、恐ろしい不潔なものである。大連から旅順へかけて何臺あるのか知らぬが、夥多しい數であらう。あれで露西亞が遼東を乘り廻してゐたときは豪氣なものであつたらうと思ふ。日本へ引渡すときに、馬車は賣つてしまつたとか、土に埋めて往つたとかいふが、御苦勞にも、わざ〱あれ程のものを土葬したのでもあるまいが、いかさま汚い泥馬車である。それでも今では迚も安い金で、アンナ丈夫な馬車は出來ぬさうであるから、コンナ泥馬車でも大事にせぬと壽命が短からう。

ニーは牛馬を使ふのが上手である　これは殆んどニーの先天的のものであらう。號令で右なり、左なり、勝手に動かして居る。牛でも、馬でも群を成し、ニーの號令で自在に進退してゐる。馬車を驅るにしても、河原でも、畑でも、坂でも、道があらうが、無からうが、平氣なものである。馬も中々强い。日本馬ならとくに殪れてしまふところである。「滿洲馬は耐久力極めて强く、酷暑、嚴寒更に痛痒を感ぜず」といふことだから、どこまで神經が鈍いのか分らぬ。

露西亞は、三十三年北淸事變後から、滿洲に堅い根城を構へて、極東經營に全力を注ぎ、專門の學者を派遣して、農產、鑛產、植林、漁業、工業など、あらゆる產業に對する科學的調査を始めて、植民政策の端緒を開いた。鐵道は哈爾賓より松花江を橫斷し、長春、鐵嶺、奉天、遼陽、海城、蓋平、復州、金州を經て旅順口に到る

二百六十五里をエンヤラ〳〵と軌道を引張つて、線路の過ぐるところ皆我が領土といふ勢で僅かに一年半で旅順口を繋いでしまつた。そして停車場には名所案内といふ工合に建札をして、これより南方何里炭鑛あり、此の附近海岸漁獲無盡といふやうなことを書いて好奇心を挑發し、移住を奬勵し、民業を營ませた。露國の本國では大變な吹聽であるから、久しく涎を垂らして待ちあぐんでゐた野心家は、願つたり叶つたりで、ドシ〳〵滿洲の原ツ場へ繰り込んで來て、縱横十文字に掘りさがして見たが、格別巧いものも落ちてゐなかつたと見えて、不平タラ〳〵で歸國したものもあつたさうである。兎に角大陸的鐵道布設をやつて、車がひつくりかへらなければ好いといふ式で、早く旅順を經營したものであるから、三十四年から五年にかけては、旅順の市區改正も大抵出來上がつて、大連行のものは先づ旅順に上げてから運ぶのが、旅行の順であるといふ工合になつた。そして支那人には土地を寄附しろ、その代り道普請もさせてやる、建築もさせてやる、芝罘から鶏を買つて來てやるから、それで儲けろなんどと調子に乘せて、トウ〳〵只で土地を取つてしまつたのである。其の間砲臺の築城にはみな出て來いと、そこらあたり、苦力はもとより、農民迄もかり集めて、夜を日に繼いでやらしたから、ズン〳〵出來上がつて行く。建築にしても、露西亞は中々うまい工夫をやつてゐた。先づ見本の家を造つて見せて、この通りの家を一つ造つて見ろといふので建てさせる。それで良ければ更に十軒造れ、惡ければやり直すといふ風にしてゐた。又別の設計で見本を建てて見て、この通りのものを建てろといふ風であつたから、旅順の建築物は大抵似寄つたもので、どれも同じ恰好に出來て居る。言葉の通ぜぬ國へやつて來ては、良い方法であつたらうし、又儲けさしてもやれたし、機嫌も取れたらうしたから、謂はゞ安い金で、支那人の御蔭で、砲臺と市街を造つてしまつたやうなものである。

十八日午後二時二十分旅順行の汽車に乘つた。大連車站を發すると直ちに光景が劇變する。これは又甚だしい變化である。歐洲式市の町外れには、泥を盛り上げたやうな豚小屋式倭屋が或は集團し、或は孤立し、白楊樹の蔭に轉がつてゐる。皆ニーの住家である。

大陸の風がサラ〳〵と葉裏涼しく吹き返し、土民が晝寢の蓐となるものは、白楊の蔭であつた。月清き夕べ、支那酒を煽り、銅鑼を叩いて歌ふのも、白楊の蔭である。白楊の蔭は土民の天國である。馬に飲す白楊の蔭――炊煙濛々と立上る白楊の蔭――夕暮にアゴーアゴーといつた風に驢馬の嘶く白楊の蔭――此の白楊の蔭は、また曩の日我等の天國でもあつた。

汽車は流石に廣軌鐵道であるから、室内は頗る廣いボギー車である。昔の軍用列車であるから、裝飾も何にもない。淡白に塗つてある板の匂ひまでが、露國式を發揮してゐるやうで、兵隊さへ詰込めばいゝといふ仕掛が、急切なる戰線輸送の狀況を偲ばしめてゐる。一室百人は樂にはひれるさうである。戰役中露國は各停車場間に、更に二三の列車の待避側線を設け、複線的機能によりて可及的其の速力をも増加し、漸次輸送力を増大して、一時に四五十輛の客車、貨車を聯結せるものが、一日十四五回の多きに達したといふことであるから、一日の人員輸送は實に六七萬に及んだであらう。車窓から外を眺めると、ニーがカン〳〵と照る日光直射の下に頭を暴露しながら、呆然として立つて居る。ニーの頭はどこまで硬いのか、日蔽

でもしたら好からうにと、誰でもさう思ふ。ニヽーは大抵半裸體である。色澤なり、染揚なり、申分ない出來である。澁色などいふ上品な色彩ではない。胸の肉つきから、腕のキリ〱したところは、羨ましい程である。首をつき出して見たら、まだこちらを向いて立つて見送つてゐる。殘る煙を見てボンヤリ然として立つてゐるところは、如何樣可愛氣のある奴である。又ニヽーが居る、また居る。大好きなニヽーがいくらでも立つてゐる。高粱が頭の上二尺位のびて、ユラ〱と動いて居る、高粱では思ひ出が少くない。露軍は陣地前の高粱を薙ぎ拂つて、日本軍を待つてゐた。山を裸にして、――砲兵と雖も身を隱すことの出來ぬやうにして、砲門の蓋を開けてゐた。我軍は粱殼を敷いてコロコロと轉がつて露營の夢を結んだ。石で竈を作り、飯盒を吊り下げ、粱殼を焚いて飯や汁を作つてゐた。或は之れで大砲の頭を蔽うて敵眼を遮り、どこから彈が飛び出すか分らんやうに隱して居つた。負傷者の避難所は亦高粱の繁みであつた。高粱には、大分お世話になつた思ひ出のあるものである。

暗灰色の榮城灣や鳩灣の水を汽車の右側に見て、龍河の岸に出ると、モウ旅順は近い。この附近の山は不案內であるが、どの山にも、鉢卷のやうに、帶のやうに、また蜈蚣のやうに、山の頂きをのたくつてゐるのは、皆露軍の塹濠の痕跡である。河原でニヽーのお神サンが、可愛い子供を大勢連れて洗濯をしてゐた。「君！表忠塔が見える！」と石川參謀が窓から首をつき出して予に指ざし示した。「ハッさうですか？」と發條で跳ね飛ばされたやうに、今迄龍河の向うに立つてゐる煙突を眺めて、あれは何であらうと思つてゐた予は、肩まで突き出して表忠塔を仰いだ。

一體旅順には立派すぎる名があまりに多い。黃金山であるの、白銀山であるの、鷄冠山であるのといへば、ドンナ綺麗な山であらうかとも想像せられる。來て見ると、何だ、コンナところかなどといふところでも、立派な名がつけてあると、見ぬ前に色々と聯想して見るものである。あまりに高く買ひかぶつてゐると、代物を見て落膽することは、能く有勝のことである。黃金山などとは旨い名をつけたものだ。黃金山に風が吹くと、金の粉が海の方へ向つて飛んで行く、白銀山から銀の粉が飛んで行く、海の上は金色、銀色でギラ〱光つてゐる。旅順の鯛や平目は金銀の鍍金がしてあるなどと、見て來たやうな譃を、話上手な男が吐いてゐたものだ。黃金山を占領すると、目が眩んで山から滑り落ちるから用心せぬといかんなどと、おどかしてやつたものである。あんな失敬な山なら、第一號坊主山、第二號坊主山で結構なものである。樹一本もない坊主山にも、松樹山などと僭越な名を誰が附けたのだ。昔は松樹鬱蒼として晝猶ほ暗かつた山であつたのだから、さう怒るなといへば、一體正直な男だから、さうかとも思つて見たりもするが、それも譃だ。旅順の市街の屋根も、道路も、黃金の延板で張りつめてあるんだ。ダイヤモンドの煙突が立つてをり、瑪瑙の橋が架つてゐるのだなどと、知れ切つた譃まで、露營の寢物語に、物識が鼻うごめかして笑はせてゐた。無論いふ迄もなく、露國が幾億萬の黃金で、砲臺も築き、劇場も建てたのではあるが、コンナ稚氣に類した聯想の内に、何ともいへぬ味ひがあつたのである。

「オイ、今晩は煉瓦造の二階の西洋館で寢るんだぞ。」などと、攻擊前進の最中、地雷爆發し、砲彈落下し、何時頭が飛んで行かうとも限らぬ

中にも、嬉々として兵士の語るのを聞いたことがあつたが、野に伏し、山に寝ね、岩間に笑ふ花も踏みにじられて、見る影も無き戰塵の裡、粱殼引結ぶ露營の枕にも、片時として旅順といふ「煉瓦造」は忘れなかつた。「煉瓦造の三階の西洋館」は、予等に取つて非常に樂しみなものであつた。天幕――粱殼――雨露――ニーの家――日の照る山――シト〳〵する谷蔭より外知らない予等は、少くとも煉瓦造の三階建で踏反り返つて手や足を伸ばして、ゆつくり寝てみたいと思つてゐた。こんな時は「死」といふ溝壁を飛び越えなければ、煉瓦造は見えぬのだといふことは忘れてしまつて心は一足飛びに旅順の「煉瓦造」の中へ飛んで行つてをつた。

旅順は丁度袋に入れた菓子を子供が貰つたやうに、開けて見るまでが樂しみであつた、旅順は實に遼東半島といふ福袋の底に入れてあつたのである。

バルチック艦隊は來さうだ。奉天の戰は迫つた。全軍作戰の經過に及ぼす戰略的旅順の價値といふ問題は、大いに考慮を要する事件であり、また大いに考慮もしてゐたが、あから樣に白狀すれば、一にも旅順――二にも旅順――その旅順は金銀、瑠璃、硨磲、瑪瑙で固めた、お伽噺で聞く龍宮か王國であるかの如く、大なる解釋の旅順でなく、小さい、極めて小さい解釋に於ける旅順といふものであつて、これが頗る味ひのあるものであつた。

嗚呼旅順！　かゝる旅順！　予は曾て敵の堡壘に向つて突撃を行ひ、墻壁に登るか登らぬ内に、「小猿奴、何をしてやがる……生命があつたら又出直して來い！」と刎ね返されてしまひ、したゝかに傷を受けて戰線を退き、「煉瓦造の三階建」も夢となつてしまつたが、八月十八日我が汽車は、龍河の岸を馳せながら、懐かしき故郷へ歸つて行くかの如く、又敵を追うて進むかの如く、表忠塔を仰ぎつゝ、午後三時五十分、汽罐車はカラン〳〵と鐘を叩きながら――汽罐車の頭には、眞鍮製の鐘が吊つてある――旅順停車場に着いた。

第六　陷落の日

外國從軍記者は、山の上から首を突き出して、今に日本軍が砲臺を乗り取るか、占領の旗を揚げるかと睨んでゐたらうが、日本軍は中々の遠慮で、容易に砲臺を取らなかつた。イヤ遠慮してゐたわけではないが、進むものも殪れ、進むものも殪れ、旅順占領の機果して何れの時にあるかを疑はしむるに至つたのである。觀戰武官は勇敢なる日本軍人の行動と砲臺の累々たる死骸とを見て、アッと目を皿のやうにして、唯啞然たりといふ有様であつた。通信員は鉛筆を走らして、「酷烈酸鼻を極め、見るものをして震慄慴伏せしむ。」とか、「肝腦地に塗れ、死屍山血に漂ひ、腥羶の氣山野を蔽ふ。」といふやうな、あらゆる悽愴なる字句を羅列して、旅順攻撃の實況かく〳〵の如しと、巧みに修辭を弄してゐたが、傍の人を顧みて、「これは皆譃ですよ。かゝる惨況を筆の先で書からなんて、そりや以ての外の不心得です。私は役目ですから、何とか書かなくちやなりませんが、戰鬪の悲慘痛快なる、蓋し文字の相を絶し、言語の象を絶す、といつてゐては、何が何だか分りませんからなア。」といつた記者もあつたとほり、各々お話にもならぬ有樣であつた。

從軍記者が筆を握つて嗟歎してゐる中に、將士が目を瞋らして敵の堡壘を見上げてゐる中

に、内地の新聞ではチャント號外を刷つて、今にも電報が來るかと、賣子が飛び出さんばかりになつてをつた。氣の早いものは、現に旅順陷落の公報を發表したからたまらない。けれども旅順はなか〳〵落ちなかつた。また號外が出る。また出る。けれども旅順はビクともシャクともしさうになかつた。こんどはイヨ〳〵のだといふのが出る。何度も何度も、新聞社が旅順を陷落させてゐたが、それも終には根氣負けがしてしまつた。旅順陷落の日いづれの時にある、唯この際嗚呼といふ語あるのみといふ有樣であつた。確かに七月の中頃であつたと思ふ。

黄泥川大土屯といふ谷地で攻城準備中、予は屯長の家の納屋にアンペラを敷いて、蠟燭を點して二三の將校と仰向けに寢轉んで、天井から鼻の先まで下つてゐる、長い旗のやうな煤がユラ〳〵してゐるのを見上げながら、「これをそつくり袋に入れて土産に取つて歸つたら、珍らしいだらうと思ふが、驚くだらうねえ。」などと、たわいもないことをいつてをると、「少尉殿居られますか、旅順が落ちたさうでございます。」と、聯隊當番が納屋の窓から頭を突込んで云つたと思ふと、「アーとりやひどいナア。」といふから、顋を上げて窓を見ると、聯隊當番は手で顏を撫で廻しながら、煤で眞黑にお化粧をしてゐる。「ナニ旅順が落ちた？だれが落したのぢや？」「この新聞に書いてあります。」と窓から新聞を突き出した。取つて引つくり返して見ると、某方面に於ける某聯隊の奮戰などと書いた上に、特號活字か何かで「旅順陷落」などと見出をつけて「連日劇戰の結果、我軍は確實に旅順を占領せりとの報、或る一部に達したりと云ふ。」と、結句が甚だ振はぬ報道である。確實どころの騷ぎでない、「うそだよ、連日劇戰もせんぢやないか、ハヽヽヽ。」といつて大笑ひしたことであつたが、コンナ旅順陷落は二三度聞かされた。芝罘電報だの、上海電報だのといふのに、千に一つも事實はあるものでない、譃ばかりいうて嬉しがらせをやつたのだから、罪な電報だ。聯隊長はコンナに度々落ちてしまつたものが、モウ落ちるはずはないといつて笑つてをつた。北進軍では、散兵線の一翼から一翼へと、五里も七里もの戰線を、「旅順陷落申送り」といふので傳はると、「ソアー萬歳ッ！」と全線歡呼するので、ソリ日本兵が突擊だと、足許のふらついた露兵もあつたさうである。こんな事も二三度あつたさうで、士氣を鼓舞する一策であつたかも知れぬが、旅順の運命は、實に日露戰役全局の運命に關するものであつたから、「我軍死傷無數」といふやうな報告を得ると、國民は擧つて、夜の目も合はず心を傷めて、寄るとさはると旅順の話で持ち切つてをつたのである。落ちぬ先から早や祝賀會の會費を集めてあつた。提灯も作つてあつた。けれども旅順は何ともするものでなく、提灯こそ大きな口を開いてくたばれてゐた。しかし三回の總攻擊戰況皆非なるの時、既に幾萬の犧牲を擲ち、我が二人の愛兒まで殺したる上に、「成功を望むの情甚だ切なり。」との勅語をさへ拜したる當面の乃木將軍が心事や如何に。殊に 大元帥陛下の御憂慮は察し奉るだに恐れ入つたのである。かゝる苦戰を重ねた要害、憂慮の中心、待ち焦れの種であつた旅順が陷落して、咽喉に立つてゐた魚の骨が取れたやうに、スーと胸を撫でおろした時は、氣が違ふほど喜んだのに無理はない。門を通る同じ號外を何枚でも買つて、これだけあれば大丈夫ぢやなどと慌てた人もあつたさうな。

或る村で大雪降りの中を、若い者が勇み返つ

て、「モシ、出て下され、お寺へ集まつて下され。」と忙しさらに驅けりながら振れて廻る。その草鞋の跡が白布を敷いたやうな路の上に印されて、まだ雪のこれを埋めぬ間に、「お目出度いことで御座んす。」と挨拶して、蓑と蓑とが驅け違ふ。鎭守の社では、ドンドコ、ドン〱と太鼓を叩いてゐる。お寺ではゴーン〱と鐘をついてゐる。旅順陷落の一月一日は、朝から雪が五寸も積もつた。ヒラ〱と降る雪は、武夫の心の花の散るかとぞ見えた。

　渡部といふ内の嫁は、子供を負つて、雪を衝いて家を出て行つた。暫くすると、グザ〱と雪を踏みながら、門前をドヤ〱と歡呼して通る人も過ぎ去つて、雪はいよ〱降りしきり、あたりは暗くなつて來たが、嫁はまだ戻らぬ。爺さんは炬燵にあたりながらツクネンとして、今日に限つて何の挨拶も無しに出て行つたのを不審に思つて、この大雪に何の用があつて、子供まで連れて、何處へ出かけたのか、村の寄合に往つたにしては、あまりに遲いと、炬燵の櫓に頭を伏せて、早く歸つてくれゝばいゝに、寒いであらうにと、風が枝の雪を拂ふ音にも、屋根の雪が庇をなだる音にも、「歸つたか」と思つて、息をつめて聞いてゐたが、嫁の歸り來る氣色も無かつた。

　爺さんは心配のする恐怖の念に襲はれ、傘をさして足元危く家を出た。雪はます〱降る、外を通る者は一人も無い。爺さんは隣家の窓から、「うちの嫁は今日寄合に往つとつたかナ。」「イーエ見えなんだぞナ。」爺さんは失望して、家に歸り、ボーとして降る雪を恨めしけに眺めてゐた。

　かれこれ時間が立つたところで、嫁は歸つて來た。爺さんは「歸つたか！」と飛び出す。嫁は笠の雪を拂ひ、蓑を取つて納戸の柱にかけ、子供を内庭の縁へおろした。子供は凍えた手を吹きながら、爺さんの膝に縋つた。「オー歸つたか、歸つたか！　ウムどこへ行つた、この寒いのに。手が凍えてゐるぢやないか。どこへマア往つとつたのかい？」と鼻をつまらして、孫を抱き上げる。

「お母さんと、どこへ行つたのかい……」と聞くと、子供は無言のまゝ、小さき手を合して爺さんを見上げるのであつた。「オーどうした！」と、爺さんは今日の事といひ、孫が手を合して拜む様子といひ、いづれも不審に堪へない。

　嫁は盥に湯を汲み、雪を摑んで入れ、足を滌いで上がつて來た。爺さんは、「この雪にマアどこへ往つとつたか？　いゝわしや心配で隣近所を捜してをつたが、歸つて來てくれて、マアよかつた。」嫁女はモウ涙である。「御心配をかけました。妾は旅順が落ちたといふことを聞いて、生きてをつたら、サゾ喜ぶだらうにと思ふと、怺へられなくなつたで、お墓へ知らせに、この子を負つて行きました。お父さんに云つたら、この雪にとお止めなさるで、默つてゆきました。」といふと、爺さんは、「ウム、忠次に知らせに行つてくれたか、さうであつたか。さうであつたか！　忠次は草葉の蔭で喜んでゐるだらう。」とモウ聲を惜まず泣く。忠次といふのは彼女の亭主で、旅順攻圍軍に加はり、まだ外防禦線攻擊中に戰死した。後に殘つて歎く親や、妻や、また子は、國のため、亡き人のため、いろいろな思ひで、朝夕箸の上げ下しにも旅順が落ちるのを待ちわびてゐた。さうして愈々となつたので、さしづめ寡婦は雪を侵して亡夫の墓へ——遺骨も屆かないだらうが、心ばかりの木標を立てた亡夫の墓に、旅順陷落を報告したのである。

予が善通寺豫備病院に居つた時、一人氣の違つた兵士があつた。彼は病院の長い廊下をパタリ〳〵と草履を引きずつて、「高い山から谷底見れば、おゝ可淋しや、小倩ひとりノ、アリヤ、ドン〳〵、コリヤ、ドン〳〵。」と胸を叩いて歌つて、煙草をふかしながら歩いてをつた。其の顔には血の氣がたく、其の目には光澤がなかつた。其の白い病衣は墓に入る人の衣の失れのやうに淋しかつた。

彼は一日予の病室の窓へ腰をかけて煙草を吹かしながら、いつもの如く、「高い山から……」を歌うた。大麻山の方を眺めて胸を叩いて、帛を裂くやうな聲で歌ひながら、併し其の節は哀れに、また最も靜かな調子であつた、煙を吹きながら胸を叩きながら、何遍となく繰返して歌つてゐる。「いゝ、おまへは煙草が好きか。」と聞いたら、彼は「ウム」といつて點頭く。煙草の袋を取つてくれてやつたら、嬉しさうに頭を下げて、其の日は歸つた。翌日も亦やつて來た。其の日は罐詰の殼を下げてをつた。一服吸つては吐き、一服吸つては吐き、頻りに煙草を吸つて、窓の下で日向ぼこりをしながら、「高い山から……」をやつてゐる。予が煙草をやつたら、また歸つて行つた。それからといふものは、毎日毎日殆んど午後の二時頃であつたら、時を定めて、パタリ〳〵とやつて來る。そして煙草をやると、パタリ〳〵と歸つて行く。時々親切な看護婦が迎へに來たこともある。予は看護婦に、彼の男はどうして氣違ひになつたのかと聞いたら、頭部の擦過銃創で、ひどく腦を打たれたためだといつた。看護婦は「お友達のお話に、あの方は非常に元氣な兵隊さんでしたさうで、何でも何とかいふところで――處をツイ忘れましたが――擊たれたとき、旅順を取つてくれ、旅順を取つてくれ――とおつしやつたさうであります。」といつた。予は彼もまた旅順に憧れた勇士であつたのか、「旅順を取つてくれ。」といつて狂つたかと思ふと、血の氣のない、衰へた今の姿を見て不憫でならなくなり、覺えず涙を催した。旅順が陥落した其の日に、これを彼に聞かしてやつたら、嘸よろこぶことであらうと、來るのを待つてゐたが、ツイ其の日の晝は來なかつたから、夕方看病人をやつて呼ばせたら、パタリ〳〵と、いつもの如く草履を引きずつてやつて來た。予は「いゝ、おまへの手柄で旅順は取れたぞ。いゝ、おまへの待つてゐた旅順は、今朝陥落したから安心せい……いゝ、おまへは旅順の落ちたことを聞いて嬉しいと思はぬのか。いゝ、おまへはわかるか。」と噛んで含めるやうにいつて聞かせたけれど、彼は依然「高い山から谷底見れば……」と胸を叩いて歌つてゐた。予は覺えず彼の顔を見つめて、涙のはふり落つるのを禁じ得なかつたが、彼が歌ふ歌も、「戰友は皆死んでしまつた、モウわしは一人コンナに淋しくなつてしまつた。死ぬるなら、なまじ旅順で死にたかつた。」と歌つてゐるやうで、悲痛なる「高い山……」は、予の耳に尊き勇敢なる兵士の哀音であつた。彼は其の後ドウしたであらう。

嗚呼旅順！かゝる旅順！予は八月十八日にあたり、今や既に七年の日が過ぎ去つた後といふことも忘れて、泥塗れの馬車に搖られながら、戰捷の英雄の如くに旅順へ入つた。

第七　隊舎の夕

停車場で迎へられた小田中尉と同車して、右に池のやうな港内の靜かなる水を眺め、前面に黄金山の砲臺を仰ぎ、後に老鐵の雲を望みて、

或る處は石原道を、或る處は赤土の凸凹道を、いゝニーがホー〳〵といつて馬車を追つて行つた。いゝニーはお客樣に遠慮はないのであるから、ドンナ道でもお構ひなく、ガラ〳〵と車を驅つて行くのである。滿洲は豪雨の後であつたから、土の崩れや、車の跡が、二三尺も凹んでをつたが、いゝニーが向ふ見ずに車をやるので、今にも放り出されさうになり、馬車に獅嚙み付いてゐるなどは、あまり體裁のいゝ圖でなかつた。「ニー！　マン〳〵的（少しゆつくり行け）」といつても、ヨロシイ〳〵かナンカで、平氣の平左衞門である。所謂「黄金の延板で張りつめた道路」は、ガラ〳〵石の凸凹とした道で、御蔭で大分揉まれて腰が痛くなつた。流石にアカシヤの蔭に、棟や窓を見せて居る家屋は、誰樣の御屋敷かと思はれるほど立派な拵へであるけれども、其の配置は甚だ農民式であちらに二軒、こちらに三軒、おまへはソチラを向け、わしやコチラを向いてゐるといふやうに、テンデ勝手に建てたものが、とう〳〵何日の間にやらひつついたといふ式である。一體露國のやり方は、市街でも鐵道でもこれで、「いつの間にやら式」を發揮してゐる侵略的政略と一致した遣口である。

支那人を山の隅に追ひ拂ひ、露人は、勝手にどこでも好きな處へ家を建てろといつた景況が、馬車の内からも能く見えた。そして家だけ建てたら、墻などはドウでもいゝ納屋や雪隱は有つても無くてもいゝといふ狀況である。我が軍が占領してから、潔癖の日本人が圍をしたり、第一、雪隱を掃除したり、風呂を建てたり、花を植ゑたりした。いはゞ荒普請の家を借りて、造作はこちら持といつたやうなもの。

併し甚だ不整頓な不潔な舊市街を以て、旅順全市街の價値を判斷するのは苛酷であるかも知れぬ。露西亞人は舊市街より支那人を追ひ拂つて、思ふ通りの露西亞町を造らうと思つたのは失敗に歸して、遂に西港の方に理想的新市街を計畫した。これは秩序整然たる歐洲式市街で、立派な家もあり、公園もあり、道路も坦々としてあるが、いづれも殆んど半成のまゝに放棄されてあつたのを、多少日本が手を入れたけれど、矢張り別莊地の觀があつて、つひに活動の地でなかつた。尤もアレキシーフ將軍が最初の旅順經營も、ウイッテの大連經營によつて混ぜ返されて、何もこれといふ出來たものなしで、其のうち日本軍に手渡すことになつてしまつたのである。兎に角旅順の光景は、まだお伽噺の旅順を覺えてゐる予に取つては、少からず失望せざるを得なかつた。戰場の夢にも忘れなかつた旅順――幾萬の犧牲を拂つた旅順――一たび我手に歸してより、全軍の作戰が遙かに展開し、戰爭の全局面の運命を決したる旅順――軍略上高價を以て購はれたるところの旅順――これを稚氣ある意味に於いての旅順觀から見たなら、あまり馬鹿々々しくて、「ナアーンだ！」といつたきり、あいた口がふさがらぬ。

馬車はアカシヤの蔭を行き、高き窓の下を廻り、石塀の下を過ぎ、右を眺め左を顧み、ニーに追はれ行く騾馬、驢馬の沈默して車を曳くを眺めつゝ、予は故郷に歸つたやうにも思つた。馬車を歩兵營に乘り入れ、或る將校官舍の前で棄てて、小田少尉の官舍へはひつた。そして少憩の後、將校官舍を一廻りして、知己の將校を訪ねに行つた。皆非常に喜んで、「おれの内へ來い、是非來い」とドコからもココからも案內を受けた。同じ逢ふにしても、內地で逢ふのと、こゝで逢ふのとは、そこに多少の差があつて、矢張り戰場で久し振りに巡り會つた

やうな感じがせずにはゐられなかつた。白石大尉は茄子畑に立つて鋏を入れてをつた。「ヤア暫く。」「ヤア暫く。」「よく來たねえ。」「トウトウやつて來ました。茄子ですか。」「見給へ、上出來だらう。退屈だから茄子でも作つてゐるよ。」「長いのも、圓いのもありますなア。」などと、いきなり茄子が飛び出して來たのも、ドウやら戰場らしい聯想がある。畑から四十度位の角度で、向うを眺めると、塹壕が縱橫十文字に掘つてある。それは旅順の直接防禦——最後まで抵抗を試みたところの複廓であらうが、それにしてはあまりに市街が近い。日本軍に追はれて山を下つて、この山脚で抵抗をしようなどとは、望んでも出來ぬことである。天に唾するやうなもので、頭の上から拂はれたら、一たまりもなくやられてしまふことに極まつてゐる。或る人が、これは露軍が最後まで抵抗するの決意であることを示すために造つて、市民に見せたのだといふこともあるが、ドンナ素人でもこゝで抵抗が出來ようとは思はぬ。これは多くは砲臺の遮蔽交通壕——砲彈の損害を避ける爲に造つた通路であらう。「サウでせうぢやないか。」と尋ねると、「そりやさうだらう、一寸要領を得ぬ塹壕だね。山で疲れた兵が下りて來て晝寢するには、もつて來いの處だよ。」と大尉は答へた。如何さま晝寢にはよささうな處である。「マア僕の內へ來給へ。」と大尉の家を訪ねて、窓から見ると、庭に向日葵や朝顏が作つてある。手入がいゝと見えて、朝顏は上出來のやうであつた。「日本人は、如何してコンナ高尙な技術と趣味とを心得てゐるだらう。日本人は實に美術的國民である。かゝる美術的國民が、何故にかゝる慘劇を敢てせんとするか。戰爭なんどといふのは、露西亞人や、土耳古人のやうに戰爭の好きな國民に一任して置けばいゝに。」と露西亞人がいつたさうだが、これは味ひのある言葉と思ふ。露兵が日本兵の頭を刎ねてやらうと勢ひ込んで打つてよこした砲彈の生暖かき殼を拾つて、草花をさして、陣頭の伴侶とした將軍もあれば、血のやうに紅い撫子を胸に插んで、彈丸を擊つてゐた勇士も日本軍隊にはあつた。春花の如き優しき情の內に、秋霜の如き凛々たる氣概を有するは、日本人の特性ではないか？背囊に枕して蟲聲を聞き、銃火の中に立ちて、仰いで明月を賞するの士が、一度立つて怒號すれば、獅子の狂ふが如きは、日本武士の態度ではないか！簡明、直截。蠻骨稜々の我等軍人も、死生の巷に立ちて、なほ一片風流の雅懷を抱いてゐる。無論露國將校の中にも、風雅人はあり、油繪で石に花や山水をかき、之れを飾石と稱へて、砲臺で旅情を慰めてゐるものもあつた。或は月清き夜、砲臺の中からヴアイオリンの音の洩れ來るを聞いたこともあつた。孤城の月を眺めて思ひを故鄕に馳するのとき、悲壯沈痛なる音に耳を傾けて、哀々禁ずる能はざるものもあつたらう。

予は大尉と雜談の後、アカシヤの並樹を傳はつて官舍へ歸つて來た。當番卒が、風呂が出來てゐるからといふので、手拭をさげて行つた。風呂は五右衞門釜で、中央へ陣取らぬと、チーと燒かれさうである。スポリとはひつて、手拭を浸して顏を洗ひ〳〵、アーさつぱりしたと寬いで、ヒヨット窓外を眺めると、ヌッとした山が二つ並んで聳えて居る。「當番！あの山は何といふ山か。」と聞くと、當番言下に、「右に見えますのが、あれが北斗山で左が老頭山であります。この間あすこへ演習に行きました。」と、說明は頗る旨いものである。さうして、「あの山

へ突貫した時は足が棒のやうになりました。」と今にもいひさう。北斗山、老頭山！之れを露軍は危険山と稱へてゐた。八月中旬より日本軍が敵の本防禦線の攻撃を始めて、強襲に強襲を以て、北砲臺に、望臺に、盤龍山に、鷄冠山に、死骸の上に死骸を重ね、また更に累々として死骸を重ねつゝあつたとき、ステッセル將軍は、此等の山上に夫人を伴ひ來り、得意滿面、指揮を取つてゐたといふことである。然るに物換り、星移り、七年前の夏の夕べ、砲臺でいかいお世話になつた櫻井大尉が、今はこゝで湯浴みしながら、北斗山の背中を見てゐる。

官舎は露軍將校の官舎其の儘である。床から天井まで突き抜いてゐるやうな大きな煖爐が狭い室の隅に据つて居る。寝臺は發條製の幅の廣い氣持のいゝものである。二人寝の寝臺である。曾て南山でも、コンナ廣い上等なのを司令塔で見た。太白山、老座山でも、斬壕に寝臺が置いてあつた。彈丸の降る斬壕で、まさか斯様な寝臺の御用もあるまいが、露西亜君は御苦勞にも、重いものをかつぎ廻つたものである。

歩兵營に駐屯する聯隊は、歩兵第二十二聯隊である。この聯隊は予が曾て旅順攻圍中所屬したる聯隊で、いはゞ予が出身の家である。旅順を攻撃した聯隊が、旅順を守備して露國の兵營に居るといふのも面白いが、予が元の所屬聯隊を再び旅順で訪問するといふのにも、感慨禁じ難きものがあつた。聯隊が四十四年四月旅順に到着して、將校が兵士を率ゐて砲臺巡りをした時、兵士の中には砲臺の殘壘に立つて、低徊去ること能はず、「中隊長殿、私の兄は此の砲臺で死んださうでありますが、ドノあたりでありませうか。」などと尋ねるものもあつたさうである。どこかでまだ生きてはゐないだらうかといふやうな感じが必ず起つて、草陰にも、岩の角にも心して、亡兄の聲を聞かんとしたでもあらう。戰歿者の兄弟共も廻り合せで、今や故人の忠死した跡に立つのとき、自から涙が出ずにはゐられなかつたらう。予とても其の通りであつた。

予が聯隊を訪うたとき、將校に五六人の知己もあつたが、本防禦線攻撃當時の人は殆んど亡くなつてしまつて、まして最後まで旅順の攻圍に加はつたといふ將校は先づ一名もゐない。第一回總攻撃以前に殪れてしまつたものも多いのである。

夜闇にして萬感交々蟠る。立つて窓を開けば星は燦爛たり、風はアカシヤの葉を吹き、遠吠の犬の聲を傳へる中に、予は黒く暗中に聳えたる白銀山を凝視した。

明くれば八月十九日、アゝ七年以前の今日の此日は、卽ち第一回總攻撃の開始せられた時である。予は此の終生の記念日を以て、戰場の跡を弔ふべく出立し、而して予が最後の戰鬪をなして殆んど死したる、彼の望臺の殘壘を攀ぢて、懐舊の情を恣にせんとするものである。

第八　紙の砲臺鐵の砲臺

旅順要塞は如何なる編成であつたか、予は昔にかへつて少しく語らねばならぬ。是れ前古未聞の最慘戰、世界戰史の記録を破つたところの一大要塞戰を知るに、是非とも必要のことである。

旅順は元、明の世に於て、朝鮮各地に至る船舶の寄港地であつたさうで、豊太閤の朝鮮征伐には、明の水軍根據地であつたといふことであ

る。渤海灣を出でゝ朝鮮に至る旅行の順路といふので、旅順口といふ名が、何時の間にか付いたさうである。歐米人は旅順のことを Port Arthur といふが、これは千八百六十年、英國支那艦隊の砲艦アルジェリンが支那沿岸の秘密測量をしてゐた時に、英佛聯合艦隊の旗艦アクライオンに故障を生じたので之をアルジェリンが曳いて入つたのが今の旅順口。當時何といふところか、名も十分知れ渡つてゐなかつたので、アルジェリンの艦長アーサー大尉の名を取つて、ポート、アーサーと呼ぶやうになつたといふことである。

露西亞が東洋に不凍港を得んとした積年の野心よりして、千八百九十八年三月二十八日、大連及び旅順口を清國政府より租借するの權利を得、同年五月また西比利亞鐵道を關東半島に延長し、東清鐵道の支線を大連灣に進め、海軍根據地として、旅順軍港の防備と大連築港との計畫を立てた。然れども旅順口の防備は、砲臺にあらず守備兵に在らず、強大雄偉なる露西亞帝國其の者が後方に雄視してゐることにあつた。故に築城の如きは殆んど其の必要を認めずと大ビラを切つてゐたが、四邊の形成の許さゞるものあり、一旦他國と干戈を交ふるの時到らば、即ち孤立して速かに援軍の來るを望むべからず、されば堅牢なる築城と強大なる守兵とによりて、獨立して敵國の軍隊を牽制するに堪ふるものたらざるべからずといふ必要に迫られ、千九百年即ち我が明治三十三年北清事件後から、老虎尾半島より、黄金山、模珠礁岬、嶗嵂嘴に亙る海正面に二十二個の砲臺と陸正面五十二個の砲臺との築造を計畫し、我が四十二年を以て完成する豫定であつたところ、風雲急にして三十七年遂に日本と開戰するに至つたため、海正面は黄金山の永久的築城を了したばかりで、十分に日本艦隊に對するだけの威力を備へてはゐなかつた。開戰當時、陸正面は僅かに北砲臺、二龍山、松樹山、大安子山、太陽溝の如き主要の永久築城を了りたるのみで、其の他の諸砲壘は急造築城で、防備の甚だ不完全なるものであつた。

今こゝに敵軍内部の消息として傳ふるところのものを聞くに、二月二十三日の朝に、日本艦隊が數隻の戰鬪艦と十數隻の水雷艇とを率ゐて、旅順口へ來たから、之れを迎へて開戰すると、忽ちステレグスチーが擊沈せられる。尋いで、に日本艦隊は戰鬪艦三隻、巡洋艦二隻を以て、老鐵山を距る一海里の沖に現はれたが、砲臺は一も之れに對して應戰することが出來なかつた。獨り黄金山の探海燈のみが海面を照らして、一望の限界に白銀の蓆を敷き披けたる如く輝き、砲臺もなく、備砲もなき老鐵山には、たゞ燈火の淋しく見戍れるものがあるばかり、されば日本艦隊は、老鐵山を以て、却つて其の掩護の用に供し、安全に要塞を射擊することを得て、而して要塞は之れに對して、殆んど防禦力を有してゐなかつたのである。旅順では砲聲が聞えるのは、遙かの沖合で演習でもあるのであらうと想像してゐたところが、意外にも日本艦隊より飛來する砲彈は、新市街に落下して爆聲を揚げ、疑ひもなく市街は日本艦隊の爲に砲擊を受けつつあつた。それで市民は海岸守備の無能力なるに甚だしく激昂し、關東守備司令官其の人の罪を鳴らした。

さてまた陸正面は如何といふに要塞の工事は殆んど一として竣功したものがなく、裸々たる岩石の山が、徒らに海風の吹き荒むに委せらるゝのみであつた。堡壘や砲臺のあるところでも、火砲の備付のなきものがあり、たま〱

其の備付があつても戰鬪に堪ふるだけの設備を施されなかつたものもあり、三月下旬に至り、要塞司令官スミルノフ中將が新たに旅順へ着任して、砲臺の見分をしたとき、將軍は唖然として防備の手薄なのに驚いたといふことである。中將の眼に映じた旅順口の防備は、不完全至極なものであつた。而も防禦工事が、毫も地形に適應してをらぬことを發見し、恰も紙の砲臺に等しきものであると云つたとか。そこで中將は、金州が守備を失つて、陸正面より包圍を受くるに至らば、要塞は到底長く之れを支持することが出來ない。何は兎もあれ、陸地の諸砲壘を堅固に築くことが焦眉の急であると唱へて、俄かに非常なる活動を始めたのである。中將は砲兵、工兵の指揮官等と共に、夙夜防禦線上に立ち、寝食を忘れて督勵したから、始めて工事が大いに進捗するに至つたのである。

砲臺の築造には言ふ迄もなく苦力を使役して、晝夜連續土工に從事せしめた。予が旅順に入つた日、歩兵營に近く、佐官官舍の前に、煤けた硝子窓が破れたまゝ、人間の住んで居るけはひもない白堊の家が、雜草の中に孤立してゐるのを見て、あれは何ですかと聞いたら、小田中尉は「化物屋敷ですよ。旅順には化物が非常に多いですなア。」と答へた。今でも化物が出るのですかと聞いたら、「それはどうか知りませんが、非常に支那人の怖がる家ですよ。」といつた。この白堊の家こそ、苦力に給金を渡すところであつたさうで、或る時此處へ砲臺機要部の工事に從事した苦力を集めて、悉く叩き斬つてしまつたといふ噂がある。この絶叫悲鳴の聲は支那人街まで聞えたとかで、皆が首を縮めて、旅順の支那人はやがて露兵に虐殺されて仕舞ふのだと、穴の中へ潛つて息を殺してゐたといふことを、或る支那人が話してゐた。今でも此の家へ入ると、四壁に黑い血の塊がついてゐて、さうして助けを求むる悲鳴の聲が聞えるとか、床下から血がにじみ出る、天井から血がポタリ／＼と落ちてくるとかいつて怖がつてゐる。あれは何だと支那人に聞くと、手を振つて「可怕々々、（こはい／＼）」といつて身震ひをするから、何かいはくのある家に相違ない。苦力慘殺――これは唯の疑問である。しかし金に渇せる苦力さへ、後には竊かに芝罘へ逃走したものが少くなかつたとか、之れを露軍では、日本軍が秘密に支那人に布告して、旅順は遠からず日本軍が占領する、若し露軍の用務に服したものは、占領後容赦なく嚴罰に處すると嚇したので、逃げてしまつたのであるといてゐた。

スミルノフ將軍は、一面に海軍の敗戰、旗艦ペトロハブロウスクの沈沒、水師提督マカロフの戰死など、續々兇變に接したかなれど、爲に失望落膽することなく、守兵を激勵し、市民を慰撫し、勇氣舊に倍して、工事に心血を濺ぎ、熱烈なる意氣を以て、傍らステッセルやフォーク將軍の如きが、日本軍は決して金州以南に前進し來ることなし、旅順要塞の防備に力を費すは徒勞のみと、恬として顧みざりしにも拘らず、百難を排して祖國の爲に全力を盡して敵を防禦し、若し全力を盡すとも遂に支ふる能はざれば、敵に降らんよりは寧ろ潔く死すべしと、蓋し一身のために鬪ふにあらずして、飽くまで中傷讒誣を排して忠誠を抽んでたことは、流石に旅順の名將たる名に恥ぢぬ。兎に角旅順の大黑柱はステッセル將軍には相違なかつたが、この大黑柱たるものが甚だあやしく、見かけは大きくても、土臺がグラついて居たと

いふことである。それに比してスミルノフ將軍は、一身を以て要塞を背負つて立つた人といつて然るべきだらうで、ステッセルも素より勇將であつたが、衆望を得た名將でないといふ人もある。實にスミルノフ將軍なかりせば、旅順は千九百五年一月を待たずして、千九百四年八月二十四日、日本軍の第一回總攻撃に於いて、業に已に城明け渡すの止むを得ざるに至りしならんといふことである。

南山のとき、「日本軍撃退・目下潰走中」との怪報が旅順へ達したことがあつた。すると忽ち三鞭酒が滂沱の如くに流れた。併し第二の注進が來た、前電は露軍が日本軍のために撃退せられ、目下潰走中との誤報―大變な間違ひ―なることを報じた。これを聞くと酒盃は手から落ちて碎ける。折角醉ひかけたのも醒めて、呆然たるといふ有様であつたとか。あの南山が手もなく落されて、フォーク師團長が旅順に退却して來ようなどとは、昨夜の夢にも思はなかつたことであらうが、この事あつて以來、人心が一にスミルノフ將軍の身に集まりたるのみならず、日本軍が青泥窪を策源地として、日々增援兵と攻城砲と彈藥、糧食とを陸揚げしつゝあるといふ報を聞いて、更に晝夜兼行で豫定砲臺の完成、新砲臺の增加を努むるに至つた。日本軍がいよ〳〵肉迫して、劍山の守が破れ、鞍子嶺高地帶、老座山、太白山等の險要も亦之れを失ひ、次いで七月下旬には鳳凰山、八月初旬には大小孤山の如き、外防禦線上、萬夫不當の陣地をも失ひ、幾回の恢復攻撃にも成功せざるに及んで、旅順の山といふ山、谷といふ谷、悉く皆砲臺群ならざるはなく、塹壕群ならざるはなきに至らしめたは、一にスミルノフ將軍の努力に歸せねばならぬといふことである。併し未だ以て狂雷、急雨の如き日本軍の迫撃を支ふるに足るだけに堅牢なりといふことを得なかつたため、第一回總攻撃を受けたときには、辛うじて踏み止まつたのである。攻撃の兵に向つて多大の損害は與へは與へたものの、守兵も亦非常の損害を蒙つたのである。その足下を見て、日本兵が逞兵連撃したならば、旅順の運命も意外に早かつたであらうに、遺憾ながら、當時の日本軍には後續部隊が無かつた。圖に乘つた露軍は之れを見て取り、いよ〳〵砦壘を增築し、障碍物を增設し、遂に天嶮に加工して、之れを金城湯池たらしめたのである。

かくして前後砲臺の數が海正面二十七、陸正面八十六、合計實に百〇九堡壘、其の重輕砲九百六十四門、之れに機關銃を合すれば、其の數實に千二三百門にも及んだであらう。開戰前既に各砲彈藥約三百五十發、小銃彈五百萬發を有し、其の後また多數の供給を得てゐた。守兵は開戰當初、關東軍が約四萬で、其の内南山に於いて約一千三百を喪ひ、八月初旬まで外防御線に於いて千二三百を喪ひ、尚ほ大いに要塞戰闘員の數を減殺したかたなれど、其の後、海兵、義勇兵を加へ、軍器を取るに堪ふるものは、老少の別なく徵集して操練を行ひ、之れを第一線に增加して、大小孤山戰闘當時、即ち八月初旬までには、其の總員四萬七千餘人を算するに至つた。四萬七千餘人の守兵が、殊死して十萬の日本軍を牽制し、五萬有餘の日本兵を斃したことを以て見れば、旅順の築城が如何に日本軍の苦手であつたかが分るのである。

第九　内輪もめ

旅順の防備は以上の如くであつたが、之れ

を守備するところの將軍はどうであつたか、茲に之れを一言せねばならぬ。併し予は斷言する。旅順守將の甲も乙も、皆その最善を盡したといふ點に至りては無論同一である。たゞ旅順要塞戰を語るものは、一旦は死刑を宣告され今は不運にも葉茶屋の番頭となつて、淋しく恨めしく暮してゐるとかいふ、彼のステッセル將軍の爲に、同情の涙を灑がずばなるまい。

要塞が三十七年十一月下旬に、既に頗る寒心すべき狀態に陷り、開城意見が一部有力なる將校間に於いて熾んなりしに拘らず、ステッセル將軍が衆を勵まして極力抵抗を繼續するの意見を發表したる其の決心は既に世の知るところで、開城の已むなきに至つた時、部下將卒に向つて悲痛なる訓示を下したるにても、將軍の心事は實に同情に堪へぬところである。然るに旅順口訴訟事件なるものに於いて、ステッセル將軍の罪狀として數へ上げられてあるものゝ中には、關東軍司令官の處置として面白からぬこともあるやうである。

一體、關東軍司令官侍從將官ステッセル將軍は、旅順要塞に對して指揮の實權は無かつたのであるらしい。といふものは既に千九百四年（明治三十七年）二月十二日に、彼は西比利亞第三軍團長に補せられて、旅順要塞司令官の任はスミルノフ中將に在つたのである。一時勅命により關東軍司令官となりはしたが、ステッセル將軍の權能は、要塞の內部に及ぶものでなかつたやうだ。スミルノフ將軍もさう考へてをつたところが、南山戰後にステッセルは「これから僕は要塞の面倒も見なけりやならぬ。君は僕の命令を聞いてをつたらよからう。君の參謀などは免職してしまへ。」などと飛んだところから姑が押しかけに來たやうな風で、アレもせい、コレもせいと世話をやくものだから、スミルノフもムッとして、「いらぬ御世話でせう。私は皇帝陛下より要塞司令官を命ぜられてをりまするし、私の幕僚は勅命によつて組織せられてゐるもので、貴官のお差圖は受けません。貴官は貴官の任務をなさい。混ぜ返しは御免蒙ります。」と出たから納まらない。これから絕えず何かにつけ小ぜり合が始まつたから、內輪揉めが火の手を揚げて、大變な騷ぎになつた。それではならんといふので、クロパトキンの仲裁がはひつて、再三旅順要塞の指揮權をスミルノフに讓り、自ら適宜の方法をとつて滿洲軍へ來いと命令したが、ステッセルは要塞を思ひ切れない。死んでも齧りついてゐるといふので、トウ〳〵旅順から出なかつた。

或日スミルノフ將軍は、糧食が何れへか向つて搬出せらるゝのを見たから頗る驚いて、差押へて見ると、ステッセルが許可したのだといふから、流石溫厚なる將軍も、之れにはひどく立腹した。要塞は遠からず全然包圍せらるゝに極つてをる、然るにその要塞から糧食を搬出することを許すなどとは以ての外の事であるとし、早速憲兵に命じて、搬出を禁止せよ、若し背く者は嚴罰せよと命じたといふことである。

この要塞糧食の搬出許可は、ステッセル將軍が罪狀の一つに數へられてゐる。

又スミルノフは諸砲臺長に向つて、嚴しく砲彈の節約を命じ、優勢なる敵の襲撃があるか、又は敵の大部隊の移動を發見したる時にあらざれば發射すべからずと、切に濫射を誡諭してゐたところが、九月中旬、いづれの地よりも日本軍近襲の報に接せざるに拘らず、東方線全線に亙りて猛烈なる砲聲が起つた、續いて東北方面にも突然大砲聲が起つたから、スミルノフは

自ら戦線に出て往つたが、その時は既に数百發の砲弾を費して居つた。この砲撃こそステッセルが、自ら日本兵の路上を通過するを發見したのに諸砲臺は悉く眠りて更に之れを射撃しないから、傍観するに忍びずと稱して砲撃を命じたのであつたといふことである。スミルノフは此の事をステッセルに切り込んだところが、「予は唯日本兵を狙撃せよと命じたるのみ、射撃するとせざるとは、予の關知するところにあらず。」と遣り返した。ステッセルには、一要塞司令官の職責、權能に干渉し、威信を損ひ、要塞の防禦力を減殺したり。」といふ罪名もあるくらゐだから、或はコンナつまらぬことをして、スミルノフを困らしてゐたかも知れぬが、それにしてもあまりに兒戯に類した遣方である。

兩將軍の反目、確執は斯くの如く、爲に防禦力に影響したことは莫大であつたらう、九月の中頃、日本軍は塹壕を掘つて、龍眼北方堡塁に接近し、夜間には其の談話をも聞き能ふ程に肉薄してをつた。スミルノフは手投弾を随所に投じ、酸鼻な効果を以て日本軍を塹壕より驅逐し、多大の損害を與へ、或は強力なる逆兵を以て逆襲を試み、或は爆薬を以て坑道を破壊し、日本軍の苦辛を徒勞に歸せしめたことが數々あつた。しかも此の逆襲たるや、大いに士氣を鼓舞し、些少の成功も頗る兵士の意氣を振興したから、スミルノフは熾んに逆襲を行はんことを主張したけれども、ステッセルは常に之れにけちをつけ逆襲の不成功に終るを見ては冷笑して、「それ見たか！」といふやうな顔をしてゐたとかで、何様失敬な老爺だなどと酷いことをいはれてゐる。敗けたのを見て喜んだりする將軍が、まさか旅順に踏み止まつて死生を共にしようなどといはう筈もない。こんなことは信用が措けぬ。兎に角譃に極つてをる。しかし此の類の話は枚擧に遑あらずで、スミルノフが一命を下せば、ステッセルは直ちに反對命令を發するといふ始末で、アゝといへばカウといひ、角つき合ひが絶えなかつたといふことだ。いつまでもかゝる始末であつたから、要塞は四分五裂し、二人の司令官と二個の司令部とが併立するの奇観を呈した。かゝる内訌がなかつたならば、要塞は猶久しく固守することを得たらうに、兩將軍のため惜みても餘りあることだ。或は日本艦隊の砲撃により、舊市街は悉く彈雨に浴し、銃を負うて斃る兵士の外、一人の通行人もない有様でも、ステッセルは厳命を下して、敵の砲撃中と雖も、市民は戸を鎖すべからずと布達したため、死傷者を生じて、市民の同情を失つたこともあつたさうである。併し將軍の意は何くにあつたか、予は將軍の處置に同意する一人である。まだある商人が義勇兵として徴集されたとき、ステッセルはお前には屠獣場――馬肉を供給する處――の監督を命ずるといつたところが、彼は目を圓くして之れを拒んだ、ステッセルは、それが嫌ならエルモロフ大佐の命令を受けて二百三高地へ行けといつた。二百三高地へ行けといふのは、お前を死刑に處するといふ異名の宣告であつたさうである。

何にせよ、どちらへ團扇を上げたらよいか分らぬ、出る杭は打たれるともいふものか、ステッセルはシタタカに攻撃を受けてゐたやうである。或時はステッセルを以て瘋癲であるなどと、亂暴な決議をして、醫師の診斷書を公表せんなどと敦圉き、群集は公園に集まりて、三鞭酒を擧げ、ステッセルを退けて、スミルノフが代つて總指揮官となるからには、旅順は大盤石

のごとくであるなどと、歓呼、喧囂を極めたこともあつたさうだ。ステッセルを狂氣と宣告することの可否如何といふ論議が將校間にさへあつたとかいふことだ。

愈々ステッセルが旅順を明渡したとなると、今まで、沈默してゐた君子も等しく立つて非難攻撃を加へた。素より手ぬかりがあつたから、コンナになつたのだと、信じてゐるところの將校、兵卒、人民は口を極めて、彼を罵倒した。ステッセルは素より苦しい位置であつた。併しステッセルが、努力盡きて開城するは名譽の行爲であるといつたとやらで、彼は狂人だ、阿呆だ、よ　ソンナことがいへたものだと、四面から疊みかけて攻撃罵詈を浴びせかけた。彼が腹心の將フォークなどは、「狂躁」と綽名されたといふことである。

一月三日の夜、不思議なる荷物が闇中に消え去つた。さうして靑泥窪の停車場に二十二個の大なるトランクが表はれた。この二十二個のトランクは、コザック兵の乘り込む筈であつた客車の内へ積み込まれて、コザック兵は止むを得ず廊下に立つてゐなければならなかつた。この二十二個のトランクこそ、ステッセル夫人の所有であつた。ステッセル夫人には「惠の母」といふ敬稱（？）が與へられてゐた。將官會議に恐を抱かなかつたところのステッセル將軍も、奥さんには恐れてゐたさうである。その奥さんこそ、旅順の降伏を命令したところの「惠の母」であつたのだと毒吐いたものもあつた。

ステッセルが旅順停車場で汽車に乘つたとき、偶然にもスミルノフは戸を開いてはひつて來た。車内にドヤ〱と將官が乘つてゐた。スミルノフが一目ステッセルを見ると、「イヤイヤ僕はこゝに用事はない。」と飛び下りて、兵卒の乘つてゐる客車の内へ飛び込んで行つてしまつた。どこまで仲が惡かつたのか。スミルノフは、「おれは露國に歸るまで默つてゐるが、歸國の後はステッセルが恩賜の刀の黑鷲も小さく光り、再び之れを揮ふことは出來ぬのであらう。マアその時を見物してゐよう。」といつたさうだが、歸國の後、彼は皇帝に對し、ステッセルが籠城中の處置に就いて彈劾的密奏をしたので、遂にステッセル中將、フォーク中將、レイス少將とスミルノフ中將とのために軍法會議が開かれ、ステッセルとフォークとは有罪、スミルノフは無罪を宣告せられた。

第十　無間地獄

苟も旅順戰を語るものにして、彼の鐵條網をいはぬものは無い、苟も旅順戰を經歷したるものにして、鐵條網の名を思ひ出す度に、ギョッとせぬものはない。鐵條網は六尺くらゐな大杭と三四尺くらゐな小杭とを鱗次形に地面に杵立して、之れに大小の鐵線を縱横十文字に張つた、頗る簡易な仕掛のもので、山から山へ、砲臺から砲臺へ引張つた柵である。仕掛は頗る簡易であるが、さて之れを破壞するとなると中々六ケ敷い。之れを斷つには、鋏で切るのであるが、針金が緩く張つて緊張してないから中々切れぬ。また鐵條網の前には機關銃といふいたづらものが眼をキョロ〱して睨んでゐるので、パチリと鋏の音でもしようものなら、瞬く間にパパン、パン〱とお出でなさる。鐵條網を切るものは命懸であつた。また之れを越えんとするときは、針金を跨いだり潜つたりせねばならぬが、銃が引つかゝつたり、背嚢が引つかゝつたり、靴の踵が引つかゝつたりし

て、容易に之れを通過することの出來るものでない。かゝる混雜の眞唯中に機關銃を向けて來るのであるから、之れに引つかゝつたものはマア命は無いものに極りがついてゐた。我々はしば〱鋏を持つたまゝ針金に引つかゝつて、宙にぶら下つてゐる兵士を見たが、沈默なる、且つ危險なる作業を以て鐵條網を破壞し、突撃隊の進路を開いて茲に斃れた勇士は、彼の突貫の聲を聞きつゝ、死屍も微笑を洩らしたことであらう。彼等の死ほど立派な死にかたはない。

集團の激昂は、恰も篝火の如くに一時的である。集團の力に依つて行ふところの突撃其のものは、さほど豪いものでない。却つてあまり派手でない、人の目に立たぬところに、勇敢なる行爲を發見し得るものと思ふ。夜色悽慘たるところ、獨り敵前に立つて敵方を監視するところの歩哨——單身敵の警戒幕を破つて敵情を捜索するところの斥候——又は茲にいふ突撃縱隊の進路を開かんがため、敵の機關銃下に在りて、鉛の瀧を浴びつゝ鐵條網を破壞せんとするところの作業兵に於いて、我等は眞に無名の英雄を發見するものである。

鐵條網線の外側には、更に電流鐵條網といふものが設けてあつた。さうして三列の木柱を樹て、之れに碍子を附着し、架するに三條の電流線を以て、保壘の後方の發電所より電流を導いてあつた。乃ち強力なる電氣を以て、突撃して來る日本兵を電殺せんとするの工夫であつた。されば之れを切斷するのは更に困難なる作業であつた。鋏の柄に竹を卷いて切つたり、黄色藥を爆發して破壞を企てたり、また鐵鎌を引つかけて切る工夫もした。電線切斷の音が敵に聞えると、忽ち砲臺からマグネシユームの花火が揚がる、探照燈が張子の虎のやうにあちらへクルリ、こちらへクルリと首を振る。機關銃が狙ひを澄ましてパパン、パン〱と騒ぎ立てる。頭が飛んで行く、手が切れて飛ぶといふ酸鼻の極狀を演じ出だすのである。

また別に地雷といふ厄介物がある。これは何處に埋めてあるか無論分らぬ。突撃隊が押しかけて來て、地雷の頭へかゝると、敵はヨシとばかり電氣の釦を押す。地雷がグルーンと土石を持ち上げて、火山が爆發したやうな勢で破裂し、一度に數十人を斃すのである。我が工兵は、それが何處に埋めてあるかと、眼を皿のやうにして捜してゐたが、これに斃るゝ者も、あまり派手でない犧牲者である。地雷には電氣裝置もあれば、また觸れさへすれば爆發する踏落し地雷もあつた。これは觸發地雷ともいつて、十月二十六日に某聯隊のごときは、鉢卷山から支那圍壁に向つて突撃したとき、之れにかゝつて、火焔の中で、胴が空中に舞ひ上つたり、頭が裂けて谷に落ちたりといふ有樣で、非常にみじめな目に遭つた。地雷にはいろ〱のものを應用してあつた。鐵管、木筐、彈藥筐、ガラス瓶、石油の空罐などがあつた。また浮標を引き揚げ、火藥をつめて地雷にしたなどは思ひつきが良い。機械水雷も商賣換へをして、地雷になつたりしてゐた。九月二十一日にクロパトキン砲臺から魚形水雷が飛び出したなどといふ話もあつたが、あれは魚形水雷の頭に火藥をつめて地雷にしたのである。水雷を陸上に使用するは、コンドラテンコ少將の發案で、水雷發射管を砲架の上に裝置し、五六十米突の距離に於いて、保壘に肉薄する日本軍に向つて水雷を投下し、其の爆發によつて大なる損傷を與へんとするの珍案であつた。地雷と並んで狼穽——陷し穴——があつた。深い圓錐形の穴を掘つて其の上にアンペラを被せ、土や、草や、石を蔽

うて一寸知れぬやうにしてあつた。突擊隊が砲臺を仰いで一目散に猛進するときに、思ひ掛けなくドシンと落ち込む。穴の底には鋭利なる杭が突立つてゐて胴や腹を突き拔く趣向であつたから恐ろしい。此等の障碍物を目して、先づ第一に爭奪の目的物となるのは、敵の散兵壕である。散兵壕は掩蓋を作つて砲彈を避け、銃眼を造つてある。機關銃や、小銃が、銃眼から銃口を出して、日本兵來らば薙ぎ仆してくれんずと待ち構へてゐる。日本軍が肉薄して爆藥を放り込むと、火が吹き出るやら、角材が飛ぶやら、白黃色の硝煙が立ち迷ふやら、この火藥庫の火事のやうな中へ、兵が突入する有樣は、壯烈とも慘烈とも譬へやうがない。爆藥に火をつけて放り込むと、露兵は爆發せぬ瞬間、眞に一セコンドの內に、それを拾つてまた投げ返す。彼が投げて來るものを、また我から放り返す。其の機敏なること、實に人間業ではない。また某工兵中尉は敵の掩蓋を破壞せんため、銃眼に手をかけ內を覗いて、爆藥を投け込んだといふこともあつたが、大膽といはうか、無鐵砲といはうか、恐ろしい人もあればあるものだ。敵は日本軍の爆藥を防ぐため、手擲彈防禦網といふものを備へてゐたところもあつた。彼れの投げ出す彈藥には、露國某海軍中尉新案の滑走手擲彈といつて、山を轉がして爆發せしむる新工夫のものもあつた。

散兵壕がやつと我手に落つると、今度は砲臺である。砲臺の外周には空壕がある。此の空壕が恐ろしい障碍物である。梯子を懸けて渡つて行けば、何の苦も無いなどと呑氣に考へてゐたのは途方もない間違で、壕の前岸に行つて見ると、幅が十五六間もあるといふ有樣で、携帶橋は何の役にも立たず、ドシ／＼壕底に落ちてしまふ。前岸から首を突き出して深さを偵察すると、どうしても五六間はある。其の底には、バラ鐵條網といつて、鐵製の鐵條網のバラ／＼に切り離したものや、鋭く先を削つた杭や、菱形又は三角形の叉釘や、釘の打つてある板などが雜然と轉がつてゐる。迚も飛び込めた譯のものではない。併し、勇敢なる我兵は屢々強襲を以て此の壕底に飛び下り、向岸の斜面に取りついたものがあつたが、敵彈が空壕の前面より、左右より、また背後より束條の如く飛び來つて、一名も生存するものがなかつたのである。空壕の向岸に蝦蟇を打ちつけたやうに、板のやうになつて、右の方を見ると、こちらを向いてゐる窓がある。この窓から機關銃が頭を突き出してゐる。左を見ると、また窓があつて、そこからも機關銃が頭を突き出してゐる。ふり返つて後を見ると又窓がある。そこからも機關銃を突き出してゐる。前面には砲臺の守兵が火口を揃へ、左右背後には外岸の守兵が火口を揃へて、空壕に飛び込んで來る攻擊兵を待受けてゐる。この空壕こそ即ち無間地獄で、生きた亡者がドシ／＼落ち込んでゆくところである。敵はそれを狙ひ擊にして「そら頭！　そら一發！　もう一發！　まゐつたか？」なんどと慰みものにして殺したのである。

また或時は反射鏡を出して、外壕に在るところの我兵の姿を映し見、長い竿の尖へ爆藥を括りつけて、我兵の頭の上へ吊して爆發させたこともあつた。我兵が上を仰いで睨んで見ても、何とも仕樣がなかつた。丸で弄殺しにせられたやうなものである。夜になると壕の中へマグネシユームに火をつけて投け込み、狐火のやうな怪光を放つて濫多打ちに打つかる、命が三つあつても、四つあつても足るものでない。百人飛び込めば百人、千人飛び込めば千人

人、皆打たれて狂ひ死んだのは、この空壕である。

外壕の窓の内は守兵の守備してゐるところで、兵舎もあれば亦掩蔽部もある。厚さが六尺もある比頓（セメントで小石を固めたもの）製のカポニエール（外岸側防穹窨）といふ、隧道か廻廊のやうなものがあり、其の内に外岸守兵が詰めかけてゐて、モウ今に飛び込んで來さうなものだ、などと、機關銃の撃鐵に手をかけて待ち構へてゐる。忘れもせぬ、我が聯隊副官吉本大尉の如きは、股まで被さるやうな長靴を穿いた片足が、胴を離れて三四尺向うに飛び、體は爆藥でボロ〳〵と燃え上がつた。我等は之れを眼界に見ながら、其の死骸を取ることが出來なかつた。大尉は美髯を蓄へてゐたが、それがチリ〳〵と燃えてゐた。

數度の攻撃にて兵員は減耗し、殘つてゐるものは掛換へのない大切な兵であるから、死體の收容をさせ、むざ〳〵之れを殺すに忍びなかつた。死骸を取りに行かうものなら、死骸の上に重なつてまた死骸となる。行くものも、行くものも、皆疊み重なつて死骸になる。夏の夜の月が陣營を照らすの時、銃を枕に、戰友の死屍を其の儘前後左右に眺めて、我等は泣くにも泣かれなかつた。或は砲彈が落下して、蛆の湧いた戰友の死屍の上に破裂し、腐肉を飛ばし、腐首を碎くのとき、我等は軍衣の襟を掻き合せて、そゞろに膚の寒さを覺えざるを得なかつた。

第十一　攻撃精神

空壕に跳び込んだのは、死んでしまつたのか、それとも亦生きてゐるのか、樣子が知れなかつた。併し其の多くのものは、前後左右より機關銃の靡射を受けて、壕底に埋沒してしまつたのである。兎に角鐵砲玉のやうに、往つたきり歸つて來たためしがないのであるから、生きてゐるともつかず、死んだともつかぬから、行方不明といふ妙なものが夥しくあつた。併し行方不明は戰死の別語にあらずんば、不幸にして負傷後敵の擄ふ所となつて、僅かに生存したもののみであることはいふまでもない。斯くして徒らに死屍を放擲するの慘況に際して、我等は如何にして魑魅魍魎の潜める空壕を越えて、敵の砲臺に到るべきか。乃ち彼の窓のあるところの怪物たる側防穹窨を破壞しなければならぬ。之れを破壞せんには、勢ひ我が砲彈の威力に待たなければならぬ。然るに厚さ六尺もある比頓の岩屋である。我が二十八珊の攻城重砲を以て、爆裂榴彈、地雷彈――殆んど四斗樽大の巨彈、其の重量七十貫、其の價格一發實に四百二十圓の砲彈を惜しげもなく、晝夜間斷なしに撃つたけれども、さまで利目がなかつた。彈丸の價一發四百二十圓！　野砲彈でも一發二十五圓、小銃彈でさへ一發六七錢はかかる。旅順で放した彈丸は、重砲彈だけでも數千萬發。戰爭は安くは出來ぬ。

二十八珊砲彈の炸裂する時は、黒暗々たる硝煙が、火山の爆發する如き勢で、天地も震動せんばかり、凄じとも凄じい光景である。然れども硝煙の散じたる後では、砲臺の墻壁が依然たる姿勢で構へてゐるから心憎かつた。これを以ても如何に敵壘の堅固なるかが分る。併し露軍の士氣を沮喪させたことは實に非常であつて、ステッセル將軍も「十月一日頃より、日本軍は二十八珊砲を以て砲撃を始め、守兵の肝膽を寒からしめたり。我等はクロパトキンの援助も遂に望むべからずして、敵の巨砲獨り威

力を逞しうし、數多の砲熕は破壞せられ、軍艦は擊沈せられたり。日本軍がかゝる巨砲を海上遠く運び來りて我に差向くべしとは思ひ至らざりし。」と嘆息したさうである。

第一步兵陣地より逐次攻擊の據點たる對壕作業――身の丈くらゐな電光形の深い溝を掘りつゝ砲臺に逼迫すると、勢ひ地上にて敵の外岸の堅硬なる防禦物を破壞することが困難になるので、坑道戰卽ち地中戰をやらなければならぬことになる。そこで隧道を穿つて、藥室に多量の爆藥を裝塡し、外岸の爆破を行うて、地上と地下とをともに占領しつゝ前進して側防穹窖を顚覆し、其の守兵を驅逐して外壕を占領し、更に對岸に坑道を穿ち、砲臺下にもぐり込んで行くといふ工合である。ところが守者は攻者の坑道に對して對坑道を作り、攻者の近接作業や破壞作業に妨害を試むるのである。こちらからコッチン、コッチンと掘つて行くと向うからも、コッチン、コッチンと掘つて來る。我が作業頭に敵の鐵の音が聞えるといふこともあつた。何のことはなし、まるで土龍の戰である。

我軍が旅順要塞主線に逼迫してより、步兵陣地を構築すること延長殆んど五里、攻路として塹壕を掘鑿すること延長實に十里にも及んだのである。既に外壕を占領するに至らば、對岸を破壞して突擊隊の進路を作り、迫擊砲と稱する爆發力の猛烈なる爆彈を連發し、守兵を粉碎して、敵の輕砲線に向つて突擊に移るのである。

ところがこの對岸の斜面は、岩石を斷ち切つた八尺餘もある壁であるから火藥の力を以てしても、容易に破墻口を造つて突擊隊を進ますることが出來ない。けれども我兵は敵の爆裂彈を蒙りつゝ、一人は匍ふ、一人は背に乘る、一人は肩に乘る、ヨイツラと下から押し上げて登つて行くものもあれば、圍壁の破壞口から飛び上がるものもあれば、死骸を積み重ねて登るものもある、登れば登る片端からコロ〱と壕に落ちて又再び動かぬ。續くものも續くものも皆轉げる。新銳なる逞兵が連續挺進して息をもつがずに攻め立てなければ遂に效が無い。兵員が途切れては、寸尺の地も亦之れを獲るに幾千の人を犧牲にせねばならなかつた。

輕砲線が我手に歸したならば、更に重砲線に肉迫するのである。我は土嚢と稱し、二尺に二尺五六寸もある布の袋に沙石を詰め込んで塀を造り、だん〱押し進め、好機を見ては躍り込むのである。敵は最早火藥といふ火藥、爆藥といふ爆藥、小銃も機關銃も滅多打ちに打つ、四方八方の諸砲臺より砲火を集中する中に、我は手擲彈を投げつゝ突貫すると、敵は步々抵抗して砲臺の咽喉部や、退路に近き圍壁によつて最後の抵抗をやる。精神沈着、訓練精緻にして勇敢なる敵兵は、かゝる最後の時期に至るまで掩體に占據し、攻者の銃砲彈の威力では容易に驅逐することが出來ぬものである。唯此の際、肉を彈丸とし、血を硝藥として、迫擊するの一法を以て、敵を殲滅、潰亂せしむるの策あるのみで、是に於いて乎、精神の旺盛なるものが獨り勝を制するのである。

世界の人は、日本軍が大膽不敵なる攻擊、强襲を以て要塞前地の諸障礙を通過し、一擧砲臺の主たらんとすること、恰も野戰に於けると同筆法の攻擊をなすことに就いて甚だしく驚いたが、この攻擊に於いて、少くとも日本軍が攻擊的精神の旺盛なる軍隊であることを最も明瞭なる事實――築城を以て構成したる最も堅固なる要塞に對し、また最も猛烈なる敵の火兵前

に現はれて、肉體を暴露したる事實により一證明したのである。

日本軍の戰捷の最大動力は、實に此の攻擊精神である。その動作は、火器の效力を以て殆んど戰鬪の決を結ぶといつた時代の戰術が既に去つて、今日では晝夜を論ぜず、地形の如何を問はず、其の手段の如何を問はず、必ず斷乎たる決心を以て前進を繼續し、遂に肉迫して銃劍を使用せんとする勇敢なる攻擊精神が伴ふのでなくば、到底成功せざることを立證するに至つた。

攻擊精神は鼠花火のやうな一時的發作ではない。精練なる日本軍隊は、一回の突擊が不成功に終ることあるとも、決して斷念することなく、二回にして成らずんば三回、三回にして成らずんば四回、五回、六回、七回、無二無三に驀進、猛進して、以て必ず敵を殲滅せざれば止まざるの氣力を有してゐる。刀劍短くば一歩進みて之れを長くすべしといふは、即ち日本軍隊の精神にして、日本軍隊は前進の外往くべきところを知らぬ軍隊である。

要するに築城の價値は實に恐るべきものであるが、旅順大要塞に對しては、南山以來可なりの手應へはあつたにしろ、それでもまた安く買つたやうに思はれてならぬ。意外にも意外、莫大もない高價を拂つたが、また此の要塞戰に於いて日本軍人の凜乎たる本領を發揮し、後世子孫の爲に攻擊精神の活模範を貽したのは、我が國民に取りては此の上もない誇である。これは鐵片と人肉との戰爭に於いて、砲彈の力、器械の力は、遂に人肉の力、精神の活力に及ばぬことを證明したる戰爭であつた。「兵の勝敗は器に非ずして人に存す。」ことを明證したる戰爭であつた。元英國大使マクドナルド大佐は嘗て、「日本軍が戰捷の最大動力は、兵器の精鋭、戰術の巧妙素より然るべしと雖も、銃後の人は實に其の原因を成したのである。」といつたが、旅順戰こそ、世界要塞戰のレコードを破つて、この銃後の人の力を著大に證明したのである。露軍も亦ステッセル將軍以下銃後の勇士が、百方策を回らし、孤城を死守したのち、「勇士等よ、我等十一ヶ月の防禦に堪へたる後、要塞を棄つるは實に忍びざる所なり。」と涙を流して開城した行爲は、全世界の首肯せねばならぬところである。將軍以下勇將猛卒が艱難に堪へ、缺乏を忍びつゝ、苦戰、惡鬪能く日本軍の猛擊に抗し、「恐らく一人の生きて旅順の慘戰を語るものなかるべし。要塞の守兵の死に絶えたる後、初めて旅順は陷落すべし。」と決心し、遠き故郷を離れ、窮地に在りて能く其の操守を變ぜざりしことは、深く之れを歎賞せねばならぬ。

旅順の堡壘線の山々を見るときは、誰でも能くもコンナ誂へ向の山があつたものだと感心せぬものはない。たゞ市街に近いだけが少し難であるが、既に地の利を占めて居る上に、其の山は全山硅質岩で、燧石のやうな硬い岩である。取りも直さず旅順は一個の大なる岩塊である。その硬い石山をコッチンコッチンと鑿り割つて對壕を作り、坑道を穿ち、さうして地中を潜つたのであるから、これだけでも旅順攻擊の苦戰が想像される。敵は爆裂彈を浴びせかけて、石割作業を妨害する。我は砲彈と、其の上にグヮラグヮラと一時に山が崩れて來るやうな音のする石とを頭から浴びる。鐵彈と石塊とで我等の損害は非常に大きかつた。斯樣な岩を根氣よく鑿つて攻路を進めて行つたのであるから、鶴嘴(十字鍬)も圓匙も其の尖が磨滅して、全長の四分の一から六分の一までになつてしまつた。

これで旅順の山を掘つて掘りさがしたのであるかと思ふとゾッとする。而して一日の作業僅かに二三尺ぐらゐしか掘れなかつたのである。然るにそれで年の暮までに、トウ／＼縦横十文字はおろか、地の底まで掘つたのであるから根氣が續いたものである。

第十二　海上の念佛

黄金山の高砲臺に登つて、旅順港外を見ると、近頃所在の分つた、かの著名なるペトロパブロウスク艦の引揚最中で、作業船が蝟集してゐる光景は、そゞろに昔を追懷せしむるの種となつた。

三十七年二月八日、赤色を帶びたる夕日が西海に沒したころ旅順港外に繋いであつたノーキックの艦上には、莊嚴なる讃美の聲が聞えた。是れ露國の水兵が夕の祈禱を捧ぐるのであつた。此の夜は殊に暗かつた。黄金山は暗中に消ゆるがごとく、ヌッと立つてゐる。此の時日本艦隊は、遠く港外に在つて、燈火を滅して戰鬪準備をなしつゝあつたが、旅順でも、敵艦でも、悲劇の將に落ち來らんとするを知るものは、素より一人も無かつた。ノーキック艦上の祈禱、讃美歌は、宛も瀕死の露國海軍のために唱へられたる念佛の如くに聞えた。夜半、一怪物は暗黒を破つて港口に迫つた。[illegible]かなること寺院の如きノーキックのマストを越えて、何物とも知れぬ一物が唸りを發して飛んだ。之れぞ旅順戰役を開始したる第一の砲彈であつた。けれども旅順市民は、今始つた戰爭に就いて、誰も氣づくものがなかつたのはドウいふものか、さうして露艦隊が港外で演習してゐるのだなどと呑氣に考へてをつた。これよりして、日本艦隊の砲彈は絶えず西港より東港に落下し、舊市街は常に硝煙彈雨の下に立つに至つた。日本人は慥かに常識を失つてゐる。露艦隊に擊沈して貰はうとしてか、コンナ馬鹿な挑戰をやる！　といつて露人は笑つた。併し、常識なき日本人の、目なき彈丸は命中過たず、恐ろしき響を發して街衢の到る處に破裂した。街上には、生暖かき砲彈の破片を拾ひ、好奇の目を放つて、ガヤ／＼と何事か論議してゐる野次馬もあつた。また他方には[illegible]、目の色を變へて走る婦人もあつた。某大佐は家族と共に夕餉の食卓に就いてゐたが、砲彈が突然凄じき唸りを發して、此の家の窓を打破つて室内に破裂した。暫くして大佐は夢より覺めたるが如く、起き上り、我れを忘れて夫人の許に走せ寄つたが、無慘、夫人の身は最早形を存せず、壁も天井も血と肉片とにて染まり、床の上には腸臓が散亂して、目もあてられぬ有樣であつた。あまりの出來事に大佐は喪心して爲すところを知らざるものの如く茫然として立つてゐた。彼が二人の少女はこの有樣を見ると恐怖の餘り、割るゝ許りの叫びを發し、其の一人は戸外に飛び出した、大佐は其の跡を追うたが、忽ち彼女は床上に躓き倒れて悲鳴を擧げ、「父上、胸が燃える！　水！　水！」と絶叫した。大佐が一杯の水を彼女の口に注ぐや否や、其の手にすがつて絶命した。大佐は娘の死骸を抱いて室内へ歸つて見ると、他の一女も頻りに大佐の名を呼びつゝあつたが、哀れむべし、やがて又息を引取つた。大佐は其の死骸を投げ出し、天を仰ぎ絶叫して、其の儘仰向けに倒れた。かゝる慘劇は時々あつたが、しかし市民にして未だ彼の戰爭の目前に迫つたることを信ずるものは少かつた。

市民はこゝの街頭に、彼處の樹蔭に一團、閃電飛雷の如き、砲弾の唸りを聞きつゝ、一發、また二發、また三發、街衢に破裂する慘澹たる光景を眺めつゝ、騷がしく念誦しつゝあつた。砲撃後も日本人で旅順にゐたものがある。併しかゝる殺氣滿々たる中に在つても、何等の危害をも加へられなかつたのみならず、アレキシーフは警察に命じて、彼等を保護せしめ、食料についても心配をして、ビスケット澤山、米三十俵、牛三頭を供給してくれたこともあつた。さうして不幸にして貴國と戰爭するやうになつたに就いては、一先づ當地を立ち退いてもらはなければならぬ。是れ止むを得ない成行であるのだから、貴殿等は予の意を了解せられよ。と丁寧に取扱つてくれたが、二月八日になると芝罘から迎へが來て、日本居留民を引纏めて歸つた。

四月十三日は露國に取つて、また旅順艦隊に取つて、容易ならぬ苦痛を受けたる日であつた。夜明けがた、彼我の水雷艇の交戰が導火線となつて、ペトロパブロウスクは自ら先登となり、全艦を率ゐて出動すると、日本艦隊は十數隻より成る艦隊を以て進航し來つた。露艦隊は優勢當るべからずと見てとり、徐ろに退却を始め、砲臺の掩護下に入らんとしたが、このとき、俄然ペトロパブロウスクの艦首に方り、巨大なる水柱が騰る、強烈なる水中の爆發が續々起る。露國東洋艦隊旗艦ペトロパブロウスクは艦尾を高く水中より抜いて立ち上り、推進機は空しく空中に回轉し、艦體は火焰と爆煙とに包まれ、遂に波濤の下に沈沒した。

港口の棧橋上に集まつた多大の群集は、海戰の結果を氣遣ひ、物情騷然として一刻も早く提督マカロフの生死を知らんとせざるものはなかつた。「マカロフ提督は死せず、提督はノーヰツクに坐乘せり。」といふものもあつた。然れども其の中、港外より一隻の水雷艇が駛走し來り、艇長は傳話喇叭を通して明瞭に「ペトロパブロウスク沈沒、マカロフ提督坐乘」と叫んだ。やがて第二の水雷艇が駛走し來りて、「マカロフ提督戰死」と叫んだ。

日本艦隊は紅なること、赤熱したる大砲彈の如き日本國旗を飜しつゝ、四海を統御する如き威風を示して、恰も空中飛行船を浮べたる如き雄姿を曉の海に浮べた。これ露國に取つては何等の凶事ぞ。マカロフ提督戰死してより、旅順艦隊また振はず、如何なる感動を要塞に與へたか、殆んど想像も及ばぬ光景であり、また人心の甚だしく沮喪したことは云ふまでもない。

その初め、露國軍艦がみな戰時塗料を以て色を塗り替へ、戰爭の用意に餘念がなかつた頃、何と思つてか、多くの若き海軍士官が結婚を急いで、旅順では花嫁が手を引いて歩く、血に燃えた士官が多かつたといふことである。而も其の多數は旗艦ペトロパブロウスク號乘組の士官であつたとは、奇異なことがあればあるものである。ペトロパブロウスク沈沒、マカロフ提督戰死と聞いた時は、花嫁たちが旅順の波止場で、何某は無事でせうか？ 妾の良人は助かりましたか？ とオロ／＼として、氣も狂はん許りに泣きわめいた。其の哀れな聲は四月十三日の夕暮、後の山から吹いて來る風に乘り、血を流したやうな海原を渡つて、昨日まで甘い樂しい夢を見てゐた花婿の、最早浮ぶ瀬のない水づく屍にも屆いたことであらう。

マカロフ提督の沈沒と共に有名なのは、露國の戰爭畫家ヴェレスチャギンの殉死であつた。ヴェレスチャギンは、嘗てプレヴナの慘戰に筆を

染めた名匠であるが、一世一代の作を後世に貽さんため旅順に來つて、畫布と繪具とを幸ひ親友なるマカロフ提督の坐乘せるペトロパブロウスクに運んだのが運の盡きであつた。戰爭畫をかくどころの騷ぎか、トウ〳〵戰爭の人と共に平和の人ヴェレスチャギンは溺死してしまつたのである。そして旅順の海上には、夜な夜なマカロフの亡靈が迷つてゐるなどと噂が立つてゐた。ヴェレスチャギンは海戰前、夢のお告げでマカロフ提督の戰死を知つて蒼くなつたといふが、それがトウ〳〵迹夢ともならずに、自分までマカロフのお供をして沈沒してしまつたのは氣の毒なことである。

ペトロパブロウスクの堂々たる勇姿が海底に沒してより、七年の間沈默してをつたが、トウトウ見付け出されて、昨日は金貨が一箱上がつたの、今日は二箱上がつたのと騷いでゐるのを見たが、恨みは多き海底より、金貨の上がるといふのはどうやら哀れに思はれた。

五月二日の夕陽は旅順口の海洋に、砲臺に告別の挨拶をなして去り、白き浪の光のみが、キラ〳〵と海原をうねり、萬物悉く闇黑の幕に蔽はれて熱睡せるとき、探海燈は爛々として、妖怪の如き眼光を耀かして海面を凝視し敵艦や來ると警むる中に、日本閉塞船は、港口閉塞のため密かに浪を切つて進んだ。これを見たる老虎尾、黄金山などの海岸諸砲臺は皆一時に立つて、恰も猛獸の哮り狂ふが如き唸りを發して飛ぶところの彈丸は命中確實にして、到るところに勇敢無比なる日本水兵を海中に葬り去つた。やがて諸砲臺は沈默し、唯ゴーと風の吹くやうな反響が殘つて、山々に傳はり聞ゆるのみとなつた。此の時日本艦隊は黄金山の蔭に在つて港口閉塞の光景を窺ひつゝあつたが、既にして月は漸く蒼白となり、追擊射擊の音の凄じき中に夜は白んで、恐ろしかりし一夜は過ぎ去つたが、外港には日本兵の死屍が泛々として波間に漂ひつゝあつた。

旅順の港内は東港と西港とに別れてゐるが、能くもあの中に軍艦が浮くものだと思はれるほど狹い。ドロ〳〵した池のやうで、田舟に棹さして投網を打てば、鮒でも獲れさうなところである。これが旅順港かとは、呆氣に取られる。其の港口は之れがまた甚だしく狹いものである。あれでも軍艦が通るのか、右の岩にぶつかつては棹で押し出し、左の岩にぶつかつては手で衝き離し、ビク〳〵もので通るであらうと思うたら、ナニ平氣でドシ〳〵通るといふから驚いた。今も日本の軍艦が通つてゐるのだから、何も不思議はないが、隨分狹いは狹いものである。ペトロパブロウスク遭難の時も、出る艦と歸る艦が、この狹い口で衝突して、爲に沈沒したのもあるといふことである。而してこの狹い港口を封鎖すべく、決死の將士は閉塞船を提げて、大膽にも砲臺下に行動したのであつたが敵に取つてみると、砲臺の死角内に於ける閉塞船の行動には大いに惱まされたのである。黄金山の高砲臺も、低砲臺も、港口は覗いても足下は見えなかつた。日本艦隊や閉塞船が砲臺の蔭に入つてしまへば、如何ともすることは出來ないのであつた。そこで黄金山の外港に面した中腹に、臨時に堡壘を造り、小口徑の砲を据ゑて、閉塞船の行動を妨礙したのである。

白い浪がサラ〳〵と來つては岸を嚙み、サラサラと來つては岸を嚙み、白い小石の濱に昔ながらの浪が、樂を奏してゐるのを見ると、此の濱に廣瀨中佐が斃れ、忠肝義膽の勇士が花と散り、水の泡と消えたのだとは、ドウしても思へぬほど、あまりに景色の好い濱である。又そこ

に船體の破片かと思はれるやうな鐵材が落ちてゐるのを見た。之れは既に久しく此處に其のまゝ、岸打つ浪に洗はれてゐるさうであるが、閉塞船の片身かと思つて見れば、この一片の鐵材も、これから幾百年の後までも、寄せては返す仇浪に、過ぎし昔を物語ることであらうとて、懐かしく思はれた。

第十三　ウォッカと三鞭酒

日本軍は夥多の運送船を率ゐて貔子窩に上陸し、微弱なる哨兵を驅逐しつゝ燎原の火の如く忽ち馳せて、普蘭店附近に於いて鐵道を破壞した。これ實に五月六日、露國皇后陛下の命名祭に相當し、旅順に於いてはステッセル將軍が遙拜式を擧行し、「我等は死せんのみ、我等は國父皇帝陛下、國母皇后陛下の爲に、唯死を以つて之れに報ずるの一念あるのみ。」と軍隊の間に絶叫した日であつた。一個の火藥が鐵道線路上に爆破した瞬間を以て、旅順は南北の連絡を遮斷せられて孤立の運命に立ち至り、要塞の任務は益々重大となり、北方に於ける本軍の作戰を容易ならしめんため、日本軍の大軍を南方要塞に牽制して、一兵一銃も猶其の北進を支阻しなければならぬこととなつた。

五月十六日夜、彼我兩軍は三十里堡で初めて鋒をつき合した。是れが關東半島に於ける最初の戰爭であつた。この第一戰に於いて、日本軍は敵の前哨兵の一聯隊と野戰砲隊の一中隊とを擊碎して、敵を金州以南に壓迫した。この一戰こそ、露軍も亦大いに力を竭して、作戰無形上重價のある所を發揮し、以て初め南の日本軍を驚かし、友軍の士氣を振興すべき好機會であつたらうに、惜しいかな、其の力を活用するに至らずして、金州以北の地を失ひ、南山に於いて日本軍の來襲を待ち受けざるを得ざるに至つた。即ち奧將軍の第二軍は南山に現はれ、此の堅壘に向つて最も大膽なる攻擊を實施した。併し堅固なる築城と機關銃の掃射とに對しては、徒らに決死隊を横たふるのみ、我軍の戰況は發展せなかつた。「攻擊を中止して後續部隊の來着を待つか。」「現場を維持して好機を待つか。」「損害の如何を顧みず、決死攻擊するか。」といふやうな意見も出て、此の上は唯奧將軍の決心一つに繫つてゐた。此の時恰も大澳に上陸したる増援隊は、道を急いで南山へ驅けつけるところであつた。しかし流石に將軍の決心は動かなかつた。曰く、「一軍は今苦戰して、後續隊の來着に依頼し或は現場を維持して時機を待つべきにあらず、直ちに攻擊！　如何なる犠牲を拂ふとも、斷じて南山を奪取すべし」といふ嚴命であつた。勝敗の數は將に岐れんとして、我れの苦境に在るときは、敵もまた既に同じ若くはそれ以上の苦境に在るときである。かゝる時に眼前の情況に眩惑して大勢を誤らば、遂に好機を逸して、再び之れを得ることは出來ぬ。此の際高級指揮官の決心は、實に千鈞の重きをなすものである。この時南山に於ける露軍の勇敢なる兵士は、黄色異臭の瓦斯を散布する榴霰彈と榴彈とを被りながら苦戰死鬪したけれども、損害多大にして、奧將軍の命令に奮ひ起つたる日本兵の猛烈なる突貫を支ふることが出來なかつた。專ら南山の守備に任じてゐたフォーク將軍は、第四師團の三個聯隊を總豫備隊として、悉く大房身の高地の背後に在つて兵數一萬六千を控へてゐながら、遂に之れを以て第一線の苦境を援助することをせず、戰友の殲滅さるゝを傍觀し

ながら、「戰況非なり、豫備隊の急行を望む。」といふ傳騎が梭の如く第一線から來ても、遂に手許より一兵も送らなかつたさうである。南山の防備は一にフォーク將軍の任務であつたので、金州指揮官たりし第五狙撃旅團トレトヤコフ大佐が地團駄踏んで殘念がつたとは、さもあつたであらう。初め大佐は南山の防備未た以て十分に日本軍を支ふるに足らざることを看破し大砲と彈丸を増加し不備砲壕の構築工事のため工夫の増加とを要請したところが、フォーク將軍は色を作して、「謀叛人よ、金州の守り堅からずといふものは、凡て皆謀叛人なり。日本軍は決して金州を陷ることは能はず、予は金州に於いて日本軍を殲滅すべきのみ」と叫んだ。然るに其の日午後三時頃から砲兵は沈默する、左翼の歩兵は陣地を棄てる。午後五時全軍も徐に退却を始めつゝありながら、將軍は猶且つ金州、南山の危急を信ぜず、「守り堅からずといふものは謀叛人なり。」と思つてゐたと見える。日將に西山に沒せんとして、十四時間に渉る苦戰苦闘したる露軍は全線に亙りて退却を始めた。凡そ退却を實施するには、夜暗を待つてでなくば、恐るべき損害を蒙るはいふまでもなく、晝間退却の如きは亂暴も甚だしいものである。然るに露軍は無謀にも收容陣地を以て、友軍の退却を掩護することもなければ、太陽の沒するのも待たずに、全線を擧つて退却に就いた。之れがため敗殘兵の大半は、更に日本軍の追撃射撃の下に斃れたのである。

夜に入つてから、露軍の退却は又も見苦しい態であつた。敗走兵が南關嶺に來ると、悲慘な世界には眞黒な幕が下りて、物凄い光景となつた。ときに何物かが、「日本兵あり。」と絶叫した。「どこに？　どこに？」といつてゐると、間もなく忽ち混戰、亂戰、隊伍が紛亂して同士擊をやつた。それのみか、これに向つてドン〳〵撃ち出したといふことであるから、周章てたものである。

露軍が數年來親しく足を入れた熟地に於いて、斯かる戰略上の失策を演じたのは何故なるか。卽ち南山の背後たる南關嶺附近に掩護陣地を有してゐなかつたことが、確かに其の一原因であつたらう。南關嶺は日清戰爭に於いて淸軍の死守したところで、萬夫不當の好陣地である。然るに露軍がこれに占據しなかつたのは、少くとも四ケ月間旅順口の陷落を早からしめたといふ人もあるが、併し予はそれよりも更に露軍には一つの恐るべき毒藥があつて、精神的に日本軍を看るの眼を盲してゐたのではあるまいかと思ふ。それは彼のウォッカと三鞭酒とである。一ぱい飲んではウラー！　二はい飲んではウラー！　ウラーウラーで日を暮すうちに、金州の守り堅からずといふものは謀叛人などと誇つた其の金州、南山が一日で落ちるやうなことになつてしまつたのである。露軍は確かに日本軍の價値を判斷するに、あまり輕率ではなかつたらうか。

南山が斯く意外にも速かに日本軍の手に落ちたといふ報道は、電光の如く忽ちに旅順口に達し、軍隊も市民も擧つて失望の淵に沈んだ。例の如く三鞭酒の滿を引いて、舌もロク〳〵廻らなかつた人々には、南山が日本軍の手に占領せられんとは、到底思ひも設けなかつたことであらう。

露軍が總崩れとなりて南山を棄て、大連を棄てると、中には我れ勝ちに旅順を指して逃げ歸つたものもある。一晝夜十八九里も驅け通して、ホッと一息入れると、事件はさう簡單に納まらなかつた。ソンナ者は旅順へ入れること

はならぬと、四方八方から攻撃せられたから、折角骨折つて逼けて歸りは歸つたものの、手も足も出せぬことになつてしまつた。ステッセル將軍は、怒つたの怒らぬのでない。こんな奴がゐては大變である。卑怯者！　カウしてくれると、敗走者を縛り上げて、「頭を下げてゐろ！」といつて眼をむいて怒つたとは、さもありさうなことである、これを不法の待遇などと、大分非難攻撃があつたとか聞くのである。さうして「祖國の爲に、生死の境に臨み勇戰奮鬪するとも、何等の褒賞をも受けざるに、何すれぞ身命を賭するの愚を學ぶべけんや。」などと、敗けてもコンナ理窟はいうてゐた。いかさま露西亞は議論の多い國と見えて、軍人も隨分扱ひにくいやうである。旅順陷落の原因としては、確かに內輪揉めが其の一つであつたことは爭はれぬ事實である。兎に角、旅順の露軍は、日本軍と戰爭をしてゐる片手間に、時々內部で戰爭をしてゐたやうなものである。陸軍軍人が、「露國艦隊は、あれでも日本艦隊と戰をしてゐるつもりなのか、まるで嚴正中立だ。」といふと、海軍側では、「ナニ！　南山ではお氣の毒樣。」といふ。「ナニ！　南山？　南山が何だ！　軍艦には少しは動くのがあるか？」などと口汚く爭ひをしたのは、露軍のため惜しいものであつた。

さて我等の屬した乃木將軍の第三軍は、山といふ山に塹壕を掘つて、守備線を堅固にして敵の前進陣地攻擊準備に忙がしかつた。予が聯隊の在つたところは張家屯附近であつた。張家屯といつても、いくつもあるのだから一寸わかりにくい。地圖の上には、王家屯だの、張家屯だのといふのがベタにある。予等はその一個の張家屯に殆んど一ケ月もゐた。その間には、日々夜々斥候や偵察隊の小競合があつたり、步哨線でトン／＼と二三發の銃聲が、露營の夢を驚かしたりしたくらゐのものであつたが、この間露軍は南山の失敗に懲りて、第二の抵抗線として、鞍子嶺高地線を堅固に守備し、日本軍が活潑なる攻勢に轉ずるとも、極力其の南進を支阻すべしと、例のフォーク將軍が一令を下して、其の陣地は[illegible]溝、雙台溝より起つて、阿字形山、兜山、鞍子嶺、大白山、老座山の延長六里に亙り、黃海、渤海灣を横斷し、太白山、老座山の前面にて劍山、歪頭山の險要に據り、日本軍と全線殆んど一里以內に於いて相對峙した。中にも劍山は全線を制する陣地の鎖鑰であつて、之れが日本軍の手中に歸すると歸せざるとは、前進陣地の價値に重大なる關係を及ぼすべき地點であつた。

第十四　ニーの家

張家屯の守備中は、頗るノンキなものであつた。まだ戰らしい戰の味を知らず、毎日土さへ掘つてをれば好いといふ景況であつたから、夕方になると、あちらからも、こちらからも、集まつて來て、炊事場の間などで、角力が始まつたり、夜になると天幕で講釋が始まつたりしてゐた。

「一個！　雞有ゝ？」と、ニーに雞の有無を尋ねると「沒有々々。」ありませんありませんといふ。銀貨をチャラ／＼と衣囊で音を立てさせて、「ニー、澤山ある／＼。」とやると「よろしいよろしい雞多多。」と早や持つて來さうにする。中々ニー君は要領がよろしい。現金を見ぬと、何んでも有るとはいはぬ。それでもまだ銀貨を手に握らさぬと、中々品物は持つて來ぬ。代物

を見ずに相場を極めて金を渡すのは、ニーいゝ君との取引に限つて居る。逃げかけの駄賃に只で引つ攫つて行つてしまつた不埒者があつたから、無理も無いやうなものである。ニーいゝ君、鶏を何處に隱して居るかと尾行して見ると、棒切れで庭の隅を掘り探すから驚く。鶏が地下に格納してあるなどとは、滅多に見られぬ珍事である。鶏小舍などに入れて置くと、誰に失敬されぬとも限らぬといふところから、大根や牛蒡を圍つて置くやうに生埋めにして置くのだから、中々工夫したものである。手を突き込んで、穴から出して來るのを見ると、どれも、どれも、瘠形のチーツル君である。クツク〳〵と鳴いてをるから、生きてゐるには違ひないが、枯木のやうなチーツルであるから、一羽二十錢でも高買ひなのに、二圓、三圓と吹くから、油斷はならぬ。

退屈まぎれに、予は馬を驅つて青泥窪へ椅子を貰ひに行つたことがあつた。なんでも四脚であつたらう。それを他の一匹の馬につけ、聯隊長の土産にと薔薇を一枝折つて鞍にさして、コクリ〳〵と馬上で居眠りをしながら、悠々たる態で歸つた。コンナ悠々たる様は再び來らなかつた。さうして此の椅子は、大きに評判がよかつた。どこへでも擔ぎ廻つたもので調法なものであつたが、いつの間にか無くなつてしまひ、大孤山の戰鬪後には、聯隊長はモウ冷たい岩の上に寢ころんでゐた。

青泥窪の獲物はまだ外にあつた。それは予が或る街を歩いてゐたところが、小さい路次から出て來た小犬があつた。其の艶の惡い、黑と白との交り毛の、逞しくも何ともない風體が、甚だ可哀さうであつた。小犬は予の馬の後をどこまでも尾いて來た。飼主も今は居らず、昨日とは打つて變つて、寂しき街をあちらこちらと彷徨つてゐるのであらうと思ふと、予は露西亞の小犬に、多大の同情と憐愍とを表せずにはゐられなかつた。

小犬はトウ〳〵予の天幕まで附隨して來た。そして予が家庭の一員に加はつた。家庭は天幕を家とする予と從卒とのみであつた。上陸以來支那人の家の南京蟲でサン〴〵いぢめられた予は、トウ〳〵降參してしまつて、張家屯では、聯隊長の家の側方に方錐形の小さな天幕を張つて宿舍としてゐたが、犬はその家の愛嬌ある一員となつたのである。予は後に、青泥窪が縁の始まりだからダルと命名して、「櫻井少尉愛犬」と書いた木の小札を首に吊るしてやつた。

ダルは悧巧な如才ない愛嬌者であつたから、あちらからも、こちらからも案内を受けて御馳走になり、荒涼殺伐たる光景の中に在つて、大いに慰藉を與ふる者となつた。終夜警戒線を見廻つて、夜の引き明けに我家をさして歸る一族の中に、ダルの輕き勇ましき姿は、恰も一幅の繪畫であつた。

予の往くところとして隨はざるなき愛犬ダルも、七月二十八日を以て、敵の前進陣地たる太白山に於て戰死したのである。露國の犬が日本士官に隨ひて戰場に斃はれ、自國の彈丸で討死したといふのも何の因果か。ダルの戰死は予が初陣たる太白山の戰鬪と共に忘るべからざる一事であるから、また後で話すつもりである。

一體日本人は潔癖である。予等が、支那の民家へ入ると、第一番に大掃除と極つてゐた。箒で以て何でもかでも掃き飛ばして、雜巾掛けをせぬと氣がすまぬのは日本兵である。先祖代々の塵を蓄めて置かぬと神意に背く〳〵とでもいふものか、民家の不潔なることは、それは非常である。

それだからニーは世々代々の塵を日本兵に掃き飛ばされて不興であつたらう。日本兵は丁度滿洲を隅から隅まで掃いて廻つたやうなものである。

　雪隱を立てるのは、日本兵に限るといふ譯でもあるまいが、ニーにしても、どこかしこの見界なしに垂れ流しである。また同じ雪隱を立てるにしても、日本兵のは、どこやら雅致があつた。青葉の蔭に莚を四方に垂れた野雪隱が立つてゐるなどは頗る故山の風があつて、野趣大いに掬すべきものがあつた。

　玉井少佐の茅屋の壁へ、青泥窪から取つて來た白紙を張りつめ、予が一筆揮うて、京美人と富士見西行と浪に千鳥とを描き、大いにニー君の賞讃を博したことがあつたが、繪になつてをつたか、なつてをらなかつたか知らぬけれど、ニー君が大いに喝采したくらゐな繪だから、非常な名作であつたらうと思ふ。予もいつか一度は知己の多い張家屯に遊んで、昔、描いた西行法師や、京美人に對面して見たいものだと思つてゐる。しかし今では京美人の鼻や、西行法師の頭に、大蒜の臭みがしてをるだけならまだしも、恐らく予が一世一代の名作も、既に完膚なしになつてをるであらう。

　聯隊長の宿舎の老爺は四十くらゐの痩せたニーであつたが、自分は屋外に菰を張つて、十ばかりになる女の兒をつれて野宿してゐた。あまり氣の毒であつたから、屋内に寢るやうにと勸めたけれども、昨日までは露國の兵隊に荒されて安き夢も結ぶことが出來なかつたが、日本兵が來てから大いに安堵したから、屋外に寢るくらゐのことは何でもない、この村にゐる中は出來るだけの世話をさしてもらひたいなどと云つてをつた。露兵が荒したのでもあるまいが、「前にをつたのは餘り善くなかつた。」などと能くいふことで、ニーも甚だ御世辭がいゝ。彼は朝は夙うから水を汲んで來るやら、炊事の手傳ひやら、中々の稼ぎ者であつた。無論彼が最終の目的は殘飯にあるので、これ莫かりせば、誰も來て入らぬ世話を燒くものはないのである。

　彼は聯隊長に軍隊式の敬禮をしてゐた。誰が教へたか、徒手體操などは中々旨いものであつた。

　彼はまた殘飯を手にしながら、ほく／＼して日本の歌を歌ふといつて、「東雲のストリーキ、シャリトハ、トライネ。」なんどと、首を振つて歌つてをつた。誰がコンナことを教へ込んだのか、隨分暇な男もあればあるものである。寡默な聯隊長も噴き出さずにをられなかつたと見えて、此の男を見るといつも笑つてゐた。また彼れの兒は可愛い子供であつた。陣中で支那人の子供は可愛がられたものだが、彼れの子供は格別可愛かつた。「子供を呉れないか、日本へ連れて歸つて、大きくして立派にしてやるから。」と言つたら、彼は眞面目になつて、家内に相談して來ますといつて、どこかへ行つた。此の家を拜借した時から、細君を見なかつたし、野宿するにも細君はゐなかつたので、父子二人きりであらうと思つてゐたのに、家内に相談して來ますといふから、どこに細君を隱してゐるのかと不審であつた。總じて支那の女は氣の毒なもので、砲火の下を遁げ隱れして、家庭的生活を營むことが出來なかつたのである。女共は彈丸が飛んで來ると安閑ともしてをられぬので、山陰や屋後に難を避けるが、往々穴倉の中に入つて行くのを見掛けたこともある。支那人は穴を掘ることが上手である。裕に家族が一つに居られるくらゐな大きな穴を掘つて、中に入つてをる。入口はどこにあるかと疑はれるほど隱蔽されてをる。庭に置いてある甕を入れる大きな

籠を上げて見ると、下に入口があつたりする。便を足しに、穴から女などが出て來るところを見ると、實にみじめなものであつた。彼の男の女房も難を避けて穴の中にでも居たのであらう。聽て彼は相談したと見えて、母親が可哀想だといふから、日本へは遣られぬと、眞面目な返事であつた。「それではドウぞお連れ下さい、」といはれても大きに困る。

遼東の支那人の家はどれも〳〵見すぼらしい。滿洲殊に遼東半島は僻村、寒屯で、貧乏人が多いさうであるからでもあるが、これはと思ふ家は一軒も見當らなかつた、多くは粗末な茅葺で、外圍ひは大抵石のかけらを巧みに積み重ねたものである。一寸觸つたらグワラ〳〵と崩れさうである。支那には地震が無いから、かゝる破屋、弊舎も傾覆の虞れがなくて安全なものである。民家はどれを見ても、どれを見ても、構造、排列、皆一定の方式中に制限せられてをるの觀がある。蓋し畫一、整齊は、支那人の一特性であつて、九重邦畿の大より、井牧、市肆の小に至るまで整然として亂れず、東西方位を正し、事物を畫一齊整、一定の規模に入れんとするは、昔からの仕來と見える。遼東で我等の見た家は、いづれも貧乏人の家であつたが、それでもなほ一定の式があるかのやうに思はれた。門口に味噌の壺！　それは恐ろしい臭い味噌であるが、それが置いてある。閾を跨ぐと直ぐ土竈があつて、鐵の平釜がかゝつてをる、これで玉蜀黍を捏ねて食ふのである。庭には一面に笊や籠が轉がつてをる。皆玉蜀黍の容物である。　南向の窓に片寄つて、室が排列されてをる。細君の房が一等奥にあつて、入口には扉がしまつて、ピンと錠が卸してある。合鍵は主人公が持つてゐるのださうである。室は土間である。其の上にアンペラが敷いてある。細君はいふまでもなく、主人公始め子供まで靴穿きのまま寢るのだから、不精な人民だ。座敷の隅に土を盛つて馬鈴薯の植ゑてある家もあつたが、これはまた驚くべき野臭太郎である。土間の下はオンドルになつてゐる、一口に言はゞ床の下に煖爐を据ゑてゐるのである。床の下から煖めて、枕元に馬鈴薯を植ゑて、焼酎を呷つて天井からブラ下つてをる蠟を眺めて、歌を謠つてゐるところへ、ニーいい君はどこまでも太平無爲な生涯をしてゐる。

支那の民家へ入つて一等目につくのは、赤紙がベタ〳〵張つてあることである。東廂、西廡、衙門、中庭、閘門、影壁、到る處として赤紙の貼つてないところはない。福の字は豚の小屋にも貼つてあるくらゐで、ニーいいの窓にも貼つて置きたいくらゐな勢力である。さう〳〵福の神が矢鱈むしやうに舞ひ込んでも困りものだらう。祿、囍、壽などいふ芽出度い字はいくらでも貼つてある。支那は流石に文字の國だけあつて、中々旨いことを書いた聯などもある。國恩家慶、人壽年豐だの、三星在戶、百福迎門だの、天作之合、文定厥祥だの、文章鳳藻、福祿鴛鴦だのと、いづれもお芽出度い緣起のいゝものばかりである。いづれ新年か婚禮の時にでも書いて貼つたものだらう。櫃には金銀滿斗などと頬つぺたの落ちるやうなのがある。金庫には、黄金萬兩だの、招財進寶だのと、金が唸つてをるやうなことが書いて貼つてある。だれでも金の有るがいゝか、無いがいゝかといつたら、有るに越したことはあるまいけれども、緣起ばかり擔つてをつて、働かんでは金運が向つて來ようと思へぬ。けれども支那人は緣起ばかり擔つてゐる人民ではない。實際働く、働いてをかしいやうに金を溜めるから豪いものである。

一萬や二萬の金を持つてゐても、金の有るやうな顔をせぬから豪いものである。

張家屯の守備で一番高評を博したのは、我輩特製の汁粉であつた。綠豆といふのださうであるが青い小豆が、支那人の家にあつたから、それを少し買つて來て汁粉を作つた。餅も何にも無い汁粉であるから、たゞ青小豆の煮たのである。併し中々珍味であつたところが、誰が言ひ振らしたか、聯隊本部で汁粉が出來てをるといふので、土を掘つてゐた第一線の中隊長傳令といふのが、いづれも〳〵飯盒を提げて、「中隊長殿が櫻井少尉殿から汁粉をもらつて來いといはれました」と來たから驚いてしまつた。五合や一升の小豆を煮たところで、ソンナに諸方から鍋をさげて來られては大變だ。「モウこれよりありませんといへ！」と杓子で一杯づつ分配すると、傳令は飯盒の底をのぞきながら、甚だ失望したやうな風をして歸つて行くのであつた。

六月十八日の夜は曇つて、今にも雨が落ちさうな空模樣であつたが、この日は予に取つて、忘れんとして忘るゝことの出來ぬ、悲しき思ひ出の日であつた。それは亡弟忠淳の七年忌に當つた日なのである。彼は十四の夏、予の膝に凭れて死んだが、其の死のあまりに不意であつただけに、年が立てば立つほど、なほ思ひだされて、人知れず涙を啜るのである。棺に納めて、新しい帽子を着せて、手に珠數を持たした、白き蠟の如き顏を思ひ出すと、予は彼を此の世より奪ひ去りし天を恨むのである。

予はタワイもなく眠れる從卒の顏を見かへりつゝ天幕を出た。草叢を渡る風の聲のみが習々として、天地は深き〳〵沈想に耽りつゝあつた。不意に遙かの前線に一發の銃聲が聞えたが、モウそれ切り音も沙汰もなかつた。

予は小高き丘を越えて、とある河の岸に立つた。そして衣嚢から手帖を出して、其の一葉を引き裂き、鉛筆で「直覺忠耀童子」と書いて水に流した。予はその紙片の流るゝを見送りながら、堪へがたき情を以て之れを拜した。

六月二十五日に及んで、歪頭山が手もなく落ちると、我は戰勝の利を收めたから勢に乘じて劍山の敵に當つた。劍山は東狙兵第十四聯隊の一中隊が、砲二門を以てロバチン大尉指揮の下に守備してゐたのみであつたけれども、峻嶮無比なる要害に依賴してをり、蔦なくんば登るべからず、野猿にあらずんば攀づるべからずといふ要害であつたから、我軍はこれが爲に大分やられたが、敵も全員の四分の三を失ひ、殘兵僅に五六十、援兵も來らず、遂にロバチン大尉をして退却するの止むを得ざるに至らしめたのである。我軍が劍山を確實に占領したるは、二十六日午後五時であつた。聞く所によると、ロバチン大尉は恣に陣地を放棄したといふ廉を以て、フォーク將軍の告發に會ひ、軍法會議に附せられて總ての名譽を剝奪せられ、禁錮一箇年の判決を下されたが、大尉は、皇帝から判決の到達するに先だち、憤死したといふことである。

ステッセル將軍は劍山の喪失を深く遺憾とし、日本軍の後續團隊が續々大連附近に上陸するの報あるにより、其の未だ強大なる增援を得ざるに先だち、速かに劍山を恢復せざるべからず、幾許大の犧牲も今は之れを辭すべき時にあらずと、二回、三回また四回、五回、六回、再七再八、巧妙奇智、勇敢無類の反擊を試みたけれども、劍山恢復の初一念は、一も之れを達することを得ず、徒らに斃死者を横たふ

るのみで、目的物たる劍山は遂に日本軍の手中に殘つた。

されど露軍が一敗めげず、二敗屈せず、三敗未だ倦まず、四回また五回、逆襲につぐに逆襲を以てし、死傷、損失固より意とせぬ、其の大膽不敵なる行動は、流石に露軍だけあると感嘆せざるを得なかつた。此の勇氣に假すに築城の利を以てしたのであるから、旅順本防禦線に於いて頑強なる抵抗も出來たのである。砲臺は破壞せられ、市街には日夜砲彈が落下して、婦女子が道路に叫ぶと雖も、彼等守兵は平然として唯全力を盡すべしとて動かなかつた。併し劍山恢復攻擊のため、露軍の損害がしたゝかであつたから、トウ／＼思ひ切りをつけ、日本軍の防禦極めて堅固にして、此の上多大の損害を出すにあらざれば占領すること難し、如かず手を引いて堅牢なる工事を施し、日本軍の來襲を迎へんのみといふ殊勝な考へにもなつたのである。

一回陣地を占領すると、六七回猛烈なる逆襲をやつて來る。ポン／＼と銃聲が聞えると、そら復た來たといふ始末で、五月蠅いの五月蠅くないのでない。飯を炊きかけてゐるときに來たこともあつて、はなはだ癪にさはつた。或る時などは、例の青小豆の汁粉で評判を取らうと折角やりかけてゐると、又々ポンポンポンポンポンホン！　そらまた來た、いゝ加減に思ひ切ればいゝものを、露兵も存外未練が多いなどと冗談いひながら出掛けることもあつた。惜しいのは汁粉で、折角出來かけたものを捨てて戰線へ走つたこともあり、露兵君のお察しの無いのを怨まざるを得なかつた。コンナ向つ腹の立つたときは、鼻水を垂らして欲しさうにして立つてゐるニーいゝ君などにやることではないと、サラッと小豆をふり撒いて捨てるのだから面白い。一體我輩の大好なニーいゝ君も、兎角に根性が卑しいから困る。彼等は戰爭が書き入れ時で、コンナときに儲けないと、また儲ける時が無いと思つてゐるのだから、まるで命がけである。

コンナこともあつた。六月十四日であつた。我が師團の某二個中隊が、凌水河子から猪圈子溝といふ方へ偵察に行つたところが、敵は散兵壕を掘つてゐる最中のところへ出くはした。我軍は忽ちバラ／＼と散開して、ポン／＼と打ちかけると、誂へたやうにコロ／＼と二三人轉げた。これには驚いたと見えて、敵も壕の中へ隱れ、銃尖を揃へて撃ち出したところが、何處に隱れて形勢を見てをつたものか、支那人が彼我の銃口前に飛び出して、今斃れた露兵の着物を剝いで取るのだから驚かざるを得ない。實に我が銃口前二三百米突の近距離である。支那人は戰爭を何と心得てゐるのか、彈が當つたら死ぬくらゐは知つてゐさうなものである。あまり人を人とも思はない、彈を彈とも思はぬ糞度胸である。泥棒もカウ命がけに來られては、全く手がつけられぬ。而もこゝは露軍の勢力範圍である。それでも平氣で彈の降る中で、追剝をするのだから、どこまで慾が深いのか底が知れぬ。人の話にニーいゝ君が鍋を冠つて此れ式の泥棒をやつてゐたといふから、これは少し命が惜しい組と見える。何にせよ、ひどい話で、慾も斯う露骨無氣味になつては、イッソ愛嬌があつていゝかも知れぬ。

戰爭で一番小癪に障るのは雨である。此の時大雨沛然として至り、榴彈東條の如く東西に[illegible]などといふと、如何にも威勢がよくていゝが、雨ほど無慈悲なものはない。不規則に積み上げた塀から、青い柳が何段にも重なつて、房のやうなムク／＼とした枝を出し、それに雨が

絲のやうにシメ〴〵と懸つて、驢馬がアゴー、アゴーといつたやうな哀れな音を出すのは、實に雅致のあるものである。しかし、戰爭には風流もいゝが、雨などは甚だ要領を得ぬ不粹なものである。しかも戰死者の光輝ある額に、其の光輝ある軍服に、雨の降りかゝつてしほたれたる惨たらしさを見ては、時はつれないものであると、いつも思つた。

しめやかに降る雨――しとゞに降る雨――バラバラと降る雨――いづれか思ひ出の種ならざるはない。

雨はザー〳〵と降る。風はゴー〳〵と鳴る。巖の上からオーイといふと、巖の下でもオーイといふ。何だ？ 敵か？ といふと、上からサウらしいといふ。忽ちズドーンと銃聲がする。そらやつて來たぞと、雨の中にコロ〳〵と寢ころんでゐる露營地では、皆いひ合したやうに頭をあげる。來たナ？ と眼をキラ〳〵光らしてゐる。「皆起きろ！」と聞えるか、聞えぬかくらゐの號令、雨が一しきりザーと來る、シュッ、プリッ、ハハン、ハラソ、ヒュー！ 銃聲が漸く烈しくなる。雨の夜は少しも油斷がならぬ。いかさま雨は戰爭の魔者である。

第十五　露西亞の兵隊

露營地の最前線に在りて、本隊の安否を一身に荷へるものは步哨である。一步哨の雙肩には、實に全軍の生命が懸つてゐる。雨の晨も、風の夜も、儼然たる態度を崩さず、眼を張り、耳を傾けて、敵や來ると警める、寸時の注意も忽ち全軍の安危にかゝる。「步哨の職掌は卽ちこれ死なり。」と身輕く任重きは、實に步哨である。

犧牲となるは軍人の本分であるが、步哨に於て、殊に其の勇氣を要求するのである。守地はこれ墓場なり、之を棄てては、また他に死所を發見することを難しとするものは步哨である。

前哨の步哨線は、北、雙臺溝より起り、徐溝、鄭山、黃沿川、雙頂山の一帶に亙つてゐた。これが四字形山より太白山、老嶺山を連ぬる分水嶺、高地脈を守備するところの露軍の前進陣地攻擊準備に於ける我が第二軍の姿勢であつた。

長き夏の日も暮れて、步哨の影は闇に葬られた、時は七月十六日夜半、我が某步哨線の前面に「止れ！」といふ步哨の誰何が聞えた。何者かが近づいたと見え、步哨は銃を構へた。

黑影の一つ、二つ、三つが、ガサ〳〵と草を分けて進み來る。步哨は「止れ！　止れ！」と連呼したが、止まらない。「ナニ小癪な！」と、ズドンと一發喰はすと、ブルーンといつたやうな、彈の風を切る音が草を掠めた。途端に黑影の一隊がザワ〳〵と來たから、敵襲！　敵襲！　パハン、パンハン！　と急射擊をしたが、早や目にあまる敵兵は銃劍を揮つて突つ掛つて來た。何をいふにも多勢に無勢、步哨は銃槍の餌食となり、咽から肩から、傷を蒙ること十餘箇所。

時恰もよし、我軍の一小隊が不意に山頂に表はれて突貫したから、敵は急に踵を轉けるやうに逃げ失せた。「ナンダ猪口才な！」一陣頭寂として、腥き風が吹き迷ふ。戰場の跡は實に物凄い。

「步哨はどうしたか？」「小隊長殿、こゝに死んでをります。」と一兵が報告すると、小隊長は「ウム死んだ？」と步哨を抱き上げて「オイコラしつかりせんか。」

步哨は小隊長の聲が耳に徹したか、微かに眼を開き、小隊長の手に縋つて「小隊長殿步哨線

は大丈夫であります……と涙を流しつゝ小隊長の顔を見上げて報告した。

「ウムよくやつたぞ、大丈夫だ、安心せい、氣をシッカリ持たんといかんぞ。」

「小隊長殿、こゝはどこであります。」

小隊長は聲を呑み「篠原！　こゝが分らんか、こゝは歩哨線だぞ。おまへが踏み止まつて敵を喰ひ止めた歩哨線だぞ……敵は退却したぞ、……分つたか、オイ篠原！」と、この聲が彼の耳に達したか「ハイ」といつたまゝ、微笑を洩し、血に染みたる手を小隊長の手に渡して、眠るが如く絶命した。

七月二十六日、諸隊齊しく準備陣地を發し、鞍子嶺高地脈進撃を起した。太白山、老座山は我が攻撃正面の最左翼にあつて、敵の鎖鑰點と賴めるところであつた。これより先き七月十日ごろ、最左翼の海軍望樓附近に於いて敵の海軍と砲火を交へて、陸海軍交戰といふ珍戰をやつたことがあつた。なにしろ相手が相手であるので、甚だ始末のよくない戰鬪であつた。敵艦は海岸に摺り寄つて軍艦旗を翻し、甲板上に機關銃を据ゑて發射する、其の距離實に三四百米突であつたから、手に取るやうに彼等の運動が見えた。先方ばかり熱心に撃つてよこすので氣の毒であつたから、ボン〳〵と馬鹿にしたやうな撃ち方をしてやつた。向うは機關銃といふ業物を打つてゐるのだから、さう馬鹿にもならぬので、宜しくあしらつてゐたが、其のうち敵艦も彈丸が減つては損だと思つたか、引き揚げてしまつた。併し有つて有りさうにもないやうな珍戰は、これ以來左翼方面に於いて毎度もあつたので其の最も劇しかつたのは、二十七日卽ち老座山攻撃第二日目の時であつた。敵の砲艦や、四本マストの附いた假裝巡洋艦などが數隻、老座山の西、龍王塔の濱へやつて來て砲撃を始めた。彼が砲撃の目標とするところの老座山は、我が攻圍軍の最左翼であつて、實に攻撃の樞軸であるから、速かに之を占領せなければならなかつたのである。露軍も亦この地を日本軍に委すれば、其の背後に逼らるゝの危險があるので、海軍をして之れが防禦に協力せしめたのである。

我軍は二十六日第一着に老座山の攻撃を行つた。露軍の驍將コンドラテンコ少將は老座山の情況の危險にして、守兵は辛うじて陣地を支持し動もすれば日本軍の急迫に堪へずして退却せんとするの情況を見ると、厲聲叱咤、増援隊將に到着せんとす、斷じて退くこと勿れと令し、躬ら一隊を指揮して我軍に當つたが、我軍は敵の砲撃に屈せず、午前十時既に老座山北方の友軍砲兵に援護されつゝ、其の鞍部を占領した。この方向の守備司令官セミヨノフ大佐並にコンドラテンコ少將は頗る之れを遺憾として「太白山は確實に占領しあり、老座山は必ず之れを奪回すべし」と息捲いたが、一度手中に歸したからには、日本軍とても中々之れを放すことではないから、敵も遂に頽勢を挽回することが出來なかつた。こゝにコンドラテンコ少將の名をいつたが、此の將軍は守備軍における名將中の名將で、衆望を一身に荷ひ、勇名嘖々全軍を壓したる人であつたが、遂に十二月を以て東鷄冠山北砲臺に於いて戰死を遂げた。

全軍の最左翼部隊のその最左翼にをつた一兵は、竹内伍長といふ戰鬪斥候であつた。敵の軍艦から、陸戰隊が濱へ上陸して、最左翼よりその友軍とともに我が背後を窺はんとして前進するのを見たから、これは捨て置けずと、部下の二川一等卒をして報告に走らしたが、忽ち一彈

飛び來つて其の腹部を貫通した。鮮血滾々として迸り出づるとも、二川は少しも屈せず、大隊長の前に至り、姿勢を正して報告を終ると、其の儘仆れて再た起たなかつた

老座山で壯烈無比なる最期を遂げた二人の勇士があつた。其の一人は我が白川一等卒にして、他の一人は露兵である。この二人は格鬪の後、白川の銃劍は露兵の腹を刺し、露兵の銃劍は白川の腹を刺し、田樂刺しにしたまゝ、互に堅く銃把を握り、目を見張つたまゝ死んでゐた。實にいづれともいへぬ無雙の猛卒である。予は此の露兵の名を知りたかつたが、手段が無かつたのを遺憾に思うてゐる。

氷霜の如き銃劍を閃かして、怒濤の如く押し寄するところの日本軍に對して、獨り陣地に留まつて抵抗を試みんとする慓悍無類の露兵のあることは、予の屢々目撃したところである。總じて攻撃軍の來襲を迎ふる守兵は、假令堅壘に占據し、精鋭なる兵器を持すとも、決して氣持のいゝものではない。攻撃精神の旺盛なる軍隊は、射撃效力の成果によつて、戰鬪の運命を決することなく、鐵の如き決意を以て防禦軍に向ひ、突撃を實行して、如何なる敵も陣地に留まる能はざるに至らしむるものである。かゝる恐るべき攻撃に當り獨り陣地に留まつて抵抗を試むるが如きは、中々六ケしいことである。戰場に血痕なく、一死屍なく、道路、田圃の間、刀劍、彈藥、小銃、大砲等を捨てゝ逃げた敵も、十六七年前には日本軍の相手であつたが、ソンナ意氣地の無い兵隊は露軍にはゐない。試みに彼等に向ひ「如何なれば汝等は陣地を棄てゝ去らざるか？かゝる望無き抵抗を試みんより、何すれぞ安全の地に身を移さざる。」と問ふに、彼等は唯だ、「上官の命なり。」と答ふるもの多かつた。

凹字形山でも、また壯烈極まれる離れ業を見せた露兵があつた。世界一の無鐵砲者と見えて、全身に石油を浴び、吾と吾身に火を放ち、大手を擴げて堡壘の上に躍り出して來た。そして炎々たる火焰の中から、カッと目を剝いて睥み返したところは恐ろしい形相で、大向の喝采は鳴りも止まなかつた。

老座山でも、眞裸で地雷を埋めに來た露兵があつた。その地雷を裝置するところは、老座山の鞍部の七曲りになつた道路上で、我軍の前進路を扼して、一泡吹かせてやらうといふ算段と見えた。そして露兵の道路は、その七曲りではなくて、別に小徑を造つてゐた。我軍は中々その手には乘ることではないが、丁度日の暮れ方、七曲りの道路の色が際立つて白く見えてゐたのは、露兵が裸體になつて地雷を擔いでやつて來たのである。我が潛伏斥候は之れを擊退しはしたが、實に不敵な露兵であると思つた。

露兵の剛膽なることは、なほ其の例に乏しくないのである。堅城、鐵壁に據り、不撓不屈の攻撃を實行する日本軍に對して抵抗を試みたる旅順の守兵は、如何なる悲境に際會しても未だ屈せず、善戰善守したる其の比類なき勇敢なる行爲は實に全世界の等しく認めねばならぬことである。

執着――頑強――耐忍――服從は露兵の特色である。これは恐らく天地化育の然らしむるところであらう。滿目茫漠として際涯なき露國の天地は、悽愴且つ寂寥の情に堪へざらしむるものがある。この天然の慘澹たる光景から迫害を蒙りつゝ、彼等は無情、悲哀、懷疑の雲に蔽はれ、絕えず艱難に默從せざるべからざるに至つて、悲慘苦痛なる經驗は、彼等に頑強なる耐忍力と絕對的服從心とを銘刻せしむるに

至つたのであらう。

露人の性情に於いて最も發達したるものは、この消極的勇氣であるが、また彼等の思想は、極端より極端に走る嫌ひがある。温和忽ち暴戻――沈靜忽ち躁狂――快活忽ち悲哀――卒然として變化出沒するから油斷がならぬ。露人の前後撞着と朝令暮改とは聞えたものである。

露兵は熟練なる運動家良好なる旅行者である。露兵は苦痛に堪ふる兵種であるから、悲慘なる行軍にも能く成功する。露兵はまた頑強なるが故に、猛烈なる砲火の下に在りて塹壕を死守するに適する兵種である。

行きあたりばつたり、露繁き草原の上でも、霜白き石原の上でも、ゴロリと轉んで臂を曲げて枕し、樂しみ自ら此の中に在りといつた風に、輕便にノンキに出來て居ることが、例のニい君にも讓らぬところの露兵は、其のボーとしてゐるところに可愛氣がある。我が斥候が道傍に、何だか黑いものが轉がつてゐると思つて蹴つて見たら、露兵がムク〱と起き上がつて來たなどいふことがいくらもあつた。なにしろノンキな男揃ひと見える。

予が負傷後、伊豫道後温泉へ轉地療養をしてをつた時に、半里程先きの松山に收容されてゐた捕虜が時々入湯にやつて來たが、其の爲體たら驚くべきものであつた。彼等が上着を取つて袴へ放り込んだまではいゝが、泥靴をスポリと脫いで一しよに叩き込むのであるから無茶苦茶である。泥靴も着物も區別は無いのである。彼等の一隊が膃肭臍の如く游泳よろしくあつて出て來ると、濡れた其のまゝ着物を着たり、靴を穿いたりして、スタ〱歸つて行くのであるから、頭からビショ濡れである。さうして最初から彼等一人として手拭を持つてをらぬのであるから驚く。犬でもあんな眞似はしまい。

ある露西亞の士官でコンナことをいつたものがある。日本兵の戰死者の背嚢を解いて見たら、其の入組品の秩序整然たることは最良の主婦と雖も斯くまで几帳面には行くまいと思つた。其の上總ての器具が、買ひ立てのやうにピカピカと光つてゐる。更に驚くべきことは、日本兵の背嚢の中に歯磨楊子のあつたことである。武士たるものは斯かる嗜みがなければならぬといつたが、歯磨楊子を持つてゐるところの日本兵には、手拭なしの入浴や、濡鼠のやうになつて平氣で居るやうな、ソンナ嗜みは迚も出來ない相談である。

露兵は一枚の手拭を持たぬのに反し、其の將校はドウかといふと、これはまた恐ろしい贅澤なものである。宛も一個の凱旋軍を見るが如き感を催すものは彼等將校の群である。彼等は友禪縮緬の浴衣を着たり、上布の紋附羽織をはおつたりしてゐた。温泉場の高樓で籐椅子に凭りかゝつて、滅法界大きなタオルを頭から冠つて、湯女に煽がれながら、ビールの滿を引いてゐるところは、誰が彼等を敗軍の將と見よう？之れを仰いで憤慨したものは、獨り哀れなる露兵のみでもなかつたらう。あの大きなタオルの端でも引き裂いて、兵卒に呉れてやつたら！と予は思つたりした。

浴室は屢々――殆んど毎日買ひ切りにしたから、一般入浴者の妨害となつたことは一通りでなかつた。半日も買ひ切りせられては、入湯日當てに來てゐる旅人には迷惑千萬である。予等と露國將校との間には、殆んど何等の會話もなかつた。彼等は面と向ひ合つても、ツーンと濟ましたものであつた。互ひに睨み合ひをしてゐた譯でもないが、向ふも小面憎いと思つたこ

ともあつたらうが、こちらも小面憎いと思つてやつたこともあつた。しかるに露兵と日本の士官や兵卒との間には、頻りに談話が交換されてをつたやうである。

　何でも露國將校の評判はあまり良くなかつた。彼等が滿洲へ行くのは、蝦蛄で鯛を釣るやうなことばかり考へてをつて、勳章か、勳章でなければ爵位か、爵位でなければ、戰後の恩賜金にでもあり附かうなどと思つて、戰爭を博奕と心得てゐる先生ばかりだと、松山にゐた捕虜の細君が書いたに擬しある書物に載つてゐる。何にせよ露國の將校には一風變つたところがあるやうである。

　五月十六日頃、日本軍の情況を探索せんため、フォーク將軍の威力偵察が金州で行はれた時、其の結果はあまり面白くなかつた。しかも此の戰鬪間、或る二人の將校は朝から酒を飲みつゞけて圖ぶ六になつてをつたので、イザ退却となると大勢と離れて、一人の將校などは道の窪みに落込んでしまつた。ヤイおれを連れて歸つてくれなどといつたが、他の將校もへべレケになつてゐたものだから、助けもせずに置去りにしたといふことである。そもそも旅順戰の最初からして、コンナ放埓な始末であつたとは、露軍も情ない話だ。

　露國の兵卒が平民なら、將校は貴族である。其の間に著しき階級があり城壁があつて、親密なる家族的關係が無い。下士卒などは、丸で人間のやうに思はれてゐないのである。露西亞の或る公園には、「下士卒の入場を禁ず。」といふ掲示がしてあるとかいふことである。兵士は最劣等の人種なりなどと思はれてゐるのだから、あの人のためなら死ぬるなどといふ兵隊は一人も無いといつた人もあるが、或はさうかも知れぬ。

　池の鯉を釣り上げて、生で齧りついたりする露兵を見たことがある。ソンナ原人に近いやうな露兵はタワイもないものである。露兵に無智なものが多いといふのは定評のやうである。その代り命令に服從することは絶對的であるから、右を向いてをれといへば、一日でも右を向いてゐるといふ質である。獨逸の兵隊にもコンナ風があると見えて、士官が盆栽に水を撒けといひ付けて置くと、其の間に雨が降り出しても構はず水を撒くといふ風であるといふことである。斯かる頑是ない、タワイもない思想は、兵隊として最も適任であらうが、指揮官其の人を得ないならば、子供みたやうなものであるから、薩張り役に立たぬ。

　予は露兵は決して侮るべからざる兵士なることをいつたが、露兵は世界に於いて恐るべき兵士であることを繰り返して置く。

　露兵は豪膽であるが、勿論意氣地の無い男もある。老座山で軍艦から濱へ上がつて來た水兵などは、逃げ遅れたと見えて、顏に鍋墨を塗つて支那服を着込んで、民家の床下に隱れてゐるのがあつた。引つ張り出したらブル〳〵震へながら、手を合して何やらモグ〳〵いつてをつた。同じ處で、我軍のある兵が黃泥川の眞中で負傷をしたが、敵はいつまでも〳〵此の兵を狙撃してをつたから、一岸へ泳いで渡るわけにゆかなかつた。そして其の兵は、敵に打たれると沈み、打たれると沈み、浮いたり、沈んだり、頭を出したり、引つ込めたりしてをつた、露兵は鴉でも打つやうに面白半分に打つたらうが、生憎一發も當らなかつた。コンナことをして彼は四時間も水中に鸊鷉のやうに浮いたり沈んだりしてをつたが、露兵も亦た根氣よく打ちも打つたものである。同じ處に鍋墨の露兵

と鶺鴒の日本兵と、抑々いづれがそれ悧巧か？馬鹿か？

第十六　戰友の有難味

「日本軍は、だれでも同制式の防寒外套を着てゐる。あれを見ても將校と下士卒との親密なことが分る。」と露兵のいつたことがある。コンナ何でもないことの中に、露軍は日本軍の上下一致して事に當る、恐るべき勁兵たることを信じてゐたのである。露軍の將校は權威を墮さんことを恐れ、常に部下に對して萬里の長城を築き、以て軍紀を嚴にするの道を得たりと思つてゐた。露兵はまた、日本軍の將校は下士卒と共に相親むこと、恰も一家に於けるが如く、而も軍紀の嚴肅なること、到底我れの及ぶ所にあらずと確信してゐたのである。日本軍隊が家族的であることは、日本軍が世界に誇りとするに足る美事であるといふに、誰も躊躇することは出來まい。

我等は戰場に於て戰友の有難味をしみ〴〵と感ずるのである。老座山の攻擊戰であつた。幕舍の傍へ敵の地雷彈が飛んで來て破裂したが、その勢といつたら實に恐ろしい有樣であつた。岩は碎け、木は裂け、それが二三百米突の遠方まで飛んでいつた。天幕の柱は折れて深く地中に埋つた。彈片を拾つて見ると、生暖かい其の裂口は鉛筆でも削れるやうになつてゐた。地雷彈が破裂するとサアやられたに違ひないといふので、アチラからもコチラからも見舞に來る。やられたかドウかといつて尋ねてくれる。世の中にはお互ひだから、マアいゝサなんどと、平氣で見てゐるやうな不親切ものもあるが、ソンナものは戰友間では見られぬ。黑山のやうに見舞に集まつて來るのであるから、實に有難いものだ。この時には幸に一人の負傷者も出來なかつたが、一發で以て八十餘人の負傷兵と二十餘人の即死者とが出來たなどいふこともあつた。彈の中る中らぬといふことは、全く不思議な因緣である。中らうと思つたとて中るものでなし、中るまいと思つても、彈は追つて來てでも中る。

死骸の跡始末にしても、夏のことであるから、油斷してゐる間に腐敗する。天幕で卷いて山から引き下したりなどしてゐたが、目にも、鼻にも、耳にも、口にも、蛆がウヨ〳〵と湧いてをつて、二目とは見られぬ慘たらしいものであるから、支那人に運搬の手傳ひを賴んだところで、臭いから中々ウンといつてやつてくれるものがないのを、戰友は爭つて其の死骸の跡始末をしたのである。死骸を荷ひながら、「元氣な男だつたが、早やコンナものになつてしまつた。」だの、「俺の村のもので、おふくろ一人しかない。」などと話して行くのである。そして死骸を擔いで行く身が、擔がれる身には何時なるか。今をも計られぬは人の身の上、果敢なきは我等の命であつた。

太白山の攻擊に、詰めて敵と接近した山背を前進中のことであつた。前夜に偵察に出た斥候であつたらう、一人の我兵が仰向けに斃れてをつて、早や其の顏には蛆が湧いてをつたが、其處へ通りかゝつた我等突擊隊は、最早死者を顧みてゐる時では無論ないけれども、一人の兵卒は駈けりながら草をむしり取つて、其の死者の顏を蔽つてやつたのが予の目に留つた。この咄嗟の間にも、なほ戰友の死骸に草葉を蔽うた心根は何たる尊き心であらう。

支那人が教へたのであるといふことだが、死

者の鼻へ蓬の葉の栓をして置くと蛆が湧かぬとかで、戰死者の鼻に其れの栓がしてあるのもあつた。

淳乎として淳、公平無私たるは戰場である。私怨などいふものは戰場に無い。疑ばず、欺かず、私を以て公を誤ることの無きが戰場である。場所はわざと控へて置くが、或る國或る村の武村といへば、近郷近在に響いた豪農であるが、同じ村に市藏といふ小作人があつた。どういふ込み入つた譯のあつたものか、此の市藏は武村家に對して深く怨を抱いてゐて、先年市藏の親父は、草葉の蔭からでも、此の恨を報いずして置くべきかと、武村家を怨み死に死んだ。市藏も亡父の志を繼いで根心魂に徹し、衣は破れ、食は盡き乞食同然の零落をしたが、一度は人らしき人となつて、一家の怨を報いくれんずものと竊かに心を碎くうち、三十六年、市藏は徵兵にとられた。

明くる三十七年、市藏は先登第一の選抜によりて出征した。さて彼の武村家の總領に眞太郎といふのがあつて、當時豫備少尉であつたが、同じく徵されて出征し、何の廻り合せか、市藏と同中隊の小隊長になつた。市藏は我家の仇敵たる彼が、何事ぞ、我が小隊長——生死を倶にすべき人とならうとは思ひも寄らなかつた。何となく面白くないことだ、變な工合だと思つてゐた。それは面白くないどころか、ドンナにか苦しかつたらう。いふまでもなく眞太郎とても同樣であつた。

滿天の星が一時に落下するかと思ふばかり、銃砲火の亂れ散る中を物ともせず、老座山の鞍部を扼えた武村少尉は、その腦天を掠むる飛彈のために、ドッとばかり仰向けに打ち倒れた。

場面がかはつて、茲はさる豫備病院の一室である。白き毛布に被はれ、暖かき病衣に包まれた武村少尉は、恐ろしき夢に驚いて目を醒まし、頭の繃帶を撫でつゝ苦しき息を吐いた。

「オー眞太郎、氣分はどうぢやナ、大變な怪我をしたさうぢやの。」

武村少尉は懐かしき聲を聞いて、ハッと我に返り「ア、お父さんですか……」

といつたきり、早や目には一ぱいの涙を浮べ、胸が迫つて二の語を繼ぐことが出來ぬ。暫くして「お父さん、なぜ私は死なゝかつたのでせう。、、、死ねばよかつた……」と嘆息した。

彼の父は「勿體無いことをいふでない。運が強かつたのぢや。」

「お父さん、運なら死ぬるが運でありませう。私は死ぬべき運が、今日このやうに命を拾つて還つて來たのは、親切な、戰友に助けられたからであります。」

「助けられた！ ドンナお方に助けられたのぢや。」

武村少尉は聲もおろゝに「お父さん聞いて下され、私は……私は、市藏、あの市藏に助けられました。」

「エッ！ 市藏に……あの市藏にか……」と父は驚きの眼を張つて眞太郎の顏を見詰めるのであつた。市藏——あの憎い市藏の奴に、我子が救はれたと聞いては、驚かずにゐられなかつたであらう。

「さうであります。私は今此のやうなところに寢てゐる段ぢやなかつたのでした。私が打たれて、其の儘氣が遠くなり、モウ死ぬのであらうと、ウト／＼としてをりますと、私の名を呼ぶ聲が地の底からでも來るやうに幽かに聞えました。」

「ウム。」

「小隊長殿、氣をしつかり持つて下され、小隊長殿といつてくれますから、私も呼び覺まされたやうに眼を開けて見ますと…誰あらう…市藏――市藏でありました。」
「ウム市藏――」かと父親の頰には潸々と涙が傳はる。
「市藏ではないかと、私も一言いつたきり…」
「ウム」
「小隊長殿、氣をしつかり持つて下されといひますから、私も市藏！　おまへもさうしてゐては打たれる、おまへも負傷してゐるではないかと…」
「市藏も負傷してゐたか？」
「市藏も負傷です。すると市藏は――小隊長殿、氣をしつかり持つて下さい。私は大丈夫です。死ねば一處ですといつて、肩から背負袋を下して私の頭をつゝみ、市藏は私の軀の楯となり、足を伸して石をかき集めながら、彈を避けてをりました。」
「ウム、死ねば一處にといつたか。さうであつたか？」と父親は寢臺に手をかけたまゝ頭を垂れた。何者かに襲はれた如く身震ひして、聲を惜まず泣くのである。眞太郎は「私は熱湯を呑まされるやうな感じがいたしました。其のまま日の暮れるのを待ちまして、夕方私は市藏の肩に負はれて、多くの斃れた戰友を見捨てて山を下りましたが、お父さん、私は恥かしく思ひました。市藏が一家の怨を忘れて、叩き殺してもやりたい私を救つてくれたことを思ふと、どこまで淸い心であるかと、私は肩身が狹いやうに思ひました。コンナことと知つてゐたならアンナ仕打もするのでなかつたと、つくづく恥かしく、氣の毒で、可哀さうでたまりませんでした。」
「尤もぢや、俺も夢から覺めたやうぢや、市藏は、恨んでゐるだらう。皆わしが惡かつた。」
「市藏はこれしきの傷には退かぬといつて、後に殘りましたが、若し無事に凱旋して歸つて來たら、あれの家の立つやうにしてやつて下され…これが眞太郎の一生の御願ひであります。」と、武村少尉は語り畢つて、無限の悲愁と追懷との爲に、しきりに心を傷めるのであつた。
　さて三十八年に市藏は凱旋した。武村家の大恩の報酬として、少からぬ田地を市藏の前に提供した。普通人ならば待つてゐましたといはぬばかりに、三拜九拜して受けるところであるが、市藏はサウでなかつた。市藏は、戰爭は公事である。公事を以て私の報を受くべきものでないことを知つてゐた。而も乃父以來の恨を忘れて好餌に就くは、市藏の潔しとするところではなかつた。市藏は貧しけれども意氣の人である。キビ〳〵した男である。公私を混同するやうな男ではない。それで斷乎として武村家の報酬を退けた。彼は今もなほ淸貧に甘んじて、田を打つてゐるといふことである。
　予が聯隊の或る廊下の掲示に「爲すべきを爲さず、饑うれば飮み、疲れたれば休み、眠氣を催せば臥す。是れ凡人のなす所なり。軍人は飮まず、食はず、眠らず、力の存する限り、根限り、爲すべきことを成し遂ぐるの覺悟なかるべからず。」と書いてあつたが、太白山の攻擊は、これを少くとも事實に證明した戰闘であつた。七月二十六日、諸隊の進撃效を奏せず、敵に肉迫したるまゝ夜を徹し、二十七日は現場維持、其の夜内野大隊の强襲により、始めて敵が動揺し、二十八日、我軍第一大隊の突撃を以て始まり、各隊之れに次いで確實に之れを占領するに至つたのである。二十六日は少くと

も予等が初戰の日であつたが、攻撃捗々しからず、夜の幕は靜かに下りて、夏なほ凄き利鎌のやうな半月は天に懸り、我等は累々として積み重ねたる戰死者の傍に無念至極の一夜を明かした。

占領後最も感を深くしたのは、我が第三中隊兵頭上等兵の死體である。兵頭上等兵は第二中隊の先頭にあり、敵の機關銃に向つて嶮崖を突撃したのであつたが、其の受くるところの創は實に數十ヶ所に及んでゐた。敵は其の死骸を靜かに陣地の一隅に横たへ、靴も、帶皮も、銃も、傍に整頓して置いたが、彼れの全身に無數の彈丸を受けて、胸部以下完全なる部分無しといふ有樣であつた。彼は敵の機關銃に打たれたのみでなく、近距離であつたから、敵彈のために携帶の彈藥盒の彈藥が悉く破裂したので、全身に蜂窠の如き彈痕を印したのであつた。上等兵が機關銃の銃口前を突進して、僵れても、僵れても、亦起つて鋒を拔かざれば止まざるの豪膽には、敵も流石に之れを感じたと見えて、丁寧に彼れの死骸を片付けて敬意を表はした跡が見えて、ゆかしく思つた。不幸にして敵と分れ、味方となつて、互に鎬を削つてゐるといふものの、これも君國のため止むことを得ぬ仕儀であつて、個人としては何の怨みも憎しみも無いのである。戰鬪力を失つた負傷兵の光榮ある死體に對しては、敵味方の差別なく敬意を表せねばならぬことである。後の話であるが、露兵が銃を組んで天幕を作り、其の中に我が負傷兵を入れて看護した情深きものもあつたさうだが、兵頭上等兵に對する處置の如きを見ても、我等は露軍の平等なる同情心と雅量ある襟度とに對して、衷心より感謝の誠意を捧げねばならぬ。然るにまた悲しいかな、露軍にはかゝる暖かき情を有する人のみではなく、また時には文明戰爭に於いて許すべからざる底の、殘忍非道を敢てするものもあつたことは、見逃すべからざる事實である。

太白山で、予に最も深き印象を與へたものは、林中尉の勇戰と愛犬ダルの戰死とであつた。

林中尉は予と同窓の友人である。上陸後脚氣に罹り、太白山の頃には大分劇しくなつて來て、半身は殆ど痲痺し、歩行も意の如くならぬため、軍刀を杖に突いて、喘ぎ〳〵行軍をしてをつた。

「林！太白山だけが戰爭ではないのだから、暫く後へ退つて養生して來い、病氣で僵れたらドウするのか。」と予は見るに見かねて、一先づ戰線を退くべしと、幾度か勸めたけれど、林はどうしても聽かなかつた。さうして「一つなりと斬らいで……」といつて、深い苦しい息をつくのであつた。中隊長も大隊長も、切に歸還を促したけれども、林はどうぞ戰線に立たしてくれと殊更元氣を作つて哀願するから、これほどに言ふものを歸れとも強ひかねて、そのまゝになつてをりはしたが、人の前でこそ元氣をつくろつて、大變良くなつたなどといつてゐたものの、蔭では「櫻井！皆が歸れといふけれど、僕がこのまゝ歸つたら、歸りつくかつかぬ間に死んでしまふことは極つてゐる。同じ死ぬのなら、戰死がしたい。僕は太白山の攻撃が延びるやうなら、それまでに死んでしまふかも知れぬ。それが殘念でたまらぬ。全く苦しいことは苦しいのだから。」といつて竊かに泣いてをつた。予は、林がさういへば其の通りで、同じ死ぬのなら戰死をさせてやりたい、あの體では、とても國へ歸るまで持たぬと思つて、慰めやう

も無く、今のところ彼はたゞ氣力一つで持つてゐるのだと感じた。

二十八日天明、太白山を突貫して先登隊なる我が第一大隊の眞先に立つて、群がる敵中に躍り込み、軍刀を揮うて敵の一將校の頭を刎ねたのは、實に林中尉であつた。

林は部下を非常に可愛がつた。「強ひて歸れといへば、歸らんでもないが、僕を小隊長として、たよりに思つて、一しよに戰死の覺悟で來てゐる小隊のものが可哀想だ。」といつて部下の愛にひかされて、一日も休んで養生しようなどとゝふ氣がなかつた。かういふ有樣であつたから、部下も非常に林を慕つてゐた。からお互に氣が乘つてゐては、戰爭も面白くやられる譯である。

林のことを思ひ出す度に、必ず其の外套が附き纏つて來る。太白山では何事もなかつたが、林に逢つたのは七月三十日、敵の第三抵抗線たる千大山高地線に向つて攻撃前進中、林が雨の中を行軍してゐるのを見た。そして林は外套を着てをつた。柳の枝を杖にしてはゐなかつたかと今に思ふ。予とは頭巾の蔭から一寸目を合せたきりであつた。其の次に逢つたのは八月七日で、大孤山に向つて攻撃の準備中であつた。豪雨の中に、予は林の外套に一しよにくるまつてゐたが、今から憶ふと、二人で何だか哀れつぽい話をしてゐたのである。それきりトウ／＼林とは會はず、林の外套にくるまつてゐたことが永劫の記念となつてしまつた。林を憶ふ度に、予は雨を思ひ、雨を思ふ度に彼れの外套を思ひ出すのである。

第十七　犬と馬

太白山が予の初陣であつた如く、露西亞産にして予の愛犬たるダルのためにも、初陣でまた最後の戰であつた。ダルは軍旗の進むところ、之れに從はざる無き勇犬であつた。二十六日予が軍旗を奉じて前進中、丁度朝から暴風雨ではあり、軍旗も敵彈に裂かれんとする有樣であつたが、或る山の鞍部を越えるときに、どうしたはずみか、予は軍旗を持つたまゝコロ／＼と轉倒した。やられたか？と思つたが、まだやられてゐなかつた。直ぐに立ち上つて見ると、ダルが尾を振り、嬉しさうにして予に從つてゐた。

犬のことなど考へてゐるときは、まだ餘裕があつた。けれども二十六日以來、陣地が取れるか取れぬかといふ切羽詰つた問題で、頭はのぼせてをり、左右には戰友の死屍累々たりといふ有樣であつたから、遂にダルも何處にドウなつてしまつたか、氣にも止めなくなつた。然るに二十八日、太白山を占領したのち、陣地の端から端へ、敵の防禦陣地の景況などを見廻つてゐたときに、處々に逞しい軍犬が戰死してゐるのを見て、予は遽かにダルのことを思ひ出し、そこら當りにゐた兵隊に聞いて見たところが、第二大隊の或る兵卒が――それは私が知つてゐます、二十七日の夜、第二大隊が敵の陣地前四五十米突まで接近したときに、ダルは同隊について來てゐたが、其の夜敵の機關銃にやられて戰死をしたといつた。大連以來、予の愛犬となり、尾を振つて媚を呈し、多くの兵士に可愛がられた彼が、四五十日の薄い縁で戰死するに至つた不憫さよ。ダルも戰爭さへなければ、旨いものを食つて、元の主人に可愛がられたであらうに、思ひがけぬ日本士官の後に尾いて、露營もしたり、戰場にも現はれたりして、トゥ／＼名譽

の戰死」を遂げてしまつた。
凡て動物の最期は、戰役の悲劇中の一つであつた。犬につけてまた思ふのは軍馬である。軍馬はその優秀なる速力と忍耐力とによりて、或は勇士を乘せて敵前を馳り、或は彈藥、糧食を運搬するのである。幾百の騎兵は、己れの脚下に其の乘馬を射殺せられた。幾多の馬は傷つきたるまゝ戰場に殘された。兵士は屢々己れの乘馬の苦悶を救けんとして、銃口を其の頸に當つるの已むを得ざるに至つて慟哭するものもあつた。馬は茫々たる平原の淋しき進軍に、荒涼たる戰場の露營の夕べに、最も忠實にしてまた愛らしき戰友であつた。彼等は眼中に慈愛の薄暗き影と不可思議の光とを有して、人間の威力を尊敬するところの愛すべき忠僕である。

仙臺の呉服屋の主人に大内源太左衞門といふ人があつたが、兵士の出征を見送る人はあつても、軍馬の出征を見送る人なきは遺憾である、また彼等軍馬に取つてまことに不愍至極であるとて、厩の前へ行つて一々丁寧に頭を下けて、「この度は御苦勞樣で御座います、何分御願ひいたします。」といつたさうで、熱心な奇特な人であつたが、戰後に軍馬の戰功を、永遠に傳へねばならぬとあつて、獨力で仙臺櫻ヶ岡公園に、軍馬の銅像を建てた。予は先年仙臺に往つたとき、大内家を訪問し、銅像も見た。大内氏は今は故人となつたが、此の志が、軍馬の愛すべく、一般動物の愛すべきを誨へて、世道人心を益したことは甚だ少くない。軍馬もかかる奇特の人によつて、長く功績も傳はり、追悼もされる譯であれば、また以て瞑すべきである。

「國民の偉大なるは、人民の數多きこと、若くは其の領土の廣大なることにあらずして、都て其の國民の抱ける憐愍の情の宏大にして正しきにある也。」

これは此の程、南亞弗利加フォート、エリザベスなる處で除幕式の行はれた、軍馬の銅像の碑銘である。これは英杜戰爭に殉じた軍馬に對し、感謝の誠意を表するため、公衆の義捐によつて建設されたものである。人間は己が慾望を恣にせんとして、老いて疲れたる馬の汗を絞つて絞つて絞り殺して、其の擧句には、皮も骨も賣り飛ばして酒食を貪つて居る。彼の鬼のやうた面魂のガタ馬車の馭者の太き鞭を見よ。彼等は瘠せた馬の腰を火の出るほど毆り飛ばして、ビュン／＼と風を切つて唸らせてゐるではないか。槍が降らうと、火が降らうと、血の涙、血の汗を流して、毆られづめに驅けつてゐる馬も我等と同じ生類である。憐むべき啞友である。

京城から海城へ行く途中で牛を徴發したところが、中にドウ引つ張つても叩いても、前へ行かうとせぬ牛があつた。「子に引かされて行けぬのであらう」と、子を連れて來たところが、喜び勇んで行進したといふ話を聞いたこともある。

重荷負ふ坂路を登る親牛に
子牛よりそふ村時雨かな
（大隈言道）

「親子の情は動物とても同じことである」或る人間の一種よりは、むしろ情愛の深いところがあるとも思ふが、予はこゝに兵作と愛馬との感ずべき物語をしたい。

本田兵作は輜重輸卒であつた。七月二十六日、太白山に於いて、兵作は馬の韁を取つて、小行李の位置——或る山陰——にをつた。兵作は愛馬の鬣を撫でつゝ、耳を戰線に傾けて、

銃聲を聞いてゐたが、忽ち百雷の一時に落下したる如き、轟然たる爆鳴動搖が起ると共に、濛々たる硝煙に包まれて、仰向けに打ち仆れた。馬は彈藥箱をグヮラ〳〵と振つて、鬣を逆立て、ヒヒンと一聲高く嘶いた。

兵作は擔架に乘せられて、野戰病院へ送らるゝことになつた。馬は主人に別るゝとは知らず、擔架の後から首を垂れて、しを〳〵として從ふさまは、哀れにもいぢらしかつた。そしていくら韁を引張つても、振返りもしなかつた。兵作は擔架の上で別れを惜しみ、愛馬を見て涙を流した。

兵作が豫備病院の病室で苦悶してゐた時も、愛馬のことは忘れなかつた。戰友に宛てて、熊野は誰が持つてゐるか？ 元氣でゐるか？ 飼葉はかうしてやつてくれ、大事にしてやつてくれといふやうなことばかりを書いて送つて、一言も我身の負傷のことは言はなかつた。熊野といふのは兵作が愛馬の名である。

話は三年を過ぎて、平和克復後、兵作は恩賜金を元手として、小間物行商を始めた。何がさて律儀者であるから、あの村でも此の町でも大もてであつた。ある日のことである。彼は重き荷を背負うて夜晝峠といふ難所に差し掛つた。すると「ドッ！ ドーッ！ 畜生ッ！」といふ、馬を追ふ馬子の罵る聲が峠から下りて來た。兵作はトボ〳〵して登りつゝ見上ぐれば、今し峠を踰えたる一頭の荷馬が太い材木を山のやうに縛りつけられて、馬子に鞭打たれつゝ、下り坂を追はれて來るのであつた。「ドッ！ ドーッ！ 畜生ッ！」どちらが畜生だか分らぬくらゐである。兵作は可哀想なものだなどと思ひながら、摺れ違ひさまに行きすぎようとすると、何事か？ 荷馬はパタッと立ち止つた。馬は忽ちヒューンと、生木の太い鞭を喰はされた。鬣にはパラ〳〵と木の葉が無慙に散つた。けれども馬は動かなかつた。さうして哀れにも悲しき嘶聲を發しながら、兵作に縋れ寄るのであつた。兵作はハッと思つて其の面をつくづく見れば、萬里異郷の空、雨に風に辛苦艱難を共にした熊野――その熊野であつた。山陰で辛い別れをした其の熊野であつた。どこにドウしてゐるのか、死にでもしたかと思つて、片時も忘れてはゐなかつた、其の愛馬熊野であつた。熊野が姿の變つた兵作を見忘れてゐなかつたのは、何たる可愛い心ぞ。かゝるところで、かゝる姿で廻り會はうとは、有爲轉變の世に、これはまた如何なる佛の引合せぞ！ 兵作は愛馬の昔に變る姿を見て泣いた。

馬子は何が何やらサッパリ分らず、小間物屋と馬とを等分に眺めながら、これは御親類筋ででもあるかといつた風で、銜へ煙管で、不思議さうに呆れてゐるのであつた。それは呆れたに違ひない。

「おいさん、愚圖々々してゐると、今に雨が落ちて來ますぜ。ドッ！ ドーッ！ 動かんかッ！」

「馬方さん。イヤ、この馬はナ、わたしが戰爭に行つたとき、連れてをつた馬です。久し振りに會ひましたが、よく忘れずにゐてくれました。どうぞ馬方さん、可愛がつてやつておくれなさい。」

「フン、あんたが連れてをつた馬かナ。フーン……ドッ！ ドーッ！」

馬子は韁をグイと引いた。兵作は愛馬の後姿を見て、新しき涙が止まらなかつた。

大粒の雨がポタリ〳〵と落ちて來た ヒヒヒンと、嘶きが峠から聞えた。エーホーといふやうな馬子の歌も聞えた。

第十八　蚊と蠅

老座山の占領後、敵の陣地には立派な營舍があつた。どなた樣のお營か、戰爭に何のことか、贅澤な沙汰である。どうせ使用したる將校が之れに踞して、ウイスキーでも飲んでゐたのであらう。寫眞器械もあつた。寫眞でも寫して遊んでゐようなどとは、チト戰爭には旨過ぎる。日本軍突撃の狀でも寫すつもりでゐたらうか。トランプがあつた。トランプで勝つても、戰爭で敗けては何の役にも立たぬ。

菓子が澤山にあつた。これは有難く頂戴したことはいふまでもない。牛肉が鍋にかけてあつた。これは御親切な置土產で、丁度煮え加減がよくて、何より結構な頂戴物であつた。子供の玩具があつた。これだけは合點が行かなかつた。南山の司令塔にも、子供の衣物があつたり、婦人の化粧道具があつたりしたので、一體どうしたことかと、皆驚いたのであつたが、南山は半要塞で、暫く保養する餘裕もあつたらう。併し老座山の如き、防備不完全なる陣地で、一たび砲火の下に立つに至れば、一つの遮蔽物も無き處に、子供の玩具があらうとは、どうしても合點のゆかぬことであつた。しかし旅順には、將校が家族と一しよに立て籠つてゐたのであるから、戰線に婦人や子供の現はれたことは、勿論珍事とするには當らぬであらう。

一つ謎のやうなものが落ちてゐた。ハンカチーフで包んだ物である。解いて見たら、矢張りハンカチーフで包んだ物であつた。「何が入つてをるのか、言ひ當てて見ろ。」なんどといひながら解いて見たら、またハンカチーフで包んであつた。餘程大切なものと見えて、何でも四五枚のハンカチーフで丁寧に包んであつた。ものは何かといふと、若い女の寫眞であつた。ヤアと突貫の時のやうな大きな聲を放つて、「見せろ見せろ。」と、若き女の周圍に蝟集して、恐ろしい評判である。「細君だらう。」といふものもあれば、「いやナニ、細君ぢやない、細君のなら、コンナに何枚も〱包んで、奧の方に仕舞ひ込んで置かんでもよささうなものだ。キット許嫁だよ。」などと尤もらしいことをいふものもあり、「イヤ藝者だ。」などといふものもあり、とり〲の評判が立つたが、多數決で許嫁といふことに極つた。すると一體美人かどうかといふ品定めもあつたが、露西亞式はドウも分らんが、日本流のタイプに入れて見ても、中々美人だらうといふことに一決した。成程大切な筈である。

この持主たる若い士官を思ひ出すと、死んでしまつたのか、逃げたのかといふ問題になつた。死んだとあれば致し方もないが、逃げたとすれば隨分不實な話であると、いらぬお世話ながら心配もしてみた。若い士官は越山杳々として雲漠々、呉水悠々として風蕭々の感があつたであらう。月に對して泣き、雨に對して泣いたであらう。陣頭に立つ時に、幾度か彼は戀人の寫眞を抱いて、熱き涙を落したであらう。荒涼殺伐たる戰場の裡、不運と戰ひ、困苦と戰ふに當りて、胸に纖手を置きて新しき力を與へたは、容顏花の如き戀人であつたらう。若し生きてゐるとすれば、何處にドウして居るか、予の此の話を知るの機會あらば何と思ふであらうか。知らしてやりたいものである。花間の雙蛺蝶、勇士と佳人と、今果して健在なりや否や、これは知りたいものである。

旅順の俘虜が長崎に來たときに、或る將校の從卒——無論厳めしく武裝した從卒は、不思

議にもコザックでもなく、男でもなく、實は男裝した花嫁であつたといふ珍談があつて、花嫁は神戸の佛蘭西領事館へ送られることになつたところが、將校と所謂從卒とは抱きあつてキッスして、「ア、私の花嫁は神戸へ行くのだ。私は牢に入るのぢや。」といつて、群集の見てゐるのも構はず、聲を放つて泣いたといふことがあつたさうだが、コンナ小說みたやうな珍談、奇談、寧ろ怪談が、旅順舊城中には澤山あつたに違ひない。それを思ふと、かの老座山の若い露國士官はどうやら優しいところがある。

それから外套を五六枚遺してあつたから、これも無斷で頂戴することにした。我軍の露營には至極結構な物であつた。併しムヅ〱としきりに痒いので、檢べてみると虱がウヨ〱と占據してゐた。散兵もあれば、密集隊もあるといふ配備で、中々すばらしい虱であつた。彈の飛んで來る中で、露兵の血を吸うた虱をつぶすなどは妙なわけであると思つたりした。露軍も、外套に虱がウヨ〱してゐるやうでは、大分永い間苦勞を嘗めたものであると思つた。滿洲の虱は、ニー同樣に血の吸ひ時だと思つたか、盛んに活動を試みたものである。兵隊が日當りの好い柳の木の下で虱を潰してゐるなどは、戰爭より外、見られぬ圖であらう。

虱で思ひ出すが、南京蟲にも閉口した。上陸の其の晚、王家屯といふ村へ泊つて、ニーの血に飽いた南京君は、忽ち新來の鋭氣颯々たる我等に嚙み付いたので、皆大弱りに弱らされた。殊に予はドウいふわけか、したゝかやられたので、これはニーの家へ寢るものでないと、以來殆んど屋內へ入らず、聯隊本部で携行した方錐形の黃色の天幕が、予と從軍布敎師遠山正導君との宿舍となつて、なんでも支那人の家に厄介になつたのは、戰爭中僅かに三晚か四晚であつたやうに覺えてゐる。この方錐形の天幕は一種の目標となつたと見えて、閑な日には諸方から集まつて來て、面白い話をしたところであつた。予は今にその天幕を懷かしく思ふ。太白山の時であつた。二十六日の夜は其の儘暮れてしまつたが、聯隊本部は太白山を正面にして、ある小屋に入つた。夜を通じて敵の小銃彈は、小屋の庭や、屋根に引き切りなしに落ちてゐた。予は軍旗を持つたまゝ、聯隊長の傍に腰を下して、覺えずトロ〱とすると、チクリと南京蟲にやられたので、これはたまらぬと小屋の外へ出て、木の葉を敷いて橫になつてみたところが、ブスッ、ヒューといふやうな響音を以て、小銃彈が飛んで來る。これはたまらぬと內に入れば南京蟲にやられ、外へ出れば彈が降つて來るといふ始末で、小屋の後に立つたまゝ、暗い雲を眺めながら夜明しをしたことがあつた、いかさま南京蟲に弱らされた。虱のはうが、何ぼう優しくていゝかも知れぬ。

南京蟲に次いで恐るべきは蝎である。それこそ支那人が蛇蝎の如く之れを恐れるのであるから、恐ろしい奴である。大抵は岩の間に居るが、露營などではよくやられる。此奴にやられると、命がないくらゐに云ふ。形が海老に似た二三寸もある奴である。蝦蛄に似てゐるといふ方が近いかも知れぬが、至つて風采の上らぬ奴である。一抱へくらゐの石に五六匹も潛伏してゐることがある。子供が蝎を見さへすれば捕つて、石で叩いて殺して仕舞ふところを見ると、いかにも恐ろしい奴に違ひない。南京蟲や虱と同じく、夜戰を以て唯一の戰法と心得てをる。我等が散兵壕を掘らんとするところは、晝間は敵の妨害を受けて作業が出來ず、夜になれば蝎にカツとやられる。迂かツには仕事も出來なか

つたのである。

蠅くらゐとはいふものの、蠅にはひどく閉口したのである。支那人の內へ入ると、蠅の住家として此の家が建てられたのか、將た人間の住家として建てられたのかを疑はしむるほど、蠅が跋扈してゐるから恐ろしいものである。これは決して大袈裟に云ふのでない。我等が飯の分配を受けて歸ると、忽ち蠅の一大塊團がやつて來て油斷すると飯が一粒も見えないやうに眞黑に蝟集する、全く黑飯である。初めは誰もこの凄じい飯に一寸手が出ない。けれどもソンナことをいつてゐるわけに行かぬから、蠅を拂ひ拂ひ掻き込んでをつたが、それもしまひには平氣の平左衞門になつた。時には二三匹、飯と一所に口へ飛び込んだのもあつたらうとは、何と恐ろしい蠅ではないか。「飯の上に蠅」などといふ、ソンナ上品な定理は、支那では適用の出來ぬ蠅である、彼が攻擊の目標とならぬものはない、何でも御座れ一面の蠅である。拂へども又來るなどといふ、ソンナ呑氣な蠅ではないのであるから、隨分弱らされた。

我等が蠅を捕るには、天井から幾筋となく繩をぶらさげて置いた。夜になると蠅は鈴なりになつて繩に集まつてゐる。其の體たら凄じいものであつた。全く蠅の棒が幾筋となく天井から下つてゐるのである。我等は細長い紙袋を造つて、繩の下から徐に被せて、上から蠅を扱きおろして、それを燒きすててをつた。何でも大束でなければ征伐は出來ぬのであるから堪らない。晝は採取網のやうな紙の袋を竹の尖へつけて、縱橫無盡に振り廻してゐた。當番の兵士が交代で蠅取りであるから、戰爭も中々骨の折れたものである。

奉天新聞が日露人を比較して、蚊と蠅との如しといつたことがあるが、面白い觀察であると思ふ。日本人は宛も蚊である、露西亞人は宛も蠅であるといつてゐた。露西亞人が途方も無く五月蠅いことは、蠅のやうな人種である、露人が滿洲へ來てからといふものは、ナンだカだとしつこく附き纏つて、五月蠅いことは一通りでない、けれども季候と戰ひ、困苦と戰ひ、失敗と戰ひ、人種と戰ひ、兎に角滿洲をあれ程のものにしてしまつたのは、豪いといはねばならぬ、それに引きかへ、日本人は蠅のやうに五月蠅くはないが、なにしろ短兵急で、劍つき鐵砲でチク〳〵と刺すから、何ぼう痛いかも知れぬ、これは丁度蚊のやうな人種である、露西亞人は五月蠅いかはりに、蠅のことであるから、ボンヤリとしてゐて痛くはない、併し蚊は針を刺して血を吸ひ取るから油斷すると大變である、結局旨いことをしてゐるのも、どちらかといつたら露西亞人であらうと、コンナ觀察をしてゐた。味ひのあることのやうに思ふ。それからまた此の蠅と蚊とで、日露人の生活の狀態がよく分るといつてゐた。日本人ほど水を濫用する人間もあるまい、滿洲で日本人の住んで居る家の後方を覗いたら、水溜りのないところは無い、滿洲のやうに排水の惡いところであるから、水の流れやうがない、腐敗水がドロ〳〵に溜つてゐるから、蚊もわかうではないか、露西亞人となると、これはまた有名な不潔人種である、臭いものに蠅がたかるの原則に洩れず、露西亞人の居るところには蠅が盛んなものである、これで見ても日本人は丁度蚊で、露西亞人は丁度蠅であると、このやうに云つてゐた。我等が閉口した蠅も、ニーのではなくて、露兵の置土産か、我等は虚無僧の編笠よろしくといふ袋蚊帳を冠つて、露兵君の蠅を防いでゐたのである。全く五月蠅い奴であつた。露西亞のハヘ兵君も

中々手にをへぬ代物である。

第十九　高粱の蔭

七月二十九日夜、我軍は露軍に一日の休憩を與へたのみで、疾雷耳を蔽ふに暇あらざる勢を振ひ、露軍の第三抵抗線とする鳳凰山、千大山の線に向つて前進、攻撃した。敗退したる露軍に猶豫を與へず、二十八日來のなだれであるから、一氣に押し倒して敵を潰亂させたのは痛快であつた。

この頃高粱は到る處に繁茂してをつた。我軍は高粱の蔭にかくれて、敵の堡壘前に於いて前進した。高粱は滿洲の名物で、七尺も八尺もあるから、我等が敵の鼻先に隱れてゐても見つかりやうはない。全軍は枚を銜んで高粱の蔭に勢揃へをした。高粱の葉が騷ぐと見たは、我軍の一時に起つたので、足元から鳥の立つやうな騷ぎであるから、草木皆兵といつたやうに、高粱皆兵、風聲鶴唳みな日本軍の兵隊となつて突撃したから、敵は驚いたの驚かないのではない。露軍の某砲兵中隊の如きは、歩兵隊の退却があまり早かつたために、砲車を曳いて逃げる暇がなく、また閉鎖器を取り去り、再び日本軍に使用せられないやうにして逃げ去る暇さへもなかつたのである。高粱を刈入れなかつたのは、確かに露軍が一つの手後れであつたらう。

露軍の一部は大小孤山に隱れ、其の他はみな本防禦線に退いた。要塞の任務は、これより漸く重大となつたのである。露軍は金州の失敗に續いて、二ケ月半の間に、悉く前進防禦地帶を失ひ、日本軍をして要塞の門前に立つに至らしめた。露國皇帝陛下は、要塞守兵の勇敢なる行動を賞讃せられ、「汝等が無限の勇氣を奮ひ、武器の名譽を維持せしめしことを確信す。神は汝等の犧牲的精神を嘉せられ、旅順要塞を守護して、敵の侵入を防ぎ給ふべし。汝等努力せざるべからず」との親電を發せられた。踰えて八月一日要塞司令官スミルノフ將軍は、「旅順口の勇敢なる防禦者よ、我等が露國領土の一隅たる旅順口の要塞に於いて、敵を防禦せんがために力を協すべき時は來れり。我が皇帝陛下及び祖國は、我等が其の神聖なる義務を誠實に盡すべきことを期待し給ふ。各員宜しく其の宣誓を記憶し、要塞を措いて最早他に行くべきの地なきを思ひ、奮闘死守せざるべからず。吾人は祖先と同じく一歩も退くことなかるべし。上帝は我等を助くべし。」との訓令を下した。

ステッセル將軍もまた「我が運非ならば、要塞は敵手に落つべし。然れども吾人は艱苦艱難素より厭ふところにあらず。善戰して善死するは、予が覺悟なり。予と共に最後まで踏み止まるの勇氣なきものは、即時要塞を去るべし。」と申し聞けた。要塞は堅し、守將の決心は斷乎たり、これより漸く旅順の天地は恐ろしき舞臺となつた。

八月七日、旅順の敎會堂には、目前に迫つた不幸と危險とより救ひを得んがため祈禱式を行ひ、市民が蝟集して熱心に讀經しつゝあつた。モーとした唸りが陣地に在る守兵の耳にも達し、市民は胸の聖像に手をあてて、天を仰いで祈つたといふことである。この日天氣晴朗にして、市民の祈禱行列は、口々に題目を唱へつつ、旅順の市街を練つた。僧侶が跪くと、市民も一齊に跪いて熱心に祈つた。此の時雷霆の轟くが如き音が聞えたが、數秒の後には空氣を摩擦する音響が近く聞ゆると思ふ間に、一發の砲彈が飛び來つて地上に炸裂した。僧侶も

市民も發條で跳ね飛ばされるやうに跳び上がつた。其の面色は土の如く、驚愕と恐怖とのために喪神して、釘で地に打ちつけられたやうに立ちすくんだが、漸く我に復ると、我は家に子供を置きたり、我には病婦ありなどと、蜘蛛の子を散らすやうに、皆家路を指して歸つたといふことである。

旅順で市民が熱心に神を祈つたり、經文を讀んだりしてゐる間に、我等は大小孤山の攻撃をすまして、總攻擊の支度をしてゐた。

御馳走もこれが食ひじまひだから、しつかり食つておけといつたところで、ナニもこれといつて食ふものがあるでなし、一向張り合ひのないものである。黄泥川大上屯にゐた時には、或る兵隊が工夫してカステラを作つたなどといふ、後になつて考へてみればよくもあんな呑氣なことが出來たものだと思ふやうなこともあつたが、モウ大小孤山の戰鬪後は、旨いものも食へなくなつてしまつた。また海軍からハインアップルを貰つたことも、前にはあつたが、それも一時の鼻藥で、一度切りであつたから、心細いものである。ハインアップルは、海軍が支那人の密輸入品船を捕へて沒收したものであつたが、露國で註文したハインアップルが、支那人の手から日本の海軍に取られ、海軍から、陸軍の我等が分配を受けて、舌鼓を打つといふのは、頗る都合のいゝ話で、こんな旨いことも時々ないといかぬが、大小孤山の頃では、モウそんな僭越な野心は起さうにも起らなくなつてしまつた。先づ道明寺糒を水に濕して、露軍から頂戴物の角砂糖を掻き込んで煮て食ふなどは、餘程上等の格であつた。

水は缺乏したことが多かつた。草に宿つた露を手に受けて、顏を洗つたなどいふこともあつた。雨は嫌ひだが、お蔭で襦袢の洗濯などが出來た。けれども雨の溜り水は、直ぐドロ／＼になつてしまふ。第一線の守備線で、或るところの山の頂上から、兵隊の水筒を持てるだけ肩に引つかけて、谷底へこんなドロ／＼水をくみに行つたが、其の泥水が非常に旨かつたのである。何が旨いといつても、木の蔭もない山の上で照りつけられてゐるとき、水筒の口飲み程旨いものはあるまい。その中でも負傷するとむしやうに、水が欲しくなるが、この時に飲む水は、月世界からでも得て來た水か、水に甘露の味があるといふのもコンナ水をいふのか。飲みながら息が絶えても、思ひ殘りのない味ひである。勿論この水で死んで行くものは多いことである。

予が負傷したとき飲んだ泥水、血水は何ともいへぬほど旨かつた。予が士官候補生であつたとき、機動演習で、ナンでも八九里駈足して、敵の側面に迂回運動をやつたとき、咽喉は枯れる、水は無し、目は眩んで、先が見えぬといふ烈しいことになつたから、トウ／＼田の中に走り込んで靴を踏みしめ、田水の滲み出たのを手に掬つて飲んだことがあつたが、キラ／＼と赤い金氣のやうなものが浮いてゐたけれど、それでも其の味ひの旨さといつたらなかつた。今に金氣水と泥水、血水との珍味は忘られぬ。

大孤山、小孤山は敵の本防禦線を瞰下し得る我軍にとつては、攻撃の據點となるべき要點である。すぐ眼前に見えるのが白銀山、鷄冠山北砲臺、望臺などで、陸正面の敵の東北砲壘線である。

八月に入つてからコンナ工合で、旅順は範圍を狭められたから、市街では、あちらの檐下にも二人集まり、こちらの辻にも三人集まりして、一體ドウなることだらう、明日にも日本軍が攻撃して來るだらうといふものもあれば、イ

ヤまだ日本軍もさう迂濶にやつて來まい。けれども心配なことは心配だといふものもあり、一體軍艦は何をしてゐるのだらう、海軍の士官はこの先ドウするつもりだらうなどと、海軍の非難をするものもあり、取止めのない道聽途説が紛々として、これからドウなることか、極めて渾沌たるものであつた。十日になると、今まで眠つてをつた旅順港内の軍艦は全力を擧げて港外に出動し、針路を西南に取つて地平線下に旅順口を去つた。これぞ旅順艦隊が脱走して浦鹽艦隊と合し、海上權を恢復して、旅順要塞の運命を頽勢より挽き回さんとするに在つた。

實にこの太平洋艦隊の成否こそ、旅順戰役の全局若くは大局を決するものであつた。士官は皆最美の軍服を纏つて、生きては再び還らじと競ひつゝ、艦隊は勇ましく出港した。スミルノフ將軍は、黄金山下低砲臺の傍なる電氣岩の上に立つて、勇ましく波を蹴つて行く艦隊の後姿を眺めつゝ「神よ、希はくば我が艦隊の上に冥助を垂れたまひ、恙無く浦鹽に到着することを得しめたまへ。」と祈つた。將軍は、軍艦が水平線下に沒した後も、茫然と口を岩下の水面に落して立つてをつた。其の歸路に就いた時も、海上を眺め眺め、腕を拱いて太息してゐたといふことである。

かくして太平洋艦隊は、前途に多くの希望を囑せられつゝ旅順を脱出したが、其の結果は果してドウであつたらう。

多望なる其の日も將に暮れなんとして、俄かに遙かの沖合にて遠雷の轟くごとき砲聲が聞え、終夜に互つて絶えなかつたが、天明に至り太陽昇りて、海上火の如き折柄、旅順艦隊の主部は悲慘たる姿を以て、再び港口を指して還り來つた。いふまでもなく、夜來日本艦隊と出會して、かゝる始末となつたのである。艦隊の大部分は歸來したが、司令官ウキツトグフトは戰死する、旗艦ツエザレウイッチは膠州灣に遁れ、アスコルドは上海に遁れ、ノーヴィックは遠く北海にのがれて破壞沒沈したといふ始末で、艦隊は支離滅裂、果敢ない有樣となつた。スミルノフ將軍の此の報を得たとき、如何に失望したかが察せられる。尤も此の旅順艦隊の脱出はこれで二回目で、初度は既に六月二十三日を以て企てられたのであつた。其の時も出ると忽ち日本艦隊に出會したので港口を指して引返すと、日が暮れかゝる、折よしと日本の水雷艇が蛇行して襲撃する、砲戰もして見たが、思ふやうに行かず、それのみでなく遂に港内へ入る機會を失つて、據處なく港口に投錨して居たところが、まだ錨を入れない内に、早や日本の水雷艇が襲撃して來た。それで手を引からにも引くことが出來ず、終夜苦しめられて恐ろしい一夜を明したのであつた。しかし結果はセバストポリーが損傷を蒙つただけで、大したこともなかつた。

旅順艦隊の脱出もかゝる始末で、遂に奏效せず、日本艦隊は依然たる波濤の統御者で威風堂々、各艦の檣頭高く日章旗を飜して、いつでも出て來いと待ちかまへてをつた。或る外字新聞には「旅順攻圍に於ける日本陸海軍の姿勢は、宛も鼠を捕へたる猫のやうなものだ。どこから食はうか、頭から嚙んでやらうか、尻から喰ひついてやらうかと、舌鼓打ちつゝ、小首を傾けて鼻を蠢めかしてゐるやうなものだ」と書いてあつたが、旅順の鼠は袋の鼠、我手の物、いつ何時食はうと勝手なやうなものゝ、窮鼠却つて猫を嚙むといふこともあり、旅順も隨分手強い鼠であつた。

あちらにも五六人、こちらにも七八人、山を登つて行くのもあれば、谷へ隠れるのもある。馬に乗つたのが出て來たかと思ふと、すぐ引つ込んでしまふ。あちらから一人、こちらから一人、丁度蟻のやうに、出合頭に何か相談するかと見るとすぐ分れてしまふ。山の蔭で煙の眞直ぐに立ち昇るのは、敵も夕餉の支度をするのか、今晩はお先へ失禮して天幕に入るとしよう、いづれ明朝またお目にかゝらうなどと、我等は大孤山の斜面を上つたり下りたりしてゐた。

第二十　天幕長屋

大孤山の裏斜面には、下から上へと段々に幕舎が重なつて、宛も一大市街をなしたるかの觀があつた。九尺二間ではないが、四尺四方の天幕長屋も、夜に入ると一面に燈火がつくから、十階、二十階の西洋館が並んでゐるやうであつた。時は八月十八日、此の市街の夜は靜かなること墓場の如く、麓に繋がれた馬が脚を上げてコト〳〵と土を掻いてゐる音が、夜を通して絶えなかつた。馬も眠られなかつたであらう。地獄から夜通しに來たやうな、色青ざめた、髭のまばらにはえた兵隊が、飯盒を下げて山から下りて來た。「鈴木ぢやないか？」「だれか？」「俺だ。」「平尾か、元氣か？」「マア元氣ぢや、二瀬はどうしたか？」「あれは死んだ。」「さうか、死んだか？」こんな話を天幕の外と内とでしてゐるのを聞いたこともあつた。「あれは死んだ！」無造作なことである。コロ〳〵と何の思案も算段もなしに死ぬる。戰場に老いたる兵隊は、天幕長屋で堅麪麭を入れた背負袋を枕として、雜嚢と水筒とを右に置いて銃を左に置いて、臂を曲げて寢轉んでゐる。

「戰て、ドンナものですか」などと、向側の天幕で尋ねてゐる。新來の補充兵であらう。「ドンなものツて、一寸いへんが、やつて見れば、すぐわかるよ。」などと、分つたやうな、分らぬやうなことを老兵が話してゐる。「さうですか？」などと、補充兵が感心してゐる。「一寸上へ上がつて覗いて來い、敵のゐる山が見えるから。」「さうですか、見ても構ひませんか…オイ一寸、見て來んか。」「ヨシ見に行かう。」補充君がドヤ〳〵と立つと、「オイ〳〵さら皆行つてはいかん、新米が來たと思つて、ロスキーが大きな弾を打つてよこすが承知か。山の上へ行つたら、どこもこゝも死體だから、踏まんやうにせい。」補充君之れを聞くと、襟から冷水を浴びせかけられたやうに、首をちぢめて「止めよう止めよう！」

どこでやつてゐるのか、夜中ブスン〳〵と小銃の音が聞えてをつたが、頭の上にゐる歩哨は何の事も無いと見えて、「居るのか知らん、」と思ふほど靜かであつた。聞えるか聞えぬぐらゐに、「歩哨！　どこに居るのか？」といふと、「ハ、こゝに居ります。」とかすかに返事する。

「何の事も無いか？」

「今晩は妙にやつて來ません。」

「アリャ何だらう」

「私も何ぢやらうかと、サッキから見てをりますが、火にしては、可笑しいし、幽靈火かも知れますまい。」

「幽靈でも出さうな晩だ。マア氣をつけてをれ。」

「ハア。」

予は歩哨線を一巡して、我が天幕へ歸つて來た。夜の支配者は深い〳〵息をついて、重い夜であつた。北斗星はキラ〳〵と輝いてゐた。

　天幕に入ると、皆グー〳〵高鼾で寢てゐる。背を曲げて如何にも安樂さうに寢轉んでゐる。
「中尉殿歸りましたか。」と從卒が眠さうな眼をこすりながら起き上がつて來た。
「ウム歸つて來た。何のこともなかつたぞ。」
「さうですか。中尉殿。味噌汁はドウです？」
「結構だ。出來てるか？　一ぱい御馳走にならうか。」
「漬物もこゝにあります。」といつて鑵詰の殼を出した。此の晩は從卒と出征前のことから、何やかと、飯盒の口から味噌汁を吸ひ〳〵話し明かした。戰爭のことを思ひ出すたびに、不自由な生活、併し極めて樂しい生活をしたことを思ひ出す。岩おこしのやうな味噌、羊羹のやうな醬油エキスなどは、常に我等の思ひ出になる。
　散兵壕を隔てて敵と睨み合つてゐるときでも、そこらあたりに落ち散つてゐる高粱の莖を拾つて火をつけて、帽子を取つて煙の上がるのを防いで、飯盒を吊しても、味噌汁はたけた。何にも無いときには、醬油エキスを舐めてをつても事は足りたのである。
　牛肉や福神漬の鑵詰の殼は調法なものであつた。杏子の實や、胡瓜や、茄子をきざみ込んで、鹽をふり撒いておく一夜漬の樽にもなつた。一夜明くれば漬物がつかつてゐるので「オイ漬つたぜ。」などといつて、箸でつゝいて食つた。そして此の小さき樽は、腰に二つも三つも紐をつけて吊り下げてゐた。命は一夜も測られぬ我等が腰には、一夜漬の鑵詰の殼が括りつけてあつた。折角丹精して作つた漬物を食はずに死んだものは幾人か？　人間の命は漬物の命にも及ばなんだか？　我等は何に譬へんやうもなき果敢なき此の世の命であると思つた。鑵詰の殼は、また之れに水を盛つて戰友の墓に備へられてあつた。我等は戰線に於いて銃火を放ちたがら、水筒の水をかたむけて、傍らにある忠死の戰友を弔つたこともある。鑵詰の殼は、また中に石をぶらさげて鈴として使はれたこともある。露軍の壕底にあつたバラ鐵條網、菱形叉釘、三角叉釘などといつて、鐵の太い針金で組合し、其の鐵線の尖端が針のやうになつてゐた障碍物には、この鑵詰の殼の鈴が結びつけられてあつた。この障碍物に引つ懸ると、カランカランと忠實に報知をするものだから、「それ來た」と露兵が彈丸を打つてよこす。油斷のならぬは鑵詰の殼であつたが、鑵詰の殼ほど、どちらに取つても御役に立つたものは恐らくあるまい。「兵隊さん、お腰のものは何で御座います？」兵隊は腰を振つて、「鑵詰の殼で御座います。」「一つ頂戴、お供しよう。」といふ恰好で、グワン〳〵と夥しい威勢のいゝものであつたが、「ソラ驅足！」と號令がかゝると、邪魔になると見えて、言ひ合したやうに、一つ取つては棄て、一つ取つては棄て、トウ〳〵みんな無くして仕舞つて、戰が一落着すると、又々腰に鑵詰の殼を吊り始める。吊つたり、捨てたり、なんでも氣ぜはしいことであつた。
　胡瓜で思ひだしたが、之れには隨分長いものがあつた。二尺も三尺も長い胡瓜があつたから珍らしい。ニー君はこれをポキン〳〵と折つて齧り付いてゐた。隱元豆は到る處に在つた。勿論ニー君のであるが、時々少しばかり頂戴してをつた。時々も時々によるが、ナンデも時々である。味噌汁の實や、煮付には、お誂向であつた。隱元で思ひ出すのは、初めて來て、戰の酸いも甘いも知らぬ補充兵が、隱元豆の畑の中で脫糞中、ストンと擊たれて、血塗れになつて匍ひ出して來たことであつた。時と運とだから、

何時やられるとも限らんが、先づ脱嚢中でよかつた。隱元豆でも胡麻化しつゝあつたのだつたら、未來永劫浮ぶ瀨がないであらう。

いつからか酒といふものを飮んだことがなかつた。酒の味も忘れたくらゐである。元來予は酒を好かぬが、戰地へ來てみると、どうやら飮んでみたいやうな氣にもなつた。大連で露軍の遺留品であつたさうだが、喇叭のやうな形をした瓶の酒を見たことがあつた。飮んだことはないが、何でもうまい酒であるとのことである。酒はドウも、瓶だけは立派なものだと思つてゐたくらゐだから安心なものであるが、酒どのとは長らく緣が切れてゐたから、モウ今度といふ今度は、一命を召上げられるに極つてゐるについては、今生の名殘り、冥土への土産に、鱈腹飮んでみたいと思つたこともあつた。ニーの家から水筒一ぱい三十錢くらゐで燒酎を買つて來て、チュウ〱と吸つてゐるものもあつた。一ぱい分配に預かつて飮んでみると、五臟六腑に滲み渡るやうで、旨いとも辛いとも思はなかつたが、一種の感じがせずにはをられなかつた。ポツとのぼせた顏に微風がソヨ〱と吹いて、身の征戰にあるを忘れたやうに、何ともいへぬ心地であつた。「日本から風が來るわい。」などといつて、恍惚としてをつた。帝國萬歲だの、大和櫻などと銘を打つた菰かぶりが到着したこともあつたが、早や喉をグイグイ鳴らして、「幾月目かの御對面。イヤ酒どの、態々遠方まで御苦勞千萬。」などといつて、飮まぬ先から醉つたやうに、躍つたりしてゐるものがあつた。「分配するから、水筒を持つて來い。」とお布令が廻ると、「ヨシ來た！」と、こんな時には我れ勝ちにと天幕を飛び出して往く。グワラン〱と水筒の束を肩に掛けて、「何か一つ肴をたのむぜ。」などといつて驅けつける。後では、「オイ何か無いか？」「味噌汁があります。」「酒の肴に味噌汁は、どうもならん…マア味噌汁もよからう。集まつたり〱。」と車座になつて、モウやがてお出でになりさうなものだと花嫁の御輿入を待ち受けてゐるやうに、畏つて居る。「戻つたぞ〱。」「戻つたか。早く來い。どうだつたか？ 少しか？」「澤山ある〱。」一同「よろしい〱。」と氣違のやうに騷ぐ。遙かにポスン！ 「オヤ銃聲がしたぞ。氣の利かん奴ぢや。ロスキー君、暫く御免なさい、マアさう騷がずと一獻召上がれ。」などと、頗る御機嫌が好い。

八月十八日の夜は、第一回總攻擊の前夜であつた。此の酒が末期の酒とならなかつたものは果して幾人か。當年當時のことを思ふと、予は共に末期の盃を酌み交した戰友の面影が、アリ〱と眼前に浮んで來る。この日夕方、軍は既に明日に於ける總攻擊命令を發し、將士は皆天の一方を望んで、冷かなる夏の一夜を明かした。予等の目標とするは、旅順要塞中の理想的永久砲壘たる東鷄冠山北砲臺であつた。勿論この時まで、北砲臺でも、何砲臺でも、覗いて見たわけではなし、「なアに！」と大きに高を括つてをつた。併し皆口に云ふと云はぬとだけで心には「こんどこそは…」と覺悟せぬものはなかつたのである。

第二十一　戰場の子別

死に瀕せる者は死を恐れぬ。死は寧ろ其の人の救助者である。攻擊の前夜は、即ち瀕死の前夜であつた。そして我等は決して死を畏れなかつた。

人生に最も痛切なる打撃を下すものは死であり、斷腸苦悶せしむるものも亦死である。併し眞面目なる戰場の裡に於いては、最早死といふことが問題でなかつた。生が何やら、死が何やら分らぬが、我等は此の世に生れ出でてより、生きつゝあるか、將たまた死しつゝあるか、死は急に來るものか、また漸次に來るものかといふやうな、眞面目な問題を考へたりもしないではなかつた。つまり我等はどういふ落着になるものかと考へぬでもなかつた。併し我等は「死」そのものが、さして重大事件でもなく、「死」といふものに、何も深甚なる意味のあるもののやうに思はれなかつた。

迷夢を破るところの死――淺薄なる浮世の空望を靜むるところの死――高遠なる永久の希望を起さしむるところの死――我等は死に臨んで、死は斯様なむづかしいものであると思はなかつた。人世に於いてたゞ一回經驗すべき最大事件たるところの死を認めたる時、「死は我等の經驗すべきビジネスである。唯我等は之れに從事せねばならぬ」とばかり思つたといふのが、正直なる告白である。一瀕死者は未來に就いて考へず、寧ろ過去を追想するものである。」といふが、吾人は生は何もの？　死は何もの？　だのといふ面倒なことは知らぬ。ソンナことは考へたところで分りもしなかつたが、過去の我といふものを、しきりに追懷してゐたやうに思ふ。

明日は死すべき其の前夜、一盃の酒にゴロリと横になつて見ても眠られず、あちらへ寢返り、こちらへ寢返り、それよりそれへと過去を追うてゐた。

「モウお母さんは寢てゐるだらうか？」などと何遍も思つた。裏の納屋で牛がコトンコトンとやつてゐるだらうなどと、故郷の我家が繪卷物のやうに繰りひろげられて、我といふものが、ドウして此の繪の中の一人物であつたらうかといふ妙な感じもした。隣近所の先生達も、眼をパチクリしてゐたから、何か思ひ出したのであらう。

子を思ふ親、親思ふ子、此の夜に於いて互に數百里を隔てつゝ、どんな感があつたらう？　勇士一度去つて、また家郷を懷はずともいふが、雨に、風に、子を思ひ、親を思ふは人情である。

家には病妻、病兒あり、身は戰線にありて一刻を測られぬものが、果して幾許人であつたらう。しかし彼等はまた其の背後より「進め！」と令するところの親、妻、子のあるがゆゑに、那許り勇氣を增したであらうぞ。乳虎の勇は最も怖るべしといふではないか。

劍山に於いて戰死した露軍の某步兵中佐の死骸が、飛鳥の如き一兵士の背に負はれて山を下り、とある岩陰に横たへられると、年僅かに五歳の一幼兒が走り寄つて中佐の死骸をゆり動かし、「お父さん、前へ〳〵！」と號令をかけたといふ話が殘つてゐる。この幼兒こそ中佐の一子である。中佐の妻は良人の出征前にこの兒を遺して世を去つた。中佐は官命なれば默しがたく、歐露を去つて旅順に向うたとき、愛妻の遺兒を伴ひて、晝は馬の鞍に乘せてあやし、夜は馬槽に入れて寒き夢を結ばせたとか。中佐が旅順に入つてからは、練兵にも、砲臺へも、宴會にも、この幼兒を離さなかつたさうである。

劍山恢復攻擊の日、幼兒もまた從つて其の麓に在つた。中佐の遺骸が馬背に縛りつけられて旅順へ歸つたとき、幼兒もまた父の遺骸と共に鞍上に在つて、凱旋將軍の如くに歸つて來たといふことである。

話は八月十八日より四五日ほど後のことであ

るが、第一回總攻擊中、東鷄冠山のある地隙に一人の兵士が倒れてゐた。頭を繃帶で包んだ上に、血が一面に滲み出て、丁度臙脂のやうになつて、二目とは見られぬ有樣であつた。近寄つて見るとまだ息があつた。遠山布教師は彼を抱き起し、水筒をはづして其の口を濕してやり、「氣分をしつかりなさい、苦しいですか？」と聞いたら、彼は眼を半ば開いて、微かに首を左右に振つた。そして彼れの手は遠山君の僧衣を固く握つて、苦しさうに溜息をついてゐた。迚も半時ともたぬ命であるから、遠山君は、「何もいふことはありませんか？」と聞いたら、彼は、「何もいふことはありません。」ときつぱりと云つたが、でも何か言ひたさうにもしてゐるので、遠山君は重ねて「あなたはコンナ立派な働きをして、カウなつたのだから佛樣は御慈悲の心を以て、あなたを護つて下さる、お念佛を唱へなさい、安心をなさい。」といつて、暗に最期の迫つてゐることを告げた。彼は點頭いた。併しいひかねてをつたが、思ひ切つていふといふやうな風で、聲微かに、唯一言「國へ歸りたい！」といつた。國へ歸る！　勇士戰場にありて何故家を思ふぞ！　未練？　臆病？　否、未練といふも、臆病といふも、それは時による。力のあらん限り、根限り、敵と戰ひ、奉公の義務を盡し了つて倒れたものが、血は流れ、命は絕えんとして、過去を思ひ、將來を思ふは人としてあるべき情念である。淸き淚――愛の淚――忍ぶ淚――この暗淚一滴こそ、故國に眠りもやらで、遠く征途の人の身を憂ふる親に、妻に、子に對する最後の暇乞ではないか。

遠山君は、彼が「國へ歸りたい。」といふ一語を聞くと、目に袖を蔽うて、「尤もだ」と聲も潤んだが、これではならぬと勇氣を鼓し、聲を勵まして、「軍人が一度國を出た以上は、ソンナ女々しいことをいつてはいけません。あなたはモウ迚も此の世では、お國の方に逢へませぬ。よく觀念をなさい。サア私と一しよに念佛を唱へて下さい。……」といふと、瀕死の彼は苦しい息の内にも、滿身の勇氣を起して、「私は……女々しい考は持つてゐません。けれども……」といつて、彼は遠山君に縋りついて、口を耳元に寄せ、腸を絞るやうに、「私は國へ殘して來た子供に、たゞ一目逢つて死にたいのです。」といつて啜り泣きしながら、遠山君の肩に倒れかゝつた。死に際し、己れの愛するものを殘して逝くのは、人の最も苦痛とするところである。彼が死に迫つて、鄉里に殘した我子を思うたは、死を恐れたにあらずして、これぞ親の至情が發したのである。愛は死よりも大なるもの、人が其の職分を成し遂げて、將に死なんとするとき、我を彼岸に導く天使の如き愛兒を思ふことは、淸き生涯の最後をして、最も光輝あらしむるものではないか。この兵士は今井國吉といひ、遂に野戰病院で息を引き取つた。

明日の朝から總攻擊といふ八月十八日の夜は、あれやこれや、感慨に耽つて、夜も眠られなかつた。煙草の煙を輪に吹きながら悟つたやうな、悟らぬやうな、種々な感慨に一夜が明けた。コンナ晩には、日頃口にせぬものも、煙草はのんだ。曾て日淸戰役に從軍した某將校が、戰爭には何を忘れても、煙草だけは持つて行かぬといけぬ、攻擊前や、敵前で、煙草を吸ふと、馬鹿に膽が据るものだといつたことを聞いてをつたが、實際氣の据る据らぬはさて措き、かゝる時には煙草の煙はゆかしいものである。一本の卷煙草も、切羽つまつた時でないと喫んではならぬのである。けれどもモウこれが此の世の見納めになるかも知れぬといつては一服、ナン

とかカとか理窟をつけては一服、心細い煙草であつた。一本でも落ちたのを拾はうものなら、敵の首でも取つたやうに喜ぶ。誰が落したのか、屆けにやりたいなどと思つたりするくらゐである。雨のショボ／＼降る夜、マア一服と袋から引き出したが、ツイ落しこしまつて、ドウ搜しても見つからない。翌朝見るとピッシャリと薙刀のやうに踏み付けられてをつた時などは、泣きたくなつたくらゐである

折角仕舞ひ込んで置いて使はなかつた香水を、浴びるやうにふりかけて喜んでゐるものもあつた。香水もかうなると贅澤物ではない。其のゆかしき香は、我身ながらも賴もしく思つたりしたのである。昔は武士が戰死の覺悟には、兜の中へ伽羅を炷き込んで、首が人に渡つても恥かしからぬやうにしたといふが、マアこの筆法であつたらう。

また赤シャツを着てゐるものが澤山あつた。昔の武士は、白い下衣に血を浴びたのは、見苦しい死樣であるといつて、下衣には赤いものを着たといふことであるが、我等の中には赤シャツを着てゐた嗜の良い人も少くなかつた。また軍刀にも日本刀の作り其の儘のがあつたり、鎧櫃からでも引張り出して來たか、軍扇などを持つてゐる人もあつた。

八月十六日であつた。山岡少佐は軍使となり、要塞守兵に向つて、我が　天皇陛下の思召を傳へんため、水師營南方某地に於いて、露軍參謀長レイス大佐と會見をした。　陛下は旅順要塞の總攻撃を遂行せらるゝに先だちて、非戰鬪員を兵火の慘害より免れしめたまはんとの大御心を以て、時の參謀總長山縣元帥を召され、要塞内非戰鬪員救助の法を講じたる後、總攻撃を開始すべしとの畏れ多き御諚を賜はつた。山縣元帥は感涙に咽びつゝ、直ちに之れを滿洲軍大山總司令官を經て、乃木第三軍司令官に電命した。山岡少佐は乃ち　大元帥陛下の聖旨を奉じて軍使となり、露軍に使したのである。其の大意は、我が　大元帥陛下には、至仁至慈の大御心を以て、旅順口要塞内に在りて、戰鬪に關係なき婦人、小兒、僧侶、中立外交官、外國從軍將校、其の他非戰鬪員を砲火の慘害より免れしめんことを望ませらる。貴官は避難を望むものを青泥窪に護送し、該地統治局司令部に引渡すべしといふのであつた。一體要塞を攻圍するに方つて、要塞内で物を食つてゐるものは、犬か猫でも要塞外に出すことなくして、糧食の減耗を速かならしめ、陷落の時機を早めるといふのが原則である。然るに旅順要塞の運命は、我軍作戰の全局に至大なる影響を與ふるものであるがゆゑ、速かに之れを我が掌中に收めねばならぬ時でありながら、　陛下の大御心が敵軍の抵抗力なきものゝ身の上までも及び給ふたとは、いかにも尊き仁慈の御計ひである。我軍はこの聖旨を傳ふると同時に、左の如き勸降狀を發した。

「旅順港の光輝ある防戰は全世界の稱讚を博するに足る、然れども孤立の要塞にして、優秀なる陸海軍の包圍を受け、また適當の期間内に救援の來るべき望なきものは、其の指揮官にして、如何に智謀あり、且つ忠烈なりとも、また其の兵士にして、如何に勇敢なりとも、到底陷落を免れざるものとす。我軍の總攻撃準備は已に整ひ、遠からずして其の行動を開始すべし。而して一旦之れを開始するときは、旅順港の運命も亦知るべきのみ。此の際に至り、閣下に告ぐるに、閣下にして談判に意あらんには、今日こそ即ち其の時機なること

を以てするは、人道に對する予等の義務なり云々。

總攻撃の機既に熟したり、無益に人命を傷ふことを避けんとならば、今の時を以て降參あるべきこと――一旦攻撃を開始したるからは、全要塞を陷るゝ迄は其の手を緩めぬこと――また申すまでもないが、文明戰爭の規約を嚴守さるゝこと――豫め妥協したる條件に依つて開城することと、無條件の降伏をなし、又は亂雜に實力に屈服するとの間に大差あるは、閣下の軍人として承知せらるゝところ、後の場合にありては、總ての公法の許す範圍内に於いて、攻撃軍隊に屬する總ての手段を假借するところなく實行せざるを得ざるは、固よりいふ迄もない事といふ意味の一書を添へて露軍に使したところが、露軍には大分悲觀的の意見と樂觀的の意見とがあつた。日本軍がから落着いて「降參するなら今ぞ、攻撃を始めたが最後、もう何が何といつても金輪際容赦はならぬ。」などと、これではドノみち旅順も永いことは無からうといふものもあれば、日本軍はこれ以上の攻撃は仕かねると見え、餘程手を燒いてゐるに違ひない、嚇かしたり、お爲ごかしをいつたりして、何で承知がなるものか。日本軍も其の弱つてゐるに相違ないから、今の中こちらから突き出てやらうか、一番露軍の意氣を見せずばなるまいといふものもあり、中には返事などやるに當るものか、寧ろ鐵拳を送れと敦圉いたものもあつたが、それでは軍人の禮に缺けるといふので、翌十七日、山岡少佐が再び軍使となり、軍參謀長伊知地少將以下が土城子で回答を待ち受けてゐると、午前十時露軍の軍使がやつて來た。ステッセル、スミルノフの兩將軍及び太平洋艦隊司令官ウクトムスキー公爵の連署で、「貴國皇帝陛下の慈愛は、我等の深く感謝を表する所なれど、これ露國の名譽、自己の尊嚴と相容れず。また旅順の現狀に照して正當にあらざるを以て、諸議の目的たることを得ず。また非戰鬪員を自由に通過せしめんとする、閣下等の懇篤なる提議を利用するの不可能なることを拜告するの光榮を有す。」と云ふ、遉がに立派な回答であつた。つまり我には我が所信あり折角のことだが御斷りをするといふのである。我軍が砲撃を通告したのは、先づ降伏の意志の有無を訊したまでで、露軍が故なく我が軍下に屈するものとは、勿論思つてはゐなかつたのである。軍使は單に聖旨を傳へるにあつたので、開城勸告は、謂はゞホンノつけたりで、ドウでもよいといつたやうなことであつた。一體砲撃豫告は、一般戰術の原則から見ると、不意に敵を襲撃し、先制の利を占むべき趣旨に背く譯であるかも知れんが、要塞の如きは、今日やらうと、明日やらうと、格別機會を逸するといふ譯でもないから、「明日から撃ちますぞ、大ぶん藥が利いてゐるつもりですから、御用心なされ。」といつたところで何の差支もないことで、いはゞ男らしい戰の前振である。

「聊か所信あり。」と、露軍は悉く守線に就いた。我軍は「然らば」と軍刀の柄に手をかけて、氷の刃を引き拔いた。大砲にも、小銃にも、彈丸を込めた。「撃て!」との號令は指揮官の口より迸り出でんとして、機會は迫つた。舞臺は俄かに日ざましくなつた。

第二十二 死時の安心

十七日はひどい雨であつた。雨全體が一本の棒のやうなとでもいつたらよいか、ドシャ降り

だが、沛然たる雨などといふ、まだソンナ優しい雨ではなかつた。十八日から砲撃開始の筈であつたが、雨で砲車の輪が地に喰ひ込んで動かなかつたから、仕方なしに止むのを待つことになつた。幸にも翌日はカラッとした日本晴であつたから、攻撃準備作業もドシ〳〵捗取り、これならばといふので、十九日を期して攻撃開始といふことになつた。

露軍はドウかといふに、軍使の往來あつて後、ステッセル將軍は部下一同に對して、

「名譽なる旅順の防禦者に告ぐ、本日大膽なる敵は軍使山岡少佐を致し、我に降伏を勸告せり、我が祖國の名譽を擔へる我軍の、之れに對する回答の當に如何なるべきかは、諸子の既に熟知しある所なるべし。予は即ち絕對に之れを拒絕せり。予は諸子の勇武に信頼す。諸子須らく各自の信仰及び我が尊敬措かざる露國皇帝の爲に奮鬪せよ。神は我等を保護せん。」

と、かやうに、要塞の明渡を乞ひたる日本軍に鐵拳を加へたり。」と悲壯莊重なる訓示を發した。各陣地では、あちらでもこちらでも、話の題目は勸降問題で持ち切つてゐた。そして何か敵意を表すべしといふので、燒酎を傾けて陶然と醉つて、十七日の夜は雨に降られながら寢てしまつた。これより三日を出でずして、世界は端から端まで眼を丸くし、毛髮を立てて、悲慘なる戰鬪に驚いたが、その騷動を誰も豫知するものはなく、日本兵も天幕長屋で眠り、露兵も砲臺で眠り、黑き幕は靜かに下りて、雨が獨り威を逞しうしてゐた。我等が目前に迫る暴風に臨むべく感慨多き夜を、あちらこちらに寢返りしてゐるうちに、無邪氣なる露兵も胸より十字架を下ろして、また熱心に祈禱したであらう。

我等の多くは御守を持つてゐた。八幡樣の御守——金毘羅樣の御守——水天宮樣の御守——稻荷樣の御守——彈丸除の御守だの、無病息災の御守だの、何だのかだのと、いづれも有難い條件のついてゐる御守を持つてゐた。東本願寺からは、六字の妙號を貰つた。予も釋賢誓といふ法名から、珠數まで戴いたから、冥土の旅の用意は出來てゐた。

戰場に在りて、月に、雨に、心靜かに人生を思うて寂寞を感ずるのは征人の情である。我等はこゝに及んで、深く人生の意義に惑ふやうなこともなかつたが、されど我等が逆旅の安息所たるところに、或る強き力があると思うたのは、何人と雖も否むことの出來ぬ事實であらうと信ずる。これが宗教といふものか、何といふものか知らぬが、我等は寂寞たる身の上に、一種の強き力を感じたのである。人間は誰しもさうであらうと思ふが、「いや孝行もするつもりだが……もつと親にも安心をさすつもりだが。」といひ〳〵時は去つてしまつて、いざとなつた時に「しまつた。もつと早く孝行をして置けばよかつた。もつと早く親にも安心さして置けばよかつた。」といふことになる。即ち生死の境に入つて、始めて懺悔が始まる。良心の苛責にも堪へぬことになつて、未來などといふことも、何となく眞面目に考へ出す。宗教とはコンナものをいへば云ふのかも知れぬ。

人生、憂喜苦樂するところ甚だ多しと雖も、死に過ぎる大事は無い。我等は今かゝる危急の時に迫りて、不用意ながらも死することは決して難きことでないと思つてゐた。只生死の際に臨み、惑はず、懼らず、畏るゝ所なきかドウかと疑つた。宗教に就いて殆んど何事をも思はなかつた我等も、生死の境に臨んで、聊か安心を得てゐると信じたのは、貧しき乍ら、人間が眞

面目になつたためであらうと思ふ。

大黒大尉の夫人は頗る熱心な門徒であつた。豪放磊落の大尉に、軍人は死生の境に立つ身たれば、常に佛法を信じて、萬一の時に後れを取らぬやうに心掛けねばならぬと、信仰を促すことに甚だ努めたが、大尉は、「ナアに！ ソンナ坊主臭いことは、俺は大嫌ひぢや。」といつて、宗旨の話などが出るときには、いつも嫌な顔をして、テンデ相手にならなかつた。そのうち動員があつたので、夫人は一層熱心に佛法を說いたが、大尉は耳を藉さず、其の儘出征してしまつた。

これにも懲りず、感ずべき夫人は手紙のたびに、「戰死せらるゝといふことは、よくよく覺悟してをります。家のことなどはドウなりませうとも、露ほども心配に及びませぬから、跡に氣懸りなく、立派にお働き下さいませ。たゞ此の機に臨んで、切に御願ひいたしますことは、日頃うるさく申上げました通り、心靜かに果敢無き現世に惑はず、未來世に新しき生涯のあることを思つて、どうぞ佛になつて下さるやう。これが妾今生の御願ひで御座います。」と懇々と大尉に書いて送つた。それが決して三度や四度ではなかつた。國に在るときは、「何！ 俺には佛も糞もない。」といつてをつた大尉も、夜深うして塹壕の內に在るとき、月淸き露營の枕に凭るゝとき、考へるとはなしに、夫人の言葉の節々が頭に浮んで來ることも多かつた。大尉は十二月十二日に遠山布教師と逢つたが、其の時は何の話もなしに別れたが、十五日になると、一寸御苦勞ぢやが露營地まで來てもらひたいと、わざ〳〵遠山君を呼びにやつた。

遠山君と大尉とは毛布を被り、高野豆腐をアルミの鍋に入れて煮ながら食ひながら、「一體遠山さん、佛法てドンナものですか。」などと尋ねた。遠山君は「左樣、佛法てドンナものといはれても困るのですが、マアゆる〳〵今晩は話しませう。」といつて頻りに其の道を說いた。さうしてトウ〳〵夜を徹した。霜が下りて雪達摩のやうな二個の人影は、身動きもせずに語り明かした。大尉は最早緣なき衆生でなく、何物か偉大なる力に觸れたことはいふまでもなかつた。十七日からは北砲臺の攻擊があり、大尉は第一回の突擊隊にも選まれ、第二、第三回の突擊隊にも志願して、之れに加はつたが、命に別條がなかつた。が併し此の十七日の夕方、大尉は自分の軍用行李を開けて、頻りに何か調べ物をしてゐるやうであつた。丁度そこへ遠山君が通り掛つたので、「大黒さん、何をしてお出でですか。」と尋ねたら、「遠山さんですか。いやナニ今すぐにすみますから。」といつて振り返つたが、あとで大尉は遠山君に、「一昨日は有難う御座いました。私も妻の言つてくれたことが身にこたへたやうであります。唯この期になつて私は妻に、私が佛になるから安心してくれといふことの出來ぬのが殘念ですが、今まで私の考へがこゝに到らなかつたのは、私が無頓着であつたのだから、今更致し方がありません。遠山さん、昨日あなたのお話を聞いて、私は妻の日頃アンナにいつてくれたことが、染み〴〵と胸にこたへました。死に臨んでコンナ後れ馳せな考へもするやうになりましたが、それでも私は立派に佛になつて、あなた並びに妻の志に酬いたいと思つてをります……イヤいづれ明日砲臺でお目にかゝりませう。モウこれがお別れでせうハヽヽヽ」と目に淚を含んで、淋しき笑ひを洩したが、十八日午後一時決行すべき砲臺の爆破が、途中電線の切れたために、一時十二分になつて電氣を通ずると、轟然、爆然、北

砲臺も地鳴りがして、噴火山の如き凄じき光景となり、味方の攻路も埋まつてしまつた。午後三時頃になつて負傷者がぞろ〳〵歸つて來るうちに、將校の死骸を擔いで歸つて來たものがあつた。「それは誰ぢや？　誰がやられたのか？」と聞いたら、大黒大尉！　大黒大尉は右肩を打たれて、手がブラ〳〵になつてゐた。二十日大龍溝で火葬に附したが、遠山君が遺骨を携へ、聯隊の所在地へ歸つて來て、軍用行李を開いて見ると、襦袢にも、服にも、ハンカチーフにも、一々紙撚で十文字にからげて、一々何の誰へ片身と札をつけてあつた。細君の熱心なる感化、遠山君の親切なる導きによつて、大黒大尉は遂に佛となつて、畏れず、惑はず、欺かず、永く靜かに光輝ある眠りについたのである。

深き悲哀の淵に沈める人の心を慰め、又は人をして平和の裡に、從容として死に就かしむるが如きは、到底理窟や何かで決定されるものではない。雨霰の如くに降る彈の中を、笑つて進んだりするのは決して理窟でない。眞面目に考へれば、誰でも彈丸の中を潛るに、氣持のいいものはあるまい。飛彈、爆鳴を物の數ともせず、呵々大笑しつゝ、大手を振つて歩いたりするのは、馬鹿か氣違より外に無い。けれども我等は一體彈丸が降つてゐるのか、降つてをらぬのか、彈丸といふ觀念は全くなかつたのである。たゞ眼中に映ずるものは巨人の如く立てる砲臺と、惡魔の如く囁く敵兵の顏とのみであつた。普通の理窟から推しては出來ぬことでも、我等は之れを敢てした。一體人は非常の時には非常の力を出すもので、平素は反對觀念の抵抗のために、其の力を表はすことは出來ぬが、非常の時は一向專念の自己暗示——兎に角宗教みたやうな力に由つて、我等の死生の境を超脫することが出來るのであらうと思ふ。

我軍の砲彈が見事命中して、四十も五十も露兵が碎けて飛んでしまふと、煙の散つたか散らぬ間に、また同じ場所に露兵が現はれる、また打つ、また碎けて飛ぶといふ工合に、そこへ出さへすれば命がないものに極つてをりながら、矢張りやつて來る。我軍とても無論同じことであつて、一隊の指揮官の後には、早や交代の指揮官が控へてゐるといふ有樣であつたが、生に在つて生を忘れ、死に臨んで死を畏れざる斯樣な行動は大いに宗教の力によりて助けられてゐたと思ふ。否、宗教が獨り人心を支配してゐたのであると予は思ふ。

露軍の退却は、予は之れを見事な退却といふに躊躇せぬのである。喧嘩をして横町へ逃げ込むやうな、ソンナ逃げ方をせぬから豪いと思ふ。それこそ堂々たる退却である——退却に堂々たるは少し變だが——一體退却ほど、士氣の頓挫を來すものはないので、恐怖心の生ずること退却にしくものはない。その恐怖すべく、戰慄すべき退却に、大手を振つて逃げる、敗走でなくて背進する露軍は、指揮官の號令や何かで動くものではない。唯一つ精神的指揮者か背後に在つて指揮するによるので、將校の號令よりも、僧侶の號令、十字架の命令が如何に尊いか分らぬのである。露軍の從軍僧は、友軍の退却を見ると、後で大きな十字架を振り煽いださうである。すると今まで退却しつゝあつた露軍が、また再び振り返つて逆襲をしたことがあつたともいふが、海嘯の如く追はれて還る露軍の前に立ちふさがつて、錦襴の袈裟をかけた軍僧が、黄金で造つた十字架を擔いでゐるといふのは、繪でも見るやうな心地がする。露軍の兵隊は、金光燦爛たる十字架を見ては、

再び踵を回らして進まずにをられなかつたに違ひない。かゝる勇敢なる軍信中には、十字架を抱いたまゝ戰死したものもあつた。日本軍でいへば、差當り成田不動の護摩札でも振り廻すところである。日本軍にはソンナ御用もなかつたが、露兵の給養品中には、アイコンや十字架があり、皆一つづつ持つてゐたくらゐであるから、何よりも十字架が有難かつたのである。露兵は何でも能く祈る兵隊で、何かといふと、直ぐどこへでも跪き、胸に十字を切つて祈るのである。砲臺の中にも聖像が祭つてあつたぐらゐで、予が旅順へ往つた時、白玉山の裏であつたか、何でも大きな砲臺みたやうな仕掛の山があつたから、あれは何だと聞いたら、教會堂の敷地だといつた。正教の大寺院を建立するつもりでゐたらしいのである。併しトウ〳〵出來上らぬ先に戰爭になつて、其ノ儘になつてしまつたが、露軍が滿洲で足跡を印したるところには、必ず教會堂ありといつた式で、何でも耶蘇を拜み倒してしまふ兵隊と見えた。

可憐なる露兵は月影くらき夕べ、雨のしとしとと降る夜、砲臺の蔭で、胸から小さい十字架を下して、手を組んで祈禱してゐたであらうと思ふと、何となう淋しくもまたゆかしく思はれる。

太白山の戰鬪後、我軍の戰場掃除隊が死體收容に出掛けて、あちらこちらと死骸を搜索して歩いてゐるうちに、高粱畑の中に正しく膝を折つて坐つて、うつ伏しに斃れてゐる者があつた。肩に手をかけて引き起して見ると、彼は合掌してをつた。フト見ると、其の前の高粱の下葉に錦襴の守袋を懸け、其の下に水筒を少し土にうめ込んで、それに高粱の穗が二三本さしてあつた。彼は胸に血が少し染んでゐたから、胸を撃たれたとき、最早命の非なるを覺つて、心靜かに形を繕つて、合掌念佛して死んだものと見える。少しも取亂さず、しづかに目を閉ぢた彼の態度は、何たる大往生であらうか。予は常にかう思つてゐる。生死の何のかのと議論する輩に、果して死に就くこと、宛も大道を行くが如きものがあらうか。さやうなものが果して彼の高粱畑で往生を遂げた兵士の如くに、從容たる死を求むることが出來るであらうかと常に疑つてゐる。この兵士の如きは何に譬へんやうも無い見事な往生を遂げたのである。立派に往生の素懷を遂げて、彌陀の淨土に歸したのである。彼が負傷すると、この高粱の中來て、靜かに上衣の胸をひらき、守袋を取り出して、水筒の水を供へた其の樣子が目の前に見えるやうである。この兵士の死體を拾つた一同は、唯呆然と佇立して、涙を流さぬはなかつた。大勢の中には隨分齒を食ひしばり、虚空を摑んで、足搔き藻搔いて死ぬるものもあつたが、コンナ安樂往生をしてゐるものを見ると、何となく尊い感じが湧かずにはをられなかつた。

竹本久太郎といふ兵があつたが、ナンでも十二月十日の日であつたとかいふことだ。夕がた遠山布教師の所へやつて來て、懷から財布を出して、「この中に四圓八十錢入つてをりますから、どうぞ之れを御本山へ納めて下さい。」といふから遠山君は、「本山へ納めるのもよろしいが、それよりか親に送つて上げたらどうですか。」といふと、「私も親に送つたらとも思ひましたが、この金が親の手へ屆くまでには、私もモウ戰死をしてゐます。して見ると之れを送つたばかりに、思ひ出の種となつて、却つて親に苦しい思ひをさすやうなものでありますから、どうぞ本願寺へ納めて下さつて、私の囘向をお願ひいたしたうあります。」と、事をわけての

願であつたから、遠山君も「それでは之れを五圓にして送つてあげませう。」と、二十錢を加へて京都へ送つた。四五日すると竹本は几帳面にも遠山君に二十錢を返しに來た。これはマアよろしいといつても、それでは私の志が通らぬといつて聞かなかつた。これが攻撃の前夜であつたが、トウ〳〵戰死してしまつた。自分の回向を頼んで死んだ、迷亂顚倒せざる潔き覺悟に對して、恥かしく思はぬものが、果して幾人あらうぞ。

　露兵には隨分迷信家も多いやうだが、我々の間にも、迷信家は中々少くなかつたやうである。戰爭前後には、お社の鳩がゐなくなつた、あれは神樣の御使で戰爭にいつたのであらう、イヤ八幡樣の神馬が姿を隱した、あれも戰に行つたのであらう、イヤ今年に限つて田螺が生かんが、どうでも戰があるに違ひない、イヤ何ぢやかぢやとエライ評判もあつたが、戰爭でソンナ鳩や田螺の御加勢に出會つたこともなかつた。併しカウいふお伽噺を聞いた。ある騎兵斥候が河を渡らうとすると、美しい女が水際で洗濯してゐた。斥候は心にも掛けず、馬を河に乘り入れんとすると、後から其の女が呼びかけて、そこを渡つては危いから、河下からお渉りなさいといふので、さうかといつて轡を引いて馬首を向け直すと、その女が白い鳩になつて河下の方へ飛んで行つたさうな。此の白い鳩は、お社の御使鳩であつたとでもいふのであらう。

　また或る村では、寒中に三尺もある大きな筍が生えたといふので、ナンでも大變があるに違ひないと、四方八方から見物人が引きも切らなかつたことがある。また或る村では農家の竹藪の四尺四面の狹い處に、ゴチャ〳〵と筍が見事に八本生えた。ところで其の中の六本は腐つてしまひ、二本がズン〳〵伸びた。村の長老がいふことに、六本は露國で大敗けぢや、二本は日本だ大勝利ぢやというて喜んだといふ話もあつたが、それはどうでもよいとして、しかしコンナことも强ち馬鹿にしたものでもないと見える。

　兵隊で千人結びといふものを持つてゐるものが非常に多かつた。動員の前後に、停車場や町の角の多勢人の集まつてゐるところで、手拭くらゐの大きさの白い布と針に絲を通してあるものとを出して、「御面倒で御座いますが、お願ひ致します、」などと一人づつ一人づつ、絲を通して結目をしてもらつてゐるのを見たことがある。さうして之れを結ぶのは女に限つてをり、千人の女が結ぶのださうである。甚だしいのは、女學校の門などへ持つて行つて、生徒の歸りを待ち受けてゐるのもあつた。此の千人結びは何にするかと思ふと、彈避けになるのださうである。腹卷にもしたり、服の裏へも縫ひ付けたり、襦袢の上へ襷にもしたりしてをつた。この千人結びで可笑しかつたのは、予の聯隊で戰死の魁をやつた何某といふ兵が、血まみれになつて擔架で擔がれて山から下りて來たとき、この千人結びが擔架の外に垂れてゐるのを見て、イヤ千人結びは危いと、俄かに評判が惡くなつて、誰いふとなしに、コソ〳〵と取つて捨てたものもあつたやうである。折角女千人が一心を籠めた、彈の中らぬといふ重寶なお禁厭が、どこにもこゝにも棄ててあつた。

　また拾拾拾拾といふ、何と讀むのか知らぬが、この四文字が帽子の裏から、服の裏から、ベタ〳〵墨で書いてあるのを見たが、これも例の彈避けの禁厭ださうである。此の字にドンナ因緣があるのかと思つてゐたら、「[illegible]」とい

ふ古い書物に、コンナことが書いてあつたから、序に大要を書いて置く。徳川吉宗が一日淺草野へ鷹狩のをり、草叢に居た雉子を見付けて一矢を放つたのに、其の矢は羽根をすれ〳〵に鳴り響いて飛んで行つたけれども、雉子はビクともせぬから、これは不思議と、また一矢を放つたが中らぬ。雉子は依然としてゐるから、ナニ猪口才なと鐵砲を放つたけれども動かぬ。とうとう網を張らして捕りはしたが、よく調べて見ると、此の雉子の左の翁の下に、この捧拾捧揖の四文字が染め込んであるやうにあり〳〵と見えたから、奇怪に思つて放つたといふことである。それから此の字に似たものは、武運の守りになるとあつて、御供の人に寫させられたのを、後の世で武士が武運長久の禁厭にしたのであるといふことだ。昔は子供の護身符といつて、此の字を書いて襟に下げてをつたものもあつたといふことである。また字の禁厭となることはいくらもあるものと見えて、範蔑乙の三字も疫病除の符であるとして、武人が戰場に持つて行つたものであるといつてをる。

苦しい時の神頼みではないが、兎に角宗教といふやうな、ソンナものを信ずるといふことは、身を死生の境に投ずる輩に取つて、必ず必要なことであるやうに感じた。しかし其の道理に至つては、予の如きものには說明が出來ぬ。唯さう感じてゐるので、畑水練は實地の役に立たぬ、生死の一大事を理窟や何かで極めようとするは間違ひぢやと感じたことをこゝに書いたのである。

第二十三　泣いて戰ふ

八月十九日を迎へた。我が日本陸軍が爾後の力を著大に證明したるところの第一回總攻擊の記念日となつた。この八月十九日、七年後の八月十九日に於いて、予は實に再び旅順に來つて、戰跡の殘壘に足を駐めたのである。

全滅！　といふ語は旅順戰を語るところの代表語であつて、第一回總攻擊戰況總て非なり、第二回總攻擊戰況總て非なり、第九師團全滅、第十一師團全滅といふ有樣で、全滅は旅順戰の物凄い名物であつた。旅順戰は取りも直さず全滅戰で、旅順の運命は全滅によつて決定されたのである。今日でこそたゞ全滅といふが、旅順開城の日、高地の半面は露兵の死骸で青くなり、他の半面は日本兵の死骸でカーキ色になつたことを思へば、天地も慘憺として、涙がある如く感ぜらるるのである。全滅の一語は實に旅順戰を最も簡易に語るところの悲慘なる語であつて、萬斛の涙を含むところの文字である。

予が所屬聯隊の如きは、一夜にして數千の兵員が、忽ち殘兵、患者、輕傷者等を集めて僅々八九十名になつてしまつた。其の中でも戰鬪に堪ふるものは三四十に過ぎなかつたであらう。この兵員を以てして、最早如何ともすることが出來ぬ。予が加はつた第一回總攻擊の如き、予の指揮せし中隊は僅かに七名を餘すのみであつた。それは後で知つたのであるが、唯それも生きてゐたといふばかりで皆傷ついて再び戰線の役に立たぬところの七名であつた。聯隊長は幸に輕傷であつたが、一先づ生存者を纏めて大孤溝の谷地に引下り、岩蔭に淋しき天幕を張つて、昨日にかはる聯隊の悲運を見て、男泣きに泣かれたといふことである。幾千の貔貅が勇ましく國を出づる時、これが皆生きて歸らうとは誰しも思つてはゐなかつたらうが、一夜の内

に殘兵纔かに八十名などとはまた誰が思ふべきぞ。聯隊長は多くの將校兵卒に取り殘されて、「俺は生きてをられぬ。一つの砲塁も取らずに、コンナに殺してしまつては申譯がない。俺が一人生きて殘つて何になる？」といつて泣いてをられた。けれどもまた思ひかへして「三人が四人でも殘つてみれば、これでも聯隊は聯隊ぢや。」と溜息をついてゐられたさうである。當時聯隊長の心事は如何であつたらうか。悲痛とも何とも、思ひ出すたびに涙が出る。

予が負傷して、野戰病院から擔架で苦力に擔がれながら大連へ下がるとき、苦力は荷物を擔いでゐるやうに、矢鱈無性に走つて、擔架が引つくり返りさうになるから、「いゝ、ニーッー」と叱しながら足を緩めさせて、長嶺子といふところまで來ると、こゝが鐵道の終點で負傷者は此處から汽車に滿載されて大連へ輸送されるのであつた。予が汽車に乘せられようといふ前、線路の側の青い樹の下に苦力が擔架を下ろして休憩してゐると、今着いた汽車から歩兵の一隊がぞろ／＼と下りて來た。これはいふまでもなく補充兵で、これから戰線へ出掛けるのである。これがみんな行つて來たところで、ドウなるものかと予は思つてゐた。すると其の隊の中から不意に、

「旗手少尉殿が……」と一人の兵が叫んだ。

「どこに？」と皆いひ合したやうに、あちらを見たり、こちらを見たり、そこらあたり一面の負傷者の中から見廻してをつたが、予を見つけると、皆飛んで來て、

「旗手少尉殿！　やられましたか……」と呆然としてゐたから、予が「皆よくやつて來た。お前等はこれから早く聯隊へ行つて、俺等に代つてシツカリやつてくれ……聯隊は昨夕皆やられてしまつたぞ……」といふと、彼等の中には早や泣くものもあつた。

「聯隊は皆やられましたか……さうして皆どうなりましたか？」「小笠原大尉殿は御無事でありますか？」「林中尉殿は御無事でありますか？」と皆頼りにする中隊長や、小隊長の安否を尋ねるのである。彼等が頼りにして來た人は、最早此の世の人でなかつたりしてゐたることを思ふと、胸が迫つて覺えず涙が頰を傳はつた。

「小笠原大尉は、野戰病院まで來ることは來たが、一時間もたゝぬ間に死んでしまはれた……」

「小笠原大尉殿は、モウ亡くなられましたか……」

「ウン、立派に死なれたぞ……林中尉は一しよに行つた切り、今に逢はんから無論戰死したのであらう。」

だれも戰死した、かれも戰死したと話して聞かすと、彼等はアーと失心したやうになつてゐるから、予は「お前等も殘念であらうがそれも仕方が無い。皆さう失望してはいけぬ。コンナことを此處でいふのではなかつたけれど、お前等を見ると聯隊の樣子を聞かしてやりたかつたから、ツイいつたのだが、これから聯隊へ行つたら、お前等は五人前も十人前もの働きをしてくれ。聯隊長も負傷せられたが、部下をカウ澤山殺してナンで後へ下られよう！　こんど來る補充兵と死に殘りとで、屹度砲塁を取つて、戰死者の仇を取らねばならんといつてゐられるのだから、シツカリやつてくれよ、頼んだぞ。」といつてやると、彼等は聲を放つて泣いて「少尉殿しつかりやります……しつかりやります。」と口を揃へていふのであつた。

聯隊長が役にも立たぬ百人足らずの者を連れて、泣く／＼病兵の看護から、輕傷兵の手

當をしながらせめて一人でも早く元氣にせなければならんと思つてゐらるゝ哀れな若者に、今この補充隊が到着したら、ドンナに心強いであらうと予はそれを思つて泣いた。彼等の中には「これ國を立つ時に貰つて來たのでありますが、モウ入りませんから食べて下さい。」といつて、雜嚢から菓子の袋を出して、負傷者にくれてやるものもあれば、「露兵も大分死にましたか。」などと聞いてゐるものもあつた。「國へ何も用事はないか。」といふと「ツイ私の内のにでもお會ひになりましたら、無事に上陸して旅順の方へ行つたといつて下さい。」といふものもあれば「イエ何もいふことはありません。」といふものもあつて、今から第一線へ行つて戰線へ就くものと、負傷して國へ歸るものとが、ここでコンナ別れをするのであつた。これ切り永い別れとなつたものも幾許人ぞ？ 實に夥しいことであつたらうが、入り代り立ち代り、この柳の樹の下で、幾度かコンナ別れをしたことであつたらう。秋風が吹いて、柳の葉が黄ばんでも、旅順はビクともしなかつた。バラ〳〵と葉が落ちて、雪が散つても、旅順はビクともしなかつたから、思へば凋落の秋の夕べに、荒涼たる冬の夜に、月に、雪に、この柳の樹の下で泣いた當年の人、今日はた幾人か永らへ一往時を追懷することであらうぞ！

十八日、夜半の月は白銀山の上に昇りて要塞と市街とを照らし、海上も、陸上も、闃として聲なくたゞ船渠の作業の音のみ瀕死者の呼吸の如く幽かに聞え、猖々として犬の吠ゆる聲のみ物凄く、旅順は總てに於いて靜かに眠れる夜であつた。この靜寂なる旅順の一夜は、遂に再び歸り來らなかつた。この一夜こそ全露帝國の一隅たる旅順口に於いての最後の平和なる眠りであつた。十九日未明我が野戰攻城砲兵團は、其の數百門の火蓋を一時に切つた。この砲聲だけでも、旅順は引き崩れるかと思はるゝほど壯大なるものであつた。併し砲彈が胸壁の上に破裂して白煙と濃褐色の煙と紅の如き火とが砲臺の端から端へ、炎々として野火のやうに立ち登つてゐるのを見て、一たまりもなく破壞されたであらう。守兵はどこに首を縮めてゐるのかと思つたは不覺で、砲臺の上では我が砲彈が愛嬌よく砂煙を揚げてゐるに過ぎなかつた。流石の我が重砲、野山砲、海軍砲を揃へて打つても、砲臺の比類は痛いとも痒いとも思つてゐなかつたやうである。守兵は連りと機關銃の引鐵を弄つて、いつでも御出でなさいといつた風に待つてゐた。

砲擊のまゝ其の日も暮れ、夜の暗黑は靜かに幕を下ろした。すると敵の砲臺から探照燈がピカツと二つ、大きな目の玉のやうなのがクルリクルリと睨み廻してゐる。眼と眼との間から、火の玉がスーと出たかと思ふとパツと開いて、空中にマグネシュームの提灯を吊るして乙なことをして見せる。これが光つた最後、滿月が雲間から顏を出したやうに、山も谷も晝のやうになつてしまふ。服が如何にカーキ色で、土色と一寸見分けのつかぬやうにしてあつても、この狼火が大アーク燈のやうに空中に吊るされると、折角夜暗を利用して祕密に前進せんとしても、忽ち我等の黑い影を地上に投ずるから、晝間よりも敵に著大なる目標を與へる。服がカーキ色だといつて、影まで薄くするわけに行かぬ――尤も影は薄くなつては大變だが――この花火は勘定にあはぬ恐ろしい奴である。

此の日の成績はどうかといふと、我が砲擊の最高度に達したのは正午頃で、十五分間おきに一發といふ割合のが、二發となり、三發となり、

四發、五發、六發といふ有樣で、全線通じて一分の息繼もなかつたのであるから、隨分烈しく打つたも打つたものである。その重なる目標は、要塞の東北正面即ち盤龍山、東鷄冠山方面にあつたので、敵砲にも少からぬ損害を與へたやうであつた。望臺――露軍でいふ大鷲巣山――の巨砲は露天砲で、二門ヌッと頭を突き出してゐたが、此の日の砲撃で、向つて右の砲身の頭を跳ね飛ばした。夕刻我が一彈が敵の兵器庫に落ちて大火災を起した。兵器庫の火光は、露軍の背面に於いて恐るべき光を放つて各砲臺を照らしたから、守兵は皆顧みて戰慄したといふことである。軍隊と消防隊とは火の粉の中に飛び入つて鎮火に從事したが、清國時代から貯藏してあつた砲彈と火藥とが爆發したので、少からぬ負傷者も出來たといふことである。此の日我も敵に接近して大いに戰つたのは我が第九師團で、龍眼の旅順水道の水源地の北方に在る水道角面堡――貯水池砲臺――名クロパトキン砲臺ともいふやうであるが、この堅固なる砲臺に向つた。午後五時三十分三原大佐の率ゐる突擊隊は、まづ爆藥を以て鐵條網に數ケ所の破壞口を作つて、何の苦も無しに通過したから、占めたりと思つたは不覺で、今まで沈默してゐた露軍は、俄かに頭をもち上げた。世界に於いて築城の巧を極め、防禦戰鬪の妙に達したものは露軍であると認められてゐる。日本軍をして何故障碍なく鐵條網を破壞せしめたか、甚だ意を得ぬところの如くであるが、サウでない。守兵は機關銃の銃口を揃へて其の引鐵に手をかけてをり、心臟の鼓動は機關銃のそれよりも忙しく躍つてゐる。けれども指揮官は鐵條網を通過する日本軍を睨みながら、一方に、「マダ〳〵、頭を出すな！」と狂ふ駒の手綱を控へてゐるやうに、銃手を抑へてゐる。突擊隊がこれではしたゝかにやられると思つた鐵條網も、案外苦もなく破つて出ても、まだ擊たぬ。砲臺前五十步！　まだ擊たぬ。三十步！　まだ擊たぬ。二十步！　これまでこらへてゐる守兵は、餘程度胸の据つた者でなければ出來ぬことである。併し露軍は、いつも此の手で引き寄せられるだけ引きよせて置く。我慢のなるところまで我慢する。そして攻者が雷の如き勝鬨の聲を揚げて、今一步で砲臺を乘取るといふ瀬戸際でソーレといふので頭を出して機關銃を向け、消火栓から水を噴き出すやうに、彈丸の掃射を喰はすから、一發ですむところでも、五發も六發も食つたり、前者を倒した彈で、また後者を倒すといふ有樣で、一發の彈丸も數發の役目をして、片つぱしから將棋倒しに倒して、忽ち全滅の目に逢はせるのであつた。予が盤龍山で見たのには、砲臺に手をかけたり、砲臺の中に飛び込んでゐたり、敵の砲架を握つてをつたりしたのがあつたが、皆この手でやられたのである。

第九師團の突擊隊が鐵條網を破つて、敵の砲臺に押して行くと、敵は頭を突き出して、機關銃の銃口を我に向けた。すると天から降つたか、地から湧いたかと思ふばかり、俄かに途方もない大きい奴が四方八方から飛んで來て、突擊隊の頭をたゝきつけた。いふまでもなく要塞の大砲は、どこでもかしこでも打たぬといふところはないので、正射、縱射、斜射――大砲の頭さへ向ければどこでも打てる仕掛である。隊の我が突擊隊を見ると、松樹山、二龍山、寺院砲臺、鉢卷山、東西盤龍山、鷄冠山北砲臺、望臺、東鷄冠山、白銀山、日砲臺、の各砲臺が齊しく起つて砲火を集中したから、目も開けてをられぬ有樣でバタ〳〵と僅かの間に黒胡麻を

振り撒いたやうに、敵の砲壘の前へ撒布されてしまつたのである。生き殘つたものは、砲壘の直下に喰ひ付いて、右へも、左へも、後へも、一歩も引くことも出來ず、たゞ援兵の來るのを待つといふ有樣であつた。この角面堡に向つた第九師團の突擊隊は、此の一戰に於いて其の兵力の三分の二を失つてしまつた。

明くれば二十日、戰況發展せず、僅かに最右翼第一師團方面に於いて、敵に肉薄し、石合戰と小銃戰とを交へて、一局部の敵を驅逐したのみに止まつた。翻つて十九、二十日に於ける露軍はドウかといふに、第九師團の龍眼北方角面堡に對して行つた突擊に對して、既に地區守備隊司令官セメノフ大佐より、最早支ふる能はずといふ報告を、櫛の齒を引くが如くスミルノフ中將の下へ發したけれども、僅かに增援隊の來るに會うて其の位置を支ふることが出來たのは出來たものの、實際も危い瀬戸際であつたのである。

二十一日となる。第一師團は水師營南方の高陵保壘に對して、盤龍山東砲臺を目標として位置し、第九師團はドウかといふに、午前四時四十分鐵條網の破壞作業の一隊は、敵の高壓力の電氣を通じた鐵條網を破壞すると、續いて砲壘の直下の鐵條網の破壞に從事したが、皆打たれて死んでしまつた。併し兎に角にも突擊隊の進路が開けたので、第七聯隊は午前五時決死隊となつて突擊したが、進むものも斃れ、進むものも斃れ、死體が敵の砲壘前に長い道を成して斃れてしまひ、聯隊長大内大佐も身に數十彈を蒙つて戰死し、大隊長悉く戰死し、中隊長以下幹部殆んど斃れ、旗手も亦死傷し、軍旗は旗竿が折れて、僅かに負傷した一兵卒によりて捧持せられてをつたといふ慘たる有樣であつた。

第七聯隊は此の一戰に於いて僅かに七十餘人を餘したといふ悲況に陷つてしまつたのである。

我が第十一師團方面はドウかといふに、午前四時歩兵第四十四聯隊は東雞冠山北砲臺の外岸頂を目標として進んで、豫て用意した携帶橋を砲臺の外壕に懸けたが向岸に達せず、壕底に落ちてしまつた。其所で突擊隊は躊躇すべき時でないので、ドン〳〵壕底に飛び下りて向岸へ驅け上らんとしたが、敵の狂射を受けて、死屍は壕底に散亂し、負傷者も遂に收容することが出來なかつた。かゝる有樣で空しく時を過ごし、午後六時四十分になつたが、師團長は、「第十一師團は假令全滅すとも、師團名譽のために獨力を以て突擊を決行すべし。」といふ命令を軍司令官から受取つた。かゝる命令を下された軍司令官の胸中は如何であつたらう？ 十人行けば十人死ぬる、百人行けば百人死ぬる、行くものも行くものも皆死ぬる。各處に於ける突擊は效を奏せず、徒らに決死部隊を横たふるの慘況に際して、乃木將軍の胸中はドウであつたらう？ 思ふも涙の種である。將軍自刃の事もまた是等に一因してゐるのではあるまいかと思はれる。

予はこの時總豫備隊に在つたが、小高き丘の上に登つて前面を見ると、敵の砲壘の前に鐵條網が横に一文字を引いてをり、それに黒い長い棒が山の上から下まで縦に引いてあつて、丁度鐵條網と十文字になつてゐるから、あの黒い棒は何であらうかと眼鏡を取つて見ると、其れが突擊縦隊の斃死部隊であるのを見て、ギョットしたのである。黒い棒の立つてゐるところは云ふまでもなく敵の砲壘で、そこには眞黒に我兵が固まつて斃れてゐるのであつた。そして岩蔭や、砲彈ですくひ取られた窪みには、あちらに三人、こちらに五人と、軍旗を持つてゐるもの

もあれば、同志を持つてゐるものもありして、それが生きてゐるのか死んでゐるのか、身動きもせずに轉がつてゐるのが見えたときは予は覺えずハラ〳〵と袖に涙をはふり落した。「ア、皆かうして死んでしまつた！」物凄き夜が羽翼を伸ばして死者の上にも瀕死者の上にも、負傷者の上にも蔽はんとする、今にも雨の落ちさうな夕暮、岩のゴロゴロと轉がつてゐる丘の上に立つて泣いた。軍司令官も之れを見て泣いてをられた。師團長も、旅團長も、聯隊長も、皆之れを見て泣いてをられた。掛けがへのない兵隊を皆殺してしまつて、この先どうなる事かといつて泣いてをられた。嗚呼、旅順は誰も彼も泣く〳〵戰をしたのだ。

二十二日夜零時四十五分に、第十一師團長は軍司令官へ暇乞ひの意味に於いて、「師團は全滅を期して獨力攻擊すべしとの軍命令に基づき、之れを實行せんとす。其の成否素より知るべからずと雖も、或は悲慘なる狀況に陷らんとも計り難し。師團は唯々命令を遵奉するの一點に於いて、身命を以て責を塞さんのみ。」と報告した。また第九師團長は、一師團が數回の突擊も遂に其の功を收むること能はず、今は唯殘兵を集結して唯一回の突擊を決行せんのみ。成否固より決し難し。或は效力無きに終はらんか。」といふ哀れなる報告をした。突擊は生存者のあらん限り何十回でも決行するが、遺憾ながら成功すまいといふ悲痛なる報告である。今より當時のことを思ふと、皆涙の種でかゝる報告を呈するの止むを得ざるに至つた師團長の心中が思ひやられる。二十二日拂曉第九師團の左翼隊は大突貫を行つたが、聯隊長以下大隊長を始め幹部皆殆んど戰死して、また如何ともすること能はざるの悲況を再びした。予が聯隊の中隊長某大尉の如きは、部下の前に立つたまゝ、情に迫つて命令を發することが出來ず二人の小隊長の手を握りて泣く〳〵、「予は最早こゝに生き殘れる部下に對して、前進の令を與ふるに忍びず。君等願くば僕と共に突擊せよ。而して聯隊名譽のために戰死してくれ。」と涙ながらに主從僅かに三人敵壘に向ひて突擊したが、見る見る中に一人の小隊長が斃れ、他もまた斃れ、最後に中隊長も亦斃れた。この時部下は地隙から飛び出して、また中隊長の後を追うて突擊したが、石に躓いたかと思ふのは前にのめり、銃をあげたと思ふのは後に倒れて、遂に一人の生存者をも殘さなかつた。

二十二日拂曉の攻擊もかゝる始末で、無益なる犧牲を供するに過ぎずじまひになつたのは、殘念な上にも殘念で、いひやうがなかつた。これではいくら突擊しても奏功の見込も立たず、大切な兵隊をムザ〳〵屠るやうなものであるから、何とか思案せずばなるまいと、將軍、幕僚額を聚めて凝議してゐると、何が導火線になつて、思ひがけもない奇利を博するものか分らぬもので、丁度午前八時頃に盤龍山東砲臺の東側に當つたところで敵の砲臺から四五間直下の窪みに、今まで死んでゐたと思つた一人の兵卒がムク〳〵と動き出したと思ふと、其の中の一人が一抱もあらうかといふ大きな石をかついで窪みを飛び出した。見渡す限り一面の戰死者負傷者で埋まり、一人の來つて援ふ者もないのに、彼の一兵卒は何をするのか、石を抱いて匍ひ出したと思ふと、ツカ〳〵と走つて敵の砲臺に飛び上り、ズドンと其の石を投げ込んで置いて、チョコ〳〵とまた元の窪みに走り込んでしまつた。そしていま一人の兵卒は窪みの內で、連りと國旗を振り廻してゐた。そして此の二人の兵卒は、暫く其の窪みにをつて、頭を出し

たり、引込めたりしてゐたが、其の中に一人がプイと窪みを出て、鼬のやうに斜面を驅け下りて、麓の地隙内に入つてゐると、殘りの一人も亦山を下りて、同じ地隙内に入つてしまつた。石を敵中に投げ込んで歸つた兵卒は、何の積りでコンナ奇襲を演じたのか分らぬが、この勇敢なる動作が、盤龍山奪取の導火線となつたといふのも實に奇といはねばならぬ。之れを見て、此の正面の守兵は必ず夥多しく損害を蒙つてゐるに相違ないといふので、直ちに破壞隊を以て機關銃及び堡壘の一部を破壞せしめた。破壞隊の勇士は一人も生を完うするものはなかつたが、併しこの作業は功を奏した。この破壞によつて、漸く足場が出來たので、突擊隊は盤龍山軍旗を飜して突入して、こゝに始めて盤龍山東砲臺東方面の突角を占領した。機會逸すべからずと、續々增援隊は繰り込んで來たが、敵は堡壘の一部を失つたけれど、なほ咽喉部に據つて一歩も退かず、頂の上の胸墻左手前の北砲臺横から、側防堡、P堡壘即ち一戸堡壘――右手前の二龍山等より、シタタカに擊つて來るので、今にも危く見えたが、この砲臺の一角を占領する迄にも、幾千人の勇士を葬つてをるか知れぬものを、若し之れを投棄するの止むを得ざるに至つたならば、軍は將來如何にして攻擊を發展すべきか。第九師團長大島中將は、三家房北方の高地に在つて此の有樣を見ると、竹内少將の後備第四旅團に增援を命じたが、後備第八、第九聯隊とも、P砲臺で昨夜來非常な損害を蒙つて、將校全く無きに至り、彈藥缺乏のため石礫を投じて戰鬪したといふ有樣で、戰鬪力を有してをらなかつたから、如何ともすることが出來なかつたのである。かゝる有樣で午後の三時まで持ちこたへてゐたが、右の兵も打たれ、左の兵も打たれ、齒が拔けるやうにコロ〳〵と砲臺の下へ落ちて行くので、心細さは一通りでなかつた。それにまた彈藥が足らんといひ出したから、この先如何になり行くか。かゝる時の心細さは一通りの沙汰でない。今まで右にをつた兵卒が、早やいつの間にやらゐなくなつたり、左の兵卒がウーンといつてフン反り返つたりするのは、心細いどころではないが、藥盒に彈丸が無くなるほど、心細いものはないのである。左翼隊長たる一戸少將は之れを見て、戰死者や負傷者の持つてゐる彈丸を拾ひ集めて、僅かに急場を支へさしたといふ有樣であつた。繃帶所にある軍醫が、自ら彈藥筐をかついで戰線へ運搬したといふやうなこともあつたくらゐである。かゝる絕體絕命の有樣で午後五時四十分まで持ちこたへたが、好機の乘ずべきものがあつたと見えて、敢然として大突擊に移り、步々抵抗する敵を驅逐して、遂に盤龍山西砲臺を占領するに至つたのは正に六時。この時既に敵の增援隊はフォーク將軍の手を放れて急行しつゝあつたが、我軍は彼の來着に先だつて東西兩砲臺を確實に收めたのであつた。

盤龍山を我手に收めたため、これより右には二龍山を打ち、左には北砲臺を打つといふ方寸を以て攻擊することの出來る端緒を開いたのであるが、しかし難戰も苦鬪も實はこれからであつた。

八月二十三日の夜が來た。第十一師團は北砲臺及び望臺を目標として攻擊に從事した。步兵第二十二聯隊と第四十四聯隊とは二十四日の未明、望臺に向つて突擊し、一たびは此の地の主人公となつたが、敵の逆襲に逢ひ、劇烈なる格鬪もしたなれど、如何にせん左右皆斃るといふ

有様で遂に奪還せらるゝに至つた。天明望臺の斜坂にヒラ〳〵と淋しく國旗の飜るのを見たが、其の國旗の下には一人の生存者も無かつた。予も亦其の望臺下に倒れてをつたのである。既に二十三日滿洲軍總司令官より、今日迄の激戰に於いて、第三軍將卒の勇敢なるを明かに認む、設ひ如何なる犧牲を拂ふとも、一旦着手したる攻撃を中止すること勿れとの訓旨を受けながら、攻撃實行の上には事志と違ひ、連日の激戰に於いて、僅かに盤龍山東西砲臺を占領したのみである、しかも二十四日の突撃に於いて、第十一師團は頗る悲慘なる情況に陷り、「師團は全部覆沒せしが如く、其の狀況明瞭ならず。之れより攻撃を繼續すること能はず。」といふ報告をするやうになり、軍も遂に強襲法を斷念せざるの止むなきに至つたのは是非なきこととはいひながら、實に情ない哀れな次第であつた。一萬五千の戰鬪員を失ひ銃砲彈もまた殆んど盡きたが、十九日以來、我が將校下士卒が敵と咫尺の間に接して、眠らず、飲まず、また食はず、唯一意專心進んで決死的行動をなしたるは、日本軍の勇武絶倫を明かに事實に證し、露軍をして旅順の運命も到底久しきに亘るべからずとの念を抱かしむるに至つたのである。

第二十四　彼我共に危し

強襲を以て要塞を一擧に攻落せんとした第一回總攻撃も、不幸我軍は失敗を以て終り、高地の上に勇敢なる兵士の死屍を堆積するに止まつたが、此の總攻撃の敵に與へた打撃は、實に非常であつた。防禦地區司令官ゴルバトフスキー少將の八月二十一日午前十一時頃、スミルノフ中將に呈したる報告の中にも、「目下情況頗る重要の時機に在り、諸堡壘は全く破壞せられ、守兵の大部は戰死し、砲兵もまた既に用ひるを得ず、豫備隊また悉く盡きたり。」とある。要塞司令官スミルノフ中將も、老頭山(危險山)に在つて戰況を視察してゐたが、形勢極めて危急に迫るとも、今決して情況を悲觀するの時にあらずと叱咤して、將軍自ら指揮すべきものは最早一人も無いといふ始末に立ち至つた。將軍もそれ以來は閑散になつて、十二月十五日北砲臺で、彼の老將コンドラテンコ少將の戰死するまでは、非役同樣でゐたのである。かゝる有樣で、甲砲臺では十人になつた、乙砲臺は僅か三人になつたといふ悲況に陷り、現に二十二日を以て盤龍山東西砲臺の攻落せられ、諸砲臺また著大の損害を蒙り、守兵も亦著しく減耗したのを見ると、怖氣がついたか、ステッセル將軍は「最早抵抗の餘力無し、諸君乞ふ之れに處するの道を講ぜよ。」といつたといふことである。恐らくこれは謔であらうが、スミルノフ將軍は、「要塞は未だ悲觀すべき狀況に非ず。予は敵の突撃を撃退し得べきことを確信するものなり。我運若し非ならば、我等は生命を殞すの一事あるのみ。要塞を敵手に委すること斷じてあるべからず。」と目に角を立て、案を叩いて極論したとやら。すると「日本軍若し我が防禦線を突破するに至らば、貴下は如何?」と、ステッセル將軍もムキになる。スミルノフ將軍は言下に、「吾等は逆襲以て敵を突破し底止する處を知らざるべし。閣下!戰場に於いて身命を失ふは軍人たるものの當然覺悟すべきことなり。」とキッパリと答へたといふことである。ステッセル將軍には、ステッセル將軍の考があり、スミルノフ將軍には、ス

ミルノフ將軍の苦しみであつたことで、いづれも全力を盡して悲境の非運を挽回せんとしたことはいふ迄もないが、スミルノフ將軍こそ實に鐵の如き意志を有する將軍であつたと思ふ。

第一回總攻撃が失敗に終つたことについて殘念に思ふは、同攻撃後我軍の將官が、「日本軍が第一回の總攻撃によりて、我が要塞は實に危險の極に陥り、各砲臺の損害は見るに忍びざる景況であつた。日本軍が若し二十四日の拂曉攻撃に於いて、なほ五六個大隊を以てする增援隊の挺進するあらば、遂に要塞を放棄するの止むを得ざるに至つたであらう。現にある一部の守兵は白旗を出すべく準備してゐたのである、惜しいかな、日本軍が突貫の聲次第に衰へ、遂に復來らざりき。」といつたが、實に惜しいことをしたものである。當時我軍殆んど全滅して再び戰場に立つべき兵員の無かつたといふことは、露軍もよく知つてゐたので、日本軍の猛烈なる前進は頗る戰慄すべきものありしが、悉く之れを撃退したれば、敵は遂に我が鋭鋒を避けて、溪谷の間に潛伏するの止むなきに至れり。」といふ記事も見えるくらゐである。それは予等の擔架が長嶺子の柳の樹の下の別れをしてゐた時で、戰場生殘りの者は、悉しく溪谷地隙の間に天幕を張つて泣いてをつた時なのである。であるから若し此の時敵が要塞を出でて大逆襲を試み、北方と連絡を取らんと企てたならば、如何なる結果となつたであらう。實際さういふ評判が、誰いふとなしに起つて、野戰病院などは、二日にあまる負傷者を如何にすべき、敵手に委してジュネーブ條約の下に救護を受くべきや否やといふことなどを、協議に成つて凝議してをつたやうな狀態であつた。負傷兵は天幕から溢れて、野にも、河原にも、屋前にも横たはつてをつたが、この話を聞くと、健氣にも我等は敵國の救護の下に立つことは嫌である、我等は此の處に於いて赤手空拳を以て戰はざるべからず。而して一人も暴戻なる敵手に落つることあるべからずといひ、大いに戰はんと競つたものもあつたが、併し若し敵が兇暴なる擧動に出づるときは、無念ながらも、斬殺しになる外はなかつたのである。蓋し戰場では使へるものだけは使つてしまつたので、少しの傷ぐらゐな負傷兵は、繃帶所や野戰病院には居らなかつたといつてよいのである。「我に未だ一本の手あり、打たざるべからず。」といつて一本の手がブラ〳〵になつてをつても、戰線から退かなかつた勇敢なる兵士もあつたのである。使へるだけは使ひもし、やれるだけはいゝ、やつたのであるから、野戰病院などにゐるものは、見るも慘たらしい重傷兵で、爆藥や砲彈で一思ひにやられたもののみといつてもよいのであつた。頭や手足をザク〳〵にやられて、糸よりも細い命を繋いでゐるものが、何で抵抗が出來よう？　さればといつて敵手に落つるは、我等神州男兒の氣性として、如何にも忍びざるところである。最早魂つきて戰ふの術を知らず、抵抗力は絶滅したりとて、今更おめ〳〵敵手に落つるは、日本軍人の潔しとせざる處であるので、名譽の捕虜といふ語は、日本軍人には適用し得ざるところのものであつた。敵軍の救護下に捕虜となるは、如何に止むを得ぬ情況であつたにしろ、予は之れに同情を表し得ぬ一人である。

何はさて措き、當時敵が大逆襲に轉じたならば、其の結果は恐らく悲慘であつたらうが、前にもいふ通り、敵も亦出撃するだけの元氣はなかつたのである。嗚呼、八月十九日より二十四日に亙りて作爲したる我が勇敢なる強襲は、

遂に其の目的を達することを得なかつたけれども、日本軍人としての眞價は、大いに之れを世界に發表し得たので、當時從軍外國武官の中には、涙を流して日本軍人の勇武を賞揚したといふことである。さればこそ獨逸皇帝陛下も忠誠勇敢萬國無比と激賞せられたのである。

予は第一回總攻擊の二十四日未明、望臺の突擊に於いて傷を蒙り敵圍に陷つて、半死半生の日に會つたが、こゝに當時の戰況をば、露軍の記事を藉りて一言附記して置くは、獨り予が思ひ出のために止まるのである。

「八月二十四日未明、敵(日本軍)は一大密集隊を以て盤龍山東砲臺を踰え、支那圍壁を突破し、大鷲巢山(望臺)に突擊し來り、我(露軍)は卽ち十字火を以て之れを迎へ、接戰格鬪の末遂に悉く之れを殪したり。此の夜、敵は九千の死屍を戰場に遺棄せり。夜の全く明け渡るや、スミルノフ將軍は幕僚、副官を從へ、前夜の戰場を巡視せしが、到る處荒廢の狀慘として正視するに堪へず。彈藥盒、血染の衣服、彼我兵士の死屍は、破裂彈によつて荒されたる地上に橫たはり、盲障其の他の遮彈設備は悉く破壞せられ、生存者、負傷者は身を山麓に隱し、掩蔽下に在りて疲勞を休めつゝあり。將軍は兵員に挨拶して、其の勇武を賞せり。各兵士は將軍によりて、斯く功勞を認められたるを深く喜び、身體疲勞せるにも拘らず、士氣甚だ振へり。」

予が實に「荒廢の狀慘として正視するに堪へざる」うちに橫たはつて、望臺の中腹に在つたのは、二十四日の天明であつた。そして七年前の予は、七年後同じ望臺に立つて、感慨を恣にすることになつた。予は望臺の絕頂に足を駐めて、十九日の砲擊によつて頭を飛ばしてくれた巨砲の砲身に凭れながら、七年の月日が立つたといふことも忘れ、やゝ久しく憮然として回想に耽つてゐた。日も日なり、處も處なり、予は廢壘の上に立ちて、覺えず涙を啜つた。

第二十五　殘壘に立つ

望臺に立つて東を望めば、虎の如く踞つてゐるのが大孤山である。その右に猛虎の前に縮まつてゐる羊のやうなのが小孤山である。東鷄冠山北砲臺、一戶砲臺(P望臺)、盤龍山東砲臺は眼下に在る。H砲臺は砲臺の左の袂に續いて直ぐ左にある。二龍山は其の左に見える。八里庄の村落がH砲臺の頂きを通して見える。その左に、三角形の小松林で右半面が靑く色取られ、左半面の禿げたる砲臺が龍眼北方堡壘――クロパトキン砲臺である。この砲臺の左の斜面を通して、遙かに白堊の壁のゴチャゴチャと固まつてゐる一大部落が水師營である。見渡す限り皆山である。山は皆砲臺である。どこまで續いてゐるのか、いくらでも山卽ち砲臺が續いてゐる。松樹山、案子山、高崎山、二百三高地と、皆波のうねりのやうに老鐵山まで續いて居る。予は友人小田中尉、北砲臺の勇士矢野特務曹長、寫眞師宮城君と連れ立ち、二十五六の溫順にして愛嬌あるニーイ君の馬車に乘つて、こゝまで來たのである。滿洲は時化のあとで、安奉線の鐵橋が毀れたの、蓋平附近の鐵道に大破損があつて遼陽までは行けぬの、旅順も拔けるほど降つたのといふ後で、カン／＼と熬りつけるやうに熱い日盛りであつた。全く天祐です。二三日前まで降りつゞいてゐましたが、雨が降つては、砲臺廻りもニーイですからなア」と宮城君がいつた。宮城君は白いリンネルの詰

襟の服を着て、三十七八ぐらゐか——もつと若いかも知れんが、赤い髭——赤くなかつたかも知れぬが、——なんでも赤くはなかつたらうかと記憶してゐる、違つても少しは赤いであらう。日露戰役前から旅順に居つて、大ぶん邦人に知己もあるやうだ。寫眞師が本業であるが、恐ろしい議論家であるといふ評判であつた。成程よく話をする人であつた。

「一飯でも食はうぢやないか。」といふと、宮城君は「良好の陣地ですなア。」と、すつかり軍隊式を發揮して居る。小田君は辨當の風呂敷を解きながら、「細辛が作つた海苔卷ですから」との吹聽であつた。宮城君の辨當は途中支那町を通つた時に、十錢で買ひ込んだ豚肉饅頭である。望臺の巨砲の中間で、日本軍の方に面して我等は陣地を占めた。細辛が作つた御自慢の海苔卷は非常に旨かつた。干瓢や、椎茸や、何か知らんが肴の切れが卷き込んである手際などは、うまいものであると思つた。昨夜風呂場の窓から老頭山、北斗山を說明してくれた、あの鼻の穴の黒い、左の頭に一寸禿のある兵隊が作つたのかしらと思つたりした。小田君はサイダーを拔いたが、一本ひつくりかへしてしまつた。サイダーは白い丸い、庭にでも敷いたら綺麗だらうと思ふやうな小石の中へ泌みこんでしまつた。宮城君が、「これはドウですか旨いですよ。」と豚肉饅頭を出して、如何にも旨さうに食つて見せるから、一つ頂戴してボクリと食ひ付いて見ると、驚くべく臭いものであつた。いかにも油臭い饅頭であるから吐き出した。「ハ、ハ、旨くないですか？」といふから、「うまくないどころか、馬鹿に臭い饅頭ぢや。コリヤいかん。」といふと、「イヤこの饅頭が食へんやうでは、滿洲のこと未だ以て談ずべからずですよ、ハハ、、、。」と舌鼓を打ちながら、愈々以て旨さうに食ふから、「こんな饅頭が食へんで仕合せぢや。」といつて笑つた。小田君と矢野君とは、一つづつ額をしかめて食つたやうであつたから、少しは滿洲臭くなつてゐる組であらう。お伴の馬車屋のニ、いーの右手に鮨を二つ、左手に饅頭を二つくれてやつたら大恐悅で、右手を見たり、左手を見たりしながら、砲車の後へかくれた。予は砲身を日除とし、岩の出張つたところに胡坐をかいて、鮨を食ひながらも、一種荒涼悽愴たる感情に打たれて、咽喉を壓迫するやうな感じがせずにはゐられなかつた。今坐してゐるところ、今鮨を食つてゐるところは、曾て予が一たび望臺の主人となつて足を踏み入れたところ、而して瞬間にもせよ、一度は日章旗を飜したところであると思ふと、今吐き出した豚肉饅頭が散らばつてゐる岩の上も、サイダーが泌み込んだところの小石も、皆舊知の如く懷かしく思はずにはゐられなかつた。予は不幸にして望臺の突擊に成功せずして、其の砲身の下から追ひ返されたが、この砲身の下は、僅か十數人の殘兵——この內一人も滿足な者はなく、予も既に右手が碎けてゐた——と共に食ひ付いてをつたところで、銃の尖に日章旗をつけてゐた一兵が躍り上がつて、無上に旗を振り廻したが、四五遍振つたかと思ふうちに、仰のけにドサッと落ちて來た。躍り上がるものも落ちて來る、躍り上がるものも落ちて來る。其のうちに逆襲に遇つたが、兎も角、理が非でも、曾て一度望臺の主人となつたのである。そして東北斜面から、敵の大逆襲を受けて、地の不利、寡兵の悲しさ、一たまりもなく、團子のやうに急斜面を轉がり落ちて支那圍壁のあたりで、突戰、混戰、亂戰して全滅した無念の歷史が添つてゐる望臺である。そして幾百の戰友部下を失つてしま

ひ、其の死骸は收容することも出來ずして、徒らに敵中に遺棄するの止むを得ざるに至り、三十八年一月一日初めてこの地を占領した時には、モウ骨になつてゐるものもあつたり、肉片のところどころに附着してゐる骸骨が服を着てをつたり、立派に脚絆をつけたまゝ腐つてゐるのがあつたり、頭髪が僅かに名殘の頭蓋骨に殘つて、寒い風に吹かれてゐたといふやうな、悽慘たる結果を來したところの此の望臺に立つて、予は思へば思ふほど涙ぐんで來て、覺えずハンカチーフを出して眼を拭うた。一行がゐなかつたら――一人ツクネンと此の望臺の上に立つてゐるのであつたら、必ずや聲を放つて思ひ切り泣いたであらう。

予は目を膝の前に繁つてゐる柏の葉によく似た草の上に落してゐたが、何の氣もなしに、「宮城さんこの草は何といひますか。」とそれを指すと宮城君は「それですか。それは何とかいひましたわい、エート……」と考へる風であつたが、「肉蓯蓉、肉蓯蓉、さうです。肉蓯蓉といひます。」――ニクヅク！ ニクヅク！」と予は口のうちで繰り返した。ニクヅク！ 何となしに殺伐たる意味があるやうに思はれてならぬ。旅順の山にニクヅク！ ありさうな名の草であると思つた。ニクヅクは禿頭病の藥であると、宮城君が後で說明してくれた。予は小田君の好意で、或る兵隊に髮を刈つてもらつたが、歸京してから禿頭病に罹つた。この稿を起したときも一錢銅貨ぐらゐは禿げてゐたのである。あの望臺の肉蓯蓉が、禿頭の妙藥なら、少し貰ひたいくらゐに思つてゐたのである。旅順の山に肉蓯蓉といふ恐ろしい草があり、それが禿頭の藥であり、そして久し振りに折角旅順へ往つた櫻井が、禿頭病に罹つたなどは、面白いといへば面白いが、禿頭などはあまり面白くない。

望臺の上は、猫の額程しかないといひたいやうな狹いところである。加農砲が二門ヌッと頭を突き出して、高みから脚下の諸砲臺を見下ろしてゐるところの威嚴ある砲臺である。けれども、望臺は東鷄冠山北砲臺と盤龍山東砲臺とによつて流れたるところの防禦線の後にあるので、いはゞ北砲臺が右の見張所なら、東砲臺は左の見張所である。左右から睨みつけて見る見張所を潜つて、奧の望臺へ闖入するなどといふ、ソンナ無鐵砲なことは出來ぬ譯である。予は望臺に立つて我軍があの盤龍山の右の斜面からH砲臺の左の斜面へかけて、望臺を目標にして來たことを思ふと、よくもコンナ處へ來られたものであつたと、竦然として當時の大膽なる攻擊に驚いたのである。望臺は何をいつても百八十五米突の高地である。二百三高地につぐ、兎も角も高い砲臺であるが、砲臺其のものの價値はあまり無かつたらうと思ふ。唯だ高い山、險しい山だけに守者は遠目が利いて、防禦にも有利であつたらう。望臺から見る大孤山の裏には、蛇の蜿つたやうな道が絕頂まで達してゐる。あの裏道は八月七日の夕方であつたらう、敵の大逆襲隊がこゝをドヤドヤとやつて來たが、我軍の急射擊に逢つて、道を變へて右の方へ行つてしまつたことがあつた。そのとき敵の諸砲臺から一齊に打つた砲彈が、頂上の岩角にぶち當り、物凄い火花が散つて、大孤山の我兵も大分やられたことが、大孤山の裏道を見てゐるだけに直ぐ胸に浮かんだ。あのゴチャ〳〵とかたまつてゐる處は、何といふ村であつたか、そこに鼻の黑い、そして一寸ぐらゐの辮髮に、赤い紐をつないでをつた、それは可愛い子供がゐたが今でもゐるかしらん。あの七八軒家の見えるところは五家房であらう。五家房の名は予

に恐ろしい思ひ出のあるところで、我が中隊長川上大尉は師團の總豫備隊を率ゐてゐたが、二十三日の夜遽かに命令があつて五家房へ到つて本隊と共に突撃隊に加はれといふので、五家房を搜索したが分らぬ、あちらへ行つたり、こちらへ行つたりしてゐるうちに、夜は晴し、隊は見當らず時間は空しく過ぎる、中隊長は腹を切つても申譯が立たぬといつてゐる、予等も途方に暮れて百方搜索したが分らず、泣くに泣かれぬ有樣であつたところが、あの五家房である。トウ〳〵夜の二時に盤龍山の下の地隙の入口で會つて、突撃の間に合ひはしたが、五家房の名を聞いてさへ、亡き中隊長の顏がアリ〳〵と目に浮ぶやうである。五家房はトウ〳〵あの夜、發見も出來ず仕舞ひになつたが、七年後の今日初めて望臺から之れを見るにあたり、當夜のことが思ひ出されて悲しくなつた。

望臺から旅順の方を見ると、市街の屋根は强き日光を浴びて、キラ〳〵と鱗のやうに光り、「あの樹が繁つたら日本兵は嘸涼しからう。」と退城の時、振り返り振り返り露兵がいつたといふ、アカシヤが風を孕んで繁つてゐる。露軍弔魂碑除幕式の時に來たマッセーウイッチといふ海軍大佐が、「イヤ私が植ゑた柳が大きくなりましたよ。」と感慨に堪へぬ風で、馬車の中で、同車した日本士官に語つたといふことであるが、曾ては樹が一本もなかつた禿の旅順に植ゑられたアカシヤや柳は、今ドコにもコヽにも黑く繁つてゐる。紺青のやうな海は、瓢簞の口のやうな港口から、水天髣髴の外に續き、白玉山の表忠塔は突兀として天を仰いで立つてゐる。

第二十六　流血の地

ステッセル將軍は、「日本軍が最後の豫備隊約一萬、青泥窪に到着したるものの如し。我等は既に約五倍以上の敵に對して頑强に抵抗せり、今や我等は更に敵が此の最後の豫備隊をも撃滅せざるべからず。」と、既に八月二十一日に於いて訓令を發してをる。スミルノフ中將もまた部下を激勵して、「予と汝等とは唯一死あるのみ。神は汝等を助け、汝等をして職責に忠ならしむること、數日來死傷せる汝等の戰友に於けるが如くならむ。」と告け、砲臺から砲臺を巡視して、負傷し、疲勞した守兵と握手して、諭すに、忍耐すべきこと、一死以て守地を離るべからざることを以てした、我軍は陛下の御爲に、邦國の爲に旅順の山を墳墓として死骸の山を築いたが、露軍の善戰、善守したことも、また世界の等しく認むるところで、我等は恥かしからぬ相手と戰つたものだと思はねばならぬ。旅順へ行きさへすれば、死ぬるに極つてゐるといはれたくらゐであり、隨分死にもしたが、我等は軍人としては戰の仕甲斐もあり、御奉公の盡し甲斐のある處へ向つたので、何不足のないことであつたと思ふ。予は一行と望臺の斜面を下つた。足元の浮いた岩が、ゴロ〳〵と石切り場のやうに轉がつてをるので、踏み外したら眞逆樣に轉げ落ちさうである。よくもコンナ處へ登つて突撃が出來たものだと、自分ながら驚いた。この坂を登つたり團子のやうに轉げ落ちたりしたかと思ふと、全く夢のやうである。予は此の坂を下りながら、敵の逆襲に遭遇してから、ドウいふ道を取つて麓へ落ちて行つたか、どのあたりで踏み止まつて接戰をしたらうか、最後に予は何處で殪れたらうかといふやうなことを考へながら、此處でもあらうか彼處でもあらうかと、當年の記憶を繰り出しつゝ麓

まで下りた。突撃のあの夜は空が明るかつたので、望臺の陵線には一列に露兵の立姿が見えてをつたが、兎に角山も谷も暗かつたから、我が最後を記念すべき場所に對する印象が明白でなかつた。しかしナンでも敵の塹壕のある側で、其の塹壕には露兵が迂路ついてをつて、その上の一寸小高い處であつたことだけは明かに記憶してゐるので、それを便りに捜して見さへすれば、大凡の見當はつくだらうと思つてゐた。予は望臺の急坂を下りながら、かゝる著明なところがあるかドウかと、それにばかり意を注いでゐたのである。

矢野君は、「大尉殿、何を見ても思ひ出が多いでせう。」といつたが、固より何を見ても思ひ出が多いには多いが、予自らは旅順の山からいへば、唯僅かに一點の地表を發見すべく、「塹壕の側の小高い處」は何處であるかといふ念にのみ驅られて、矢野君には、「さうですな！」と氣のない返辭をしたきり、感慨が多いも少いもない、頭が堅くなつてしまつて、唯呆然としてをつたのである。

予の足は非常に速かつた。小田君も矢野君も驚いてゐたやうである。その昔、二つにも三つにも折れた此の脚で、山を登つたり、坂を驅け下りたりするのであるから、負傷した時のことを知つてゐる矢野君は頗る驚いたやうである。

予は谷底へ下りたかと思へば、急に山へ驅け上がり、また下りてはまた登つたりしたから、兩君こそ有難迷惑であつたらうが、予は氣の毒だと思ふだけの、實は餘裕がなかつた。「大尉殿、早いですなア。」と小田君からいはれて、初めて兩君に濟まんことをしたといふ氣になつた。これも予が忘れ難き地を踏んだために、あまりに頭が堅くなつて、夢中になつてしまつたからであらう。

「到る處、墓場のやうな臭ひがするですなア。」と小田君が嘆息して予を顧みたとき、予は足を止めて、塑像の如く我れを忘れて立つてをつた。「塹壕の側の小高い處」なる幻のやうなボーとした處は、予が其處に足を駐むるに於いて、初めて霧が霽れるやうに印象が明るくなつて、亡者の如く旅順に山を迷うた予は、そこに初めて安堵を得たのである。

「こゝだ？」と予は思はず知らず叫んだが、こゝぞ實に予が力盡きて敵中に殪れ、而して露兵に刺殺せられんとまでした地點、その地點である。

旅順の「自分の殪れた處」を尋ねて見るの念は、予が年來の希望であり、また此の旅の第一の目的であつたのである。予は自分の殪れた處を探し當てて、そこに立ちは立つたが、そこは岩はゴロ／＼と轉がり、夏草が一面に生ひ繁つてゐるところで、何の風情も無い、只の草原、石原であるが、これが兎も角も予の故郷である。年久しく住み馴れし家郷を去つて、遠く山川に漂浪した天涯の孤客が、飄然として再び還るの日、豈圖らんや、雜草深く鎖して、荒廢せる我家の斷礎を見つ、天を仰いで憮然たるの情景を、予は戲曲的にも思ひ浮べて、たゞ黯然として立つた。春風秋雨七星霜、その間には石が轉けて谷へ落ちたでもあらう、上から石が落ちて來たでもあらう、草が生えて、其の草が枯れて、また生えて、また枯れて、雨が降つたり、雪が散つたりしたでもあらう。けれども此の幾變遷のあつた荒蕪の地も、予が流血を以て染めたところであると思ふと、言ふにいはれぬ懷かしき情感が湧き出でた。

予は八月二十四日の未明、敵と接戰の後、正しくこゝで、殪れたのである。そして左手と頭と

を打たれ、横腹を刺された一兵を抱いてをつた。彼は暫くして予と別れて、敵の散兵壕を跳び越して歸つたが、死者と予等瀕死者とは敵圍に陷つたまゝ、其處に斃れてをつた。予は前方の塹壕の敵の監視を受けてをつて、動いたら打たれる運命であつた。既に予は一度頭を動かした爲に、四五發續けさまに打たれた。予は何處までも死んだ眞似を餘儀なくせられた。予が頭のすぐ上で萬歳と呶鳴つて狂ひ死んだものと、予が右手のところで予が名を呼び、念佛を小さい聲で唱へて死んだものと、予が左の足の處で額の眞向から唐竹割りに割られて、虚空を摑んで足掻き藻掻いて死んだ兵とは、予を中心にして、予に最も接近した三人であつた。予は目を其の三點に落して、三人それ〴〵の死樣に就いて思ふと、遽かに身の寒さを覺えざるを得なかつた。呶鳴つて死んだところの兵士の額――念佛を唱へて死んだところの兵士の額――苦しんで死んだところの兵士の額――色々な死樣の兵士の額が、當年の其の儘浮んで來て、大なる宇宙の一隅から、小さい粟粒のやうな人間が旅順といふ山へ落ちて來て、それが煙になつてポーと消えてしまつたやうに思つた。自分はどこから飛んで來てこゝへ落ちたのか知らぬが、今までハッキリと目に映じた自分の戰場が、いつの間にやら薄絹をかけたやうに幽幻な舞臺となつてしまつた。

小田君や矢野君は敵とも味方とも分らぬ白骨を拾ひ集めて來て、石の上に積み重ねて、撫子や萩の花を折つて供へ、予等は之れに禮拜した。「墓場のやうな臭ひがするですなア。」と小田君がいつたことを思ひ出して、「第一線が砲臺で死んでしまつたら、聯隊長は聯隊の豫備隊を率ゐて砲臺で死ね。聯隊が死んでしまつたら、旅團長は旅團の豫備隊を率ゐて砲臺で死ね。旅團が死んでしまつたら、師團長は師團の豫備隊を率ゐて砲臺で死ね。師團が死んでしまつたら、軍司令官は軍の總豫備隊を率ゐて砲臺で死ぬる。」と軍の決議にもある通り、死んで死んで、死骸で築いた旅順の墓場は、皆忠義の香がするのだと予は思つた。月凍りて殘壘の上に懸る夜――悲雨蕭々として荒草の上に落つる夜――旅順の墓場に散亂してをる髑髏が、起つて號令叱咤し、奮激殺倒するであらうなどと思ふと予は竦然として立ちすくみ、身動きもしなかつた。

予は己れの墳墓となるべかりし岩の上に立ちつゝ、矢野君や小田君が積み上げた、碎けてそして苔蒸したる白骨を凝視すると、白骨にも涙ある如く感ぜられ、予が袖は涙に濡れた。戰友もし靈あらば、予の姿を望んで、何と感じたであらうか。岩石も心あらば予の姿を望んで何と思つたであらうか。我は昔のまゝの我れ、石も亦昔のまゝの山の石、獨り戰友は昔のまゝでなくなつてしまつたかと思ふと、予は白骨に對して、そゞろ恥かしい感じが起つた。けれども茲で別れて七年振りに、戰友の墳墓を訪うて來た予の姿を見て、必ずや地下の靈も喜んでくれたらうと思ふと、それが嬉しかつた。

予は一行と少し離れて、あちらこちらと彷徨うた。そして昔爲たやうに山を登つたり、下つたり、伏したり、匍匐したりしながら、物狂はしき人のやうに、「戰友諸君、私は櫻井である。諸君と共に此處で戰つたが、私は救はれて還り、今日は諸君を訪ねて來るやうになつた。諸君は此の山の土となつたが、私獨り命を全うしたのは、宿縁とはいへ恥かしく思ふ。私の新生涯に於いては、たゞ諸君が冥助によつて、御奉公の實を擧ぐることが出來ると思つてゐる。

私は諸君と共に戰つた此の戰場を踏んで、唯感激に打たれるのみである。」と口號んだ。予は或ひは狂うてゐたかも知れぬ。

予が足の付くところ、予が影の落つるところ、皆戰友の苦鬪し、難戰し、忠死したるところ、斷石、雜草みな戰友の血もて飾られたるところである。百戰の沙場人再び還らず、徒らに風餐雨打するに委すること茲に七年、何んすれぞ感慨の切ならざるべきや。

そのかみの血潮の色の偲ばれて
こゝろおかるゝ撫子の花

乃木將軍は嚢に旅順を訪ひ、夏草茂き戰跡に佇みて、かく詠ぜられしとか。勇士の碧血の殘れるかとも見ゆるは、紅き撫子の花である。野菊、女郎花、萩の花、吾木香など、ところ／＼に咲き亂れたるが中に、破れたる靴、裂けたる外套の片、帽子、彈に射抜かれたる罐詰の殼、錆れ／＼の骨などの散亂するなど、皆これ傷心の種ならざるはない。

旅順の白石大尉が前夜の話に、五六日前二百三高地へ行つた時も、服を着けた骸骨や、口髭の長く頰に殘つてゐるのが、土砂の下から露はれてをつたといつた。そしてそれは明かに露兵であるといふことが分つたくらゐで、土をかけて埋めておいたといふことであつた。旅順の山は死骸の山であるから、一雨毎に下から骨が出て來る。予が行つた時は水の岩を流したあとの土崩れの中に、骨がいくらも露はれてをつた。

第二十七　南川の里

當年予は敵中に在つたこと數十時間であつて、或時は敵の狙擊に逢ひ、或時は敵兵の摑むところとなつたが、予の命は二時間にして終るであらうと自覺してをつたのである。二時間、何故に二時間と限られてあつたかは、固より予にも不明である。唯何となく二時間を經過せば絕命するだらうと思つてゐたのである。予が斷末魔に於いて二時間の生命あることを自覺したる此の理窟は、予の如きものには分らぬ。

僅かに二時間にして絕命すべき運命に立ち至つた予は、永久的無意識の狀態に入るべく、この時予の意識は決して夢のやうな輪郭の分らぬものではなかつた。併し予の意識は肉體を以て密接に圍繞せられありて、それが恰も墓に埋められた死體が土にて蔽はれてゐるやうに、一として有機的關係を有してをらなかつたやうに思ふ。取りも直さず、予は肉體──それは四肢碎けて血が流れ出でてゐるところの肉體について、何も思はなかつた。而して何物かが來つて予の身體を搖ぶつて、身心の分離を催進するやうで「予は死につゝあるものなり、されど生前と同じく一人前の人間なり。」と思つて、曖昧でなく身心の離脫を認めてをつたのである。予は實に最も安樂に二時間を經過して、遂に一たび無意識の狀態に陷つたのである。

予が再び生を得たのは、偶然の事柄によつて眼を開いたまゝ、丁度眠りから覺めたやうなものであつた。そして其の間には既に十數時間が經過してをつたことを知つたときは、予は既に東鷄冠山砲臺の地隙に下つて、其處で血と泥との溜りに横たはつてゐたのである。

予が此の僅か二時間の命の間には悲壯また悽愴たる色々の光景を目擊したが、この二時間の生涯は、予が全生涯よりも清き尊き神祕的の生涯であつたことを思ふと、終生を通して、忘られぬ教訓である。夜來の砲聲も、夜の引明けと共にピタリと止んで、そこには多くの戰死

者の死骸が横たはり、こゝには多くの負傷者が呻きつゝ、戰場の名殘の幕は開いた。予が今でも思ひ出すのは、予の七八間先を、コロ〱と山を轉がる將校のあつたことである。コロ〱と轉がつては、また止まり、またコロ〱と落ちて行くのである。恰も死骸が自然の重みで山を轉がつて落ちて行くやうであつた。右を見ても砲臺左を見ても砲臺、敵は銃を持つてウロ〱と、そこにもこゝにも徘徊してゐる。動きさへすれば撃たれるのである。其の間を彼の將校は、死んだ眞似をして、山を落ちて行くのであるから旨いものである。この奇藝をやつた將校は、乃ち望月少佐であるが、其の後豫備病院で逢つた時に、「あれからドウして歸られましたか。」と聞いたら、「イヤとうとう轉げて還つたよ。」といつて笑つたことがある。少佐は胸部の貫通銃創であつたが、繃帶所から、野戰病院から、少佐のやうに面白いことをいつて通つた人は無いさうである。少佐は頗る豪放磊落な奇人で、また陣中の酒仙であつた。予は少佐のやうな面白い人に又と出逢つたことがない。まだ動員前のことであつたが、或日、櫻井君一寸集會所まで來てくれたまへ。」といふから、何のことかと思つて、將校集會所へ同行すると少佐（當時大尉）は「僕のいふことを此の黒板に書いてくれ給へ。」と甚だ眞面目であつたから予はチョークを取つて言はるゝまゝに書いたが、それは頗る珍妙な禁酒廣告であつた。

禁酒廣告

望月儀豫て腦病の處、病勢増進の兆あり。由つて自今萬止むを得ざる場合の外禁酒（日本酒）す。萬止むを得ざる場合とは、

一　戰地に於いて　天皇陛下の萬歳を奉祝する時。

一　他人の御馳走を受くる時。

一　毎日午後五時以後。

といふ、禁酒にしては險難な、信用の出來ぬ廣告であつたが、其の翌朝少佐に會ふと、午後五時以後の續きであつたか、大ぶん御機嫌の體であつたので、大笑ひとなつた。少佐は恬淡水の如き人で、金錢などに目がないから、一圓の紙幣も、十圓の紙幣も、區別が無かつたり、俸給は酒のために叩去られて、僅か一錢五厘などと云ふ話もある。金が無くなると、俥車に乘つて將校集會所へ入浴に來るといふやうな、今時見られぬ珍らしい人物であつたが、遂に故人となつた。少佐は昔馴染のものが寄るとさはると、よく話題に上る人である。予は望臺の中腹に於いて、またあのコロ〱と轉がつた少佐の事を思ひ出して、覺えず失笑した。

さて予は小田君と戰場の夏草を踏んで徘徊してゐると、殆んど死すべかりし予が、不思議な縁から、一勇卒近藤竹三郎の肩に負はれて敵圍を脱したことが、アリ〱と目に浮んで來る。敵の散兵壕――そこには敵がウロ〱してゐたところの空壕を飛んで、土壘の崩れから脱出したが、其の土壘の崩れはどの邊であつたらうかと見たが、どこもこゝも崩れて、此處といふ見覺えは無論なかつた。凡そこゝであらうと思ふところに立つて、近藤上等兵が予を外套に包んで、死んだ眞似をしてゐたところは茲であつたらうかと、當年のことを思ひ出してゾッとした。

予は恩人近藤上等兵の遺族の模樣を知りたいと思つてゐた矢先――尤も先年高知縣廳で調べてもらつて、六彌といふ上等兵の父があることを知つたので、音信もしてをりはするが――四十年の九月頃であつたかと思ふ、友人小原騮馬君が土佐郡森村字南川といふ、高知市か

ら十数里もある山奥の一寒村に、勇士の遺族を尋ねて行つたことがある。予は小原君に對し、深厚なる感謝の意を表すると共に、小原君の物語によつて、その消息をこゝに略記してみたいと思ふのである。

　この森村といふのは朧げながらも思ひ出のある村である。三十二年の秋、予が士官候補生であつた當時、機動演習で、一夜この村に泊つたことがある。南川の流も忘れぬ。假橋がかゝつてゐはしなかつたかと思ふ。何でも山の急勾配に、あちらに五軒、こちらに七軒、段々重なつてゐる村であつたやうに思ふ。さうして予が宿の主人は六十くらゐの老翁であつたが、「此のおいいんこく(山奥)へマアようおいでなさいました。」といつて、手前でグビ／＼酒を飲みながら、獨り笑壺に入つてゐた。そして「兵隊さん、都々逸テ知つとるかエ。」なんどといつて、「都々逸下手でも、すりくりや上手、今朝も七つ屋でほめられた。」と美音を張り上げて、ナンでも同じ歌を四五十遍も聞かされて、予等は初めの内こそ、「七つ屋」何だろう などと不思議がつてゐたが、トウ／＼謎を遂に中てられてしまつて寝轉んだけれど、老翁は枕に蟲が鳴いても、まだ「都々逸下手でも」をやつてゐた。森村に就いてコンナ記憶がある。予は、自分の恩人が森村の人であるといふことを知つた時は、何だか其處に深い因縁が結ばれてあつたやうに思はれてならなかつた。小原君が旅したのも秋――予が宿つたのも秋――黒き杉の森――白き樺の花――赤き雲頭――黄いろき黍――予には何れ思ひ出の種とならざるはない。勇士の家はあの家であらうか、この家であらうかと、大ぶん忘れかけた記憶から摸索して「都々逸」の家を思つて見たりした。

　久留米絣の單衣を着た、友禪と黒繻子との晝夜帯を締めた、鄙にしては美しい女が、縁先の花筵の上に、しをらしく坐り、脊の高い骨格の逞しい、色の黒い、額骨の秀でた、七つ下りの木綿の筒袖を着た六十ばかりの老翁が、庭先で、刀豆煙管をくはへて立ちながら、旅人と話をしてゐる光景を、予は先づ、繪のやうに美しく胸に浮べるのである。

　美しい女は、其の手に予が「肉彈」を持つて、その日の――近藤竹三郎が予を負うて、敵圍を脱する時――を示して、老父に初めて之れを見た時、オー竹か、竹か！といつてオイ／＼泣いたといふことを語つてゐる。

　親切なる旅人は、竹三郎の片身でもあればと問ふたら、「竹の狀を出すんぢや。」と老翁がいふ。彼女は走つて奥から手文庫を持つて來た。老翁は其の蓋を取り、無造作に摑み出して、「お客様之れ見てつかアさいませ。」といつて差出した一封を旅人は受取つて、其の裏書を見ると、野戰第十一師團歩兵四四第八中隊第二小隊近藤竹三郎とある。旅人は、アゝこれが此の世に殘した勇士の片身であるかと、表を返し裏を返しつゝ見つめてゐると、老翁がまた、「こりや善通寺の病院から來たんぢやが、これを讀んでつかアさいませ、之れにや、俺もシッカリ苦勞したんぢや。」といつて差出したのを開いて見ると、全文殆んど假名であるが、之れを拾ひ讀みすると、療治はしたが、肉がないこと――中々彈丸が取れにくかつたこと――彈丸は長さ四分、周り八分位の砲彈の破片であつたこと――療治最中に筋に纏つて非常に出血したこと――療治の後は治まぬから安心して下さいといふこと――コンナことが細かしく書いてある。なほ文を讀まうとすると、六彌翁は、其處ぢやヤッ！俺がシッカリ苦勞したのも其處ぢやヤッ！と力を

籠めこいふから、そこには何か書いてあるかと目を見張ると、

「さて私出征以來、幸に無事で勤めたのは、なにかといへば、父母様始め内一同が神信心及び御ぐわんを籠めこくだされたゆゑと存じます。まことに今度およこし下さつた手紙を見て驚きました。何と申して御禮申さうやらもござりません、父母様が神さまに大願を籠めてゐるから、身を大切にせよと手紙でうけたまはりまして、私は力がます／＼出來まして、實に勇んで暮してをりましたが、これほどの大願とは驚きました。今度の手紙によりはじめて承知いたしました。

私は一日も早く全快いたし、再び戰地へ還ることを樂しんでをりますから、

御あんしん下され度候。」

と書いてあつた。そしてまた、[illegible]山にて露兵と大和魂を比べようとしたときに、ツイ大和魂が强くて、露兵の陣地に跳り込み露兵を殺した愉快は、今に忘れません。」などと書いてあつた。

「おぐわんを籠めてくだされたゆゑ」「これほどの大願とは抑々何のことか。翁は煙管をポンと手の掌でたゝいて、無言のまゝ裏へ驅け行き、制札の如き大きな板を持つて來て、「お客樣、これを見につかアさいませ。」と差出したのを、旅人は手に取つて見ると、驚くべし、老翁が心を籠めた祈誓文であらうとは。

敬神愛國榊鳥居建立　近藤竹三郎

明治三十七年六月十二日、右同人實父該神へ左記誓願致あり。今回右同人負傷せしも輕少なるにより、爲施本日を以て該鳥居建立す。

誓願

一　自身不具になるやも少しも厭はず、竹三郎無事に歸國するに於いては、拙者左の小指と當年五十三歳の女の長髮とを差上げんと決心せり、茲に併せて誓ふもの也。

明治三十七年十月十日　近藤六彌

嗚呼之れを讀んで、子を思ふ親心に泣かざるものがあるか、予を救ひたる義人勇卒近藤竹三郎の父六彌翁は、實にかゝる起誓をしてゐたのである。

神垣に涙手向けて拜むらし
　かへるを待ちし親も妻子も

とは、昭憲皇太后が、靖國社頭に涙ながら額ずる戰死者の遺族を思し召されて詠ませたまひし御歌である。功名手柄して無事凱旋するを待たぬ人はなきに、今は骨となりしを思へば、誰か涙なきものがあらう？　竹三郎無事歸國させたまへと、其の親は指を切り、髮を切らんと祈る心根は如何に哀れではないか。闇にあらねど親心、子ゆゑの道は迷はぬはなしとか。親の情をも知らぬ不孝兒は、この一話を聞いても愧死すべしである。

併し六彌が尊き心も、遂に神明に徹せなかつたか、彼は負傷後傷が癒えて、「戰地へ還る」といつた如く、再び戰地の人となつたが、三十八年三月奉天の北五百牛泉に於いて名譽の戰死を遂げたのである。予は彼れの戰死が旅順でなくて、奉天であつたとは、小原氏を通じて初めて知つたのである。勇士が旅順某所に於ける忠死の状を語ること甚だ詳かなる人があつたが、戰場混雜の際のこととて何かの間違ひであつたらう。しかも此の勇士が、善通寺豫備

病院に於いて傷を養ひつゝあつたといふことは、意外の意外事にして、予は恩人が同じ病舎に起臥してゐたことは夢にも知らず、遂に永の別れとなつてしまつたのである。六彌翁が苦心も、神明の受けたまふところとならずして、竹三郎は死んだ、されど竹三郎は陛下の御爲に立派なる戰死をしたのである。六彌翁は旅人に向ひ強く叫んで、「併し竹アお國の爲に死んだから俺は言はぬ、ナンにも言はん!」といつた。我子を戰場に亡うて、未練も多からう、諦めかねるに違ひない、併し六彌翁の如きは情には脆く、意には堅き人であるといはねばならぬ。

その美しき女は、竹三郎の兄梅吉の妻で、其の名もやさしきさつきといひ親切なる旅の人はいふまでもなく小原君である。さつき女は小原君に向ひ、「竹さんに一つすきなものがありました。ホヽ、何だかをかしいやうですが竹さんは三味線が好きでした。お父さんも、梅さんも『竹! そんなチンゴノカハは止めえ。』と笑ひますと、『いんゲ、大分上手になつたキニのーシ。』と言つて、可笑しな手つきでやつてをりました。マア御覽下さい、アレが竹さんの持つてゐた三味線で御座います。」と柱に掛けた三味線を指すのであつた。「兵隊に行く前の晩に、お酒を飲んで、モウ暫くの間、また三味線を彈けんからというて、夜の十二時過ぎまで彈いてをりました。朝倉の聯隊へ入つてゐるうちに、間もなく戰爭になりまして、到頭戰死したので御座いますから、今ではこれが片身になつたので御座います。」と聲を呑んで追懷の涙を催した。柱にかゝれる竹三郎が遺愛の三味線! 微風檐端を傳ひ來つて弦上を掠むるの時、切々たる響あつて、亡き人が徒然とも聞えるであらうか?

予は過ぎし戰場に、夏草しげき勇士が夢の跡を弔ひつゝ、昔を懷うて、新しき涙を絞り、毀れた砲臺の胸墻の上を叉き、我れを忘れて、やゝ久しく佇んでゐた。

第二十八　懷爐の殼

予はそこらこゝらを彷徨ふうち、一個の壞れた懷爐の殼を拾つた。赤錆びた、無數に穴のあいた、一個の鐵葉板に過ぎぬが、予はこれを見て言ひ知れぬ感に迫つたのである。望臺は一月一日即ち旅順戰の最後の幕を閉ざしたところの戰鬪であつて、これまでは、我が戰死者の死骸も取れなかつた處である。この一個の懷爐! これを懷にせし勇士の死體は、寒い風に吹き曝されながら、戰場に遺棄せられてゐたのでもあらうが、今や戰場の跡には、昔を語るところの名殘の品となつて、勇士が忠死の跡を弔ふかの如く思はれ、予は種々なる聯想を催さずにはゐられなかつた。

コンナことがあつた。ある暗い夜であつた。岩陰で天幕も張らず背負袋を枕にしてコロ〳〵と寢轉びながら聞いてゐると、今日着いたばかりの補充兵が、「上等兵殿、モウすぐにも戰爭の命令が下りませうか?」と何か思ひ出したやうに言ふと、上等兵は、「ウム、そりや無論ぢや。夜が明けん内にまた攻撃ぢや。しつかりやるンだぞ。」とキツパリ言ひ切る。彼の兵は、「そんならモウ此處へ還ることはありませんか?」と問ひ返すと、上等兵は、「還る! 還るどころか、お前! 皆戰死の覺悟ぢや……二度とこゝへは還らぬ決心がないといかん。何か、お前はそれがドウかしたといふのか?」と上等兵の眉

は動いたらう。彼の兵は暫く黙つてゐたが、

「上等兵殿、それぢやモウこゝへは還れませんか？ そんなら私はこゝで襦袢を着換へたうありますが、よろしうありますか？」

上等兵が、「襦袢を着替へになり何になりせい」といふと、彼は大嚢から出て背嚢を解いて白い一枚の襦袢を出した。上等兵はそれを見ながら怪訝な顔をして、「それやドウしたのぢや？」といつた。

彼は白い襦袢を持ち上げたまゝ、「上等兵殿これは国を立ちますときに、母親が面会に来てくれまして、これで長の別れになるかも知れんが、お前が死ぬるときには、これを着て死んでくれといひまして、此のフランネルの襦袢をくれました。私はこれを着て立派に戦死をします……」

「ウン、お前のお母さんは、それを着て死んでくれといつたか……お前はそれを着て戦死をするのか……」と上等兵は[illegible]ながら目をしばたゝいた。

「ハイ上等兵殿、私は戦死します。」

彼が晴い〳〵顔で、白い襦袢を着換へてゐるのを見て、其の健気にも哀れなる心根に泣かざるを得なかつた。フランネルの襦袢！ 戦死の晴着たる一枚のフランネルの襦袢！ 母親が我児のために戦死の晴着を作つた其の裏面には、悲しく、痛ましき消息も潜んでゐるであらう。寒夜に衣を縫ひ、餓ゑたるに衣食を惜し、恩愛の襦袢を我子の手に渡したのでもあらうが、これを着て死んでくれといふ親の心はドウであらうか？ 予は戦場の跡で一個の懐爐を拾つて、これもまた慈父慈母が死に行く我児の懐に入れた恩愛の片身かと思へば、一個の懐爐の紋！ これが唯無意味のすたり物とは思はれなかつた。

予はこゝに予と同日此の望台に倒れた友人久野中尉並びに松村伍長の悲壮なる最期を語りたい。先づ話は出征の時からである。

伊豫行道山の麓、[illegible]村の地内に、真黒に煤つた藁の屋根を被つて、軒も傾いた草葺の一軒家がある。これが松村梅五郎といふ予備兵の家で、人里離れた一軒家である。梅五郎には一人の母親がある。既に長い間の病気で、ベッタリ床についてをる。いふまでもなく、梅五郎が働かなければ一日の糧をも得ることが出来ず、親に薬を薦むることも出来ぬ。

今日も彼は野良から鍬を担いで帰つて来て、草鞋を解いて納屋の柱にかけ、鍬を仕舞つて、裏の筧の水で足を洗ひ、爪先に下駄を引つかけながら内へ入つて来て、「お母さん今帰つたぞナ。ナンにも変つたことはないかナ。」といふと、母親は「アイ〳〵何も変つたことはないぞナ。それはさうと梅や、今日役場の小使さんがお出でてナ、これを置いて行かれたぞナ。小使さんの話に、大変な事になつたんぢやとお言ひだが、梅や、戦でもあれば、おまへも行かんといくまいがナ。」と母親が差出した封書を受取つた。胸を踊らせながら表を見ると、召集令状であつたから、「イエ何！」とそのまゝ懐へ入れて、「まさかサウ早く戦争もあるまいから、ソンナことを心配してはいかんぞナ。」といつて母親の手前を繕つたが、彼はさて困つたことが出来た、ドウしても今夜の中か明日の朝にも出立しなければならんが、此の病母を独り残して、どうしたものかと思案に暮れた。かく思ふのも實に無理はない。兵隊になつた甲斐あつて戦にも行ける、それは嬉しいには嬉しいが、目のあたり病み衰へた親を残して、戦に行かねばならぬ、今の彼の思ひは如何であつたらう？ 彼は

母一人、子一人、自分が立つた後は、誰が此の親を見てくれるか？　杖とも柱とも思ふ自分が死んだら、後はドウなるか？　と考へられずにはゐられぬ。

けれども彼は考へた。何にも知らぬ母親に、今から戰に召されて行きますと言つて、若しものことがあつたら、取り返しがつかぬ、不孝には不孝であるが、これは怨じ何も打ち明けずに行かうと決心したのは、何たる惨たらしいことであらう。

其の夜は裏の欅の森に、コー〳〵と夜啼きする怪鳥の聲を聞きながら、破れ障子の隙間から洩れ來る夜寒の風に身を震はせつゝ、母親の肩を撫でたり藥を煎じたりした。母親が眼を覺まして、「伜や、モウお休みんか。」といつても、「今やすみます。」といひ〳〵横にもならず看護する彼の胸中は奈何であつたらう。あれやこれやと過去を思ひ行末を思ひ、この白屋に病母を殘して行かねばならぬ彼は幾度か涙を啜つたことであらう。

梅五郎は、予が士官候補生として入隊したとき、新兵で同中隊へ入營した、素直な、そして元氣のいゝ兵士であつたから、衆兵から尊敬を拂はれてゐた。給料も母親に送つてをつたといふことで、いつの間にやら孝行兵士といふ名が、聯隊中の評判になつたくらゐであつた。

一夜はまんじりともせず、其のまゝ夜が明けると、彼は竈の下を焚いて、生別れする悲しき粥を煮るのであつた。庭周りの片付けなどをしてしまつて、何氣なく「お母さん、きのふ役場から、今朝來てくれというたけれ、一寸往つてくるぞナ。」といふと、母親は何も知らずに、「アイアイ、往つておいでナ。」と快くいつたのを力にして、彼は窶れた母の顔を見詰めながら、これがこの世の暇乞であるかと思へば、胸も張りさくばかりなるを、神様、佛様の御助けによる外に途は無い。」と思つて力なく庭に下りた。草鞋を穿いて敷居を出たが、母にはこれが永の御別れ、此の家も見納めと、涙をハラ〳〵と落した。

あはれ、梅五郎は戰の門出に一言の別れも告げずして、出で行かねばならなかつた。併し彼は徒らに惜別の情に堪へずして泣く女々しい男ではなかつたが、予等は其の情を思うてやらねばならぬ。

彼はトボ〳〵として我家を後にしたが、一足行いては立止り、二足行いては立止りつゝ、拂はれうても拂うても拂ひ難き涙に困じて、效なき露の底深く瞳孔を漂はすのであつた。そしてドウセ母に知れずにをるものでもなし、此の儘往つてしまへば、後で母がドンナにか殘念に思ふであらうと思ふと、彼はたまらなくなつて、再び我家へ戻つた。裏へ廻り、忍び足で、戸の隙間から覗いて見ると、窶れた母親の、淋しさうに、薄い蒲團を被つて寢て居る姿が見えたので、彼は胸が迫つて、母に打ち明けようと思つた折角の決心も又た挫けてしまひ、トウ〳〵何一言の暇乞もせず、意を決して出發した。アアこの別れこそ、親子一世の生別、また死別であつた。

彼は役場で受取つた旅費を、郵便で皆母に送つてしまひ、船便もありながら船にも乘らず、車もありながら、車にも乘らず、三十餘里の山坂を驅りとほし、食ふものなければ、岩間の水を掬ひて渇を醫し、根盡きて倒れんとしたことも幾度かあつた。後に心が殘らぬでもなけれども、集合時日に遲れては一大事と、晝夜の區別なく山坂を通して驅つた。峠や、森や、河原や、村々を過ぎて暗中を馳せつゝあつた彼を思ふと不

憫に堪へぬ。

　松山なる予の聯隊へ到着したのは、丁度夜半であつたので、ドウすることも出來ず、知つた人を尋ねようかとも思つたが、それもドウかと、營門の前を、あちら、行つたりこちらへ行つたりしてゐるところへ、丁度營門を出て來た將校があつた。巡察將校と見え、赤い提灯を下げてゐたが、歩哨に何か一言二言いつて、直ぐに足を右の方へ向けて行き過ぎようとしたので、梅五郎はツカ〳〵と走り寄り「モシ〳〵一寸お尋ねいたします。」と呼びとめて、「今夜はモウ入られますまいか。」といふと、將校は提灯を高く上げて彼れの顏を見ると驚いて、

「松村上等兵ぢやないか？」

「ハア久野少尉殿ですか？」

「オー暫くぢやノー、よくやつて來た！」

「ハイ」と彼はなつかしさうに久野少尉を見上げて、早や涙が瀧の如く頬に傳はつた。

　暗い營門の前で、赤い提灯を中にして、久野少尉と松村上等兵とは立ち話をしてゐたが、久野少尉は腕を組んで始終「ウンさうか！　さうか！」といつてをつた。松村上等兵は少尉殿に逢つて嬉しいといふことを何遍となく言つた。

「兎も角おれの中隊へやつて來い。」と、久野少尉の後について營門を入つた松村上等兵は、第四中隊の一員に加へられることになつた。感慨多き一夜を明かして、明くる朝、梅五郎は、「お知らせせずに參りましたは私が惡う御座いました。今となつて見ますれば、なぜ一言申上げなかつたかと殘念に思ひます。私は今から戰爭にまゐります。立派な手柄を立てますから安心して下さい、どうぞ達者でゐて下さい。」と母親に手紙を書いて、それを村役場へ送り、母親に讀んで聞かせてやつて下されと頼んだ。孝行兵士松村梅五郎は斯くの如くして出征したのである。

　八月二十四日の夜が引き明けると間もなく、盤龍山東砲臺の坂を登つて行く五人の一隊があつた。彼等は少し登つて、道が右と左とに分れてをるところの岐路の辻に立ち止つて、何か立ち話をしてゐるやうであつた。この岐路の右するものは彈丸が中らんが、左するものは必ず打たれるといふことを、誰いふとなしに言ひ傳へてをつたところである。コンナことはよく言つてをつたものであつて、いつの間にやら兵士間の申送りともなつてゐたのである。旅順の或る露軍の看護婦がコンナ話をしたことがある。「彈丸の中る中らんは、全く運不運である。ある時暫く振りに郷里の兵士に町で逢つたから、一言二言挨拶してゐる中に、砲彈が飛んで來て、妾には中らんで、其の兵士は地上に斃れた。妾は呆氣に取られて、どうしたらいゝかと思つたが、致し方もないから司令部へ知らせて、死骸を棺に入れようとすると、何事ぞ、また砲彈が飛んで來て棺を打ち碎いた。そして妾には何事もなかつた。どこまで彈丸に追つ駈けられる運の惡い人だらう。」といつたことがあるが、不思議な運命の支配者は實に彈丸である。

　ドンナ相談が纏つたか、彼の一隊が動き始めたと見ると、右の道を行つたものは四人、左の道――彈丸に打たれる道を取つたものは唯一人であつた。此の一人は東砲臺を踰えて、支那圍壁の側まで來ると立ち止つて、右を向いたり、左を向いたりしてゐたが、やがて小さい、併し力のある聲で「久野中尉殿……」と聲を掛けた。すると、直ぐ右手に當つて、「オーイ」と地の底からでも起つたやうな小さな聲が聞えたから、

「居られましたか？」と死者や傷者を飛び越して行き、「中尉殿！　やられましたか？」といきなり中尉の體を抱いた。

「ウン松村か……やられたぞ！」

松村伍長は實に屈指の勇士で、これまでに幾度か立派な手柄を立てたのである。「戰鬪止むとき無し、彈丸豆を炒るが如し。」などと書いて或る人に手紙を送つたといふこともあつたが、之れを見てもその人物の一端が窺ひ知らるるのである。伍長はある特別な任務を受けて、此の朝の攻撃に與からず、翌朝になつて歸つて見ると、聯隊は昨夕全滅したと聞いて吃驚し、「久野中尉は？」と聞いたら「何が何だか分らなくなつてしまつたから、無論戰死せられたであらう。」といふものもあつたので、之れを聞くと、松村伍長は何思ふ暇もなく、危險を懼れず、戰場に久野中尉を搜索して此處まで來たのである。

「中尉殿！　しつかりして下さい。」

「松村！　ドウしてコンナ處まで來たのか……お前は早く後へ下れ。」といひ終るか終らぬ途端に、「ウーン」と伍長は中尉の上に倒れかゝつた。

「やられたか？」

「イヤ大丈夫であります。」

「どこかやられたらう？」

「少しやられたやうであります。」と伍長は胸を押へた。

「ひどいか？」

「イヤ、タイしたことはないやうであります。それより中尉殿はドウでありますか？」

「おれか……おれも大丈夫ぢや。」といふうちに、

「ウーン」とまた唸つたから、

「中尉殿、苦しうありますか。氣をしつかり持つて下さい……」と伍長はオロ〱聲でいつた。

久野中尉は、

「イヤ大丈夫だよ、心配するな。」といつたが、何を思ひ出したか、

「松村！　お前はいつぞや營門の前で、お前の母親が病氣で寢てゐるといつたナウ」といふと、

「ハイ」と答へたきり、伍長は中尉の胸に顏を伏せて、太き溜息を吐くのであつた。彼の耳には欅の森で鳴く梟の音が聞えたであらう。彼の眼前には、軒の傾いた荒屋が現はれたであらう。薄い蒲團にくるまつて寢てゐる、窶れた母の顏がアリ〱と浮んだであらう。中尉は頭を少し擡げて、伍長の顏を見ながら、

「松村！　おれも母親一人しかないのぢや。」といふと、伍長は夢から醒めたやうに、

「さうで……ありますか？」と驚いて答へた。すると久野中尉は手に持つた軍刀をあげて、

「松村！　おれはモウ駄目ぢやから、若しお前が命があつたら、この軍刀を取つて歸つて、片身ぢやといふて、おれの母に渡してくれ。さうしてカウいふところで立派に戰死したといふことを、よく聞かしてやつてくれ。」と、中尉の頰には涙が傳はるのであつた。

「ハイ……中尉殿……氣をしつかりして下さい。松村に若し命があつたら、中尉殿の片身を持つて歸りもしませうが、中尉殿！　中尉殿が亡くなられた後は、松村は誰をたよりにしませう……」

「松村……」と二人は手を取つて泣いた。

忽ち天から降つたか、地から湧いたか、轟然たる爆音がすると、白煙濛々として戰場を掩ひ、硝煙の散じたる後には、「久野中尉殿……」と聲を限りに叫ぶ松村伍長の聲のみ寂寞を破つて、哀れにまた物淒く響いた。松村伍長も亦日

ならずして野戰病院に於いて、久野中尉の跡を追うて逝いた。母一人子一人の久野、松村主從は、かくして戰場の露と消えたのである。

かやうな有様で、聯隊は一夜に全滅してしまつたが、敵壘下僅かに數間の地にころがつてゐた瀕死者、負傷者、生存者は話すにも話されぬ無殘なものであつた。戰場にはカン／＼とした夏の日が照りつけて、何物も日を遮ることもなく、石も砂も、草も、火の如く熱して、死者は既に護謨の如く膨れて、服も張り裂けんばかりになり、今にも腐肉が崩れ落ちんとしてゐた。蛆は早や目にも鼻にも湧いてをつた。健康者は銃劍を以て穴を掘つて身を隱蔽した。既に銃劍なきものは、手で石を寄せあつめて遮蔽を作つた。そして負傷者を連れて來て、其の中に身を蔽うてやるものもあつた。けれども動くものは忽ち敵に發見せられて狙撃を受けるのであつたから、一握の砂を掬ひ取るにも、一塊の石を動かすにも、並大抵の苦心ではなかつた。重傷者の如きは、苦悶の餘り手足を動かすので、戰友は彼等を抱いて其の手を制し、其の足を押へて、僅かに敵の狙撃を避けたといふ實に慘らしい光景であつた。されど負傷者の多くは退くに退かれず、動くに動かれず、カン／＼と照りつける日を頭に浴びて、動きもならず、息を殺して夜の到るのを待つのであるから、命の水を得る手段の如きは、無論無かつたのである。そして水筒の水を飲み干して後は、最早如何ともすること能はず、甚だしきは唇を地に接して他兵の小便を泥のまゝ啜つて、漸く渇を醫したものもあつたのである。大小便も負傷者が相重つた其のまゝするといふ始末で、臭氣と血と汗と――地獄といふものあらば、これが地獄か、何事も實に涙の出るやうなことばかりであつた。この悲絶慘絶なる潛伏中には、敵の爲にムザ／＼と刺し殺されたものも澤山あつた。抵抗力なき負傷兵は、暴戻惡逆なる敵兵を睨んで幾人無念の死を遂げたかも知れんのである。

第二十九　人道の敵

日既に落れて、殘光馬背に落ち、暮雲アカシヤの上に懸りて、風物凄然たるころ、予が馬車は兵營の並木に馳せて、小田君の官舎へ歸つた。

予は、露軍が一月一日、驚くべき大破壞を以て、根本的に顚覆したる東鷄冠山の跡を訪ひ、また北砲臺、望臺、二龍山、松樹山を歷踏して其の日は歸つた。歸ると間もなく予に面會を求めるものがあつた。宮内曹長といつて、曾て予の部下となつて第一回總攻擊の當時、東鷄冠山及び望臺を突擊した一人で、めづらしく生き殘つた勇士である。曹長は旅順へ來て、朝夕思ひ出の多い山や堡壘を見るのに加へて、戰友の殆んど總てが死んだ七回忌の其の日に、予と會つたといふのも更に感慨が深かつたらう。予もまた處もあらうに旅順で、予の部下でありしところの勇士に廻り會ふといふのも、これも死んだ戰友の引合せであらうと、嬉しくもあり、悲しくもあり、無限の情を催した。砲臺の殘壘に立つて泣いた予は、忽ちに又かゝる人に出會つて、更に涙を增すかと思ふと――感慨無量の語も幾度繰り返すか知れぬが――予は實に無量の感慨に胸を刺された。

曹長は當年のことを思ひ出しつゝ眉宇に涙を宿し、愁然として語るやう、彼は中隊長戰死後、代つて前進の令を下したる予の號令を聞い

てから間もなく負傷した。繃帯所へ下ると、軈て死體の如き予が運ばれて来たので、予の名を呼び、予の口に水を嚥めたが、木像の如くになつて動かぬ姿を見て、最早此の世の人とは思へなかつたなどと、予の死體が血に漂ひつゝ擔架に載せられて、河原の上に運ばれて来た當時そのまゝのことを、予の姿を凝視しつゝ語るのであつた。

予は戰後時々、予を繃帯したことがあるの、いつしよに北砲臺の地隙で斃れてをつたのといふやうな人に逢うたことがある。また或る時は、予が戰線で斃れて自ら繃帯した、その最初の三角繃帯を野戰病院で解いてくれた人があつて、其の繃帯が見事に血に染んで、一點の白い素地の取りのけもないほどであつたので、それを記念として保存してゐるといふ人にも會つた。當時死人同様であつた予を憐むのあまり、敵彈下に危険を恐れず、自己の負傷を忘れて予を安全の地に移し、或は予に繃帯を施したる戰友諸君もあつたらう。予が今日在るを得たるは、全く諸君恩惠の賜物であつて、深く銘肝して忘るる能はざるところであるが、併し、途上其の人に逢ふとも、遂に予と如何なる縁故があるか知らずに過ぐることも多いであらう。予は之れを頗る遺憾に思ふので、こゝに本書を編するの機會を以て、戰友諸君に厚き感謝の辭を捧げ、而して健康と幸福との諸君の上に在らんことを祈るのである。

さて宮内曹長は無事に凱旋したが、中隊長川上大尉の後任たる徳武大尉が中隊を率ゐて、高濱より松山兵營に向つて行進しつゝ在ると——最初予等と共に此の街道を通つて出征したものは殆んど盡きてしまつて、見慣れぬ人が打連れて歸るのではあつたが、——同じ第十二中隊と聞いて、川上未亡人は大尉の遺兒鐵夫君を抱いて、徳武大尉の前に至り、

「鐵夫！　お父さんがお歸りになつたよ。」と泣く泣くいふと、大尉も心ある人であるから、すぐ鐵夫君を抱き上げて、

「坊や、よく待つてゐた。お父さんは歸つたよ。」と右手に戰場で敵の首を斬つた軍刀を肩にし、左手には鐵夫君を抱いて行進した。何も知らぬ鐵夫君は父か——父ならぬ人に抱かれ、小さき手を大尉の帽子より高く擧げて、嬉々としてゐる姿を見て、夫人は素より、見るもの皆袖を絞らざるはなかつた。之れを大尉の側に在つて行進しつゝあつた曹長が見て、覺えず貰ひ泣きをしたといふことを話したが、繪のやうに美しい此の一幅の光景——右に斬魔の劍を提げ、左に頑是なき孤兒を抱くの狀を想像すれば、何事も戰爭の後とはいひながら、予は爲に斷腸の情に堪へぬのである。

曹長はまたコンナ話もした。負傷して仆れてゐると、そこに一工兵卒があつて露兵と格鬪しつゝあつたが、拳銃で右上膊を打たれたけれども、勇敢なる我兵は屈せず、拳銃を手から離さんとすると、露兵は我兵の左腕に牙のやうな齒を以て嚙みついた。腕も千切れてしまふかと思つたが、我が工兵は怒髪天を衝くの勢でそこにあつた大きな石塊を振り上げて露兵の頭に喰はしたから、ウンといつて踏反り返るところを靴で蹴飛ばし、角の立つた鋼鐵のやうな石で叩いて〱叩き潰したから、頭がメチヤ〱に碎けて脳味噌が飛び出したのは、勇ましくも、また惨らしい光景であつたさうである。露兵には氣の毒は氣の毒だが、これは格鬪の結果、力が劣つたのだから仕方がない。

露兵の勇敢なることは既に之れを述べたが、こゝに曹長の實見としての話によつて、皆忠

すべき露兵の行爲に就いても、また之れを述べて置からうと思ふ。負傷兵が僵れて居ると、憎むべき露兵は一々足で蹴つて見て、動くのがあると、鋭い銃劍で芋を刺すやうに突き刺して廻つてゐるのがあつた。すんでの事に曹長も刺されるところであつたさうである。かゝる憎むべき行爲――抵抗力のないものを弄り殺しにするやうな非文明の行爲は、予も曾て之れを目擊して悲憤に堪へなかつたことがあるが、實に無法なことをすればするものである。是れ獨り頑迷無智なる露兵の蠻行のみとはいへないのである。現に露軍の某旅團は負傷して橫臥せる日本兵を刺せとの命令を發してゐたのである。是れ露兵が蠻行を敢てしたことを最も明瞭に、最も確的に、自己が證明したもので、最早疑念を挾むの餘地はない。命令の意は、攻擊前進に當り、橫臥したる日本兵、特に仰臥する者に遭遇せば、必ず之れを刺殺すべし、如何となれば日本兵は負傷者の眞似を僞して、散兵を通過せしめたる後背後より射擊することあればなりといふのである。かゝるありさうにもない理由の下に、創痍に苦しめる憫むべき傷者――全く抵抗をなし得ざる戰鬪者に對して危害を加へんとするは如何なることであるか。かゝる殘忍非道なる行爲を以て、天理、人道に悖らずとするのであるか。天には神の照覽するあり、因果は自然の法則なり、いつまでかゝる非行を見遁すべき。果然あのやうな結果にも終つたではないか。

若し日本兵にして死屍たるを裝ひ、或は負傷者たる眞似をなして敵を欺き之れを不意に攻擊する如き奇計を弄したるものありとせば、これ或は正當の手段にあらざるを以て、露軍は當然其の非行者を捕へて嚴罰し、又は復讐するの權利もあるものと言はねばならぬ。然るに戰場に橫たはれる總ての負傷者を殘殺したる後、此の如き殘殺が何故に行はれたかは、對手國の得て知り難き所に屬するを以て、要するに負傷者を刺すが如き手段は復讐の目的に適はざる卑劣手段であつて、之れを赦すべからざることとは、最早多言を費すの必要が無い。また我兵の或者は、露軍の赤十字旗の下に收容せられたる後、生存してありながらも殺せられたものがある。また或る負傷者は眼球を抉られた。また或者は手足を切離され、耳を削がれた。かゝる虎狼に等しき人道を無視した殘酷なる事實は、蓋し戰役を通じて各處にあつたらうと思ふ。多數の兵卒のことであるから、或は一時の憤激に驅られて、非行に及ぶ者が無いとも限らぬ。時には事情の酌量すべきものがないでもなからう。併し苟も一部隊を指揮する司令官が、公然文明戰爭の法規に違反する命令を發し、部下將卒をして之れに賴らしめたに至つては、其の罪の大なる、二三兵卒の非行とは同日の談で無い。クロパトキン將軍は、日本軍の負傷兵、又は捕虜を待つに對等の禮を以てし、日本兵の死者に對しては軍葬を施し、また其の重傷者に對しては、露國兵と同樣の厚遇を與ふべきの命令を發したといふくらゐであるから、固より大いに其の厚意を諒とせなければならぬが、併しあのやうな蠻行の事實があつて見れば、露軍全體は世界の公義人道の大名分に對し、決して其の責を免るゝことの出來ぬものである。

予は今に及んで露軍の卑劣行爲等に就いて多くを言ふことを欲しない。寧ろ露軍に就いて學ぶべきところ頗る多きことを思うて、流石に世界の强者として之れを推すことに躊躇せぬものであるが、此の項を終はるに臨みて、更に

一事を加へて置きたいと思ふのは、露軍が彼のダムダム彈を使用したことに就いてである。予は露軍の使用したるダムダム彈を見たのみならず、予が右手に蒙つたる一發の彈創は、正しくダムダム彈であるとの鑑定であつたから、一矢を報いて置かなければならぬ。ダムダム彈は亞弗利加の猛獸狩に使用すべき彈丸で、製造元は亞米利加である。猛獸狩の彈丸を打つてよこすのも、隨分亂暴だが、併し日本兵を猛獸に見立てたと思へば腹も立たぬ。ダムダム彈は被筒の無き鉛彈で、其の創痕は頗る痛ましく、人體に竄入すると、彈丸は小さなる破片に飛散して、全く原形を存せざるに至るものである。それが、骨幹等の堅硬なる物體に衝突するときは忽ち爆裂作用を起して、四面八方の組織中に灼熱せられたる鉛の破片を飛散するが故に、實に憎むべき恐るべき慘劇を演ずるのである。これが顏などに中つて、口が一文字に耳まで裂けたものがある。鼻に大きな窓があいて、咽喉の奧まで見えるやうになつたのもある。憎むべきはダムダム彈で、露軍はかゝる毒彈を以て、正式の武器として使用したるには非ずして、武器の不足よりして、非道と知りつゝ之れを使用したといふことであるが、一發を使用するも、百萬發を使用するも、其の憎惡すべき毒敵手段に至つては同一であつて、虐殺と何の擇ぶところが無いのである。

第三十　死の隧道

第一回總攻擊に於いて攻擊を擧行したる東鷄冠山、同北砲臺、吉永砲臺、二龍山、松樹山、海鼠山及び二百三高地の一部が皆失敗に歸し、また攻擊を續行することの難きに至りたるを以て、軍は其の後正攻法により、攻路を掘開しつつ、九月十九日より同二十二日に亙る第二回の總攻擊を行ふに至つた。第二回に於いては、中央縱隊即ち第一師團の一部が龍眼北方堡壘に向つて奪ひ合戰をして、之れを占領したるに止まり、概ね眞面目の攻擊を避けた。この砲壘は水源保護のために設けられた、一名クロパトキン砲臺と稱するものである。十月十三日の夜を以て、遂に龍眼に於ける水源の杜絕をなして、旅順水道の水口を塞いでしまつた。併し貯水池砲臺が日本軍に歸した後でも、旅順では左程水に不自由を感じなかつたといふものは、これより先き市中到る處に井戸を掘らしたから、これによりて飲料水の供給を得て餘りあつたのである。食料に窮乏した旅順も、水に就いての苦痛は殆んど之れを聞かなかつた。予は旅順で露軍の使用した穿井器なるものを見たが、頗る完全したもののやうに思つた。

クロパトキン砲臺の攻擊には、第九師團も千餘人の死傷者を生じ、凹字形山、千大山及び第一回總攻擊のを合はせると、裕に一萬千五百の兵員を減じて、一聯隊僅かに混成の三個中隊を編成したといふ有樣になつたのである。第一回總攻擊以來の日本兵の死骸は、夥しく堡壘前に放擲せられ、中にも望臺、盤龍山、東鷄冠山の間が最も多く、蟲聲草間に唧々たるところ、秋月冷かに天に懸るところ、腐肉累積し、惡臭堪へ難きがため、露軍は石炭酸を撒布して、僅かに之れを防ぎつゝあつたといふことである。

二百三高地は、既に此の時我が爭奪の目的物となつてをつたのである。九月十九日未明、我軍の野戰重砲は砲擊を開始し、續いて我が野砲も亦砲擊し、その成果を待つて突入すべく、

後備步兵第一聯隊及び同十六聯隊は、攻撃準備陣地に在りて時機を待ちつゝあつたが、連續射撃のまゝ、其の日は徒らに暮れて、敵の掩蓋は一として碎けたものが無かつた。夜に至り、掩蓋の二三個所に破壞口が出來たからして、南聯隊は前進攻撃の途に就いたが、今まで沈默を守りつゝありし守兵は、俄かに立つて機關銃を砲壘上に排列して我が前進路を掃射し、且つ南方諸砲臺より砲火を集中し、また二百三高地の東北方海鼠山よりする敵の銃火は、我が突撃隊を側面より射撃したから、死者踏藉して遂に一人の達するものがない。しかのみならず敵壘下に肉薄したる步兵隊は、敵火のため後方連絡を杜絶せられ、進むに進まれず、退くに退かれぬハメとなり、二十日も暮れ、二十一日も暮れ、徒らに敵の逆襲を蒙りて如何ともする能はず。二十二日に至り、天明大突貫を以て二百三高地の山頂に登つて四方八面を切つて廻り、一大格鬪をやつたが、その突貫の響だけでも、二百三高地は引つ崩れるかと思はれるほどであつたに、遺憾なるかな、敵の爆彈に裂けた我兵の、大の字になつて空中に飛び上るもあれば、石に當りて腦漿の迸るもあり、小銃と機關銃の掃射とによりて、遂に亦高地の上から一時谷地に退却するの止むなきに至つた。而して南聯隊、工兵隊を合して總員僅かに二百、また如何ともすべからざる悲況に陷つた。これ突撃隊が十數回の奮鬪と連續晝夜に亙りて寢食を廢したると、殆んど總ての將校を失ひたると、疲勞、困憊また失望との結果なりとはいへ、殘念至極のことであつた。

秋は早や十月になつて、戰場の荒草荊棘離々として哀れは愈々深かる中に、背後の整頓と攻路の前進とに力めて、こゝに二十六日より第三回總攻撃を擧行するに至つたのである。

第三回總攻撃に於いて、左縱隊の主たる目標たりし東鷄冠山北砲臺は、如何なる情況にあつたか、予は少しく之れを語らうと思ふ。北砲臺は永久築城にして、旅順背面防禦東北正面中最も堅固に編成せられ、砲數二十門、機關銃十數門を備ふるところの難物であつた。

第一回總攻撃の八月二十一日に於いて、工兵隊は電流鐵條網の破壞に成功し、步兵隊の先頭は砲臺の外岸頂に達して日章旗を翻したが、壕の幅廣く、底深く、攜帶橋も架すること能はず、勇敢なる將卒は、壕底に飛下して向岸の斜面に上りたるも、前後左右より機關銃の蒐射を受けて悉く戰死し、殆んど一名の生存者もなかつたのである。第二回總攻撃に於いては、只攻路を進めて右縱隊及び中央縱隊の行動に對する牽制動作をなすに止まつた。九月上旬より起したる攻路は、第三回總攻撃の十月下旬に至つて、延長四千米突に達し、攻路頭に於ける彼我の衝突のため、死傷三百餘名を出だしたが、十月二十三日に至つて敵の外岸頂を去ること實に五十米突まで近接した。この攻路頭の小衝突は、殆んど半時も絶えたことがなかつたのである。十數名より成る敵の決死隊が毎夜堡壘を出で、我が作業兵に向つて襲撃して來るのであるから、敵は拂はねばならず岩を掘つて行かねばならずで、この作業は實に言ふに言はれぬ苦しみがあつたのである。我が攻路が近接すると、敵も油斷をしてはをられぬのであるから、死力を盡して妨害に出掛けて來る。かうなると我も到底尋常の攻路に據ることが出來ぬから、始めて地中に坑道を穿つて前進せんとするの窮策を取らなければならなくなつたのである。敵も之れを知ると、亦地中を傳うて我が作

業を妨害せんと試み、彼我作業兵の工事が進むにつれて、地中で鼻を突き合はしてるやうになり、敵の方で一鍬打つと、こちらの坑路の小石や土が搖れて落ちるやうにもなつた。

我が坑道作業に對して、敵が何時爆破を以て妨害を試みんとも分らんのであるから油斷はならなかつた。そして爆破のために、我が作業兵の死體を遺棄するやうなことがあつてはならんと、長い綱を彼等の足に縛つて前進せしめたといふやうなこともあつた。綱を後で引き手繰ると、ザク／＼にたつた足だけが戻つて來たといふやうな恐ろしいこともあつたのである。足に綱を縛られて行く作業兵の氣持はドンナであつたらう。思うても身震ひがする。二十七日午後一時突如として敵の一大爆破に遭遇し、壯なるかな、我が先頭の作業兵數名は、小肉片だも殘さずして粉碎せられた。しかも何が幸福になるか分らぬもので、敵が此の爆破、無論我が坑道を毀壞したけれども、裝藥の量を過大にしたため、自ら却つて外壕前の鐵條網を破壞し、一大噴火孔を作つて、我軍の探知せんと企てつつありし外岸側防穹窖の奧壁を露出するに至つたのである。明くる二十八日午前一時、我は多量の爆藥を用ひて其の奧壁の外側に裝置し、之れを爆破して破壞口を開いたので、步兵隊に機關銃を持たせて突進せしめた。これぞ我軍が始めて敵の地中に於ける堅壘を破つて突入したのであつて、此の一個の孔を穿つまでの苦心といふものは、實に一通でなかつたのである。いはゞ此の一個の孔を穿たんがために、八月の第一回總攻擊後より二ケ月間、鶴嘴が棒になるまで掘つて掘つて掘り拔いたのである。二十八日夜に入つては、更に大爆破を行つて、七米突の破壞孔を穿ち、秫や土嚢の布に石油を注ぎ、火をつけて此の孔から投げ込んで敵を惱ましたものである。この世からの焦熱地獄は實に旅順の地下に在つたのである。これからしては、土嚢を以て一個の障壁を築き、先きへ先きへと押し進めて、漸次占領區域を擴めつゝあつたのである。而も一日の前進工程僅かに二三尺といふに至つては、果して何れの日に砲臺全部を占領するに至るのであらう。思へば隨分氣の揉める戰であつた。併しこの地下の一障壁を隔てゝ敵と相對することは僅かに四五尺の間に在つて、日夜爆藥を交換し、銃火を交換し、火事場の如き中に在つて戰ひ疲れては、敵も、味方も鼾聲雷の如く、累石、死屍を枕として眠り、目醒めると再び銃を上げて、互に鎬を削つて戰つたといふ有樣である。「オイ、いゝ加減に降參しろ。」などと、敵兵に投降を勸めたこともあり、「日本は此處からどれ程あるか。」などと、露兵が問うたりするやうなこともあつた。或時などは向うからブランディーを投げてよこしたこともあつたから、コチラからは返禮に鑵詰を投げ込んだりして、互に舌鼓を打つて、一盃飲んでは頭を上げてズドンと銃を放し、又た一盃飲んでは放しといふ鹽梅で、酒の肴に銃を放したのか、銃の肴で酒を飲んだのか、悽慘たる死の隧道の中に、美しい人情が流露したことを思ふと、戰爭もまたゆかしいところのあるものではないか。

予が小田君等と北砲臺を訪うて、予が聯隊の破壞したる彼の破壞口から比頓の崩れに傳はつて、穹窖内に潜つて入ると、直ぐ一個の窓からして、砲臺の外壕を窺ふことが出來た。この窓から外壕を見ると丁度其處が壕の曲り角で、屈折した穹窖の外壕に面した窓が見える。そして予が立つたところの窓からして我兵が斜めに七八間先きの穹窖の窓に向つて打つた小銃

弾が、其の窓の周圍を刳り取つて角い窓が形も何もなくなつてしまひ、そのあたり小銃弾の蜂窠ならざるなきを見て、予は愕としたのである。日夜間斷なしに打つた彈丸は、皆敵の機關銃が頭を突き出してゐるところの窓に向つて、鋼鐵の如き比頓製の岩屋を刳つたかと思ふと、根氣も能く續いたものであると、そゞろに當時のことを思うて竦然たらざるを得なかつた。

予は其の窓から外壕に出て、左右を眺めると、素より昔の面影は無いけれども、なほ其の磊々たる比頓の破片、破壊せられたる穹窖の慘状を見て、この壕底に埋まつた勇士のことなど思ひ浮べた。

かゝる苦心を凝した上、十月三十日午後一時を期して、予が聯隊の一大隊は破墻孔より外壕に出でて、砲臺に飛び上がつた。敵の砲身に跨がり大手を擴げて萬歳を叫んだものもあり、銃劒を揮つて敵の中に割込んで行つた勇士もあつたが、皆ばた〳〵とそこに斃れて、また生存者が無くなり、壕の中は死骸を以て滿たされ、血は流れ漂ふといふ有様で、一段落を告げたが、風餐雨蝕七星霜、慘たる記念の北砲臺は、今や荒草茫々の中に殘つてゐるのを見て、訪客は必ずや馬を駐め、襟を濶すであらうと思ふ。我が國民の精神的活記念が、實に遼東の一角に殘存して、斷石、雑草皆當時を偲ぶのよすがたらざるなきを思へば、萬古不滅の靈場たる此の戰跡を永久に保存するの企のありたきものである。年少子弟は是非とも一度は諸戰跡を歴訪して、勇將猛卒が埋骨の地を憑弔するがよい。是れ獨り精神修養上絶大無限の密教たるのみならず、また治に在りて亂を忘れざるの一大教訓に接する所以であると、予は堅く信ずるのである。

其の後の戰闘に於いて破壊したる外岸の崩れを傳つて砲臺の上にあがると、予が乗り捨てた馬車が幌を懸けたまゝ、馭車のニーの居眠りしてゐるのが、前岸の外壕を踰えて向うに見えた。そして右の方の化物堡壘の草原に、騾馬と驢馬の數頭が、アゴー、アゴーといつた風の嘶きを揚げてゐるのが、化物堡壘であるだけに、一層哀れなる感じを惹かれずにはゐなかつた。

化物堡壘といふのは、吉永堡壘より北砲臺に亙る間に設けられたる敵の掩蔽部であるが、いつの間にか誰いふとなしに化物堡壘と呼ぶやうになつた。それには種々の想像説があつたけれども、何れもこれといふ根據のあるものはない。一說にはもと此處には山神を祭つた社があつたのを、露軍が築城の際取り拂つてしまつたところが、其れから不思議なことがあつて、或る時は村長の娘が一夜不意に家を出たきり、二日立つても、三日立つても、歸つて來んので、神隠しに逢つたに違ひないと、鐘や太鼓で旅順の山々谷々を捜し廻つたけれども、トウ〳〵行方が分らなかつた。然るに或る日血痕のついた娘の着物を此の堡壘で發見したといふことである。また一つには苦力が命令に服從しなかつたとかで、ある日雨のしと〳〵とふる中で、露兵が彼を斬つて棄てたのみならず、哀れなる彼れの妻を辱めて、これも斬り棄てたといふことで、それからといふものは、變なことばかり續いて、雨の降る夜は必ず苦力夫婦の亡靈が出るとやらで、その青い顔に血がタラ〳〵と流れ、恨めしげに睨み返す形相といつたら凄いもので、哨兵が目を廻して倒れてゐることもあつたさうだ。予等はこの化物堡壘に時々白煙の揚るのを見たことがあつて、敵の炊事場にしてはあ

まり戰線に近いし、不思議な處であるといつてをつたが、此の不可解な白煙の昇ることからして、我等の間に、いつ誰いふとなしに之れを化物保壘と呼ぶやうになつたのである。また此の保壘に向つて突擊したものの還つて來た例が無いといふので、其の名もついた。噂の化物保壘には如何なる魔性の潛在せしにや。我等は材木の如き手で、日本兵の手と足とを鷲摑みにしてガヂ〱と嚙む怪物の、血の滴る其の恐ろしき口を想像してゐたのである。

この化物堡壘と望臺との附近には、時々奇怪なものが飛び出したことがある。それは日本國旗である。日本軍の手厳しい砲擊から、一時の難を避けんがために、宛も日本軍の步兵が砲臺に肉薄して、國旗を飜してゐるかの如き裝を爲して、砲擊を躊躇させた卑劣手段である。この國旗は今や旅順記念館に保存してある。布地は敷布を應用したものであらう、大きなものである。旗竿は野戰電信の架柱である。正當なる抵抗により、失ひたるところの銃砲器械の如きは致し方がないとしても、かゝる卑劣なる記念物の永く後世に傳へらるゝことは、那許り露軍の苦痛とするところであらうか！ さればこそ人間は眞直な行ひをしたいものである。因果は覿面、未來永劫、此の武士からざる行爲が、世界の人の胸に刻まれてゐるであらう。かゝる公法を無視したる化物國旗も、化物堡壘であればこそ出られもしたので、滅多な處から飛び出された譯のものではない。

第三十一　青年の國

あの山陰に一團、この山腹に一團、孤雁秋月を渡るの時、將士皆眼を閉ぢ、脣を嚙み、衣の袖を濡しつゝ、この先の如何になり行くかを憂ひ、悲憤の涙に暮れてゐたのである。旅順の歷史は實に無念の歷史で、堅壘の前に劍を抱いて泣いた將卒は、當年の事を懷ふ每に、轉た襟の寒さを覺ゆるであらう。

諸ともに見ばやと思ふ人はみな
苔の下なり秋の夜の月
（稅所敦子）

予等はこの情で泣いてをつた。秋とはいへ、滿洲はもう寒い、切るやうな風が吹く。生殘りの兵士が石塀を拵へて、中に五六人づつ入つて、寒さを凌ぎつゝ、トロ〱と眠るかと思へば、また夢が醒め、氷の如き秋天の月を眺めつつ身震ひをしてゐた。

第一回、第二回、第三回、總攻擊の失敗よりして、軍の狀況は最も痛心すべき狀況に陷つた。敵の第二太平洋艦隊即ちバルチック艦隊が本國リボーを發し、世界史上未だ曾て聞かざる大膽なる航海の途に上つたことと、北方に於ては沙河會戰後、露軍が續々增援隊を送りつゝあつて、其の來着するを俟ち、大擧して攻擊移轉をなさんと計畫せることとの此の二つの重大事件が伴つて來たため、我軍は其の發展如何によつて或は悲しむべき戰況に立ち至らんとも限らぬことになつたのである。即ち露軍は海陸兩方面に優勢を加へつゝある時に際して、我軍前面の狀況が依然たるに於いては、懸絲の運命に立ち至らしめたる要塞をして、俄かに活氣を呈せしむるに至るであらう。砲臺の一突角を占領せんとするにさへ、幾何大の犧牲を供したかも知れぬのに、ましてや、一度活力を要塞に與ふるに於いては、この先たとひ幾年を費すとも、たとひ幾萬人を殺すとも、之れを手中に收めることは出來ぬかもしれぬ。否久遂

に如何なる手段を盡すとも、之れを拔くことが出來ぬであらう、そして世界の物笑ひの種を貽すでもあらうかと思へば、其の時ほど心を痛めたことはない。

十一月二十六日には中村少將が特別豫備隊なるものを指揮して、皆白襷をかけ、要塞内部に突入する目的を以て松樹山に向つて突擊したが、これも不成功に終つてしまつた。當時中村少將の下したる命令は、涙なくては讀み難きものである。一人の生還するもの斷じてあるべからず、本職の次には、第二指揮官として某聯隊長を、第三指揮官としては某聯隊長を豫定するといふやうな、豫め自己に代るべき指揮官を定めたるなど、以て當時の悲慘なる狀況を察することが出來る。

併し要塞の守兵は自己の前後にかゝる優勢なる增援隊の來りつゝあることを知る筈は無論ない。最早要塞に對する希望も、半ばは之れを放棄してをつたかも知れぬが、遂に之れを口に出すものはなかつた。併しこゝに露軍のため最も痛心すべき一大事件が起つて來たといふものは、食料品の缺乏を來したことである。中にも肉類は七月下旬よりは全く之れを口にすることが出來なくなつたので、八月に入つてから、止むを得ず軍馬を屠つて食ふに至つた。籠城の守兵が馬を屠つて食ひ、其の血を啜つて命を繫いだなどとは、昔の戰記で讀んだことだが、それが現に旅順にもあつて、八月以降は肉といへば馬に限つたものであつたさうだ。尤も十月初めより要塞の支持も已に困難を訴へ、砲彈缺乏のため、所望の射擊を行ふことが出來なかつた。併し假令糧食缺乏の爲に守兵の體力が漸次衰弱して戰線に立つこと能はざるものを夥しく生じ、從つて病者も續出するに至つたにしろ、かゝる理由の下に大帝國の要塞が日本軍に降伏しようなどとは、露軍は夢にも思つてゐなかつたのである。

肉類の缺乏と共に野菜の缺乏はまた非常であつた。旅順には空地が尠い、畑地などはあまり見られぬところである。それで野菜は日本軍の攻圍を受くる以前、要塞前地に在る土人に委囑して耕作させてあつたが、運の惡いときにはどこまでも惡いもので、丁度收穫期に、その地區が悉く日本軍の占領區域内にはひつてしまつたため、折角骨折つて作つた野菜を日本軍に獻上してしまつたといふやうなことになつたのは、可笑しな譯だつたが、これ以來露軍の野菜缺乏といふことは、想像より甚しいものがあつた。これまでは海上よりの密輸入で多少は凌いでをつたが、八月旅順沖の海戰後、この絲のやうな命の綱が切れてしまつてからは、最早どうにも動きが取れなくなつた。

日本軍には乾燥野菜といふものがあつて、牛蒡、胡蘿蔔、甘藷、馬鈴薯、里芋、蓮根、慈姑南瓜、百合などの、いづれも石のやうに固まつたものがあつたが、露軍はかゝる調法なものを持つてゐなかつたかのやうに見える。

人間が野菜を斷つと壞血病といふ恐ろしい病氣に冒される。難破船が救助されて、船員が今にも死にさうになつてゐたのを、ある氣の利いたものがあつて、玉葱の汁を飮ましたら、見る見る内に元氣を恢復したといふ話もある。旅順戰では露軍も壞血病といふ日本軍以外の一大勁敵を控へて非常に難儀したのである。兵卒は野菜を食はずとも生命を失ふことなしなどといつて、テンから菜園などを設ける考へがなく、野菜缺乏といふ事實が迫つてから、初めてビックリしたものもあつたが、モウ後の祭りで手のつけやうがなかつた。幾萬金を出しても

菜っ葉一株も買へないやうなハメになつて、開城のときには黄金の鉢に大根が植ゑてあるなどといふ珍事があつたさうである。この盆栽のやうな大根鉢を朝夕眺めて、萬一の用意にしてをつたものと見える。ステッセルも開城の時、「壞血病といへる無慈悲なる一勁敵は、更に我が要塞に侵入し、兵士の冒險心、耐忍力は殆んど底止する所を知らざるにも拘らず、遂に如何ともすること能はざるに至れり。」といつてをる。即ち旅順開城の一原因は糧食缺乏殊に野菜の缺乏にあつたことはいふまでもなく、日本兵に震へ上つて、菜のやうに青くなつた露兵君も、しまひにはモヤシのやうにヘロヘロになつたかと思ふと全く氣の毒である。

要塞の糧食を食ふのは自分で砲臺を齧るのと同樣で、要塞の命數はこれ一つでも定まるくらゐのものである。併し旅順では、守兵が皆能く戰つて、能く死んだから、開城前には、夫れでもまだ一ケ月を支ふるに足るだけの糧食を持つてゐた。十二月二十九日夜の將官會議に於いて、ステッセルは健康兵僅かに八千を餘すのみにして、最早今日の場合日本軍に抗するの餘力無し、要塞の運命を決すべきの時機到來せるに非ざるなきやと告げたとき、開城を可とするものは、守兵の缺損の夥しきこと、友軍の救援頼むに足らざることを以てしたが、スミルノフは、「守兵の數三分の一に減じ、彈半數を減じ、糧食僅かに一ケ月を支持するに足るが如き情況は、要塞を防禦する者の豫期せる所なり。第一線の防禦難きに至らば第二線に退くべし、第二線難きに至らば第三線に退くべし。吾人が開城を決するは、單に糧食の多少如何にあるのみ。」といつて聽かなかつた。遂に極力抵抗を繼續するの意見に歸したが、ステッセルも亦た其の意氣を壯なりとして、一場の悲痛なる訓示を與へたといふことである。一ケ月を支ふるの糧食を有してをりながら、何故數日を出でずして、旅順は開城するに至つたであらうか、予は最早多くを語るに忍びぬ。いふまでもなく、此の會議に於いて、既に開城の意見は期せずして、有力なる將軍の頭にあつたのであらう。

此の會議のとき、極東赤十字總長陸軍中將バラショーフの意見が頗る重きをなしてゐたといふことである。バラショーフ將軍は、耳の遠い人であつたが、非常な健啖家で、將校が馬車で驅けつけてゐるのを見ては、厭な顏をしたり、若い士官が夜更までトランプを鬪はしてゐるのを見ては、これでは、露軍も負けるに極つたといつて、ひどく憤慨してをつたといふことである。將官會議の席上で、日本は青年の國であるといつて、大いに警告を與へたのみならず、一隊の指揮官をつかまへて、いゝ、あなた等は軍人だから死にたからう、老鐵山へ立籠つて死守もしたからう、併し人道といふことについても、一考はして置いてもらひたいといつたとやらで、この一言がひどく將軍達の耳に應へたとみえて、開城の一動機ともなつてをるといふ噂である。

籠城して居つた或人に聞くのに、肉や野菜は非常に缺乏したが、酒はイクラでもあつた。併しビールは尠かつたといふことである。肉一斤が五圓したこともあつた。麪麭一斤十五錢くらゐはしてゐた。鷄一羽が十五圓から二十圓まででしたなどは、隨分亂暴な話である。[illegible]湯が一圓、別仕立の[illegible]代十五圓也[illegible]に驚いたものである。軍人は手當がよくて、平素[illegible]りの者は十倍の[illegible]。[illegible]千圓貰へるといふ[illegible]から、[illegible]も

いゝに違ひなからうが、から無茶苦茶な値段では茶の一ぱいもウカ〳〵は飲まれぬ仕儀であつた。それでも露人は「構はぬ、仕方が無い。」といつて我慢してをつた。これが日本なら、すぐに「困つたなア。」といふところであるが、露人はさうは決して言はない、露人ほど「どうでもいゝ」といつてすましてゐる人間はない。露人は何かといふと「ニイチェオ」どうでもいゝといつてゐる。「道へ水を撒いてはどうか。」と巡査がいふと、「どうでもいゝ今に神様が雨を降らすだらう。」などといつて澄ましてゐる。食ふに困つてもどうでもいゝ、戰に敗けてもどうでもいゝ、ドウにも致し方が無いなどと思つてをるから、ノンキなものであるが、そこにまた豪いところもあるやうに思はれる。

第三十二　腕の電柱

二百三高地の石を割つたら血が出るとは、ありさうな話である。まさか血も出まいが、二百三高地は、彼我の兵二萬人の死傷者を作つたところで全山血に浮いたのであるから、石から血も出さうなはずである。十一月二十六日より十二月六日に至る間、即ち第四回總攻撃の大部は主として二百三高地の戰闘であつたが、予は最早多くの戰況を語るまい。一體戰闘といへば、彈丸が飛んで來る、石が飛ぶ、コロリと轉ける負傷者もあれば、ウーンと踏反つて死ぬものもある、大戰であらうが、小戰であらうが、之れにはかはりはない、唯その彈丸の分量やコロリやウーンの數が增加するのみである。二百三高地の名を聞いても身震ひしたくらゐであるから、如何なる慘劇を演じたかは、最早繰り返すの必要を認めぬ。旅順では人間の命が安かつた。人間もコンナに脆く死ぬものかと思ふと不審なくらゐである。實に死骸を珍らしがるのも、まだ一人か二人のときで、カウ山一面死骸で埋まるやうになつては、大根か芋かが轉がつてゐるよりも、何感覺を引かなくなるものだ。

予が旅順第二日の訪問は、二百三高地であつた。この日から少し遠廻りをしてニーの馬車を驅らしめたため、二百三高地の麓へ來た頃は、ニーが四五間づつ行つては馬を駐め、後を振り向いては何かモジャ〳〵と頻りに喋つて、プン〳〵腹を立てゝゐるので、初めの中は何の事だか分らなかつたが、漸く豫定よりも大分遠廻をしたので、約束の賃金を增してくれといふ、途中での催促であることが分つた。ヨロシイヨロシイといつてやつても、中々安心が出來ぬとみえて、幾回となく馬を駐める、しまひにはモウ馬を動かさぬと來たので、閉口してしまつた。金を前渡しすれば、いゝ加減な苦情をつけて、可なりな頃に馬をとめて動かさぬ。後でやるといへば安心しないで、馬を動かさぬ。いかさま困りものはニーである。

二百三高地は戰闘後、死骸の後片付をするに、手のつけやうが無かつたさうである。麓から死骸を引拔くと、ズル〳〵と山の上から死骸が下つて來たといふやうなこともあつたのが二百三高地で、これを聞いても、足の踏みどころも無く、一面に死骸が埋まつたことを想像し得られる。敵の堡壘を爆發しては、我兵もその土砂を引被つて、幾十人ともなく地中に埋まり、また爆發しては埋まり、何回となく引つくり返したので、山の底まで死骸が詰まつてゐるわけである。一雨毎にコロ〳〵と骨が出て來るのもそれがためだ。二百三高地といふ墓場には、こ

れから何百年たつても、日露勇士の骨が盡きて無くなることはあるまい。帽子や外套の切れさへ、七年の今日でもまだ昔のまゝである。朽ちてもをらぬところに、戰後早々の趣きがあつて、壯烈なりし狀を思ひ浮べしめる。

二百三高地の塹壕で思ひ出したが、北砲臺の塹壕で、土中からヌッと突き出てゐる死者の腕に電話線の卷きつけてあつたことがある。この一事を以て既に戰鬪の何者なるかを說明して餘すところが無いと思ふ。死んでも腕を伸べて、電話線の架柱になつてをる兵士に思はず敬禮したが、二百三高地の塹壕には、腕の電柱がソコにもこゝにもベタ一面にあつたといふことである。

二百三高地は堅固なる工事を施してある陣地ではなかつた。高地の頂上に登つて見ると、一幅の俯瞰圖として、旅順市街と西港の全部と東港の大部分とが手に取るやうに見える。椅子山、案子山、鴨湖嘴堡壘などは眼下に見える。かゝる要衝の地點に何故永久的築城を施さざりしか、これが甚だ疑問である。日本軍の攻擊を受くるに及んで、驚いて工事を始めたくらゐなものである。それでも備砲の如きは僅かに三門しかなかつたやうである。工事の費用も竭きてしまつて、最早こゝまで永久的工事を施すの餘裕がなかつたといふことであるが、或はさうかも知れぬ。日本軍は主として要塞の東北方面即ち北砲臺、二龍山に手をつけたれど、奏功しないので、止むを得ず、二百三高地に主力を移したが、是れまた鏖死者を山成すに止まつて、東北方面と同一、寧ろそれ以上悲慘なる狀況に陷つた。併し最早引くに引かれぬハメに立ち至つたのみならず、二百三高地の價値は、旅順內部を俯瞰し得るの利益あるを以て、一たび我が有に歸したならばその瞬間を以て、旅順に致命傷を與へたと同然で、最早旅順の餘力はないものに極つてゐたのである。露軍が二百三高地の喪失は、かゝる大事であるから、日本軍の攻擊を受けつゝ、一方工事を督勵して遂に永久保壘に讓ることなき三條の散兵壕と强固なる鐵條網とを廻らし、頂上の鞍部二百三高地は馬の鞍のやうな山である――に隧道を穿つて、塹壕と塹壕とをつなぎ、其の塹壕は軌條と鐵板とで蔽うた。

十二月五日午後四時四十五分を以て、遂に之れを占領したが、開城後露兵の死骸を收容したる數が五千四百であつた。前後恐らく七千以上の露兵の死傷が橫たへられたことであつたらう。占領後直ちに頂上に觀測所を設け、六日午前十一時、旅順港內の霧が晴れると共に、我が二十八珊榴彈砲八門は、港口內に在る敵艦に向つて射擊を開始した。丁度要塞の裏から射擊するのであるから、如何な旅順も之れには弱つた。これより先き旅順市街に在つた將校の或る者は、日本軍の砲彈が市街に落ちて屋根を打ち拔いたり、人を斃したりするので、危險であるからといつて、家族を砲臺內の兵舍に連れて行つた。家族も亦主人と共に砲臺の中に居ることを非常に喜んでをつたといふ有樣であつた。山の上は空氣はよし、見晴しはよし、子供は珍らしさうに、窓際や、廊下や、倉庫の周りや、砲臺の中庭に出て、飛び跳ねて遊んでをつた。時には大砲の上へあがつて鬼ゴッコをしたり、大砲を打つ砲手の眞似をしたりしてをつた。また兵隊から戰の話を聞いたり、機關銃の射擊を見たり、狼火が花火のやうに空で破裂するのを見たりして躍り上がつて喜んでをつた。併しそれも一時で、前面よりする日本軍の壓迫が激しくなつて、砲臺も大抵は半ば破壞さ

れてしまつたのみならず、二百三高地の砲彈が背面を攻めつけるので、如何な子供も首を縮めて穴の底へ引つ込んでしまつた。

二百三高地の上で、支那人が笊を持つて迂路ついてゐるのを見た。予等を見ると直ぐ岩の蔭へ隠れてしまふが、彼は主に小銃彈の打殻を拾ふものと見える。何か目ぼしいものが落ちてゐないかと睨み廻してゐるのだらうが、今はモウ何も落ちてゐない。其のむかし死骸の山であつたときには、少しは懐を肥したのであらう。予等は今日でも唯一人で此の山上に立つのは何となく氣味惡く思ふのであるが、笊をかゝへて、塹壘の間を徘徊する支那人等には、何等の感じもないのであらうか。

二百三高地を下りて新市街に出ると、煉瓦作りの半成家屋がいくらでもある。それを見て同行の或人は、日本人はアンナ大きな家を貰つても、とても經營が出來ぬ、日本人が來ると、折角積み上げたアノ煉瓦を皆崩して、其の傍に小さな小屋を作つて住んでゐる、如何にもコントラストが面白いでないかといつたが、全くアンナ大きなものを貰つても始末にいくまい。露人は遉がに大國の民たるだけあると思はれる。

總てについて尨大なるところに露兵の眞味がある。

市民は砲撃の間は避難もするが、砲撃が止むと、平日の如く街路に出て、往來も相當に賑つてゐたといふことである。砲撃も半年から續くと、いつまでも怖がつてをられぬと見える。旅順の日本橋——舊市街より新市街に至る橋——の傍の石塀に掩蓋を作つて、そこには女子供や、又は將校の細君なども避難してをつたといふことである。そして通行人の雨宿りでなく、彈宿りともなつてをつたさうだ。

二〇三高地から歸つて、白玉山に登り、納骨堂を拜して表忠塔に登つた。表忠塔は地盤より二百十八尺の高塔で、總階段は二百六十七ある。これは數へて見たのだ。予はナンでも兎角數へて見る癖がある。階段などは第一通したことが無い。表忠塔の階段は二十七の階段が九つ、二十三段のが一つある。コンナいらぬ計算も、處が處、物が物だけに念を入れて見た。

白玉山から見た景色は、旅順第一といふ評である。白玉山上旅順の八景といふものが、木標を建てゝ書きつけてあつた。老鐵の殘雪、[illegible]嶺の夕照、龍河の煙雨、水營の朝霧、白銀の秋月、模珠の遠帆、虎島の晴嵐、西港の浮鷗、これである。併し旅順には名所も何もない。唯老鐵山は獨り雄大なる景色を見せてをる。旅順で見るべき景といへば、老鐵山の遠見ぐらゐなものであらう。

夕暮にながめ見渡す水師營
其の名も高き白玉山。
こはれた堡壘が見ゆるぞエ。
アラ汽車の音、笛の音、
田舍も汽車があるかいナ。

なんどといふ俗謡が殘つてゐる。「田舍も汽車があるかいナ。」などと、かういつたら三文の値打もないが、見るべきものは實に何も無い。また、

夕暮に眺め見渡す旅順口、
其の名も高き黄金山、
こはれた船が見ゆるぞエ。
アラ露西亞が泣く、露西亞が泣く。
旅順に名將(名所)がないかいナ。

などといふのもある。旅順で見るべきものは、別に何もない。たゞ露西亞も泣き、日本も泣いた砲臺の殘壘があるばかり。これは見なければならぬ。

第三十三　少年密使

旅順でクルスタ、アルベスといふ獨逸人の經營してゐたアルベス商會で飼つてゐた鸚鵡は、砲彈の飛來する音を眞似るので有名であつた。シュー、プリッ、ハハンパン、ゴーゴローとやつたり、ブスン、ヒュルーンなどと氣の拔けた音まで中々旨いものであつた。鸚鵡のドーン、ゴロ／＼には愛嬌があつたらう。けれども火の出るドーン、ゴロ／＼には頭が飛んだり、腕が千切れたり、とんでもない愛嬌であつた。旅順の屋根の上、街衢の上には日本軍の砲彈が日々夜々破裂したのであるから、鸚鵡も日々夜々おひおひと多忙になつたことであらう。十二月に入つてから、旅順は日本軍の全線から砲彈を浴びせかけられた。そして露兵は防いでも防いでも、防ぎ切れない日本軍を辛うじて支へてをつた。露軍の眞價は實に十二月以降、即ち既に或る將軍連が開城の止むなきに至れることを考へてをつて、僅かに鐵の如き意志を有する將軍の力によつて支持されてをつた此の期間に存することと予は思ふ。前後腹背みな敵を受けながら、毫も其の態度を變ぜず、飽までも自己の盡すべきを盡したる彼等に對しては、そこに多大の勇氣を認むるのみならず、將來露國を研究するものは、彼が難關に處して愈々其の本領を發揮するの一點に着眼せねばならぬと思ふ。露國が敗軍の結果に失望落膽することなく、ます／＼士氣を鼓舞奮勵しつゝあることは、今日の實狀である。、體戰に敗けては何にもならぬ。併し折角勝つても國民の氣に弛みが來ては、敗けたよりも却つて恐ろしい結果を來すかも知れぬ。勝者は往々士氣が沈靜して、敗者は反動として却つて士氣が熾になる例は尠くないと思ふ。予の「肉彈」が曾て露西亞に於いて飜譯せられた時、ボルッガロフなる一志士がこれに對し、日露戰爭の結果に見て憤慨した一記事がある。それには露軍が何を以て敗北の辱めを受けしかに就いて熱血の文字を揮ひ、來るべき戰爭に於いては、一歩たりとも日本人に讓らざるの覺悟を爲すことが極めて緊要なることを切論してゐる。そして日本人をして、曾て吾人に大敗を與へて却つて勝利の道を敎へたる瑞典人たらしめんことを切に望むといつてゐる、一語の中に實に涙の痕が見えるやうである。そして露國人は宜しく「肉彈」を讀みて、這般の敵について研究すべしと薄氣味惡いことをいつてゐる。最後にこの一節があることを、我々日本人は忘れてはなるまい。我等は決して露國を敵として斯かることをいふのではない。泰平無事を夢みてゐるものに向つて、何の日にかまた軍旅の勞に從はねばならぬことあるを警告して置きたいのである。ボルッガロフは念佛三昧に日を送る念佛教徒の如きにも、一大痛棒を加へてゐる。少しは眼を醒まして宇内の形勢を見るがよいといつてゐる。露西亞には隨分世捨人然たる輩が少くないが、これ等の輩には、一服の清涼劑となつたであらう。そして過去の悲慘なる戰役の苦痛を忘るゝことあらば、遂に東より西より、某々國のために奴隸の軛を以て嘲せらるるに至るであらうといつてゐる。また我々露國人は好戰國民である、假令今日敗を取るとも吾人の嚢中にはなほ火藥あり、露軍の名譽は未だ失墜せずと痛論してをる。

さて予はこゝに二百三高地に於いて落命したるところの、隱れたる露軍の一勇士を紹介して置かうと思ふ。これ特に日本少年者のために何

等かの刺戟を與ふるに至つたならば、予の幸とするところである。

この勇者は兵士ではなくて、一個の少年である。年僅かに十三歳の少年であるが、丁度日本の金鵄勲章のやうに、武功抜群を表彰するところのゲオルギー勲章を胸間に輝かした勇士である。この少年の名は何といつたか、旅順にあつた露人さへ之れを知つたものが少い。併しこの勇敢なる少年兵は屢々日本軍の攻圍線を出入したといふことは事實である。

何でも旅順の終りに近い、十二月の或る寒い夕方であつた。二百三高地の谷間を、チヨロチヨロと走つて居つた一人の少年が、日本軍の砲彈に打たれてバツタリ仆れた。あたりの兵士は危險をも顧みず、爭つて其の少年を救つて安全の地に移した。

息も絶え／＼なる少年の前には、ステツセル將軍が立つて、少年の勇武を激賞した。將軍は此の勇敢なる少年兵士の血に塗れた光輝ある姿を凝視して熱き涙を落したのは何故か。

この少年兵の雙肩には頗る重大なる任務が負擔されてあつた。ステツセルの爲には實に掛けがへの無い秘密傳令使であつたのである。將軍はこの少年を失つて、一隊の指揮官を失つたよりも尚苦痛であつたさうである。

少年はステツセルの密書を懷にし、日本軍の攻圍線を潜つて、友軍との連絡を圖つたのである。彼は林檎の如き赤き其の頰に土を塗り、苦力の着るやうな汚い青い支那服を着け、破れた帽子を冠つて、野獸、走狗と雖も這ひ出づる隙もなき、日本軍の前哨幕を大膽にも潜つたのである。晝は或は岩陰に潜み、或は民家に隱れ、夜は出でて潜行匍匐し、あらゆる艱難辛苦を嘗めつゝ、クロパトキンの許に使したのである。幾度か日本兵の誰何をも受けたらう。幾度か日本軍の大部隊に遭遇して、膽を寒くしたこともあつたらう。荒野を渡る風の聲にも、枯葉を拂ふ雨の音にも、孤村を彷徨ふ里の犬にも、幾たび唇を震はしたか。併し丹心愛國の少年傳令使は、首尾よく、極めて危險なる、併し極めて光輝ある任務を達したのである。クロパトキン將軍は少年の頭を撫しつゝ、其の剛膽にして機智に富むところの行動を歎賞しつゝ、手づからゲオルギー勲章を授けて、武功抜群を全軍に布告したといふことである。

この少年は任務を終ると、直ちに踵を返して再び旅順へ歸つた。そしてまた出でて復た還ること前後實に三回、日本軍の前哨幕を出入すること六度、砲火の巷に往來して、三個のゲオルギー勲章を胸間に輝かし、最後に二百三高地の谷地より、旅順新市街に入らんとするとき、日本軍の砲彈に打たれて一命を殞さなければならぬことになつたのである。

少年傳令使は旅順赤十字病院で落命した。彼れの白きベットの上には、將軍から、兵士から、また市民から贈られた花環が、堆高く積まれてあつた。冷き枕の邊りには、親もあらず、兄弟もあらず、少年は唯獨り淋しく死んだ。精神上多大の感動を與へたところの少年のために、將士皆涙を呑まざるはなかつた。

勇少年が死を恐れず、敵の重圍を潜つて斯かる大膽不敵なる行動を敢てしたといふことは、世界戰史上稀有、否、寧ろ絶無のことであらうと思ふ。

こゝに更に哀れなる一話がある。戰後態々、歐露より戰死者の墳墓を訪ねて、老鐵山の麓に集まつた順禮は非常に多かつた。近頃でもまだ此の種の順禮は少くないといふことである。

予が旅順へ行つた少し前の話である。これらの髑髏の中に、十五六の花恥かしい一人の少女が交つてをつたといふことは、頗る異彩を放つた。いづこの誰の塚を弔はんとて、遙々旅順三界まで來たのか。

此の少女は彼の少年傳令使の妹であることが後で知れた。少女はドウ尋ねても兄の墓らしいものは見當らぬといつて、目を泣き脹してをつたといふことである。

墳墓を訪ねて來たものは三十九年より四十年にかけて非常に多かつたさうである。そして大抵は女であつたのは、特に注意に値ひする。夫の墓を探しに來た妻もあれば兄の石碑を建てに來た妹もあり、弟の墓を弔はんとて來た姉もあつた。みな老鐵山の麓の埋葬地へ行つて搜索して居つたが、誰の墓はドノあたりにあるといふやうな、旅順から歸つて來た兵卒の話を便りにして探すのであるから、中々見當らない、けれども彼等は、凡そ之れぞと思ふのを寫眞に取つて國元へ送り、彼の兵卒に問ひ合はせ、その返事を待つてまた搜索するといふ風で、毎日五六里の道を馬車にも乘らず、小さい子供の手を引いて、墓探しに行つたものさへある。彼等は決して富有者のみではない。中には實に見すぼらしい風をした婦人もあつたが、皆何を措いても展墓のために、遙々一人旅をして來ることを厭はなかつたやうである。下士の妻などは、人に金を借りてでも、一度はこゝへ來なければならぬやうになつてゐた。そして支那人の下宿にをつたり、間借りをしたりしてゐて、戰場の跡を尋ね、墓參りをするので、半月や一ケ月は滯在してをつたものもあつた。

これを見ても、露國の婦人は甚だ愛情に深いもので、彼の一時の感情にのみ馳せ易い一部の婦人とは、そこに大變な相違があると思ふ。彼等はまた優しい主婦であつて、皆境遇に甘んじて、忠實に働いて居る。けれどもまた彼等は勇敢にして男子にも劣らぬ氣力を有してゐる。旅順でトウ〳〵終りまで殘留してゐた陸軍將校の婦人は五六十人もあつたが、皆兵士と異ならぬ働き振をしたといふことである。總ての婦人がみな非常に女性的である半面に於いて、また非常に男性的である。中には兵卒として戰線に立つたものさへある。曾て予が見た外國某雜誌には、我が運送船常陸丸を撃沈しつゝある露艦の上に、一婦人が立つてハンカチーフを振つて歡呼してゐる繪があつたが、之れを見ると或者は軍艦にも乘り込んでゐたやうである。また或者は頭髮を短く切つて、軍服を纏ひ、少しも恥らふ風もなく、洒蛙々々として兵士の列中にあつたものもある。かゝる小說的の事は露國婦人の好んでするところと見え、戰場に於いて男裝をなし、良人や情夫と共に馳驅してをつたものもあつたさうである。彼等男裝したる女兵士の中には、熟練した射手などもあつて、或る女は其の夫が戰死した後塹壕に踏止まつて、百七十人の日本兵を狙殺した後、自らもまた戰死したといふことである。恐ろしい女もあればあるものである。

第三十四　慘中の人道

北海道渡島國江差街道の或る路傍に「旅順院誠忠義烈居士」といふ墓が建つてゐると、近頃友人から聞いたが、隨分思ひ切つた戒名をつけたものである。併し旅順の山谷を埋めた勇士皆是れ「旅順院誠忠義烈居士」ならざるは無いのである。旅順では頭を出しさへすれば死ぬる

に極つてゐた、己を前へ出しさへすれば死ぬるに極つてゐた。併しながら勇敢なる我兵はドウしたら死ぬるか、ドウしたら生きるのといふ問題を考へてゐたものは無論一人も無く、最早自己の功名を立てるの立てないのといふ問題でなくて、一兵卒の頭にも帝國陸軍の名譽といふ觀念が熾んで、如何にしたら帝國の戦況が發展するかを考へてゐたのである。生命などはあつても無くつても、それ等はテンデ問題になつてをらなかつたのである。たゞの一兵卒といへども、「どうしてをらなくても、師團長なり聯隊長なりがやつてくれる、我等は命令のまゝに進めといへば進む、死ねといへば死ぬる、唯其の義務を盡すにあるのみだ。」といふやうな、ウッチャリな念慮を抱いてゐるものは無かつた。人よりも先んじて、我こそ彼の堡壘内にはひつて、敵兵の多寡を搜索してやらう、我こそ彼の鐵關門を破壊して、後續の進路を開いてやらうと勇み勇んで、我も我もと必死の勇士が飛び出して來たのは、指揮者に取つてドンナに嬉しかつたか知れぬ。決死の覺悟などといふことを考へてゐる内は、未だ覺悟しなければ出來ぬ死かも知れぬが、モウかうなつては死の問題を蚊の食つたほどにも考へないので、そこに妙味があると思ふ。

旅順院誠忠義烈居士の戒名を聞いても、當年の事が切りに思ひ出される。十二月二日北堡壘で、我が攻路頭にあまりに死體が多くなつたため、一先づ其れの始末をしようと、我兵の一人が攻路の上に飛び上がつて、何といつてよいか分らぬから、ハンカチーフを振つて、「お出でなさいお出でなさい。」をやつた。ところがこれが、通じたものか、敵の一大尉が出て來た。そこで死體收容の意を告げると、先方も承知したから、兵が擔架を擔いで死體を拾ひ集めたが、その間敵の將校はこちらの攻路を覗かうとする。こちらも向うの壕内を覗かうとしたがお互ひに見せまいとする。何かグヂャ／＼と話しかけては、向うが來ようとするのを、こちらは向うへ連れて行かうとし、向うは來られてはたまらぬから、我の方へ歸さうとする。寄つたり、寄せたり、それは可笑しい圖であつた。また彼我の兵卒は一見舊知のごとく、我れより酒を呉れてやれば、先方からも酒を持つて來てくれる。互ひに盃を交換して、覺束ない支那語や手眞似で、勝手なことをいつて話してゐる。其のうち續々と向うからも出かけて來て、ガヤ／＼と園遊會のやうに騒ぐ。中には酒にかけては、大分豪傑の先生と見えた彼れの一將校が、廻らぬ舌で、「日本兵も強いが、露兵も強からう！」などといふから、我兵も鸚鵡返しに、露兵もなかなか強いが、日本兵も強からう！」といつてやる。すると彼は、露軍には、一人も出でゝ開城を乞はうなどと思ふものはない。露兵が死に絶えて後なら、勝手に旅順へお入りなさい。」などといふから、こちらでも負けてはをらず、「日本兵が死に絶えるまでは、攻圍を解きませんぞ。」といふ。そして互ひに手を擧げて笑ふ。その中死體の收容も出來たので、互ひに握手して、「いづれまた後で。」といつた風に別れて、彼は砲臺の内に、我は攻路内に沒すると、忽ち戰場は打つて變つた舞臺となつて、ヒュー／＼と彈丸が唸つて、人を收容した身が、幾人とも知れず、收容されるべき運命の人となつた。戰も隨分現金なものである。併しそこにまた人情の美點が流露してゐるとおもふ。擔架で運搬してゐる日本兵の死體が、彼等露兵の前を通ると、彼等の多くは擧手の敬禮をする。ゆかしいものである。これでこそ文明の戰爭である。彼等露兵の面前

に於いて、勇敢なる働き振りを見せた戰死者の骸に對して敬意を表するところに、美しい人情も表はるれば、悲哀なる戰爭の面影も見える。

・彼のクリミヤに於いて、要塞の一側に井戸があつて、そこへ敵味方の兵士が水を汲みに來る。この井戸の周圍では、敵も味方もなく、互ひに水を汲んだり、汲んでやつたりして、別れるときには、「いづれまた戰場でお目にかゝりませう。」と再會を鐵火の間に約して去つたといふことである。慘中にもなほ人道はある。予は曾て露軍の害敵手段について、少しく之れを說きは說いたが、露兵が我が死者に敬禮した一事を以て、既に其の全體を抹殺してもよいと思ふ。

彼の北砲臺に於ける情況はドウかといふと、我が師團は十一月二十六日に於いて大爆破を企てたが、僅かに北頓壁の一部を損傷したのみで功を奏しなかつた。日沒、青木聯隊長は軍旗を立て、胸墻上に登つて指揮し、突擊を決行したが、これも成功しなかつた。十二月十八日、坑道の極端に、藥室八ケ所を設け、二千三百キログラムの驚くべき火藥を裝塡して、午後二時十五分大爆破を行つたが、その勢に乘じて突擊した突擊隊の殆んど全部は、爆破の餘波を受けて掩蓋下に埋沒してしまつた。夜に入り、第十一師團長鮫島中將は內野參謀長を伴ひ、胸墻上に登つて全身を露はした。後備步兵第三十八聯隊大隊長岩本大尉は既に敵の猛射を受けつゝ、二個中隊を率ゐて敵の壘庭にあつて、連りに敵の堡壘內に偵察兵を放つたけれど、未だ內部の情況を知ることが出來なかつたが、併し成功の見込あることを報告した。師團長は大膽にも砲臺の胸墻上に立つて、月光と雪の光とに透し見て、我兵の壘庭にあるものは悉く死者にあらざること、及び敵の動搖せる色あること、今にして突入せば、成功疑ひなきことを見て取り、直ちに意を決して突入すべきことを命じた。岩本大隊の突入に續いて青木聯隊長も胸墻を越えて、堡壘の咽喉部附近に突擊した。師團長が月光を浴びて自身胸墻上に在つたときの態度は、鬼神の天より下りしかとも見えたといふことである。この場合師團長を失つては、其の先が大變であるといふので、幕僚が將軍の足を持つて後へ引いたが、將軍は再び胸墻上に立つ、引いても〳〵飛び出す、とうして微笑を含んで立ちつゝ、砲臺を見下してゐられた姿を見て、皆淚ながらに拜したといふことである。

この突擊で、敵は旅順第一の永久築城たる北砲臺を棄てて退却した。放棄するに臨み、外岸穹窖より咽喉部に至る通路、咽喉部兵舍の二階より後方に通ずる通路及び外壕側防を自爆して去つた。砲臺の全部を確實に占領したのは、夜の十一時五十分であつた。吾人は、北砲臺で忘るべからざるは、露軍の名將、コンドラテンコの戰死である。將軍は北砲臺の陷落する三日前、即ち十二月十五日夜九時頃、穹窖內で下士の殊勳者にゲオルギー勳章を授與し終つて、十數名の將校と凝議しつゝあつた時、日本軍より放ちたる二十八珊榴彈のために穹窖を粉碎せられ、將軍は頭蓋骨を破壞せられて、敢なき最期を遂げた。將軍は工兵大學校を卒業したる人で、築城に關し特に豐富なる學識を有する人たりしのみならず、また人格の人であつて、防禦の中心人物とし衆望を一身に擔ひ、旅順要塞の爲には掛けがへのない名將軍であつた。コンドラテンコの戰死が旅順開城の一原因となつてゐることを見ても、如何に旅順の爲に大切な人であつたかが分かる。ステッセル將軍は、コンドラテンコが死を非常に悲し

んで、要塞全部の將軍を失つたよりも惜しいといつたさうだ。旅順を去るときにも、ステッセルは將軍の墓前に別れを惜んだといふことである。將校兵卒も將軍のためなら命を惜まぬといつて、其の麾下に於いて戰鬪することを非常の光榮としてをつたといふことである。あの人の爲なら死ぬる。といふことは最も大切なことで、部下に此の觀念が缺けてゐては、いかなる勇將も戰は出來ぬ。高壓的に部下を動かさうとしても、中々意圖の如くなるものでない。それでこそ一隊の指揮官たるものは、人格の人でなければならぬのである。コンドラテンコ將軍は、かの人格の人、否、神格の人乃木將軍のやうな人であつたらうかと思はれる。

予が北砲臺を訪うて、將軍戰死の跡に至つた時、剛勇を以て聞えたウメンコ中佐以下十三名が、將軍の死骸を圍んで死したる當時のことを思ひ浮べて覺えず身震ひした。予は此臺の斷片にも、なほ將軍の血を見るやうに思はれてならなかつた。否、將軍の魂魄が穹窖の內に磅礴として存在してゐるであらうと思うて、知らず識らず頭が下がつた。北砲臺穹窖に於ける將軍戰死の處は、旅順の一名所で、訪客皆足を停めて其の跡を弔ひ、將軍の英名を讃へぬものはない。此臺の斷片を記念として持つて歸るものも多い。予もまた永久に將軍を景仰せんため、小さなる一片を拾つて歸つた。

コンドラテンコが死すると、防禦司令官として例のフォーク中將が之れに代つた。併し十八日夜十一時ごろ、地區司令官たるゴルバトフスキー少將が北砲臺の情況を視察せんために、二龍山より馬を走らすと、途中で北砲臺を棄てて歸る守兵に遭遇したので驚いた。これはフォーク將軍の命令によつて退却せるなりと聞いて、最早如何ともすることが出來なかつた。素より日本軍の追擊の猛烈なためではあつたけれども、悲觀すべき情況に立ち至つたとき、コンドラテンコの如き將軍が生存してゐたなら、砲臺をして斯くまでアッケない最期を遂げささなかつたであらうと、それでスミルノフ將軍の如きはフォーク將軍の行動に對して、ひどく憤慨したといふことである。

開城後、或る露兵が、「日本兵は虱のやうだ。砲臺から見て居ると山の襞から、イクラでも頭を出して來る。潰しても／＼、イクラでも出て來た。」といつたさうだ。虱の如しとは少々恐れ入るけれど、砲臺の窓から見て居ると、コンナにも思へたであらう。我兵は潰されても潰されても、しつこく痛めてやつたから、トウ／＼降參したやうなものゝ、虱の方でもなか／＼弱つた。

北砲臺が陷落してからのち、殘つてゐた重なる永久保壘には二龍山がある、松樹山がある。其の他臨時保壘の如きは、まだ皆殘つてゐた。併し相變らず我兵は虱のやうに山の襞からムクムクと頭を持ち上げて攻擊を續行した。そのうち露軍は水兵を軍艦から老鐵山へ引きあげて其の方面の守備に任じた。水兵も商賣がへをして、山兵になつたのであるから驚いたであらう。老鐵山の守備は唯守備であるが、予はこの一事よりして、旅順の將軍中名譽を思ふ人の胸には、若し前面の諸堡壘悉く日本軍の手に歸するの後は、老鐵山に立て籠りて、最後の抵抗を試むるの必要あることを思つてゐたのであらうと察するのである。又さうあるべき筈であつたと思ふ。然るに此のころステッセル夫人が、某聯隊の作業場に旅行鞄を註文したといふ風說が聞えた。素より之れを信ずるものはなかつたらうが、二龍山が二十八日遂に日本軍の手に歸

し、松樹山も亦危くなつて來たから、ステッセル夫人の鞄も強ち意味のないものではなくなりかけたとて、甚だしく悲觀する人もあつた。

二十九日夜、ステッセル將軍は、己れの決心のあるところを示し、そこで出來得る限り第一線に於いて抵抗することに決した。然るに唯一つの頼りとしてゐた松樹山も、三十一日また日本軍の手に歸してしまつて、此の年も暮れた。

明くれば一月元日を以て、旅順戰の幕を〆め切つたる大詰の戰鬪が、彼の望臺に於いて開かれた。望臺の露兵は日本軍最後の突撃に際して、僅かに五名を餘すのみとなつたといふことであるが、隨分とよく死んだものである。旅順戰の幕が締まつたのは一月元日午後三時三十分であつた。この日、露軍では開城の恥辱を忍ぶ能はずとして、二名の若き士官が自殺を遂げたさうだ。これが旅順戰最終の死者であつた。

開城の軍使を日本軍に送るに先だつて、露軍は其の艦隊員を悉く水雷艇に載せて芝罘に送ることを命じ、船艦、工場の爆破、運送船の沈没等を行つた。旅順が斯くなることは覺悟の前とはいへ、電光に打たれたる如く、聲を放つて泣くものも澤山にあつた。敗けて氣持の好いものは何處にも無い。是等の處置に見ても、露軍の苦痛が如何に甚大であつたかは同情に堪へぬところである。ステッセルが旅順を去る時、我士卒に對して涙ながらに訓示したる中にも、我が要塞が外部よりの援助なくして今日まで支持し得たるは、露軍にして始めて之れを爲し得たのであるといつてをる。また本國に歸つて後も、軍人の態度を辱しむるが如きことなく、我等の艱難なりし日を護り給ひし神に祈りを捧げ、名譽ある戰死者を忘るゝことなく、而して露國兵士は順逆二境に在りて、能く其の操守を變ぜざりしことを世界に示さねばならぬと、諄々と諭してゐる。

モウ戰爭がすんだとなると、敵も、味方も砲臺の上へあがつて來て、田舎者が東京見物に出かけて來たやうに、珍らしくもない砲臺を珍らしさうに眺めてあちらへ潜り、こちらへ潜り、「ドウだ、えらいものだのー。」なんどといつて珍らしがつてゐた。露軍の或る大尉は、乃木將軍を捉へて「私はあなたを見たことがあります。北砲臺から望遠鏡であなたが參謀を連れて戰線を歩いてゐるのを見たことがあります。」などといつて喜んでゐたさうである。

予は旅順戰跡の訪弔を終り、開城丸で歸つた。船には四十に近い外國人が十三四になる女の兒を連れてゐるのが、見すぼらしい風をしてゐるだけに、何となく哀れに思はれた。彼は破れた毛布の上に坐つて、麵麭を毟つて少女に與へてゐた。英語で話しかけたが、十分に通じなかつた。併し彼は日露戰役に出征したる露國兵士であつて、戰爭から還つてみると、妻は既に此の世を去つてしまひ、一人の娘が後に淋しく殘つてをつた。そこで彼は此の娘を連れて住み馴れた故郷を去り、今は諸國を流離うてゐるといふことが分つた。そして日本へ行つて勞働でもするつもりだといつてをつた。予は彼が身の上を憐みつゝ、敗戰の痛ましき結果を思うた。

著者の言葉

「肉彈」を書いてからもう二十三年になる。それは私の中尉のころで、血にまみれて戰場から歸つて間もないころであつた。

當時は右手の用が利かず、左手で書いたといふ、血なまぐさい作なのである。

今日から見ると——といふと生意氣だが、讀み返すのもいやな、見るのも厭な作なのである。いはゆる書生文で、衒氣たつぷりなところが、若々しいといはゞいふものの、安價な形容詞を盛澤山にした、書生文に過ぎなかつた。

しかし、戰場らしいほこり臭いところが、いくらかこの書の取り柄といはゞいへるかも知れぬ。

「肉彈」に、もう一つ外に『肉彈』がある。それは私が戰場で書いた日記である。それは朝日新聞社發行の『草に祈る』の末篇に掲げてある。至つて卽興的のもので、文體も文語口語交ぜ交ぜになつてゐる。

それを『前肉彈』と命題して置いたが、その最後に「八月一日午後四時砲火の下にて認む、敵の砲彈、予が前方二百メートルの支那人の墓地らしき土饅頭の上に落つ」としてあるとほり、陣中作であつて、讀むに足らぬものではあるが、私のためには貴い從軍記錄として殘つてゐるわけである。砲擊效を奏せざるある日の記錄に「今は唯肉彈あるのみ、肉を彈丸となし、血を硝藥となすの一途あるのみ」といふ一節がある。

これが『肉彈』の著の命題となつて現はれたわけで、實は肉彈などといふ語を使つていゝものかどうか判らなかつたが、陣中口癖のやうになつてゐたそのまゝを使つたわけなのである。

「肉彈」といふ命題をつけた時、嚴谷小波さんを訪づれ、意見を求めた。すると嚴谷さんは肉彈といふ語は妙なものだから、その下に何かつけたらいゝだらう、例へば肉彈の花とするとか何とかしないと意味がわかるまいといふことであつた。

しかし、結局、肉彈の二字で出して見ることにした。

つまり肉彈の語は今日から見れば、何でもなく、議員の選擧にても肉彈戰などといふ字を使つて不思議はなくなつたが、當時は一つの新語であつたのだと思ふ。

肉彈の原稿はロール紙のつぎめなし卷紙に書いた。左手で書いたので、原稿紙の枠にはめて書くだのいふ器用なことは出來なかつた。

字といふと一字が一寸角ほどもあつて、全篇の原稿は何百卷といふ尨大なものであつた。

戰爭といつても一旗手であり、一小隊長であつて、猪のやうな聲を出してあばれ廻したに過ぎなかつたので、戰爭の大局に亙つては何も

知りやうもなし、從つて書く材料もなかつた。たゞ自分と自分に近い周圍を書きつゞつたにすぎなかつた。

その點では、戰記として見るべきものでなく、たゞ自分の生活記錄の一部に過ぎず、陣中日誌の延長と見るべきものであらう。

乃木將軍はこの書の生まれることを非常に喜んで「壯烈」の二字を題された。思へば旅順戰も壯烈なら、將軍の死も亦壯烈そのものであつた。

「肉彈」の第一版が出來ると、將軍はそれを北越旅行に持つて行かれ、一々批評や感想を書き入れ、それを知己に送られたさうである。その書が今いづこにあるか私は知らぬが、一度は見たいものだと思つてゐる。

『肉彈』は戰場から離れて日の經たない內書いた、つまり血のしたゝる記錄といふところに、生命があると思つてゐる。

『前肉彈』が『肉彈』の如くまとまつてゐるものなら、無論『前肉彈』が『肉彈』以上にその意味の値を持つてゐることはいふまでもない。それは戰場の土の上で書いたといふ力があるからである。

そこになると、戰記は何んといつても、煙硝臭い內に書いたものでなければならぬものだと思ふ。時が經てば經つほど、氣が拔けて、徒らに文章で讀まさうといふことになる。

戰記物としての力はそこにあるのでないかと思ふ。『肉彈』はその點に於て生々しい戰場の記錄といつて差支ないものかと思ふ。

死は人生唯一回經驗すべき重大な事件で、これほど眞面目な意義深いものはない。宗教も哲學も「死」の上に迷ひつゞけてゐる。しかし、戰場はそれを無造作に片づけてしまふ。戰場の人は「死」を目の前にぶら下げつゞけて、動いてゐる。死はもう問題でなくなつてゐる。だから、唯悲慘だの、壯烈だのといふことがあまり價のないものになる。

戰記はそこに土臺を置いてでなければ、ほんたうの戰場氣分は表はされないものかと思ふ。

その點については『肉彈』はもとより及ばぬこと遠きものがあるが、しかし、筆を下す當時の氣分は、死そのものよりも、その內面に深入りしようとしたことに努力してゐたと思ふ。結果はさうなつてゐないかも知れぬが。

その點については、私はアンドレーエーフの『血笑記』はさすが立派な日露戰爭後の作品だと思ふ。何回讀んでも面白い。兀然として幻の軍隊が現はれて幻の大砲を打つたりするやゝ怪異じみたものではあるが、戰場を一つの幻と見たところもさすがに面白い見方である。

それを見ると『肉彈』も今少し扱ひ方もあり、書き方もあつたと思ふが、何とも仕方がない。たゞ戰場の鐵火の下にあつた男が書いたといふだけのもので『肉彈』を見てもらふ外はない。

『肉彈』の著によつて、明治天皇の拜謁を賜

はつたことは實に破格の光榮であつた。當時は脚も十分に立たず、侍從武官長に抱へられて御前に進んだほどであつた。

明治天皇は、その後もたび〳〵私の傷の經過を侍臣に御下問になつたほどで眞に恐懼の極みであつた。

『肉彈』は、本田増次郎、ミス、ベーコンによつて英譯されたのを初めとし、獨、佛、伊、支、露、希等の各國語に飜譯された。

ルーズベルトは、『肉彈』を精讀した、子供にも讀ました、といつて、懇切な手紙をくれた。

露譯は五種類ほどあるさうだが、私の持つてゐるのは三種である。志士ボルツガロフなるものが、『肉彈』を評し、最後に「我等の嚢中尙火藥あり」といつて暗に復讐の意をほのめかしたりした。

伊譯はバルビ大尉の手になつた。バルビは日本語學士の肩書を持つ人で、原文から譯した。その他の飜譯は皆、英文から復譯したものである。

バルビ大尉は『銃後』も譯した。大尉は歐洲戰爭に出征したが、一命を完うし、今は老中佐として伊太利の北方に閑居してゐる。

獨譯は日本勳三等を持つシンチンゲルによつて行はれた。これも武人で當時大尉でなかつたかと思ふ。

獨譯『肉彈』については一つの插話がある。歐洲大戰前、獨帝カイゼルは『肉彈』を全聯隊に配布して、これによつて日本精神を研究すべく、命じた。

歐洲大戰は、あんな結果になつたが、獨軍が最後までの奮鬪は、さすが見上げたものであつた。西方戰場シャトーチェリーで百個大隊の突擊隊を作り、棍棒をふり〳〵佛軍を押し倒したなどは肉彈式であつた。

シャトーチェリーの肉彈戰を最後に、獨軍も內政的に戰敗したが、戰爭に勝つて居れば『肉彈』もお賞めに預つたかも知れなかつた。

『銃後』は『肉彈』後七年の作である。

「銃後」は古戰場を歴訪して「自分の傷ついた跡に立つた」記錄であるが、戰況を中心として、「銃後の人」の力を細述したものである。

當時『銃後』は稿として大半出來上がつてゐたのだが、中途筆が澁つて書けなくなつたので、旅順へ旅して古戰場の上に立つてみたのである。

すると、昔の日のこと共がまざ〳〵と目の前を往來し腕の高鳴るを覺えたので、序にと思つてゐた、北、奉天、遼陽等への旅程を中止して東京へ歸り、前稿を破棄して、新たに『銃後』を完成したのであつた。

机の上で出來る戰記に力の入らぬものだといふことを『銃後』の時にもしみ〴〵感じたことであつた。

『銃後』は森鷗外博士が隅から隅まで讀まれた。そして「題言七則」を與へられたわけなのだが、人の序文を書くのにこんなに詳しく讀んだことはないといつてをられた。

『銃後』の意味は、英國大使マクドナルド氏の「日本軍が戰捷の最大動力は銃後の人の力にあり」といつたことから取つたので、山陽の「兵の勝敗は器にあらず、人に存す」といふ語、つまり機械戰に非ず、肉體戰、精神戰にありといふ、

意義を命題としたのである。

鷗外博士は、「銃後」の命題は面白い、『肉彈』よりもいゝといはれたことがある。たゞ、鷗外博士は、「銃後」は材料が多すぎた、もう少し種を出し惜しみした方がいゝものが出來たらうといはれたが、私もさう思つてゐる。殊に古戰場歷訪の記錄はもつと詳述したら面白かつたらうと思ふが、他の材料に押されてそれが十分に表はれてゐないのは今に殘念に思つてゐる。

しかし、『肉彈』は戰場の血の記錄で、『銃後』は『肉彈』をもう一層突つ込んだものであり、又血の跡の記錄でもあるので、私は『肉彈』と『銃後』とを離して考へたくないのである。現代日本文學全集に於ても私の心持を酌み、竝列して本書に收めらるゝことになつたのは、私の何よりの喜びとするところである。

『肉彈』『銃後』共に故大隈侯爵の序文を載せてあるが、序文といふことよりも、兩書が世に出るについて事實侯爵の一方ならぬ恩顧を蒙つたことを忘れない。『肉彈』と『銃後』にもし何か認めらるゝものがあるなら、それは侯爵が兩書を作る上に私に與へられた恩情の賜物であつて、新裝して再び世に出るに至つた今日、侯爵の靈にあつく默禱の禮をさゝげて感恩の誠意を表したい。

年譜

伊豫松山の産　明治十二年六月十一日。父は信之、母はカズ、その三男に生れた。

忠温と呼ぶ。

青少年時代の大部分を同市小唐人町に送る、町は一名大街道とも呼び、生家のあるところである。

生來虚弱臆病であつた。町の弱蟲として、餓鬼大將共にいぢめられ通した。

家の眞向にある小學校――初等科何年といふころ――に入つた（今は教會堂になつてゐる）。教室で小便をもらして母親が襁褓を持つて拭きに來ただのといふことすらあつた。

十五歳、高等小學を卒業した。生來算數に最も不得手で、小學在學中苦しみ拔いた。卒業試驗の時、受持教師が、櫻井さんは級長のところへ行つて、答案を寫してお出しなさい」といはれたので、席をかはり、級長のまゝを寫して出したほどであつた。

生徒も、櫻井にはそれくらゐはしてやつてもいゝくらゐに思つてゐた。

小學を卒業すると、中學に入つた。やはり松山の中學で、城山の麓にあつた。

入學試驗といつても百人受けて百人入れた時代だからわけはなかつた。數學は零點でも入れた。

中學に入ると間もなく、兄の彦一郎、號、鳴村に連れられて、四條派の畫塾に入つた。師は松浦巖暉といつて、豐彦の門檇臥の弟子である。當時五十餘歳、京都畫壇に名を成した人である。

あまり繪の稽古に熱心すぎて、中學一年は見事に落第、母親から短刀をつきつけられ「死んでおしまひ」などといはれたこともあつた。

母親は子供の養育に嚴格な人で、慈父嚴母といつていゝ家であつた。

このころは日清戰爭最中で、青年の心は軍人熱に燃えた。しかし、弱蟲である上に、畫學生として立つべく志を抱いてゐたので軍人などとは夢にも思つてゐなかつた。

しかし、「海南新聞」の新聞配達をやつたりした。

夜中に號外が出ると、夜道がこはくて配らなかつたので、兄から叱られ、兄の監視附で配り歩いたことさへあつた。

中學五年まで何事もなくすぎた。學校の成績は段々下りで、五年のころは尻から數へて五六番といふところであつた。

四年のころだつたら、夏目漱石が英語教師として來た。そしてその教へを受けた。漱石の家へも時々遊びに行つた。

このころは相當いたづらもするやうになり、同盟休業屋の下廻りくらゐは承つてゐた。

中學では、同窓螢雪會を起して、雜誌を發行

したり、辯論を練つた。
雜誌は故片上伸（天弦）が新體詩を、自分は小説と論壇に筆を取り、今支那通の後藤朝太郎が淨書をして當時學生間にもてはやされた。
デモステネスの辯を練るといふので、口へ豌豆をふくんで怒濤と戰つて喉を破つたりした。
劇場を借りて、雄辯會を開き、他愛もない演説をやつて、校長にお目玉を頂戴したりした。
中學を卒業すると、突然士官候補生を受けたので、友人達を驚かした。それは本人の意志ではなかつた。父が美術家になることを嫌ひ、無理往生に受驗さしたのであつた。
第一日試驗場でいゝ加減な答案を書いて外へ出ると、父親が監督をしてゐたので、それに感じ、翌日から眞面目にうける氣になつた。
試驗がすむと、從軍の官吏を志願して神戸へ行つた。黒いボタンをつけて海岸に立つてゐる「波止場組」として半年をそこですごした。
運よく士官候補生の試驗に合格したので、從軍をやめ、松山へかへり、歩兵第二十二聯隊へ入營した。
その代り、師松浦翁から勘氣を蒙つた。美術家が軍人を志すなどはけしからぬといふのであつた。
軍人になつたものの、器械體操には一番弱つた。鐵棒一つブラドがつたことのない男だから、それが一番の苦手であつた。高い梁木の上で震へたり、木馬の上で坐り込んで動けなかつたりした。教官に叱られたので、夜な〳〵床をぬけ出て器械體操場へ行つて、一年後にはともかく、足かけ上りぐらゐ出來るやうになり、士官學校へ入學した。
それは明治三十三年、北清事變のころであつた。
教官には妙義山で逆立ちをして「とどろき岩」の名聲を馳せた等々力森藏（今の中將）などがあつたので、器械體操には泣かされた。
士官學校ではかなり勉強したと見え、歩兵科五百人中の二十番で卒業した。
松山聯隊へかへり少尉になつたのは明治三十五年の十二月である。
間もなく聯隊旗手となり、花やかな士官生活をしてゐる内に、日露戰爭が起きた。
三十七年五月出征して、乃木軍の第十一師團下にあつて旅順攻撃に從事した。乃木將軍は士官候補生當時の師團長であつたが、縁あつて、又乃木軍の隷下に入ることになつた。
遼東半島の一角に上陸し、南山を經て、その初陣を太白山で行つた。太白山を振出しに、數箇所に轉戰して、三十七年八月十九日から二十四日に亙る第一回總攻撃に加はり、望臺に負傷した。銃創八箇所、骨折三箇所の重傷を受け、戰死者の一人として、公報により、留守宅に傳へられた。
父親の日誌にも、忠勇戰死の報あり、悲嘆無量なり、とある。

『肉彈』はその戰爭の記錄であつて、鐵の彈よりも肉の彈――精神の彈によつて旅順は取れたのだといふ意味で書いたものである。

事實當時は砲彈の力よりも肉を彈丸となし、血を砲藥となして戰つた戰爭であつた。

負傷後、傷を廣島及び善通寺豫備病院で養ひつゝ、彼是一年近くも過した。旅順の捷報は病床の上で聽いた。

大半傷癒えたころ、松山へ復隊し、中隊長となつて、約半歳を過した。

明治三十八年八月、新設の陸軍經理學校（主計候補生）の生徒隊長となつた。その時は中尉であつた。

『肉彈』はこの時に筆を執つたものである。

そして『肉彈』は三十九年四月二十五日、その第一版を丁未出版社から發行した。

乃木將軍は『肉彈』を讀んで、點々修正された。

そして、將軍は作者を、時の侍從武官長岡澤精中將に紹介し、『肉彈』を　天覽に供することとなつた。それが圖らずも、　明治天皇に拜謁を賜ふこととなり、作者は無上の名譽を荷うた。

その後、作者は、三四の雜誌に筆を執つてゐたが、あまり書き過ぎたのか、當局からの注意で、暫く筆硯から遠ざかつてゐた。

大正元年夏となり、時の次官田中中將（現總理大臣）から、筆を執ることをすゝめられたので、旅順の戰場を訪づれ、歸來『銃後』に筆を起し、大正二年三月五日、同じく丁未出版社より發行した。

『銃後』も　天覽の榮を荷つた。

翌くる三年には歐洲戰爭が勃發した。

この戰爭を興趣ある材料から取扱つて書いたのが第三回の作『雜囊』であつて、三年十一月、同じく丁未出版社から發行した。

『雜囊』はかなり隨筆氣分の濃厚なもので、作者が隨筆に興を感じ、爾來、散文的作品を續刊するに至つた動機ともなつたのである。

翌くる四年十二月に隨筆『十字路』を發行した。發行所新橋堂。

『十字路』は、「自分及自分に近い周圍の出來事、感想などを思ひ付きのまゝに書き並べたもの」はしがきの一節であつて、一つの生活記錄で全二十一篇から成つてゐる。

『Aと十年』は、十年間同じ境遇に置かれたある教師の物語であつて、その教師といふのは、作者自身のことである。

『波止場鳩』は神戸の稅關生活を主題としたもの、『Kの死』『屋根裏へ』はある友人の悲しい最期を取扱ひ、『未信者』は妻との宗敎上の立場を異にした記錄であり、『死の經驗』は戰爭で死んだ當時の自身の體驗をつゞつて『中央公論』に發表したものである。『老小使』は彰義隊に加はつたが怖けがつき、上野を逃げて戰爭を見物した男が、晩年ある學校の小使になつて、草むしりをしてゐるといふ物語である。

軍歷からいふと十年間同一の學校に生徒隊長であつた。

四十一年四月、大尉になつた。大正五年十一月に少佐になつた。負傷の手は年一年と自

由が利くやうになり、右手にも筆を持てるやうになつた。

『銃後』のころは、左右の手半分づつで書いたが、それ以後は漸次右手に移り、其後右手に戻つた。

大正五年少佐になると、京都詰になつた。

八年には時の第十六師團長梨本宮殿下の副官として滿洲に駐劄した。このころは西伯利出兵當時なので、その戰役の業務をもやつてゐた。

十年には任を終へて再び京都へ歸つた。

十年七月、中佐になり、小倉に轉任、そこで三年といふ月日を過し、十三年三月、陸軍省新聞班長となり、東京詰となつた。

十四年四月、『黒煉瓦の家』を丁未出版社から發行した。『黒煉瓦の家』は滿洲を背景にした小說であつて、廣い野の中の黒煉瓦の家の窓からのぞいた種々相をつゞつて、滿洲氣分を出した作品である。

昭和の二年となり、その夏、作者は朝日新聞社の依囑で旅順の古戰場を訪づれ、歸來「朝日」紙上に『草に祈る』を約三十回に亙り連載した。

『草に祈る』は『銃後』の如く古戰場歷訪記であるが、村々山々を辿り昔居た支那の民家を訪づれて當時を回想したり、血の足跡を昔のまゝに歩いて一木一草の上にも涙の思出をつゞつたもので、『銃後』が戰況を土臺としたに比し、これは全く印象的な低徊趣味なものである。

『草に祈る』は十一月十五日朝日新聞社より出版した。内容としては『草に祈る』の外『秋風錄』、『前肉彈』等を加へた。裝幀は著者最初の試みであつた。『前肉彈』は陣中で書いたもので、「砲彈の降る下で書いた」ものである。これは當年その一部を某新聞に發表したことがある。

翌くる三年三月、隨筆集として『煙幕』を實業之日本社より發行した。

『煙幕』の内容は四十一篇から成つてゐる。

『新聞時代相』は大正十五年七月『中央公論』に掲載した。古い新聞から覗いた時代相を書いたものだが、新聞の發達史とも見るべきものである。

『新聞手帖』は昭和二年八月『太陽』に掲載し、現代新聞の記事の取材内容について讀者として蟲眼鏡で覗いた式に書いたものである。

『ある女學校』は昭和元年十二月『我觀』に。

『先陣爭ひ』は昭和三年一月『サンデー毎日』に掲載した小說で、盲目の二中尉が思出話の内に、それが圖らずも戰場で先陣を爭ひ、銃丸に中つて盲目となつたことがわかり、互に手を取つて泣いたといふ筋のものである。

『まぼろしの殺人』は妻を殺した男、それはあるまぼろしを見た爲めであつたといふことを筋としたもので、年月は忘れたが、讀賣新聞に連載したものである。

『秩父の山うるはし』は日活映畫の爲めに作した映畫梗概で、幕末より日露戰爭にかけて某家に重なる惡因緣を材料とし、忘れ難き怨みを忘れざるべからざるに至る經緯をつゞつたもので、映畫脚本としての最初の作である。その後「橘中佐」「赤城の夕映」等の脚本により日

活は莫大の費用を投じ、いづれも大映畫を作つた。

『秩父の山うるはし』は「キング」に掲載したものである。

「ある湖畔の宿の二階から」は「東京日々新聞」に、「映畫撮影所の夜」は「青年」に、「一本、女、馬」は「東京」に、「錦繪調練」は錦畫より見た明治初年の調練模樣を書いたもので「改造」に、「彈助砲時代から」は大砲、鐵砲の因緣話で「太陽」に、『幽靈の出る時』は戰爭の怪談で「東京朝日新聞」に、いづれも掲載した。年代は大正十五年以後のものである。

「煙幕」の装幀は「草に祈る」同樣著者自作のものである。

作者はその後歐米漫遊を企て、昭和三年四月末、先づ米國を振出しに外遊の途に上つた。出發前の三月一日稿を起し「將軍乃木」を完成し外遊中實業之日本社より發行した。

「將軍乃木」は「人間乃木」と題してもいゝものである。

その年の暮、歸朝した。

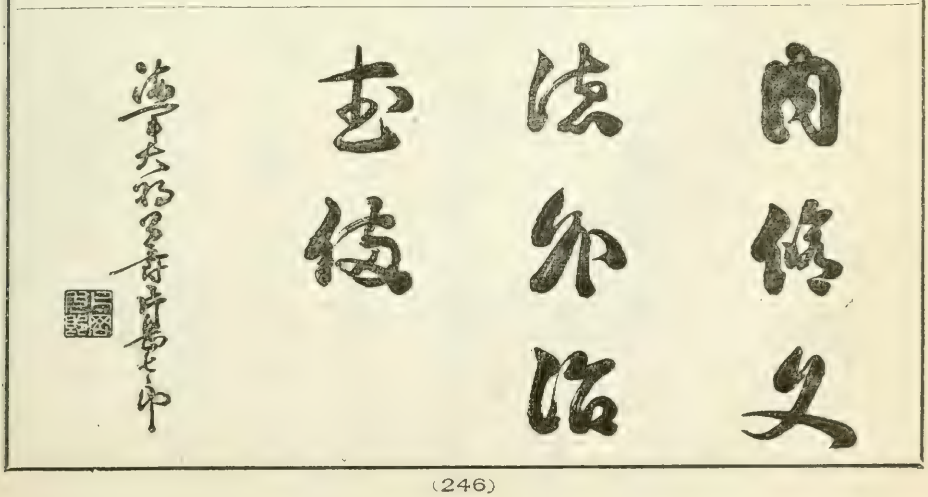
現、大佐（大正十三年十二月任官）。妻しづのとの間に一女湜子あり、十八歲。

此一戰

理性に基かざる思想は揺動する。明治の伴はざる信念は推動する。傳統の感激や、自我の感情や盲目の信仰や、教訓の強要や、形象の威嚇やの上に築かれたる思想や信念やは砂上の樓閣である。外装如何に壮厳なるも、内飾如何に華麗なるも、一たび體的經驗や心的覺醒の嵐に遭へば忽にして顛倒崩壊する。此書は今では僕の思想信念の歴史的紀念物である。

昭和三年初冬　千香舎識

天下雖安
忘戰必危
辛亥春
平八郎



夫レ東洋ノ海陸ニ龍闘虎攫ノ活劇ヲ演シタル日露両国間ノ戦役ニ屈指スレハ既ニ五星霜未タ以テ多数ノ年所ヲ経タリト云フヘカラスト雖今ヤ世人ノ当時難戦苦闘ノ事跡ヲ尋ヌルモノ将ニ稀ナラントス此時ニ際シ長ク其海戦史編纂ニ与セシ水野海軍少佐カ公務ノ余暇ヲ以テ本書ヲ編述シタルハ時ノ宜シキヲ得タルモノト謂フヘシ蓋シ之ヲ見ルニ日露戦役ノ天王山トモ云フヘキ日本海々戦ノ終始顛末ヲ叙スルコト最モ詳細大ハ艦隊戦闘ヨリ小ハ水雷艇襲撃ニ至ルマテ彼我ノ戦況ニ及ヒ或ハ「スラブ」魂日本魂ヲ説キ終リニ戦果ノ因テ来ル所ヲ述フ読ミ了リテ当時ヲ追想シ感慨措ク能ハス況ンヤ興味津々トシテ通俗的文筆ノ能ク其意ヲ尽シ不知不識巻ヲ掩フテ快哉ヲ呼ハシム

今ヤ別ニ公刊明治三十七八年海戦史アリ然レトモ之レ専ラ専門的ニシテ通俗的ナラス故ニ世人カ海戦ノ真味ヲ咀嚼セントセハ必スヤ此種ノ書ヲ要シ以テ両々相待タサル可ラス世人若シ本書ニ由リ我帝国ノ危機タリシ日露戦役ノ光栄アル結末ニ了リシ所以ノモノヲ察シ当時彼我将士ノ困苦悲壮ナル海戦ノ状況等ヲ追懐セハ我国民教育ニ裨益スル所夫レ多大ナルヘシ古語ニ云ハスヤ功之成、非成於成之日、蓋必有所由起、禍之作、不作於作之日、亦必有所由兆ト以テ序トナス

明治四十四年一月

海軍中将加藤友三郎識

序

予此書を一讀するに記事正確行文流暢にして坐に日本海海戰を髣髴せしめ翅に世人をして皇國無前の大海戰を記念せしむるに足るのみならず亦海軍軍人を啓發すること鮮少ならざるを信ず洵に良書なりと謂ふべし殊に編中大和魂を詳說したるが如きは著者眞意の存する所を知るに難からざるなり稿成り乃ち一言を辯ず

明治四十四年一月

海軍中將　伊地知彦次郎

序

此は日本海海戰の當時第四十一號艇長として奮戰したる海軍少佐水野廣德君の著なり君は役後海軍軍令部にありて明治三十七八年海戰史の編纂に從事し專ら筆を戰紀に執れり然れども官撰は自ら官撰の體あり正確簡明を主とするを以て讀者或は之を咀嚼するに至らずして止むの憾なき能はず君之を補はんと欲し公務の餘暇を以て拮据黽勉別に本書を成し東郷大將の信號訓示に因み題して「此一戰」と曰ふ卷を開けば君が燃犀の見と椽大の筆とは相待ちて日本海海戰の光景明々眞に逼り一擒一縱讀者をして乍ち怒り乍ち泣き乍ち笑ひ趣味津々たるの間に於て不知不識忠烈の志氣を涵養せしむ予君と倶に職を戰史編纂に奉じ本書の內容を知悉するを以て其の好著たることを江湖に紹介す語に曰く歷史は國民の指導なりと其れ是を謂ふ乎

明治四十四年一月

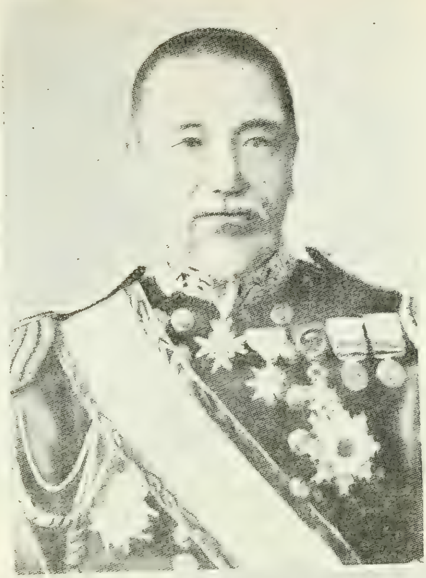
海軍大佐子爵　小笠原長生識

海軍大臣海軍大將 男爵 山本權兵衞（上）

海軍次官海軍中將 齋藤實（下）

海軍軍令部長海軍大將子爵　伊東祐亨（上）

海軍軍令部次長海軍中將　伊集院五郎（下）



聯合艦隊司令長官
海軍大將 東 鄉 平 八 郎（上）

第二艦隊司令長官
海軍中將 上 村 彦 之 丞（左下）

第三艦隊司令長官
海軍中將 片 岡 七 郎（右下）

第一艦隊司令官
海軍中將 出 羽 重 遠 (左上)

第二艦隊司令官
海軍中將 瓜 生 外 吉 (右上)

第一艦隊司令官
海軍中將 三 須 宗 太 郎 (中央)

第三艦隊司令官
海軍少將 山 田 彥 八 (左下)

第三艦隊司令官
海軍少將 東 鄉 正 路 (右下)

第三艦隊司令官
海軍少將　武　富　邦　鼎（左上）

第二艦隊司令官
海軍少將　島　村　速　雄（右上）

第一艦隊參謀長
海軍少將　加　藤　友　三　郎　中央

第二艦隊參謀長
海軍大佐　藤　井　較　一（左下）

第三艦隊參謀長
海軍大佐　齋　藤　孝　至（右下）

自序

明治四十二年十二月十日東郷海軍大將、軍令部長の職より軍事參議官に榮轉せられ別宴を東京水交社に催さる。余適〻職を軍令部に奉じ招かれて席末に陪するの榮を得たり。宴終つて後、餘興として薩摩琵琶の彈奏を聞く。曲中陸軍一等卒杉山忠吉なる者の忠烈を詠へるものあり。彈者は是れ二五の一少女、絃に嘈切の妙薄く、語に抑揚の調乏しと雖も、忠吉の忠勇、句々聽者の肺腑を刳る。殊に其の奉天野戰病院に於て、消え行く息の絶え絶えに君が代の國歌を唱ふる條に至りては、滿座肅然襟を正さゞるものなし。余謂へらく、一卒の行動も尙ほ之を文に詠み、琵琶に彈じて其の忠烈を千載に傳ふ。然るに皇國の興廢を一戰に期したる日本海海戰に至りては、世上唯其の大捷あるを知つて、未だ其の眞相を知るの人尠し。想ふに是れ海戰の狀況は、海軍部外者の窺知し難き所なると共に、海軍部內者に於ては、公務多端にして文筆の閑技にたづさはるの暇なきに因るものあらん。然りと雖も此の大海戰の眞相、時と共に堙滅に歸するは、終生の恨事なり。幸に己れ親しく海戰に臨み、又之を三十七八年海戰史の編纂に承け、稍〻日本海海戰に關して知れる所あり。菲才を顧みず自ら涓人死馬の骨となつて、驥駿の續出を待たんと、深く揣らず、卽夜稿を起しゝも、爾來公私の用務に支へられて執筆意に任せず、荏苒遂に以て今日に至れり。

本書著作の目的は、専ら日本海大海戰の實狀をば、廣く江湖に紹介せんと欲するに存し、固より兵學攻究の爲めにあらず、故に戰略戰術の問題に至りては努めて之を避けたりと雖も、苟くも成敗の跡を

繹ね、利鈍の數を明かにせんが爲めには、戰書の常として絶對に之を省除すること能はず。唯味噌の味噌臭きは、寧ろ味噌の生臭きより優るとして讀者の諒を請ふ所なり。

著者素と是れ一介の武辨、嘗て文辭に肄はず、章句に熟せず、加ふるに吾人の筆は軍機の桎梏と、國交の鐵鎖とに制縛せられ、述べんと欲して述ぶる能はず、書かんと欲して書く能はず、自ら隔靴搔痒の感に耐へざるもの尠からず、然れども此の忍耐こそ、皇軍大捷の一因たりしを考ふれば、是れ著者の讀者と共に悦んで忍ばんと欲する所なり。

本書稿半ば成るの時、海軍軍令部編纂に係る明治三十七八年海戰史第三卷刊行せられ、此の海戰に於ける彼我艦隊の戰術的行動に關しては、同書に詳述せられあるを以て、本書に於ては主として現代海戰の實況を記述することに努めたり。其の或は虎を寫して猫に類するの謗あるは豫ねて期する所、唯闘牛を畫いて尾を掉ふの誤なきは、竊に信ずる所なり。

本書著述に際し海軍大佐小栗孝三郎、海軍大佐子爵小笠原長生、海軍大佐山路一善、海軍中佐丸橋彦三郎、文學士竹村昌次の諸君、其の他當局の諸員より懇篤なる援助と有益なる忠言とを與へられたるを多謝す。

尙ほ稿成るに及びては時の艦隊司令長官たりし東郷海軍大將、片岡海軍大將、上村海軍大將閣下の題字並に時の聯合艦隊參謀長たりし加藤海軍中將閣下時の聯合艦隊旗艦艦長たりし伊地知海軍中將閣下及び當時大本營幕僚として作戰の樞機に參與したる小笠原海軍大佐の序文を賜りたるは深く著者の光榮となす所にして本書の面目之に過ぎず謹んで拜謝す

明治四十四年二月一日

著者　水野廣德識

目次

海軍大將東郷平八郎閣下題辭（二四六）
海軍大將上村彥之丞閣下題辭（二四六）
海軍大將片岡七郎閣下題辭（二四六）
海軍中將加藤友三郎閣下題辭（二四七）
海軍中將伊地知彥次郎閣下序文（二四八）
海軍大佐小笠原長生閣下序文（二四八）
自　序（二五四）

一　萬里の遠征　其の一……二五八
二　萬里の遠征　其の二……二六三
三　萬里の遠征　其の三……二六九
四　待つ有るを恃め……二七七
五　龍爪虎牙……二八三
六　戰雲急……二九四
七　龍虎相對す……三〇四
八　龍爭虎鬪……三一〇
九　勝敗旣に決す……三一九
十　スラブ魂……三二四
十一　日本魂　其の一……三三〇
十二　日本魂　其の二……三五七
十三　風浪の敵……三六〇
十四　快隼疲鶩を衝く……三六六
十五　軍さ話し……三七六
十六　死榮生辱……三八一
十七　韓盧蹇兎を搏つ……三九二
十八　戰果戰績……四〇一
十九　捷因如何……四〇八
二十　戰後の覺悟……四一二

附錄
日本海海戰日本公報……四一五
日本海海戰露國公報……四三一
露國提督の電奏文……四三五
日本海海戰感狀……四三八
日本海海戰死傷者人名表……四四一

附圖及寫眞目錄

海軍大臣山本海軍大將、海軍次官齋藤海軍中將……二四九
軍令部長伊東海軍大將、軍令部次長伊集院海軍中將……二五〇
東鄕海軍大將、片岡海軍中將、上村海軍中將……二五一
出羽海軍中將、瓜生海軍中將、三須海軍中將、東鄕(正路)海軍少將、山田海軍少將……二五三
島村海軍少將、武富海軍少將、加藤海軍少將、藤井海軍大佐、齋藤海軍大佐……二五三
婆爾的艦隊東航航跡圖(一)……二六五
婆爾的艦隊東航航跡圖(二)……二七五
彼我艦隊勢力比較圖……二九九
戰鬪開始前に於ける三笠艦橋……三二一
彼我艦隊酣戰時の光景……三二五
「オスラービヤ」苦戰の光景……三二七
二十七日戰鬪航跡圖……三四一
敵艦破損の慘狀……三四五
我が驅逐艦水雷艇夜襲の光景……三六九
沈沒水雷艇第三十四號、第三十五號、第六十九號……三七三
降服敵艦「アリョール」、「ゲネラル、アドミラル、アプラクシン」、「アドミラル、セニャーウヰン」……三八七
彼我艦艇沈沒位置圖……四〇五

(一頁以下のものは之を略す)

此一戰

一　萬里の遠征（其の一）

【兵は凶器なり】兵は凶器なり、天道之を惡むも、已むを得ずして之を用ふるは、是れ天道なりと。明治三十七年二月、我が帝國は東洋永遠の平和を維持する爲め、茲に已むを得ずして兵を起し、露國に向つて戰を宣した。敵は人口一億四千萬、面積百三十五萬方里を有し、歐米列强と雖も、常に其の意に逆はざらんことを努めつゝある世界の大强國である。之【帝國と露國】に反し、我が帝國は、亞細亞の東方に孤立し、世界地圖には、往々支那と其の着色を同じうせらるゝ蕞爾たる一小島國に過ぎない。大日本帝國の大の字と、大韓國の大の字とを、同一視せる歐米の人士は帝國の義憤を以て、是れ伏鷄の狎を搏ち、乳犬の虎を犯すに等しく、日本縱ひ鬪心あるも、一たび劍を拔かば、國殆しとまで酷評した。併し斯の如きは、鐵の小なるを以て、木の大なるよりも弱しとなし、石の薄きを以て、瓦の厚きよりも脆しとなすの類にして、兵の勝敗は數のみにあるを知つて、未だ氣にあるを知らざるものである。

皇謨茲に二千五百六十餘年。神功征韓の遠き昔は言はずもがな、降つては鎌倉男子太郎【時宗と秀吉】時宗、たゞ元使を斬つて、十萬の虜兵を筑紫の海に鏖殺し、稀世の俊傑太閤秀吉は、二十萬の兵を以て鷄林八道を蹂躙し、大明四百餘州を震駭せしめた。近くは明治二十七八年日清の役、交戰僅に九箇月にして、民衆四億の清國を壓伏し、地を割き、軍費を償うて、和を請はしめたる我が日本帝國。皇威四海を照し、神武八紘に輝く。五千萬【愛國純忠の一血團】の臣子は、是れ愛國純忠の一血團である。見よ、開戰以來海に陸に、皇軍向ふ所破竹の如く、撃つて破らざるなく、戰うて勝たざるなきを。

悍鷙の羽ばたき凄じく、「セントアンドレー」の十字旗を、西比利亞嵐になびかしつゝ、東【露國太平洋艦隊】亞の海に雄飛したる露國太平洋艦隊も、哀れや、帝國聯合艦隊の、息も繼がせぬ攻撃に、或は沈み、或は傷き、今や旅順の軍港に蟄伏して、奄々僅に餘喘を保つのみである。是に於てか、露國は更に、優勢なる艦隊を東洋に增遣し、一旦失ひたる海上權を恢復し、以て海陸の敗運を一擧に挽回せんと企てた。そこで、本國に殘留する軍艦中、建造中のものは晝夜其の工を急ぎ、舊式のものは其の武裝を更新し、尚ほ中立國より、多數の船舶をば購入雇傭し、假裝巡洋艦、水雷母艦、工作船は素より、給兵、給炭、給水、給糧の諸船より、病院船に至るまで、苟くも、【露國增援艦隊の編成】艦隊の遠征に必要なる諸設備は、悉く之を整へ、運送船を合して、約四十餘隻と稱する、尨大なる一大艦隊を編成した。而して從來の太平洋艦隊をば、太平洋第一艦隊と改稱し、增援艦隊をば、太平洋第二艦隊と命稱した。海軍少將ロジェストウェンスキーは軍令部長の職より轉じて、第二艦隊司令長官に補せられ、其の旗下には司

令官として、海軍少將フェリケルザムあり、國エンクウィストあり、何れも露國海將中の錚々たるものである。

斯くて第二艦隊は艦船の裝、乘員の編成等、其の發航準備に約半歳の日子を費し、明

【増援艦隊の出發】治三十七年十月十六日を以て、皇帝の信賴と、國民の與望とを雙肩に擔ひつゝ、軍容堂々、要衝的海港たるリバウ軍港を出發した。海岸に群集したる幾萬の國民は、此の堂々たる雄姿と整々たる陣列とを眺めて、國家の仇を報ずるに足ると信じ、手を擧げ、足を踏み鳴し、滿腔の熱誠と、歡喜とを以て、露國の萬歲を唱へ、艦隊の祝福を祈つた。軈て艦隊は司令長官の旗艦を先頭とし、錨を拔く一艦又一艦、惜しき名殘を煙に殘しつつ、波濤萬里の征途に上つた。生別死別は弓矢取る身の常とは云へ、思へば前途に橫はる千障萬難、氷は前程を塞して船足鈍く、婆爾的海上雲愁ひ、風咽ぶの概がある。煙に消え行く故鄉の山を振り顧みつゝ、艦隊は堅氷を割いて、翌十七日には早や婆爾的海の關門たるランゲランド海峽に達した。此處には豫てより日本水雷艇待ち伏せ居れりとか、日本海軍將校は海峽に水雷を沈置したりとか、殆ど常識を以て判斷に苦しむ樣な流言があるので、露國艦隊乘員は、特

【[illegible]べき神經過敏】に其の神經頗る過敏になつて居る。之が爲め艦隊嚮導ノ任に從事したる、某國汽船某號の如きは、此處より分離して、單獨航行を命ぜられたるも、日本水雷艇の攻擊を恐れて出發を躊躇したるが爲め、ロ提督は遂に、實彈を放つて之を追ひ返したとさへ傳へられる。かくて艦隊は、驅逐艦を以て掃海を行ひつゝ、丁抹海峽も無事に航過し、十月二十日には、丁抹の北端なるスカーゲンに着した。前日來の暴風の爲め、稍や分散したる艦隊を整頓し、第一回の炭水補充を行ひ、翌二十一日航路の警戒を嚴にする爲め、全艦隊を數梯團に分ち、相前後して北海に向つた。前途を鎖せし濃霧もいつしか霽れて、獨逸灣、風は怒つて、波逆卷いて居る。北海の永き秋の夜も、早や更け渡つて空は深く、星斗密なる二十二日の午前一時頃、後續の一艦より發したる無線電信は、水雷艇我を追尾すとの警を傳へた。見渡せば荒れ狂ふ海面に、點々明滅する漁火數十。風聲に膽を消し、鶴唳に心を破る露艦隊は、驚破こそ日本水雷艇の攻擊と、戰鬪の號音一聲鋭く深夜の寂寞を破ると同時に、哨兵勤務の疲れに眠り醒めやらぬ砲員は、敵味方の區別さへなく、忽ち猛烈なる砲火を、此等

【[illegible]】の漁火に向つて亂射した。砲火は閃々として闇を劈き、砲聲は殷々として天海に轟き、北海洋上雲なくして電光迸り、霹靂打つの壯觀を現出した。やがて爆々たる探海燈の閃は闇を貫いて海面を輝すと共に、不意の砲擊に驚きて、右往左往に逃げ迷ふ、英國漁船の一群を見た。或は機關を破られて、彈丸雨飛の下に進退自由を失へるもある、或は船體を貫かれて、將に沈沒せんとするもある。救助を求むる叫喚の聲は、怒濤の咆號と和して光景慘烈を極めて居る。而も目指す水雷艇は影だに見えない。是に於て露國艦隊は初めて其の誤りなるを知りたるものの如く、漸く砲擊を中止し、遭難者の救助をも爲さず、倉皇彼を陣中に隱し、程を早めて二十五日西班牙の西岸なるウイゴー港に着した。此の砲擊の爲め、英國漁船クレーン號は沈沒し、他の數隻は損害を被り、クレーン號船長以下死傷者も尠くなかつた。中にも滑稽

なるは、露國巡洋艦アウローラ亦味方の數彈を被り、死傷者を出した事である。

【英國國民の激昂】漁船砲撃の報一たび英國に傳はるや、國民の激昂は忽ち沸騰點に達し、政府は直ちに内閣會議を開き、露國に對して、一、謝罪（二）被害者に對する賠償（三）關係將校の處罰（四）英國船舶に對し將來の危害に關する保障の四條件を提示し、嚴談を申込むと同時に、其の優大なる全國艦隊に對して出師準備の訓令を發した。歐米各國の新聞亦筆を揃へて、露艦隊の暴擧を詰難し、或ものは斯かる危險なる艦隊をして、航海を繼續せしむるは、世界の航業をして不安ならしむるものなれば、須らく、護衛的艦隊の東航を中止せしむべしと論じた。併しながらロジェストウエンスキー少將は、頑として、漁船中に水雷艇の潜在したるを確認したと主張して居る。

【英國艦隊の出動準備】出動準備の命を受けたる英國艦隊は、直に戰闘の準備を整へ、其の數隻は急航ウイゴー港外に到りて、露艦隊の動靜を監視し、英露の關係は頗る急潮を呈した。露國は英國の要求に對し、其の第一、第二を容れ、第三、第四を拒絶すると共に、事件の審判を國際調査委員會に附せんことを提議した。英國政府亦當初の意氣込みに似ず、露國の提議に應じ、事件は遂に英露米佛墺の五箇國より選出したる調査委員會に附せらるゝ事となつた。調査の結果、委員會は十七箇條より成る査定を下し、砲火を開きたる行爲、及び其の漁船に對する結果に關しては、

【國際調査委員會の審査報告】ロ提督其の責に任ずべきものと決定し、且つ其の審査報告は露國提督並に其の艦隊乘員の勇氣及び人道心を傷くるものにあらずとの一條を加へた。而して別に露國は損害賠償として、英國に對し六萬五千磅の償金を拂ひ、一時世界の耳目を聳動せしめたる北海事件も、一先づ平穩に其の局を結ぶこととなつた。兇暴なる砲火の犧牲となりし英國漁船員こそ、誠に同情の至りに堪へない。際の疑はしきは砲火を以て先づ之を偵れ、敵の攻撃を待つて初めて劍を拔くが如きは、畢竟自滅を意味するものなりとは、泰西兵家の格言である。とは云へ、露艦隊今回の行爲たる、縱ひ富士川の水禽に驚きて、逃げ歸りたる平公子の笑を貽さざるも、老松の影に怖れて劍を拔きたる狼狽武士の誹を免れない。然るに戰後獨逸の一新聞紙

【獨逸驅逐艦の惡戯】は、當夜獨逸の驅逐艦二隻は露艦隊に對して襲撃演習を行うたとの事を發表し、ロ提督の爲に聊か寃を雪いだ。獨逸驅逐艦たるもの、隨分罪の深い惡戯をしたものである。

北海事件の一旦國際審査委員會の調査に附することに決定するや、事件關係者としてロ提督の幕僚たるクラード中佐以下海軍將校四名を留めて、全艦隊は十一月二日ウイゴーを

【露艦隊タンジールに着す】發し、翌三日亞弗利加北岸なるタンジールに着した。艦隊は此處より本支兩隊に分れ、吃水深くして大砲彈藥等を卸すにあらざれば蘇士運河を航過する能はざる軍艦は、ロ提督之を直率して、大西洋を航下し、亞弗利加南端迂回航路を取り、吃水淺き艦はフェリケルザム少將之を率ゐて、地中海航路を取り、蘇士運河を通過することゝなつた。

【本支兩隊の航路】斯くてロ提督の率ゐる本隊は、ダカール（佛領）、カブーン（佛領）、モッサメデス（葡領）、アンギュラ、ペケナ（獨領）など、世人の耳に新なる、亞弗利加西岸の諸港灣に寄泊して炭水を補充し、フェ提督の率ゐる支隊は、クリートのスダ灣、ポートサイド、蘇

士、ジブーチ（佛領）等を經て、三十八年一月【[illegible]】上旬、兩隊は再びマダガスカル島に於て相會合した。

是より先、我が第三軍の旅順攻圍は既に半歳の久しきに亙り、世界に光輝を放ちたる勇敢なる敵の防戰も、今や糧彈内に盡きて、援兵外に到らず、加ふるに我が軍の攻撃は、日に益々急にして、難攻不落の堅城も、遂に孤城落日の觀あるに至つた。殊に港内に蟄伏せる【旅順の頑守】其の艦隊の如きは、我が砲撃の爲め、既に多大の損害を被り、砲塡は陸上の防備に移し、乘員は要塞の守備に充て、波羅的艦隊從ひ來るとも、到底之に援助を與ふることは出來無くなつた。是に於て露國有識者並に列國海軍事通の間には、露國は更に第三艦隊を増派するにあらざれば、ロジェストウェンスキー艦隊は到底東鄕艦隊と、對抗することは出來ないとの說が高まつた。露【露國當局者の憂慮】國當局者は、此に益々驚愕憂慮し始め、特に御前會議を開きて、更に第三艦隊を編制派遣して、第二艦隊に增派するか、將た第二艦隊を召還するかに關し、會議を凝した。甲論じ、乙駁し、其の結果遂に、今にして第二艦隊を召還するが如きは、大露西亜帝國の體面上、寧ろ敗戰に優る恥である、最後の勝利を博し、日本を屈伏せしむるには、是非とも海上權の獲得を必要とする、宜しく速に第三艦隊を增遣して、ロ提督の東航を繼續せしむべしとの議に決した。尋いで三十七年十二月上旬に至り、旅順要塞の關門たる爾靈山の陥落と共に、旅順艦隊は枕を並べて、悉く港内に沈沒するに至つたので、第三艦隊の【第三艦隊編成せらる】增派は愈々必要となり、同月中旬其の編制を發表し、三十八年一月を期し、東洋に向け出發せしむる事に決定した。元來此の第三艦隊の顔振れたるや、何れも第一艦隊編成の際、老朽鈍弱の故を以て、其の選に洩れたる舊式の軍艦ばかりで、言はゞより屑の艦隊である。斯かる鈍弱の艦隊を增派して、果して能くロ提督艦隊の勢力を增加し得るや、或は却つて累を第二艦隊に及すものにあらずやとは、此の時既に、各國海軍學者の間に、論議せられたる問題であつた。

越えて明治三十八年一月二日、旅順開城の飛報、一たび露都に達するや、全國の震駭は恰も百雷の一下したるが如く、一部の人士は、漸く露國の前途を悲觀して、波羅的艦隊召還の議を再燃した。已に其の艦隊の全滅せる今日、旅順要塞の存否は、波羅的艦隊の【戰略上に於ける旅順の價値】に對して、戰鬪力上何等影響する所あらずと雖も、之が陥落は同艦隊の戰略上に大打撃を與へたものである。乃ち今や波羅的艦隊の作戰目的は、事實上唯一の浦鹽斯徳のみとなつたので、我が艦隊は最早や後顧の憂なく、其の勢力をば一所に集中して敵艦隊の來航を待つことが出來ることとなつた。是に於て露京には、再び御前會【第二艦隊の進退】議を開き、第二艦隊の進退に關して凝議すると同時に、一面にはロ提督に向ひ其の意見を徴した。ロ提督は之に對して答ふる【ロ提督の意見】に、第二艦隊現下の勢力にては、到底東鄕艦隊を擊破して海上權を回復すること難しと雖も、老朽襄類の不良艦を増援として派遣せらるゝ如きは、徒に第二艦隊の繋累を大ならしむるに過ぎざるの害を以てし、且つ久しくマダガスカルに滯留するは、啻に日本艦隊をして戰備を完整せしむるの不利あるのみならず、尚ほ我が兵氣を沮喪せしむるの虞あるが故、精鋭の軍艦のみを率ゐて直に

浦鹽に急進せんとの意見を開陳した。然るに露國大本營に於ては、之を以て無謀の策と爲して採用せず、ロ提督に對しては「マダガスカル」に於て後命を待つべき電命を下した。是に於てロ提督は心頗る平ならず、疾と稱して其の職を辭せんことを請ひたるも、是れ亦遂に許されなかつたとのことである。

斯くて露國政府は佛國の好意中立に依り、婆羅的艦隊をば其の領地なる「マダガスカル」に滯留せしめ、一面には第三艦隊の發航準備を急ぐと共に、一面には陸上戰局の推移を觀察しつゝあつた。是に於て露國海軍の戰略家として有名なるクラード海軍中佐の如きは、

【露國クラード海軍中佐の慷慨】 政府の優柔不斷を憤慨し、辛辣なる論説をば新聞紙上に公表し、「今更第二艦隊を召還するが如きは、是れ現戰爭を休止し、敗戰に甘んぜんとするものである。既に一萬海里の長航程を經て、東洋の門戸に臨める艦隊を召還する如きは、是れ畢竟何を意味するものぞ。寶刀一たび鞘を脫せば斬らずして收むべからず。今日當に吾人の爲すべき所は、唯速に第二艦隊の缺陷を補ふにあるのみ。之が爲には第三艦隊も派遣すべし、黑海艦隊も派遣すべし。國家興廢の秋に莅み、不條理極まる伯林條約の如きに拘泥するの必要

【外交官の本務】 何處にかあらん。外交官の本職は夜會の舞踏にあらず、貴婦人の接待役にあらず、國家の有事に際し國利を樽俎の間に收むるにあるのである。我が露國にして外交官其の人を得ば、黑海艦隊の「ダーダネルス」海峽通過の如きは、是れ易々たる折衝である」と云つて居る。夫れ師を起すこと十萬、出でて征すること千里なれば、内外の費、軍中の奉、日に千金を費すとかや。遠征に巨費を要するは、古今東西同一轍である。露國機關官の計算によれば、第二艦隊一日の航海に要する石炭は實に三千噸に達するとのことである。是を以て見れば同艦隊が「リバウ」出發以來「マダガ

【露國艦隊の軍費】 スカル」到着まで、約三箇月間に消費したる炭費のみにても、實に數百萬圓の多きに達して居る。若し之に其の他の航海需品、並に給炭船の傭料などを加算すれば、其の額は更に驚くべきものである。今日同艦隊を召還せんか、歸航の費用復之に倍加するに至る。而も之に依つて贏ち得るところのものは、列國の嘲笑と、自國の擾亂とである。クラード中佐ならずとも、誰か之に反對せざるものぞ。進んで戰ふ能はず、退いて脫するを得ず、之を兵の窮地と云ふ。ロ提督當時の境遇こそ、實に之に類するものである。往こか浦鹽、歸ろか露西亞、露國第二艦隊の「マダガスカル」に於て思案せる間に、其の第三

【露國第三艦隊の出發】 艦隊の出發準備は着々進捗し、五隻の裝甲艦より成る艦隊は、明治三十八年二月十五日、愈「リバウ」軍港を解纜し、程を急いで第二艦隊の跡を追うた。司令官は「ネボガトフ」海軍少將である。翻つて此の時に於ける我が艦隊の狀況如何にと顧みれば、旅順陷落後、内地軍港に回航したる大小の艦艇は、既に全く其の修理を畢りて新に戰備を修め、將卒共に鬱勃の英氣を抑へつゝ、敵の艦隊何時でも來れと待ち構へて居る。好客

【彈丸水雷是れ膳羞】 遠方より來る、何を以てか之に酬いん、彈丸水雷是れ膳羞!!

二　萬里の遠征（其の二）

夫れ水滯ほること久しければ孑孑生じ、軍

駐ることなければ軍紀弛む、露國第二艦隊は三十八年一月上旬マダガスカル島に到着【露艦の士氣】してより以來、同島に淹留すること既に二箇月、將士漸く軍に倦んで士氣日に衰へ、兵士は徒に飲酒に耽り、將校は不平に滿ち、殊に運送船などに於ては、上官に對して屢〻ストライキをさへ起すものあるに至つた。加ふるに處は瘴癘深き熱帶の海、時は金石融くる南半球の盛夏である。北歐の寒國に生れたる露國將卒の、恨を呑んで病苦に斃るゝもの日として絶ゆることがない。是に於てロ提督は日々各種の操練を勵行して、銳意軍紀の振肅と乘員の健康を圖ると共に、夜は水雷防禦網を張り、艦内には哨兵を配し、港外に哨艦を出し、以て我が襲撃に對する警戒を嚴にした。

是より先き、開戰以來、露國陸海軍の共に敗績するや、現政府に慊焉たる國内の不平黨は、【露國の擾亂】各處に蜂起して盛に戰爭反對說を唱道した。殊に旅順陷落の報一たび露都に達してよりは、彼等の勢益〻猖獗を極め、遂に一種の革命黨と變じた。長老ガポンなる者衆を率ゐて政憲改革を絶叫し、全國の大學生亦之に和し、職工、勞働者の大同盟罷工は各地に起りて、公私の工場は爲に其の業務を休止するに至り・鎭撫の兵士は人民と衝突【露都の騷擾】して、老幼男女數百名の紅血は、露都街頭の雪を染め、或はセバストポリー軍港に於ける水兵の叛亂となり、或はモスコー總督セルジ太公の暗殺となり、國内の騷亂恰も蜂窩を破りしが如く、皇帝は遂に勞働者綏撫の詔勅を發せられ、且つ露國の内憂外患を說きて、官民一致、此難局に當らんことを諭示せらるゝに至つた、現在干戈相結ぶ敵國とはいへ、此時に於ける露國皇帝の宸襟こそ、誠に恐察するに餘りがある。

此騷亂の秋に際し、露國の唯一の賴【露軍の恃み】みとする所は、將に來らんとする奉天の陸戰である。昨年十月沙河の會戰以來、彼我對陣すること既に半歲、今や糧秣彈藥に人馬充實し、南滿の春雪漸く融けて、奉天の大原に兵を動かすに適する時季となつた。此一戰に大山軍を粉碎し、一擧して大連旅順を復し、再轉して韓半島を握らんとは、當時クロパトキン大將の夜々軍營に結ぶ夢であつ【クロパトキン將軍の夢】た。先んずれば人を制す。露軍の旌旗漸く動かんとするを見るや、機を察するに敏なる我【奉天の大戰】が滿洲軍は、クロパトキン軍に對して、二月二十六日全線攻擊を開始した。勇猛慓悍、中將軍の名ある黑木大將の率ゐる第一軍を右翼に配し、沈毅豪膽、鐵石の如き野津大將の率ゐる第四軍を中堅に備へ、健實にして機略に富む奧大將の率ゐる第二軍を左翼に置き、旅順の金湯を屠つて勇名世界に轟く乃木大將の率ゐる第三軍を迂回軍と爲して、敵の右後背を衝かしめ、別に川村大將の率ゐる鴨綠江軍は滿洲軍と協應して、敵の左後背に向つて策動して居る。敵は本營を奉天に置き、強堅なる陣地を數段に構へ、守るに歐露新鋭の兵力を以てし、一歩も退かじと決心して居る。塹壕は深く、堡壘は固く、勇攻剛毅なる我が突擊も、屢〻其の效を奏せず、斃れて又斃れ、逆襲又逆襲、砲聲銃音天地を撼し、劍光砲火空に閃き、伏屍は野を蔽うて流血は塹壕に漲る。我が軍殊死奮闘激戰十日に及ぶも戰況毫も發展せず、攻擊半にして俄雪滿洲軍に降つた。將士忠勇、身を將つて敵壘に迫り、殺戮殺傷、僅に勝運を一擲の危機に占め、三月十日遂に奉天城を奪

取した。此戦争彼我の兵員合して八十五萬人に達し、戦線の延長四十里に亙り、兩軍大砲五百門、俘虜三萬人、實に空前の大戦、曠古の大捷である。

【曠古の大捷】

必勝を期待せし奉天の決戦も、亦遂に露國の大敗に歸し、陸戦の大勢は正に略決定するに至つた。今や外には戦勢の頽敗を挽回し、内には民心の動揺を鎮撫する爲め、露國の採るべき策は、其の波羅的艦隊の東航を断行して、東洋の海上權を回復し、以て直接には我が滿洲軍の糧道を遮断し、間接には我が海外貿易を破壊するの唯一途あるのみとなつた。若し之をしも能くせずんば、勝算なき戦争を徒に継続せんよりは、人道の爲め、速に旗を捲き劍を收めて、和を講ずべきである。是に於てか波羅的艦隊の進退に關する露國の廟議は、漸く決したるものの如く、四十五隻より成る第二艦隊は、ロ提督統率の下に、三月十六日遂にマダガスカルのノシベ灣を出發した。其の向ふ處に關しては、或は本國歸還の途に就きたりといひ、或は第三艦隊を迎ふる爲め、紅海に向ひたりといひ、或は決戦を期して東洋に向ひ前進したりといひ、世評紛々、遂に歸著する所を知らなかつた。然るに十九日に至り、南亞の某港に入港したる某國の一汽船は、マダガスカルの北東一百五十海里の地點に於て、波羅的艦隊四十餘隻の東方に向進しつゝあるを見たとの情報を傳へた。果然ロ提督は戦場に向ひ進みつゝある。

【執るべき策は唯一のみ】

【露國第二艦隊マダガスカルを去る】

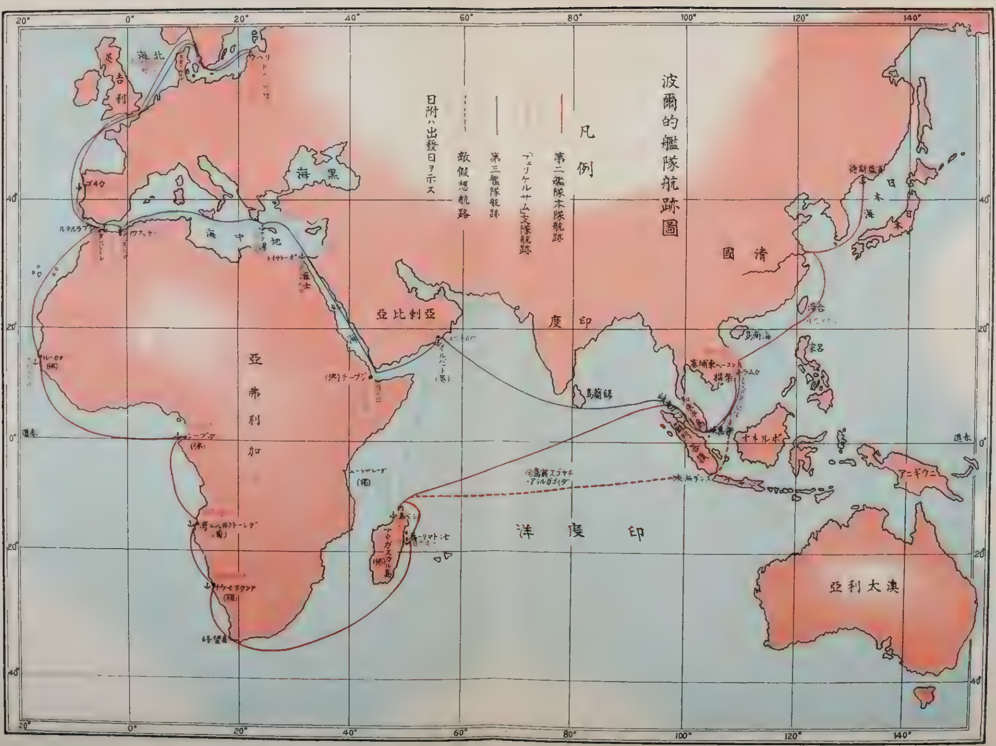
敵國を指して進むれば、マ島より日本近海に航するには普通二様の航路がある。卽ち其の一は、亞細亞大陸の最南端たる馬剌加半島と南洋スマトラ島の間なる馬剌加海峡に向ふものにして、他はスマトラ島と、更に其の南方なるジャワ島の間に通ずる、スンダ海峡に至るものである。而もノシベよりの航程は、兩者殆ど同一である。ロ提督はマダガスカル島滞留中、我が艦隊が悉くボルネオ附近に出没するとの情報に接して居たので、彼我艦隊最初の衝突は、多分同島附近ならんと豫期して居たらしい。而してロ提督の最も恐るゝ所は、艦隊の運動不便なる狭海面に於て、我が水雷攻撃を受くることである。故に之を避けんが爲にはスンダ、馬剌加、何れの關門を選ばんか、或は迂回して更に南方の水道に向はんか、何れにしても、通信機關の發達せる今日、到底日本艦隊の視聴を晦すことは出來ない。馬剌加海峡は、是れ歐亞交通の要衝である。東西に行き交ふ船舶日に幾十隻。憚ふに世界の同情を得るに汲々たる日本艦隊、よもや、天下の公道に於て、戦端を開始することはあるまい。大膽は安全を得るの途なり。ロ提督は此の推斷を以て、遂に艦隊の進路を馬剌加海峡に向けた。「マダガスカルより馬剌加海峡に至る此の航路こそ、世界の艦隊の嘗て通航したことがないと傳へらるゝ所である。

【馬剌加かスンダか】

【大膽は安全の途】

波羅的艦隊の東航、之を航海術上より觀ずれば、必ずしも至大の難事にあらず。世人の其の成功を危みたる所以のものは、唯戦時國際法によれる給炭問題の爲である。喜望峰の迂回、其の道程長しと雖も、大西洋の荒濤、其の航路險悪なりと雖も、途中寄泊すべき幾多の港灣がある。其の同盟國に屬するものは、之を利用し、弱邦に屬するものは、之を強借し、暴風到れば入りて避け、炭水乏しければ寄りて補ふことが出來る、印度洋三千二百海里の横断こそ、實に要

【波羅的艦隊と航海術】


波爾的艦隊航跡圖
凡例
第二艦隊本隊航跡
「フェリケルサム」支隊航跡
第三艦隊航跡
敵假想航路
日附ハ出發日ヲ示ス
北海
英吉利
黒海
地中海
亞剌比亞
印度
清國
日本海
日本
亞弗利加
印度洋
濠太利亞
ボルネオ
ニウギニア
錫蘭島
マダガスカル島
喜望峰

(第一圖)

【露艦隊航路中の最難所】爾的艦隊航路中の最難所である。途上一の寄泊すべき港灣なく、又一の情報を得るの機關なく、日は波より出でて波に沈む、淼茫無涯の大海洋、唯幸なるは熱帶の海の常として、滄波の稍靜穩なることである。是に於てロ提督は多數の給炭船を準備し、驅逐艦は運送船をして之を曳航せしめ、洋中載炭を行ひつゝ、決然印度洋に浮んだ。山中暦日なきも、花尚ほ春を報ず、

【洋中の感】獨り海洋ばかりは春來れど花咲かず、秋去れど紅葉散らず、時は是れ艶陽四月の春半とは云へ、苦熱肉を爛らす赤道の直下、舷に碎くる潮の飛沫を花と見て、明日さへ知れぬ戰場に向ふ、露艦隊將士の心中察無量であらう。

斯くて露國第二艦隊は爾後世人の耳目と遠ざかること約二十日にして、四月七日の朝、忽焉として馬剌加海峽に現れた。二十日の間一片の情報にさへ接せず、茫然戰場の關門に乘り込みたるロ提督の大艦隊と排水量僅に三百噸の驅逐艦を伴ひ、三千海里の大洋をば、無事に乘り切りたる露艦隊の成功とは、敵ながら慥に賞讚に價するものがある。

【露艦隊馬剌加海峽に現る】婆爾的艦隊が馬剌加海峽に現れたるの報、一たび全世界に傳へらるゝや、同艦隊に對する世人の態度は、遽に一變するに至り、從來輕侮と嘲笑とを以て遇はれたる露國艦隊は、今や尊敬と同情とを以て迎へらるゝに至つた。我が同盟國たる英國新聞、タイムスすら、ロ提督の行動に對して、左の如く論じて居る。

【露艦隊に對する世界の讚賞】本戰役中、吾人の露國海軍の爲に蒙りたる苦痛は頗る大なるものありと雖も、ロ提督及び其の統率せる婆爾的艦隊が、毫も危險を辟せずして馬剌加海峽を通過し、傲然として支那海に出でたる壯擧は、吾人英國人をして轉た歎賞を禁ずる能はざらしむるものあり、此の勇壯なる行動は、吾人をして同艦隊幾多の不法行爲を忘却せしめ、且つ露國海軍軍人が、眞に勇を鼓して、勝敗を決せんとするの氣概あるものたるを認めしむ云々。

此の如く世人の同情と、賞讚とを博したる露國艦隊は、豫期したる我が艦隊との衝突もなく、去八日四十餘隻の大艦隊は、陣形堂々新嘉坡沖を航過して支那海に入り、十四日全艦

【露艦隊カムラン灣に入る】隊意なく、佛領安南なるカムラン灣にと錨を投げた、時にネボガトフ司令官の率ゐる第三艦隊は、既に紅海南端なるジブチを發して、波を印度洋に破つて居る。今や我が露國第二艦隊既に支那海に進入す。今や我が極南の關門たる臺灣に出頭すること僅に四日の航程に過ぎない。是に於て我が聯合艦隊は、全勢力をば一所に集結し　敵艦の若し北上すれば、唯一戰に之を撃滅せんものと、髀を撫つて待ち構へて居る。然るに露國艦隊は、カムラン到着以來、悠々根據を茲に構へ、五日を經るも、七日を過ぐるも、更に發動の形勢が見えない。夫れ戰はずして敵を屈するは、

【兵の上著】兵の上著なるものである。戰備整齊、士氣旺盛なる我が艦隊は、婆爾的艦隊との決戰を辭する所にあらずとは云へ、當時に於ける我が海軍の軍略としては、成るべく敵艦隊のマ島以東に來航せざらん事を願うたのである。即ち戰はずして敵の自ら屈せんことを希望した。

【用兵の要訣】然るに今や敵の第二艦隊は支那海に入り、其第三艦隊亦已に印度洋に進み、遠からずして兩艦隊の結合を遂げんとして居る。之を以て決戰は遠からずとせば、我は敵の集結せるに先んじて之を個々に撃破するが用兵の要訣である。是に於て、吾が

てマダガスカル島の中立問題に對して寛なりし我が政府は、今や毅然として安南沿岸の中立違犯に關し、佛國に對して強硬なる談判を開始した。由來戰略と政略とは、多くの場合に於て互に相關聯して居るものである。

【戰略と政略】殊に海軍戰略と外交政略とは、往々密接不可離の關係を有することがある。露に我が艦隊の修理・未だ成らざりし時に當つては、一日も永く敵の艦隊をマダガスカル島に留め置くの必要があつた。併し今日に於ては、一日も早く敵の艦隊を安南沿岸から追ひ出さねばならぬのである。即ち敵艦隊の來らざる前に、我が艦隊の修理を竣成し、或は敵の合同に先つて、之を個々に擊破せんと圖るは、是れ海軍戰略である。之が爲めマ島に於ては中立違犯を寛假し、安南に於ては之を嚴責するは、是れ外交政略である。若し夫れ徒に國際條規に拘泥し、我が艦隊の現狀如何をも顧みず、マ島に在る敵艦隊に、速に去るを急がしめ、或は安南沿岸に永く敵艦の淹留を許すが如き策を取らんか、是れ外交政略の拙劣の爲め、累を戰略に及すものである。

露國第二艦隊のカムラン灣に入りてより既に十餘日、我が政府の強硬なる抗議に對し、佛國政府は已むを得ず、申譯的に、ロ提督に向ひカムラン灣より退去を求めた。そこで露國艦隊は亦申譯的にカムラン灣を出で、更に其の

【露艦隊ホンコー灣に移る】北方五十海里なる、ホンコーへ灣に移つた。露艦は灣外に遊弋して、諸種の訓練を施行する傍ら、中立國船舶の臨檢を行ひ、夜は灣内に警泊して、或は軍需品の搭載を爲

【佛國政府の中立違反】し、或は艦船の修理を行ふ等、同灣を以て公然作戰の根據地として居る。而も佛國政府は知つて知らざるが如く、啻に之を禁ぜざるのみならず、暗に補助をさへ與へつつある。抑も戰時國際公法なるものは、列國各其の主義見解を異にし、今日未だ各國に共通せる一定の法規なるものがない。例へば石炭の如きは、甲國にては之を戰時禁制品と爲すも、乙國にては之を非禁制品と爲し、又交戰國軍艦の中立港灣滯留期間の如きも、丙國は二十四時間主義を取るも、丁國にては其の期日に定限を設けない。併し乍ら今日世界文明國の間に、戰時國際公法なるものの存する根本要義を問へば、一は交戰國並に中立國間に於ける、相互の權義を尊重擁護し、一は戰爭の地域と時間とを、成るべく小限短縮せんと欲する爲である。交戰國軍艦に對する給炭問題、並に其の滯留期日に關し、佛國が果して如何なる主義を採れるかは敢て問ふを要せず、苟くも自己の領水域を以て交戰國軍艦の作戰根據地に供用するに至りては、是れ單に中立違反のみでなく、已に軍事的補助を與ふるものである。是に於て佛國の行動に

【我が國論の沸騰】對する我が國論は大に沸騰し、或は各新聞の論議となり、或は商業會議所の佛艦排斥となり、事態漸く大ならんとした。もし夫れ我にして一朝佛國と絕たんか、英國は同盟の義務として、我が國を援けねばならぬ。英佛戰を交ふるに至らば、米獨亦動搖を免れない。然るときは是れ世界の大亂、人類の大不幸である。當時英國の輿

【英國の同情】論は大に同情を我に表し、我が國の主張を以て正當となすと同時に、一面には我に忠告するに、愼重の態度を持すべきを以てし、一面には佛國に向つて其の反省を慫慂した。開戰以來英國官民の我に寄せたる、熱誠なる聲援と懇切なる同情とは、戰勝と共に永く我が國民の記念すべきことである。

佛國政府の窮窘を他所に見つゝ、ロ提督の、安南沿岸をば低徊去る能はざる所以のものは、一に其の第三艦隊を待ち合さんが爲である。日佛の交渉、漸く急なる間に、ネ提督艦隊は駸々程を進めて、五月五日新嘉坡海峽を航過し、越えて九日、ホンコーへに於て、首尾よく第二艦隊との合同を遂げた。

【露國第二第三艦隊合同す】

兩艦隊將士の歡喜は、實に絶頂に達し、「ウラー」の聲は、遠く安南山中の猛獸を驚さんばかりであつた。夫れ遠親は近鄰に若かず、急湍を渡るには吳越も倚ほ同舟を欲するとかや。

【吳越も同舟たらんと欲す】

前にも述べた如く、ネボガトフ司令官の率ゐる第三艦隊の軍艦は、多くは第二艦隊の殘滓である。故に其の合同が、軍事上果して第二艦隊に取りて利益ありや否やは暫く措き、今や硝煙空を掩うて、彈雨降り注ぐ戰風の中心に向つて航進せんとするに際し、吳越ならぬ同胞艦隊との合同は、ロ提督艦隊に取りては、正に千鈞の重きを加へたる感があつたであらう。

【露國第三艦隊の苦心】

殊に第三艦隊に至りては、ジブーチ出發以來、彼我の情報に接せざること二十餘日、ロ提督艦隊の安否をさへ知ることを得ず、今宵は日本水雷艇の襲擊やあらん、明日は日本艦隊の攻擊や受けんと、將卒共に戰々兢々、夜の目も眠らず心配したるにも拘らず今日無事其の本隊に合し得たる歡びは、一たび戰陣に臨みたる者の、容易に推量し得る所である。

露國第二、第三艦隊合同の報、一たび世界に傳はるや、列國軍事通は筆を揃へて、航海術上に於ける露國艦隊の成功を稱揚すると共に、

【合同と戰術上の利害】

軍事上に於ける合同の利害に關して、盛に論評を試みた。或ものは、舊式にして速力大ならざる第三艦隊との合同は徒に第二艦隊の行動を覊束掣制するのみにして、適以て日本艦隊の戰勝を大ならしむるに過ぎずと論じ、或ものは、ロ提督が佛國の苦痛を冷眼視し、隱忍以て第三艦隊の來會を待ちしは、軍事上適當なる擧措なりと評した。

抑も一利の存する處一害亦之に伴ふは、兵に於ても往々免る能はざる所である。盾の一面のみを見て、直に其の堅脆を判じ、盧山の一側を眺めて、忽ち其の峰巒を定めんとするが如きは、蓋し當を得たるものでない。

【團隊競走か將た綱引か】

元來艦隊の戰鬪なるものは、團隊競走であるか、將た綱引であるか。若し戰鬪を以て團隊競走とすれば、足腰弱き老幼を伴ふの不利なるは、言を俟たない。若し又之を以て綱引とすれば、三尺の兒童も倚ほ多きを利益とする。而して之を綱引となすか、競走となすかは、一に主將其の人の戰術の運用如何によつて決するものである。ロ提督にして、若し能く我が艦隊と競走するを避け、之を綱引と爲すを得ば、重砲二十門を有し、五隻の裝甲艦より成る、第三艦隊との合同は、是れ寔に戰鬪力上多大の利益と云はねばならぬ。

三　萬里の遠征（其の三）

隻眼を護る爲には、往々十指の斷ずるを辭せず、況して他人の苦痛の如きは、十年倚ほ之を忍ぶが人情の常である。露國太平洋第二艦隊司令長官ロジェストウェンスキー中將は、其の第三艦隊の來着を待たんが爲め、佛國の煩悶窮窘を意とせず、冷然として安南沿岸に滯留すること、約一個月に及んだ。而も

今や其目的を達し、最早や中立國の恩惠に浴する必要がないので、不要の船舶をば西貢に送り、五月十四日四十八隻の大艦隊を率ゐ浦鹽斯徳に向ひてホンコーへを出發した。**【露艦隊ホンコーへを發す】** 是に於て一時危急に迫りたる日佛の交渉も、一先づ落着を告げ、世界の大亂を未發に防ぐことが出來た。ロ提督の此の行爲たる、縱令孔孟の叱責を受くるも、孫呉の賞讚を博するに足るものである。**【孔孟の叱責孫呉の賞讚】**

抑もホンコーへより浦鹽斯徳に到るには、是非とも二個所の關門を通過せねばならぬ。即ち一は臺灣の門戸にして、他は日本海の門戸である。而して臺灣の門戸には臺灣海峽**【臺灣海峽かバシー海峽か】**及バシー海峽（一名バタン海峽）の二通路があつて、前者は臺灣と支那大陸間の水道にして、其の間隔約八十海里、支那沿岸各港より歐洲に到る船舶の常航路である。而も臺灣に近き、其の四分の一の處には澎湖列島が横はつて此處には我が馬公の要港がある。又後者は、臺灣と其の南方なる呂宋島の間の水道にして、其の間約二百海里、中間にはバシー其の他幾多の島嶼點在するも、何れも未開の蠻島のみで汽船の通航は極めて稀である。凡そ敵に對して、成るべく自己の行動を秘隱するは、兵家の最も心すべき所である。之を以てロ提督は世人の視聽より遠ざかり、且つ馬公に在りと想像せらるゝ我が艦隊の攻撃を避けんが爲め、航路をバシー海峽に選び、行々中立國船舶の臨檢捜索を行ひつつ、平均五六海里の緩速力を以て、五月十九日同海峽を通過した。是に於てロ提督の次に決定すべき問題は日本海に入るべき航路である。世人の知れる如く、太平洋より日本海に入るには、朝鮮海峽、津輕海峽、宗谷海峽の三通路がある。朝鮮海峽とは、我が九州と、朝鮮との間に挾まれたる海區にして、其の中間に横はれる壹岐、對馬の二島によつて、更に東西の兩水道に分たれて居る。而して東水道とは對馬と壹岐の間、西水道とは對馬と朝鮮との間を稱し、其の最狹部の廣さ、何れも約二十五海里である。津輕海峽とは我が本州と、北海道との間に通ずる水道にして、其の最狹部の廣さ僅に十海里に過ぎない。又宗谷海峽とは、我が北海道の北端宗谷岬と露領樺太の南端ノトロ岬との間に在る水道にして、其の廣さ約二十二海里を有して居る。

而して臺灣南方より、浦鹽斯徳に到る航程は朝鮮海峽を航過すれば約一千五百海里、津輕海峽を經由すれば約二千三百海里、又宗谷海峽を迂回すれば約二千九百海里である。次に此等三海峽に於ける地形、其の他の**【三海峽の狀態】**狀況を考覈するに、朝鮮海峽は其の海面最も廣濶にして、潮流亦緩く、且つ最狹部を除く外、大艦隊の運動に適するのみならず、當時尚ほ濃霧の襲來することが稀である。津輕海峽は水道狹部の延長實に六十海里を超え、潮流激迅にして、濃霧屢海面を鎖すの虞がある。宗谷海峽に至つては當時既に霧期に入り、海上常に密濛にして、大艦隊の航行を妨げ、加ふるに海峽に達する前、國後水道の關門を通過せねばならぬ。故に航海術上より言へば、朝鮮海峽は露艦隊の爲め、最も安全にして、最も捷き航路たるは論を待たない。併し兵戰上の利害得失に至つては、單に航海の難易、距離の遠近のみを以て決することは出來ない。己が作戰の目的、敵防禦の寬嚴をも考察せねばならぬ。抑も婆爾的艦隊が遠く萬里の波濤を越えて來航したる所以のもの**【露國艦隊の目的】**は、單に浦鹽斯徳に到着するのみを

以て、最終の目的とするものでない。其の眞の目的とする所は、日本艦隊を擊破して東洋の海權を恢復し、以て旣倒の戰勢を一擧に挽回せんとするにあるのである。併し乍ら、七箇月に餘る長航海に、船體は汚損し、機關は摩耗し、備品は缺乏し、乘員は疲勞せる艦隊を以て、直に艤裝完備、士氣旺盛なる我が艦隊と、雌雄を爭はんよりも、一先づ浦鹽に入って、戰備を整頓し、英氣を蓄養し、機を見て更に出動する方が、遙に賢明なる策である。之をロ提督の爲に謀るに、

【ロ提督の執る可き三策】

玆に採るべき三策がある。即ち我が虛を窺ひ、決戰を避けつゝ全艦隊を率ゐて、浦鹽に潜入する、是れ上策である。其の艦隊の一部を犠牲として、我が艦隊を一方に牽制し、殘部を提げて浦鹽に入る、是れ中策である。全力を擧げて堂々我が艦隊と決戰する、是れ下策である。想ふにロ提督亦必ずや、此の上策を希望したであらう。然りと雖も、之が成功を期する爲には、先づ我が艦隊主力の所在をば、確實に偵知せねばならぬ。既に諜報機關の絶えたる露艦隊に取りては、是れ最も困難にして、殆ど不可能の事である。次には巧に我が視聽を避けねばならぬ。我が國沿岸の岬角、島嶼には無數の望樓、觀哨が設置せられ、通信網は恰も蜘蛛の巢の如く、全面に敷かれてある。敵艦隊發見の警信、一たび發すれば、東西南北、響の如く應ずることが出來る。昨年黃海海戰後、我が東海岸を逆航して、浦潮に逃れんとしたる、賊たる小型巡洋艦「ノーウィク」でさへも、忽ち望樓の爲に發見せられて、我が艦隊の邀擊する所となり、あはれ屍を雪深き樺太の沿に曝すに至った。況して四十隻の大艦隊を率ゐて、延長數百海里に亙る、我が沿岸の視聽を晦まさんことは、翔天潛海の術あらざる限り、到底不可能である。之を以てロ提督の採るべき上策なるものは、十中の十まで成功の望なきもので

【中策】

ある。然らば中策を採り、艦隊を二分して、一を北海に、一を朝鮮海峽に進めんか、東西相距つる一千海里、兩隊通信の聯絡全く絶えて、到底完全なる協同動作を取ること難く、兩隊個々に擊滅せられ、動もすれば虻蜂共に失ふの結果を生ずるの虞がある。是に

【執るべきは下策のみ】

於てか、露艦隊の採るべき策は、今や唯一の下策あるのみである。既に決戰を避け得るの望なく、且つ我が艦隊の所在全く不明なりとすれば、海面廣濶にして、戰を爲すに便なる朝鮮海峽を通過するを以て、最も得策なりとするは、理の自ら明なる所である。是れ即ちロ提督が對馬海峽突破を決心した所以であらう。

既に朝鮮海峽を强行通過するに決したる以上は、次に解決すべき問題は通過の時刻であ

【晝か夜か朝か暮か】

る。晝か、夜か、朝か、暮か、是れ亦戰略上、至大の利害を有する問題である。前述べた如く、ロ提督の最も恐るゝ所は、數十隻を以て算する我が驅逐艦、水雷艇の攻擊である。是れロ提督のみならず、凡そ實戰に臨むもの、等しく感ずる所にして、一萬噸の大艦が、僅に百噸の水雷艇を恐れて、逃げ廻るなぞは、實に海戰術上に於ける一奇觀である。昨年旅順方面の戰鬪に於ける驅逐艦、水雷艇の實蹟に照し、世人早くも水雷の效果に關して疑を懷くものあるに至った。

【水雷と河豚】

併しながら、元と水雷の恐るべきは、恰も河豚の恐るべきが如くである。河豚の中毒は、極めて稀なるも、其の害たるや、必ず人の生命に關する。今日水雷の命中率は比較

的小なるも、一たび中れば、巨艦と雖も、沈沒若くは廢艦となるを免れない。世人は河豚の中毒稀なるも、尙ほ之を食ふを敢てせざるが如く、軍艦は水雷の命中率小なるの故を以て、之を輕蔑することは出來ない。而して水雷攻擊の眞威を發揮するは、主として夜にある。ロ提督は我が驅逐艦、水雷艇の根據地を、對州附近と想定したるが故に、夜間其の附近に接近するは、最も好まざる所である。之を以て日出前、並に日沒後に於ては、成【海峡通過は正午】るべく遠く對州と隔絕せんが爲め、海峡の最狭部をば、正午に通過せんと決定した。

作戰の大綱已に決し、行動豫定亦定まる。露國艦隊は、琉球宮古列島の東方を過ぎて、南黃海に進入し、五月二十三日洋中に漂泊し【最後の載炭】て、最後の石炭積みを行うた。上下甲板は固より、士官室、艦長室に至るまで、苟くも艦內空積の存する限り、大砲の操縱を妨げざる限り、到る處石炭を滿載し、爲に戰艦の如きは、裝甲部が全く水面下に沒したとさへ傳へられる。かくて艦隊は、二十五日朝吳淞沖に達し、手足纏の運送船をば、上海に放ち、大小三十八隻の艨艟は、愈〻決戰を期しつゝ、波風凜々海を壓して、朝鮮海峡東水道に向ひ直進した。是より先きロ提督は、【[illegible]の牽制運動】我が艦隊を惑はし、之を北海方面に牽制せんが爲め、臺灣附近に於て、假裝巡洋艦の一支隊を放ち、我が東海岸に作動せしめた。併し此の支隊は、其の後如何なる行動を取りたるか、一度も其の姿を我が沿岸に現さなかつたので、ロ提督の計畫は、全く水泡に歸した。

露國艦隊は途上幸に、一の船舶にも遭遇せず、五月二十六日の正午、既に朝鮮濟州島【回顧すれば南國一睡の夢】の南方に達した。回顧すれば、冬猶ほ淺き昨年十月の中旬、祖國の隆替を雙肩に託せられ、萬歲聲裡にリバウ軍港を出でてより、日を閱すること二百二十日、程を重ぬること一萬七千海里、昨日は瘴烟迷ふ亞弗利加の海、今日は炎熱焦す印度洋、或は風濤荒き洋中の載炭に、人知れぬ袖を濡らし、或は不自由勝なる艦內の生活に枯腸屢醫し難く、風檣索に嘯けば、明日航海の難を憂ひ、月舷頭に冴ゆれば、千里故山の妻子を懷ふ。殊に支那海に入りてよりは、海鳥の羽ばたきにも、敵の來襲かと驚かされ、波際に光る星影も敵の燈影かと疑はれ、波枕、寒床の夢さへ安からず、千辛萬苦を嘗め盡したる萬里の遠征も、今や唯是れ南柯一睡の夢となつた。

九仞の山將に一簣の功に成らんとす、目指す浦鹽まで剩す航程僅に七百海里、明日は愈〻日本海に乘り入るのである。見事朝鮮海峡を突破して、戰捷の祝杯を浦鹽に擧ぐるか、將た六尺の肉塊をば屑く日本海の鯨鰐に與ふるか、一身の生死、祖國運命の決する、こ【こゝ二十四時間の内】ゝ二十四時間の内である。上は長官より、下は一卒に至るまで、心に懸るは明日の戰、人々の面には深き憂愁の色滿ちて、談笑の聲もいと稀に、或は妻子に訣別の文認むるもあり、或は死後の形見を戰友に託するもある。陸行かば草生す屍、海行かば水漬く屍は、武士の常の道とは云へ、纔に懸崖を降つて、更に深淵に臨まむとする露艦隊將士の心情、思ひ遣るだに哀れである。

【フェリケルザム司令官の訃】殊に哀れなるは、フェリケルザム司令官の病歿である。同提督はマダガスカル滯留中より健康を損じ、爾來艦內に在りて、

療養に手を盡したるも、藥石效なく、五月二十三日無限の恨を齎しつゝ、太平洋上遂に不歸の客となつた。ロ提督は士氣の沮喪せんことを憂ひ、固く其の死を祕して、次席司令官たるネボガトフ少將にさへ知らさなかつたとのことである、自國艦隊全滅の慘狀を見ずして逝けるフェリケルザム少將は、夫れ幸か不幸か。

露國第二太平洋艦隊司令官海軍少將フェリケルザム

五月二十六日も早や暮れた。風颯々として波怒り、雲濛漠として海暗し。今宵ぞ日本水雷の攻撃を免れない。全艦隊燈火を蔽ひ、音響を禁じ、哨兵を配備し、大砲に裝彈し、警戒最も嚴重である。平素は賑やかなる士官室も、今日は「オーッカ」の消杯擧ぐる人もい【全艦寂寥】と尠く、まだ宵ながら艦内閴として人語稀に、飢ゑたる鰻の艦底を嚙るが如き、重くるしき汽械の響のみ、獨り夜の寂寞を破つて居る。艦隊は愈進んで今濟州島と我が五島との中間を進みつゝある。風は益〻強く、波は次第に高くなつた。艦首に碎くる激浪の飛沫と、艦尾に流るゝ推進器の渦流とは、烏【風濤獨り騷ぐ】羽玉の眞の闇に、獨り物凄き燐靑の光を洩し、檣桁に激する轟々の風と、艦側を打つ淙々の浪とは、憂に疲れたる哨兵のはかなき夢を驚かして居る。夜はいつしか更けて、早や子を過ぎた。何れの寢臺も何れの釣床も、主はあれども、鼾の聲は聞えない。恐らく萬感胸に逼つて眠成り難いのであらう。各艦の無線電信機は、頻に日本艦の通信を傍受して居る。ホンコーへ出發以【我が艦隊の所在】來既に二週日、杳として日本艦隊の消息に接しない。東鄕大將果して其の艦隊を何處にか伏せたる。臺灣か、津輕か、將た朝鮮海峽か。

【「スウォーロフ」の士官】旗艦「スウォーロフ」の士官室に

集れる上官數名、何れも眼光最と衰へて面には斑々飛潮の結晶を留めて居る。是れ今しも哨兵の當直を終りたる人々にして、已が私室に退きて、獨り悶々の念に苦まんよりは、寧ろ此の一二時間をば共に語り明さんと欲するのであらう。談は何時に替らぬ、日本艦隊の所在問題である。從卒の汲み出す一杯の紅茶に、渇ける喉を濕しつゝ、一人の士官は先づ口を開いた。

【臺灣海峽說】「馬剌加海峽に入りてより以來、今日か明日かと待ち構へたる日本艦隊の今に至るも一隻の水雷艇さへ見えぬは、誠に不思議の至りである。思ふに東鄕大將は、今頃必ず臺灣附近に於て、我々を待ち居るに相違ない。戰略上の常道より打算すれば、日本艦隊の根據地は、是非臺灣若くは澎湖島でなければならぬ。何故となれば、日本艦隊の立場としては、萬難を排して、我が艦隊の浦鹽に入港するを喰ひ止めねばならぬ。若し我が艦隊をして浦鹽に入らしめんか、東鄕大將は戰略上已に我がロ—提督に負けたものである。故に我が艦隊が朝鮮海峽に向ふか、將た北海道方面に向ふかを偵知する爲め、武裝强鋭、速力優駿、而も長途の航海に耐へ得る有力なる偵察艦隊をば、此の方面に派出し置くは、是れ日本艦隊の戰略上、絕對に必要なることである。而して日本軍艦中能く此の任務に耐へ得るものは、唯上村提督の率ゆる裝甲巡洋艦隊のみである。然るに今、東鄕艦隊より、上村艦隊を割けば、其の殘りは到底我が露國艦隊に敵することは出來ない。斯かる弱勢の艦隊を以て、縱令朝鮮海峽を扼するも、是れ鼠を以て猫を守るに等しく、寧ろ戰はずして朝鮮海峽を明け渡す方が優しである。既に偵察隊を派遣する能はずとせば、東鄕大將は是非とも其の全力を擧げて、臺灣附近に前進せざるを得ない。明朝日本の望樓が、我等を發見し、東鄕艦隊が周章狼狽、朝鮮海峽に歸る頃には、我等は已に浦鹽に上陸して、悠々半歲の垢を流しつゝあるであらう。諸君我が艦隊の爲に、豫め祝杯を擧げようではないか。」

幾日月の潮風に曝されて、釦の青銹せる外套を纏へる一人の若き士官は、葉卷の灰を皿に落しつゝ、

【北海說】「若し實際の戰爭なるものが、大學校で習ふ圖上演習と同一のものとすれば、或はA君の說の通り、東鄕艦隊の所在は、臺灣近傍でなければなるまい。併し日本今日の狀勢に於ては、財政上最早や戰爭の永續を許さない。旅順方面に於けるが如き、悠長なる作戰は、日本國力の堪へ得ざる所であらう。今日東鄕提督の採るべき策は我が艦隊を粉碎するか、所謂のるか、そるか、否らずば日本艦隊の全滅を見るか、乾坤一擲の大決戰を行ふのみである。之れが爲には、東鄕提督は、常に艦隊の全力を掌中に把握して、其の根據をば我が艦隊と必遭の地に占めねばならぬ。然るに臺灣方面たるや、搜索面廣濶に過ぎ、一方に搜索を嚴にすれば、兵力を分散を來し、一方に兵力の集中を圖れば、搜索自ら粗となるを免れない。即ち動もすれば、我が艦隊を逸するの虞がある。若し夫れ臺灣方面に於て、一たび我が艦隊を逸せんか、爾後に於ける戰機の挽回は頗る困難であらう。故に今日の場合、臺灣方面に根據を選ぶは、日本艦隊に取りて策の得たるものと

凡例
敵艦隊實航路
敵艦隊假相航路
パシイ島ヨリ朝鮮海峽ヲ經テ浦塩斯德ニ至ル 一千九百海里
同 津輕海峽ヲ經テ同 二千三百海里
同 宗谷海峽ヲ經テ同 二千九百海里
清國
韓國
黃海
日本海
東海
支那海
太平洋
樺太
北州
本州
九州
四國
臺灣
海南
安南
暹羅
呂宋
比律賓
ボルネオ
スマトラ
新嘉坡
浦塩斯德
宗谷海峽
津輕海峽
根室
琉球諸島
南方諸島
小笠原群島
千島列島
國後水道
濟州島
上海
臺灣海峽
バシイ島
カムラン灣
ホンコーヘ
五月十四日出發
二十二日
二十五日
馬來半島
マラッカ海峽

(第二圖)

はいへない。東郷提督の在るべき處は、どうしても朝鮮海峽か、或は津輕海峽の中でなければならぬ。而して兩海峽中、果して其の何れに在りやの問題に至りては、既に戰略問題の範圍を脫して、東郷其の人の信念に屬するものである。素より東郷提督も、海圖と兩脚器とを有する限り、我が艦隊のホニコーへ出發後、若干日間は、必ずや朝鮮海峽に潛んで、我々を待ち受けたであらう。然るに我が艦隊は最近十日の間、幸に、一隻の中立國汽船にさへ遭會せず、全然其の所在を韜晦し得たるのみならず、遂に日本東海岸に分遣したる假裝巡洋艦の牽制運動により、流石の東郷提督も苦心焦慮の末、今頃は屹度北海道方面に移動して居るであらう。明朝我が艦隊が朝鮮海峽に現れたるの報に接し、直に邀撃運動を開始するも、戰場は必ず浦鹽近傍なるべきを以て、地利上我に七分の利益がある。……」

「ソーファ」の上に横はりつゝ、眼を閉ぢて靜に二人の議を傾聽しつゝありし壯年士官の一士官は、此の時ヤヲラ起き直りつゝ、いと莊重なる口調を以て、

【朝鮮海峽說】「僕は兩君と聊か異つた意見を持つて居る。即ち東郷大將は必ず朝鮮海峽に在りと、斷言するを憚らない。其の理由に至つては敢て多言を弄するまでもなく、我がロジェストウェンスキー提督が何故に進路を朝鮮海峽に選んだかを考ふれば、自ら釋然するであらう。B君の言はるゝ如く、僅に假裝巡洋艦の一二隻に迷はされて、輕々に進退する如きは、決して大海將の爲すべき所でない。東郷提督にして、果して吾人の信ずる如き明將であるならば、必ず朝鮮海峽より一歩も動かぬであらう。東郷提督にして朝鮮海峽に在りて、若し我が艦隊を北海道方面に逸せば、是れ天運にして、不明の罪でない。之に反して若し北海道方面に在りて、我が艦隊を朝鮮海峽に逸せば、是れ兵道に暗きの謗を免れない。夫にしても東郷提督は定めし今頃は我が艦隊の行動を知らんが爲め、頓悶苦惱夜も碌々眠れぬであらう。併し東郷大將の頓悶も、我々の議論も、其の解決を見るは、今二時間の後である。日本艦隊を臺灣若くは津輕方面に在りとする樂觀說に贊成の諸君は、浦鹽到着後に着る上陸服の掃除でも仕て置き給へ、我輩の說に贊成の諸君は、いや最後の快眠に、明日の元氣を養はうではないか。」

軈て一人去り、二人去り、跡には眠むさうなる從卒が、皿や「コップ」を片付ける音のみカチャン／＼。

四　待つ有るを恃め

敵の來らざるを恃むことなく、吾之を待つあるを恃めとの孫子の一句は、日本海々戰前我が聯合艦隊司令長官東郷海軍大將が、部下に與へたる訓示の一節である。露國太平洋第二艦隊の編成せらるゝや、當時世界兵家の多くは、之を以て一種の恐嚇手段に過ぎずと爲し、中立國の援助を得ずして、斯かる大艦隊の遠航に適せざるを唱へた。併【我が海軍の作戰】し我が海軍に於ては、之を以て絶對的不可能事と爲さず、常に之に對して、待つあるの準備を怠らなかつた。初め同艦隊の出發は、

三十七年五月との宣言なりしを以て、其の回航に要する日數をば、長くて四箇月と算定するも、同年九月には東洋に達する筈である。故に我は此の新來の敵に對する戰略上是非とも夫までに在來の東洋艦隊、尠くとも旅順艦隊丈でも擊滅せねばならぬことゝなつた。

【旅順の敵艦隊】然るに旅順の敵艦隊は、開戰以來常に退嬰の策を執り、深く港內に蟄伏して、更に出戰の氣勢がない。要塞掩護の下に在る敵艦隊をば、海正面より我が艦隊を以て攻擊することの愚なるは、千金の玉を以て、鐵壁に投ずる樣なものである。是に於て旅順艦隊を擊滅するには、先づ其の要塞を攻落して、敵艦隊を港外に追ひ出すより外に途がない。是れ我が第三軍が損害を顧みず、不滅的强襲を決行したる所以である。而して旅順攻略の遲延すると同時に、敵の第二艦隊の出發も、亦種々の障害の爲め、漸次後れて七月となり、八月となり、遂に十月となつた。此の時に當り第三軍は人力の有らん限りを盡して、鋭意攻擊に努めたるも、敵の防

【愈攻めて愈堅し】禦は愈攻めて愈堅く何時攻略し得べしとの見込さへ立たない。已にして十月十六日、滿洲發の警電は、霹靂の落つるが如く、敵第二艦隊のリバウ出發の報を傳へた。爾後同艦隊は、駸々として程を進め、獨逸洋に於ける漁船砲擊の奇行も、未だ以て其の東航を阻止するに足らず、日々我が大本營に達する電報は、曰くヴィゴーに到着せり、曰く、タンジールを發せりと、刻々時々、戰場に近づきつゝあるを報じて居る。

【我が艦隊の現況】時に我が聯合艦隊は、開戰以來連續絶えざる攻戰に從事すること既に數箇月、艦底には穢れて速力衰へ、機關は弛みて故障多く、殊に兵器の毀損も亦尠くない。新來の好客に對するには、是非是等を修理補綴するの必要がある。而も此の修理たるや、到底十日や二十日の短時日では出來難いのである。敵の第二艦隊は、益々程を急ぎ、遲くとも來年一月には、臺灣附近に達せんとして居る。前門の虎未だ殪れずして、後門既に狼の患ありとは、實に此時に於ける、我が聯合艦隊の境遇である。我が倍以て虎を斃すに足り、我が刀以て狼を屠るに足る。然れども虎狼合して腹背を襲へば、我が刀鋒遂に及ばず。若し夫れ我が艦隊にして、旅順を棄てて內地に

【我が海軍の苦境】引上げんか、港內に蟄伏せる敵の艦隊は、再び黃海に飛躍して、我が海上兵站線を脅し、滿洲軍五十萬の貔貅は忽ち飢餓に瀕するを如何せん。若し又荏苒旅順方面に留らんか、新來の敵第二艦隊に對し、戰備を整ふるの遑なきを如何せん。旅順は落ちず、バルチック艦隊は來る。此の際に處する我が艦隊の苦心は、全戰役を通じて最たるものであつた。是に於てか、宸襟甚だ安からず、聖勅頓として第三軍に降つた。

旅順要塞ハ敵カ天險ニ加工シテ金湯ト爲シタル所ナリ其ノ攻略ノ容易ナラサル固ヨリ怪ムニ足ラス朕汝等ノ勞苦ヲ察シ日夜軫念ニ堪ヘス然レトモ今ヤ陸海軍ノ狀況ハ旅順口攻略ノ機ヲ緩ウスルヲ得サルモノアリ此時ニ當リ第三軍總攻擊ノ擧アルヲ聞ク其ノ時機ヲ得タルヲ喜ヒ成功ヲ望ム甚タ切ナリ汝等將卒夫レ自愛努力セヨ

抑も攻擊開始に先つて勅語を拜受する如きは、空前の異例である。將卒恐懼必成を誓ひ、肉彈骨を碎き、激戰[illegible]り、或は胸墻上の格鬪となり、或は白襷隊の突擊となり、遂に轉じて二〇三米突高地の強襲となつた。

旅順新市街の北西方約二哩に崛起する、無名の一山丘がある。其の高さ海拔二百三米、

【二〇三高地】突、吾人之を呼んで二〇三高地と稱す。巓頂に立つて俯瞰すれば、旅順港水は眼下に湛へ、浮べる艦船歴々指顧の裡にある。之を得るものは以て旅順を制すべく、以て旅順を守るべき、險要無比の地形である。明治三十七年十一月二十七日より、十二月五日に至るまで九晝夜の間、此の山上に演ぜら

【和魂露魂】れたる日露兩軍の激戰は、二十世紀戰爭の極慘と兩軍愛國の極美とを發揮したるものである。彼我忠死の將卒は、其の數實に一萬を超え、伏屍全山を掩うて、足踏むに地なしとは、決して誇張の言でない。引つ組んで共に殪れたるもの、互に銃劍を差し交へて死せるもの、頭蓋碎けて腦漿溢出せるもの、腹壁破れて臟腑流露せるもの、手なきもの、足なきもの、累々層々、縱横に相重り、碧血流れて河となる。壯絶か、悲絶か、凄絶か、慘絶か。第三軍司令官乃木陸軍大將一絶を賦して曰く、

爾靈山險豈難レ攀
男子功名期レ克レ艱
鐵血覆レ山山形改
萬人齊仰爾靈山

嗚呼爾靈山！　爾靈山！　身を殺して邦家累卵の急を救ひたる爾忠勇の靈！　埋骨の土未だ乾かずして、人既に爾が名を忘れんとす。然れど愁ふる勿れ、哭する勿れ、夫れ秋風吹いて葛の薄きを知り、胡桃を咬んで齒の衰へたるを覺る。東洋の浪再び騷ぐの時、人は爾の忠勇を想ふであらう。

【我が海軍作戰の發展】爾靈山の攻略は、實に我が海軍作戰の局面に大發展を來し、占領後旬日ならずして、旅順敵艦隊は悉く破壞擊沈せらるゝに至つた。榮枯盛衰は世の常とは云へ、曾ては東亞の海に霸を唱へたる露國東洋艦隊も、今や舳艫を列ねて、旅順港内徒に貝鱗の巢と化せしを見ては、轉た感慨に堪へざるものがある。前門の虎既に殪れぬ、我は悠々刀を研いで、豺狼の來るを待たんかな。我が聯合艦隊の大部は、旅順の封鎖を撤して内地に回航し、直に必要なる修理に着手した。尋いで第三軍の勇敢不撓の攻擊により、三十

【旅順開城】八年一月一日、敵將遂に城を開いて降を乞ひ、旅順方面の作戰茲に全く終を告げた。我が殘留艦隊は逐次内地に引上げ、海軍作戰の前途は、今や洋々として初めて春光を見るの感あるに至つた。東鄕大將の凱旋奉告中に曰く、

【東鄕大將の奉告】惟ふに此の期の作戰は戰勢の自然に伴ひて漸進徐功を積み攻戰十箇月に亙り我が將卒の心力を傾注し智勇を發揮したること本戰役中に冠絶し忠死の士殉難の艦亦少からざりしと雖も戰局の大勢は此に始めて定り爾後日本海に於ける決勝の機運も此の間に萌芽したるを覺ゆ

と、以て當時に於ける我が聯合艦隊苦心の一般を察知するに足るであらう。

【浦鹽艦隊】是より先き露國は開戰の際、其の東洋艦隊の一部を割いて、之を浦鹽斯德に分駐せしめた。是れ即ち一時我が國民の爲に蛇蝎視せられ、三尺の童子も尚ほ其の名を聞いて腕を扼したる、浦鹽艦隊なるものである。爾來此の艦隊は其の高速力と航續力の大なるとを恃んで、頻に猛威を日本海方面に振ひ、或は北韓の海に金州丸を擊沈し、或は玄海の灘に常陸丸、佐渡丸の慘劇を演じ、其他汽船、帆船を各處に脅し、果は白晝津輕海峽を突

破して、長驅挺進、東京灣外に出動し、【帝都二百萬衆心膽寒し】帝都二百萬衆の心膽を寒からしめた。其の行爲往々凶暴に失し、時に無謀の訕を免れずとは云へ、當時露國艦隊の爲に氣を吐いたものは、唯僅に此の浦鹽艦隊ばかりであつた。司令官イエッセン少將の英雄的冒險行動は、敵ながら聊か賞讃に値するものがある。顧つて此の時に於ける我が國民の【露を知らぬ溫室の草花】態度を見よ。雨を知らぬ溫室の草花は、曉の露をだに恐る。常勝の祝酒に醉うて、敗戰の苦痛を知らざる國民中には、僅に二三商船の亡失を以て、邦家の危急に迫りたるが如く悲鳴したる者も尠くなかつた。甚しきに至つては、提督の邸宅石雨降るの狂態をさへ演じた。夫れ既往に顧みて將來を圖るは智者の爲すべき所である。北方の敵【東方の敵は東より來る】は北より迫り、東方の敵は東より來る。懈怠は百年の悔を遺し、慢心は最後の失敗に泣く。天の未だ雨降らざるに先つて牖戶を綢繆するは、當に經世家の力むべき道である。我が國民たるもの廣く世界の大勢に鑑み、盜を捕へて繩を撚り、魚を見て網をすくの嗤を貽す勿れ。

【北邊初めて安し】天時、屢利あらず、遺恨再三長蛇を逸したる我が上村艦隊は、八月十四日蔚山沖の一戰に、敵の一隻を擊沈し、一隻を擊破し、爾後浦鹽艦隊は、全く影を日本海に絕ち、我が北邊漸く安きに至つた。旅順已に陷ち、今や東洋に於ける露國の海軍策源地は唯一の浦鹽のみとなつた。是に於て敵は旅順の轍を踏まざらんが爲め、浦鹽に向つて物資の集積を圖り、殊に豫備的艦隊の來着準備として、盛んに石炭の輸入を開始した。元來石炭は軍艦の食糧である。石炭なければ、縱令百萬噸の戰艦、海に滿つるも、【池中の蛟龍檻中の猛虎】唯是れ池中の蛟龍、檻中の獅虎、何等爲すことも出來ず、何等恐るゝにも足らない。是を以て我が艦隊は、一は敵の出動に備へ、一は是等の密航船を拿捕する爲め、修理の成るに從ひ、順次交代して、日本海の門戶たる對馬、津輕、宗谷の三海峽を警戒した。怒濤山爲す朝鮮海峽や、海水凍れる北海に、晝夜哨戒に從事する苦は、實に龍鬪虎爭の戰鬪【[illegible]】よりも尙ほ大である。併し勤勞には必ず報酬あり、三十八年一月より同年五月日本海海戰に至る迄、三水道に於て拿捕した

る船舶は實に三十隻に近く、沒收したる石炭ばかりでも、數萬噸の多きに達した。

敵增援艦隊のマダガスカルに淹留して、花葬思案に迷へる間に、我が艦隊の修理工事は着々進捗し、三月上旬には殆ど全部の竣成を告げた。東鄕大將は時々分遣支隊を南洋方面に派遣して、敵を牽制脅惑すると同時に、自ら聯合艦隊の主力を率ゐて朝鮮海【[illegible]艦隊の[illegible]敵】峽の某地に陣し、諸種の訓練に日も惟れ足らざる有樣である。曰く水雷發射、曰く艦隊運動、曰く襲擊演習、曰く大砲射擊、曰く何——曰く何——中にも現代海戰の運命を支配すべき大砲射擊には、各艦全力を盡して相競ひ、或は內膅砲射擊に照準の精を練り、或は裝彈砲に裝彈の迅速を鍛へ、或は敎練射擊に發射の法を習熟し、或は戰鬪射擊に砲火の指揮を研究し、砲員は終日砲側を離るゝ暇さへない。從つて其の成績は見る見る上達して、己の放ちたる彈丸は、必ず命中するものとの自信は、深く各砲手の心頭に銘刻せらるゝに至つた。即ち技は妙に入り、術は神に達したものである。【[illegible]に備ふる】膳筵旣に備り、膾炙亦整ふ、敵の來

る、今や時を辭せず。久しくマダガスカル島に駐つて、戰局の推移を窺ひつゝありし敵第二艦隊は、四月中旬遂に支那海に入り、再び安南沿岸に停留した。此處はマダガスカルの邊陬と異り、歐亞航路の要衝に當るが爲め、我が海外貿易は忽ち多大の打撃を蒙り、海上保險率は暴騰して、幾十割の高率となり、

【我が通商の打撃】

而も猶ほ香港以西の通商は殆ど杜絶するに至つた。是に於て我が政府は、頻に佛國政府に向つて中立義務の勵行を要求したるも、佛國の回答は常に瓢簞鯰で、更に要領を得ない。佛國軍艦が立ち退きを要請する爲め、露國艦隊泊地へ到る時は、露國艦隊はいつも港外に出でて、天下の公海なりと澄して居る。佛國軍艦の姿が見えなくなると、再び入港して平氣で石炭を積む、糧食も積む、本國との通信もやつて居る。元來今日の國際公法なるものは、單に紙上の

【今日の國際公法】

空文に過ぎずして、假令之を犯し、之を破るも、何等世界的制裁を加ふるの機關がない。故に強者は之を突破し得べく、獨り弱者のみ其の拘制を受くるのである。試に見よ、我が同盟國たる英國の勢力下に在る埃及政府に於てすら、過ぐる米西戰爭の際、菲律賓艦隊救援の爲め東航せんとしたる、カマラ提督の率る西班牙艦隊に對しては、

【西班牙艦隊と露國艦隊】

一噸の石炭、一片の麵麭さへも供給を許さざりしに拘らず、今回東航の露國艦隊に向つては、石炭糧食の供給を許すは素より、其の蘇士運河通過に際しては、有ゆる便宜と保護とをすら與へたではないか。權勢の前には法律なく、武力の前に公法なきは、今日の狀態である。己の受くる損害は己之を防がざるべからず、徒に空文の公法に信賴する如きは、恰も十年畫餅を眺めて、腹の滿たんことを欲するの類である。武力の後援なき外交は游戲に近しとの鐵血宰相ビスマークの言は、今日に於ても尙ほ眞理たるを失はない。

【實力是れ正理】

實力是れ正理は、人類社會に於ける、千歲不滅の箴言である。堯舜再び生れ、孔孟復出づるも、恐らく之を破ることは出來ない、

日佛の交渉、すつた揉んだで決せざる間に、早くも一箇月の日子を經過した。我が貿易は益々沈衰し、株式は愈々暴落して、經濟界は

【我が經濟界の恐慌】

大恐慌を來し、持久力に乏しき我が國民中には、我が艦隊の行動に關して、云爲する者さへ生ずるに至つた。夫れ國は外より治むべからず、軍は中より御すべからずで、昔は將、外に在れば、君命尙ほ受けずとさへ言つた位である。軍略の機微に至つては、敢て門外漢の窺知し得べきでない。古來

【軍略の機微】

軍事に無知識なる國民の聲に強ひられて、無謀の戰を試み、軍を覆し、國を殆くしたものは、其例東西に尠くない。故に兵聖孫子も、戰道必ず勝たば、主戰ふ勿れといふも、戰ふて可なり、戰道必ず勝たざれば、主戰へといふも、戰ふなくして可なりと誡めて居る。畏くも陛下の大命を奉じ、皇國の興廢を雙肩に擔へる我が東鄉大將は、進んで名を求めず、退いて罪を避けず、況して蠣殼町が淚で流れ、屋根の瓦が石に碎ける位では、決して妄動するものでない。隱忍自重

【東鄉大將の自重】

笑を含んで竊に期する所があつた。

中立問題に關して、佛國に對する我が政府の態度は、漸く峻烈となつた。此に於て佛國政府は遂に公式を以て、露國艦隊に向ひ、安南沿岸の退去を要求した。此時に方り、敵は既に第三艦隊と合同の目的を達したので、

多謝の一語を佛國に遺し、五月十五日愈々ホンコーヘ灣を出發した。四十餘隻の堅艦快艇、威容堂々、煙を海風に靡かしつゝ向ふ處は是れ何處？

【露艦隊の進來】敵艦隊既に發動す、ロ提督果して何れの通路を選んで、浦鹽に入らんとする。東郷大將如何に達識と雖も、天眼通にあらざる限り、敵將の心事をまで讀むことは出來ない。今や我が頼む所は、唯海圖と兩脚器ばかりである。

【唯頼む所は海圖と兩脚器】ホンコーヘより對馬水道まで、其の海路約一千八百海里。敵若し朝鮮海峽を通過するとせば、十海里の速力を以てするも、二十日迄には、海峽附近に現るゝ計算である。然るに二十日になるも敵來らず、二十一日になるも敵尚ほ見えず、三日待ち、四日待ち、遂に二十五日となつた。而も敵の行動は尚ほ杳として全然不明である。曩に一たび、浦鹽艦隊の爲に驚かされたる我が國民は、

【我が國民の神經】戰々兢々として穩かならず、神經頗る過敏に陷つた、獨り東郷大將は麾下全艦隊をば掌中に緊握し、泰然自若として固き信念を持して居る。併しながら戰に臨むに備を密にするは、敵を待つの道である。故に萬一の急に應ずる爲め、最重要なる密封命令は、各艦長に交付せられ、號令一下すれば全艦隊直に北海に轉進するの準備を整へた。

偶々此日敵運送船數隻上海に入港し、敵艦隊の尚ほ黄海方面に游弋せることが知れたので、敵の通路は愈々朝鮮海峽たることが明瞭となつた。是に於て我が艦隊は、更に南方の哨艦を增加して、益々海峽の警戒を嚴密にした。十里の長堤蟻穴に潰え、萬噸の大艦も釘孔より沈む、兵の患ふる所は、謀の洩るゝより大なるはなし。

【露艦隊半歳の苦心水の泡】運送船を上海に放ちしこそ、ロ提督終生の不覺である、敵艦隊半歳に餘る苦心難行、半ば既に水泡に歸した。

五　龍爪虎牙

兵勝の道は先づ敵情を審にするにあり、【彼を知り己を知れば百戰殆からず】彼を知り己を知りて百戰殆からずとかや。敵增援艦隊の編成せらるゝや、我が海軍は諸種の手段を盡し、幾多の苦心を重ね、敵の勢力行動を一々探知するに努めた。從つて大は敵艦隊の編制、裝備より、微は敵軍士氣の弛張、訓練の熟否に至るまで、巨細漏さず、常に其の情勢を審にすることが出來た。而して敵の艦隊は出發の遲速、途中の離合等によりて、時に其の勢力に多少の增減ありしも、愈々浦鹽斯德に向ひ、朝鮮海峽の突破を試みたる艦隊は左表の如くである。

隊號	艦種	艦名	排水量	計畫速力	兵器	裝甲	進水年	定員	記事
第	戰艦	クニャージ、スウオーロフ	一三、五一六	一八・〇浬	十二吋砲四門 六吋砲十二門 小口徑砲門十六門 發射管四門	九吋	一九〇二年 明治卅五年	約九五〇人	司令長官ロジェストウェンスキー中將旗艦

隊	艦種	艦名	排水量	速力	兵裝	甲帶	進水	乘員	備考
一戰艦隊	戰艦	イムペラートル、アレクサンドル三世	一三、五一六	一八・〇	十二吋砲四門 六吋砲十二門 小口徑砲四十六門 發射管四門	九吋	一九〇四年 明治卅七年	約八五〇	
	戰艦	ボロヂノ	一三、五一六	一八・〇	十二吋砲四門 六吋砲十二門 小口徑砲四十六門 發射管四門	九吋	一九〇一年 明治卅四年	約八五〇	
	戰艦	アリヨール	一三、五一六	一八・〇	十二吋砲四門 六吋砲十二門 小口徑砲四十六門 發射管四門	吋	一九〇一年 明治卅四年	約八五〇	
第二戰艦隊	戰艦	オスラービヤ	一二、六七四	一八・〇	十吋砲四門 六吋砲十一門 小口徑砲四十六門 發射管四門	九吋	一九〇二年 明治卅五年	約九〇〇	司令官故フェリケルザム少將ノ將旗ヲ揭グ
	戰艦	シソイ、ウェリーキー	一〇、四〇〇	一六・〇	十二吋砲四門 六吋砲六門 小口徑砲十八門 發射管六門	十六吋	一八九四年 明治廿七年	約六六〇	
	戰艦	ナワリン	一〇、二〇六	一六・〇	十二吋砲四門 六吋砲八門 小口徑砲十一門 發射管六門	十六吋	一八九一年 明治廿四年	約六九〇	
	裝甲巡洋艦	アドミラル、ナヒーモフ	八、五二四	一六・七	八吋砲八門 六吋砲十門 小口徑砲二十門 發射管四門	十吋	一八八五年 明治十八年	約六三〇	
第三戰艦	戰艦	イムペラートル、ニコライ	九、六七二	一四・八	十二吋砲二門 九吋砲四門 六吋砲八門 小口徑砲二十門 發射管六門	十四吋	一八八八年 明治廿一年	約七七〇	司令官ネボガトフ少將旗艦
	裝甲海防艦	ゲネラル、アドミラル、アプラクシン	四、一二六	一五・〇	十吋砲三門 六吋砲四門 小口徑砲十四門 發射管四門	十吋	一八九六年 明治廿九年	約四二〇	
	裝甲海防艦	アドミラル、セニヤーウキン	四、七九二	一六・〇	九吋砲四門 六吋砲十門 小口徑砲十四門 發射管四門	十吋	一八九四年 明治廿七年	約四二〇	

隊	裝甲海防艦	アドミラル、ウシャーコフ	四、六四八	一六・〇	九吋砲四門六吋砲十門小口徑砲十四門發射管四門	十吋	一八九三年明治廿六年	約四二〇	
第一巡洋艦隊	巡洋艦	オレーグ	六、六七五	二三・〇	六吋砲十二門小口徑砲十八門發射管二門		一九〇三年明治卅六年	約六二〇	司令官エンクウィスト少將旗艦
第一巡洋艦隊	巡洋艦	アウローラ	六、七三一	二〇・〇	六吋砲八門小口徑砲二十一門發射管四門		一九〇〇年明治卅三年	約五八〇	
第一巡洋艦隊	裝甲巡洋艦	ドミトリー、ドンスコイ	六、二〇〇	一六・五	六吋砲六門四・七吋砲十門小口徑砲十六門發射管四門	六吋	一八八三年明治十六年	約五二〇	
第一巡洋艦隊	裝甲巡洋艦	ウラヂーミル、モノマーフ	五、五九三	一五・二	八吋砲五門六吋砲十二門小口徑砲十八門發射管二門	十吋	一八八二年明治十五年	約五〇〇	
第二巡洋艦隊	巡洋艦	スウェトラーナ	三、八六二	二〇・二	六吋砲六門小口徑砲十門發射管四門		一八九六年明治廿九年	約四六〇	先任艦長シェーン大佐旗艦
第二巡洋艦隊	巡洋艦	アルマーズ	三、二八五	一九・〇	四・七吋砲六門小口徑砲十一門發射管六門		一九〇三年明治卅六年	約三四〇	
第二巡洋艦隊	巡洋艦	ジェムチウグ	三、一〇六	二三・〇	四・七吋砲六門小口徑砲九門發射管五門		一九〇三年明治卅六年	約三四〇	
第二巡洋艦隊	巡洋艦	イズムルード	三、一〇六	二三・〇	四・七吋砲六門小口徑砲九門發射管五門		一九〇三年明治卅六年	約三四〇	
第	驅逐艦	ブイヌイ	三五〇	二七・〇	十二斤砲一門三斤砲五門發射管三門		一九〇二年明治卅五年	約七五	

第一驅逐隊	驅逐艦	ベドゥイ	三五〇	二七・〇	十二斤砲一門三斤砲五門 發射管三門	明治卅五年 一九〇二年	約七五
	驅逐艦	ブイスツルイ	三五〇	二七・〇	十二斤砲一門三斤砲五門 發射管三門	明治卅五年 一九〇二年	約七五
	驅逐艦	プラーウイ	三五〇	二七・〇	十二斤砲一門三斤砲五門 發射管三門	明治卅五年 一九〇二年	約七五
第二驅逐隊	驅逐艦	グローズヌイ	三五〇	二七・〇	十二斤砲一門三斤砲五門 發射管三門	明治卅七年 一九〇四年	約七五
	驅逐艦	グロームキー	三五〇	二七・〇	十二斤砲一門三斤砲五門 發射管三門	明治卅七年 一九〇四年	約七五
	驅逐艦	ボードルイ	三五〇	二七・〇	十二斤砲一門三斤砲五門 發射管三門	明治卅五年 一九〇二年	約七五
	驅逐艦	ブレスチャーシチー	三五〇	二七・〇	十二斤砲一門三斤砲五門 發射管三門	明治卅五年 一九〇二年	約七五
	驅逐艦	ベズウプリヨーチヌイ	三五〇	二七・〇	十二斤砲一門三斤砲五門 發射管三門	明治卅五年 一九〇二年	約七五
特務艦船	假裝巡洋艦	ウラール（噸數八、二七八 速力二〇・〇）					
	工作船	カムチャーツカ（噸數七、二〇〇 速力一二・〇）					
	運送船	イルツイシ（噸數七、五〇〇 速力不明） アナヅイリ（噸數不明 速力不明） ルス（噸數不明 速力不明）					
		コレーヤ（噸數六、一六〇 速力不明） スウイーリ（噸數不明 速力不明）					
	病院船	アリヨール、カストローマ					

合計

艦種	隻數	排水量	總排水量	兵器	總乘員	備考
戰艦	八隻	八六、六一六	一五〇、三六五	十二吋砲二十六門 十吋砲十七門 九吋砲十二門 八吋砲十三門 六吋砲百六十門 四・七吋砲二十八門 小口徑砲四百九十七門 發射管	約三、七八五人	前表各艦ノ兵器ハ英國ゼーン海軍年鑑ニ據ル 小口徑砲ト稱スルハ十二斤砲以下ノ諸砲ヲ云フ 各艦ノ速力ハ計畫速力ヲ示スモノニシテ艦齡ニ應ジ多少ノ減退アリ 乘組員ハ戰後我ガ海軍ノ調査ニ據ル
裝甲巡洋艦	三隻	二〇、三一九				
裝甲海防艦	三隻	一三、五六六				
巡洋艦	六隻	二六、七三五				
驅逐艦	九隻	三、一五九				
特務艦船	九隻	病院船ノ外何レモ輕度ノ武裝ヲ有セリト云フ				

前表の外浦鹽斯德には、猶ほ左の艦隊がある。縱令其の戰鬪力の現狀不明なりとは云へ、是れ亦我が作戰計畫上、度外視することは出來ない。

浦鹽艦隊

艦種	艦名	排水量	速力	兵器	裝甲	進水年	定員	記事
裝甲巡洋艦	ロシーヤ	一二、一三〇噸	二〇・〇節	八吋砲四門 六吋砲十六門 小口徑砲四十八門 發射管五門	十吋	一八九六年 明治廿九年	八四〇人	
裝甲巡洋艦	グロモボイ	一二、三三六	二〇・〇	八吋砲四門 六吋砲十六門 小口徑砲五十六門 四・七吋砲七門 發射管五門	六吋	一八九九年 明治卅二年	七三五	
巡洋艦	ボガツイリ	六、六四五	二四・〇	六吋砲十二門 小口徑砲二十二門 發射管六門		一九〇〇年 明治卅三年	五八〇	
水雷艇	約十二隻	內一〇〇噸以上一四〇噸以下ノモノ約四隻、八〇噸以上一〇〇噸以下ノモノ約二隻他ハ二三噸						
潛航艇	若干隻	明治三十八年初期汽車ニテ本國ヨリ輸送シ浦鹽斯德ニ於テ組立テタリト云フモ現狀不明						

之に對する帝國聯合艦隊の勢力は、左表の通りである。

聯合艦隊（司令長官　海軍大將　東郷平八郎）

第一

司令長官　海軍大將　東郷平八郎
參謀長　海軍少將　加藤友三郎
參謀　海軍中佐　秋山眞之
參謀　海軍少佐　飯田久恒
參謀　海軍大尉　清河純一
副官　海軍中佐　永田泰次郎
機關長　海軍機關總監　山本安次郎
艦隊附軍醫官　海軍軍醫總監　鈴木重道
（旗艦三笠）

第一

司令官　海軍少將　三須宗太郎
參謀　海軍中佐　松井健吉
參謀　海軍大尉　鳥巢玉樹
（旗艦日進）

艦種	艦名	排水量	速力	兵器	裝甲	進水年	艦長氏名
戰艦	三笠	一五、三六二	一八・〇	十二吋砲四門 六吋砲十四門 小口徑砲四十門 發射管四門	九吋	明治三十六年	海軍大佐 伊地知彦次郎 海軍中佐 松村龍雄
戰艦	敷島	一五、〇八八	一八・〇	十二吋砲四門 六吋砲十四門 小口徑砲四十門 發射管四門	九吋	三十四年	海軍大佐 寺垣猪三 海軍中佐 山田猶之助

艦隊							
戰隊							
戰艦	富士	一二、六四九	一八・三	十二吋砲四門六吋砲十門小口徑砲二十四門發射管五門	八吋	三十一年	海軍大佐松本和 海軍中佐臼井幹藏
戰艦	朝日	一五、二〇七	一八・〇	十二吋砲四門六吋砲十四門小口徑砲三十二門發射管四門	九吋	三十四年	海軍大佐野元綱明 海軍中佐東郷吉太郎
裝甲巡洋艦	春日	七、七〇〇	二〇・〇	十吋砲一門八吋砲二門六吋砲十四門小口徑砲十八門發射管四門	六吋	三十六年	海軍大佐加藤定吉 海軍中佐岡田啓介
裝甲巡洋艦	日進	七、七〇〇	二〇・〇	八吋砲四門六吋砲十四門小口徑砲十八門發射管四門	六吋	三十六年	海軍大佐竹內平太郎 海軍中佐秀島成忠
通報艦	龍田	八四六	二一・〇	四・七吋砲二門小口徑砲四門發射管五門		二十七年	海軍中佐山縣文藏

第三戰隊							
巡洋艦	笠置	四、九七八噸	二二・五節	八吋砲二門四・七吋砲十門小口徑砲十八門發射管五門		明治三十一年	海軍大佐山屋他人 海軍中佐田所廣海
巡洋艦	千歲	四、八三六	二二・五	八吋砲二門四・七吋砲十門小口徑砲十八門發射管五門		三十二年	海軍大佐高木助一 海軍中佐岡野富士松
巡洋艦	新高	三、四二〇	二〇・〇	六吋砲六門小口徑砲十四門發射管		三十七年	海軍大佐莊司義基 海軍少佐市原卯之助

司令官　海軍中將　出羽重遠
參謀　海軍中佐　山路一善
參謀　海軍大尉　丸山壽美太郎
（旗艦笠置）

巡洋艦	音羽	三,〇四八	二〇.〇	六吋砲二門四・七吋砲六門 小口徑砲六門 發射管	—	三十七年	海軍大佐 有馬良橘 海軍少佐 片岡榮太郎

第二艦隊

司令長官 海軍中將 上村彦之丞
參謀長 海軍大佐 藤井較一
參謀 海軍中佐 佐藤鐵太郎
參謀 海軍少佐 下村延太郎
參謀 海軍大尉 山本英輔
副官 海軍少佐 田中治平
機關長 海軍機關大監 山崎鶴之助
（旗艦出雲）

第二戰隊

司令官 海軍少將 島村速雄
參謀 海軍少佐 竹內重利
（旗艦磐手）

艦種	艦名	排水量	速力	兵器	裝甲	進水年	艦長・副長氏名
裝甲巡洋艦	出雲	九,九〇六 噸	二〇.八 節	八吋砲四門 六吋砲十四門 小口徑砲十二門 發射管四門	七吋	明治三十二年	海軍大佐 伊地知季珍 海軍中佐 上村經吉
裝甲巡洋艦	吾妻	九,四二六	二〇.〇	八吋砲四門 六吋砲十二門 小口徑砲二十門 發射管五門	七吋	三十二年	海軍大佐 村上格一 海軍中佐 東鄉吉之介
裝甲巡洋艦	淺間	九,八五五	二一.五	八吋砲四門 六吋砲十四門 小口徑砲二十門 發射管五門	七吋	三十五年	海軍大佐 八代六郎 海軍中佐 山本竹三郎

艦隊	艦種	艦名	噸數	速力（節）	兵裝	甲帶	竣工	艦長
戰隊	裝甲巡洋艦	八雲	九、八〇〇	二一・〇	八吋砲四門 六吋砲十二門 小口徑砲二十門 發射管五門	七吋	三十二年	海軍大佐 松本有信 海軍中佐 笠間直
戰隊	裝甲巡洋艦	常磐	九、八五五	二一・五	八吋砲四門 六吋砲十四門 小口徑砲二十門 發射管五門	七吋	三十一年	海軍大佐 吉松茂太郎 海軍中佐 上村翁輔
戰隊	裝甲巡洋艦	▷磐手	九、九〇六	二〇・八	八吋砲四門 六吋砲十四門 小口徑砲二十門 發射管五門	七吋	三十三年	海軍大佐 川島令次郎 海軍中佐 今井兼胤
戰隊	通報艦	千早	一、二五〇	二一・	四・七吋砲二門 十二斤砲四門 發射管五門		三十三年	海軍中佐 江口鱗六

第四戰隊

司令官 海軍中將 瓜生外吉
參謀 海軍中佐 森山慶三郎
參謀 海軍大尉 四竈孝輔
（旗艦浪速）

艦隊	艦種	艦名	噸數	速力（節）	兵裝	甲帶	竣工	艦長
第四戰隊	巡洋艦	▷浪速	三、七〇九	一八・〇	六吋砲八門 四十七密砲十二門 發射管四門		明治十九年	海軍大佐 和田賢助 海軍中佐 向井彌一
第四戰隊	巡洋艦	高千穂	三、七〇九	一八・〇	六吋砲八門 四十六密砲十二門 發射管四門		十九年	海軍大佐 毛利一兵衛 海軍中佐 小林惠吉郎
第四戰隊	巡洋艦	對馬	三、四二〇	二〇・〇	六吋砲六門 小口徑砲十四門 發射管四門		三十七年	海軍大佐 仙頭武央 海軍中佐 山崎米三郎
第四戰隊	巡洋艦	明石	二、八〇〇	一九・五	六吋砲二門 四・七吋砲六門 小口徑砲十二門 發射管		三十一年	海軍大佐 宇敷甲子郎 海軍少佐 有馬律三郎

第三

司令長官　海軍中將　片岡七郎
參謀長　海軍大佐　齋藤孝至
參謀　海軍中佐　山中柴吉
參謀　海軍少佐　百武三郎
副官　海軍中佐　荒尾富三郎
機關長　海軍機關大監　下條於莵丸
（旗艦嚴島）

第五戰隊

司令官　海軍少將　武富邦鼎
參謀　海軍少佐　野崎小十郎
（旗艦橋立）

艦種	艦名	排水量	速力	兵器	裝甲	進水年	副艦長氏名
巡洋艦	嚴島	四、二七八	一六・〇	三十二拇砲一門 四・七吋砲十一門 小口徑砲十一門 發射管四門		明治二十二年	海軍大佐 土屋保 海軍中佐 石川吉次郎
裝甲海防艦	鎭遠	七、三三五	一四・五	十二吋砲四門 六吋砲四門 小口徑砲十二門 發射管三門	舊式十四吋	十五年	海軍大佐 今井兼昌 海軍中佐 川浪安勝
巡洋艦	松島	四、二七八	一六・〇	三十二拇砲一門 四・七吋砲十二門 小口徑砲十一門 發射管四門		二十四年	海軍大佐 奥宮衛 海軍中佐 下村亮太郎
巡洋艦	橋立	四、二七八	一六・〇	三十二拇砲一門 四・七吋砲十二門 小口徑砲十一門 發射管四門		二十六年	海軍大佐 福井正義 海軍中佐 町田駒次郎
通報艦	八重山	一、六〇九	二〇・〇	四・七吋砲三門 小口徑砲八門 發射管二門		二十二年	海軍中佐 西山實親

艦

第六戰隊

司令官　海軍少將　東郷正路
參謀　海軍少佐　吉田清風
參謀　海軍大尉　筑土次郎
（旗艦須磨）

巡洋艦	須磨	二、七〇〇噸	二〇・〇節	六吋砲二門 四。七吋砲六門 小口徑砲十二門 發射管二門		明治二十八年	海軍大佐 栃内曾次郎 海軍少佐 中島源藏
巡洋艦	和泉	二、九五〇	一七・〇	六吋砲二門 四・七吋砲六門 小口徑砲八門 發射管		十六年	海軍大佐 石田一郎 海軍中佐 山口泰次郎
巡洋艦	千代田	二、四三九	一九・〇	四。七吋砲十門 小口徑砲十五門 發射管三門		二十三年	海軍大佐 依仁親王 海軍中佐 兼子昱
巡洋艦	秋津洲	三、一七二	一九・〇	六吋砲四門 四・七吋砲六門 小口徑砲十門 發射管四門		二十四年	海軍大佐 廣瀬勝比古 海軍少佐 土田集太郎

第七戰隊

司令官　海軍少將　山田彥八
參謀　海軍少佐　伊集院俊
參謀　海軍大尉　小林躋造
（旗艦扶桑）

裝甲海防艦	扶桑	三、七七七噸	一三・〇節	舊式二十四拇砲四門 六吋砲二門 四。七吋砲四門 小口徑砲十五門 發射管三門	舊式九吋	明治十年	海軍大佐 長井群吉 海軍中佐 中村虎之助
砲艦	高雄	一、七七八	一五・〇	六吋砲四門 四・七吋砲一門 小口徑砲四門 發射管二門		二十一年	海軍中佐 矢代由德 海軍少佐 荒西鏡次郎

隊 / 戰隊					
砲艦筑紫	一三五〇	一六・〇	舊式十吋砲二門舊式四十斤砲四門小口徑砲五門發射管ナシ	十一年	海軍中佐土山哲三 海軍少佐岡田三善
砲艦鳥海	六二二	一〇・三	四・七吋砲一門小口徑砲五門發射管ナシ	二十年	海軍中佐牛田從三郎
砲艦摩耶	六二二	一〇・三	舊式六吋砲二門小口徑砲四門發射管ナシ	十九年	海軍中佐藤田定市
砲艦宇治	六二〇	一三・〇	十二斤砲四門機砲二門發射管ナシ	三十六年	海軍少佐金子滿喜

第一驅逐隊

司令 海軍大佐 藤本秀四郎（乘艦春雨）

艦艇名	排水量	速力	兵器	艦艇長氏名
春雨	三七五	二九・〇	十二斤砲二門六斤砲四門發射管二門	海軍大尉 庄野義雄
吹雪	三七五	二九・〇	同右	海軍大尉 東島乙吉郎
有明	三七五	二九・〇	同右	海軍少佐 久津見[illegible]雄
霰	三七五	二九・〇	同右	海軍大尉 渡邊眞吾
曉（舊名レシーテリヌイ）	三〇八			海軍大尉 原田正作

第二驅逐隊

司令 海軍大佐 矢島純吉（乘艦朧）

艦艇名	排水量	速力	兵器	艦艇長氏名
朧	三〇五	三一・〇	十二斤砲二門六斤砲四門發射管二門	海軍大尉 藤原英三郎
雷	三〇五	三一・〇	同右	海軍少佐 齋藤半六
電	三〇五	三一・〇	同右	海軍少佐 菅哲一郎
曙	[illegible]	三一・〇	同右	海軍大尉 山內四郎

第三驅逐隊

司令　海軍中佐　吉島重太郎（乘艦東雲）

艦名			兵装	艦長
東雲	二七五	三〇・〇	十二斤砲二門 六斤砲四門 發射管二門	海軍少佐 吉田孟子
薄雲	二七五	三〇・〇	同右	海軍少佐 增田忠吉郎
霞	三六三	三一・〇	同右	海軍少佐 白石直介
速	三〇五	三一・〇	同右	海軍少佐 相羽恒三

第五驅逐隊

司令　海軍中佐　廣瀬順太郎（乘艦不知火）

艦名			兵装	艦長
不知火	二七五	三〇・〇	十二斤砲二門 六斤砲四門 發射管二門	海軍少佐 桑島省三
叢雲	二七五	三〇・〇	同右	海軍少佐 島内桓太
夕霧	二七五	三〇・〇	同右	海軍少佐 田代巳代次
陽炎	二七五	三〇・〇	同右	海軍大尉 吉川安平

第四驅逐隊

司令　海軍中佐　鈴木貫太郎（乘艦朝霧）

艦名			兵装	艦長
朝霧	三七五	二九・〇	十二斤砲二門 六斤砲四門 發射管二門	海軍大尉 飯田延太郎
村雨	三七五	二九・〇	同右	海軍少佐 小林研藏
朝潮	三四二	三一・〇	同右	海軍少佐 南里團一
白雲	三二二	三一・〇	同右	海軍少佐 鎌田政猷

第一艇隊

司令　海軍少佐　福田昌輝

艇名			兵装	艇長
第六十九號艇	八九	二三・五	大砲二門 發射管三門	海軍少佐 福田昌輝
第六十八號艇	八六	二三・五	同右	海軍大尉 寺岡平吾
第七十號艇	八九	二三・五	同右	海軍大尉 南鄉次郎
第六十七號艇	八九	二三・五	同右	海軍大尉 中牟田武正

第九艇隊

司令 海軍中佐 河瀨早治

蒼鷹	一五二噸	二九・〇節	大砲三門 發射管三門	海軍中佐 河瀨早治
雁	一五二	二九・〇	同右	海軍大尉 栗屋雅三
燕	一五二	二九・〇	同右	海軍大尉 田尻唯二
鴿	一五二	二九・〇	同右	海軍大尉 井口第二郎

第十一艇隊

司令 海軍少佐 富士本梅次郎

第七十三號艇	八九噸	二三・五節	大砲二門 發射管三門	海軍少佐 富士本梅次郎
第七十二號艇	八九	二三・五	同右	海軍大尉 笹尾源之丞
第七十四號艇	八九	二三・五	同右	海軍大尉 大田原達
第七十五號艇	八九	二三・五	同右	海軍大尉 河合退藏

第十艇隊

司令 海軍少佐 大瀧道助

第四十三號艇	一一〇噸	二七・〇節	大砲二門 發射管三門	海軍少佐 大瀧道助
第四十號艇	一一〇	二七・〇	同右	海軍大尉 中原彌平
第四十一號艇	一一〇	二七・〇	同右	海軍大尉 水野廣德
第三十九號艇	一一〇	二七・〇	同右	海軍大尉 大金實

第十四艇隊

司令 海軍中佐 關重孝

千鳥	一五二噸	二八・〇節	大砲三門 發射管三門	海軍中佐 關重孝
眞鶴	一五二	二九・〇	同右	海軍大尉 玉岡吉郎
隼	一五二	二九・〇	同右	海軍大尉 海老原啓一
鵲	一五二	二九・〇	同右	海軍大尉 宮本松太郎

第十五艇隊

司令 海軍中佐 近藤常松

艇名	噸	節	兵器	艇長
雲雀	一五二	二九・〇	大砲三門 發射管三門	海軍中佐 近藤常松
鷂	一五二	二九・〇	同右	海軍大尉 鈴木氏正
鴿	一五二	二九・〇	同右	海軍大尉 森駿藏
鷺	一五二	二九・〇	同右	海軍大尉 横尾尚

第十八艇隊

司令 海軍少佐 河田勝治

艇名	噸	節	兵器	艇長
第三十六號艇	八三	二四・〇	大砲二門 發射管三門	海軍少佐 河田勝治
第六十號艇	八三	二四・〇	同右	海軍大尉 岸科政雄
第六十一號艇	八三	二四・〇	同右	海軍大尉 宮村暦藏
第三十五號艇	八三	二四・〇	同右	海軍大尉 副島村八

第十七艇隊

司令 海軍少佐 青山芳得

艇名	噸	節	兵器	艇長
第三十四號艇	八三	二四・〇	大砲二門 發射管三門	海軍少佐 青山芳得
第三十一號艇	八三	二四・〇	同右	海軍大尉 山口宗太郎
第三十三號艇	八三	二四・〇	同右	海軍大尉 河北一男
第三十二號艇	八三	二四・〇	同右	海軍大尉 人見三郎

第十九艇隊

司令 海軍中佐 松岡修藏

艇名	噸	節	兵器	艇長
鷗	一五二	二九・〇	大砲三門 發射管三門	海軍中佐 松岡修藏
鴻	一五二	二九・〇	同右	海軍大尉 大谷幸四郎
雉	一五二	二九・〇	同右	海軍大尉 關才右衛門

第二十艇隊

司令　海軍少佐　久保來復

艇名	噸數	速力	兵裝	艇長
第六十五號艇	一一〇噸	二七・〇節	大砲二門 發射管三門	海軍少佐 久保來復
第六十二號艇	一一〇	二七・五	同右	海軍大尉 戸名肱三郎
第六十四號艇	一一〇	二七・〇	同右	海軍大尉 富永寅次郎
第六十三號艇	一一〇	二七・〇	同右	海軍大尉 江口金馬

第十六艇隊

司令　海軍少佐　若林欽

艇名	噸數	速力	兵裝	艇長
白鷹	一二七噸	二八・〇節	大砲三門 發射管三門	海軍少佐 若林欽
第六十六號艇	一一〇	二七・〇	同右	海軍大尉 角田貫三

備考

驅逐艦ノ發射管ハ十八吋ニシテ水雷艇ノ發射管ハ十四吋ナリ

水雷艇ノ大砲ハ五十七密砲若クハ四十七密砲ナリ

水雷艇隊司令ハ司令艇ノ艇長ヲ兼ヌ

特務艦隊

司令官　海軍少將　小倉鋲一郎（旗艦臺中丸）

參謀　海軍中佐　平岡貞一

副官　海軍少佐　奥田貞吉

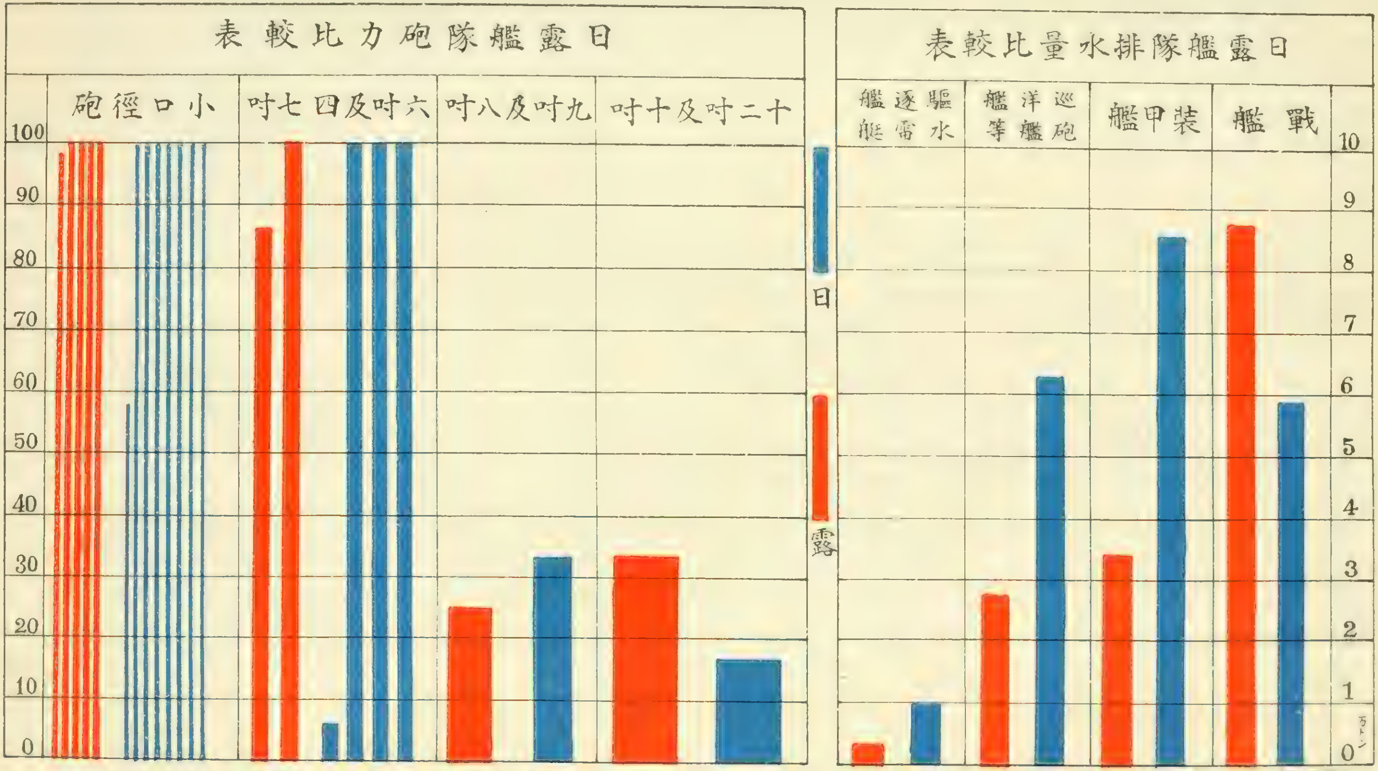
艦種	艦名	總噸數	速力	艦長 副長 氏名
假裝巡洋艦	信濃丸	六、三八七噸	一五・〇節	海軍大佐 成川揆 海軍少佐 丸橋彦三郎
假裝巡洋艦	佐渡丸	六、二二六	一四・〇	海軍大佐 釜屋忠道 海軍中佐 内田良隆
假裝巡洋艦	八幡丸	三、八一六	一七・〇	海軍大佐 川合昌吾 海軍少佐 隈元通純
假裝巡洋艦	亞米利加丸	六、三〇七	一八・〇	海軍大佐 石橋甫 海軍中佐 大島正毅
假裝巡洋艦	臺南丸	三、三一一噸	一六・〇節	海軍中佐 高橋助一郎 海軍少佐 米原林藏
假裝巡洋艦	滿洲丸	五、二四八	一二・五	海軍中佐 西山保吉 海軍少佐 下條小三郎
特務艦	熊野丸	五、〇七六	一六・五	海軍大佐 淺井正次郎 海軍少佐 田中茂藏
特務艦	春日丸	三、八一九	一六・五	海軍大佐 小花三吾 海軍中佐 櫻野光正

備考　假裝巡洋艦臺中丸、同日本丸、同香港丸、同備後丸、特務艦日光丸、測量艦磐城、假裝砲艦京城丸、同平壤丸、同大仁丸、其ノ他工作船病院船小形假裝砲艦ハ戰鬪ニ參與セザリシヲ以テ表中ニ掲ゲズ

艦種	隻數	排水量	總排水量	兵器	備考
戰艦	四隻	五八、三〇六噸	二七、八二三噸	十二吋砲 十六門 十吋砲 一門 八吋砲 三十四門 六吋砲 二百〇二門 四・七吋砲 百〇四門 小口徑砲 七百五十八門 發射管 （舊式砲ヲ省ク）	前表各艦ノ兵器ハ英國ゼーン海軍年鑑ニ據ルモノニシテ改造等ニ依リ小口徑砲ニ多少ノ増減アルモ六吋砲以上ニ於テハ變化ナキモノト認ム 前表ニ於テ小口徑砲トハ十二斤砲以下ノ諸砲ヲ稱ス 各艦ノ速力ハ計畫速力ヲ掲ゲタルヲ以テ艦齢ニ應ジテ遞減セルモノ多シ 前表部長欄ニ氏名ノ記セザルハ副長ノ定員ナキモノナリ 裝甲海防艦二隻砲艦五隻（此ノ排水量八八一一噸）ハ交戰ニ參與セズ
裝甲巡洋艦	八隻	七四、一七八			
裝甲海防艦	二隻	一一、一一三			
巡洋艦	十六隻	五四、〇三三			
通報艦	三隻	三、七三三			
砲艦	五隻	五、〇三四			
驅逐艦	二十一隻	六、六六〇			
水雷艇	四十一隻	四、七七三			
特務艦	八隻	總噸數 四〇、一九〇		特務艦ノ兵器ハ軍機ニ屬ス	特務艦ハ直接戰鬪ニ參與セズ
合計					

【艦種の比較】以上連掲したる表に據り、彼我兩軍の勢力をば比較檢校するに戰鬪力の主腦たる新式戰艦に於ては我が三笠、敷島、朝日、富士の四隻に對し、彼は「スウオーロフ」、「ボロヂノ」、「アレクサンドル三世」、「アリョール」及び「オスラービヤ」の五隻を有し、其の勢力寧ろ我に伯たるの地位を占めて居る。其の他の裝甲艦に於ては、我は第二戰隊の六隻に日進、春日を加へて八隻の裝甲巡洋艦を有し、（鎭遠、扶桑は舊式にして戰鬪力微弱なるを以て之を省く）彼は戰艦巡洋艦合して七隻を有し、彼我殆ど相匹敵して居る。又艦隊の耳目たる快速巡洋艦に於ては、我が第三戰隊の四隻に對し、彼は「オレーグ」、「アウローラ」、「ジェムチウグ」、「イズムルード」、「アルマーズ」、「スウェトラーナ」の六隻を有し、是れ亦互に伯仲の間にある。爾餘の巡洋艦、砲艦、驅逐艦、水雷艇等に至りては、我は彼に比して非常に優勢なるも是等の軍艦は、單に敵の進迩艦を脅し、廢艦を始末する位に過ぎずして、彼我艦隊間の堂々たる正戰には、其の存否殆ど影響する所がないのである。殊に驅逐艦、水雷艇の洋中に於ける戰鬪力は、當時尚ほ未知數であつた。

【砲力の比較】右は單に彼我兩艦隊の艦種及び隻數に就きての對照であるが、更に戰鬪の直機力たる砲熕を校較すると、十吋砲以上に於ては、我の二十四門（此内七門舊式）に對し、彼は三十三門を有し、九吋砲及び八吋砲に於ては我が三十四門に對し、彼は二十五門を備へ、又六吋


日露艦隊砲力比較表
小口徑砲
六吋及四吋七
九吋及八吋
十二吋及十吋
0
10
20
30
40
50
60
70
80
90
100
日
露
日露艦隊排水量比較表
驅逐艦 水雷艇
巡洋艦 砲艦等
裝甲艦
戰艦
万トン
0
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10

(第三圖)

砲に於ては、我の二百二門に對し彼は百六十門を有するに過ぎない。併し六吋砲は我は四十口徑なるも彼の多くは四十五口徑なるを以て、單砲としての勢力は、彼は我よりも非常に優越である。故に單に砲力のみを以て論ずれば、我は六吋砲及び八吋砲の速射威力を發揮し得べき近戰を利とし、彼は專ら巨砲のみの大猛威を振ふ遠戰を得とするのである。

【彼我勢力相匹儔す】是を以て見れば、彼我兩艦隊の勢力は、殆ど相匹儔せるものと云ふべきで、唯我の優れる點は、彼に比して速力の優駿なることのみである。而して軍艦に於て優速の利とする所は主として敵の欲せざる戰を強ふること（例へば敵を追撃する時）、己の欲せざる戰を避くること（例へば敵の追撃より脱する時）等、即ち戰鬪の前後に於ける戰略的利益に屬するもので、兩軍既に砲火の下に相見ゆるに至れば縱令速力に多少の劣るあるも、戰術の原理をば適良に應用すれば十分此の缺を補ふことが出來るのである。即ち劣速艦隊は優速艦隊と競走を爲すことなく、力めて之と綱引をするのである。尚ほ具體的に之を言へば、劣速艦隊は常に優速艦隊よりも半徑小なる同心圓周上を航すればよいのである。

【ロ提督の艦隊建成法】尚ほ茲に一言すべきは、ロ提督の部隊建成法である。元來一司令官の指揮下に行動すべき戰鬪部隊は、各艦の戰鬪力を齊等に發揮せしむる爲め、必ず同型若くは類似の軍艦を以て組成すべきは海戰術上の原則である。然るに今敵艦隊の建成を見るに、或は新造の戰艦オスラービヤーと老朽の巡洋艦「ナヒーモフ」とを同一戰隊に編入し、或は最新最鋭のオレーグに配するに老弱遲鈍の「ドンスコイ」、「モノマーフ」を以てせる如き、恰も老壯を組んで二人三脚を爲さしめ、驥驁を合して車を驅ると等しく、兵力經濟上に於ける大失策である。皮肉なる戰評家は、是れ優速軍艦の恣に戰場より遁逃するを防ぐ爲めロ提督の苦心計畫したる名策であるとの諷評をさへ下して居る。

之を要するに、士氣の弛張、訓練の良否、主將の賢愚、其の他形而上に於ける優劣は暫く之を措き、艦齡、裝甲、備砲等形而下に於ける勢力は、彼我互に軒輊なきものと云ふべきである。西洋の諺にも勝者は評せずと云ふことがある。戰後に於ける世人の評論は、單に日本艦隊強かりしが故に、勝ちたりといふに過ぎない。

【戰前に於ける列國の豫評】戰前に於ける列國軍事通の豫評こそ眞正にして且つ公平なる評論といはねばならぬ。今其の二三を摘錄するであらう。

【米國雜誌の豫評】明治三十八年四月二十二日刊行の米國雜誌サイエンチフィック、アメリカンには「ロ提督の使命及び其の成敗如何」と題し論じて曰く、

今やロジェストウェンスキー中將は一身を以て露國の運命を繫けるものと謂ふべし。何となれば、露國が海上權力を恢復し、既頽の戰運を挽回すると否とは、一に同提督今後の動作に因るべければなり。日露戰爭は著々進捗して勝敗の數已に定まらんとす、今日迄の經過を見るに露國は海陸共に敗衂相踵ぎ、海軍に於ては、曾て威を東洋に振ひたる太平洋艦隊は全然破壞せられ、今や僅に敗艦二隻を浦鹽に存するのみ。又陸軍に於ては、露國有數の司令官と、最新式の兵器を有する百萬の衆とを以て

して屡次大敗を蒙り、日本軍の進撃に遭うて徒に遁逃するのみ、露軍の運命既に窮れりといふべし。然るに露國は今尚ほ屈せざるものゝ如く、最後の手段として、ロジェストウエンスキー中將に命じ、多數の軍艦を率ゐ極東に向はしむ、其の勇氣尚ほ侮るべからざるものあり。而してロ提督の艦隊は今方に堂々として極東に進航しつゝあり。其の志何處にてか東鄕大將の常勝艦隊と邂逅し雌雄を決せんとするにあるが如し。知らず其の運命果して如何。

ロ提督麾下の艦隊即ち所謂波羅的艦隊に關しては、世間既に種々の批評あり、屡く其の出發を遷延せしこと、北海に於て英國漁船を砲撃せしこと等は孰れも世人の非難を受けたりと雖も、ロ提督が其の艦隊を率ゐて一萬七千海里の長程を航破し、踴躍強敵に向はんとするに至つては、吾人大に其の勇氣を嘆賞せざるべからず。同提督は今や萬里遠征の途上に在り。而して有力なる日本艦隊は、日本海の關門を扼して以て進路を遮れるあり、浦鹽斯德の港門には多數の沈設水雷ありて以て入港を遮るあり、加之途中一の露國港灣あらざるを以て、縱ひ戰捷を博するも退いて休養するの地なく、若し又敗衄せば據つて以て庇護を受くるの處なし、ロ提督の前途や寔に困難にして其の地位も亦危殆なりと謂ふべし。然れども公平に之を批判せば、同提督は勇敢に其の任務を遂行したるものと謂はざるべからず。

今將に來らんとする海戰に於て、日本必ず勝利の桂冠を得べしと推斷するは、大早計の謗を免れず。曩に波爾的艦隊東遣の議起りし時に於ては、日本艦隊は完全にして缺くる所なかりしと雖も、其の後尠くも戰艦二隻(或は三隻か)を喪失したるが故に、ロ提督麾下の戰艦七隻に對し、今や僅に四隻の戰艦を有するに過ぎず。而して海戰の運命を決するものは、主として戰艦に在りと知らずや。世人は大に波爾的艦隊を誤解し、其の能力を輕視せり。其の理由二あり、即ち一は北海事件の失錯にして、一は同艦隊を組織する軍艦の孰れも老朽なりとの風說行はることと是なり。第一は今姑く論ぜず、第二に至りては事實に反すること最も甚し。同艦隊に屬する戰艦中、「クニャージ、スウオーロフ」、「アレキサンドル」三世、「ボロヂノ」、「アリヨール」の四隻は、「ツェザレウヰチ」型に改良を加へたるものにして、極めて新式なり。「ツェザレウヰチ」が昨年八月十日黄海海戰に於て、日本の戰艦より、砲火を集注せられたるに拘らず、艦體備砲共に重大なる損害を被らずして、久しきに堪へたるは、今尚ほ世人の記憶に新なる所なるべし。故に右四隻の新式戰艦は「ツェザレウヰチ」の場合よりも、一層猛烈なる攻撃に對抗することを得べく、砲火を以て之を撃沈するは最も困難なりと謂はざるべからず。

と論じ、更に日露兩艦隊の攻防力に就きて、詳細に校較計量し、兩艦隊の物質的勢力を以て互に拮抗せるものと斷じ、最後に、單に材料のみに依りて批判するときは、露國第二太平洋艦隊は、確に日本の海權を危害するものにして、場合によりては、日本が今將に得んとしつゝある、最後の勝利を拉奪し去ることなしとせず。然れども吾人

の觀察點を變じて、軍艦の狀態砲員の訓練、艦隊の規律等の事實を精査し來らば、日本艦隊は露國艦隊に優れること數等なるを知るべし、殊に日本艦隊の將卒は既に幾度か戰場に出入して實戰に慣れ、砲彈雨注の間に立ちて從容動かざるの勇あり。之に反して露人は既往半歲の航海中、十分に射擊演習を行ひたるに相違なしと雖も、唯自己の彈丸を發するを知るのみにして、猛烈なる敵彈に當るの術を學ばず、且つ砲火閃電の如く、飛彈驟雨の如く、肉飛び、血迸るの慘狀を目擊して、能く其の態度を紊さざるや、頗る疑はしと謂ふべし。靜謐なる航海中、射的演習を行ふは易く、而も運動活潑、砲擊亦猛烈なる敵に對するは、必ずや露人の難んずる所ならん。加之ロ提督は懸軍萬里、敵地に入るの不利あるも、日本艦隊は既往の經驗に基き、勝利を自信すること確實なるが故に、悠々として之に當ることを得べく、所謂逸を以て勞を待つものなり。ロ提督と東郷提督との交戰の結果は頗る重大なり、東郷大將若し勝たば、日本は茲に日露海戰終局の偉功を收め、一躍して世界列國の首班に列すべし。又若しロ提督にして能く日本の海權を奪ひ、滿洲に於ける日本陸軍の聯絡線を斷つを得ば、露國は一朝にして頽勢を挽回し、今將に倒れんとせる國家の運命を保維することを得べし。吾人は實に刮目して此の海戰の結果如何を見んと欲す。と結論して居る。又同年五月十九日刊行の英國雜誌「エンヂニヤリング」には、「將に來らんとする日露海戰」と題し、

【英國雜誌の豫評】 將に來らんとする日露の海戰は其の影響する所のもの、振古實に其の比を見ざるべし。世界の人士は種々雜多の感想を懷き、以て刮目注意しつゝ、此の海戰をば今や遲しと待つものの如し。と冒頭を置き、論鋒一轉して黃禍論に移り、日本縱令勝つも黃禍の如きは、是れ素と杞人の憂に過ぎずと說破し、更に筆勢を改めて、夫れ將に戰はれんとする海戰の爭點は、島帝國の須臾も失ふべからざる海權にあり。日本の境遇は、我が英國と全然其の揆を一にするものにして、滿洲に於ける陸軍の勝利や、敢て小なるに非ずと雖も、是れ唯副位の戰たるを免れず。其の海軍能く海權を保持するに非ざれば、到底完全なる戰果を收むること能はず。之を要するに日本はナイルの戰に勝ちて、未だトラファルガルの海戰を經ざるものなり。而して今より正に一百年前ネルソン提督にして、ヴィルヌープ提督(西佛聯合艦隊司令長官)に敗られたらんには、西班牙半島に於ける英軍の武勇も、用ふるに所なく、ウォーターローの戰勝は必ずしも期すべからざりしなり。乃ち知るべし、若し東郷提督にしてロジェストウェンスキー提督に敗られたらんには滿洲に於ける日本陸軍の戰勝は、遂に實效なき虛譽と化し了ることを。將に來らんとする海戰の價値、此の如く夫れ大なり。之と戰はんとする艦隊の勢力如何。露國艦隊はネボガトフ少將の率ゐる艦隊を合したるを以て、日本艦隊よりは優勢なりとは、少くも歐洲大陸に於ける定評なり。然り、露國は實に戰艦八隻を有するに對し、日本は五隻なるが故に、戰艦の數に於ては露國大に優勢なり。三笠、朝日、敷島は露國戰艦の何れよりも大なりと雖も、

日本戰艦の最新のものも尙ほ露國新式戰艦四隻の孰れよりも舊し。

と說き、兩軍艦隊の勢力を比較して、露國は戰艦と十吋以上の巨砲に於て優り、日本は巡洋艦と八吋砲以下の速射砲に於て優れるを說き、勢力略ぼ相同じき、近世の艦隊が互に全滅を賭して行ふ決戰は、昔時の艦隊の行へる何等の決戰と、如何なる點に於て其の揆を一にするやを推斷すべき十分の論資を有せずと述べ、以て此の海戰の結果の豫斷すべからざるを稱へ、

之を要するに、將に戰はんとする日露艦隊は、物質上の勢力に於て殆ど相匹敵するが故に、其の勝敗は一に之を運用する將卒の性格、技倆に依て決せざるべからず。然り而して、吾人は茲に兩者の人員に就きて比較を爲さずと雖も、露國の將卒は世人の想像する如く爾く腑甲斐なきものに非ざるべしと思惟す。彼等露人は一大決戰を期して長途の航海を爲し來れり。其の性格、其の技倆、練磨熟達せずと云ふも吾人豈得て之を信ぜんや。

と論斷して居る。戰後の今日より見れば、露艦隊脆きこと瓦の如く弱きこと草の如き觀あるも、戰前に於ける是等外人の評論を讀まば、思或は半ばに過ぐるものがあるであらう。

彼我兩艦隊勢力の相如けること夫れ斯の如し。兩軍主將の決心如何。敵の司令長官ロジェストウェンスキー中將は五月九日艦隊命令を發して曰く、

【ロ提督の決心】

今やネボガトフ少將の率ゐる艦隊の合同を得て本艦隊の勢力は敵と匹敵するに至れるのみならず、尙ほ戰艦に於ては我に優勢を見ることとなれり。夫れ日本人は皇室と國家に對して眞に無比の忠順を顯し、又恥を重じて義の爲には死を視る鴻毛よりも輕しとするの國民なり。然れども吾人の此行亦上帝に誓ひしものあり、神は既に吾人の精神を強めさせ給ひ、今日に至る行軍の難を救ふに於て、無上の加護を垂れさせ給へり。神よ、願くは我が右手を固めさせ、偏に誓へる吾人の信條を遂行せしむる爲め、吾人の鮮血の以て、祖國の被れる傷ましき恥辱を雪がせ給へ。

と。我が聯合艦隊司令長官東鄕大將亦敵艦隊の漸く近づかんとするや、之に對する作戰命令を發す。其の一節に曰く、

【東鄕大將の決心】

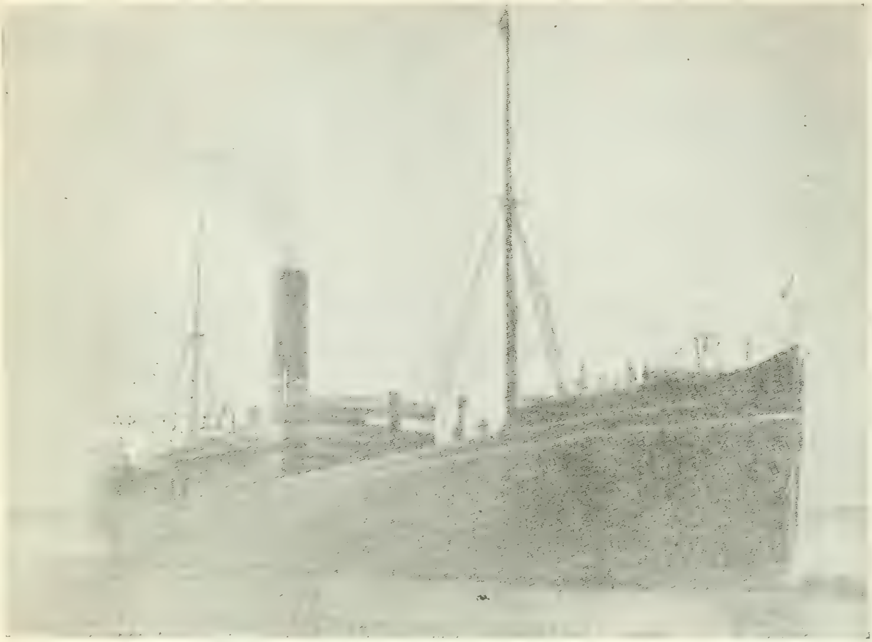
聯合艦隊は尙ほ敵の動靜に注意して、其の北上を待ち、我が逸を以て彼の勞に乘じ、一擧に之を擊滅せんとす。今後の一戰は蓋し大局の決する所なるべきを以て我が聯合艦隊の上下各員は各其の職責に應じて畢生の心力を竭し、必勝を期して有終の成功を遂げ、以て帝國隆興の宏圖を翼成せざるべからず。

六　戰雲愈急

先づ戰地に處て敵を待つものは佚し、後に戰地に處て戰に赴くものは勞すと。懸軍長驅一萬五千海里、五十隻の大艦隊を操縱して、一艦を失ふことなく、克く戰場に達し得たるロ提督の技倆は、確に賞讃に値すると同時に、辛酸嘗め盡したる敵將卒の勞苦亦實に察するに餘りがある。

【ロ提督の技倆と乘員の辛苦】

某歐字新聞の如きは、「若しロ提督にして其の艦隊を率ゐる浦鹽に入るを得ば、縱令日本艦隊を擊破



假裝巡洋艦信濃丸

せざるも、世人は彼に許すに世界第一海將たるの月桂冠を以てするであらうといつて居る。然り、露艦隊にして若し浦鹽に達するを得ば、戰略上既に日本艦隊を屈伏せしめたものである。

露艦隊の期待したる日本水雷艇の攻擊もなく、五月二十七日の夜は明けた。**【風颷々波澎湃】**力五に達する南西の疾風は颷々として檣桁に激し、其の聲猛虎の嘯くかと疑はれ、澎湃たる怒濤は、皚白の飛沫を散らして、一萬噸の大艦も一昂一低、恰も波に漂ふ木の葉の如く、激浪潑剌として艦首を打てば、奔潮躍つて上甲板に渦巻き、狂瀾婆娑として砲門を襲へば、激湍瀧となつて下甲板に溢れんとす。見渡せば海氣深く罩めて、朝暾色鈍く、前艦後船影は模糊たり。時は二十七日の午前五時、處は我が九州五島の北西約二十海里である。朝鮮海峽最狹部まで、後僅に六十海里。**【後僅に六十海里】**

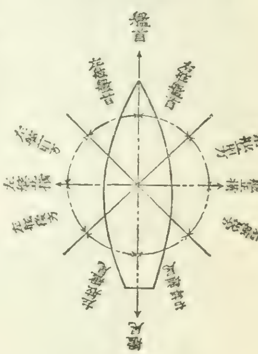
日本艦隊今何處にかある。四顧朦朧として檣桁の片影だに見えない。露艦隊將士の愁眉稍く開くを覺えた。而も何ぞ知らん、我が哨艦信濃丸は既に敵を發見して警を八方に傳へて居る。

厘毫千里の差を生ず、彈の機は一瞬の速を尙ぶ。此日第一に**【信濃丸の偉功】**敵艦隊を發見して、拔群の勳績を顯したるものは假裝巡洋艦信濃丸である。同艦は前日來、僚艦と共に南方の哨艦として、敵艦隊の來航を警戒中、此朝午前三時三十分頃朝鮮海峽に向つて進む一汽船を發見した。端舟艀舸と雖も、尙ほ無斷では通さぬ**【怪しき汽船】**我が哨艦の關門、況して夜間燈火を暗くしたる怪しの汽船、何條其の儘通過を許すべき。信濃丸は臨檢の爲め、直に速力を增して之を追跡した。漸く近づくに及び、朧にかすむ月光

に透し見れば、三檣二煙突の大汽船、而も檣頭に連掲せる白紅白の區別燈、是れ疑もなく、敵の病院船である。如何にヘーグ條約に依り病院船は中立不可侵とは云へ、單船孤行、我が海面に乘り入るとは餘り大膽奇怪なる行爲である、必ずや他に優勢なる艦隊の同行せるものあらんと、艦長成川(揆)海軍大佐は、夜間鏡を取つて八方を注視すれども、海尚ほ昏くして他に一隻の船影だに認めない。いで此上は縱令病院船なりとも苟くも我が行動を偵知せんとする疑あるに於ては、此儘通過を許すべきにあらずと、益船を進めた。彼我の距離約三百米突に近づいた頃、彼は我を以て味方と誤りたるものか、電燈信號を以て我に對して信號を始めた。時に東天僅に白を帶びて、朧に敵甲板上の物影を辨じ得るに至つた。信濃丸は臨檢の爲め、已に端舟卸方の準備を整へ、將に敵に向つて停船の命を降さんとする一刹那、

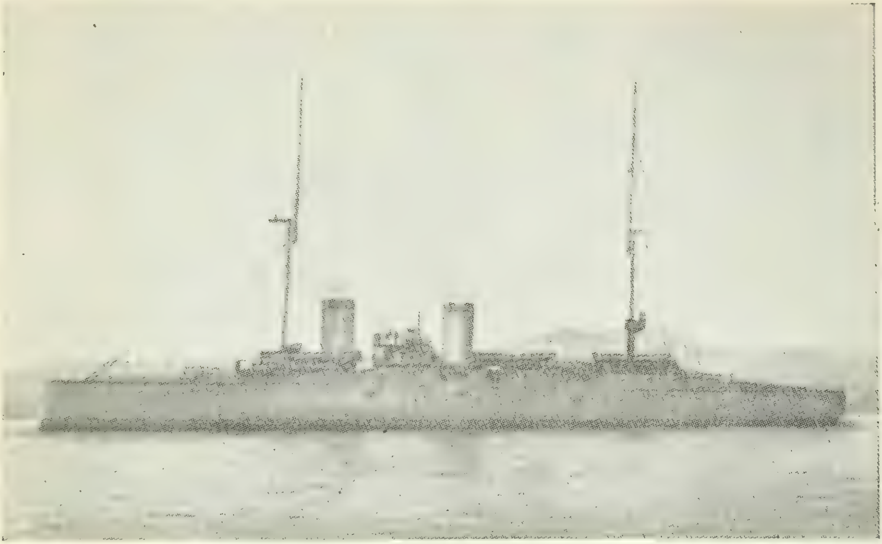
【危機一髮】不圖前方を見渡せば、右舷艦首より左舷後方に亙り、大小の軍艦數十隻舳艫相銜んで連城の如く並んで居るのを發見した。近きは其の距離僅に一千米突に過ぎない。信濃丸は今や不識の間に敵艦隊の列中に突入して居るのである。進むも敵、退くも敵、嚢中の鼠か、釜中の魚か、絶體絶命。一たび敵に認めらるれば、萬死あつて一生なきの境遇である。

軍艦方位



【信濃丸艦長の決心】此時艦橋に立てる成川艦長は泰然として部下の將校に告げて曰く、不幸にして此の窮地に陷る、唯運を天命に委して全力脱出を試み、若し能はずんば敵の一艦を衝撃して共に沈むのみである、獨り冀ふ所は敵艦隊の出現をば、我が長官に報ずるの餘裕を得んことである、若し此の報告にして、一たび長官の許に達するを得ば、哨艦として我等の任務は已に果せるものである、縱令敵彈に沈むとも、亦遺憾とする所なし、併し我れ送信を開始すれば、敵之を妨害するは、必然である、艦の浮べる限り、電信機の作用する限り、萬難を排して報告に努めよと。斯くて信濃丸は轉舵一杯、全速力を以て退却すると同時に、

【艦電四方に飛ぶ】無線電信機は火花を發して、敵艦隊出現の警報を四方に傳へた。時正に午前四時四十分である。敵は徹宵の警戒に視力衰へしか、連日の憂悶に心神耄せしか、毫も信濃丸の接近を知らざるものの如く、敢て追撃するの形なきのみならず、我が無線電信の通信をさへ妨げなかつた。若し此時敵の快速巡洋艦にして信濃丸を追撃せんか、速力僅に十五海里の同艦は、到底脱出の途はなかつたのである。又若し敵にして信濃丸の無線電信を妨碍せんか、當日の如き濛氣深き日に於て、其の後何れの哨艦、何處の望樓が果して能く敵を發見し之を我が艦隊に通報し得たであらうか。之を想へば轉た慄然として肌の寒きを禁じ得ない。日本海大海戰の帷幕は實に此時に開かれたものである。信濃丸の無線電信、一たび空を飛んで敵艦隊出現の警を傳ふるや、出動中の我が哨艦、並に根據地に在る艦隊は、各豫定の戰策に



軍艦和泉

從ひ、行動を開始した。前日來哨艦として特に五島の北方に派遣せられありし巡洋艦和泉は、直に敵と觸接を保たんが爲め、其の速力鈍く、備【大膽なる和泉の行動】砲弱きにも拘らず、敢然敵艦隊に向つて急進した。已にして午前七時頃に至るや、和泉は五島の北西約三十五海里の地點に於て、前方遙に長城の連なるが如き敵の全艦隊を發見した。敵は和泉の近づくを見るや、直に其の巨砲を之に向けて、寄らば撃たんと構へて居る。此日濛氣密にして眼界狹く、展望僅に五六海里に過ぎない。故に敵と確實なる觸接を保つ爲には、是非とも其の着彈距離以内に近づかねばならぬ。此時和泉は敵を距ること僅に八九千米突、敵の巨砲一たび彈を吐けば、和泉の運命、【和泉艦長石田大佐】憂ふべきものがある。艦長石田一郎海軍大佐は、嘗て驅逐隊司令として旅順方面の連戰に、常に豪膽果決の勇名を轟かした人である。目に餘る敵の大艦隊を近距離に控へながらちつとも恐れず、雙眼鏡を取つて敵の艦數を數へつゝ、獨り思へらく、「我が艦隊中、今、敵と觸接を保持せるものは、我が艦ばかりである、我にして若し敵を避くれば、他に敵艦隊の動靜を我が主力艦隊に報ずるものは居らない。縱令和泉一隻を失ふとも、斷じて敵と離るべきにあらず、最後の手段は衝角突撃にあり」と、敵艦隊を左舷に望んで平然艦を進めつゝ、敵の勢力、陣形より速力、針路に至る迄、刻々無線電信を以て、我が主力艦隊に通報した。和泉の此の大膽不敵なる行動は、敵味方の等しく賞讃して措かざる所である。信濃丸の敵艦隊發見と、和泉の敵情偵察とは、實に日本海海戰の劈頭に於ける勳功の雙璧とも稱すべきものにして、戰後東郷司令長官は、特に此の兩艦に對し、功績顯著なるの故を以て感狀を授與せられた。

敵艦隊此日の勢力は、戰艦八隻、裝甲巡洋艦三隻、裝甲海防艦三隻、巡

洋艦六隻、驅逐艦及び特務艦各九隻、合計三

【敵艦隊の陣形】

十八隻の大艦隊にして、其の陣形を見渡せば、「ジェムチウグ」、「イズムルード」の兩快速巡洋艦に各驅逐艦二隻づつを附して左右の前衛となし、戰艦「スウォーロフ」、同「アレクサンドル」三世、同「ボロヂノ」、同「アリヨール」(以上第一戰艦隊)、同「オスラービヤ」、同「シソイ、ウェリーキー」、同「ナワリン」、裝甲巡洋艦「ナヒーモフ」(以上第二戰艦隊)の八隻を右翼列に置き、戰艦「ニコライ」一世、裝甲海防艦「アプラクシン」、同「セニャーウヰン」、同「ウシャーコフ」(以上第三戰艦隊)巡洋艦「オレーグ」、同「アウローラ」、裝甲巡洋艦「ドンスコイ」、同「モノマーフ」(以上第一巡洋艦隊)の八隻を左翼列に配し、特務艦「イルツイシ」、同「カムチャーツカ」、同「コレーヤ」、同「アナヅイリ」、同「スウイーリ」、同「ルス」の六隻及び第二驅逐隊の五隻を中央に列ね、巡洋艦「スウェトラーナ」、同「アルマーズ」假裝巡洋艦「ウラール」の三隻を後衛に備へ、病院船「アリヨール」、同「カストローマ」の二隻を更に其の後尾に附し、司令長官ロジェストウエンスキー中將は、右翼列の先頭艦「スウォーロフ」に、司令官ネボガトフ少將は、左翼列の先頭艦「ニコライ」一世に、司令官エンクウイスト少將は巡洋艦「オレーグ」に各其の將旗を飜し、尙ほ「オスラービヤ」の檣頭には、故フェルケリザム少將の將旗を掲げ、艫艙相銜んで約九海里の速力を以て北東方に向進して居る。其の濃灰色の船體は、淡霧にかすんで愈々壯大に、百を以て算ふる黄土色の煙突よりは、鬱黑の煤煙を漲らし、白地に藍十字の軍艦旗は海風に翩々として、激浪と其の色を競うて居る。堂々たる軍容、整々たる陣列、蛟龍驚き匿れ、鯨鯢怖れ逃るの概がある。

斯くて露國艦隊は、我が和泉に並航しつゝ、一意東水道に向つて直進した。夫れ

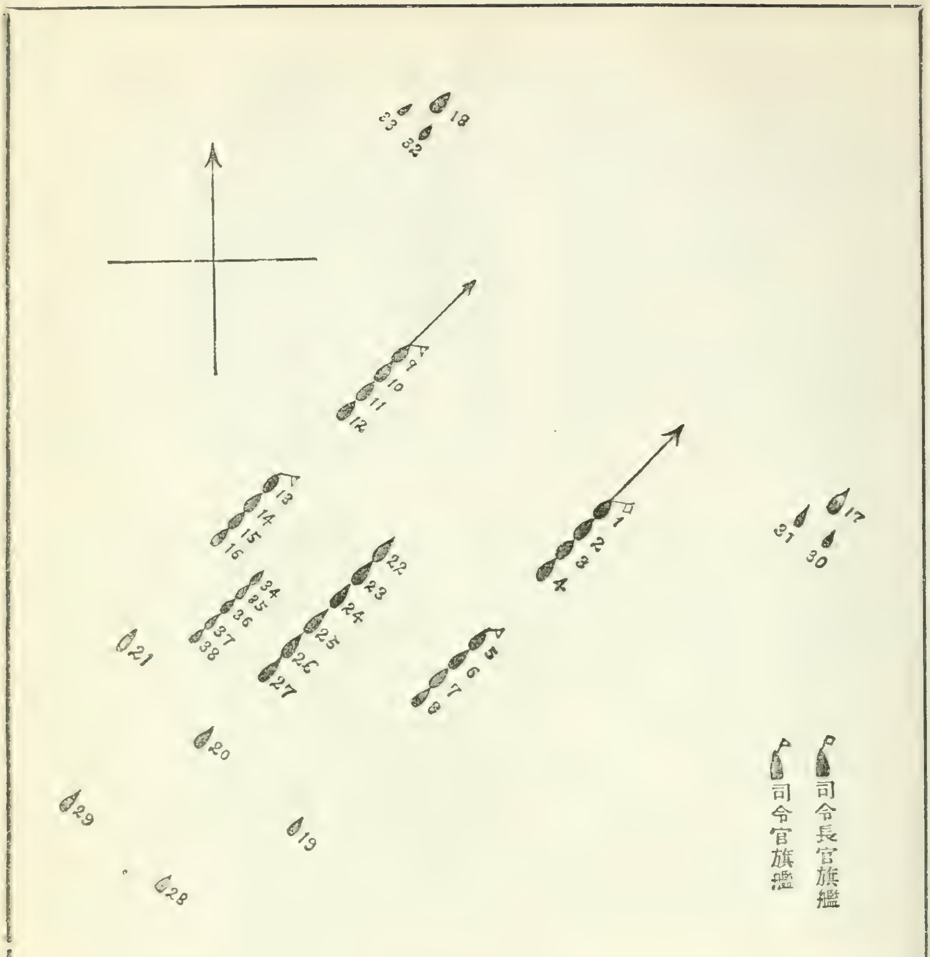
【戰勝の要訣】

戰勝の要訣は豫め敵情を知悉すると共に、我が行動を敵に祕するにある。乃ち敵情を知悉するには間諜を用ひねばならぬ。又我が行動を祕匿するには、敵の間諜を遠ざくると同時に、敵の交通を遮斷せねばならぬ。故に古の兵聖も「謀を伐つを上と爲し、交を絕つを次と爲し、兵を擊ち城を攻むるを下と爲して居る。謀を伐つとは、敵の謀計を偵知して其の意表に出で、之をして畫餅に歸せしむるのである。交を斷つとは、敵の交通音信を遮絕して、其の連絡を破るのである。然

【ロ提督の用兵法】

るに此時に於けるロ提督の用兵法を見るに、苟くも大艦隊を率ゐる司令長官の戰術としては、頗る了解に苦む點が多い。即ち其の麾下には、偵察艦として適良なる數多の快速巡洋艦を有しながら、一も之を利用して我が艦隊の動靜を偵察するに努めざるのみならず、我が眇たる一巡洋艦和泉をば、常に視界内に許し、其の傍若無人の擧動に對してすら、何等之を驅逐する策を講じなかつた。此日の如き展望狹き天候に於て、和泉を視界外に驅逐する如きは、洵に一擧手一投足の勞に過ぎないのである。殊に甚しきは、頻々絕間なき我が無線電信の通信に對して、敵は遂に一回の妨害をも加へなかつたことである。敵の假裝巡洋艦「ウラール」には非常に強力なる無線電信機の裝置をして居たので、之が爲め必ず我が通信を妨害混亂せらるゝであらうとは、我が艦隊の深く憂慮したると同時に、豫め之を期待して居たのである。露國將校の記事に據れば、此時、ウラー

(第 一 圖)



1 スウォーロフ
2 アレクサンドル三世
3 ボロヂノ
4 アリヨール
5 オスラービヤ
6 シソイ、ウェリーキー
7 ナワリン
8 ナヒーモフ
9 ニコライ一世
10 アプラクシン
11 セニャーウォン
12 ウシャーコフ
13 オレーグ
14 アウローラ
15 ドンスコイ
16 モノマーフ
17 イズムルード
18 ジェムチウグ
19 ウラール
20 アルマーズ
21 スウェトラーナ
22 アナヅイリ
23 イルツイシ
24 カムチャーツカ
25 コレーヤ
26 ルス
27 スウォーリ
28 アリヨール
29 カストローマ
30 ベドウイ
31 ブイスツルイ
32 ブイヌイ
33 ブラーウイ
34 プレスチャーシチー
35 ボードルイ
36 ベズウプリヨーチヌイ
37 グローズヌイ
38 グロームキー

【無線電信の效力】ル艦長は、ロ提督に向つて、日本の通信を攪亂せんことを建議したるも、提督は斷じて之を許さなかつたとのことである。或軍事批評家の如きは、日本海海戰大捷の一半を以て、無線電信の效に歸して居る位である。斯の如く重要なる通信機關にして、而も露艦隊は十分我が通信を混亂し得るの機能を有せしにも拘らず、ロ提督の毫も之を妨害せず、全然我が爲すまゝに放置したるは、寧ろ怪訝に堪へない次第である。之に由つて考ふれば、ロ提督如何に強辯するも、彼は必ず日本主力艦隊、朝鮮海峽に在らずと馬鹿にして懸つたものであらうとの非難を免れない。

【論者の言】論者或は曰く、ロ提督の我が通信を妨害せざりしは、是れ必ず我が無線電信を傍受し、以て我が艦隊の動靜を偵知せんと欲したるに依るものならんと。ロ提督の眞意果して然りとせば、益〻其の迂愚を笑はざるを得ない。凡そ各國海軍には極祕暗號なるものありて、絕體機密に屬して居る。我が將士愚なりと雖も、苟くも國運を賭して相爭はんとするに際し、敵に通信を覺知せらるゝが如き、へマなことは爲ぬであらう。素より訓練と言語とを同じうする自國艦隊間の演習に於ては、時に敵軍の無線電信を傍受判讀して、演習の組織を根本的に破壞することがある。併し斯の如きは、寧ろ兒戲に類する喜劇に過ぎずして、千百に一二の成功を望むことすら出來ない。敵通信の判讀に頭をひねくる間に、己の艦隊は早くも全滅せられて居るであらう。

戰後の今日、敵將の人物を品騭云爲して、死屍に鞭つが如きは、頗る禮を失するのみならず、又甚だ屑しとせざる所である、併しながら、外交上の禮節と歷史上の研究とは自ら別問題である。古來勇將の下に弱卒なく、明君の朝に奸臣を見ずとかやで、三軍の強弱、堅脆は、一將の勇怯、賢愚に據つて岐るゝを思へば、利鈍の數を覈へ、成敗の跡を尋ぬるには、勢ひ、主將の人物、性格を校評せざるを得ない。

【ロ提督性格】抑もロ提督は素と是れ露國海將中の錚々たる人、決して凡庸の士にあらざるは明である。而も長日月に亙る難航海と、雙肩に擔へる重任の爲め心身共に疲勞し、加ふるに自己の建策屢本國政府に容れられざるが爲め、悶々遂に疾を爲し、航海の終期に於ては、短慮、剛愎、喜怒常ならざりしは、露國將士の語る所殆ど相一致して居る。殊に其の部下を叱責すること峻酷にして、痛罵骨を刺し、將卒をして往々憤恨涕泣せしめたといふことである。露國の一新聞紙は、日本海海戰に從事したる海軍軍人の言として、ロ提督に關し、左の如き記事を揭げて居る。

【ロ提督に對する部下の評】(前)ロジェストウエンスキー司令長官と、艦隊乘員との間は、常に峻冽氷の如き紀律を以て隔てられ、何等溫情の上下を繼ぐものなく、部下の長官を見ること恰も罪囚の獄吏に對するが如し。例へば、長官の旗艦たるスウォーロフに於てすら、長官の姿一たび上甲板に現るゝや、今まで上甲板に在りたる者は忽ち下甲板に隱れ、參謀長すらも報告を持して長官室に入るを躊躇せしことあり。又其の艦橋に現るゝや、信號兵の如きは、恐怖の餘り徒に戰々兢々として、本心を喪ふに至ることあり。而して長官の信號兵に對するや、些少の過失と雖も毫も假借することなく、自ら望遠鏡を以て、適

失者の頭を打ち、爲に望遠鏡を破損せしこと一再に止まらず。(中略)又長官は極めて強我自尊の人にして、己の部下に英邁の士あるを信ぜず、故に人言を容るゝの雅量なく、各艦長を見ること恰も店主の小僧を見るが如く、己の自信を遂行する爲には、敢て粗暴の命令を發するを躊躇せず、故に乘員は長官に對し、單に畏怖恐懼の念を抱くのみにして、毫も親愛尊敬の心なし。(下略)

是れ露國海軍軍人のロ提督に對する見評である。其の眞僞は俄に之を判ずるを得ざるも、陣中ロ提督の發したる幾多の命令、訓令を見れば、略ぼ首肯することが出來る。司令官ネボガトフ少將も亦、

【ネボガトフ司令官の言】ロジエストウエンスキー司令長官は予に作戰計畫を示さず、又司令官、艦長を集めて會議したることなし。故に各自の意見を長官に申白するの機なく、各艦は唯旗艦の行動に盲從するの外なし、予は長官の計畫を知らんが爲め、諸種の命令を反覆研究したるも、命令の多くは石炭搭載法と、各艦の運動を嘲罵したる文句のみにして遂に之を知るを得ざりき。

とのことを新聞紙上に公言して居る。論者又

【論者の言】曰く、是れロ提督は機密の漏洩せんことを恐れしが故ならんと。夫れ果して然るか。苟くも一隊一艦を指揮する司令官、艦長にして既に機密を洩すの憂ありとせば、吾人亦何をか言はん。併し論者の言の如きは、ロ提督を辯護せんと欲して、却つて露國海軍を侮辱するものであらう。

夫れ明君、賢將は廣く人言を容れて、明に之を斷ず、負薪の言、草莽の策と雖も、尙ほ之を聞かざらんことを患ふ。然るに何ぞや、ロ提督の如きは、祖國の安危興廢を決すべき大戰に莅むに際し、啻に裨將の意見を諮らざるのみならず、之に向つて自己の計策をさへ告げざるに至つては、是れ士を待つの禮を知らないものといふべきである。古の兵を語る者必ず先づ其の將を論ず。三略には、

【將論】將は能く淸く、能く靜に、能く平に、能く整へり、能く諫を受け、能く訟を聽き、能く人言を納ると訓へ、六韜には勇、智、仁、信、忠を以て、將に必要なる五材と說いて居る。吳子曰く、凡人の將を論ずるや、常に其の勇を見るも、勇の將に於けるや乃ち數分の一のみと。智勇兼ね備り、恩威並び行はれて始めて良將といふべきである。ロ提督の如きは、勇は勇にして、智は智なりと雖も、其德は未だ完きものと云ふを得ない。乍併戰後軍法會議の法廷に於ける、其堂々として紳士的、且武士的なるロ提督の陳述は、實に同提督蓋棺の名を潔うしたるものにして、其陣中に於ける言動は、是れ疾病に因するものと認めることが出來る。之と同時に部下にして新聞紙に上官を非難するに至りては、軍紀の弛廢も亦極まれりと云ふべしである。

信濃丸の警電に接して、急遽根據地を發したる我が各戰隊は、和泉の詳細確實なる偵察報告に依つて、敵艦隊の行動を審かにし、各敵に對して行動を開始した。對馬竹敷に根據

【第五、第六戰隊の出動】を構へたる片岡第三艦隊司令長官の直率せる第五戰隊(嚴島、鎭遠、松島、橋立)、及び東郷第六戰隊司令官の率ゐる須磨、千代田、秋津洲(和泉は別に行動せり)は、各所屬艇隊と共に、敵を東水道に邀へんが爲め、對馬の東方に向進し、午前十時頃には早くも敵と觸接する内に在つた。前夜來南方哨戒に從事したる、

出羽第三戰隊司令官の率ゐる笠置、千歳、新高、音羽の快速巡洋艦隊も、又敵を索めつゝ北上し、十時三十分頃之に追及し、又鈴木司令の率ゐる第四驅逐隊、朝霧、村雨、朝潮、白雲も、此の時母隊たる第三戰隊に合した。確

【確實なる觸接茲に成る】實なる觸接、茲に成り、敵艦隊今や如何に藻掻くとも、到底我が監視を脱することは出來なくなつた。爾後第五、第六戰隊は、專ら敵の前方に占位して之を牽制しつゝ、我が主力艦隊の方に導かんとし、第三戰隊及び第四驅逐隊は、其の快速力を利用して、或は敵の側面を窺ひ、或は敵の前路を犯し、以て其の運動を妨害するに努めた。天色暗濁として日光力なく、激浪逆卷いて飛沫、雪の如き海面に、數十隻の艨艟が蒼鬱たる黑煙を疾風になびかしつゝ、縱橫に馳突する光景は、既に壯烈の域を脱して、殺氣森

【殺氣森嚴】嚴、宇に漲るの概がある。

ロ提督は我が艦隊の續々現るゝを見て、決戰避くべからずと思ひしか、今迄の二列縱陣を更めて、第一、第二、第三戰艦隊をば單縱陣に

【敵艦隊戰鬪陣形に列す】備へ、巡洋艦隊をして特務艦を掩護し、戰艦隊の右後方に避けしめ、以て戰鬪陣形に轉ぜんとした。敵の此の運動を覺知したる我が第三戰隊は、直に偵察の爲め敵艦隊に近づいた。彼我の距離約八千米突を距るや

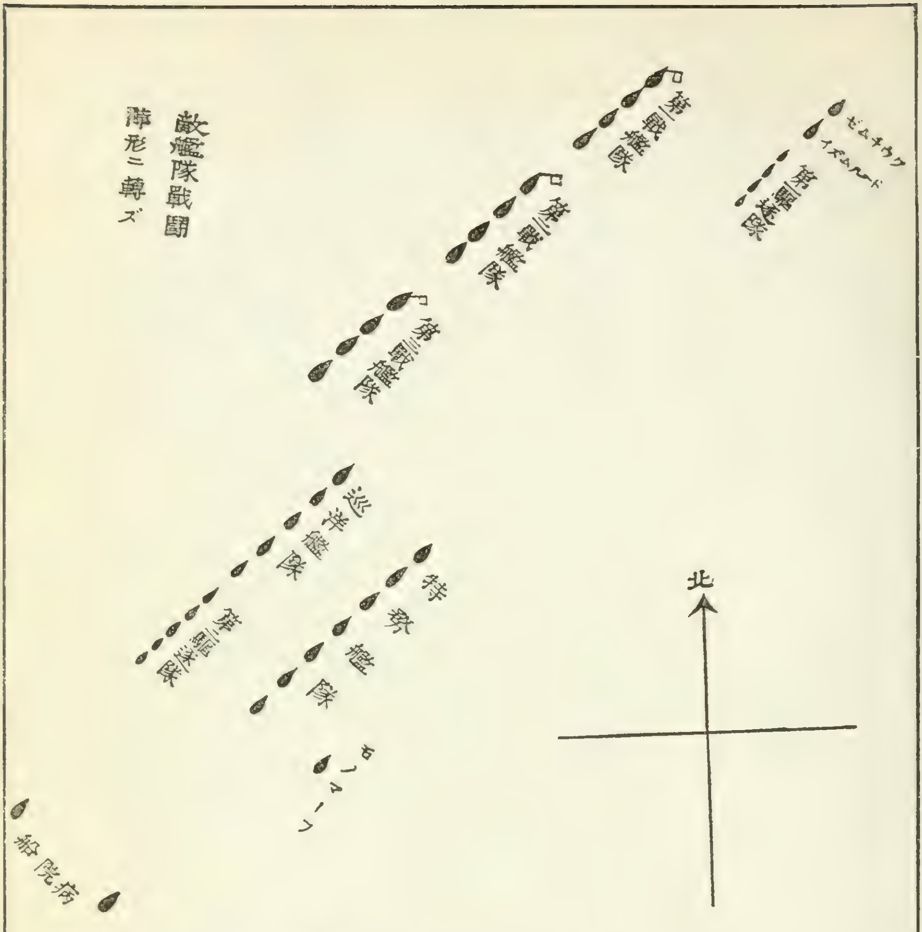
【敵艦隊第三戰隊に向ひ發砲す】紫電鋭く、敵の一艦に閃くと同時に、夏雲の如き白煙の一團は轆々として敵の艦側に簇立した。續いて地鳴の如き巨響を空中にうならしつゝ、艦上を飛越せし八百五十斤の十二吋砲彈は、笠置の右側近く海面を打つて、數丈の水柱を騰げた。迫りに迫りたる敵兵は、此の砲聲に氣昂りて旗艦の命令をも待たばこそ、各艦勝手に打ち出したる數十發の彈丸砲聲殷々として海天に轟き互り、風浪爲に其の聲を潛むるばかりである。我が第三艦隊は徐ろに之に應戰しつゝ、全速力を以て無謀の戰を避けた。敵の司令長官は一徒に砲彈を棄つる勿れとの信號を掲げて、發砲の中止を命じた。敵の射撃は頗る良好にして、彈丸悉く我が附近に落下し、其の腕前容易に侮り難きものがある。山雨將に到らんとして風先づ樓に滿つ、前衛既に戈

【前衛既に戈を交ふ】を交ふ、本隊の決戰漸く迫る。

此の間和泉は依然として、獨り尚ほ敵艦隊の右側に跟進し、我が運送船、商船等に敵艦隊來るの警報を傳へて居た。午後一時前、門司方面より進み來れる一隻の陸軍運送船は、敵艦隊に向つて直一文字に進んで居る。斯くと見たる和泉は直に信號を掲げて危險の警告を與へた。運送船の乘員は何れも、敵艦隊を以て我が艦隊と誤認せるものゝ如く、

【[illegible]】數十隻の軍艦が、陣形堂々として航進せる壯觀に見惚れて、和泉の信號などは一人として顧みるものがない。危險は刻々に迫りつゝある。和泉は、或は旗を振り、或は汽笛を鳴らす等、種々の手段を盡して警を傳ふるも、尚ほ應じない。見れば運送船の甲板には、戰地に向はんとする我が陸兵が充滿して居る。若し間違があつては由々しき大事である。和泉は全速力を以て運送船に近づき、大聲を發して危險を告げた。敵艦隊を以て味方と盲信せる陸兵の如きは、和泉の近づくを見て、帽を振り、手巾を振り、頻に萬歲を唱へて居るので、我が言葉も容易に運送船に通じない。

【和泉の盡力】漸くにして和泉の信號を了解するや否や、該運送船は急遽船首を旋らして南方に避けた。若し和泉居らざりせば、此の運送船は或は常陸丸の轍を踏んだかも知れない。油斷



は大敵である。怪しき艦影を見ば、常に敵と思へとは、戰時に於ける航海者、殊に運送船員の拳々服膺すべき信條である。然るに開戰以來幸に我が海軍は、始終制海權を掌持したるが爲め、我が運送船の乘員中には、軍艦とさへ見れば常に味方のものと速了し、十分の注意を拂はざるのみならず、敵と接近して來るものが往々ある。常陸丸、佐渡丸の場合は知らず、此日の如きは、少しく注意を拂へば、煙突の塗色を見ても、必ず不審の起るべき筈である。況して敵艦隊來航の風評は世上に喧囂を極め、擧國騒然たる時に於てをやだ。

【運送船員の不注意】

露國艦隊は、益々進んで正午、豫定の如く東水道の中央に達し、是より針路を北二十三度東に定め、一針直に浦鹽斯徳に向つた。此時に至るも、我が主力艦隊は、深く濛氣の裡に隱れて、未だ其の隻影を現さない。露國將士の多くは、日本主力艦隊遂に朝鮮海峡に在らずと爲し、漸く其愁眉を開くに至つた。獨りロジェストウェンスキー長官のみは、雙眼鏡を眼より放たず、注意を八方に配りつゝ、時々幕僚を顧みて何事をか

【敵艦隊一針浦鹽を指す】

覘いて居る。此時我が第三戰隊は、更に一層敵情を精探せんが爲め、第四驅逐隊を率ゐ、悠然として敵艦隊の前方に進出し、恰も敵の航路を横斷する如き行動を執つた。ロ―提督は我が運動を以て、浮流水雷を投下するものと思惟し、之を驅逐せんが爲め、曩に制りたる戰闘陣形より第一戰艦隊を離して、再【敵艦隊再び二列陣列となる】び二列縱列の姿勢に轉じた。是ぞ露國艦隊に取りて挽回すべからざる戰術上の大過失であつた。已にして午後一時三十分頃に至るや、千里鏡に就きて前方を注視せし「スウォーロフ」の一信號兵は、いと激したる口調を以て、

「參謀！　前方に怪しき煙が見えます」

と叫んだ。「スウォーロフ」の艦橋に在りしロ―提督以下士官一同は、一齊に眼を前方に轉ずると共に、

「何處に？」

雙眼鏡を取つて眺むれば、迥に東北の空に方【敵初めて我が主力艦隊を發見す】り、數條の煤煙斷續して立ち昇つて居る。一人の參謀はロ―提督に向ひ、

「閣下！　敵の主力艦隊らしいです」

ロ提督は最も沈着の態度を以て、

「さうかも知れん、幾艘居る？」

頓て濛氣を衝いて現れ出づる我が艦隊の艦影、一隻、二隻、又三隻、陣形蜒々として長蛇の如く、其の數遂に十餘隻を數へた。參謀は再びロ―提督に向ひ、

「閣下！　愈東郷の艦隊です」

「信號兵！　敵の旗艦は何か」

信號兵「三笠の樣です」

參謀「三笠は水雷に罹つて沈んだ筈だ、朝日【三笠も居る朝日も居る】ぢやないか、能く見ろ！」

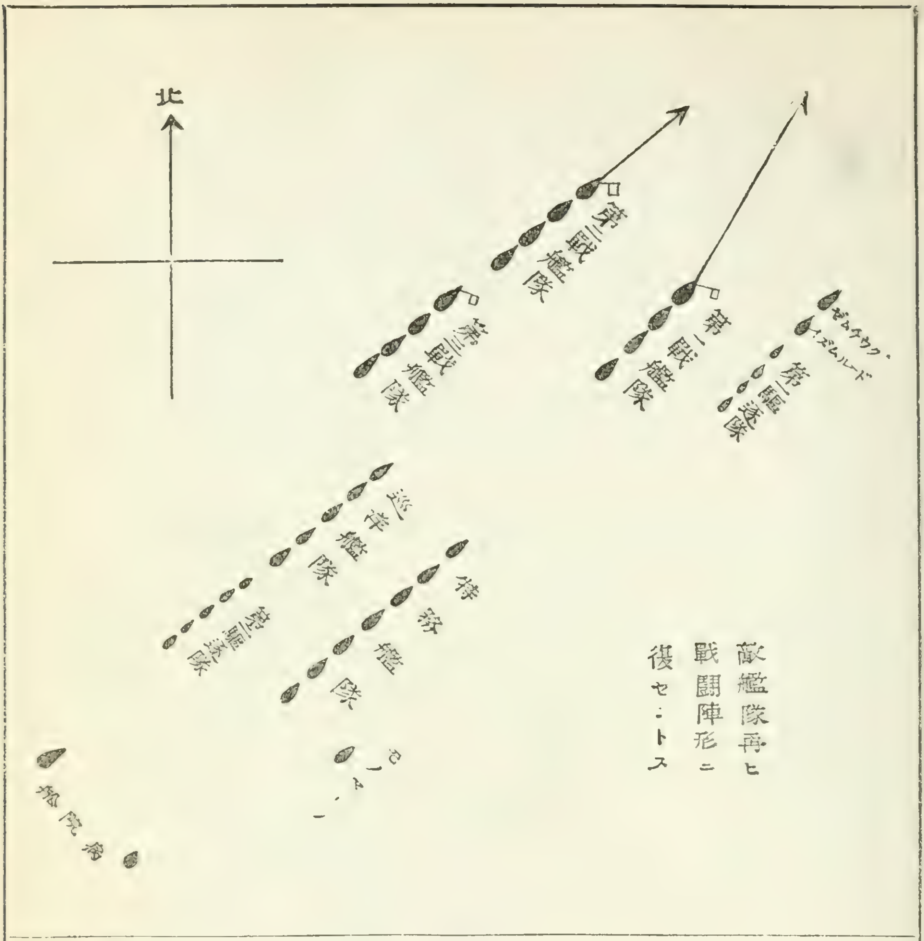
信號兵「慥に三笠です、朝日も居ります」

是に於てロ―提督は再び單縱列なる戰闘陣形に復せんが爲め、右翼列なる第一戰艦隊は速力を增し、左翼列なる第二、第三戰艦隊の先頭【時機既に遲し】に轉位すべき命令を下した。併し時機既に遲し、露艦隊は再び陣形を立て直す暇なく、遂に其の不利益なる二列縱陣を以て戰闘を開始するに至つた。

七　龍虎相對す

人事を盡して天命を待つ。大は國家の興亡より、小は子供の雙六に至る迄、人生の事必ず天運の命ずる所に從はねばならぬ。故に佛帝那翁も、「事の如何を問はず、凡そ人の企畫する所、其の三分の二は之を判斷【智力二分天命一分】力に付し、三分の一は之を天運に任すべし」と唱へ、英提督ネルソンも亦「智力の判斷及ばざる所は、推測に依るの外なし、而して推測の中りしもの、是れ成功者なり、英雄なり」といつて居る。更に又獨將モルトケは、「天運は凡人も何ほ享受し得るも、英傑の士にあらざれば之を保持すること能はず」と道破して居る。

露國第二、第三艦隊は、五月十四日佛領安南なるホンコーヘ灣を發し、浦鹽斯德に向ひ北進の途に就いた。前述べた如く、露國艦隊が浦鹽に入るには、朝鮮海峽、津輕海峽及び宗谷海峽の三通路がある。其の果して何れの【敵艦隊果して何れより來る？】海峽を通過するやは、是れ一にロ―提督の心事に屬するものにして、地形、其他の戰略上の利害を以て、之を判定することは出來ない。即ち苟くも軍艦の通航し能ふ以上は、其の何れの海峽と雖も、敵艦隊の通航を絕對に非認することは出來ない。而



して我が聯合艦隊は、縱令全力を舉ぐるも、其の勢力は猶ほ僅に敵と拮抗し得るに過ぎざるを以て、今之を分割して三水道を守るが如きは、到底策の許さざる所である。故に必ず其の全勢力を一所に集中して敵に當らねばならぬ。是に於て東郷大將は、航海術に於ける數理の許す限り、敵に最も近くして、且つ戰略上遭敵の機會最も多き朝鮮海峽に先づ全力を集結し、以て徐に局面の推移に應ぜんと決定した。然るに敵艦隊發進以來、既に空しく十餘日を經過し、數理上の最

【數理上の最大期限將に盡きんとす】

大期限將に盡きんとするも、其の動靜尙ほ藐として判らない。此時に當り北海方面に轉進すべきか、將た朝鮮海峽に駐止すべきかは、是れ恰も暗中に牛を數へ、胎兒の男女を判ずると等しく、疑は迷を生じ、迷は疑を招き、循環轉輪遂に歸決する所を知らない。夫れ一家の婚嫁、祭葬も、之を易に繹ね、卜に問ひ、尙ほ容易に決しかぬるのが常である。況して今日東郷大將の決せんとする所は、實に帝國興廢の岐るゝ所にして、若し一步を誤れば、上下二千五百載に亙る、金甌無缺の神州の威を潰すに至る

のである。事玆に至りては、稀世の英雄、絕
【運を天命に託す】古の俊傑と雖も、最早や理性の判斷を以て進退を決することが出來ない。唯運を天命に委し、決心を自己の信念に託するのみである。而も此の信念たるや、勇以て斷ずべからず、智以て解すべからず、幻妙、機微の心靈に屬するものにして、小疑に泥まず、小智を弄せず、戰運の大局を達觀したる英傑の人にして、初めて求むべきである。我が
【東郷大將の自信】東郷大將は此の信念に基き、敵艦隊必ず朝鮮海峽に來るべしと推斷し、其の艦隊をば、朝鮮南東岸の良灣たる鎭海灣に伏せ、敵に對しては七段の戰法を定め、鶴首翹望、以て敵の來航を待ち受けた。

初め、敵艦隊の馬剌加海峽を過ぎて、支那海に侵入するや、世界の海軍評論家は、各自家の憶想を以て我が艦隊の所在を揣摩し、敵亦全力を盡して之を偵知するに努めた。然し我が軍機の嚴密なる、恰も名工の器の水を洩さざるが如く、日本國民と雖も當時克く我が艦隊の所在を知れる者は、軍事の樞機に參與せる極めて少數の人ばかりであつた。況して外國人殊に敵軍などに到底知れる筈がない。現代世界海軍戰略家の泰斗として名
【マハン大佐の說】高き米のマハン大佐でさへ、東郷大將は多分臺灣の北端なる基隆に在るならんと
【フリーマントル大將の說】唱へ、英國海軍の耆宿たるフリーマントル大將も亦、我が艦隊の根據地は必ず澎湖島なるべしと說いて居た。斯の如く克く我が艦隊の所在を祕隱し得たる所以のものは、一は我が軍事當局者の注意警戒を密にしたるに因ると雖も、一は亦我が國民が自
【國民自制の結果】ら制して深く緘默を守り、猥に言論を恣にせざりしに因るものと言はねばならぬ。

顧みれば、敵の艦隊マダガスカルを發せりとの飛報に接し、春尙ほ寒き三月の中旬、故國の山を霞に殘しつゝ、艦隊鎭海灣に集りてより、早や二月あまりの波枕、浮世の春を他處に見て、煙硝の臭、銃砲の響、骨も碎くる訓練に、心膽愈練れて、腕益冴え、士氣は昂りて敵を呑む一萬八千の海上男兒、敵艦來れと待ち構へて居る。頃は五月の末つ方、老いたりと雖も春は春、流石に痩せたる韓山も、綠翠赭岩を彩りて麓に霞の裾を引き、碧の海には波立たず、白鷗閑に艦側に眠る。空には戰雲險なるも、地には春色平である。東郷司令長官は戰雲漸く急なるを見るや、不時の出動に應ぜんが爲め、艦
【我が艦隊の戰備】隊錨地を港口に移し、罐には蒸汽の火を絕たず、砲には終夜人を配し、備に寸分の隙さへない。

二十六日も既に過ぎ、明くれば五月二十七日である。終日の訓練に疲れ切りたる將卒の、曉の夢尙ほ濃なる午前五時、思ひ出すさ
【敵艦隊出現の警電】へ肉躍る、各艦の無線電信機に感せし一信の警電!

敵第二艦隊見ゆ。

待ちに待ちたる敵艦隊來る。君國に酬いる時は今日、死後の恥をば遺さじと、衣服更む將卒の、面は霽れて士氣凜然、兜に香を焚かずとも、帽章の櫻花燦として匂がある。東郷司令長官は此の警電に接するや、直に全艦隊に對し、急速出港の命を傳ふると同時に、大本營に宛て、

敵艦見ゆとの警報に接し、聯合艦隊は直に出動、之を撃滅せんとす、本日天氣晴朗なれども波高し、

との電報を發した。何ぞ其の語の詩的にし

て、其の意氣の豪壯なる、戰はずして既に敵を壓するの概がある。斯くて我が

【我が主力艦隊の發動】

主力艦隊の各艦艇は、逐次錨を拔いて豫定の航行序列を作り、午前七時各艦根據地を出發した。聯合艦隊司令長官東郷海軍大將は、其の將旗を高く三笠の大檣頭に飜し、戰艦三笠、敷島、富士、朝日、裝甲巡洋艦春日、日進の六隻より成る第一戰隊を直率し、三須第一戰隊司令官をして日進に坐乘して隊の後尾を固めしめ、親ら列の最先頭に進み、上村第二艦隊司令長官は出雲を旗艦とし、裝甲巡洋艦出雲、吾妻、常磐、八雲、磐手（淺間は別に行動せり）の五隻より成る第二艦隊を率ゐて第一戰隊に續行し、島村第二戰隊司令官は將旗を磐手に揭げて其の後殿に備へ、瓜生第四戰隊司令官は巡洋艦浪速、高千穗、明石、對馬の四隻を率ゐ、更に第一戰隊に續いて總殿軍を承り、又通報艦龍田及び第一、第三驅逐隊は第一戰隊の右側に、通報艦千早及び第二、第五驅逐隊は第二戰隊の右側に、第十四、第十九艇隊は第四戰隊の後方に、夫々占位し、尚ほ裝甲巡洋艦淺間は、勇敢決死の驅逐艦隊及び第九艇隊を率ゐ、別働隊となつて本隊の側方に附隨して居る。軍艦

【艦隊合して四十六隻】

十八隻、驅逐艦、水雷艇合して二十八隻、雄姿堂々として陣の延長は五海里に亘り、檣桁は整然として電柱の連るが如く、噴煙は鬱乎として雲龍の蟠るが如しである。

東郷司令長官は、哨艦和泉よりの報告に依り、敵は五島宇久島の北西約二十五海里に在りて、東水道に向進せるを知り、乃ち敵艦

【目指すは沖の島】

隊の速力を十二海里と推定し、敵を筑前沖の島附近に邀撃せんと決心した。針路は南東、風は南西である。朝鮮海峽西水道の吹き通しに於て、横波を受くることとて、戰艦さへも動搖烈しく、中甲板の諸砲は、砲口波を掬ふばかりである。況して僅に百噸あまりの水雷艇に至つては、轉輾動搖箕を簸るが如く、艇の傾斜は實に六七十度に及び、

【怒濤狂奔】

怒濤艇首を呑めば、人諸共に水中に沒し、激浪艇尾を襲へば、湧波、上甲板に漲り、汽機は絶えず空轉して、船體碎くるかと疑はれ、潮水は煙突内に奔入して、汽罐の火も消ゆるばかり、船顚覆するか、己れ波に淩はるゝか、水雷艇乘員は敵を見ずして、既に死を待つて居る。部下を愛すること子の如き我が東郷大將は、此の天候到底水雷艇の行動に適せざるを認め、風波衰ふるまで、

【水雷艇避難】

之をして對馬沿岸に避難せしめ、且つ別働隊を解散して、各々其の本隊に復歸せしめた。

【戰鬪準備】

斯くて我が艦隊は行々戰鬪準備を整へつゝ、洪波を蹴つて沖の島に向ひ急進した。砲臺には彈藥を備へ、艦橋其の他の要所には吊床を縛著して防彈障を造り、重要品は水線下若くは裝甲部に納め、甲板各處には防火防水の要具を備へ、隔壁戸を締め、通信裝置

羅鍼儀方位名稱

イハ從ノ略字

を驗し、其の他一切の準備を完整して、最後に甲板を清めて滑倒を防ぐ砂は撒かれた。午前十時三十分東郷長官は、各艦に向ひ晝食の命を下した。士官室は既に戰時治療所と變じ、食卓もなければ椅子もなく、一同「デッキ」に蹲坐して、心ばかりの晝食をしためた。若し夫れ戰鬪一たび開始さるれば、復相見ることの出來るやら、出來ぬやら、曉食の時再び此處に集る者、果して幾人あるで

【生別死別の會食】

あらう？ 是ぞ生別死別の會食と思へば、張り詰めし氣にも、坐ろに感慨に堪へぬものがある。或は愛兒の寫眞を、ポッケットにした者もあるであらう、或はなつかしの父母に、遂に別れを告げた者もあるであらう。食後各艦の艦長は、部下總員を集めて、此日の戰鬪こそ、邦家運命の決する所なる旨を訓諭し、或は壯烈なる琵琶の一曲に、兵氣を興奮するもあり、或は勇壯なる軍歌に、士氣を鼓舞するもあつた。

敵情に關する電信は愈頻繁となり、彼我艦隊は刻々相接近しつゝある。我が主力艦隊は正午、沖の島の北方約十五海里の地點

【未だ敵影を見ず】

に達した。而も尚ほ未だ敵影を認めない。東郷長官は暫しく停止して敵の來るを待たんよりは、寧ろ進んで之を迎ふるに如かずとなし、針路を右に折つて更に西方に向つた。山の如き逆浪は艦首に激して甲板に溢れ、飛沫は颯として水面上三十尺の艦橋に逆注する。已にして午後一時三十分頃に至るや、常に敵と觸接を保ちつゝ來りし我が第三戰隊を南西方に、第五、第六戰隊を西方に發見し、茲に初めて我が全艦隊の連絡を遂げた。尋いで同四十分頃我が主力艦隊は左舷

【濛氣を破つて現れ出でたる敵の全艦隊】

南方數海里に當り、濛氣を破つて堂々進み來る敵の全艦隊を發見した。敵は精鋭の「スウォーロフ」型戰艦四隻を右翼列の先頭に置き、「オスラービヤ」、「シソイ、ウェリーキー」、「ナワリン」、「ナヒーモフ」より成る一隊は、右翼列より稍後れて、左翼列の先頭に占位し、「ニコライ一世」、「アプラクシン」、「セニャーウヰン」、「ウシャーコフ」より成る一隊之に次ぎ、「ジェムチウグ」、「イヅムルード」の二艦は驅逐艦數隻を率ゐて、右翼列の右前方に進み、「オレーグ」、「アウローラ」、「ドンスコイ」、「モノマーフ」の一隊、及び其の他の巡洋艦、並に特務艦、驅逐艦等は連綿として、更に兩列の後方に續き、大小合して三十餘隻の艨艟は、大戰鬪旗を檣頭に翻へし、遙に其の後尾を濛氣の裡に隱しつゝ、北々東の針路を執つて眞一文字に驀進して居る。

【雲を拔け出づる黑龍か波を蹴破る長鯨か】

雲を拔け出づる黑龍か、波を蹴破る長鯨か、壯大雄偉の觀、實に目も覺むるばかりである。參謀長以下幕僚を率ゐ、三笠の前艦橋に立つて敵艦隊を睥睨せし東郷大將は、各艦に戰鬪用意を令すると共に、先づ敵勢力の薄弱なる左翼部隊を擊破せんと決心し、戰鬪速力を以て斜に敵針路の前方を横斷した。此の時第四戰隊は、他の巡洋艦隊と行動を共にせんが爲め、主力艦隊と分離して敵の後尾に對する運動を開始し、各驅逐隊は敵を避けて、艦隊の非戰側に移つた。遙に旗艦三笠の

【皇國の興廢此の一戰に在り】

檣頭、颯と翻へり一連の信號、

皇國の興廢此の一戰に在り各員一層奮勵努力せよ

嚴として秋霜の如き此の信號に、將士は躍上氣更に昂り、報國の丹心は旭日の戰鬪旗と其の色を競ひ、決死の一念は鋼鐵の裝甲よりも

尙ほ堅である。

敵の艦隊既に指顧の中にあり。艦内如何にと見渡せば、艦長は艦橋に在つて戰備一切を督し、航海長は羅針儀を擁して、艦の操縦に任じ、砲術長は距離を測つて、砲火の指揮を統べ、水雷長は方位盤を整へて、發射の機を窺ひ、分隊長は受持砲臺を指揮し、各

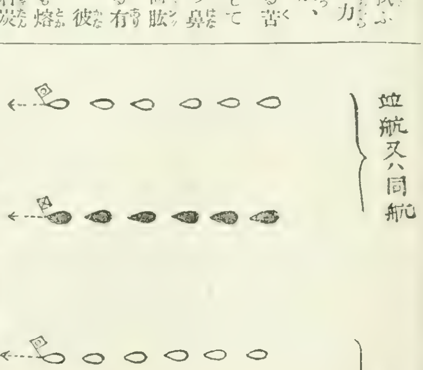
【戰鬪配置】從屬將校は夫々分擔の配置を守り、萬に一缺なきを期して居る。砲員は砲に、水雷部員は發射管に就き、運彈員は彈藥を運び、防火隊は喞管を繰り、信號部員は揚旗索を握り、戰鬪の開始を今や遲しと待つて居る。

中下甲板に降り見れば、防水戶は密閉せられ、鐵窓扉は鎖され、何れの區劃も人影寥々として電燈獨り輝き、唯要所要所に配置せられたる傳令兵の耳を澄して佇めるのみ。副長と甲板掛士官とは、脫兎の如く艦の前後に奔走して、火災浸水の非常を警めて居る。前後二箇所の戰時治療所には、石炭酸の臭ひ紛として鼻を衝き、看護は繃帶を整へ、軍醫は刀を執り、一脚の手術臺は早く愛國の血潮

【彈藥通路】を舐めんと待つて居る。更に降りて彈藥通路に到れば、こゝは水線下十數尺たる溫度百二十度の焦熱地獄、流汗頭に交るも拭ふに暇なく、裂けたる肉の血を啜りつゝ、力に餘る大小の彈藥を各砲臺に供給する狀、國の爲なればこそ、重罪の囚人も、斯かる苦

【機關室】役にはよも服すまじと思はれる。轉じて機關室を窺き見れば、油の焦ぐる異臭先づ鼻を衝き、此方の機械室には幾百貫の大曲肱が轢々聲を發し、全速力を以て回轉せる有樣、實に耳聾し目も眩むばかりに物凄く、彼方の汽罐室には、猛火烈々として石をも熔し、鐵をも燃す勢に、絕えず投げ込む石炭は一瞬にして白熱の團塊と化す。蒸汽炭塵朦朧たる中に、水を注ぐもの、油を差すもの、石炭を燒ぶるもの、此處には戰鬪既に開始せられて居る。

午後二時二分我が艦隊は、敵を左舷南方約一萬米突に見るに及んで、針路を南西に轉じ、敵と反航の姿勢を執つた。我が速力十五海里、敵の速力約十海里、彼我艦隊は今や一分間約八百米突、約七町の割合を以て相近づきつゝある。此儘直進して敵と反航戰を交へんか、將た針路を反轉して敵の先頭を壓せんか、正奇の戰法未だ決しない。



【三笠の艦橋上】こゝ三笠の艦橋上を眺むれば、[illegible]長身削るに閑なき顳顬に水沫の露を拭ひもやらず、屹然「コンパス」を擁して立てるものは、開戰以來旗艦艦長として令名嘖々たる艦長伊地知海軍大佐である。雙眼鏡片手に敵の行動を注視せるものは、冷靜沈毅、頭髮焦ぐるも猶ほ熱せざる參謀長加藤海軍少將である。炯眼隆鼻、ノートを手にして悠々敵狀を寫せるものは、神謀鬼策機に應じて斷ずる先任參謀秋山海軍中佐である。その他航海長布目海軍中佐(二)は海圖を按じて彼我の位置を測り、砲術長安保海軍少佐(二)は秒時計

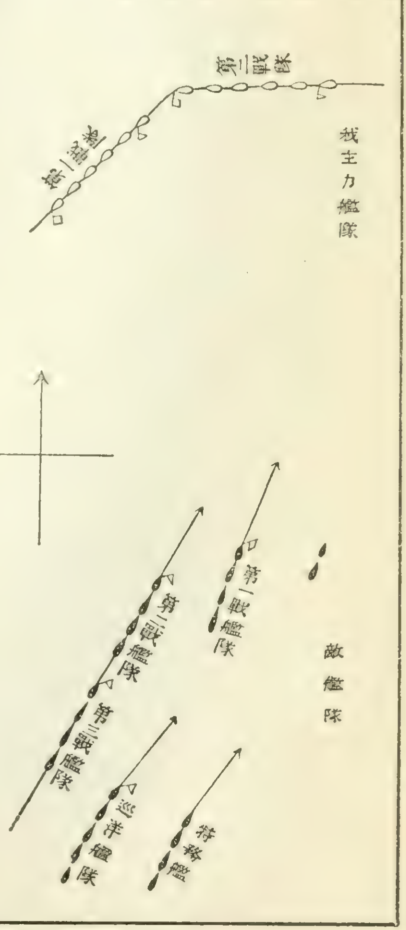
を握つて彈道の時間を計らんと構へ、各少尉候補生は或は測程儀を覘ひて距離を測り、或は傳話管に就きて命令を各部に傳へて居る。

【東郷大將】豐頰短軀、左手堅く長劍の柄を握り、右手輕く雙眼鏡を携へ、半白の粗髯を潮風に飄らしつゝ、泰然として敵を睨むものは、是ぞ我が聯合艦隊司令長官東鄕海軍大將である。

【戰氣磅礴】戰機は愈熟して距離測程上の報ずる聲は、九千米突！ 八千五百米突！！ 既に十二吋砲の有效距離以內である。砲は彈丸を孕んで射手の指は引金に懸つて居る。而も敵も打たねば、我も發たず、滿を持つて交持せる狀、兩虎嵎を負うて相對し、雙龍雲を奪ひて相向ふが如く、千古の偉觀、萬代の壯景、肉は躍つて鐵拳汗を絞るの概がある。

八　龍爭虎鬪

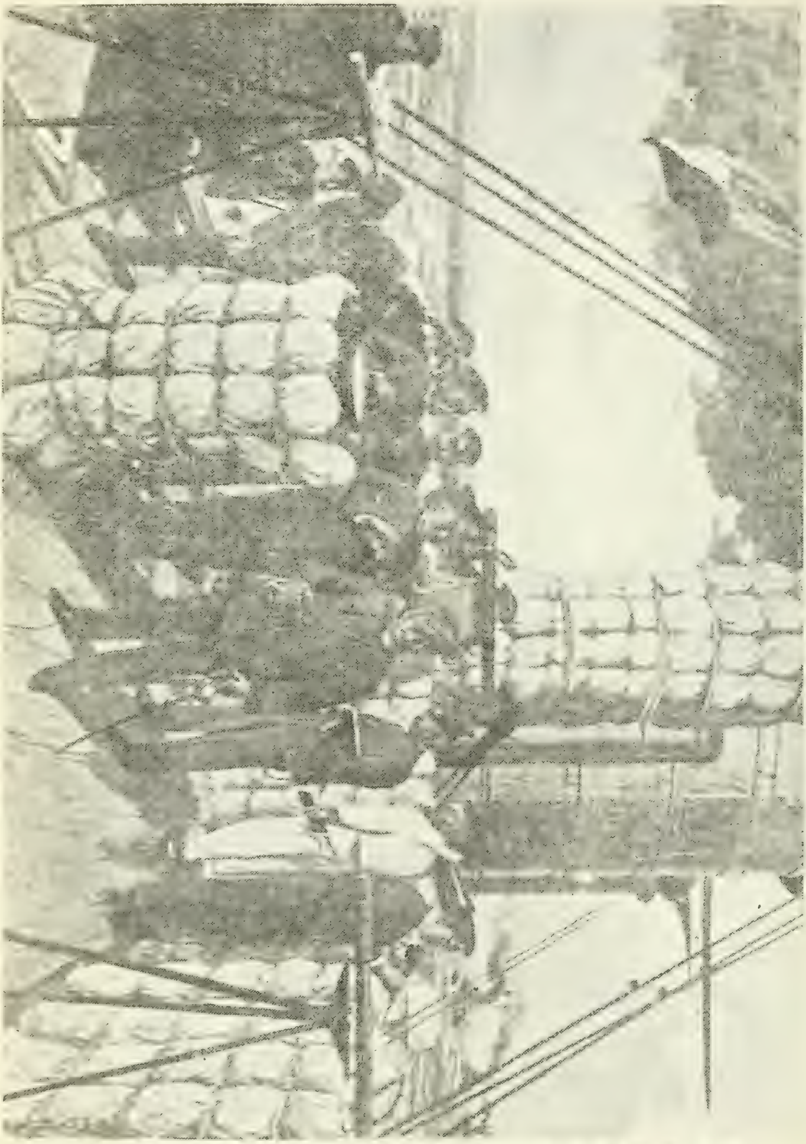
龍虎爪牙を研いで相對峙し、搏擊の機刻々に逼る。兩軍士氣は熱して火の如く、戰鬪の號音一たび響かば百貫の鐵丸空を切つ



【殺氣天に滿つ】て飛ばんとす。殺氣天に滿ちて鬼氣人を衝く。

露國艦隊は其の不利益なる二列縱陣より、單縱陣の戰鬪陣形に復せんが爲め、右翼列なる第一戰艦隊は速力を增して左翼列の前頭に就かんと努めて居る。敵と反航の針路を取つて進み來りし我が主力艦隊は、轉廻して敵と同航せんか、將た直進して之と反航せんか、旗艦艦橋上、僉議正に濃かである。東鄕大將は長劍を杖ついて羅鍼艦橋上に屹立し、炯々たる眼は益輝き、結びたる口は愈緘り、敵の運動を注視しつゝ默して一語を發しない。既にして午後二時を過ぐること五分、敵の距離約八千米突に近づくや、機を見て動くこと、迅電の如き我が大將は、決然として左舷回頭の令を下した。大膽！ 又冒險！

【東郷大將の勇斷】由來勇斷果決は東鄕大將の性格を彩る一大色素である。此の瞬時に於ける聯合艦隊司令長官東鄕海軍大將の決心と、過ぎし日淸の役、豐島沖に於て淸兵を滿載せる英船高陞號を擊沈したる、當年の浪速艦長東鄕海軍大佐の決心とは、全然同一式である。談則か岐路に入るも、東鄕大將の性格の一



(舞鶴要港部許可濟)　(東城鉦太郎氏筆)

戦闘開始前に於ける三笠艦橋

端を窺ふ爲め、少しく當時の狀況を述べん。

回顧すれば早や十一年の昔となりぬ。明治二十七年七月二十五日、日清戰爭開始の當日、坪井海軍少將の率ゐたる我が遊擊艦隊吉野、浪速、秋津洲の三艦は、清艦濟遠、廣乙を豐島沖に擊破し、吉野、秋津洲は敗敵の處分に向ひ、浪速は命に依り獨り止まつ【英國商船高陞號事件】て、清兵を搭載し牙山に向はんとする英國商船高陞號の捕獲に從事した。然るに清兵は未だ開戰の公布なきを口實として我が引致の命に從はず、英船長を嚇して艦を芝罘に還させんとした。是に於て英船長は、我が命に從はんとすれば、清兵の爲に殺戮せらるゝ虞あり、清兵の言に從へば、我が砲擊を受くるの憂あり、進退茲に谷まり、狀を訴へて我の救助を求めた。敵兵既に我が命を奉ぜず、眇たる一運送船、之を擊沈するに易々たるのみである。併し乍ら其の揭ぐる旗色は、英國商船旗である。當時日英の關係は今日の如く親密でなかつた。英國は我が國よりは寧ろ清國に對して同情を持つて居たのである。若し之が爲め他日英國と紛援を構ふるに至らば、夫こそ容易ならぬ國家の大事である。されど又既に一旦命を下し、敵の反抗に逢うて今之を許さんか、我が軍威信の失墜は勿論、將來に於ける我が作戰上に、大煩累を來すの虞がある。國際法上擊つが是か、擊たざるが否か、今更戰時國際法の書物など引張り出したとて間に合はない。【當年の東鄕大佐】浪速艦長東鄕大佐は拱手瞑目艦橋上に沈思すること少時、決然英國船員に向つて退船を命ずると共に、砲擊の令を下した。清兵は或は小銃を發つて勇敢なる最後の抵抗を試みたるも、素より龍車に向ふ蟷螂の斧に過ぎず、二千餘噸の高陞號は、見る見る我が砲火の爲に擊沈せられ、海面は忽ち清兵の辮髮を以て掩はるゝに至つた。此の報一たび東京に達するや、內閣の驚愕一方ならず、「海軍の奴等は亂暴だ」と諸公一時茫然たるものがあつたといふ。【英國の激昂】之と同時に英國の國論亦大に沸騰し、盛に我が浪速の行爲を非難し、事態漸く容易ならぬ形勢を呈した。英國支那艦隊司令長官の如きは如何なる間違なりしか、自今其の方法の如何を問はず、英國國旗を揭ぐる船舶に對する臨檢搜索は止めに貰ひたいなどと、全然交戰國の特權を無視したる照會をば、我が艦隊長官に寄せた程である。以て其の如何に激昂したるかが推知せらるるであらう。時の我が出征艦隊司令長官伊東中將は、東鄕大佐を旗艦に召して詰問する所があつた。東鄕大佐は其の擊沈の止むを得ざりし所以を述べ、且つ告ぐるに、擊沈若し非ならば、浪速艦長【偉かりし東鄕大將の言】は潔く其の頭を刎ねて英國に謝せんのみと、意氣凜然犯すべからざるものがあつた。幸に英の碩學ローロンス博士等、毅然として、輿論の反抗を意とせず、浪速の行爲を以て、「行際法上正當なり」と辯じたるが爲め、激昂を極めたる英國の國論も、漸く鎭靜に歸したのである。

「取舵——度」の號令と共に三笠の艦首は、俄然左舷に回轉して、敵と同航の針路を取るに至つた。敵は此の大膽にして意外なる我が艦隊の行動に驚きたるものの如く、或將校は手を拍つて「占めた!」と叫び、或將校は狂喜して「我が軍勝てり」と呼び、又或者は「東鄕大將は氣が狂つた?」と罵つた、先程より「スウォーロフ」の艦橋上に立つて、我が艦隊

の行動を注視せしロ提督は、我が回轉運動を見るや、破顔一笑、機逸すべからずと為し、將に三笠の回頭を終りて、新針路に就かんとする時、全艦隊に向つて戰鬪開始を令すると同時に、「スウォーロフ」の前部十二吋砲は、三笠に向つて第一彈を送つた。時に午後二時八分にして、兩軍旗艦の距離正に七千米突である。

【露國艦隊先づ發砲す】

逸りに逸りたる敵軍は、戰鬪開始の令に接するや、恰も積水を千仭の谿に決するが如き勢を以て、一齊に我が三笠に向つて彈丸を雨注した。砲聲は殷々として百雷の一時に轟くが如く、大小の彈丸は三笠の周圍に集落して海水奔騰、爆煙渦卷き、我が後續諸艦より之を望めば、水柱沸々三笠の艦影を沒し、人をして坐に手に汗を握らしめた。

抑も敵前に於ける回轉運動は、海戰術の原理に於て最も危險にして、最も忌むべきものと認められて居る。是れ回轉中は、自艦の照準不正確となるに反し、敵の照準をして容易ならしめ、殊に此の時に於ける我が艦隊の如く、單縱陣の逐次運動を爲す場合には、回轉軸に在る軍艦は、敵の全砲火を受けて、一艦一艦撃滅せらるゝ恐があるからである。

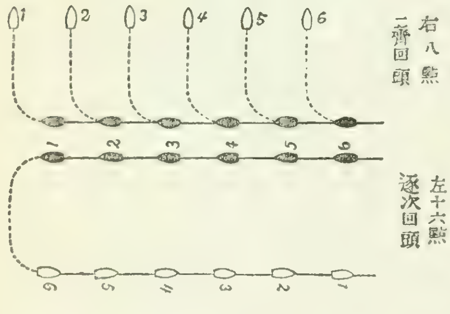
東郷大將の取りたる運動は、啻に大膽なるのみならず、寧ろ冒險といふべきである。若し之を兵棋演習の試驗とすれば、

【東郷大將は落第かも知れぬ】

東郷大將は或は落第かも知れぬ。乍併兵は活術にして死學にあらず、虎穴に入らずんば虎兒を得ずで、此の冒險あつてこそ、初めて日本海海戰の全勝が得られたのである。

東郷大將にして徒に座上戰術の窟理に拘泥し、危險を恐れて、敵と反航せんか、爾後に於ける戰機の發展は、頗る困難であつたであらう。夫れ兵に常勢無く、水に常形無し、能く敵に依つて變化し勝を取るもの、之を神と云ふと。東郷大將の取りたる策は是れ即ち敵に因つて變化したるものにして、バルチック艦隊に對する我が聯合艦隊の場合に於てのみ、初めて其の成功を見たのである。故に後世或は徒に之に倣ふものあらば、必ずや美人の顰に倣ふ醜婦の嘲を貽すであらう。

一齊回頭及逐次回頭



【三笠の危機】

驟雨か急霰か、敵彈益降りしきり、近きは艦側數米突に落下し、水煙艦を掩うて三笠の危機刻々に逼らんとす。東郷大將は寸鐵の防禦なき艦橋上に立つて、飛瀑の如き潮水に浴しつゝ、尙ほ滿を持して發砲の令を下さない。軍紀森嚴なる我が將卒は、煮え返る血を抑へつゝ、雨より繁き飛彈の下に、肅然として戰鬪開始の命を待つて居る。

【我が艦隊の戰鬪開始】

既にして午後二時十分、距離は近づいて、約六千米突となるや、東郷長官は手頃は宜しと初めて發砲を令し、三笠先づ「スウォーロフ」に對して徐に砲擊を開始した。

◦二番艦朝日以下逐次之に準らうて砲火を開き、

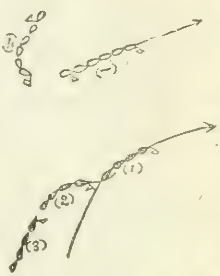
二時十五分には第一戰隊の殿艦日進も、亦既に回頭を終つて戰線に入り、專ら敵の旗艦「スウオーロフ」及び「オスラービヤ」の兩艦に向つて、全戰線の砲火を集中し、戰鬪漸く劇烈となつた。敵は我が集中火に壓せられ、針路を右折して北東方に變針し、第二、第三戰艦隊は、第一戰艦隊の後尾に入り、蜒々として不規則なる單縱陣を形成し、我と竝航の針路を取るに至つた。

尋いで同二十五分頃には、我が第二戰隊も亦戰線に加はつて第一戰隊に續航し、「スウオーロフ」「オスラービヤ」並に其の他の敵艦に向つて猛烈なる砲火を注ぎたるが爲め、敵は之に堪へずして更に右折し、漸次東方に轉針した。

是に於て我が艦隊は優速を利用して、益々敵の先頭を壓迫し、同三十分頃には距離は減じて五千米突内外となり、各艦急射撃に移つた。砲聲轟々、硝煙濛々、波は逆卷いて日色暗く、彼我各十二隻の主戰艦隊國運を賭して

【獅虎相搏つ】相戰ふ、獅虎相搏ち、鯨鯢相爭ふの狀、天柱碎けて地維折るゝかと疑はれ、偉絶、雄絶、筆以て記すべからず、言以て語ることが出來ない。

午後二時二十分頃敵艦隊我ガ猛撃ニ耐ヘズ針路ヲ右折ス



我ガ艦隊
敵艦隊
(一) 我ガ第一戰隊
(二) 我ガ第二戰隊
(1) 敵第一戰艦隊
(2) 敵第二戰艦隊
(3) 敵第三戰艦隊

我が彈丸は頻に敵艦に命中し、或は舷側を貫き、或は甲板を碎き、紅焔迸發、爆煙海を蔽ひ、敵は漸く苦戰の狀を顯した。

【敵漸く苦戰に陷る】就中其の兩旗艦は、屢大火災を起し、猛煙全艦を包んで艦影さへも定かならず、唯見る、團々たる黒褐の濃煙强風に煽られて、餘火其の間に閃き、檣頭の戰鬪旗僅に其の艦位を示すのみである。而も敵は名に負ふ「スラブ」の强族、慘澹たる苦戰に屈せず、奮戰力鬪最も力め、其の射撃の如きも、未だ容易に侮り難きものがある。

東郷大將の旗艦三笠は、此時既に巨彈十餘を受けて死傷續出し、中にも其の六吋砲郭に命中したる十二吋砲彈の如きは、該砲員全

【我が艦隊の損害】部を殺傷し、補缺員亦踵いで全滅せられ、肉塊四散して碧血甲板を染むるの慘狀を呈し、第一戰隊の殿艦日進亦數彈を被りて、參謀松井海軍中佐等之に斃れ、第二戰隊の淺間は艦尾水線部に十二吋の巨彈二個を受けて海水艦内に奔入し、應急修理の爲め遂に列外に脱し、其の他の諸艦多少の損害を被らざるはない。唯幸なるは何れも艦の要部を避けたるが爲め、各艦未だ戰鬪力を減殺するに至らず、一彈を被る毎に士氣益々加はり、一兵の殪るゝ毎に敵愾の氣愈昂つた。

【戰鬪愈酣なり】既にして二時三十分頃より同四十分頃に至りては、戰鬪最も酣にして、彼我の砲火は正に熾烈の頂點に達し、千雷萬霆並び發して、飛び交ふ彈丸は秋郊の蝗蝻よりも尙ほ繁く、空を切る彈聲は枯林を亙る疾風よりも尙ほ凄じく、將士共に寸時も其の配置を離るゝの暇さへない。或副長の如きは、兵士より尿意促迫堪へ難しとの訴に接する

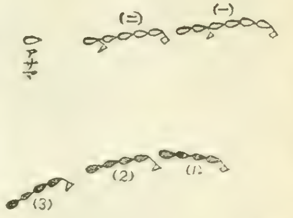
【甲板放尿勝手次第】や、甲板放尿勝手次第との珍號令を發するに至つた。此時に當り我が射撃は愈冴えて巨彈の敵艦に命中炸裂するもの益多

後我艦隊酣戰時ノ光景

(東條鉦太郎畫)　(海軍參考館藏)

午後三時四十分頃酣戰ノ位置
敵艦火災ヲ起スモノ多シ

○日本艦隊
●露國艦隊
(一)第一戰隊
(1)第一戰艦隊



く、砲煙煤煙に漲りて全く敵の艦列を蔽ひ、我が諸艦は已むを得ず一時射撃を中止するに至つた。

斯くて我が艦隊は煙の絶間を覗り、好敵を選んで益〻猛烈なる砲火を注ぎしかば、毎發殆ど虚彈なく、敵艦多くは火災を起し、且つ其の第三戰艦隊は著しく前續艦より後れ、陣形漸く亂れんとした。【敵陣漸く亂る】而して戰鬪開始以來常に我が砲火の焼點となりし「スウォーロフ」、「オスラービヤ」の兩艦は其の損害最も甚しく、殊に「オスラービヤ」は敵の戰艦中唯一の三本煙突なりしが爲め、最も我が射撃の好目標と爲り、大檣は半ばより折れ、後部煙突は粉碎し、舷側の彈孔は蜂窩の如く、就中其の大なるは直徑實に二十呎に達し、浸水は決河の勢を以て艦内に合入し、艦首は著しく沈下して艦體左舷に傾斜し、甲板は碎けて燃えて一面の火床となり、砲門並に彈孔より吐き出す猛火は宛も紅蓮の火舌の如く、伏屍累々、肉片飛散し、光景誠に凄慘を極めて居る。【伏屍累々肉血飛散】而も彼猶ほ發砲を停止せず、艦尾に殘れる二三の砲門よりは、紫電の砲火頻に閃くを見た。

やがて三時五十分頃に至り、我が艦隊は全く敵の前方に進出し、敵列に對して略ぼイの字を畫き、約四千米突の距離を以て益〻猛烈なる縱射を加へた。敵は之を避けて尚ほも右方に偏針し、遂に南東方に向ひて我と並行の航路を取らんとした。此の時恰も我が十二吋砲彈一發は「スウォーロフ」の司令塔に命中して、忽然爆發すると共に、操舵機破損して艦は自ら右舷に急轉しつゝ列外に逸走し、【敵旗艦列外に出づ】塔内に在りたる司令長官ロジェストウェンスキー中將亦重傷を負うて一時昏睡に陷つた。【ロ提督の負傷】是に於て二番艦「アレクサンドル三世」代つて嚮導艦となり、我が艦隊の後尾を衝いて北方に遁れんと欲し、決然針路を左方に轉じた。我が全艦隊の砲火は、忽ち「アレクサンドル三世」に向つて集中せられ、同艦は見る見る大火災を起して列外に走り、三番艦「ボロヂノ」更に代つて嚮導艦となつた。

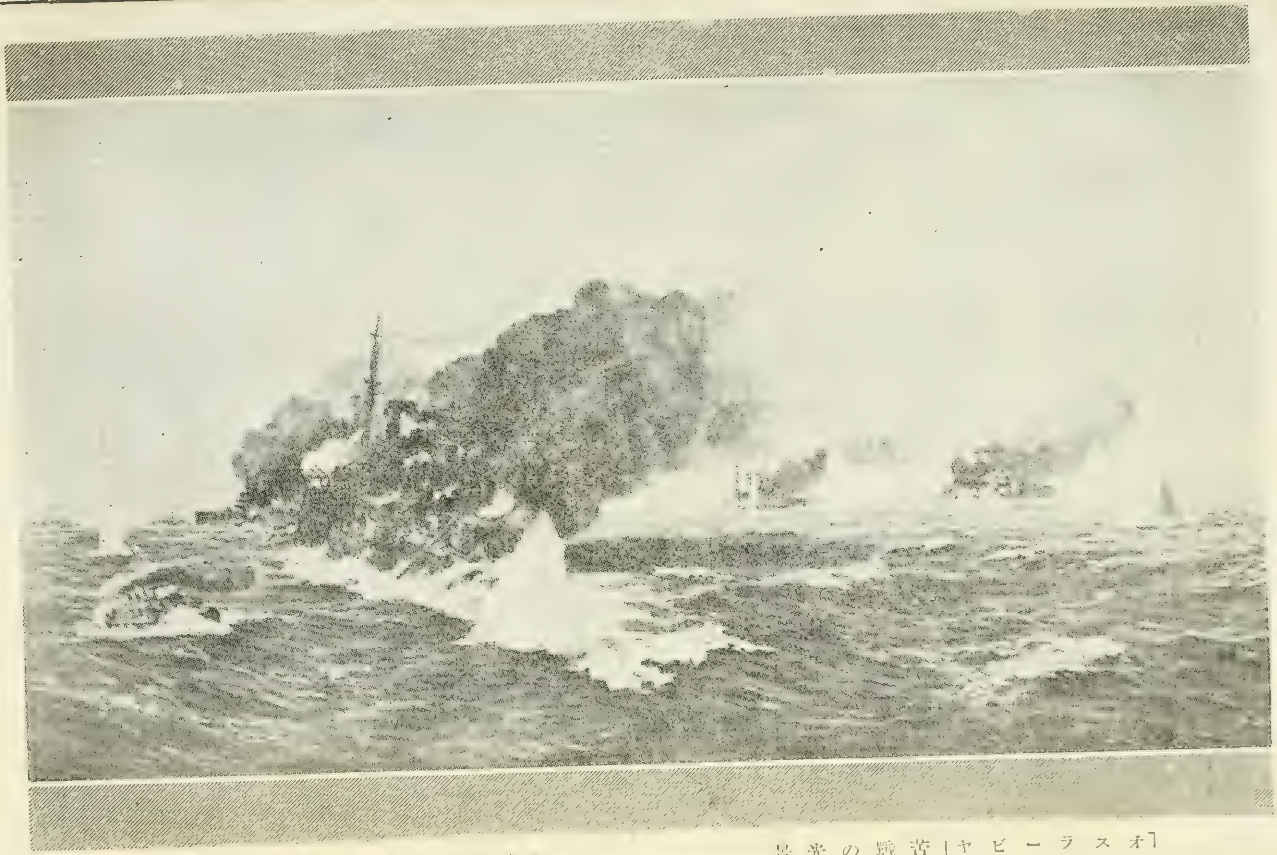
我が艦隊は敵の運動を覺知するや、之に先じて其の前路を扼せん爲め、第一艦隊は直に二回の左八點一齊回頭を行ひ、日進を嚮導とし三笠を殿艦とせる逆列單縱陣を制りに、戰闘側を左舷に轉じ、逆浪を蹴破しつゝ約西北西に向つて急進した。

敵は我が第一戰隊の回轉するを見て、到底北方に逃出することの難きを認めけん、忽ち前決心を翻して、再び右舷に回頭し、針路を南方に轉じた。

是に於て我が第二戰隊も亦回頭を見合し、其の儘直進して敵と並航し、第一戰隊と共に約三千米突の近距離より、敵列に對して猛烈なる十字砲火を注いだ。

斯くて敵艦隊は陣形益〻混亂し、雜然として尚ほも南方に航下し、遂に煙霧の裡に一時其

(其 一)



「オスラービヤ」苦戰の光景

(東條鉦太郎氏畫)　(海軍參考館藏)

午後三時頃敵陣漸ク潰乱ス
我ガ第一戰隊ハ針路ヲ轉ジテ敵ノ北走ヲ抑ヘントス

の姿を沒した。仍て我が第二戰隊も亦午後三時十分右舷十六點の逐次回頭を行ひて第一戰隊の跡を追ひ、彼我艦隊は次第に相違ざかり、玆に第一次戰鬪を終つた。

【第一次戰鬪終る】

是より先き、「オスラービヤ」は其の損害愈烈しく、全く戰鬪力を失ひ、午後三時前「スウォーロフ」と相前後して列外に脱した。上中甲板は火災の猛焔に包まれ、下甲板には浸水漲り、乘員は今や水火の挾撃に逢うて身を置くに處なく、纔に焼け殘れる甲板の一處に集れば、此處も亦軋む木隆に雨漏りて、飛び來る彈丸は雨か霰か、一彈碎くる毎に死するもの、傷つくもの、其の數を知らず、或は頭を碎かれ、或は手足を斷たれ、苦痛を叫ぶ負傷者にも今は手當を施す術もなく、瀕死の重傷者に對しても最期の一杯の水さへ與ふることも出來ない。彈丸に碎くるか波に呑まるゝか、二つに一つ。乘員は唯手を拱いて死を待つばかりである。

【「オスラービヤ」の慘狀】

斯かる間に艦は益々沈下して、逆卷く激浪は物凄き渦を爲しつゝ、早や上甲板に迄襲ひ來り、殪れし人の屍や、碎けし艦具を一波毎に奪うて行く。殊に身の運動さへ自由ならぬ負傷者の、波に浚はれて苦み叫ぶ有樣は、實に悲慘の極である。斯くて午後三時を過ぐること十分、「オスラービヤ」は遂に艦首を下にし艦尾を高く空中に擡擧すると同時に、一萬二千餘噸の戰艦は全く影を水面下に沒し、乘員の多くは生きながら艦と共に千尋の海底に葬られた。跡には濛煙尚ほ漠として

【「オスラービヤ」沈沒】

オスラービヤ

海面に漲き、井の如き大小の渦流は、轟々聲を發して、人も艦具も唯一呑みとし、幸に海面に浮びたる人々も、或は荒れ狂ふ激浪に呑まれ、或は降りしきる彈丸に碎け、八百五十の乘員中、味方驅逐艇「ブイヌイ」、「ブラーウイ」等に救助せられたる約四百名の外は壯烈悲慘なる最期を遂げた。是ぞ日本海々戰に於ける劈頭第一の沈沒露艦「オスラービヤ」終焉の概況である。

又嚢に舵機を損じて戰列を脫したる敵の旗艦「スウォーロフ」は其後全く僚艦と分離し、

午後三時三十分「スウオーロフ」孤立シテ我カ第一第二戰隊ノ集彈ニ浴ス

單獨北方に航走中、三時三十分頃約二千米突の近距離より、再び我が第一、第二戰隊に要擊せられて、艦體破損益甚しく、前檣は根元より折れ、一個の煙突は粉碎して影だに留めず、火焔全艦を掩うて慘狀目も當てられぬばかりである。

【「スウォーロフ」の慘狀】

此の時千早（艦長海軍中佐江口鱗六）、第五驅逐隊（司令海軍中佐廣瀨順太郎）は我が砲火の絕ゆるを待ち、猛然荒波を衝いて「スウォーロフ」に對し勇壯なる白晝襲擊を決行した。

【千早及び第五驅逐隊の白晝襲擊】

偶敵主力艦隊の一部は「スウォーロフ」掩護の爲め近づき來り、我が襲擊艦に向つて猛烈なる砲火を集中し、爲めに、千早は、三彈を被りて浸水を來し、應急修理の爲め、一時戰線外に退き、第五驅逐隊の不知火亦一彈を受けて汽罐を破られ、下士卒十名の死傷者を生じた。而して「スウォーロフ」は尙ほ浮んで居る。

九　勝敗既に決す

相撲を取りて最初兩三ツを取られたるものは負け、將棊を差して先づ飛車を奪はれたるものは敗る。二時八分戰鬪を開始してより、三時過兩軍一たび相離るゝに至る迄約一時間の大激戰に於て、敵は戰艦「オスラービヤ」を失ひ、旗艦「スウォーロフ」を擊破せられ、其の他の諸艦亦多大の損害を被り、陣形潰裂して殆ど亂軍に陷つた。之に反し我が艦隊は、多少の損害を受けたりと雖も、陣形整然として旗鼓益鮮に、一時戰列を脫したる淺間も既に應急修理を完成して隊に復し、隊伍堂々激戰の跡だに見えず、勝敗の數既に明となつた。

【勝敗の數既に決す】

彈を避けて南方に轉回したる敵主力艦隊は、我が砲擊を脫するに及び、三時三十分頃再び浦鹽斯德に向つて針路を轉じた。

【敵艦隊再び浦鹽に向ふ】

[illegible]日進を先頭とし敵を砲擊しつゝ西北西に進みたる我が第一戰隊は、敵を後方煙霧の裡に失するや、三時四十分頃再び左十六點の一齊回頭を行て、[illegible]單縱陣となり、第二戰隊も東北に[illegible]に合し、其の左前方に位し、共に敵を追つて北東方に向首した

午後四時頃第二次戰鬪開始ノ位置

斯て午後四時頃に至り、我が艦隊は東方に當り、敵主力艦の陣形錯然として北方に向へるを發見し、距離約六千米突より、右舷砲火を以て第二次戰鬪を開始した。

【第二次戰鬪開始】

煙霧を透して敵の陣列を眺むれば、纔に火災を起して戰列を脫したる「アレクサンドル」三世は、此の時既に列に服し、「ボロヂノ」「アリヨール」と共に一隊を作し、「シソイ、ウェリーキー」「ナワリン」「ナヒーモフ」の諸艦は不規則に之に續き、「ニコライ一世」以下の第三戰艦隊は遠く遲れて、姿を煙霧の裡に沒して居る。敵は最初の一戰に敗れて士氣沮喪せしか、今や決戰の勇氣なきものの如く、唯遁走維れ努め、我が砲撃を再び開始するや、僅に之に應じつゝ、列を亂して又も漸次右方に變針した。獨り半壞の「スウォーロフ」のみは何ほも煙に包まれつゝ、恰も傷蛇のノタくるが如く漂浪として我が艦下と並進して居る。

是に於て我が艦隊の砲火は再び此の哀れなる敵艦に集中せられ、見る見る殘りの一煙突は飛散し、艦橋は粉碎し、砲塔は崩壞し、其の他甲板上の諸裝置は全然一掃せられて、殘るは唯僅に枯木の如き半折の大檣のみとなつた。岩か船か將た煙の團塊か。逆轉自由を失うて、逃れんと欲するも逃るゝを得ず、備砲の大部は破損して、戰はんと欲するも戰ふ能はず、二千米突內外の近距離より發射する、我が大小の彈丸は、雨よりも密に、霰よりも急に、或は艦側に碎け、或は甲板に裂け、濛々たる黑煙の裡には、火焰の柱閃きて、天をも焦し、波をも燒き、凄慘たる光景、人をして悚然たらしむるに至つた。而も流石は厚き甲鐵を以て裝はれたる最新式の戰艦とて、尙ほ未だ沈沒に至らない。

【岩か船か】

回頭運動

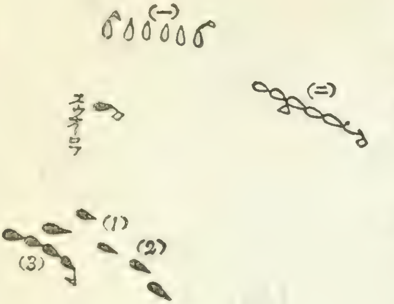
斯かる間に敵主力艦隊は、殘骸に等しき「スウォーロフ」をば、我が砲火の下に遺棄し、益右折して南方に遁逃せんとした。

【敵艦隊又南方に遁る】

我が艦隊は「スウォーロフ」の擊沈を驅逐艦に讓り、第二戰隊は直に敵主力を追うて南折し、第一戰隊は敵の再び我が後尾を繞つて北方に逸走するを扼せんが爲め、四時三十分左八點の一齊回頭を行ひ、單横陣を以て暫

時北方に航進した。二時間半に亙る激戰に、彼我合して百餘の艨艟より吐き出す、煙は、發射の砲煙、彈の爆煙、並に敵艦火災の煙と、相混じ相合して、渦卷きつ、棚きつ、瀰漫溟濛として遠望をさげ、我は遂に敵影を烟霧の裡に失するに至つた。

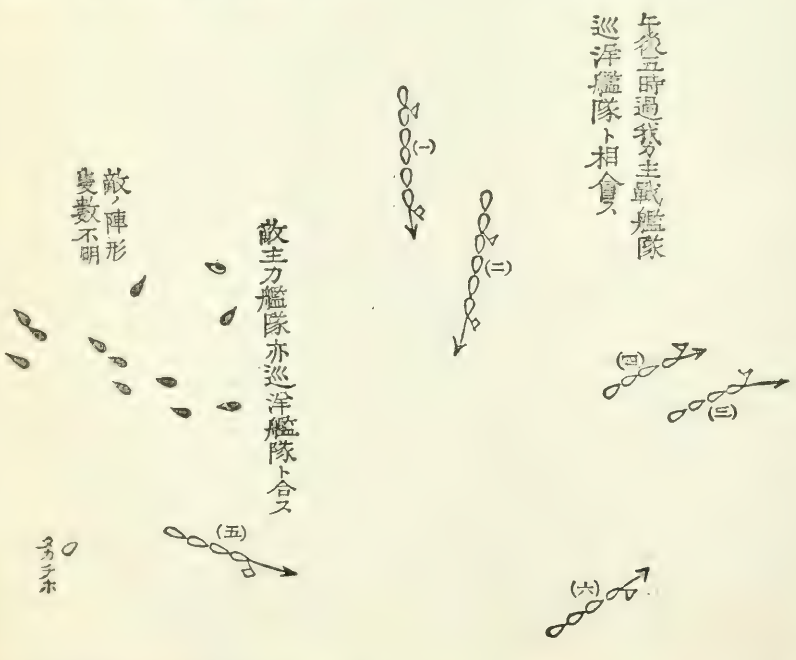
【第四驅逐隊の襲撃】是より先き我が第四驅逐艦へ司令海軍中佐鈴木貫太郎」は「スウォーロフ」襲撃の命を受くるや、直に敵艦に向つて挺進し、



午後四時三十分敵「スウオーロフ」ヲ棄テ南方ニ逃ル我カ第一戰隊ハ北方ニ轉ス

午後五時頃距離約三百米突に肉薄して水雷を發射した。「スウォーロフ」は艦尾に殘る僅に一二の輕砲を發つて尙ほも勇敢に應戰し、徒に朝きしは士官室に一彈を受けて一名の負傷者を生じた。而も「スウォーロフ」は未だ沈まない。

北方に向進したる我が第一戰隊は敵艦隊北向の形勢なきを認め、更に右八點一齊回頭を行ひて單縱陣に復し、第二戰隊を招いて之を先頭に附け、敵主力を索めつゝ正南に航進した。此の時南方に當【第六驅逐隊た追うて南下す】りて砲聲



の殷々たるを聞き、或は敵主力艦隊の我が巡洋艦隊に遁りたるにあらざるやを憂ひ、第一、第二戰隊は速力を增して南方に急航すること約三十分、午後五時十分頃に至り西方遙に巡洋艦、特務艦等十餘隻の敵艦船雜然として集團せるを發見した。塒を求むる騷鴉の群か、行を亂せし飛雁の列か。北向するもの、西向するもの、南向するもの、停止せるもの、傾斜せるもの、焚焼せるもの等、隊伍

【敵陣滅裂】

滅裂、陣形支離し、各艦各自の欲する所に向つて居る。我が艦隊は適當の敵を擇んで之を砲撃しつゝ、敵主力を尋ねて尙ほも南方に觸下せしに、遇我が第三、第四、第五、第六戰隊等の敵巡洋艦、特務艦等と戰ひつつ、南方より航進し來るに會した。眺むれば各戰隊共に外觀一の異狀を認めず、唯第四戰隊に屬する高千穂の稍隊列より後れたるを見るのみである。戰鬪開始以來我が主力艦隊と巡洋艦隊とは、全く相分離し、互に其の安危に關して憂慮したるに、今や其の無事なる容姿を見て、父子十年再會の思

【父子十年再會の思】

ひがした。

已にして午後五時三十分に至るも、我が艦隊は未だ目指せる敵主力をば發見する能はず、仍て第二戰隊は西方に轉針して敗走する敵

【第一第二戰隊相分る】

巡洋艦を追躡し、第一戰隊は尙ほも敵主力を尋ねて針路を北方に轉じ、兩戰隊茲に一旦相分離するに至つた。

午後五時三十分第一戰隊ハ北方ニ第二戰隊ハ西方ニ向フ敵陣混乱鴉群ノ如シ

斯くて第一戰隊は行々敗敵を砲撃しつゝ進む中、五時四十分頃敵の假裝巡洋艦「ウラール」の進退自由を失して單獨漂流するに會し、是も敵の片割と、一千米突以内の距離より全戰隊の砲火を之に集中した。敵は船體に寸毫の防護なき假裝巡洋艦とて、我が彈丸は恰も利槍の襖を通すが如く、敵艦の一舷より他舷

【「ウラール」の沈沒】

に串通し、「ウラール」は忽ち大火災を起して、見る見る激浪の中に沈沒した。是より先き同艦は我が第三戰隊以下の砲擊に傷つきて、舵機の自由を失ひ、且つ艦内浸水烈しきに至りたるを以て、乘員は早くも艦を見棄てゝ端舟に移り、其の大部は露艦「アナヅイリ」及び「スヴキーリ」に救助せられ、一部は翌日我が長門、石見の沿岸に漂着したるが爲め、艦と共に沈沒したる人員は、極めて少數であつた。

我が第一戰隊は激浪の中に沈み行く「ウラール」の慘狀を後に見つゝ、益北方に急ぐ途上、大破したる「スウオーロフ」の、尙ほ煙焰に蔽はれつゝ彷徨し、且つ其の傍に工作船「カムチャーツカ」の漂蕩せるを發見した。併し時既に六時に近く、晩春の永き日も早や暮れかゝりて、日沒迄に餘すところ僅に一時間餘である。敵艦隊は巳に大敗したるが如しと

【敵の損害明ならず】

雖も、其の損害の明なるものは僅に「スウォーロフ」の戰鬪力を失ひたると、假裝巡洋艦「ウラール」の沈沒したるとのみ

である。其の他の諸艦は果して幾何程度の損害を被れるやは全く不明にして、「オスラービヤ」の沈沒さへも、東鄕司令長官は此の時未だ知らないのである。

是を以て、我が艦隊は日沒迄に敵と猶ほ一戰を交へて、尠くも其の五六を擊滅し、彼をして再び起つ能はざるに至らしめねばならぬのである。日一たび沒すれば、敵は夜陰に乘じて何處に逃走するやも圖られず、明日の會戰の如きは豫め之を期することは出來ない。

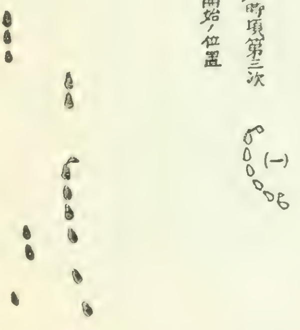
【日暮れて道遠し】乃ち我が艦隊の爲には、日暮れて道遠しの感があるのである。故に我は今や廢艦に等しき「スウォーロフ」や、「工作船の如きを相手にするの暇なく、僅に之に一擊を加へたる儘、五時五十分更に針路を北西に轉じた。斯くて進むこと數分時にして、忽ち西方に當り、北方に急ぐ敵の一群を發見した。

【敵陣形を立て直す】敵は一時間に亙る憩戰を利用して、火災を鎭め、損處を修理し、再び陣列を立て直し、「ボロヂノ」、「アリヨール」の二戰艦を先頭に置き、稍離れて「ニコライ」一世、「アプラクシン」、「セニャーウヰン」、「アレクサンドル」三世、「ウシャーコフ」、「シソイ、ウェリキー」、「ナワリン」、「ナヒーモフ」など順次之に續き、內部の損害はいざ知らず、外觀尙ほ頗る堂々たるものがある。

我が第一戰隊は敵を發見するや、少しく針路を右折して北々西となし、午後六時約六千五

【戰鬪再び開始せらる】百米突の距離より、專ら敵先頭の二戰艦に向つて砲火を開いた。敵は初め浦鹽斯德に向ひ北々東なる針路を取りしも、我が砲擊を受くるに及び、忽ち我が並航の針路に轉じ、窮鼠の勢を以て、猛激なる應戰を開始した。時に朝來の濛氣漸く散じて煙霧亦薄ぎしと雖も、夕陽波に映じて我が射擊に便ならざるに反し、敵は日光を背にして我を明視し得るの利を占め、巨彈屢我が諸艦に命中し、我は多少の損害を被るに至つた。

午後六時頃第三次
戰鬪開始ノ位置



【第二戰隊再び第一戰隊に合せんとす】又曩に第一戰隊と分れ、敵巡洋艦を追うて西方に向ひたる我が第二戰隊は夜間第一戰隊と分離しあるの不利なるを思ひ、之と合せんが爲め、午後六時頃針路を北方に轉じて第一戰隊の跡を追うた。已にして同五十分頃に至り、同戰隊は前方遙に「ナヒーモフ」を殿艦とせる數隻の敵艦を發見し、益急進して同五十分距離約七千五百米突より砲擊を開始した。

敵は我が第一戰隊に其の先頭を擊たれ、第二戰隊に其の後尾を脅され、首尾敵を受けて益左方に屈折して、遂に北西に變針した。

是より先き戰艦「アレクサンドル」三世は既に多大の損害を被り、舷側に穿たれたる無數の彈孔よりは、海水瀧の如く艦內に奔入し、艦體傾斜して速力衰へたるが爲め、今や他の新式戰艦と共に行動すること能はざるに至り、纔に第三戰艦隊と合して「セニャーウヰン」と「ウシャーコフ」との中間に其の位置を占めた。子供の中に大人を交へたるが如き同

「アレクサンドル」三世

艦は此の時我が射撃の好目標となり、忽ち猛烈なる砲火を浴せられて大火災を起し、全艦蓊鬱たる黒煙に蔽はれつゝ再び列外に走つた。浸水は益烈しくして艦の傾斜は愈加はり、低舷側の砲は水中に沒し、高舷側は赤色の艦腹を露し、甲板は峙つて急坂【「アレクサンドル」三世の慘狀】の如く、乗員は柱を抱き綱に縋りて纔に其の身を支へて居る。加之も炎々たる火焔は強風に激して益獰猛の威を逞しらし、大小の飛彈は艦邊に炸けて慘狀愈甚しく、或は猛火に燒かれ、或は裂彈に撃たれて、激浪中に轉落するもの其の數を知らず、死屍は海を掩うて波は朱に變ずるに至つた。

やがて午後七時頃に至るや、艦の傾斜は彌急にして甲板は殆ど垂直となつた。此の時恰も汽罐の破裂したるが如き響して、白煙の一團空天に漲ると同時に、艦は全く轉覆して、巨鯨の背の如き物凄き艦底をば水面上に現した。乗員の大多數は轉覆と共に艦に壓せられて其の儘海中に沒し、一ト艦底に匍ひ上りたる數十名の人員も、是れ亦僅に死期の寸刻を延し得たるに過ぎずして、艦底

の水中に沒入するや、孰れも激浪盤渦の裡に吸入せられ盡した。斯くて「アレクサンドル」三世八百五十の乘員は、全部艦と運命を同

【生存者だになし】じうし、戰况を後に語るべき唯一人の生存者さへなく、其の壯烈なる行動は空しく沖の島東北方の海底に葬り去られたのである。

斯かる間に我が第一戰隊は、專ら敵の先頭に在る「ボロヂノ」、「アリョール」の二戰艦に向つて、猛烈なる砲火を集中しつゝ、極力之を急追した。然るに敵も亦我に前路を扼せらるゝをいとひ、速力鈍き後續諸艦を顧みず、汽機の全力を盡して逸走を圖りしが爲め、我は容易に敵に近づくこと能はず、戰鬪は依然として七千米突內外の遠距離より繼續せられた。適〻太陽水線下に沒して、紫

【彼我の位置を轉ず】紅の夕暉西空を染め、今や彼我地の利を代へて我は敵影を明視し得るの地位を占めた。

是に於て我が艦上の射擊は益〻正確となり、巨彈の敵に命中するもの次第に相踵ぎ、一番艦「ボロヂノ」は忽ちにして、大檣は折斷せられ、艦橋は粉碎せられ、艦の後部には大火災を起し、噴煙爆煙相混じて全艦を蔽ひ、我は遂に照準を施す能はざるに至つた。仍て我が各艦は更に目標を「アリョール」に移して猛烈なる射擊を加へしに、同艦も亦忽ちにして黑烟にまみるゝに至つた。時に暮色漸く深く、閃々たる砲火は次第に紅を增して愈〻鮮に、殊に「ボロヂノ」の火災は益〻熾にして、數丈の紅焰天を彩り波を染め、光景實に凄壯を極めた。

已にして午後七時二十分頃我が一艦より放ちたる二發の巨彈一時に「ボロヂノ」の艦尾に命中爆裂するや、幾もなく一段猛烈なる煙焰

【「ボロヂノ」の沈沒】高く天に冲し、同時に艦は倏忽として其の姿を海面より沒した。是れ恐らく火焰、彈藥庫を犯して其の爆發を起したものであらう。

「ボロヂノ」の沈沒は斯くの如く急激なりしが爲め、其の乘員は上甲板に在りたるものの外は、悉く艦と共に海底に沈み、漸く海面に浮び出でたるものも、多くは渦の中に吸入せられ、殘の一部も亦長時間、暗夜の激浪中に漂ふうち、疲勞と凍餒との爲め、いつしか一人沉み二人溺れ、全乘員八百五十名の中、萬死に一生を得たるものは、同夜我が驅逐艦の爲に海中より拾ひ上げられたる、

【生存者正に一人のみ】唯一名の水兵のみであつた。

旅順の攻擊慘は慘にして、突擊隊全滅、聯隊全滅の悲報は屢〻吾人の耳朶を衝き、悲痛凄愴の感に堪へぬものがあつた。然し其の全滅

【戰鬪力上の全滅】たるや、所謂戰鬪力上の全滅にして、尠くも隊員の過半は、負傷者となつて歸つて來たのである。然るに此の日の海戰に於ける、敵の戰艦「アレクサンドル」三世、並に同「ボロヂノ」の最期の悲慘なりしことは實に言語に絕し、兩艦合して一千七百名の將

【眞の全滅】卒中、生存者僅に一名とは、譃の樣な眞にして、是ぞ眞の全滅である。殊に其の大多數は無限の恨を呑んで生きながら數百尋の海底に葬られたのである。

男兒一たび戰場に臨めば、水漬く屍、草生す屍は、素より覺悟の上にして、念頭自己なく父妻子もない。併し斯の如きは彈丸縱橫

【陣中の感慨】に飛び交ひ、劍戟前後に相交る際に於ける觀念にして、中宵營舍の夢覺めて、蟲聲唧々枕頭に響くとき、三更直に立つて、半月皎々檣頭に懸るとき、征士の淚は一層

【ボロヂノ】

熱く、血は一層紅である。殊に時利あらず、騅逝かず、四面楚歌の聲を聞きては、雄傑項羽も倘ほ腸を斷ちしとかや。刀折れ、矢盡きて、徐に死を待つの時、誰か故郷を懐ひ、妻子を思はざるものがあらうぞ。

英國の大提督ネルソンでさへ、トラファルガーの戰に傷つきて、死期漸く迫らんとするや、己が愛するハミルトン夫人及び一女ホラシホの行末をば國王並に國民に託する旨を遺言し、又近くは佐久間海軍大尉が、潛水艇内に死を待つの時、遙に陛下に奏上するに、部下の遺族をして飢餓に泣かしむるなからんことを以てして居る。誰か軍人を以て涙なしと云ふものぞ、誰か軍人の血を以て冷しと云ふものぞ。

抑も戰士の戰場に殪るゝや、死は一なるも其の死方は決して一樣でない。唯一發の彈丸に急所を打たれて何の苦もなく即死するものもあれば、肉裂け骨碎けて、苦痛の裡に轉々悶死するものもある。就中其の最も悲慘なるものは、陸戰に在つては、身に重傷を負ひ、起居自由を失して、敵前に遺棄せられたるもの、海戰に在つては、身は死せずして艦と共

に沈みたるものであらう。而も前者は尚ほ時としては、敵か味方に救助せらるゝ萬一の希望がある。唯後者に至つては、暗黒なる海底の鐵室内に閉ぢ込められて、救助を受くるの望は絶對に絶え、逃れんと欲して逃るゝ能はず、死せんと欲して死する能はざるものである。浸水は室内の空氣を驅逐して、漸次膝を沒し、腰を浸し、時計の針の一「セコンド」毎に迫り來る死を待つの時、胸中の苦悶果して如何であらうぞ！

【海底に死を待つ苦悶】

「ボロヂノ」の沈沒するや、時に日は全く暮れて、海漸く暗く、敵影模糊として煙か波か。我が驅逐艦、水雷艇は襲撃の準備を整へて、既に各方面より敵に迫りつゝある。是に於て我が艦隊は、戰を之に讓りて砲火を收め、敵と別れて翌朝の集合地點たる鬱陵島に向進した。雄大なる艦隊戰は茲に一先づ終を告け、壯烈なる水雷襲撃は將に起らんとして居る。前夜來の強風稍衰へたりと雖も、波は尚ほ澎湃として、破濤燐青を走らし、六十隻に餘る我が驅逐艦、水雷艇は枚を銜み、燈火を蔽うて、縱橫に馳突する狀、勇又壯！

【晝戰終る】

＊　＊　＊　＊　＊　＊

【巡洋艦隊の戰闘】

我が第一、第二戰隊が北方より敵の主力艦隊を壓撃せる間に、我が第三、第四、第五、第六戰隊は、南方より敵の巡洋艦隊及び特務艦隊を攻撃した。朝來敵と觸接を保ちつゝ、之を我が主力艦隊の方に導きたる第三艦隊司令官出羽中將の率ゐる第三戰隊及び曩に主力艦隊より分れたる第二艦隊司令官瓜生中將の率ゐる第四戰隊は、第一、第二戰隊の外方を迂航して、敵の後尾に迫り、午後二時四十五分頃左舷反航戰を開始した。

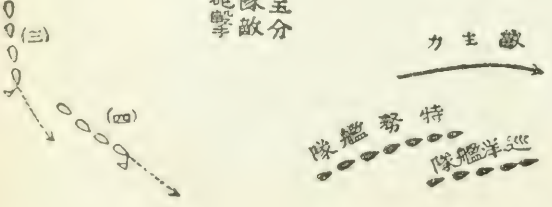
【第三第四戰隊戰闘を開始す】

此の時、「オレーグ」、「アウローラ」、「ドンスコイ」、「モノマーフ」、「スウェトラーナ」、「アルマーズ」等の敵巡洋艦は、特務艦「ウラール」、「アナヅイリ」、「カムチャーツカ」、「イルツヰシ」、「コレーヤ」、「ルス」、「スウヰーリ」を掩護しつゝ、主力艦隊の右側後方に隨航せしが、武裝輕弱なる特務艦船は、我が攻撃を受くるや、忽ち列を亂して、右往左往に逃け迷ひ、巡洋艦は或は進み、或は後れて、極力之が救援に努めた。

我が兩戰隊は互に協同連繫して、漸次敵の後尾を旋撃しつゝ、其の南方に出で、四千乃至五千米突の距離を測つて、益猛烈なる砲撃を加へた。斯くて敵と並航戰を持續すること約三十分にして、敵の後尾は益亂れ、特に特務艦隊は既に多大の損害を被りたるものの如く、「オレーグ」、「アウローラ」、

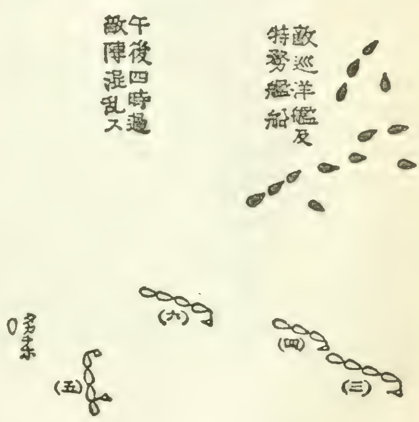
【敵陣漸く亂る】

午後二時四十五分第三第四戰隊敵ノ後尾ニ對シ砲撃ヲ開始ス



「ドンスコイ」等の巡洋艦は、之が救護の爲め午後三時三十分頃、路を反轉して西方に向つた。仍て我が第三、第四戰隊も亦之を追うて西方に轉針し、爾後其の優速を利用して機宜正面を變じ、或は敵の左に現れ、或は其の右に廻り、艦種を擇ばず猛射を加へしかば、午後四時頃に至りては、敵は愈〻亂軍に陥り、火災を起すもの、進退自由を失するものなど續出し、「オレーグ」、「アウローラ」等も亦屢〻火災を起し、漸く苦戰の狀を呈した。時に北方に於ける彼我主力艦隊の戰鬪は尚ほ酣にして、殷々たる砲聲、濛々たる硝煙、南北相應して、天に轟き、海を掩ひ、凄壯たる光景、天地の終も斯くやとばかり思はれた。

【第五、六戰隊の戰鬪に加はる】尋いで午後四時過に至り、第三艦隊司令長官片岡中將の直率せる第五、第六戰隊も亦戰鬪に加はりしかば、敵陣全く潰亂し、東向するものあり、西走するものあり、隊雜然として鴉の如く、假裝巡洋艦「ウラール」、工作船「カムチャーツカ」の如きは、殆ど航進力を失ひ、曳船「ルス」は遂に我が砲火の爲に沈沒し、巡洋艦は特務艦を拋棄して、遠く北方に航走した。此の時我が第四戰隊の高千穗は、敵彈の爲め舵機を損じて、列外に出で、第三戰隊の旗艦笠置も、亦水線下に一彈を受けて浸水を見るに至つた。



是より先き第五、第六戰隊は、敵艦隊を我が主力艦隊に導きたる後、敵の後尾に向ひ航進中、午後三時過南方に當り、敵の病院船二隻の敵艦隊に續航せるを發見し、之が處分を適〻來會したる假裝巡洋艦佐渡丸及び滿洲丸に命じた。是に於て兩假裝巡洋艦は、直に敵病院船を三浦灣に引致して臨檢したるに、

【敵ノ病院船を抑留す】其の一隻「アリヨール」には、臺灣附近に於て露艦隊の爲に拿捕せられたる英國商船「オールドハミヤ」號の船員を收容せるを發見し、海牙條約違反の廉を以て、又他の一隻「カストローマ」は、同條約違反の嫌疑を以て、共に之を佐世保に回送した。

斯くて我が第三、第四、第五、第六戰隊は、共に敗敵を掩擊しつゝ、尚ほも東方に航進せしに、午後四時五十分頃に至り、曩に北方に逃れたる敵巡洋艦は其の主力艦隊の一部と合して再び南下し來り、我が艦隊に對して攻勢を取つた。我が諸艦隊は直に之を邀へて奮鬪せしも、巡洋艦は遂に戰艦に抗する

【我が第三第四戰隊の危殆】能はず、第三、第四戰隊は近距離より敵の猛火に浴し、殊に第四戰隊の如きは忽ち數彈を被り、動もすれば危地に陥らんとした。適〻我が第一、第二戰隊は北方より敵主力を追うて航下し來り、彼我艦隊の中間に進入したるを以て、敵は更に西方に回轉し、尋いで北方に逃走した。此の時第四戰隊の旗艦浪速は吃水線に敵彈を受け

たるを以て、應急修理の爲め、第四戰隊は一時戰線外に避け、又遂に水線下に敵彈を被りたる笠置も、爾來浸水次第に增加し、遂に修理の爲め、波浪靜穩なる港灣に避難するの止むを得ざるに至り、午後六時頃戰場を退き、千歳に護衛せられつゝ、長門國油谷灣に向ひ、音羽、新高は第四戰隊に合した。

【笠置戰場を脱す】

已にして午後六時過、淺間は應急修理を終り、高千穗も亦舵機の故障復舊して來り會した。

第四、第五、第六戰隊は、更に北方に向つて敗敵を追尋する途上、敵の戰艦「スウォーロフ」及び工作船「カムチャーツカ」の進退自由を失ひて漂流せるを發見し、之を包圍して猛擊を加へた。「カムチャーツカ」は元と是れ眇たる一商船、「スウォーロフ」は既に殘骸に等しき廢艦に過ぎず。我が諸艦は二千米突以内の近距離に迫り、而も教練射擊に於けるが如く、悠々射擊を加へしかば、「カムチャーツカ」は午後七時遂に右舷に傾倒して、徐々に沈沒した。是より先き同艦の乘員は、艦の運命漸く危險に瀕するや、本艦を退去して端舟に移りしも、其の多くは激浪の爲に顚覆し、二百餘名の將卒中、翌日長門の沿岸に漂着したる五十餘名の外は、悉く海底に葬られた。

【工作船カムチャーツカの沈沒】

「カムチャーツカ」既に沈沒す、我が艦隊の砲火は、今や悉く「スウォーロフ」に集中せられた。時に同艦は全く煙焰に包まれて、砲門、彈孔等よりは眞紅の火焰を吐き、慘澹たる光景、到底人間の生存に堪へ得べしとも思はれない。而も尚ほ艦尾に殘れる一門の小砲よりは、時々砲火の迸發するを見た。我が各艦より發射する彈丸は、頻に敵艦に命中し、舷側に閃く爆裂の火光は、仕掛煙花の開くが如く、殆ど譬へるに[illegible]なき程である。巡洋艦の大砲は石に立つ矢の例はあるも、遂に戰艦の裝甲を碎く能はず、日は將に暮れんとするも「スウォーロフ」は尚ほ未だ沈まない。

是に於て片岡司令長官は、之が沈沒を附近に在りし第十一艇隊に命じた。同艇隊司令藤本少佐は、命を受くるや、直に第七十三號、第七十二號、第七十四號、第七十五號の四艇を率ゐ、猛然洪波を蹴つて、敵艦に向ひ突進し、距離約二百米突に迫つて、各艇逐次水雷を發射した。やがて轟然たる大爆音と共に、黄煙敵の舷側に立ち昇ると見る間に、さしも强硬なりし「スウォーロフ」も遂に顚覆して、艦底を水面に露し、尋いで全く沈沒するに至つた。時正に午後七時二十分にして、北方に於ける「ボロヂノ」の沈沒と恰も其の時を同じうして居る。「スウォーロフ」の沈沒するや、我が各艦は茲に戰鬪を中止し、我が主力艦隊を追うて北方に急航した。

【第十一艇隊「スウォーロフ」を擊沈す】

午後五時頃我ガ巡洋艦隊敵主力艦隊ノ砲擊ヲ受ク

十　スラブ魂

【勝敗は兵家の常】 勝敗は兵家の常にして、戰に敗れたるもの未だ必ずしも怯懦なりとすることは出來ない。拔山の勇、蓋世の略あるも、時利あらざれば空しく屍を溝壑に曝すは、古來弓矢取る身の珍しとせざる所である。項羽江南に兵を起してより八年、大小七十餘戰、未だ曾て敗れざりしも、垓下の一敗、忽ち首を漢王に授け、那翁一世コルシカの孤島より起つて歐洲を席卷し、年三十五にして佛國帝王の位に登りしも、ウォーターローの一蹶、遂にセント、ヘレナの絶島に悶死した。而も是れ未だ項王の勇と、那帝の略とを傷つくるに足らない。日本海の一戰、露國は其の艦隊を覆滅せられ、主將俘虜となるの大敗を被りしと雖も、未だ以て「スラブ」民族の豪勇を辱むるに至らず、露人の勇は此の大敗に依つて益發揮せられたものである。

【露西亞の大望】 抑も露西亞帝國、建國の歷史は玆に述べずと雖も、彼得大帝が子孫に遺したりと傳へらるゝ、「露國の君主は全世界の君主なり」との一語を知らば、以て歷代露國の君臣が如何なる意氣と大望とを有せるかを概察するに足るであらう。絶世の怪傑、那翁一世さへも、嘗て人に告ぐるに、他日天下を征服するものは、夫れ必ず「コサツク」かと嘆息したとのことである。

【露西亞國民】 而して露國今日の大を爲せる所以は、其の國一に侵略併呑に依るものなるが故、其の國民中には波蘭人あり、芬蘭人あり、土耳其人あり、日耳曼人ありて、風俗言語を異にするは素より、中には往々政府に對して敵意を有するもなきにあらずと雖も、純露西亞種族たる「スラブ」人並に「コサック」人に至りては、皇帝を以て神と信じ、其の命ずる所、水火と雖も何ほ辭せざるの忠臣である。我が國民に日本魂があれば、露西亞人には「スラブ」魂がある。而も此の魂たるや、不撓不屈、剛靭にして粘液質に富めること、恐らく世界に冠たりといふべきであらう。

「オスラービヤ」、「ボロヂノ」及び「アレクサンドル三世」沈沒の狀況は、已に述べた如くである、

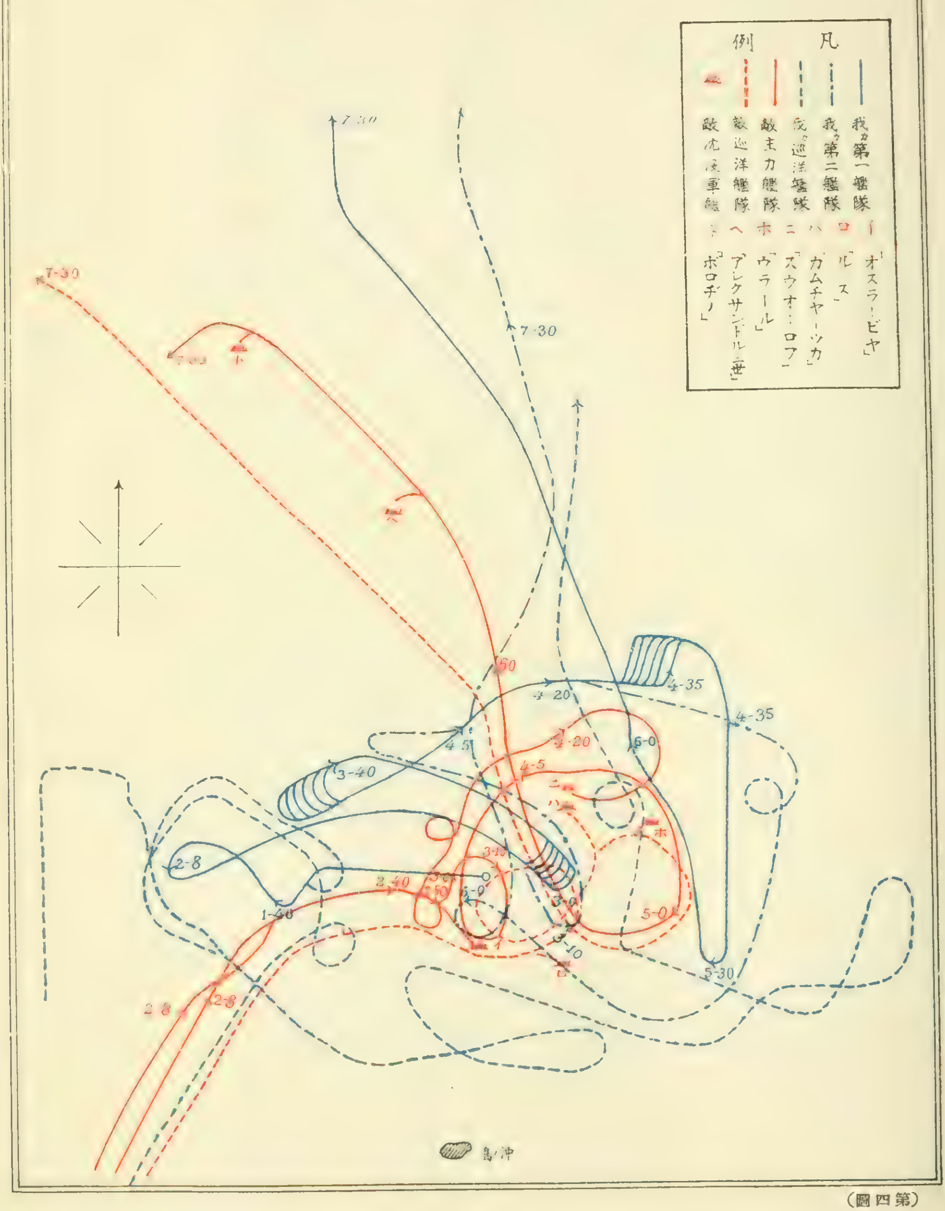
【旗艦スウォーロフ】 玆に露國艦隊中、最も壯烈悲慘なる最期を遂げたるものは、司令長官ロジェストウェンスキー中將の旗艦たりし戰艦「スウォーロフ」である。同艦の最期たるや、人間敵愾心の最高度と最極點とを發揮したるものにして、其の崇高なる愛國心に至つては、敵ながら洵に敬嘆に値するものがあつた。

凡そ艦隊の戰鬪に於ては、横陣に在つては左右兩端艦、縱陣に在つて首尾兩端艦、就中

【縱陣の危險】 先頭艦が最も敵の猛撃を受くるは、現今海軍戰術上の通則である。之を以て軍艦を排列するには、其の最も強堅なるものを以て兩端に配置するのが普通である。故に海戰に於ては、中堅といふよりも、寧ろ中虛と稱する方が適切である。而して又主將の意

【海陸主將の位置】 の欲するが儘に、隊を指導せんが爲め、其の司令部は常に列の先頭に位するが定則である。卽ち陸戰に於ては、大部隊の司令官は、線の後方數哩に陣し、砲聲さへも聞えざる安全の位置に在るも、海戰に於ては、司令長官なるものは、全艦隊中最も危險なる位置に立つものである。是れ海陸戰

五月二十七日戰鬪航跡圖



（第四圖）

術の大に異る點なると共に、艦内の長官は最も其の人を選ばざるべからざる所以である。

敵の旗艦「スウォーロフ」も亦此の通軌を脱する能はず、開戰の當初より我が主力艦隊の猛火に浴し、司令長官重傷を負ひ、艦亦遂

【命中第一彈】

に沈沒するに至つた。而して其の第一命中彈は、戰鬪開始後幾もなく右舷舷側を擊ちたる十二吋砲彈にして、舷側の裝甲鈑を貫き、其の内方防禦部に設けられたる假繃帶所に入つて爆裂した。室内に在りたる器具は飛び、鐵は碎け木は燒け、繃帶準備に從事せし人々は、全身忽ち粉虀して一塊の肉團と變じた。

【十二吋砲彈】

抑も人の恐るゝ十二吋砲彈とは如何なるものであるか。其の直徑十二吋（一尺）、長三尺、重量百餘貫を有する一大鐵丸である。此の大鐵丸が一秒時間に八百米突の高速力を以て飛行することとて、其の響は恰も怪鳥の嘯くが如く、一たび打つかれば、如何に硬き甲鐵も、如何に厚き鐵鈑も、到底之に耐ふる事は出來ない。加之も其の彈腔内には約百斤の火藥が裝填せられて居る。殊に我が炸藥は世界に冠たる下瀨火藥である。其の猛然として一たび爆發するや、彈體は忽ち赤熱したる幾百千の小破片となつて、四方八方に飛散し、船具乘員觸るゝものとして悉く破壞殺傷せざるはなく、炸藥の一部は白金を溶したる如き、幾千度の高熱を有する溶液となつて甲板に灑がれ、石と金とにあらざる限り、如何なるものをも燒き盡すのである。

尋いで我が一巨彈は「スウォーロフ」の後部司令塔に命中して、附近に在りし十餘名の人員を一時に鏖殺し、他の一彈は艦尾士官室に爆裂して大火災を起した。斯くて戰鬪漸く激烈となるに從ひ、我が彈丸の命中爆發するもの引きも切らず、舷側は蜂窩の如く貫かれて海水艦内に浸入し、甲板は笊籬の如く碎けて火災各處に起り、將士は防水防火に忙殺

【伏屍累々】

せられ、死傷は刻々に增加して伏屍累々縱橫に相重なるの慘狀を呈して來た。而も砲員は濛々たる黑煙の裡に立つて、戰友前に殪れ後に傷つくも、泰然として戰鬪を繼續し、毫も其の砲火を弛めない。後續の諸艦は如何にと猛煙の隙間より透し見れば、一番艦アレクサンドル三世、三番艦「ボロヂノ」亦煙焰に掩はれて、同じ運命に苦んで居る。折しも我が一彈は後部砲塔に命中して之を爆破し、一門の十二吋砲は破損して廢砲と爲り、一門の十二吋砲は砲塔の根元より截斷せられ、數千貫の砲身は舷外遠く吹き飛ばされて仕舞つた。

尋いで又午後二時五十分頃、一發の我が十二吋

【[illegible]】

砲彈は「スウォーロフ」の前部司令塔を打つて爆發し、塔内の操舵機は忽ち故障を生じ、艦は自ら右方に旋轉して列外に走つた。爾後「スウォーロフ」は僚艦と別れ、纔に兩舷機を加減して艦を操縱しつゝ、單獨北方に向進中、再び我が主力艦隊の猛擊を被ること約一時間に及んだ。彼我の距離は往々減じて僅に二千米突以内に近づいたこともある。十二隻の我が軍艦より「スウォーロフ」一隻に向つて發つ彈丸は幾何か、一彈は一彈を追うて實に彈丸の行列である。三時三十分頃、一發の巨彈は、前檣の根元に中つて炸裂し、周圍一丈五尺高さ百尺に餘る鐵檣は、轟然舷側を打ち破りて、頭側に海中に倒れた。尋いで大檣も亦其の上半部を

折斷せられ、之と同時に直徑十尺の二個の大煙突は、見る間に打ち碎かれて、形をも留めず、前後の艦橋は、或は碎け或は燒けて、唯僅に鐵骨の一部を殘すのみである。其の他通風筒、明り窓等、甲板上の諸裝置は悉く擊摧せられ、折れたる鐵材、切れたる鐵鎖、毀れたる鐵板、碎けたる木片、焦げたる釣床など、恰も薪を亂せるが如く、雜然として甲【血潮滴る人間の手足】板に堆積し、其の間には血潮滴る人間の手足も交つて居る。

幾度か取り代へられたる防火用蛇管も燒かれ裂かれて、今は代ふべき備品もなし、消防の術全く盡きて唯燒け放題燃え放題である。塗料の燃ゆる紫青の焔、木材の燒くる朱紅の火、釣床其の他布片の燻る黃褐の煙は、黑煙と共に縱橫になびき、艦の前後は火の爲に中斷せられ、上下甲板の梯子は或は破壞せられ、或は搖り落され、艦內各部の交通絕えて、風下側に在る人々の如きは、强風に吹き付けらるゝ猛焰を遁るゝ場處なく、煙に咽び焰に焦され、負傷者の如きは往々逃げ後れて烈火の裡に燒け死ぬるもある。斯かる中にも飛び來る彈丸は益〻烈しく、一彈碎くる毎に火の附きたる木片や、碎けたる鐵片を【火の雨鐵の雨】ば火山高く吹き飛ばして、火の雨、鐵の雨を降らして居る。

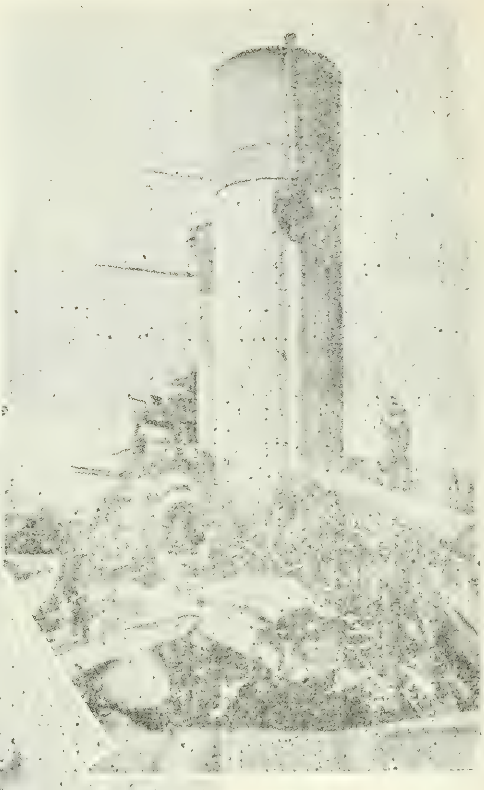
斯かる間に死傷は益〻增加して、司令長官傷つき、艦長亦傷つき、副長斃れ、其の他將校の大部分は或は傷つき、或は斃れ、艦は後任の一大尉によりて指揮せらるゝに至つた。されば今は一々死傷者をば收容救護するの暇なく、胴なき首、手足なき胴は、此處彼處に狼藉し、肉の燒け、骨の焦ぐる異臭は、紛として鼻を衝き、傷者苦悶の叫聲は裂帛の如く耳をさす。慘澹たる光景、眞に此の【地獄】世ながらの活地獄である。而も生き殘れる將卒は、傷を包み血を啜りつゝ、尙ほ殘砲を發つて勇敢に奮戰して居る。

更に中下甲板は如何にと見れば、此處も亦火災は各處に起り、紅焰窓に迸つて黑煙室に漲り、血は白壁を彩つて屍は甲板に亂れ、器物の燃ゆる音、鐵骨の裂くる響は、傷者呻吟の聲と合して物凄きこと限りなく、善美を盡したる長官室も、士官室も、燒けに燒けて、慘澹たる修羅場と變じ、金色燦たる額緣の毀れや、銀光輝く食器の破片や、扨ては黑焦の軍服、半燒けの帽子など彼方此方に亂積し、五六の死屍は其の間に橫たはつて居る。或は頭を碎かれたるもあり、或は腹を抉られたるもあり、中には息まだ絕えずして苦しげに手足を藻搔いて居るのもある。斯かる腥き中にも何人の携へたるにや、甲板に落ち敷く若き美しき婦人の寫眞、血にも塗れず、火にも燒かれず、萬綠叢中正に一點の紅、【萬綠叢中紅一點】寫眞の主は生きてか將た斃れてか。萬里西方の天、美人の夢今果して如何！

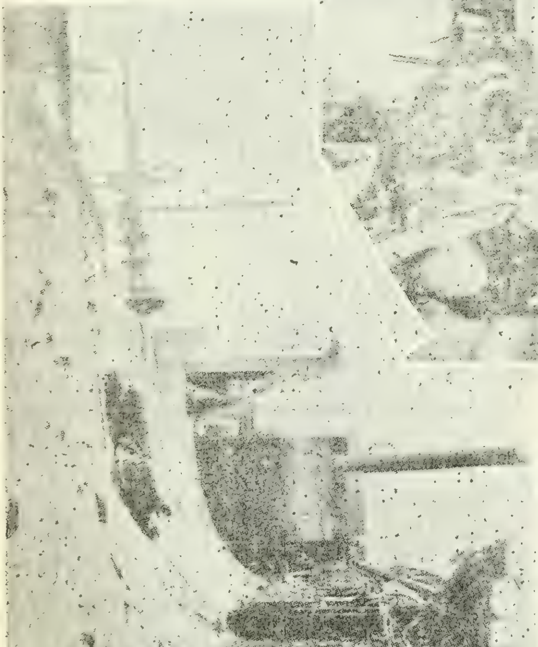
大砲は漸次打ち毀されて、今は殘るもの僅に二三に過ぎず。持場を失ひたる人々は、今や爲すべき業もなく、三々五々燒け殘れる彼方此方の隅に集つて居る。數時間に亙る力戰苦鬪に、服は裂け、帽は飛んで、手足は血潮に塗れ、食ひしばれる口には憤恨の情を含み、血走れる眼には希望の光絕え、唯茫然として一語を發するものもなく、互に相顧みて長歎息するばかりである。

中に最も悲慘なるは治療所の光景である。【悲慘なる治療所】煙に霞む薄暗き電燈の下に、枕を並ぶる幾多の負傷者、手なきもの、足なきもの、どうせ助かり難き重傷者のみである。

烟突破損の慘状



(上甲板)



(舷側)

紅の血は既に祖國の爲に流し盡して、色は青褪め面悴れ、傷は繃帶に包めども、包み切れぬは苦痛の叫び、冷き汗は玉と流るゝも、拭ひやる人もなく、喉は渇きて燒くが如きも、水を與ふる人もない。ア、苦しい〳〵、永く此の苦みを受けんよりは、寧ろ一思ひに殺して吳れと呼ぶものもある。白き繃帶ににじむ血潮は恰も人の命を刻み行く針の如く、次第次第に擴がりて、苦悶の呻吟漸く止みたる時は、息既に絕えたのである。――地獄――修羅場――。

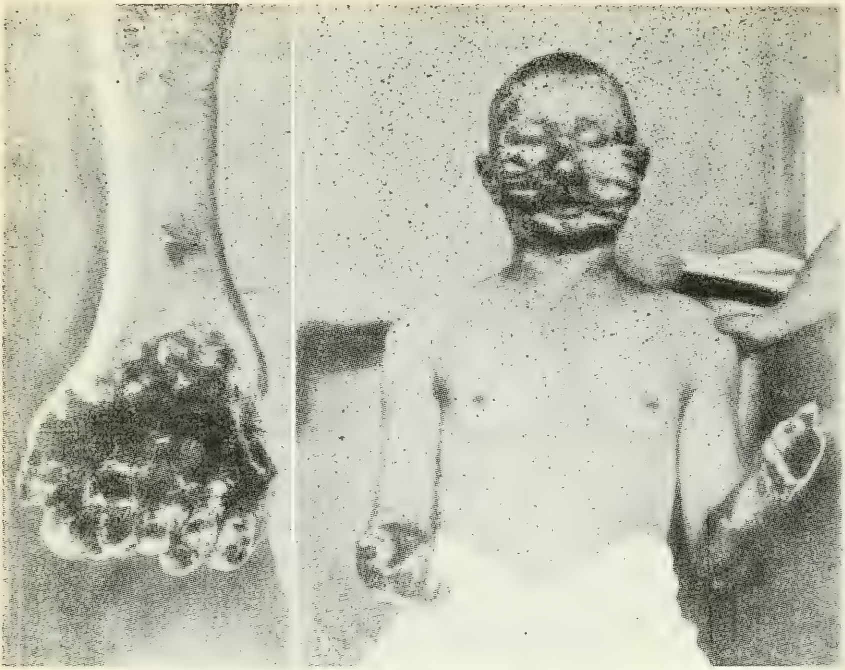
【戰術實施の第一要義】抑も戰術實施の第一要義とする所は、敵の戰鬪力を殲滅するにある。而して此の戰鬪力の主なるものは、陸軍に於ては人馬にして、海軍に於ては軍艦である。故に陸戰に於ては人馬の殺傷を以て、又海戰に於ては艦船の破壞を以て各々戰鬪の第一目的として居る。從つて其の用ふる武器に至りても、海陸大に趣を異にし、陸軍に於ては人馬の殺傷に適する、輕便にして數多き小銃を第一とし、海軍に於ては鐵艦を破壞するに足るべき、威力絕倫なる大砲を以て第一として居る。然り而して陸戰に於ては國際公法に據り、或は包被なき鉛彈を禁じ、或はダムダム彈を禁ずる等、成るべく戰士の受くる苦痛を輕減するに力むるのみならず、一面には小銃其の物の發達に伴ひ、彈徑は益小さく、速率を愈增したるが爲め、其の人體に及ぼす苦痛と危害とは頗る輕少となつた。卽ち現今の小銃にては、頭部と心臟と腹部とをやられざる限り、大抵の負傷では死ぬることはないとのことである。之に反し海軍に於ては、大砲――而も大口徑砲を以て第一武器と爲すが故に、其の人間に及す危害の程度は、頗る猛烈且つ殘酷である。

【小銃彈と砲彈】何しろ厚さ十吋にあまる甲鐵鈑をも、打ち碎くべき猛威を有する砲彈を以て、人間を打つのであるから耐つたものでない。胴か眞二つになつたり、首や手足が千切れて飛ぶ位は敢て珍しくない。甚しきに至ると人間一人全く粉と碎けて、一塊の肉、一片の骨さへ留めぬこともある。加之砲彈の破片たるや、小銃彈の如く圓き滑かなものでない。其の面は粗鬆にして角多きこと恰も土塊の如きものである。斯かる彈片が人間の體內へ穿入することとて、傷口は柘榴の割れたるが如く、又無花果の裂けたるが如く、見るさへ酸鼻の極にして、其の苦痛も亦慘烈である。之を譬ふれば、小銃彈の負傷は剃刀で切つた如く、砲彈の傷は鋸で引き割つた樣なものである。

【下瀨火藥】殊に我が下瀨彈の爆發猛烈にして、伊集院信管の感度鋭敏なる、其の中るもの布幕と水面とを問はず、一たび觸るれば必ず炸裂し、幾百幾千の小片となつて飛ぶのである。一名の俘虜の如きは、身に大小百餘の彈片を受けて居たとのことである。指の先に棘一本立つてさへ、痛みに耐へぬ人間の體に、百餘の鐵片を打ち込まれたる苦みは、どんなであつたらうか。

【海戰死傷者の割合】日露戰爭に於ける我が軍の統計に據れば、陸軍に於ては死傷者百人中、死者二十三人、傷者七十七人の割合なるも、海軍に於ては死者五十四人、傷者四十六人の割合にして、負傷者よりも戰死者の方が多いのである。之を思ふと海軍の戰鬪は、之を陸戰に比すれば、遙に悲慘にして殘酷なるものである。

且つ又軍艦に於ては、狭き場所に比較的多数



海戰負傷者の慘状

の人員が集合せる爲め、時としては一發の彈丸に因り、數十名の死傷者を生ずることがある。此日「スウォーロフ」も亦戰鬪酣なる時に當りては、一時に治療室に運び來る負傷者は數十人に達し、僅に二三名の軍醫官では到底治療の手が廻らない。瀕死の重傷の如きは已が治療順番の來るさへ待ち得ず一杯の葡萄酒に露國の萬歳を唱へつゝ莞爾として永き眠に就くもある。眼を嗔らし、足を踏張り、無念殘念と叫びつゝ憤死するもある。いかで仇を討ちてよと譫言の裡に息絶ゆるもある。

【最も慘烈なる屍體收容所】　治療所にも增して尙ほ一層悲慘なるは、屍體收容所の光景である。蒸暑き下甲板の一室に、ズラリと並べられたる幾十の屍體、面を掩ふ白布と、體を包む毛布とを取り除き見れば、或は手足全く截斷せられて、唯胴と首のみなるあり、或は頭碎けて兩眼の飛び出したるものあり、或は下顎を奪はれて舌のダラリと頸に卷き付けるもあり、或は腹部を穿たれて臟腑の流露せるものあり、其の他頭蓋の半ば缺けたるもの、手足折れて骨の露出せるもの、眼を嗔らすもの、血を吐けるものなど、千態萬樣傷こそ變れ、何れ悲慘の極ならぬはない。わけて最も無殘なるは、火藥の熱瓦斯に燒かれたるものである。顏は黑く赤く燒け爛れて、處々裂け潰れ、目もなく、鼻もなく、口もなく、眉鬚頭髮悉く燒け落ちて、どちらが前やら後やら、之が人かと疑はしむるばかりである。何人の子？　何人の夫？

嗟吁文明を以て誇とせる今日の世に、斯かる慘劇が演ぜられようとは、誰も思ひ浮べぬ所であらう。

「スウォーロフ」は斯く慘澹たる狀態を以て午後五時頃全く敵味方より見棄てられ、激浪の裡に唯獨り漂蕩するに至つた。煙突破壞の爲め、汽罐の焚火十分ならず、汽力は漸次低下して今は汽機の運轉も自由を失し、發電機さへ何時しか回轉を止めて下甲板以下は無明の暗となり、機關部配置の人々は其の生死さへ判らない。

是より先き、司令長官ロジエストウエンスキーは、兩度彈片を受けて、頭足二箇所に重傷を負ひ、人事不省に陷つた。

【司令長官身を措くに處なし】

艦内は到る處火災起りて、司令長官六尺の軀を横ふべき處すらない。是に於て幕僚は長官をば他の健全なる軍艦に移さんが爲め、味方艦隊を招かんと欲するも、檣は倒れ信號索は切斷せられて、信號を揭ぐることすら出來ず、將卒共に手を拱いて唯天の命を待つばかりである。

【地獄に佛】

適驅逐艦「ブイヌイ」は「スウォーロフ」の急を見て近づき來りたるを以て、地獄に佛と直に之を招き寄せ、長官を之に移さんとするも端舟は既に悉く破碎せられて、一の使用に適するものなく、されど亦此日の如き荒海に於て、動搖烈しき驅逐艦をば、「スウォーロフ」の舷側に横着することは最も危險なる仕事である。若し誤つて舷々一たび相撃たば、驅逐艦は忽ち破碎せられて沈沒するを免れない。此の時「ブイヌイ」には七十餘名の艦員の外、海中より拾ひ上げたる「オスラービヤ」の乘員二百餘名を收容して居る。司令長官一人を助くるか、二百七十の生靈を空しく海底に沈むるか、こゝ千番に一番の大冒險である。

【千番に一番の大冒險】

勇敢なる「ブイヌイ」艦長「コメロイツェフ」中佐は艦隊碎けて沈まば沈め、我には腕に覺ありと、決然「スウォーロフ」の舷側に向つて艦を進めた。澎湃たる怒濤は戰艦の舷側に激して益洶湧し、寄せては返す仇浪に、驅逐艦の船體は一昂一低「スウォーロフ」の舷側と交相上下し、相接觸し、危きこと累卵の如く、波來る每に人々手に汗を握つた。

「ロ」提督は頭部を白き繃帶に包まれて、顏色衰へ、體を垂れ、多數の將士に擁せられて「スウォーロフ」の甲板に立つて居る。折しも我が第一戰隊は南方より攻め上り、再び「スウォーロフ」に向つて砲擊を始め、一彈は「ブイヌイ」に命中して其の一汽罐を破壞した。

【ロ提督驅逐艦に移る】

是に於て今や寸時も猶豫すべきにあらずと、「ブイヌイ」の「スウォーロフ」に接近したる一刹那、「ロ」提督の身體は投ぐるが如く驅逐艦に移された。同時に參謀長以下幕僚並に、「スウォーロフ」の乘員十餘名は飛鳥の如く身を躍らして「ブイヌイ」の甲板に飛び移つた。「スウォーロフ」の生存者は一同甲板に集り、長官の無事移乘せるを見るや、一齊に提督の萬歲を唱へ、且つ「ブイヌイ」移乘の勸告を退け、

我等は陛下の大命に依りて本艦乘組となれるもの、艦の最期をも見止めずして猥に遁るべきにあらず、「スウォーロフ」若し沈みしと聞かば、願くは我等の運命を家鄕に告げよ、謹んで露國の萬歲と諸君の祝福とを祈る、

と。やがて我が艦隊の射擊は漸く烈しく、「ブイヌイ」は遂に「スウォーロフ」を見棄てて味方艦隊に向ひ急駛した。時正に午後五時三

十分である。走せ行く「ブイヌイ」、見送る「スウォーロフ」、再會期し難き戰場の訣別、互に交す「ウラー」の聲も、波に濕りて、悲痛の感に堪へぬものがある。

此の時「ブイヌイ」より「スウォーロフ」を眺むれば、唯是れ火と煙とに包まれたる一個の怪物にして、最早や沈沒までに間もなき狀

【榮枯盛衰】 態である。而も是が僅に數時間前迄は露國艦隊一の旗艦として、莊嚴を極め、強堅を誇りし「スウォーロフ」の成れの果かと思へば、感慨胸に逼りて禁ずる能はず、殊に艦内に殘れる戰友の行末を想うては、「ブイヌイ」艦上將士の目には自ら露を宿した。

ロ提督は頭部に受けたる重傷に惱まされ、狹き驅逐艦の士官室内に苦しげに横つて居る。今後の作戰に關して參謀長より命を乞ふや、唯僅にネボガトフ——浦鹽斯德——北二十三度東——等の數語を發したるのみにして、遂に昏睡の狀態に陷つた。是に於て參謀長等は其の到底再び起つて艦隊を指揮するに堪へざるを認め、遇來會したる他の一驅逐艦をして、艦隊を率ゐ浦鹽斯德に到るべき命を、ネボガトフ司令官に傳へしめた。

「スウォーロフ」の乘員は、身の飛彈の下に在るをも打ち忘れ、少時茫然として煙に消え行く「ブイヌイ」の跡を見送つた。長官既に避難せられたれば、最早や心に懸ることもなし、生きるも死ぬるも、我等ばかり、いでや最後の一戰に、「スラブ」民族の豪勇を日本の海に遺さんと、我に還ればあた情なや、艦は益燒けあふりて、甲板の大部は早や灰と化し、殘る大砲は僅に十二斤砲一門のみであ

【血涙一滴】 る。馬は斃れて刀折る、將士の拳に血涙一滴——。

【工作船「カムチャーツカ」】 不圖、側を眺むれば、何時何處より來りけん、工作船「カムチャーツカ」の進退自由を失して、同じ運命に彷徨せるを發見した。見れば同船は船體著しく傾き、乘員の一部は今や端舟を卸し、船を見棄てて逃れんとして居る。「スウォーロフ」の乘員は之を見て、如何に職工なりとは云へ、扨ても腑甲斐なき人々かな、激浪逆卷く此の荒海に、木の葉に等しき端舟を操りて、何處まで逃れんとはする? 何うせ水漬く我等が屍、潔く「セントアンドレー」の御旗の下に、艦と共に沈まざるやと、思ふ間もなく一隻の端舟は、あはれ山なす怒濤に呑まれて、救助を求むる溺者の叫喚、高く低く。

【破艦に死を待つ敗軍の將士】 夕陽已に傾きて、薄暮の海、波黑し。歡樂に滿ちたる玉樓も暮と秋とは倚ほ思深しとかや、況して破艦に死を待つ敗軍の將士、暮色一しほ身に染みて、故郷の事妻子の事など、千思萬感胸中に去來し、心緒亂れて血は沸き返るばかりである。彼方の一

【哀れなる一水兵】 隅に唯獨り物思はしげに佇める一人の水兵、四邊を憚りつゝ、潛に「ポケット」より取り出したる一枚の寫眞、薄暗き窓の明りに透し見て、につこりほゝ笑む其の目元より忽ち落つる一雫、我に老いたる父母あり、未だ顏知らぬ幼き兒あり、病に臥せる若き妻あり、嗟呼我れ亡き後を如何にせん、いゝ、よしや不忠の民となるとも、我は死すべき身にあらず、刀は折れて矢は盡きたり、御國に竭す道は既に果けり、今我れ一人逃るとも、沈むべき「スウォーロフ」の助かるべきものにあらず、堅き心の一徹は、石に立つ矢のためしもあり、激浪怒濤、何かあらん、彼方に漕ぎ、「カムチャーツカ」の端舟追はゞ、などか及ばざらん、幸あたりに人はなしと、傷める片

足艦側に懸けては又思ふ、縱令生命は助かるとも、國に背き、友に背き、俘虜となつて生恥を曝さんこと、よも父母の望みにはあるまじ、卑怯者の妻となり、子となりて、世の嘲を受けんよりも、勇士の孤兒となり、寡婦となるが却つて彼等の幸福かも知れぬ、されど又我等が村の乞食老婆、年七十を越えて子もなく、家もなく、食を人の門前に乞ふ、聞けば彼の女の二人の兒は、過ぎしセバストポールの戰に戰死を遂げし勇士とかや、嗚呼我は死すべき身にあらず、而も死なねばならぬ今の境、死せんか逃れんか、流石の勇士も思は亂れて麻の如く、棄つべきものは弓矢の道とは、豫て聞けるところなるも、情なきも

【心二つに身は一つ】

のは負け軍とは今ぞ知る、心二つに身は一つ……敵彈に碎けざりしこそ、なまなかに恨みなれ。

折しも我が第四戰隊以下の巡洋艦隊は、南方より攻め上り、「スウォーロフ」「カムチャーツカ」の兩艦を包圍して砲擊を開始した。十四隻の軍艦より發つ速射砲彈は、霰雨の如く兩艦の甲板に降り注ぎ、「カムチャーツカ」は幾何もなく横に倒れて沈沒した。蛟龍雲を

【蛟龍雲を失つて蝘蜓の侮を受く】

失へば蝘蜓の侮を受け、鱷鰐水を離るれば螻蟻にも倘ほ苦しめらる。一萬三千噸の最新式戰艦も、砲熕全く壞れては、舊式の巡洋艦橋立、和泉輩の鞭擊に任さねばならぬ。「スウォーロフ」乘員は心ばかりは猛けれども、殘るは僅に十二斤砲一門のみ。若し是が陸上であるならば、敵はぬ迄も突貫し、敵の一人なりとも殪さんものを、夫さへ叶はぬ籠の鳥、唯徒に手を空しうして死を待つ無念さ……握る拳も碎くるばかり。

此の時我が四隻の水雷艇は、山なす怒濤を蹴りつ潛りつ、疾風の如く「スウォーロフ」に向つて突進した。「スウォーロフ」の將士は僅

【最後の抗戰】

に殘る一門の輕砲を以て、倘ほも最後の抗戰を試みた。距離は接近して八百——五百——三百米突——各艇の甲板にハツと閃きたる發射の火光、波を泡立てつ「スウォーロフ」に向つて進む數個の魚雷。

今は早や如何ともする術なく、君國の爲め盡すべき總てを盡し、心に恥づることもなし、いざや最後の訣を告げんと、將卒一處に集れば、殘るはいとゞ僅である。やがて轟然として艦底を擊ち碎く爆音一發又一發、「スウォーロフ」の艦體は忽ち左舷に傾斜し始め、最後の「ウラー」の聲と共に、艦は一しきり猛烈なる煙焔を噴出しつゝ、飜然として轉覆した。波上に浮びたる巨鯨の如き艦底も次第に

【殘煙漠々】

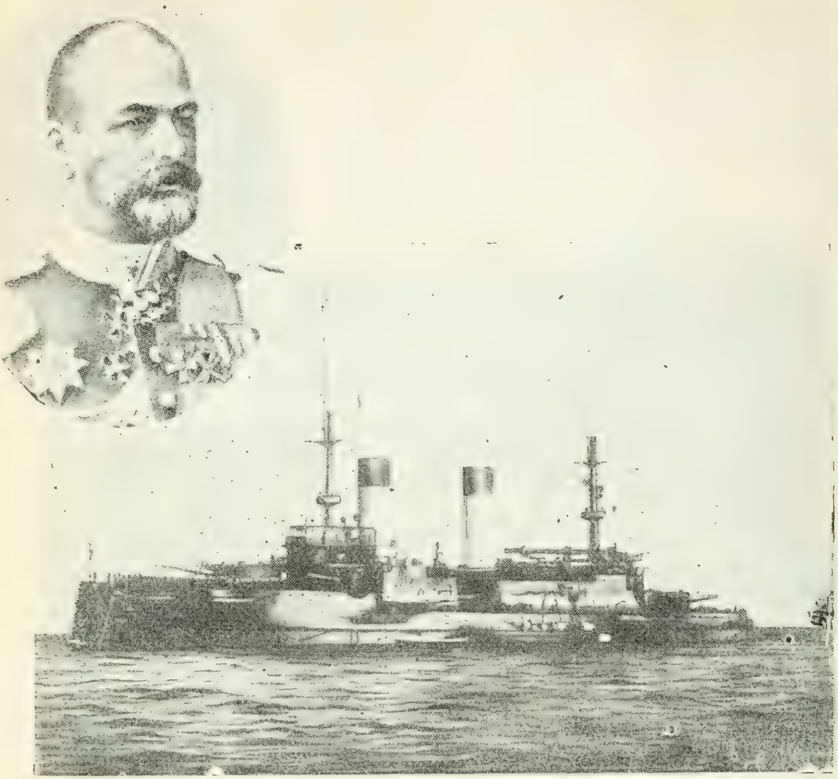
沈み、後には殘煙漠として勇士の跡を弔ふが如く、砲聲全く收りて濤獨り騷いで居る。斯くて九百に餘る乘員は、生きたるも、死したるも、傷つきたるも、悉く日本海海底の鬼と化した。

露國戰艦「スウォーロフ」の最期は、斯くの如く勇壯にして且つ悲慘なるものであつた。吾人は每年五月二十七日を迎ふる每に、又沖の島附近を航する每に、先づ念頭に浮ぶものは「スウォーロフ」苦戰の光景である。其の檣もなく、煙突もなく、全艦煙と焔に包まれたる中より、倘ほ殘砲を發つて奮戰せる壯烈の狀は、永久に之を忘るゝことは出來ない。

十一　日本魂（其の一）

【日本魂とは何ぞ】

日本魂とは何ぞ、朝日に包ふ山櫻。



露國第二艦隊司令長官海軍中將ロジェストウエンスキーと其旗艦スウオーロフ

【眞の日本魂】

武士道とは何ぞ、飯は食はねど高楊子。是れ嘗て我が國民に依つて誤認せられたる見解であつた。而して國民中には今尚ほ斯の如きを以て、大和民族の眞精神と心得、强ひて斯の如からんことを力めて居るものがある。宵越の金を持たぬを以て意氣となし、腸のなき五月鯉を以て理想とする如きは、是等の誤想より起つたものであらう。眞の日本魂なるものは、斯の如く浮薄なるものではない。眞の武士道なるものは、斯の如く瘦我慢なるものでない。眞の日本魂なるものは、孟子の所謂浩然の氣と等しく、曰く、言ひ難きものにして、古來幾世紀の間、吾人大和民族の血管を貫流せる一種崇高の氣である。科學や哲學で研究の出來るものでもなければ、筆や詞で表されるものでもない。而して此の日本魂の命ずる道、是れ即ち武士道である。

射込まれし眉間の矢をも拔かずして、當の敵を射殺したる鎌倉權五郎の如き、橋を倒して虜船に斬り込み、其の將を擒にしたる河野通有の如き、其の武勇の點に於ては素より日本魂の權化である。併しながら日本魂

なるものは、必ずしも斯の如き血腥きことのみに顯れるのではない。和氣清麿の如き、楠氏一族の如き、赤穗義士の如き、又近くは佐久間大尉の如きも、或點に於て、皆是れ日本魂の煥發したるものである。尙ほ一層廣義に解釋すれば、醫師が危險を犯して傳染病者の治療に從事するのも、學者が利慾の外に超然として學術の研究に從事するのも、亦此の魂の發顯に外ならぬのである。

【軍艦内の日本魂】今之を一隻の軍艦に就いて云へば、日本魂なるものは、敵彈雨飛の下に大砲を發ち、激浪怒濤を潛つて水雷を放つものばかりの、獨占すべきものでない。溫度百數十度の機關室内に在つて炭と油に塗れつゝ、從容機關の運轉に任ずる機關部員も、砲聲殷々、硝煙漠々たる裡に立つて、腥き血潮を浴びつゝ、悠然刀を執つて死傷者の手當に從ふ軍醫部員も、其の身を忘れ、家を忘れ、一意君國の爲に盡す心に至つては、是れ皆日本魂といふべきである。

抑も海軍の戰爭たるや、人の戰鬪にあらずして軍艦の戰鬪である。其の進退、掛引悉く船に依るものなれば、勇者も獨り進む能はず、怯者も獨り退くを得ず、即ち爲朝の勇あるも之を施すに處なく、維盛の怯も亦用【近代の海戰】ふるに處がある。殊に近代の海戰は數千米突の遠距離を隔てて行はるゝを常と爲るが爲め、彼の元寇時代や、或はネルソン時代に於けるが如く、敵と艦々相接着し、白刃長刀を振つて敵艦に突入するが如きは、到底爲し得べきことでない。單騎敵陣を屠り、輕舸敵艦を奪ふが如き、華やかなる離れ業は、現代の海戰に於ては見ることは出來ないのである。

盤根錯節に會はずんば、以て利器を分つこと能はず、暴風怒濤に乘らずんば、以て良船頭を知ることの出來ぬと等しく、難戰苦鬪に莅んで初めて豪勇の士を見ることが出來るのである。最後の血の一滴迄も、最後の彈丸の一發迄も奮鬪したる敵艦スウォーロフの勇戰は、實に日本海海戰の花にして、其の壯烈鬼神を泣かしむるに足るものがあつた。之に反し此の日に於ける我が艦隊の戰況は、最【順風に帆して追潮に乘る】初の數分時を除くの外は恰も順風に帆して追潮に乘るが如く、理想の標的を有する戰鬪射擊の演習といふも敢て甚しき誣言でなかつたのである。夫れ乳犬の猛虎を搏つや、口は裂け、耳は千切れ、其の死を賭して鬪ふの狀、勇壯誠に感ずべきものあるも、虎の之に遇する、僅に隻脚の輕擧に過ぎない。而も之を以て犬は勇にして、虎は勇ならずとすることは出來ない。敵艦隊の壯烈、我が艦隊の平凡、或は之に類するものであらう？

日本海海戰に於ける我が艦隊の將卒は、孰れも一死報國の決心を以て各其の職責を盡したるものにして、其の勳に上下なく、其の働に甲乙なく、等しく是れ日本魂の精華である。今茲に述ぶる所は、帝國海軍軍人が、死生の間に立つて、如何に沈着勇敢に戰ひしかを、代表的に國民に紹介すると共に、忠烈國に殉したる人々の英名を、不朽に傳へんと欲するに過ぎぬのである。

二十七日の晝戰に於て、我が艦隊中、最も多大の損害を被りたるものは、聯合艦隊司令【三笠】長官東鄕大將の旗艦三笠である。同艦の初めて敵彈を受けたるは、戰鬪開始後五分時を經たる午後二時十三分にして、約六吋

大の敵彈は、前部煙突を貫通し、炸裂せずして舷外に飛び去つた。尋いで同十四分一個の十二吋砲彈は、大氣を震鳴せしめつゝ三番六吋砲郭の大蓋を撃つて之を貫き、轟然砲郭内に炸裂した。大小幾多の彈片は、側壁を貫き甲板を破り、同砲員は一名を除く外全部重輕傷を負ひ、殆ど全滅するに至つた。幸に砲に故障なかりしが爲め直に非戰側の砲員を以て缺員を補ひ、戰鬪を繼續せんとする一刹那、同十五分他の十二吋砲彈一個は、再び同砲郭に中つて炸裂した。前彈の負傷に屈せず、淋漓たる流血を啜りつつ奮戰を續けたる一等水兵星川高吉は、此の時更に一腕を切斷せられ、一等水兵中井初之助は頭蓋を碎かれて、共に壯烈なる戰死を遂げ、分隊長村越大尉(八郎)以下下士卒十四名は重輕傷を被り、曩に補充したる砲員は再び全滅するに至つた。是に於て更に砲員を補充編成し、輕傷者は傷を包んで再び戰鬪に加はり、滑る血糊を踏みしめつゝ益奮戰を續けた。爾後敵彈の命中するもの次第に多く、碧血甲板を飾り、肉塊側壁に附着し、木鐵の碎片は參差狼藉して、漸く激戰の狀を呈して來た。

尋いで午後二時二十分前橋附近に命中炸裂したる一巨彈は、附近の諸倉庫を破壞して大損害を釀し、彈片の一部は飛んで司令塔及び艦橋を襲ひ、副長松村中佐(龍雄)、水雷長菅野少佐(七勇)、飯田、清河の兩參謀及び境兵曹長(吉次)に重輕傷を負はしめ、其の他下士卒十餘名を傷つけた。此時一個の彈片は最上

【東郷大將の危機】

艦橋に立てる東郷大將の身邊を掠めて傍の釣床に中り、其の間隙實に髮を容れなかつたとのことである。之と殆ど同時に一個の六吋砲彈は、五番六吋砲郭内に突入して炸裂し、同砲員二等水兵岡本喜代八の後頭を碎いて卽死せしめ、下士卒十名を傷つけ、爲に同砲員も亦全滅するに至つた。時に二等水兵野村幸平は、砲員全部枕を並べて打ち倒れ、砲火の將に絶えんとするを見るや、己も亦胸部に重傷を負ひ、流血全身を染むるにも屈せず、奮然として起き上り、獨り留まつて發砲を繼續し、交代者の來るに及んで初めて治療所に退いた。

午後三時敵の一弾は大檣の上部に中つて之を折斷し、其の頂に掲げられたる大將旗及び戰鬪旗を打ち落した。抑も大將旗は指揮

【戰鬪旗と將旗】

權の所在を表明し、戰鬪旗は戰鬪の繼續を命示する爲めのものにして、色鮮なる旭日旗の片々として大空高く飜るを仰ぎ見るときは、士氣自ら昂奮するものである。其の之れ無きは全軍の士氣に影響すること尠からざるのみならず、敵に對しても亦大に面目を失する次第である。遇前檣樓見張の配置に在りし二等信號兵曹柏森源太郎は斯くと見るや、豫ねより斯かる事もあらんかと私に準備したる戰鬪旗をば、直に前檣頭に掲げて咄嗟の急に應じ、後續諸艦をして意を強からしめた。

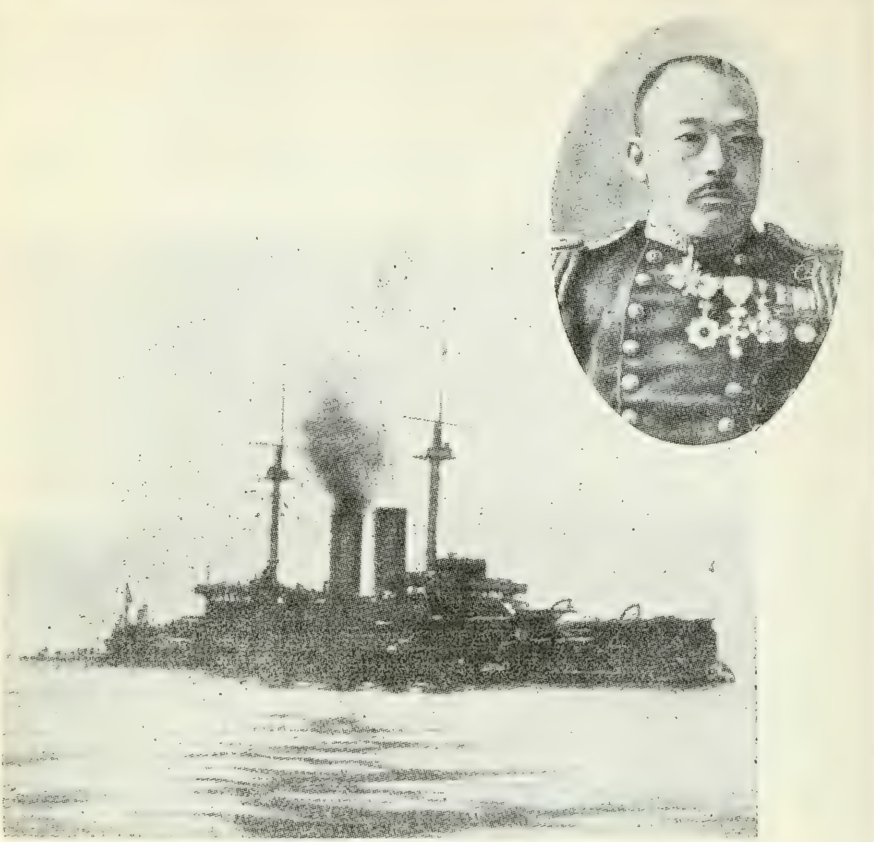
爾後日沒迄に三笠は更に多數の敵彈を受け、一等水兵太田正太郎は胸部を撃たれ、三等水兵松澤利吉は左腕を折られ、同穴山謙治は頭蓋骨を碎かれて、何れも壯烈なる戰死を遂げ、三等兵曹吉田菊次郎及び二等水兵福岡直藏は、共に兩脚を斷たれて重傷後遂に死亡し、安野少尉(康)以下下士卒の重輕傷を被りたるもの數十名に達した。而して是等の負傷者中、一等兵曹繁山熊太は六吋砲の射手として奮鬪中、初め頭部に負傷せしも屈せず、

尙ほ留まつて破損せる砲具を交換し、發砲を續けしに、尋いで第二の敵彈の爲め再び重傷を負ひ、立つ能はざるに至つて、漸く砲側を離れ、三等兵曹岡田與太郎は重傷を被りて、繃帶所に休養中、己が砲員全部死傷したるを聞き、奮然蹶起傷を忍んで配置に復し、再び戰鬪に從事したるが如き、其の誠忠感ずるに餘あるもの鮮くない。

此の日三笠は敵彈を受くること正に三十、十二吋砲彈のみにても其數約十個の多きに達し、彈丸並に彈片の爲め舷側に穿たれたる大小の穿孔は、實に百餘個處を算へ、戰死八名、重傷二十一名、輕傷八十名を生ずるに至つた。曩に我が艦隊の戰鬪を以て平凡と言ひし所以のものは、敵艦隊に比較しての言葉である。三十八隻の大艦隊を全滅せしむる爲には、此の位の犧牲は當然である。寧ろ旗艦の損害としては甚だ輕きに過ぐるものと云はねばならぬ。

【敷島】三笠に續いて進みたるは敷島である。同艦は此の日敵彈約十個を受け、將校以下三十二名の死傷者を生じた。就中午後三時十八分頃六番六吋砲郭の直下に命中して裝甲鈑を貫通し、中甲板に爆裂したる十二吋砲彈は最も慘害を逞うし、三等兵曹島岡甲、同有田助市、一等水兵平野宗一、同東莊五郎、二等水兵瀨尾義忠の五名を殪し、砲臺指揮官分隊長油谷大尉(三堅)及び卒三名を傷つけて同砲員を全滅せしめ、彈片は尙ほ四散して附近に在りたる三等廚宰坂手種七、一等水兵西野常吉、同中村長四郎、同町田金一、二等信號兵木野定次郎の五名を卽死せしめ、其の他黑田大主計(太二郎)及び下士卒八名を傷つけた。同彈の爆裂たるや其の勢頗る猛烈を極め、災害は上中下の三甲板に及び、一水兵の如きは全身粉韲して、僅に頸部の一部を殘し、衣服の記號に依りて漸く其の誰たるを知ることを得、又一水兵は顏面は壓し潰されて扁平となり、軀幹四肢悉く挫斷せられて古の人彘とかも斯くやと思はしむる程の慘死を遂げ、其の他の死傷者も亦兩脚を奪はれたるもの、一腕一足を失ひたるもの、軀幹兩斷したるものなど、慘狀目も當てられぬ光景を呈した。中にも木野信號兵は喇叭を握つて傳令に從事中、右手を敵彈に切斷せられて殪れしも、手は喇叭を握つて離さず、斷たれし腕にも尙ほ精神の殘れるかを疑はしめた。尋いで午後六時三十分頃前橋に命中炸裂したる一彈は、分隊長行廣大尉(清太)、三等水兵藤本廣人を殪し、森田中尉(但次)、白濱候補生(清)外下士卒數名を傷つけた。

【富士】三番艦富士は此の日敵彈十一個を被り、内一個の十二吋砲彈は、午後三時頃後部砲塔に命中し、砲眼孔を貫きて塔内に爆裂した、遇々同砲塔に於ては方に彈丸裝塡中なりしが爲め、火は忽ち數百斤の發射裝藥に移りて塔内一面の猛火となり、砲塔員一等水兵宮脇松藏、同玉秋文吉、同兼石新作、同永坂竹次郎、二等水兵芝田五十吉、同宗田宗太郎、同中楠源右衛門、同鋤柄仁右衛門の八名は、烈火に包まれて壯烈悲慘の最期を遂げ、砲塔長寺西兵曹長(谷次郎)以下下士卒八名は或は火焰に燒かれ、或は彈片に傷つき、相重つて碧血の中に倒れた。此の時負傷者運搬の配置に在りし二等主廚下元源次及び艦長從僕山根源三の兩名が、自己の危險を顧みず、濛煙尙ほ立ち昇る砲塔内に躍り入つて多數の負傷者を救護したる敏捷勇敢なる動作は、嘆賞に堪へぬものがあつた。其の他或は舷側



三笠艦長海軍大佐伊地知彦次郎と聯合艦隊旗艦三笠

に砕け或は甲板に裂けたる敵彈の爲め、航海長志摩中佐(猛)、水雷長高橋少佐(吉)、分隊長安部大機關士(宮次)、乗組池田候補生(一光)及び下士卒十名重傷を負うた。

【朝日】四番艦朝日は上甲板以上に大小數個の敵彈を受け、艦體の損害は比較的輕微なりしも人員の損害は輕からず、分隊長心得森下中尉(一基)は身に數箇所の重傷を負うて劈頭第一に治療所に運ばれ、捷報を聞く每に萬歳を連呼しつゝ遂に逝き、二等水兵山本安太郎は頭部に重傷を被りて言語を發する能はず、漸く手眞似を以て紙筆を乞ひ、日本海軍萬歳と大書し、淋漓たる墨痕未だ乾かざるうち莞爾として絶息し、其の他三等兵曹前田正幹、同佐々木同上坂又一郎、一等水兵宮澤義丸、同佐々木惣七、同森助太郎、二等水兵河井元次郎等何れも敵彈に玉碎し、乗組合田中尉(四郎)以下下士卒二十二名の負傷者を生じた。中にも一等信號兵曹柳沼庫次は、司令塔内に在つて按針に從事中、彈片塔内に飛入して右肩に重傷を負ひ、鮮血衣に滴るも尙ほ自若として其の配置を離れず、左手を以て舵輪を握り、激痛を忍んで他の按針手の來り代るを待ち、又二

等水兵倉內庄三郎は敵彈の爲め右腕を挫折せられて自ら治療所に赴き、軍醫に向ひては己の輕傷なる旨を告げ、後より來れる者をして先きに治療を受けしめ、軍醫官亦其の言を信じ、最後に之を診するに及び、右上膊は折れて傷甚だ重きを知り、其の勇に感じつゝ應急治療を施して安臥せしめたるに、傍に臥したる重傷者の切に水を求むるを聞くや、倉內水兵は直に起つて左手を以て之に水を與へ、恰も身に重傷を負へるを知らざるものの如く、介抱慰藉至らざるなく見る者をして其の勇氣と同情の厚きに感ぜしめた。

【春日】朝日に續いて進みたるは裝甲巡洋艦春日である。同艦は、午後三時三十分戰鬪方に酣なるの頃、前檣附近に敵の十二吋砲彈一個を受け、爲めに前艦橋に在りて信號に從事せし二等水兵飯田庄藏及び二等水兵藤井元市の兩名は全身粉碎せられて僅に一抹の紅血と、離斷せる隻脚とを甲板に殘して悲慘壯烈なる戰死を遂げ、其の他一等水兵林謙治、三等水兵高橋初太郎、同貝原丈四郎、同今井嘉十の四名戰死し、右田中尉(巳九郎)、三浦候補生(賴一)以下下士卒十三名重輕傷を負うた。是より先き、戰鬪將に開始せられんとする際、十二番六吋砲の砲門扉怒濤に打たれて繫止鏈切斷し、扉は艦の動搖に連れて砲門を敲き、砲の操縱を妨ぐるに至つた。仍て之を修理せんと欲するも、扉重くして艦內よりは力及ばず、されど舷外は激浪怒號して砲門を洗ひ、容易に近づくことが出來ない。將士共に思案に惱むうち、敵は早や近接して戰鬪開始の機、目睫の間に逼つて來た。二等水兵池田作五郎勇敢にして膂力人に過ぐ、自ら奮つて身に一條の索を纏ひ、荒れ狂ふ激浪を物ともせず、舷外に出でて作業を果し、將に甲板に昇らんとする際不幸にして命と賴む索切れて、身は忽ち狂瀾の中に陷つた、甲板上の將士は此の勇士を救はんと力めしも、浪は荒し、速力は大なり、加之も敵は目前に在り、如何ともすること能はず、池田水兵は隻手を擧げて萬歲を唱へつゝ、見る見る後方に流れ去り、遂に激浪の裡に葬られた。身を挺して難に殉じたる池田水兵の如きは、縱令敵彈に斃れざるまでも、其の勳功は寧ろ之に優れるものと云ふべく、春日の同砲臺は爲に戰鬪の終まで奮戰を繼續することが出來た。

【日進】六番艦日進は、溫厚沈毅なる司令官三須中將之に坐乘し、第一戰隊の後殿を固めて大に奮鬪し、屢敵の集彈に浴して、大小被彈十餘に及び、四門の八吋砲中、三門は破壞せられ、三須司令官以下死傷九十六名を生じ、我が艦隊中、三笠に次ぐの大損害を受けた。即ち其の主なるものを擧ぐれば、午後三時四十分には十二吋砲彈一個前砲塔に命中炸裂し、其の右砲を折斷して之を海中に飛し、彈片四散して一部は艦橋を襲ひ、戰況を觀測しつゝありし參謀松井中佐(健吉)の兩足を折つて卽死せしめ、一部は上中下の各甲板に散つて、一等筆記松井尙敏、割烹稻垣駒太郎の兩名を殪し、下士卒十七名を傷つけた。尋いで四時五分には九吋大の砲彈一發再び前砲塔を打つて爆裂し、破片司令塔に潛入して三須司令官、航海長田中少佐(行尙)を傷つけ、三等水兵田中與次郎の頭蓋を碎いて之を殺し、五時二十分頃には十二吋砲彈一個濛氣の裡より飛び來り、後砲塔左砲に命中して之を碎斷し、七時頃には十二吋砲彈一個三たび前砲塔に中つて更に左砲を截斷し、太田中主計(利一)、

高野候補生（五六）及び下士卒數名を負傷せしめ、同時に六吋砲彈一個は大檣の上部に命中した。此の時三等兵曹中島文彌は水面上百尺の高處に在つて、身を大檣に縛着し、上桁に腰打ち掛けて彈着の觀測に從事中、敵彈に右大腿を奪はれ、鮮血雨の如く甲板に降り注いだ。負傷者運搬者は斯くと見るや、直に之を救助せんと欲するも、傷者は高く檣頭に在り、唯あれよ〳〵と仰ぎ見るのみにして如何ともする能はず、出血は益〻烈しくして甲板は恰も落花の散り敷くが如く、漸くにして之を甲板に下したるも、遂に不歸の客となつた。抑も日進、春日の姉妹艦は明治三十六年の暮、日露の風雲愈〻急なるの際、時の政府が大英斷を以て一千六百萬圓の巨資を投じ、南米亞爾然丁共和國より買ひ入れたるものである。其の排水量倶に七千七百噸の裝甲巡洋艦なるも、攻防武器の堅鈍なること、在來の裝甲巡洋艦に優り、戰艦の間に伍して甚しき遜色なく、日露海戰の戰捷は同艦に負ふ所尠くないのである。若し一步誤まつて之が露國の手に歸したならば、戰爭の大局は如何に變じたかも知れぬ。

十二　日本魂（其の二）

東郷大將の直率せる第一戰隊と共に、我が聯合艦隊の主力となつて奮闘したるものは、出雲及び外五隻の裝甲巡洋艦より成る第二戰隊である。

【裝甲巡洋艦の價値】抑も裝甲巡洋艦なるものは、其の戰鬪能力、普通の巡洋艦には優りて、戰艦には及ばざる一種の合の子軍艦にして、戰時果して幾何程度に迄活用し得るかは、今回の戰役迄は疑問に屬し、各國海軍に於ては頗る之が建造に躊躇したのであつた。然るに我が海軍に於ては日清戰役後、海軍擴張を畫するに方り、戰艦を造るには財力許さず、而も普通の巡洋艦にては國防の用を充すに足らず、遂に多數の裝甲巡洋艦を建造することに決した。當時列國は戰艦と同數の裝甲巡洋艦を造らんとする、我が造艦政策に對し大に奇異の感を爲したるのみならず、眞僞は知らねど某國海將の如きは、我に對して忠告を試みたとさへ聞いて居る。然るに幸にして我が當局の先見誤らず、今回の戰役に於て、我が第二戰隊は第一戰隊を援けて、互に正となり、奇となり、協力策應して大に敵を惱まし、以て裝甲巡洋艦なるものは、戰術の運用宜しきを得ば、或程度に於て戰艦に對抗し得ることを實證したるが爲め、今や列國海軍は大に此の種軍艦の有效を認めたるものの如く、遂に二萬五千噸乃至三萬噸の裝甲巡洋艦さへ顯るゝに至つたのである。

【第二戰隊の排列】さても我が第二戰隊此の日の排列は、出雲を一番艦とし、豪勇豁達の聞え高き上村第二艦隊司令長官は、思慮綿密、判斷明晰なる參謀長藤井大佐以下多士濟々たる幕僚を率ゐて之に坐乘し、常に先頭に立つて隊を嚮導し、二番艦吾妻、三番艦常磐、四番艦八雲、五番艦淺間、順次之に踵き、智勇兼備の名提督島村少將は、六番艦磐手に其の將旗を掲げ、隊の後尾を固めて居る。凜たる風姿、齊たる儀容、其の第一戰隊と驅馳するの壯觀、轉た人意を強からしむるものがあつた

【出雲】旗艦出雲は此の日大小の敵彈約十個を受けて、下士卒十五名の死傷者を生じた。即

ち其の主なるものは、午後二時二十七分頃には約六吋大の敵彈一個上甲板を打つて炸裂し、彈片飛んで五番六吋砲臺を襲ひ、同砲員一等水兵川畑六右衞門及び二等水兵北岡龜太を殪し下士卒六名を傷つけて、殆ど同砲員を全滅せしめ、三時過には十二吋砲彈一個舷側を貫きて中甲板に爆裂し、附近に多大の損害を與へ、下士卒四名を傷つけ、又七時十分には十二吋砲彈一個上中下甲板を貫通し、防禦甲板に至りて止り、三等機關兵副島儀八を即死せしめ、卒二名を傷つけた。

【吾妻】二番艦吾妻は午後二時五十分頃後砲塔に十二吋砲彈一個を受けて、其の左砲砲身を破壞せられ、砲塔長中村上等兵曹(彌次郎)以下數名負傷し、尋いで同五十五分他の十二吋砲彈は七番六吋砲郭の上部に中りて炸裂し、一門の十二斤砲をば全く海中に吹き飛し、三等兵曹坂內講平、一等水兵和田定次郎、同井上善三郎、二等水兵小林惣一、同村田友作、同水島金藏、三等水兵中尾由平の七名をば、或は海中に吹き飛し、或は身體を粉韲し、副長東郷中佐(辨之介)、乘組竹中候補生(德太郎)及び下士卒六名を傷つけ、其の他大小の敵彈十餘個を被り、三等兵曹諏訪現末、一等水兵吉田末作、同三浦伊勢藏の四名戰死し、下士卒十名の負傷者を生じた。

【常磐】三番艦常磐は此の日敵彈九個を被りしも、何れも輕砲彈、若くは舷外炸裂彈の破片のみにして、艦體乘員共に損害大ならず、唯二等水兵中本太三郎の重傷を負うて遂に斃れたると、下士卒十四名の負傷者を生じたばかりである。中本水兵は此の日己が受持砲臺の砲門扉繫止鏈の切斷したる際、怒濤を冒して舷外に出でて能く之が修理を果し、拔群の功績ありしに、遂に戰死したるは誠に惜むべき至りである。

【八雲】四番艦八雲も亦被彈七個を算へ、三等兵曹田鎖丹治は頭部を碎かれて即死し、一等機關兵石崎與一は胸部を貫かれて重傷後遂に起たず、其の他下士卒九名重輕傷を負ひ、又四等水兵金澤三之丞は中甲板六吋砲の砲門扉繫止鏈を修理せんが爲め、舷外に出でて作業中、命綱切斷して遂に激浪の呑む所となつた。此の日我が艦隊中、砲門扉鏈の切斷したるもの尠からず、爲めに春日及び八雲に於て二名の勇士空しく怒濤の裡に葬られたのは遺憾の至りである。

【淺間】五番艦淺間は戰鬪の初期に於て、艦尾に近く十二吋砲彈炸裂し、其の激動の爲め舵機に故障を生じて操縱の自由を失し、修理の爲め遂に列外に脫した。敵の後尾諸艦は淺間の孤立するを見るや、忽ち之に猛火を集中し、淺間の周圍は水柱簇立林の如く、命中彈亦尠からず。中にも艦尾水線附近に中りたる二個の十二吋砲彈は舷側に大破孔を穿つて艦內に炸裂した。之が爲め艦長室竝に附近の諸室は粉韲せられて處々に火災さへ起し、彈孔よりは激浪急湍の如く艦內に奔入して、中甲板は浸水忽ち膝を沒するに至り、艦は一時危殆に瀕するに至つた。此の時防火隊の配置に在りし二等機關兵池內熊一は、艦長室に尙ほ御眞影の存置せられたるを認め、火焰を冒して直に室內に挺進し、御眞影を捧持して之を安處に奉移し、又一等船匠手德永利一郎、一等木工油谷新四郎、一等機關兵山本吉松、二等水兵三木長太郎の四名は、危險を顧みず、數時間の久しき間濁水中に在つて、防水竝に排水の作業に從事し、遂に應急修理を果して漸く沈沒の危險を免るゝことを得

しめた。而して淺間は此の他數彈を被り、三等兵曹中村勘藏、一等水兵尾越柳一、二等水兵藤田豐吉の三名戰死し、酒井船匠長(辰五郎)及び下士卒十二名負傷した。

【磐手】 殿艦磐手は敵彈を被ること大小實に十七個の多きに達し、中一個の八吋砲彈は水線附近に大孔を穿ち、破損區劃の如きは浸水忽ち二尺五寸に及びたるも、乘員の損害は比較的輕微にして、二等筆記星野定吉の重傷後死亡したると、松崎船匠師(安平)以下、下士卒十三名の負傷者を生じたるのみであつた。

第二戰隊の乘員亦忠烈勇敢の士を以て滿され、軍人の龜鑑、日本魂の典型たるべきもの、決して尠からざりしならんも、唯砲火倥偬の際とて、之を傳ふることの甚だ稀なるは誠に遺憾の至りである。

第三戰隊以下の巡洋艦に至りては、之を第一、第二戰隊の諸艦に比すれば戰闘の輕きと共に、其の損害も亦大に輕微であつた。

【第三戰隊】 第一艦隊司令官出羽中將の率ゐる第三戰隊の旗艦笠置は、此の日敵彈二個を受け、其の一彈は前部治療室に命中して室内の諸設備を一掃し、二等機關兵松下島吉の腹背を傷つけて卽死せしめ、他の一彈は、水線下を貫きて浸水を來し、遂に戰線を去るの止むを得ざるに至らしめ、軍醫長横井軍醫少監(太郎)以下、下士卒八名を傷つけ、二番艦千歲亦二彈を被り、一等水兵中森彥四郎、同飯田利吉は共に頭部を擊たれて戰死し、其の他下士卒四名重輕傷を負ひ、四番艦新高は一彈を受けて、一等兵曹吉田秀三郎、腹部を貫かれて之に死し、外に卒二名負傷し、獨り三番艦音羽のみは幸にして一の敵彈をも被らなかつた。

【第四戰隊】 第二艦隊司令官瓜生中將の率ゐる第四戰隊は、巡洋戰隊中最も敵に近く位置したるが爲め、其の被害も亦最も大であつた。一番艦浪速に於ては數彈を受け、乘組小高少尉(謙之助)は下腹を貫かれて壯烈なる戰死を遂げ、外に下士卒數名負傷し、二番艦高千穗に於ては一彈煙突の中央を貫きて卒一名を傷つけたると、一彈艦尾に近く水面を打ち、激動の爲め舵機に故障を生じて一時列外に出でたるとのみにして、一名の戰死者なく、三番艦明石に於ては數彈を被り、二等水兵櫻井年松、同豬熊惣平、四等水兵井口定市の三名戰死し、其の他下士卒七名の負傷者を生じた。殿艦對馬亦數彈を受け、中にも午後五時頃艦長室に命中炸裂したる一個の六吋砲彈は、附近に多大の損害を與へ、一等水兵金谷要太郎、三等水兵嵐惣吉、同山下文平の三名を斃し、下士卒十三名を傷つけ、尋いで約三十秒の後、十二拇砲彈一個は再び同室に命中炸裂して益慘害を逞しうし、前彈の負傷に屈せず、尙ほ戰闘を繼續せし一等水兵横山辰之助を殺し、一等水兵吉澤榮吉に更に重傷を負はしめ、其の他の諸彈の爲め副長山崎中佐(米三郎)以下下士卒數名を傷つけた。

【第五、第六戰隊】 謹厚にして剛毅なる第三艦隊司令長官片岡中將の直率せる第五戰隊、及び司令官東鄕少將の率ゐる第六戰隊に於ては、橋立の二彈を受けて伊藤候補生(源太郎)及び下士卒六名の負傷者を生じたると、和泉の一彈を被りて二等水兵古川德太郎、同坂井定三郎、給仕加福喜洋次の三名戰死し、下士卒數名の負傷者を生じたるとを以て損害の主なるものとし、其の他の諸艦に至りては、水面炸裂彈の破片等の爲め、少數の輕傷者を生じたるのみにして、艦體、人員共に其の損害極め

て輕微であつた。

【第七戰隊其の他】第七戰隊及び特務艦隊の諸艦に至りては、此の日砲戰に參加せざりしが爲め、其の行動並に損害の特に記すべきものなく、又驅逐隊、艇隊に於ても、唯第五驅逐隊の「スウォーロフ」襲撃の際、不知火の數彈を被りて、一等水兵山口勘一郎、一等機關兵沖長之助、同末藤嘉一郎、同川村喜作の戰死したると、下士卒六名の重輕傷を負ひたるのみであつた。

【傭人の勇敢】以上述ぶるところは、單に我が軍士氣の一斑を示すに過ぎずして、軍隊教育を受けざる給仕、剃夫の如き傭人に至るまで、決死報國の念は鐵よりも堅く、或は十五六歳の少年にして、尙ほ能く十餘貫の砲彈をば輕々と運搬し、或は平素弱蟲として笑はれたる剃夫にして、慘烈目を背くるばかりの死傷者の救護運搬に從事する等、其の勇敢なる働は天晴れ日本男兒として恥ぢぬものがあつた。

【負傷者の勇氣】殊に又負傷者に至りては瀕死の重傷者と雖も、苦痛を訴ふるもの殆どなく、或は再び戰鬪配置に復せんことを請ひ、或は負傷の早かりしを嘆じ、敵艦沈沒、我が軍大捷利等の報を聞く每に、陛下の萬歳、帝國の萬歳を唱へ、恰も身に重傷を負へるを忘れたるものの如く、而も軍醫之に向つて疼痛の有無を問へば、殆ど堪へ難き劇痛と苦惱あるも、傍人の迷惑を思ひ、強ひて之を忍びつゝありと答ふるに至つては、一しほ悲壯の感に堪へぬものがある。

若し夫れ健康なる戰鬪員に至りては、是れ理想に近き兵士と稱すべく、戰鬪中、敵と遠ざかり、發砲を中止して休憩を命ずるときの如き、彼等の多くは肉塊斑々鮮血漂ふ甲板上に嬉々として相戲れ、相語り、或は平然として小說を繙くもの、或は「ノート」を出して悠々戰況を記するものなど、身の死生の境に在るを知らざるが如く、殊に甚しきは下甲板其の他の防禦部に避けしめたる輕砲員の如きは、戰鬪方に酣にして、砲聲爆音迅雷の落つるが如き裡に在つて、肱を枕に華胥を夢みるものあるに至つては、

【豪膽か無神經か】豪膽か無神經か、之を目擊したる將校も流石に舌を捲いて呆れると共に、大に心強く感じたとのことである。

【海戰と飲料水】凡そ海戰に於て飲料水の消費高は兵の練否、士氣の消長、戰の難易を計るべき量器である。未だ戰に慣れざる生兵士は敵艦の姿を見るや、戰鬪未だ開かれざるに、精神のみ徒に昂奮して頻に渴を覺え、且つ尿意促進するのが常である。而して其の心理的作用や、生理的作用はいざ知らずと雖も、未だ是を以て必ずしも怯者なりと斷ずることは出來ない。但砲聲を聞いて脣の色を失ひ、齒の根浮いて胴震ひする者に至りては、餘り勇士と稱することは出來ない樣である。日本海海戰に於ける我が各艦の飲料水使用の少量なりし一事は、以て我が軍士氣の旺盛と戰の平易なりしことを證明するに足るのである。

十三　風浪の敵

【驅逐艦水雷艇乘員の希望】敵第二艦隊の來らんとして來らざること月又月、我が軍備既に整ひ、將士腕を摩つて髀肉を歎ず。此の時に當り敵の來る固より日と時とを辭せず、唯願くは波靜なる日に來れとは、六十餘隻の我が驅逐艦、

水雷艇將士の齊しく希望した所である。

石炭は上甲板迄も堆く搭載せられ、總艦艇北海方面轉進の準備を完整し、封緘命令開披の令をば晩か朝かと待ち構へて居る、こゝ對州尾崎灣の奧深く碇泊せる水雷艇十餘隻、

【體は痩せても心は丹し】長日月の哨戒勤務に塗料は剝げて船體いと疲れたれど、艇尾に閃く旭日旗は、紅の色益〻鮮である。

五月二十七日夢猶ほ濃なる朝未明、士官室の扉を敲く當番の水兵、

「中尉！　旗艦よりの信號――敵第二艦隊見ゆ、直に出港用意」

と。中尉も艇長も、應とばかりに「ベッド」より飛び降りさま、異口同音に、

「當番！　天氣はどうだ」

當番は、

「風が大分强い樣です」

と、早や前甲板に驅け行きつゝ「ハイフ」の音も勇ましく、

「總員起し、出艇用意」

士官室の小さき舷窓より眺むれば、海には白波簇立つて艇の動搖只ならず、陸には松籟颯々として激浪岸に怒り、疾風の「ハッチカバー」を煽る聲は、バタ／＼と胸を刺すばかりである。艇長は中尉と顏見合はして、

【嫌な日にやつて來た】「嫌な日に遣つて來た！」

寢衣の儘先づ上甲板に出で見れば、風は飄々として檣に激し、波は瀏々として舷を打ち、碇泊諸艦の檣頭には、紅黃青白、數旒の信號旗が飜つて居る。汽罐は至急點火せられて、煙突より噴き出す棕褐の煤烟は、强風に靡きて登龍の如く、錨鎖を縮むる轆轤の響、令を傳ふる號笛の音、灣内いとゞ活氣を帶び、【勇氣勃々】狹き艇内にも勃々たる元氣の磅礴せるを覺えた。

顏を洗ひ服を更むれば、煙草一服やる暇もなく、早や「序列に從ひ出港せよ」との旗艦の信號――。

どうせ今日は濡れ佛！と雨も降らぬに長靴合羽に身を固め、雙眼鏡を胸にぶら下け、【根據地出發】「コンパス」臺の上に立てば、時正に午前五時四十分。「錨揚げ！」の號令に揚錨機輕きこと飛ぶが如し。

第〇戰隊の後方に從うて大口灣口を出づれば、山の如き怒濤は早や遠慮なく艇を吞んで、面を打つ飛沫は礫よりも烈しく、艇の動搖は宛然箕を翻るに異らず、殆ど起立にすら堪へない。柱を抱き、「コンパス」を擁して、僅に顚倒を防いで居る。若し寸時たりとも手を放たば、身は忽ち舷外怒濤の中に拋り出されるのである。

【敵未だ見えず】既にして午前九時過對州の南方に達せしも、未だ敵影を見ず。乃ち列を解き漂泊して敵の到るを待つた。此の日濛氣深く海面を罩めて、展望僅に數海里に過ぎず、近き對州の山峰も烟霞に隱れて濁浪獨り威を恣にし、數千噸の軍艦さへも赤腹を顯して頻に輾轉して居る。況して百噸内外の小艇に至りては、風に漂ふ秋の木の葉も啻ならず、合羽も外套も何の用かは、潮水は既に上衣を浸して襦袢にまで達した。

【士官室の狼藉】敵の來ぬ間にと、中尉と交代して朝食の爲め、士官室に下れば、這は又何たる狼藉混亂ぞや。棚の書物は轉け落ち、簞笥の引出は拔け出し、「テーブル」の上には味噌汁の洪水、床には麥飯の小山、足を踏むべき處たにない。

【乞食商賣】世に水雷艇乘を稱して乞食商賣といふ。其の因つて來る所以を知らずと雖も、

服装の穢き點に於て、食事の粗末なる點に於て、居住の窮屈なる點に於ては、少くも相類似して居る。或人は其の三日やれば止められぬ點に於て、更に一層好く似て居るといつた。兎に角水雷艇乘の生活は、之を軍艦の乘員に比すれば、頗る慘憺たるものである。

軍艦の兵員には、水兵あり、機關兵あり、信號兵あり、木工あり、看護あり、主厨あり、其の他割烹、剃夫、給仕の傭人に至るまで、夫々專門の分業がある。然るに水雷艇に於ては、唯水兵と機關兵ばかりである。故に水兵にして主厨の仕事もすれば、機關兵にして信號兵の仕事もやらねばならぬ。士官に至りても、唯艇長と乘組の中少尉一人とのみで、軍醫官も主計官も居ない。「艇長！腹が痛んでたまりません」と云つて來れば拕汾爾錠を與へ、寒冒で頭痛がすると云へば撒曹錠を飲ます位のことは承知して居らねばならぬ。

【艇隊勤務の辛苦】 又軍艦では當直士官が五六人も居て、普通四時間毎に交代するのであるが、水雷艇では艇長と、中少尉と唯二人で、夜も晝も、ぶつ通しに、當直するのであるから溜らない。夫も一週間や、十日ならまだしもだが、旅順封鎖の如く半年以上も續いては隨分體に無理がいくらしい。それかあらぬか、當時の水雷艇乘で、今日身體を毀して居るものは尠くない様である。

【水雷艇の食事】 初めて水雷艇に乘つた士官の、最初最も閉口するのは食事である。前述べた如く、水雷艇には主厨も「コック」も居ないので、食物は總て水兵や機關兵の手料理である。而も人員に餘裕なき爲め、士官の食事とて別に作ることは出來ず、艇長はじめ兵員と同じく、麥澤山の御飯や、鹽辛い味噌汁で辛抱せねばならぬのである。殊に下手な賄當番の時などは、糊の様なベト〳〵飯や、朋友飯とか云つてシンのあるやつを戴かされることは敢て珍しくない。そこで折々は士官室で艇長や中尉の手料理が賄はれる。言ふ迄もなく教官は弦齋氏の食道樂である。牛肉の天婦羅をば「ビーフカツレツ」といひ、卵の栢餅焼をば「オムレツ」といふ位は豫て聞き覺えたる所なるも、扨て實地にやつて見ると、「ビフテキ」が焦げて炭となり、**【ライスカレーの餅】**「ライスカレー」固まりて餅となるなどの失敗も演ぜられる。此に至つて乞食商賣亦難いかなである。

濡れたる服をば脱ぎ棄てて、水の如き茶に、麥飯二三杯掻き込むうち、傳令の水兵惶急しく、驅け來り、

「艇長！旗艦からの信號――西南西に敵艦隊見ゆ――」

「吽！何艘程居るか」

「本艇からは未だ見えません」

「中尉に――直ぐ行くから敵が見え出したら知らして下さいと云へ！」

此の天氣の模様では、迚も今日は晝飯は炊けさうにもなし、又食ふ暇もなささうである。

【腹が空いては軍は出來ぬ】 腹が空つては軍の出來ぬは、古人の訓戒。更に三四杯追加して上甲板に出た。

雙眼鏡を執つて眺むれば、逈に南西の空に方り、灰色にかすむ濛氣の裡に、蜒々として連なる黄色の煙突六つ七つ八つ――我が艦隊は航進を起し、敵を右舷艦尾の方に保ちつつ、北東に向進した。

沖に出づるに從ひて、海は益荒くなり、逆

卷く激浪、怒れる狂瀾、艇は搖り上げ搖り下げ、搖り倒されて鞦韆の如く、振子の如く、男波の頂に上りては「スクリュー」空しく空中に廻り、女波の底に降りては甲板半ば水中に沒す。面舵、取舵一たび誤れば艇も人も波の餌食！ 若し夫れ僚艇を眺むれば、右に傾き、左に倒れ、艇首を擡げ、艇尾を枉げ、龍骨露はに赤き船腹を纔す樣、

【祭禮の獅子の狂ふが如し】

恰も祭の獅子の狂ふが如く、傷める蠑螈の悶ゆるに異らず、一波寄せ來る毎に、今度こそはと、思はず眼を背くるばかりである。

敵は次第に近づいて、今は早や肉眼にても、其の煙突を認め得るに至つた。どうせ役に立たぬ合羽や長靴、唯身の運動を妨ぐるばかり。「ズボン」捲り上げての足袋跣足に、火事場頭巾をスッポリ被り、西洋手拭頸に卷き付け（是は潮水が頸より背中へ流れ込むを防

【舶來泥棒の扮裝】

ぐ爲である）、舶來の泥棒も斯くやと思ふばかりの扮裝にて、中尉と交代しコンパス臺に立つた。時正に午前十時三十分！ 當直の申し繼さへ未だ濟まぬに、波はザブリと早や一浴びせ――。

滿洲で戰爭の結果、我が陸軍の服裝はカーキー色に改正せられた。乍併海に於てはカーキー色は禁制である。抑も軍艦は戰時成るべく其の姿を敵に發見せられざらんが爲め、外舷をば濃灰色に塗るのが普通である。然るに敵の艦隊は其の舷側をば濃灰色に塗れ

【煙突の色】

るにも拘らず、何故か煙突ばかりは淡黄色に塗つて居た。海上に於ては黄色は灰色よりも遠見に適するは明である。之が爲め、敵は未だ我を發見し得ざるに、我は已に敵を發見することを得たるのみならず、其の煙突の形狀及び數により、敵の陣形までも明知することが出來たのである。露國艦隊が特に斯かる塗色を選びたる理由に至りては、吾人の切に聞かんと欲する所である。

斯くて風浪と鬪ひつゝ、第○戰隊の後方に尾して航進した。見れば他の艇隊は、對州方面に向つて避難しつゝある。併し我等の艇は未だ其の御許に接せず、唯譯もなく伴せ伴せでくつ付いて居る。敵の艦隊は漸く接近して約七八千米突となり、其の數亦次第に増して二十餘隻を數へ得るに至つた。尋いで我が第三戰隊、第四驅逐隊等と逐次會合せしも、未だ我が主力艦隊の姿が見えない。軈て正午となり、午後一時となり、敵は益近寄つて來るも、味方の主力は尙ほ影さへ見えず、若し

【獨りヤキモキ氣が氣でない】

此敵を逃してはと、獨りやきもき氣が氣でない。

既にして午後二時前に至り、東方遙に我が主力艦隊の雄姿堂々、濛氣を破つて進み來るを發見したる時には、やれ安心と漸く重荷を卸したる思がした。偶旗艦○○の檣頭に「霧霽れ、波靜まり、天佑限りなし云々」との信號が揭げられた。成程霧は稍薄らいだ樣である。何で波が靜まらう、水雷艇では飯も炊け

【食はず飮まずの死物狂ひ】

ず、茶も沸かせず、食はず飮まずの死物狂ひである。波靜まれりと云ふ軍艦がしみじみ羨しかつた。

彼我主力艦隊は刻々相近づき、今にも乾坤一擲の大激戰が始るならんと、暫時が間は波も風も打ち忘れ、固唾を吞んで見てあれば、折しも襲ひ來る一團の濛氣に、敵も味方も掩はれて、姿は忽ち見えずなり、唯殷々たる砲聲の東方に轟くを聞くのみである。是に於て我等の隨航せる第○戰隊は敵の後尾を繞つて其の右側に出で、他の巡洋戰隊と協力して、敵の巡洋艦及び特務艦に對して、砲撃を

開始した。逆浪であらうと、横波であらうと、何の遠慮もなく、縦横無盡に突走られる**【御供の苦しさ】**ので、之に隨航する水雷艇の苦みは、とても筆紙に表すことが出來ない、一萬五千噸の大艦でさへ、此の日風浪に逆航するときは、怒濤上甲板に漲つて飛沫艦橋を襲うた程である。況して蕞爾たる水雷艇に至りては、波艇内に打ち込むにあらずして、艇が激浪中に突込むのである。水雷も大砲も今は何の用をか爲さん、乘員は柱に噛り付いた儘動くことさへ出來ぬのである。

斯かる際にも尚ほ隊列を亂すことは出來ない。而も舵は利かず、汽機の回轉は不規則なり、動もすれば或は前續艦を追ひ越し、或は列外に逸出する等、艇長の苦心と操舵手の勞、亦決して尠少ではない。

呼々憎き風――恨めしき浪――。

十二吋砲弾も未だ以て戰艦を撃沈するに足らずとは、日露戰役以前に於て一般に承認せられたる定說であつた。然るに日本海海戰に於て、露國戰艦の我が砲彈の爲に沈沒したるもの數隻に及びたるは、頗る世人の注意を喚び起し、其の原因理由に就きて種々の解說が下された。或ものは之を造船術に於ける復原**【敵艦隊沈沒の原因】**力の缺乏に由るとなし、或ものは之を石炭過載の爲め、装甲部全く水中に沒入したる爲となし、又或ものは之を我が彈丸威力の絶倫なるに歸して居る。成る程此等も或は其の一因であつたかも知れぬ。併し其の最も大なる因由は、此の日の風である、此の日の波である。

凡そ軍艦の装甲なるものは、主として艦の水線附近に施されるものにして、水線より上方に至るに從ひて次第に薄く、又水線下二三呎以下に至つては、全く甲鈑を有せないのである。是れ水線下は海水が防彈の作用を爲すからである。即ち海波平靜なる天候に於ては、水線附近は装甲鈑を以て保護せられ、水線以下は、海水を以て防衛せられ、又水線上の部は、縦令敵彈に穿彈せらるゝも、波浪浸入の恐れなきが爲め、沈沒の憂はないのである。之に反し波浪狂暴なる海面に在つては、艦の動搖と波の高低との爲め、或は水線下なる無防禦部に彈丸を被りて艦底を撃破せらるゝこともあり、或は水線上数尺の高處に受けたる彈孔よりも、海水浸入することもあり、而して水には復原力無きが爲め、一たび艦内に浸入したる水は、益艦の傾斜と動搖とを大ならしめ、遂に覆沒に至らしめたのである。

【天佑か天災か】乃ち此の日の風浪は、水雷艇乘員としての小局より觀れば、大なる天災なるも、戰爭の大局より觀れば、非常なる天佑であつた。之を思へば我等の苦痛は、寧ろ上帝に向つて感謝せねばならぬ。

天佑か天災かは知らねど、兎に角苦痛は苦痛である。風と爭ひ、波と闘ひつゝ戰場を馳驅すること數時間、流彈時々艇周を襲うて、潮水騰ること數丈、やがて午後六時頃敵艦沈沒の跡を航過した。毀れたる端舟、裂けたる扉、燒けたる木材、焦げたる釣床など其の他艦具の破片は、混然として海面に浮沈し、多數の敵兵は之に縋りつゝ、激浪の裡に漂うて居る。傍を通る我が艦艇を望んでは、或**【敗戰の慘狀】**は手を擧げ帽を振り、泣き叫びつゝ、頻に救助を求むるものもあれば、襲ひ來る激浪に忽ち浮木を奪はれて、見る見る波中に卷き込まれるものもある。或は最と恨めし氣に無言の儘見送るもあれば、尚ほも我を恐るゝ

にや、浮泛物の影に身を隱すもある。別けて哀れなりしは、半ば滿水せる破れ「ボート」に乘じ、我等の艇側に近く流れ行きし三四名の敵兵であつた。見れば一人の士官らしきものは、頭部に繃帶を施して艇底に仰臥し、「シャツ」は血に染んで緋の衣を着たるが如く、他の二三人は、頻に之が看護に努めて居る。山の如き巨濤の中に、底の拔けたる「ボート」――運命の歸する所は既に明である。而も尙ほ傷つける上官を劬りつゝ、我等の艇を見て伏し俯きたる痛ましさ!

【我が水兵の憤慨】折しも我が傍に立てる一水兵、「ざま見やがれ、ロスケめ、艇長! 打ち殺してやりませうか―」

聞けば彼に二人の兄弟があつた。弟は昨年九月遼陽の大戰に、二十三歳の盛の身をば、空しく滿洲の露と消え、彼の兄は妻あり、子ある後備より召集せられ、同年十月沙河の會戰に重傷を負うて、是れ亦湖北一坏の土

【陸戰の慘事】と化したとのことである。殊に彼の兄の死は、聞くも哀れの至りである、十月十三日拉木屯の攻擊に我が軍突擊功を奏せず、恨を吞んで退却の際、彼の兄は腰部を打たれて其の場に倒れた。敵の塹壕を距ること僅に數十歩、銃丸砲彈雨の如く、我が救護隊も之に近づくことが出來ない。やがて日沒となるや、敵は私に塹壕を匍ひ出でゝ、我が死傷者の携帶品を奪ひ、少しにても息の通へるものは、腹といはず、胸といはず、鋭き銃劍もて衝きつゝ、剔りつゝ、息の根を止めねば置かぬのである。彼の兄も亦殘忍なる露兵の劍尖に、數箇所を刺し貫かれ、翌曉再度の突擊の際、人事不省の間に、漸く我が軍に收容せられたるも、胸部に受けたる突傷の爲め、など て仇を討ちて」との唯一言を名殘とし、遂に野戰病院に殪れた。年老いて病める彼の母は、一時に二人の愛兒を失うて、病勢頓に革り、涙の裡に二兒の跡を追うて此の世を去つたとのことである。聞けば彼の憤慨も強ち無理でもない。併し斯の如きは、敵愾心を沸騰せる陸戰に於ては、彼我共に有り勝ちのことであらうと思ふ。

【窮鳥懷に入れば獵夫も之を擊たず】窮鳥懷に入れば獵夫も尙ほ之を擊たず、狗仔飢に叫べば居者も尙ほ之を殺さずとかや、日露兩國今や戰を交へ、劍戟彈雨の下、人互に相殺傷すと雖も、吾人、露人に對し、個人として何等の仇怨あるにあらず、敵となり、味方となるも唯是れ軍する身の義理である。艦の沈沒するまでも奮鬪し、幸か不幸か、身は死せずして海中に陷りたる敵に對して、最早や此の上危害を加ふるの必要もなければ、又之を加ふるに忍びない。猶ほ事情許すならば、此の勇敢なる敵をば、救助してやりたきが吾人の情である。

されど又吾人の命ぜられたる第一の任務は、刃向ふ敵を擊滅するに在りて、溺れたる敵を救助するのではない。苟くも前に敵の存する限り、之に向つて猛進せねばならぬ。區々たる人情に拘はれ、擊つべき敵をも打ち棄てゝ、敗敵の救助に從事する如きは、畢竟人氣取りにあらざれば、宋襄の仁に過ぎぬのである。

【確實なる勝利は敵を鏖殺するにあり】最も確實なる勝利は敵を鏖殺するにありとは、泰西兵家の箴言である。六代を高雄山に殺したる源氏は、賴朝を伊豆に流したる平家よりも、軍略上に於ける智者である。

日は漸く傾きて波は次第に冷く、海上に浮べる敵兵の救助を求むる聲は、刻々に哀へ行き、絹を裂く如き悲哀の叫喚は、細く長く、

波に響きて、暮れ行く空に一しほの哀を添へ、張り詰めたる鐵石の心にも、坐に無情を感ぜ【棄つべきものは弓矢なり】られ、熊谷ならぬも棄つべきものは弓矢なりとの思さへ起つた。

斯くて哀れなる敵兵をば、怒濤の裡に殘しつつ北上し、「カムチャーツカ」、「スウォーロフ」の沈沒を認むれば、暮色早や檣頭に垂れて、今や我等が活動の舞臺となつた。今朝十時三十分「コンパス」臺に立つてより、一杯の茶も飲まず、一本の煙草も喫はず、激浪怒濤と終日の亂鬪に、身は疲れて綿の如く、手足は凝つて棒となり、濡れたる衣服は更ふるに暇なく、冷寒漸く肌を犯し、飛沫と潮風とに打たれて、血走る眼は火よりも赤い。

【一片耿々憂國の赤情】唯衰へざるは、一片耿々憂國の熱情!!

苦心慘憺漸くにして從卒が炊ぎたる麥飯の握飯數個に勇を鼓し、玆に初めて戰隊と別れ、煙に消え行く敵艦隊の後を追ひ、速力を增して急進した。浪は一しほ烈しく襲ひ來りて、前方を正視することも出來ない。轟々たる砲聲今や絶えて、風浪獨り咆哮す。遙に暮靄の裡に薄れ行く味方艦隊を眺めたる一水兵、喟然として、

「ア、艦隊の人達は是からゆつくり休めるのだなア」

【噫、何を云ふ】噫、何を云ふ。旣に御國に捧げし我等の體、生あるうちはやらねばならぬ——。縱令手足は折るゝとも！

「總員戰鬪配置に就け！」

十四　快隼疲鷙を衝く

天を蔽ひ、海を覆さんばかりの大激戰も、日沒と共に、一先づ收まり、我が聯合艦隊は、敵を驅逐隊、艇隊に讓り、砲を洗つて北方に遠ざかつた。終日激浪を蹴破して機を窺ひたる我が驅逐艦、水雷艇は時こそ來れと、網を脫したる走兎の如く、籠を出でたる飛鳥の如く、敵艦隊目掛けて、東北南の三面より突進した。

【我が驅逐艇隊敵艦隊に迫る】北方に在りて敵の前路を扼せるものは、藤本司令の率ゐる第一驅逐隊、矢島司令の率ゐる第二驅逐隊及び河瀨司令の率ゐる第九艇隊である。東方より直に敵の側面を襲はんとせるものは、吉島司令の率ゐる第三驅逐隊、鈴木司令の率ゐる第四驅逐隊及び廣瀨司令の率ゐる第五驅逐隊である。南方より進んで敵の後尾に迫らんとするものは、福田司令の率ゐる第一艇隊、大瀧司令の率ゐる第十艇隊、近藤司令の率ゐる第十五艇隊、青山司令の率ゐる第十七艇隊、河田司令の率ゐる第十八艇隊及び久保司令の率ゐる第二十艇隊である。其の他嚢に命に依り、風波を三浦灣に避けたる、關司令の率ゐる第十四艇隊、若林司令の率ゐる第十六艇隊、松岡司令の率ゐる第十九艇隊も亦已に戰場に向つて進みつゝある。驅逐艦、水雷艇合して六十餘隻、敵の隻艦、片影だも尙ほ逃さじと、網陣を張つて取り圍んだ。

敵は半日の難戰に、力と賴む精鋭の戰艦四隻迄も打ち滅され、殘れる軍艦亦多少の損害を受けざるはなく、士氣は衰へ、兵氣は頽れ、戰ふ勇氣もあらばこそ、一刻も早く此の恐ろしき日の暮れよかし、將卒共に心竊に冀うた。軈て日は暮れ、我が艦隊と別れ、やれ嬉しやと思へば、兜の緒締め直す暇さへなきに、早や我が水雷艇に取り圍ま

【一敵艦に去つて又一敵】れ、一敵艦に去つて、又一敵、司令官ネボガトフ少將は、隊を率ゐて血路を南西の方に求めた。此の時に於ける敵艦隊の

【敵の陣列】排列は、ネボガトフ司令官の旗艦「ニコライ」一世を先頭とし、戰艦「アリヨール」、裝甲海防艦「アプラクシン」、同「セニャーウヰン」の三艦之に次ぎ、稍離れて裝甲海防艦「ウシャーコフ」、戰艦「ナワリン」、同「シソイ、ウエリーキー」、裝甲巡洋艦「ナヒーモフ」の四隻更に之に續航し、快速巡洋艦「イズムルード」は通報艦として旗艦の左側方に占位し、裝甲巡洋艦「ドンスコイ」、同「モノマーフ」、巡洋艦「スウエトラーナ」、同「アルマーズ」、特務艦船驅逐艦等は本隊の左後方に並進し、巡洋艦「オレーグ」、同「アウローラ」、同「ジェムチウグ」及び驅逐艦二三隻は、司令官エンクウイスト少將之を率ゐ、其の快速を利用して本隊を航越し、遙に其の左前方に進んで居る。

正に是れ快隼飛鷲を銜かんとするの景!

【第二驅逐隊劈頭第一の襲擊】日は全く暮れて、波色益々黒く、月なき空に朧の星影二つ三つ。我が第二驅逐隊は先づ猛然として敵主力艦隊に向つて突進した。四隻の快艦波を切つて進めば、一條の燐火銀河の如く、暗海に流る。敵は忽ち探海燈を點じ、砲火を放つて之を迎へた。闇を貫く紫青の電光、波に閃く眞紅の砲焰、天地は再び眠より覺めて、煌々、閃々、又轟々。我が各艦は飛彈を潛り、探照を犯し、陣形整然として唯眞一文字に敵艦隊に肉薄した。矢島司令の乘艦朧は、午後八時十分頃敵の距離約五百米突に迫り、之に對して、當夜劈頭第一の水雷を發射し、電、雷、曙の三艦、亦之に續きて襲擊を決行した。

敵の主力艦隊は、此の時針路を再び北方に轉じ、速力を極めて浦鹽斯德に向ひ、巡洋

【敵陣潰亂】艦隊、特務艦隊等は陣形全く潰崩して、南逃、北走、己が欲する所に從ひ、中には浸水烈しくして沈沒を免れんが爲め、我が沿岸に向ふものもあつた。

第二驅逐隊の襲擊終ると同時に、他の驅逐隊、艇隊は、直に諸方面より敵艦隊に向つて殺到し、或は前を襲ひ、或は後を襲ひ、一隊退けば一隊更に進み、息も繼がせず攻め立てた。敵は首尾腹背より我が猛擊を受けて、防戰の應援に遑なく、多數の探海燈を點照し、大小の彈丸を雨射し、死物狂ひに防いで居る。若し夫れ側方に在つて襲擊中の我

【襲擊の光景】が艦艇を眺めんか、船體は幾多の探海燈に集照せられて、煌々たる銀光を放ち、全速力を以て馳走する船首には、激浪の雪溢れ、白沫の渦流は、長く船尾に流れて奔河の如く、蓊蔚たる爆煙は、火の粉を交へて、一文字に靆き、落彈に怒る騰潮は、電光を浴びて、さながら、水晶の柱に異らず、敵の艦上に閃く砲火に至りては、高低參差波に映じて、恰も滿池の紅蓮一時に開くが如く、大なるは火焰搖曳して、響天に轟き、小なるは石火瞬閃、聲耳を劈く。殊に汽罐を破られて、敵前に進退の自由を失したるものに至りては、濛々たる白煙、沸々たる水柱、電光之に映射して、

【暗夜五彩の虹を畫く】暗夜五彩の虹を畫き、凄中美あり、美中凄あり、人をして恍然神脱せしむるものがある。

既に進んで自ら敵探照の下に立つに至らんか、四五萬燭力もあるべき爛々たる電光は、左右眞向より面を射照し、眼は眩して前方を正視することも出來ない。今は唯面を伏せ、眼を掩ひ、探海燈目掛けて、眞一文字に猛進

するのみである。一分時間に數十彈を發射す**【速射砲と機關砲】**る速射砲、一秒時間に數彈を吐き出す機關砲は、轟々戞々耳を壓し、頭上を掠むる飛彈の嘯聲、大なるはビユーンと呻つて強弩の鏑聲の如く、小なるはシユーと響いて熱鐵を水中に投ずるに異らず。白銀の水柱は前後左右に簇立し、倒れては沛然として艇上に爆下し來る。人は甲板に伏して發射管を按じ、艇長一人司令塔上に立つ。汽機獨り轆轤として復人聲を聞かず。此に至れば自我**【無念又無想】**を脱却して無念又無想、荒れ狂ふ浪も錦の褥、飛び交ふ彈丸も春の落花、心頭唯存するは、成功の一念のみである。

艇愈進めば、敵の砲火は愈激しく、わきて耳底に徹するは、機砲の響である。トットットツ……と厭な音響と共に、砲口より射出する彈丸の流は、恰も喞筒の水を注ぐが如く、船體を貫く音は、ビシユツ／＼。折しも一聲玉切る叫び、

キヤツ！

【奮進、猛進】誰かやられたなと思へど、顧みる暇も、助くる暇もない。唯奮進！　唯猛進！

やがて敵艦上に於ける喧噪叱咤を聞き得るに至れば、距離は已に二百米突以內である。敵の艦腹を狙つて、發射管の電鑰一たび壓すれば、

シユーツ！

一條の白線を海面に畫きつゝ、波を潛つて進み行く、魚形水雷、一個！　二個！！　三個！！！

既に水雷を發射し終れば、永居は無用、轉舵一杯、速力を極めて退却の途に就く。敵は逃さじと追擊、追照、愈急。耳邊をかすむ**【往きに優りて氣味惡さ】**る飛彈の聲の、往途に優りて氣味惡さ。幾もなく轟然海も覆るばかりの爆音と共に、船體ビリヽと振動すれば、俄に起る萬歲の聲。

命中ツ！

目標敵艦の探海燈は、忽ち吹き消すが如く消滅し、砲火俄に絕えて影は暗中に沒す。沈否は知らねど慥に成功！

前の負傷者は如何にと見れば、あはれ重傷を負うて早や蟲の息。暗中ぬるりと滑るは、血潮か水か。

「水雷は中つたぞ、しつかりせよ」

と抱き起せば、聲も微に、

「萬——ざ——い」

治療を受くべき軍醫は居らず、繃帶卷き付け下甲板に擔ぎ込めば、艇動搖する毎に、傷者の面は顰みつ、覺みつ。

【第一驅逐隊第三驅逐隊】斯くて第一驅逐隊（春雨、吹雪、有明、霰、曉）、第三驅逐隊（東雲、薄雲、霞、**【第五驅逐隊第一艇隊】**漣）、第五驅逐隊（不知火、叢雲、夕霧、陽炎）、第一艇隊（第六十七號、第六十八號、第六十九號、第七十號水雷艇）、第九艇**【第九艇隊第十艇隊】**隊（蒼鷹、燕、雁、鴿）、第十艇隊（第三十九號、第四十號、第四十一號、第四十三**【第十五艇隊第十七艇隊】**號水雷艇）、第十五艇隊（雲雀、鷺、鷂、鶉）、第十七艇隊（第三十一號、第三十二號、第三十三號、第三十四號水雷艇）、及び**【第十八艇隊】**第十八艇隊（第三十五號、第三十六號、第六十號、第六十一號水雷艇）の三驅逐隊、六個艇隊は午後八時三十分頃より同十一時頃迄の間に於て、激烈なる敵の探照砲火を物ともせず、眼眩すれば眼を掩ひ、人斃るゝも救ふ遑なく、此處ぞ命の捨て處とばかりに、遠きも五六百米突近きは二百米突以內に迫りて、勇敢剛毅なる強襲を決行した。殊に黑白**【衝突の危險】**も分かぬ暗中に、燈火を全滅したる數十隻の艦艇、全速力を以て縱橫に馳走するこ

我が驅逐艦水雷艇夜襲の光景　(東條鉦太郎氏畫)　(海軍參考館藏)

とて、衝突の危険は言語に絶し、互に行き違ふもの、相横ぎるもの、飛燕か、閃電か、危機眞に一髪を容れない、見張の水兵より、

艇長！　右舷に船が……

聲未だ消えざるに、早や我が艇首を摩しつゝ、直前を横ぎる船影、敵か、味方か、問ふ暇も、答ふる暇もあらばこそ。

危ないツ！

と思ふ間に、影は早くも暗中に消えて、燐波僅に航跡を遺すのみである。此の時に當つて若し躊躇すれば、尚ほ危ないのみならず、徒に襲撃の好機を逸する恐がある。どうせ盲人の競走に等しき暗夜の仕事、唯猪突、猛進、盲人瞎馬的に突撃するより外はない。

是より先き、ネボガトフ司令官の率ゐる敵主力艦隊は我が猛烈なる襲撃に辟易し、一意之を脱せんことを努め、幾度か右折左轉して其の航路を縮しつゝ全速力を以て北方に航走した。而して其の先頭の諸艦は午後九時過我が襲撃の絶間を見て、斷然探海燈を消滅したるも、後尾の諸艦は依然として探照を繼續したるが爲め、特に我が艦艇の攻撃目標となり、右往左往に逃げ迷つて、陣形全く潰裂するに至つた。

軈て午後十一時頃に至りては、さしも激甚なりし我が襲撃も、一先づ中絶せしかば、敵は全く探照を止め、砲火を收めて影を暗中に沒し、天地は再び風濤の夜に歸つた。空は全く曇れて星斗密に、風は益々强く波動繁く、夜はいつしか闌けて四更に近づけば、二十三日の下弦の月は、早や東天に昇り、全波漂搖、夜は愈々寂かである。

【夜寂々】

晴澹たる廣き海面の彼方には、疲れ果てたる敵艦の、波影濤聲にも尚ほ心を配りつゝ、戰々兢々恐しき夜の一時も早く明けよかしと待つあれば、此方には又、敵を索むる我が艦艇の、尚ほも縱橫に奔馳しつゝ、襲撃を果す迄は一刻も夜の永かれかしと祈つて居る。探る味方も、逃ぐる敵も、共に光を掩ひ、響を忍べば、相近つくも互に知らで行き過すこともあり、暗中不意の發砲に膽を冷すこともある。

【彼我の心中】

日沒後敵を見失ひたる我が第四驅逐隊（朝霧、朝潮、春雨、村雨）は、爾來索敵に努むる中、午前二時頃不圖敵艦二隻の北航せるに遭遇し、巧に之を奇襲して、尠くも其の一隻を擊破した。是ぞ當夜に於ける掉尾の一擊である。而して爾餘の艦艇も亦百難を排して、終夜敵を搜索したるも、遂に之を發見せずして、空しく二十八日の曉を迎へた。

【第四驅逐隊】

前記の如く、此の夜に於ける我が襲擊は、最も猛激を極め、或は敵の號令、叱咤の聲を聞き、或は敵艦上に於ける人影を認め得る迄も肉薄猛進し、殊に俘虜の言に依れば中には大砲の俯角以内に迫りたるものさへありたりと云ふ程にて、全艦艇何れも萬死を期して突擊したるが爲め、我が損害も亦決して尠くなかつた。

【我が艦艇の損害】

劈頭第一の襲擊を決行したる第二驅逐隊は、敵艦隊の全砲火を被りたるが爲め、各艦共に多少の被彈なきはなく、就中二番艦雷は、初め敵彈に汽管を打ち碎かれたるが爲め、蒸汽忽ち逸出して、白煙濛々艦を掩ひ、一時敵前に停止するの止むを得ざるに至つた。敵の砲火は忽ち同艦に集中して更に數彈を被り、偶々發射管を按じて發射の機を窺ひたる池田中尉（宏平）は、胸部を貫かれて遂に斃れ、山田上等兵曹（作太郎）、大宮司上等機關兵曹（要人）、外下士卒九名負傷した。其の他

【第二驅逐隊】

朧に於ては從僕長沼漸全身を粉碎せられて即死し、高橋中軍醫([illegible])及び下士卒四名輕傷を負ひ、曙に於ては湯目上等兵曹([illegible])並に下士卒三名の負傷者を生じた。

【第一艇隊】第一艇隊の第六十八號艇は午後九時十五分頃、敵艦距離約三百米突に迫りて襲擊を果し、將に退却せんとする際、遇敵の一彈來りて前罐を貫き、一等機關兵曹鈴木政太郎、一等機關兵山田藤七、同三田德三、同宇佐美嘉十郎は熱湯を浴びて悲壯なる戰死を遂げた。尋いで他の一彈は後罐の汽管を破り、爲めに蒸汽噴逸して、遂に敵彈雨飛の下に汽機を停止して、應急修理を施すの止むを得ざるに至り、忽ち敵の猛火に浴して、船體の彈痕實に三十に及び、床次上等兵曹([illegible])外下士卒五名の負傷者を生じた。

【第十七、第十八艇隊】第十七艇隊及び第十八艇隊は共に竹敷要港部の所屬にして、開戰以來常に朝鮮海峽の哨戒に從事し、未だ嘗て敵に接せず、旅順方面に於ける他艇隊の勳功を聞く毎に、將卒共に腕を撫し、髀肉を嘆じつゝ、空しく強風怒濤と鬪ふこと茲に一年有餘に及んだ。而も今日圖らず此の大戰に會す、男兒君國に報いるは正に此の秋に在りと、將士踴躍、意氣天を衝き、其の戰鬪最も壯烈を極めた。

【第三十四號艇の沈沒】第十七艇隊の第三十四號艇は、青山少佐、司令艇長として之に坐乘し、午後九時十分頃敵艦距離約二百五十米突に迫り、水雷を發射したる一刹那、十二拇大の敵彈一個、前罐を貫通して更に舷側に大破孔を穿ち、沸煮せる熱湯は忽ち室內に流出し、強壓力の蒸汽は猛裂なる勢を以て煙突、彈孔等より噴出し、二等機關兵曹兒玉利明、一等機關兵吉田武平次、同後藤欣次、二等機關兵柿崎彌作の四名は熱湯に燒かれて前罐室に斃れ、同時に他の一彈は前部發射管に中つて、之を海中に吹き飛し、管員二等兵曹富田尙武、及び二等水兵林藤五郎を殺し、且つ舵鎖を切斷したるが爲め、艇は敵前近距離に於て進退の自由を失ふに至つた。敵の砲擊は益急にして、大彈小彈霰雨の如く、船體を貫き、乘員を殺傷し、忽ちにして青山司令、西村上等兵曹([illegible])及び下士卒數名の負傷者を生じた。加ふるに艇の動搖は四五十度に達し、乘員必死の防水も更に其の效なく、浸水は刻々增加して、船體次第に沈降し、艇首は早や水中に沒した。是に於て危難を僚艇に報じて救助を乞はんと欲するも、此の時進退自由を失せるが如き一隻の敵艦は、我が近距離に停止して、頻に砲火を開くが爲め、信號火に揚ぐることさへ叶はず、鷲に掴まれたる小雀の翼を動かす樣もなく、應急の策全く盡きて、將卒共に今は唯死を期して、艇の沈沒を待つばかりである。曩に波上に浮ぶ敵兵を憫みしことの、今や我が身の上に廻り來て、破艇に死を待つ果なき運命、徒に怒濤の裡に漂蕩すること約一時間、艇は益沈んで海水早や上甲板を浸さんとした。斯くて午後十時頃に至り、漸く敵艦と遠ざかりしが、適第六十一號艇の來り救ふに會し、將に相近づかんとする際、此の時早く彼の時遲く、艇は全く沈沒して總員身を激浪中に投じた。此に於て第六十一號艇は直に乘員の救助に努め、青山司令以下生存者の殆ど全部を收容せしも、獨り二等信號兵松村孫七のみは、遂に艇と運命を共にするに至つた。若し第六十一號艇の來ること十分間遲かりせば、第三十四號艇乘員の運命は、頗る悲慘なるものであつたであらう。

同艇隊の第三十三號艇も亦射擊中、敵の一彈、

後部發射管に命中して之を壞り、遇〻照準に從事せし多伊良中尉(一丈)の胸部を貫きて之を殪し、其の他小口徑砲彈二十餘個を被りて、下士卒七名の負傷者を生じた。

【第三十五號艇の沈沒】第十八艇隊の殿艇第三十五號艇は、午後九時三十分頃兇猛なる敵の亂照彈雨を犯し、敵甲板上の人影を認め得るに至る迄迫進し、水雷一個を發射せしに、飛び來る彈丸實に雨よりも繁く、船體の各區劃殆ど敵彈を被らざるはなく、艇長副島大尉(村八)先づ臀部を貫通せられて重傷を負ひ、一鬼上等兵曹(信次郎)及び三等兵曹豐村恒雄相踵いで斃れ、其の他下士卒の負傷尠からず、流血は甲板に漂ひ、奔潮は艇を掩ひ、光景轉た凄烈を極めた。然れども勇敢なる艇員は尚ほ屈せず、山中中尉(義勇)、艇長に代つて更に第二の水雷を放ちしに、此の時飛彈愈〻密にして、蒸汽主管、高壓汽筩等を破壞せられ、山中中尉等亦負傷し、艇は遂に敵の直前に於て停止するに至つた。白煙は驤々として電光に映じ、飛彈は切々として船體を貫き、戰はんと欲するも砲役せず、脫せんと欲するも汽機動かず、艇の運命今や風前の燈よりも尚ほ危ない。是に於て一面には防火、防水並に死傷者の手當に努むると同時に、一面には敵の接近に備へんが爲め、僅に固定發射管に殘る一個の水雷をば、照準發射に便なる旋廻發射管に移裝した。此の作業たるや、晝間平靜なる海面に於て、適當の機械を用ひてさへ困難なるに、暗中激甚なる艇の動搖を冒し、全然手力のみを以て之を遂行したる乘員の勇氣は誠に感ずべき至りである。斯くて漸く敵と遠ざかるに及び、危難信號を揭げて僚艇の來援を待つうち、第三十一號艇の來るに會して之に救援を依賴し、幾度か曳航を試みたるも、激浪の爲め曳索每に切斷して功を奏せず、斯かる間に浸水漸く增加して、艇は遂に沈沒し、乘員全部第三十一號艇に收容せられた。此の夜附近に在りたる我が驅逐艦、水雷艇數十隻、而も第十七艇隊の第三十四號艇は第十八艇隊の第六十一號艇に救助せられ、第十八艇隊の第三十五號艇は第十七艇隊の第三十一號艇に救はれたるも、亦奇なる因緣である。此の他第十八艇隊の第三十六號艇も襲擊決行の際、敵彈一個、上甲板に命中して、岸田中機關士(東次郎)、瀨戸口上等兵曹(彌次郎)及び下士卒二名重輕傷を負うた。

【衝突の損害】右の外此の夜の襲擊中、第一驅逐隊の春雨は、第五驅逐隊の夕霧と衝突し、曉は第・艇隊の第六十九號艇と衝突し、又第十艇隊の第四十三號艇は、第十五艇隊の鷺と衝突し、孰れも多少の損害を負ひたるも、獨り第六十九號艇の遂に沈沒したるのみにして、他の艦艇は單獨根據地に歸るを得た。而して第六十九號艇の乘員も亦、三等兵曹佐藤啓次郎及び二等機關兵曹坂野恒久の溺死したるのみにして、他は悉く第九艇隊の雁に救助收容せられた。

斯の如く我が驅逐艦、水雷艇は、勇烈果敢の襲擊を決行したるが爲め、敵は防戰最も力めしと雖も、戰艦「シソイ、ウェリーキー」、同「ナワリン」、裝甲巡洋艦「アドミラル、ナヒーモフ」及び同「ウラヂーミル、モノマーフ」の四艦は我が水雷に傷つきて、遂に沈沒するに至つた。

【「シソイ、ウェリーキー」の沈沒】戰艦「シソイ、ウェリーキー」は、敵第二戰艦隊の二番艦として、晝間「オスラービヤ」に續航したるが、同艦の列外に脫するに及びて、忽ち我が艦隊の集彈を被るに至

沈沒水雷艇　第三十四號

沈沒水雷艇　第三十五號

沈沒水雷艇第六十九號

戰艦「ナワリン」

り、巨彈屢命中して二時間に亙る大火災を起し、且つ前部水線部に大破孔を穿たれて艦首著しく沈降し、速力大に衰ふるに至つた。尋いで夜に入るや、連續猛烈なる我が水雷攻擊を受け、遂に艦尾に一水雷を被りて浸水を來し、乘員死力を盡して防水に力めたるも、更に其の甲斐なく、到底浦鹽斯德迄の航行に堪へ難きに至つた。是に於て艦長は、洋中に於て沈まんよりは、寧ろ陸岸に到りて乘員のみにても救助せんと決し、針路を轉じて我が對馬沿岸に向ふの途上、二十八日朝我が假裝巡洋艦信濃丸、八幡丸及び臺南丸の爲に發見捕獲せられ、一旦其の檣頭に我が旭日旗の飜るを見しも、浸水の爲め遂に同日午前十一時韓崎(對馬の北端)の東北東約三十海里の處に沈沒し、乘員六百六十餘名中約六百名は、前記の我が三艦に救助せられた。同艦は二十七日晝戰の初期に於て我が彈丸治療室に命中し、軍醫官及び看護部員の多くは死傷し、爲に他の死傷者に對する手當十分ならず、我が捕獲員の乘艦したる際には、負傷者は血塗れとなつて各處に呻吟し、戰死者の死體は艦具の破片と共に纍々として

裝甲巡洋艦「アドミラル、ナヒーモフ」

甲板に狼藉し、光景頗る慘澹たりしといふことである。

【ナワリンの沈沒】戰艦「ナワリン」は敵第二戰艦隊の三番艦として、「シソイ、ウェリーキー」に續きしが、二十七日晝間の戰鬪に於て、既に多大の損害を被り、艦長以下の死傷尠からず、殊に艦尾を大破せられて、浸水烈しく、日沒後遂に艦を停止して、破孔を閉塞するの已むを得ざるに至つた。是に於てか忽ち前後左右より我が水雷艇隊の猛襲を受け、艦尾及び艦腹に各一個の水雷命中し、艦は俄に傾斜し始めた。乘員は急遽上甲板に逃れ出で、或は端舟を卸さんとし、或は自ら海中に投ずる等、艦内喧騷を極むるうち、更に舷側に二個の水雷を受け艦は忽焉として顚覆沈沒し、六百八十餘名の乘員中、萬死に一生を得たるものは僅に翌日我が驅逐艦に拾ひ上げられたる一名の信號兵と、英國商船に救はれたる二名の水兵とのみにして、他は悉く日本海の海底に葬られた。

【ナヒーモフの沈沒】裝甲巡洋艦「アドミラル、ナヒーモフ」は敵第二戰艦隊の殿艦として、「ナワリン」に續航し、晝戰に於ては甚しき損害を被らず、死傷者の如きも極めて少數であつた。然るに日沒後幾もなく、右舷艦首に一個の水雷を受けて大破孔を生じ、海水の奔入急湍の如く、艦首は忽ち沈降して速力大に衰へ、到底遠距離の航海に適せざるに至つた。是に於て艦長は浦鹽斯德に向ふを中止し、最近の陸岸に近づきて、乘員を上陸せしめ、然る後艦を自沈せんと決心し、翌朝七時頃我が對馬の東岸に達した。仍て直に端舟を卸して乘員の上陸を開始せし際、我が假裝巡洋艦佐渡丸に發見せられ、殘りの人員は忽ち海中に投じた。佐渡丸は一方敵兵の救助に力むると同時に、一方艦の捕獲に從事したるも、「ナヒーモフ」は浸水の爲め午前九時頃遂に對馬琴の浦の東方四海里に沈沒し、乘員六百三十名中、五百二十餘名は佐渡丸に收容せられ、他の百餘名は端舟に乘じて對馬海岸に上陸した。

【モノマーフの沈沒】裝甲巡洋艦「ウラヂーミル、モノマーフ」は、エンクウィスト司令官の率ゐる第一巡洋艦隊に屬し、晝間は專ら我が第三戰隊以下の巡洋艦隊と交戰し、僅に六吋彈二個を受けたるのみにして、其の損害極めて輕微

であつた。然るに速力鈍きが爲め、晝戰の終期に於てエンクウィスト司令官の指揮下を離れ、他の巡洋艦、特務艦等と共に主力艦隊の左後方に並進せしに、日沒後猛烈なる我が襲撃を受けて、艦腹を撃破せられ、浸水の爲め艦體漸次傾斜するに至つた。是に於て艦長は到底浦鹽斯德まで航行し難きを認め、針路を西方に轉じ、翌朝八時頃我が對馬の東岸に近づきし際、我が假裝巡洋艦佐渡丸の爲に捕獲せられた。此の時「モノマーフ」は艦首大に沈下して、且つ右舷に傾斜すること約十度に及び、到底曳航の望なきを以て、佐渡丸は遂に之を斷念し、敵の乘員全部は遇來會したる假裝巡洋艦滿洲丸に收容せられた。而して「モノマーフ」は其の後尚ほ沈まんとして沈まざること數時、漸く午後二時過に至り、韓崎の東方約十海里に恰も眠るが如くに沈沒した。

斯の如く我が驅逐艦、水雷艇は潮浪彈雨を物ともせず、勇壯無比の襲撃を決行し、敵の堅艦四隻を撃沈し、凱歌を揚げて更に翌日の戰場に急いだ。

【敵の驅逐艦】

然らば此の夜に於ける敵驅逐艦の行動は如何？ 九隻の有力なる驅逐艦中、唯一隻として我が艦隊に對し襲撃を試みたるものさへあるを聞かない。抑もロ提督が幾多の困難を冒し、僅に三百噸に過ぎざる小艦をして、一萬數千海里の遠航を爲さしめたる所以のものは、唯此の一夜の攻撃を爲さしめんが爲である。豈單に沈沒軍艦乘員救助の用のみならんや。開戰の當初、吾人之を世評に聞く、露國驅逐艦乘組將士は、露國海軍中最も有爲勇敢の士なりと。之に對する我が驅逐艦水雷艇の乘員は心中大に警むる所があつた。然るに之を實戰の結果に見るに……

十五　軍さ話し

二十七日日沒と共に、敵を驅逐隊、艇隊に讓りて、戰鬪を中止したる我が聯合艦隊は、一面には損處の應急修理、死傷者の手當等を施し、以て明日の戰鬪に備ふると同時に、一面には徹宵哨兵を配置して、敵驅逐艦の襲撃を警めつゝ、翌朝の集合地點たる鬱陵島に向つて航進した。遙に後方を顧みれば、今や我が驅逐艦、水雷艇の攻撃正に熾なるものの如く、閃々たる砲火の焔、燿々たる探海燈の光、朱青相混じて暗空に閃く樣、誠に壯烈を極めて居る。

【中少尉ばかりの士官次室】

こゝ軍艦○○の士官次室。甲板は敵彈に貫かれて幾多の破孔を生じ、白きソーファの覆には、黑ずみたる血痕斑々として腥氣人を襲ふ。かゝる中に平然として集れるは、孰れ血氣盛の中少尉ばかり、半日の激戰に火藥の瓦斯に燻りたる顏を洗ひもやらず、或はソーファに横臥し、或はデッキに蹲坐し、晩食の支度を待ち兼ねて、羊羹を嚙る者、餅菓子を食ふもの、半日の飢を酒保の中受に醫して居る。何處より持ち來りけん、机の曳斗を倒にして、腰打ち掛け、麥酒のコップを手にせる、頑丈なる青年將校は、折しも入り來れる、一人の中尉を見るや、

【遠慮なき青年士官の談話】

甲「ヤア貴樣まだ生きて居たか、惡運の强い奴だね、併しお目でたう。一つ健康を祝さう」

乙「サンキュー！ だが、まだ生きて居たかとは非道いね、オレなんぞは、ちやーんと

彈丸除けの御守が付いて居るから安心だ」
甲「ハヽ……兎角持てん奴は、矢張り彈丸に迄嫌はれると見えるねえ」
乙「それこそ、厭で幸ひ、好かれて困るぢや、御氣の毒だが明日は貴樣が佛樣になる番だぞ。言ひ置がありや言つて置け。友達甲斐にオレが一つ戒名を作つてやる、エート何と付けてやらうか、……さうだ、デコボコ院殿アンポンウンテラガン居士」
甲「馬鹿ッ！　一體そりや何といふことだい、でも殿付きだけが有りがたいね、……倂し今日『ブリッヂ』をやられた時には、實際貴樣はやられたことだと思つたね、ドスン、ビリ／＼、ズドンと體をシヤくられる樣に感じたと同時に、司令塔の近邊で、敵彈の爆裂した眞ッ赤な焔がドス黑い煙の

【敵彈命中の光景】

中に、ギラ／＼と光つた、すると、早や彈片がカツ／＼と四方に打ッつかつて、『ボート』が碎ける、甲板に孔が明く、『スタンション』が折れて飛ぶ、人が倒れる、血が流れる、甲板が燃える、しかも夫がほんの一瞬間ぢや、暫くすると毀れた鐵片や、木片がバラ／＼と頭の上から降つて來る。貴樣の電氣燈も、最う拜むことが出來ないかなアと思ひながら、ヂッと見て居ると、次第に煙の薄らぐと共に、天の岩戸を出づる日の御神か、雲間を洩るゝ三五の月か、煙の中からピカ〳〵と、貴樣の電氣燈の光を見た時には、まだ生きて居たなと、嬉しくつて思はず飛び上がつたよ」
笑聲俄に室内に滿つると共に、視線は忽ち乙君の頭上に集中した。
乙「よくまアベラ／＼と饒舌る奴だね、嘸ぞ喉が疲れたらう。倂しそれ程迄にオレのことを心配して呉れた好意に對してまア一つ酌がう」
甲「ナーニ、貴樣の生死なんぞ、オレに於て何かあらんやだ、唯オレの心配したのは、忽ち今夜からガンルームの暗きを如何せんの問題だ」
笑聲再び起つて、乙君頻に禿げた額を撫りつゝ、
乙「非道いことを言ふ……。諸君まア默つて聞け！
丁度三時頃だつたらう、『敵の五番艦オスラービヤ』大火災を起し列外に出づ』と『ノート』へ書き終ると同時に、ドスンと體を宙に跳ね飛ばされたが、後は暫く

【敵彈爆發の慘狀】

何が何だか譯が判らない、するとと肩のあたりをイヤと云ふ程、何かで打たれた樣な氣がして、不圖氣が付いて飛び起きると、あたり一面血の海となつて、甲板はメチャ／＼に碎けて居る、其の中にオレの直ぐ前に立つて居た信號兵が腹をやられて打ち倒れ、臟腑がゾロリと流れ出て居るぢやないか。一方を見ると、オレの一間ばかり右に居た水兵が、兩足と片腕をもがれてまだウンウン呻りながら、ビク／＼やつて居るといふ有樣、艦長はどうせられたかと、『コンパス ブリッヂ』を仰いで見ると、雙眼鏡を持つて敵の方を見て居られる、『艦長お怪我はありませぬか』と問ふと、『大丈夫だ、君は』やられたかと思つたが無事でよかつた』と言はれた。先づ安心と、夫から負傷者、運搬員を呼んで、死傷者の始末をさせたが、あの弱蟲の剃夫が、平氣で信號兵の臟腑を腹の中へ收めて繃帶を爲たのには感心したね、殊に驚いたのは、○○水兵の腕が袖の

付いた儘二間ばかり先きの「デッキ」に衝き立つて居たことだね、日清戰爭の時、或軍艦で戰死者の首が見えないので、方々搜したら、棚の隅に乘つかつて居たといふ話を聞いて、まさかと思つたが、實際彈丸といふ奴は、思つたよりも非道い奴だね、どうだあの堅い「デッキ」へ腕が衝つ立つなんて、迚も本當とは思へないぢやないか」

乙君の身振り、手眞似の話上手に一同聞きとれて居る折柄、頭に繃帶を施した一少尉が、「カーテン」を捲くつて入つて來た。甲中尉之を見るや、

甲「○○少尉！ どうした、君もやられたのか」

少「少々ばかり從軍徽章を頂戴しました」

乙「さうか、まア輕くつて結構だ。今度は一つ君の勇戰談を聞かうぢやないか」

少「僕なんかのは、ほんのかすり傷で、繃帶に恥かしい位さ」

乙「でも、君の砲員は大分やられたと云ふぢやないか」

少「さうですなア、戰死が二人に負傷が三人！」

甲「大分大きかつたと見えるね」

少「さう、どうしても十吋以上でしたらう！ ○○水兵なぞは身體寸斷、殘るは僅に右足一本さ」

乙「フーン、可哀想に好い水兵だつたがなア」

丙「それはさうと、△△少尉はどんな模樣かね、餘程重いといふことだが」

丁「中軍醫の談では、何でも六處ばかりやられたさうだ。あの通り元氣な男丈あつて、氣分は餘程しつかりして居るさうだが、迚も明日の朝までは持つまいと云ふことだ」

甲「頭は好し、體は丈夫だつたに、惜い事をしたなア」

乙「それに、氣の毒に後には年寄りのおッ母さんぎりぢやといふぢやないか、さう／＼『エンゲージ』が有つたとかいふことだね、矢つ張り美人薄運、才子短命かねえ」

甲「貴樣なんか係累はなし、代つてやればいいものに」

乙「冗談言ふな！ これでも死んだら泣くものが二人や三人無きにしもあらずだからねえ」

甲「裏の山椒の木に蟬が泣くか」

「アハハ……オホホ。」

乙「口の惡い奴だね、敵の彈丸も氣がきかない、△△少尉なんかに中らずと、こいつのあの口へ中つて引き裂いてやればいゝのに」

此の時食事の用意整ひ、一同膳を取つた。無駄話は尙ほ果しもなく續いて居る。やがて食事も略終りし頃、一人の水兵あわたゞしく驅け來り、

「軍醫長より△△少尉が六ケしいから、どなたか二人ばかりお出で下さい」

豫て期したることながら、愈と聞きては一同顏見合せて長大息！ それではと、「キャプテン、ガンルーム」と、クラス メート」の一人とは、直に士官病室に驅け付けた。後には室內しばし打ち濕りて、語る言葉も高からず。

【追懷】丙「△△少尉が額から體から、血塗れになつて、擔架に擔がれながら、『此の位大丈夫だ。も一度砲臺へ連れて行け』と動かぬ體を藻搔きながら、叫んで居たのが、ま

だ目の前に散らついて居るが、もうだめかねえ」

乙「晝飯の時には、餘り澤山食ふと、戰死した時に、恥を掻くことがあるなどと、木村重成の樣なことを言つて居たが、言遂に感心をなしたかねえ」

丁「一體戰爭といふ奴は、ドン〳〵打ち合つて居る時よりも、濟んだ後の方が厭なものだね」

丙「まアそんなものだね、丁度に時た十分頃だつたらうか、こちらから打つ彈丸はポン〳〵面白い樣に中る、見て居る間に敵の檣が倒れる、煙突が飛ぶ、火災が起る、列が亂れるといふ時には、天下亦之に優る壯快事があるだらうかと思つたね」

今迄無言で人々の話を聞いて居た、一人の中機關士は、此の時いと殘念らしく、

【機關官の言】「君等はそんな愉快なことを見て居るけれど、僕なんぞは、唯ドン〳〵音を聞くばかりで、何方が勝つて居るのやら、負けて居るのやら薩張り判らず、船の底で石炭の粉を食つて働いて居る、お負けに船が沈む時には、イの一番に御陀佛とは、實に引合はん商賣さ」

【戰鬪の初期に於ける我が艦隊の危機】乙「そんなにコボすなよ」、我々だつて唯面白い時ばかりぢやない。戰鬪の初め、三笠が集彈を受けた時などは、水柱で前が見えなくなつた位、此の先き、まアどうなることかと、どんなに心配したか知れやしない、そんな時でも貴樣なんかノンコのシャーとして油さへ差して居ればよいのぢやないか、船の沈む時には我々だつてお陀佛さ、一分や二分早くつても遲くつても、大した損得はないさ、それに今日なんぞは、機關部員にや怪我人だつて一人ありやしないぢやないか」

丙「あの時は實際悲觀したね、長官などは、とつくの昔、戰死せられただらうと思つた位だ、敵の彈丸も最初は隨分能く中つたね」

【彈藥通路の士官】丁、中機（中機關士の略稱）などは、最初から油蟲たることを覺悟で海軍に入つて來たんだから、假令戰爭が見えないとて仕方もないが、オレなんぞは兵學校ビリ一番の優等生でありながら、地獄の底の樣な彈藥通路で面白くもない彈丸と相撲さ、ヤレ鍛鋼榴彈を揚げろの、ヤレ徹甲榴彈を揚げろのと、丸で土方か人足の樣なものさ、併し兵隊は感心に能く働いたね、一人で六吋彈を二つ位、一度に擔いで行くものがあるんだから、そこに至ると□□少尉なんか一番仕合せ者だね、十二吋裝甲鈑で防禦せられた砲塔内に安居して、戰爭見物をやつて居るんだからね」

【砲塔の士官】「ハハ……人の仕事といふものは、何でも面白さうに見えるものだね、僕だつて是で中々人の知らない苦勞をしたものさ、僕は彈丸の下を潛るのは今度が初めてなんだが、分隊長と代り合うて、指揮塔から首を出して彈着を見て居ると、敵の彈丸がビューンと頭の上に呻る度に、頭がヒョコリ下り、艦橋の上から艦長はじめ澤山の人が見て居られはしないかと思ふと、恥しくて溜らない、今度こそはどんなことがあつても御辭儀はしないと、全身の力を頸に込めて待つて居ると、ビューン！　ハッと思ふと、いつの間にか、早や頭が下がつて居る、耳の爲か、艦橋の上で笑つて居る樣に聞える、是ではならぬと、今度は「ズボン」、

の紐をグッと締めて、下つ腹にウンと力を入れた、夫からは餘り頭が下らなくなつたが、こんな氣苦勞は、君達には判らないだらう」

乙「昔の御大名にも、三つの不足があつたと云ふことだが、□□少尉の心配なんかは、まア之に似たやうなものだね、僕等も最初は隨分敵彈に敬禮をしたものさ、昨年二月九日の初めての旅順攻擊の時なぞは、自分ながら情ない樣な氣がしたね、併し八月の黃海海戰の折には、もう平氣だつた!」

此の時色の白い中主計が初めて口を開いた。

【主計官の言】 中主「大分諸君の苦心談を聞いたが、僕も一つ仲間に入れて貰はう。君達は皆夫々自分の本職をやつて居るのだから好い樣なものの、僕は治療所の補助員で、頭が碎けたり、腹が裂けたりした負傷者がやつて來る度に、中軍醫が手當を爲る間、手を押へたり、足を抱へたりする役目さ、軍醫官などは始終切つたり、切られたりを見馴れて居るから、何ともあるまいが、我々の爲には、あまり好い氣持はしないね、「ピンセット」とかで創の奥を搜る時なぞは、中には痛さうに玉の樣な涙をこぼすものがあるがね、見て居ると可哀想で、僕等には迚も御醫者さんは出來ないね。」

【敵の襲來】 折しも聞ゆる喇叭の響!

右舷氣を付け

それ敵襲と一同關を蹴つて、戰鬪配置に就いた。暗を透かして眺むれば、微に見ゆる一點の火光——。敵か、味方か、砲口は忽ち之に向けられて、寄らば擊たんと待ち構へた。夜間用雙眼鏡を取つて熟視すれば、丿乀として、波に漂ふ一隻の帆船! 咄! 戰鬪配置は解かれて、再び哨兵配置に復された。

* * * * * *

【重傷士官】 士官病室の「ベッド」の上に橫はれる一人の若き負傷者、頭より體に懸けて一面に卷かれたる白妙の繃帶には、紅の血潮にじみ、紅顏今は褪せて土の如く、眼を瞑りて、つく息さへも微である。眞白き診療衣に身を清めたる一名の軍醫は、絕えず脈を計りつゝ、愁ひの眉を寄せつ、開きつして居る。枕頭に集れる數名の士官は、息を潛めて軍醫の面と、傷者の顏を交み代りに見詰めて居る。夜は森と更け行きて、艦內復人語なく、唯聞ゆるは水を搔く「スクリュー」の音と、艦側を敲く波浪の響のみである。

軍醫はやがて絕望の眉を顰むると共に、握れる腕を靜に離し、聲を忍んで傍の士官に向ひ、

「愈だめぢや、今注射をするから、何か言ひ置くことがあるか聞き給へ」

と胸のあたりに藥を射すや、傷者は微に眼を開き、輕く唇を動かした。

○「△△! △△! 目が覺めたかい、僕だ僕だ、しつかりせいよ」

聲の通じてか、傷者は光なき眼を見張りつつ、

「○○か——戰爭はどうだ、敵はどうした?——君は無事か」

○「安心せ! 我が軍大勝利、少くも敵艦五六隻は擊沈した、どうだ痛むか」

△「ウム、少し——」

○「何か欲しいものはないか、外に誰も居ない僕ばかりだ、言ひたいことがあれば言つて置け!」

△「何も言ふことはない……が……母……」

傷者は何感じてか、蒼白の頰には俄に紅を潮して眼には最と力ある輝きを表した。併し其も唯一瞬間、再び眼を閉づると共に、斷然と、

「何にも言ふことはない」

言葉は絕えて、呼吸は次第に迫り、早や臨終が近づいた。やがて二三分經つて傷者は再び眼を開き、いと凜乎たる語調を以て、

「〇〇！　オレは死んでも、我が艦隊の武運を護つて居るよ、艦長はじめ、諸君に宜しく―」

息は遂に絕えて、忠魂空しく天に昇り、英靈呼べども復答へず、前途多望の好少尉は、心筑紫の沖の島、夕の嵐に散り果てた。並み居る人々は面を背けて暗涙を吞み、無心の電燈のみ靜に死者が蒼白の顏を照して居る。

△△少尉遂に絕命の報、一たび士官次室に傳へらるゝや、一方には菓子折の蓋に、

海軍少尉△△　△君靈位

と書かれたる位牌が室の中央に祭られると同時に、一方には遺族に送るべき見舞狀が認められた。

陣中忽卒

前略御免被下度候茲に御賢息△君戰死の悲報を御報道致すは次室一同の深く遺憾とする處にして悲痛傷心の至りに不堪候本日沖ノ島附近に於ける大激戰に於て△君は〇番砲を指揮せられ奮闘中午後二時五十分頃戰闘正に酣なるの際敵の一彈同砲臺に命中し△君は左足に負傷せられしも毫も屈せられず自ら繃帶を施し裝塡杖を杖ついて尙ほも指揮を繼續せられ之が爲め全砲員の士氣益々昂り負傷者も起き上りて戰闘に從事したる樣誠に勇壯の限りに有之候然るに不幸にも尋いで來りし敵彈の爲め△君は再び數箇所の重傷を負はれ其の場に打ち倒れられしも意氣更に衰へず息ある間は決して砲臺を去らずと申され候を強ひて治療所に運び申し種々手當を加へ候も何分重傷の事とて遂に午後九時三十分死すとも靈魂艦に留まつて皇軍を擁護せんとの一語を名殘として最と靜に永き眠に就かれ候日頃勇氣に富まれたる△君の事とて此の日の働き振は一しほ目覺ましく艦長はじめ一同の感歎措く能はざる所に有之候

思餘つて筆盡さず候へ共先は不取敢右御報旁御見舞申上度明日の運命も知られぬ我々の事に御座候へば若し幸に生殘者も有之候節は改めて委細申上べく候敬具

明治三十八年五月二十七日夜十時

日本海の沖合軍艦〇〇の彈丸に碎けたる士官次室に於て在室者一同自筆で連署した。

折柄艦内に響く低き力ある號令、

艦内二直哨兵右舷直哨兵交代用意！

オヤ早や當直交代だ、愚圖々々すると寢る間がない、明日は朝から戰闘だと、次直の士官は亡友の新しき位牌に一禮しつゝ、外套被つて上甲板に出で行けば、殘りは毛布纏うて「デッキ」の上に冷きゴロ寢！

十六　死榮生辱

二十八日の夜は明けた。曉風颯として征衣を

翻り、紅暾鮮に長波に映ず。旗艦「ニコライ」一世の艦橋上に立つて、後方を見【敵の旗艦】渡せば、已に續航せるものは、僅に戰艦「アリヨール」、裝甲海防艦「アプラクシン」、同「セニャーウヰン」、巡洋艦「イズムルード」の四艦のみとなり、其の他の軍艦は何處に行きしや、影だに見えない。昨朝三十八隻の大艦隊を將つて、堂々朝鮮海峽に殺到したる婆爾的艦隊も、あはれ一日の戰風に吹き捲くられて、今や主力として殘存するものは唯此の五隻のみ。ネボガトフ司令官は、此の光景を眺め、獨り憮然として長息すること多時、漸くに【孤影悄然浦鹽に向ふ】して心を激し、各艦に晝戰の準備を命じ、孤影悄然、浦鹽斯德に向ひ航進を續けた。水線になびく雲影にも、若しや敵かと心を傷め、煙突より昇る煤煙も濃きを憂ふる落武者の心の中こそ哀れである。

敵に先き驅けして其の進路を扼せんが爲め、【第一、第二戰隊】終夜北方に急航したる我が第一、第二戰隊は二十八日朝鬱陵島の南方約三十海里に達した。是の日天氣晴朗、碧空拭ふが如く、大氣清澄にして展望水線を極む。然るに午前五時に至るも四顧渺茫として煙翳さへも認めない。東郷司令長官は聊か憂慮を抱き、將に捜索陣を張つて索敵を始めんとする【第五戰隊敵を發見す】際、遇々後方に在る第五戰隊の旗艦嚴島より「東方に當り敵の戰艦二隻、海防艦二隻、巡洋艦一隻、北東方に向ひ航進しつつあり」との無線電信に接した。東郷司令長官は、是れ必ず敵の主力なるべしと推斷し、其の前路を遮らんが爲め、直に東方に向つて變針し、且つ第五戰隊等には、敵と觸接を保ち、時々敵情を報ずべきを命じた。是より先き第五戰隊は敵を發見するや、直に之を各方【第四、第六戰隊】面に電報しつゝ敵に向つて進み、第四、第六戰隊も、亦嚴島よりの警報に接するや、敵方に向つて航進した。斯くて午前九時に至るも、我が主力艦隊は尚ほ未だ敵を發見せざるを以て、東郷司令長官は第二戰隊をして速力を増し、急航して敵と觸接を執らしめ、尋いで同三十分頃に至り右舷前方に當り漸く敵艦隊を發見した。敵は敗餘の殘艦、我は乘勝の全艦隊、之を撃つこと鐵槌を以て鷄卵を潰すよりも、尚ほ容易である。併し【大敵を恐れず小敵を侮らず】窮鼠往々猫を咬むの譬あり、大敵を恐れず、小敵を侮らざる東郷大將は、敢て輕擧暴進せず、遠卷に取り圍んで、敵をして自滅せしむるの策を執つた。乃ち【敵艦隊を包圍す】第一、第二戰隊は北方より敵の前路を扼し、第五、第六戰隊は南方より敵の退路を絶ち、第四戰隊は西方より敵の側面を撃たんとして居る。やがて午前十時三十分敵の距離約八千米突に近づくに及び、第一、第二戰隊は先づ徐ろに砲火を開いて戰を挑んだ。敵は「ニコライ」一世を嚮導とし、「アリヨール」、「アプラクシン」、「セニャーウヰン」の順序に之に續き、「イズムルード」は旗艦の右側に在つて通信に從事し、自重して滿を持するものか、將た喪氣して闘志なきものか、返つて、默して應ぜざるのみならず、戰闘旗さへも掲げない。

是より先きネボガトフ少將は、優勢なる我が艦隊に包圍せらるゝや、旗艦「ニコライ」一世の艦橋上に佇立して、沈思默考、獨り思へらく、【敵司令官の決心】事茲に至る、天なり命なり、今や彈丸を盡して死戰するも、唯徒に部下の人命を損するに過ぎずして、戰爭の大局に於て何等利する所なし、縱令降將の汚名を

被るも、重罪の刑辟に處せらるゝも、如かず降伏の責を一身に負ひ、部下二千五百の生靈を助けんには、と。遂に意を決して、旗艦の檣頭高く降伏の信號を揭ぐると同時に、死を以て

【降旗敵艦の檣頭に揭げらる】守るべき軍艦旗は、我が砲火の下に卸された。戰鬪開始の令をば今や遲しと待ち受けたる後續諸艦は、旗艦の檣頭戰鬪旗の代りに降伏の信號揭げられたるを見て、中には憤怖悲憤、飽く迄戰鬪を主張する忠勇の士なきにあらざりしも、乘員の大多數は、孤影悄々たる自國艦隊の慘狀と、威容堂々、一絲亂れざる我が艦隊の雄姿とを睨め、絶望の極、心喪ひ、氣沮み、各艦、旗艦に盲從して降伏の信號を揭げ、

秋山中佐

獨り「イズムルード」のみは、其の快速力を恃みて、森然東方に向つて逸走した。

我が艦隊は敵の應戰せざるを見て、稍怪訝の念に驅らるゝうち、一連の信號旗、忽然ニコライ一世の橋頭に揭げられたるを認めた。雙眼鏡を取つて熟視すれば、何ぞ圖らん、降服を乞ふとの信號！ 東鄕司令長官は直に之を容れ、敵に停止を命ずると共に、我が各艦をして砲撃を中止せしめた。

【天を震はす萬歳の聲】萬歳――帝國萬歳の歡聲は、艦より艦に傳りて、風なき海にも波沸かんばかりである。處は竹島の南西約十八海里、晩春の麗かなる陽光は、深碧の波を照して、金紋を散らし、硝煙に煤りたる旭日の軍艦旗は戰勝を誇り氣に桁端に閃いて居る。

東鄕大將は我が各戰隊をして、降伏艦隊を包

【秋山參謀の敵旗艦に向ふ】圍せしめ、受降の爲め、參謀秋山中佐を敵の旗艦に派遣した。秋山參謀は三笠分隊長山本大尉(信次郎)と共に水雷艇雉に乘じて「ニコライ」一世に向ひ、行々降伏艦隊の狀態を視察せしに、何れも艦體著しく消損し、殊に「アリヨール」の如きは我が砲彈の爲め、大損害を被り、一見頗る悽慘の狀を呈し、

再び戦闘に堪へ得べしとも思はれない。やがて「ニコライ」一世に着するや、ネボ

【ネボガトフ司令官】

ガトフ司令官は長日月の遠航と、敗戦の憂慮との為め、顔色憔悴、意気銷沈し、戦塵に塗れたる軍服の儘、出でゝ慇懃に我を迎へた。

席定り、初対面の挨拶終るや、秋山参謀はネボガトフ司令官に向ひ、

東郷大将は貴下と共に、爰に惨烈なる戦闘の終りを告げたるを慶し、貴艦隊の名誉を尊重する為め、貴下等をして其の儘帯剣せしめんと欲す、且つ大将は降服委細の條件を協定せんが為め、速に貴下の我が三笠に来艦あらんことを希望せり、又既に降服の上は、貴艦隊の艦船、兵器等は一切現状を維持すべきことを、直に麾下に厳達せられたし、若し故意に之を毀損するものあるときは、我が軍律を以て処分すべし、

との旨を以てし、山本大尉之を佛語に訳して、ネボガトフ少将に傳へた。同少将は、最と沈痛の調を以て、前日来の戦は常に利あらず、今や力竭きて降を貴軍の旗下に乞ふの已むを得ざるに至る、貴軍の命ずる所、惟れ從

【惟れ命惟れ從はんのみ】

はんのみと答へ、且つ此の意志を各艦に傳ふる為め、暫時の猶豫を與へられんことを請うた。

斯くて約三十分の後、同少将は金線燦たる禮服を着し、幕僚と共に上甲板に出で来り、総員を集め告げて曰く、

【ネボガトフ司令官の訓示】

烏拉爾の山高しと雖も、時来れば崩るゝことあり、黒海の水深しと雖も、時来れば乾することもある。天地の事物、悉く天意の命ずる所に従はねばならぬ。戦の勝敗は兵家の常とする所にして、時利あらざれば、ピーターも破れ、ナポレオンも亡ぶ。昨日来の戦闘、諸子の勇気乏しきにあらず、諸子の奮闘足らざるにあらず、而も戦敗れて、事茲に至る。是れ天命である、神慮である。見よ、彼の勝ち誇れる敵艦隊を。見よ此の哀なる我が艦隊を、縦令此の上、最後の血の一滴迄も奮戦するも、勝敗の決する所既に明である、昨日来我等が兄弟の戦場の露と消えしもの、其の数實に幾千ぞや。予はこの上更に、予等二千五百の勇士をして、空しく日本海底の鬼たらしむるに忍びない。予や既に頽齢、餘命素より惜むに足らず、唯惜む所は偏に諸子の身上に在り。諸子は尚ほ春秋に富む、須らく恥を忍んで、将来祖國の為に盡す所あるべし、今一時の悲憤に激して空しく死歿せんか、誰か能く露國将来の海軍を復興するものぞ、加之も諸子の身後に残る数千の孤兒は、誰か能く之を撫育するものぞ。是れ砲を背け旗を卸して敵に降れる所以である、降服の責は、予之を一身に負はんのみ、

と。言々悲痛、聴くもの聲なく、語る人涙がある。

訓示終るや、ネボガトフ少将は幕僚一同を率ゐ、秋山参謀に伴はれ、我が水雷艇に乗じて

【ネボガトフ少将三笠に来る】

午後一時三十分三笠に来艦した。東郷司令長官は之を将官室に延き、卓を隔てゝ相対坐し、彼我幕僚其の左右に居並び、八代浅間艦長の露語通譯に依りて、左の降服條件を協定した。

【降服條約】

一、降服各艦の士官以上は帯劍並に其の私有金品を保有し下士以下は其の私有金品を受取り得ること

二、降服各艦の艦船、兵器、物品は故意に毀傷することなく其の儘引渡すこと

戰艦「ニコライ」一世と
露國第三艦隊司令官海軍少將「ネボガトフ」

三、東郷大將はネボガトフ少將をして露國皇帝に戰況を報告するの認許を得しむることに付き盡力すること

四、東郷大將は降服士官以上をして宣誓歸國するの認許を得しむることに付き盡力すること

【受降の式終る】右終りて東郷司令長官は正式に敵の降伏を受け、爰に「ニコライ」一世以下四隻の軍艦は我が軍の有に歸し、其の乘員は我が軍の俘虜となつた。東郷司令長官は嚴然として、ネボガトフ少將以下に對し、爾後我が軍令に服從すべきを命じ、更に辭を改め、個人の資格を以て互に杯を擧げ、悲慘なる戰鬪の終結したるを祝した。

【彼我兩將の心事】此方は敵の全艦隊を屠つて餘勇鬱勃たる戰勝の將軍、彼方は、戰敗れ、力屈して降服せる敗餘の將軍、酌む三鞭の酒は同じきも、飲む味は如何に異るであらう？　斯くて兩提督は二三の談話を交換したる後、ネボガトフ少將は幕僚と共に、一先づ三笠を退艦して元の旗艦「ニコライ」一世に歸つた。

【降服艦の捕獲】是に於て東郷大將は直に降服艦捕獲の部署を定め、乃ち第一戰隊をして「ニコライ」

一世」及び「アリヨール」を第二戰隊をして「アプラクシン」及び「セニヤーウヰン」を、夫々捕獲せしめ、又第五、第六戰隊をして朝鮮海峽に歸り、敵敗竄艦の南逃に備へしめた。

【「イズムルード」遂に逃逸す】

是より先き「イズムルード」の遁走するや、第六戰隊及び偶來會したる千歲は、直に之が追擊に向ひしも、速力及ばずして遂に之を北方に逸した。

第一、第二戰隊の各艦は、命に依り直に捕獲員を選出し、降服艦の授受並に回航の準備に着手した。俘虜將卒は或は我が命令を遵守して、艦船兵器の現狀を維持したるものなきにしもあらざりしも、中には我が捕獲員の乘艦に先だち、亂暴狼藉を恣にし、兵器の如きは自ら之を破壞毀損したるものも尠くない。殊に下士以下の軍紀風紀に至りては、其の弛廢紊亂せること言語に絕し、筆にするだに耐へぬものがあつた。素より主將にして既に敵に降る、下士以下の暴戾を制止することの出來ぬは當然である。されど鷺は立つとも後を濁さずと云ふこともある。もしや、るならば潔く死を期して艦を爆沈すべしで

【婦女子の小黠】

ある。然るを何ぞや、唯孤鼠々々と婦女子の小黠を弄するが如きは、洵に露兵の爲に取らぬところである。

【追擊中止】

昨日來の戰鬪に於て我が艦隊は、敵艦隊の大部をば擊滅若くは捕獲して大捷を博せしも、尙ほ動靜不明の敵艦も少くない。勇氣絕倫なる東鄕大將は、一晝夜以上に亙る大戰にも心身毫も衰へず、更に殘敵に對して追擊を續行せんと欲せしも、降伏艦の捕獲に多時を要したるが爲め、今や敵を追及することの難きのみならず、天候漸く異變の兆を呈し、且つ捕獲艦には多數の俘虜殘留し、其の船體機關の狀態も亦不明なるを以て、單獨回航の危險なるを慮り、追擊を斷念し、捕獲艦を警衞して佐世保に向ひ回航することに決定した。

【「ウシヤーコフ」及「ドンスコイ」を發見す】

偶南方に當り、敵海防艦「ウシヤーコフ」の單獨北上し來るを發見し、島村司令官をして磐手、八雲の二艦を率ゐて之が警戒に向はしめ、尋いで又西方に當り、敵裝甲巡洋艦「ドンスコイ」の北走するを知り、第四戰隊、第二驅逐隊及び淺間をして之に向はしめ、親ら其餘の艦艇を率ゐて捕獲艦四隻を護衞し、薄暮航を起して佐世保に向つた。而して獨り「アリヨール」のみは途中屢故障を生じ、且つ損害大にして浸水の虞ありたるを以て、別れて最近軍港たる舞鶴に向はしめ、各艦何れも五月三十日無事目的港に到着した。

【捕獲艦軍港に着す】

回航中、俘虜將卒は極めて平穩にして、心中竊に生を得たるを歡ぶものの如く、同僚中聊にても、不穩の形跡あるものあれば、直に我が回航員に密告する等、昨日の敵は忽ちにして我が忠良の民と豹變した。

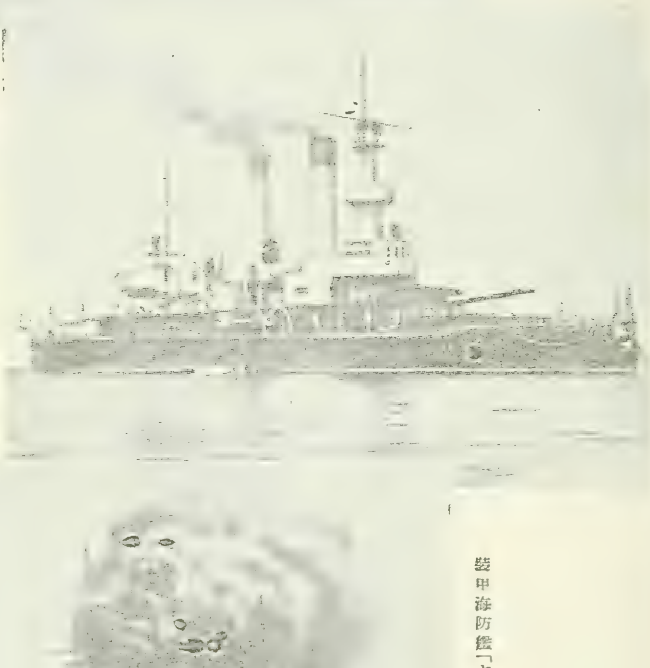
【降服議】

抑もネボガトフ司令官の降伏たる、情に於ては誠に同情の至りである。盡すべきを未だ盡さずして敵に降ることの責の重きは、ネボガトフ司令官よも之を知らぬ筈はない。而も鼎鑊刀鋸尙ほ辭せずして責を一身に負ひ、部下二千五百の人命を救ひたるは、單に之を人道の上より見れば、或は賞讚に値するものがあるであらう。素より敗餘の殘艦を將つて我が新勝の精鋭に對す、戰はずして勝敗の數は既に明である。然りと雖も

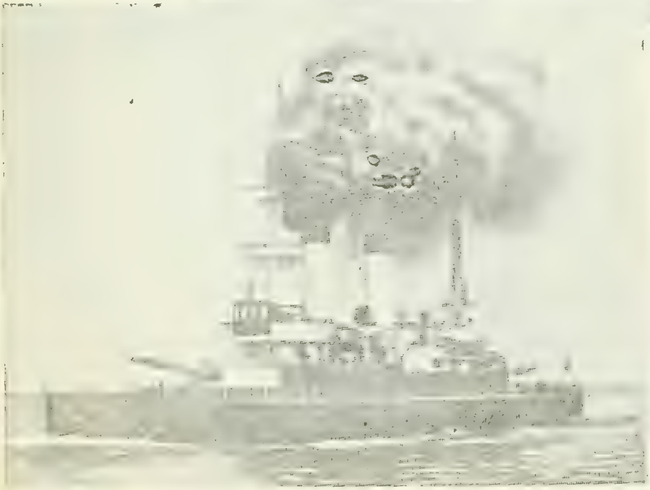
【兵戰の要訣】

兵戰の要訣は、我が損害を成るべく小にして、敵に成るべく多大の損害を與ふるにある。故に縱令敵の一兵を殺し、一砲を傷つくるも、尙ほ之を殺傷せざるに優るのである。

戰艦「アリヨール」



裝甲海防艦「アプラクシン」



裝甲海防艦「セニャーウヰン」

更に又、我が損害大にして全滅の不幸を見るも、敵に艦船兵器を授くるよりは優しである。ネボガトフ司令官の率ゐる五隻の軍艦微力なりと雖も、尚ほ數十門の備砲を有す、若し力を協せて、決死奮戰するに於ては、我が損害亦決して一兵一艦のみにあらざるべく、ネボガトフ艦隊縱令全滅するも、豈應に空しく轍車に碎かるゝ蟷螂の類ならんやである。然るに啻に戰はざるのみならず、艦船兵器を擧げて之を己の敵に附す。之を戰術上より見れば、愚の至りにして、國家より見れば、許すべからざる大罪人である。過ぎし日清戰爭の際、清國水師提督丁汝昌は、

【清國水師提督丁汝昌】

戰敗れて復た運すべきなきに至るや、己が部下將卒の生命を救はんが爲め、其の率ゐる所の鎭遠、濟遠、平遠、廣丙以下の艦艇を我が軍に捧げ、己は毒を仰いで自殺した。爾來風雨幾歳月、枯骨空しく朽つるも、清國朝廷は今日未だ彼の葬儀を許さない。丁汝昌たるもの、或は我が國の爲めには恩人かも知れぬ、併し清國の爲めには許すべからざる罪人である。其の責や到底一死や十死で、償ふことの出來るものでない。故に古の兵法にも、

夫れ將、千人より以上にして、戰うて北げ、守つて降り、地を離れて衆を遁るゝとあらば、命じて國賊と曰ひ、身は戮せられ、家は殘はれ、其の籍を去て、其の墳墓を發き、其の骨を市に曝し、男女は收めて官の奴隷とす、

とある。降伏の罪の大なる推して知るべきである。

ネボガトフ司令官の麾下に屬する二千五百人の人命、素より貴からざるにあらず、而も

【國家が將帥に部下を與ふる所以】

國家が將帥に部下を與ふる所以のものは、之を以て國敵を撃滅せよと云ふに在りて、國家の威信と名譽とを損じてまでも、其の生命を尊重せよと云ふのではない。軍人戰に臨む、營を出づる時、國家は既に之に對して死を要求して居るのである。故に敵を破る爲めには、縱令部下を全滅せしむるも構はないのである。國威を保持する爲めには、縱令部下を死地に投ずるも構はないのである。近き一例を擧ぐれば、彼の浦鹽艦隊の爲めに、永世不盡の恨を呑んで玄海の波に

【常陸丸の實例】

沈みし、我が陸軍運送船常陸丸の場合に於て、其の乘員は縱令敵に趨つて降を乞ふも、軍律は恐らく之を恕するであらう。而も聯隊長須知中佐以下一千有餘の我が將卒は、毅然として敵に降るを肯ぜず、或は軍旗を燒きて從容死に就き、或は銃を執つて敢然敵に抗し、遂に一人の降伏者さへなかつた。縱令蚊螯の害をだに敵に與ふるに足らずと雖も、而も之が爲め我が國民の敵愾心を新たにし、我が軍隊の士氣を鼓舞したること幾何であつたらうぞ。

されど又翻つて思へば、人間は意志のものである。心機一轉すれば、盜兒も時に惻隱の君子となり、勇士も時に驚風の懦夫と變ず。

【戰場に於ける人間の心的作用】

殊に戰場に於ける人間の心的作用に至りては、座上の常識を以て之を律することの出來ぬものがある。疲勞困憊の際、俄に優越なる敵軍に包圍せられたる時の如きは、非凡の士と雖も、心意驚倒して往々常軌を逸するの行動に出づることがある。彼の大那翁でさへ、露都モスコーに敗れたる時などは、平常に似合はぬ見苦しい逃げ方をしたのであつた。故に吾人は決してネ

【ネボガトフ少將の心事】

ボガトフ少將の心意の皓潔を疑ふものでな

い。彼の降伏を決行したるは、自己の安きを欲しての爲めにあらざるは明である。唯彼が部下を愛することの厚き熱情は、勢ひ彼をして此に至らしめたのであらう。其の「ニコライ」一世の乘員に與へたる訓示の如き、祖國を思ひ、部下を思ふの至情、人の腸を斷たしむるものがある。

【降服は軍人の罪科】

吾人の茲に同少將の降伏を論じたる所以のものは、降伏なるものの、軍人として最も大なる罪科たると共に、其の國家に對する責任は、己一人の死を以て、到底償ふに足らざるを陳ぶるに過ぎぬのである。

降伏に關聯して尙ほ茲に一言せんと欲するは俘虜問題である。

【死榮生辱は武士の信條】

夫れ死の榮あつて生の辱なしとは、古來我が邦武士の信條にして、日本魂も武士道も其の淵源する所は、一に此の精神に外ならぬのである。然るに今日西洋かぶれのハイカラ者流の、往々之を以て、人生の意義を解せざる野蠻の遺風なりと唱ふるものがある。縱令人生の意義を解せざるにもせよ、又野蠻の遺風なるにもせよ、餘人はいざ知らず、尠くも軍人に於てのみは、此の精神こそ絕對に必要なるものである。若し戰場に於ける軍人にして死の苦を厭うて生の樂を欲するに至らば、國家の前途は想像するに難からずである。

【名譽の降服名譽の俘虜】

吾人は戰役中、屢〻新聞其の他に於て、名譽の降伏、名譽の俘虜なる文字を見て、頗る異樣の感がした。凡そ降伏なるものに名譽があるであらうか、俘虜なるものに名譽があるであらうか。若し果して之れ有りとすれば、吾人軍人の責任は大に輕減せられたるものと言はねばならぬ。刀折れ、矢盡き、爲すべきを爲し盡したる後、已むを得ずして敵に捕はるゝは、是れ決して犯罪にはあらざるも、未だ之を以て名譽とすることは出來ない。唯其の勇敢なる行爲、顯著なる勳功が遇以て俘虜となりたるの恥辱を償ふに足る丈である。斯かる場合に於ても、いゝどちらかと云へば、寧ろ戰死した方が、より多く名譽である。

【壯烈なる陸軍將校】

遼陽の戰に於て我が某聯隊の突擊功を奏せず、一先づ陣地に向つて退却の際、一人の將校は敵彈に傷ついて動くことが出來なくなつた。敵の追擊は急である。吶喊の聲、靴の響は刻々近づいて來る。

此の時彼の將校は思へらく、生きて俘虜の辱めを受けんよりは寧ろ潔く死するに如かずと。奮然意を決して、軍刀逆手に我と我が腹を割り、更に喉に衝き立てた。手元狂ひしか、傷淺かりしか、未だ死に切れない。敵は益〻近づいて早や眼前に迫つて來た。是ではならぬと、更に力を籠めて二突き又三突き、無我夢中に突き立てた。されど傷手に弱りて腕に力なく、遂に刀を持つことさへ出來ず、今は是迄と其の場に打ち倒れて敵の爲す儘に任した。やがて數名の敵兵は彼が身邊に集り來り、喃々喋々頻に何事をか話して居る。今に銃劍一閃胸を刺すか、腹を衝くかと、眼を閉ぢて徐かに運命を待つうち、何時しか人事不省に陷つた。其の後幾時間をか經過して不圖我に返れば、身は擔架に載せられて、何處にか運ばれて居る。夜は深くして星影密に、銃聲砲音尙ほ遠近に轟いて居る。救はれしは敵か、味方か、問はんと欲すれども、聲出でず、見れば傷には丁寧に繃帶を施され、擔架の横には軍刀迄も添へてある。斯くて行くこと數百步、擔架は靜かに地上に卸されて、擔架卒は忽ち何れにか去つて仕舞つた。

傷の痛みに苦しむこと數時間、やがて天明となるや、彼は我が軍の歩哨線外に運ばれて居ることを知つた。此の將校の如きは或は所謂人生の意義に背くかも知れない。而も其の壯烈なる意氣は、敵の心膽をして寒からしめたであらう。【所謂神兵たる感ぜしむ】尚ほ聞くが如くんば、旅順口第三回閉塞隊の勇士中には、乘船爆沈の後、敵艦に斬り込んだものもあつたとのことである。【閉塞隊員の壯擧】或は之を以て無謀の擧と爲すものあらんも、元來戰場に於て尊ぶ所のものは、理窟にあらずして意氣である。一人の勇氣は時に敵三軍の氣を奪ふことがある。蓋し戰死は軍人の最大名譽である。【戰死は軍人の最大名譽】身に創傷を被り、人事不省の間に敵に收容せられたるもの、或は艦船沈沒して、海上に漂流中、敵に救助せられたるものの如きは、之を別とし、苟くも身體の自由を有するものにして、敵の俘虜となるは、是れ軍人として大なる恥辱と云はねばならぬ。其の情の如何に拘はらず之に名譽なる冠詞を付することは出來ない。卽ち名譽の降伏、名譽の俘虜なる言葉は、恰も名譽の恥辱と稱すると同樣である。權利と義務で固めた西洋に於ては、いざ知らず、日本魂と武士道とを以て誇りとする我が國に於ては名譽の俘虜なるものは存在せぬのである。然るを近來所謂名譽の俘虜使用の結果、漸く俘【俘虜の恥辱】虜自身の際に於ても、我が國民中往々にして俘虜の恥づべきを忘れんとして居るものがある。我が或る陸軍將校は慨然として語るらく、

我等の郷里は幸か不幸か、戰爭ある每に俘虜收容地たるの光榮を有した。二十七八年戰役に於ても、又今回の戰役に於ても、特に第一に俘虜の珍客を迎へたるものは我等の地方である。而して時世の變遷に依りて然るか、或は敵の人種に依りて然るかは知らねど、前回の俘虜と、今回の俘虜とは、其の待遇の上に於て雲泥の相違があつた。二十七八年戰役に於ける清國の俘虜は、之を市外の寺院に閉居せしめ、兵士は素より將校と雖も、遂に一回の自由散歩さへ許されなかつた。當時我等は未だ十七八歲の少年に過ぎず、時々市外より彼等の宿舍を窺うては、其の不遇なる境遇を目擊し、心中深く俘虜の恥辱たるを感じ、死すとも俘虜となるべからずとの觀念が起つた。然るに今回の戰役に於ける露國俘虜に至りては、【俘虜の厚顏】我が待遇の寬なるに依るか、將た俘虜の鐵面皮なるに依るか、將校の如きは、青衣紅帽、美服を纏うて傲然狹き大道を濶步し、或は白晝妓樓に登つて豪遊を極め、或は家を圍うて自由居住を爲し、或は妻子を招いて同棲し、人をして俘虜か、外賓かを疑はしむるばかりであつた。利の爲めには、恥を顧るも何ほ厭はざる商人輩は、【商賈の醜態】金離れ好き俘虜を以て最上の華客となし、同胞の顧客に對しては、冷々淡々として殆ど顧みず、市內屈指の街路は、店頭を飾るに俘虜の嗜好に投ずる物品を以てせられ、爲めに俘虜町若くは「ロスケ通り」の異名さへ生じた、【俘虜に媚ぶる市民】斯くて俘虜は揚々市民は唯々、車夫は俘虜を乘せんことを希ひ、酒樓は拒妓は俘虜に聘せらるゝを歡び、酒樓は拒んで日本軍人を容らせず、鐵道會社は特別列車を仕立てて俘虜の遊覽に供し、市民は能樂、演藝を催して俘虜の無聊を慰む、博愛仁慈も此に至りて亦極まれりと云

【其でも戰勝國の人間か】

ふべしである、貧家の小兒は俘虜の後方より尾續し、彼等が投け與ふる一錢二錢を爭ひ拾ふの狀、戰捷國の價値が何處にある、唐辛子も常に之を口にすれば、其の辛きを忘る、俘虜大明神熱に浮かされたる市民は、之を以て天晴れ文明國の態度となし、大國民の襟度と心得、見て怪まず、聞いて驚かざるも、適々戰地より歸りて之を視れば、顰眉側目、憤慨に堪へぬものがある、

【俘虜の恥づべきを忘る】

斯の如くにして人は漸く俘虜の賤むべく、俘虜の恥づべきを打ち忘れ、却つて俘虜の尊く、俘虜の有難きを拜するに至つた、而も俘虜の消費したる數十萬の金錢は、大部分開港地より入り込みたる、所謂俘虜商人なる者の囊中に奪ひ去られ、我等の郷里の獲たる所のものは、唯惟れ浮華の惡風のみである。淫靡の醜俗のみである、と侃々として陳べ來り、諤々として陳べ去り、語る者悲憤の腕を扼すれば、聞く者慷慨の拳を固めた。我が友更に語を繼ぎて曰く、

【俘虜の學校參觀】

殊に其の意を解せざるは、俘虜に我が神聖なる學校を參觀せしめた事である、中學校、師範學校の生徒に至りては、既に多少事理を辨別するの能力がある、純潔神の如き小學校、幼稚園の生徒に至りては、美しき軍服を纏ひて、意氣揚々たる俘虜を見て、果して如何なる感動を起したであらうか、俘虜の參觀終りたる後、教師は生徒に向つて果して何と教訓したであらう？必ずや軍人として俘虜の恥づべく、賤むべきを說いたであらう、而も生徒は、目前に己が最も敬信する校長、教師の懇懃なる接待を受くる俘虜を見て、心中果して教師の教を信じたであらうか、俘虜を利用して我が教育制度の發達を世界に紹介せんと欲するが如きは、根を剪んで肥料を與ふるよりも尚ほ愚なる策である、嗚呼!!

友の忠忿烈しく、面は熱して、眼は若年の如く輝いた。

而して斯の如きは、是れ獨り我が友の郷里のみならず、俘虜將校を收容せし地方殆ど皆

【俘虜優遇可なり俘虜歡待亦可なり】

然らざるなしといふことである。俘虜優遇誠に可なり、俘虜歡待亦大に可なり。日本俘虜の露國に於ける薄遇の如きは、敢て問ふを要せず、既に敵國に囚虜の身と成る、多少の不自由、缺乏は、是れ當然である。唯憂ふべきは、斯かる地方に成長したる少年の、俘虜に對して果して如何なる觀念を有するかである。未來の國民にして、既に俘虜を以て恥辱ならずと思惟するに至れば、

【結果は知るに足る】

軍隊の教育如何に優良にして、軍律如何に森嚴なるも、實戰の結果は、誠に寒心の至りである。抑も俘虜の待遇法に關しては、國際法上一定の規約ありて、猥に虐待、凌辱を許さない。併し決して國民性を害して迄も、之を優遇せよとは要求して居ないのである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

【我が皇の聖恩】

ネボガトフ少將降伏の報我が大本營に達するや、聖恩海の如き我が大元帥陛下は、ネボガトフ少將をして戰況を露國皇帝に奏報すること、並に降伏士官は再び本戰役に從事せずとの宣誓の上、歸國することを御裁可あらせられた。是に於てネボガトフ少將以下我が陛下の寬仁に感泣し、同少將

【ネボガトフ少將の宣誓文】

は直に露國皇帝に向ひ、次の如き電報を發した。

聖彼得堡
皇帝陛下

謹んで奏す。前夜の激戰の後、五月十五日(二十八日)戰艦「ニコライ」一世、「セニャーウヰン」、「アプラクシン」、「アリヨール」及び巡洋艦「イズムルード」は、浦鹽斯德に向け進航の途次、二十七隻の日本軍艦(水雷艇を算入せず)の爲に包圍せられたり。彈丸の缺乏、大砲の破損、及び「アリヨール」の戰鬪力喪失の爲に、敵艦隊に抵抗を試むるは、絶對に不可能なる狀態に在り、且此の上二千四百の人命を失ふは、無益なるのみならず、亦他に避くべきの途なかりしを以て、高速力を利用して逃走したる「イズムルード」を除くの外、他の四隻は、士官以上の帶劍を許し、且士官以上は宣誓の上本國に歸還するを得る樣、日本政府に對し盡力すべしとの條件を以て降伏するの已むを得ざるに至れり。而して右條件は日本皇帝陛下の寛大なる聖意に依り御承認を得たり。臣は右に就きて陛下の御聖鑒を仰ぐ。

ネボガトフ

古來尙武を以て國を建つる露西亞帝國、ネボガトフ少將降伏の報に接するや、上下の憤懣大方ならず、皇帝陛下亦逆鱗あらせられ、**【露國皇帝の逆鱗】** 遂に同少將等の宣誓歸國を許されず、ネボガトフ少將以下は已むを得ず俘虜として我が國に殘留することとなつた。而して平和克復後本國に歸るに及び、同少將並に「ニコライ」一世、「アプラクシン」、「セニャーウヰン」の艦長(「アリヨール」艦長は重傷の爲め降伏の翌日死亡せり)は、其の官職を褫奪せられ、且つ宣誓の義務を盡さず、軍人の名譽を汚損し、未だ戰鬪を交へずして敵に軍艦を交附したるものとして、何れも軍法會議に附せられた。審問の結果ネボガトフ及び元三艦長は死刑の宣告を受けしも、**【「ネボガトフ」以下の處刑】** 皇帝陛下の仁慈により、旅順の降將ステッセル等と共に特赦せられて、何れも十年の要塞禁錮に處せられた。昨日は一軍一艦の長として世人の尊敬を受けし身の、今日は鐵窓光暗き獄裏の罪囚となる、軍人の運命も亦果なきものである。

我が海軍刑法に曰く、

指揮官其の盡すべき所を盡さずして敵に降り又は其の艦船若くは兵器を敵に交附したるときは死刑に處す。

十八　韓盧塞兎を捕つ

整陣は攻むべし、亂軍は襲ふべし、潰兵は擒にすべし。我が聯合艦隊は二十七日午後に於ける正攻に依り、敵の精鋭「スウォーロフ」、「アレクサンドル」三世、「ボロヂノ」、「オスラービヤ」及び特務艦數隻を擊沈して、敵軍を混亂せしめ、尋いで同夜の水雷奇襲に依り、「シソイ、ウェリーキー」、「ナワリン」、「ナヒーモフ」、「モノマーフ」の四艦を擊滅し、敵をして愈〻潰敗に陷らしめ、更に翌二十八日の追擊戰に於て、「ニコライ」一世、「アリヨール」、「アプラクシン」、「セニャーウヰン」を捕獲し、爰に理想的戰果を收むることを得た。**【理想的戰果】** 併し大魚を網するには細鱗の漏るゝを免れず。我が艦隊が專ら敵主力に對して作動せる間に、敵巡洋艦以下は、支離滅裂、各方面に向つて逃走を圖つた。而も塒を急ぐ鳥は網を見ず、餌を貪る獸は穽を覺らず、

一意浦鹽斯德に逃れんと急ぐ敵は、自ら來つて我が艦隊の哨線に投ずるものも尠くなかつた。

【飛んで火に入る夏の蟲】 飛んで火に入る夏の蟲、我が軍艦は恰も韓盧の塞兎を搏つが如く、追擊、邀擊、隨處に之を擊滅し、合戰の數實に七個處に及んだ。

* * * * * *

【驅逐艦「ベヅウプリヨーチヌイ」の擊沈】 前夜油谷灣を發したる出羽第三戰隊司令官の旗艦千歳は、我が主力艦隊に合せんが爲め、鬱陵島に向つて急航中、二十八日黎明の頃、前方に當り、敵驅逐艦一隻の北航せるを發見し、直に之を追躡して砲擊を開始した。敵は極力逃遁を努めしも、遂に我が爲めに追及せられ、多數の彈丸を被りて、忽ち操舵の自由を失するに至つた。

偶我が驅逐艦有明も亦砲聲を尋ねて來り會し、戰鬪に參與せしが爲め、敵は遂に戰鬪航海の力を失ひ、且つ浸水の爲め、船體次第に沈降するに至つた。是に於て我は敵の到底遠距離迄逃走するの力なく、且つ早晩沈沒すべきを認め、砲擊を中止して再び北方に急いだ。

此の驅逐艦は「ベヅウプリヨーチヌイ」にして後遂に沈沒したるものの如く、乘員は

【乘員全滅】 悉く艦と運命を同じうし、其の最後の狀況は、永久に海底に葬られて仕舞つた。

* * * * *

我が第四戰隊は二十八日天明、第五戰隊より、東方に敵艦隊を發見せりとの報に接し、將に之に向はんとする際、偶西方に方り、假裝巡洋艦らしき敵影を認めたるを以て、瓜生第四戰隊司令官は、第三戰隊より臨時麾下に

【音羽、新高】 屬したる音羽、新高の二艦をして、之が擊滅に向はしめた。兩艦は直に速力を增して、之に向ひたるに、敵は巡洋艦「スウェ

【巡洋艦「スウェトラーナ」の擊沈】 トラーナ」及び驅逐艦一隻なるを知り、益之を急追し、午前九時三十分頃距離約九千米突に近づき、互に砲戰を開始した。敵は黑煙を海上に漲らしつゝ、全速力を以て、西方に向ひ逸走せんとせしが、幾もなく我が一彈「スウェトラーナ」の艦尾に命中爆發するや、敵は汽機を損じたるものの如く、爾後速力大に衰へ、十時三十分頃には距離は減じて六千米突となつた。此の時戰鬪愈熾にして、我が彈丸の敵艦に命中するもの頗る多く、敵は頻に火災を起し、煙焰全く艦を包むに至つた。然れども彼れ尙ほ毫

【敵艦の奮戰】 も屈せず、益勇敢に應戰し、音羽の艦橋に命中したる一彈の如きは、乘組宮崎少尉(敬次郎)の頭蓋を碎き、一等兵曹日野仙三郎の胸部を貫きて、共に即死せしめ、四等水兵植田顯次及び給仕宮澤勇三郎を重傷死に至らしめ、野村少主計(國二郎)外下士卒十八名に輕傷を負はしめ、其の船體に多大の損害を被らしめた。

已にして同四十分頃に至るや、敵の砲火は次第に衰へ、且つ操縱の自由を失ひたるものの如く、艦は全く同一地點を旋轉するに至つた。此の時敵の驅逐艦は「スウェトラーナ」に別れ、單獨西北方に遁逃せんとしたるを以て、新高は遇來會したる我が驅逐艦叢雲と共に、直に之が追擊に轉じ、音羽は尙ほも「スウェトラーナ」に迫り、遂に距離一千米突に近づきて益猛烈なる砲擊を加へた。敵は既に戰鬪力を失ひたるものの如く、砲火は殆ど絕えて、唯空しく我が砲擊に委して居る。艦上に碎くる我が大小の彈丸は、雨の如く、霰の如く、船體を破壞し、甲板を燒燬し、

防護巡洋艦「スウエトラーナ」

乘員は刻々死傷して、肉は飛び、血は漂ひ、猛火艦を掩うて、光景凄烈を極めて居る、

【頑として降旗を掲げず】 而も敵は猶ほ頑として降旗を掲げず、艦と運命を共にせんと決心して居る。敵の艦長セーミ大佐は最後の彈丸の一發を發射し終るや、今や我が事終れりと爲し、乘員救助の準備を爲すと共に、艦の爆沈を命じた。然るに此の時浸水既に火藥庫に滿ちて、爆藥を得ること能はず、已むを得ず、海水弇を開放して沈沒を早めんとした。斯かる間にも我が彈丸の命中するもの愈々多く、艦長、副長共に戰死し、其の他將卒の死傷するもの數ふべからず、累々たる伏屍は猛火に燒かれ、傷者の苦呻は腸を斷つばかり、乘員の多くは遂に自ら海中に投ずるに至つた。斯くて十時五十分頃、艦は浸水の爲め漸次傾斜して沈沒に垂んとするに至りたるを以て、諸砲は射擊を中止し、敵兵の救助を偶來會したる假裝巡洋艦亞米利加丸に託し、前方に現れたる煤煙を追うて急航した。而して勇敢なる敵艦「スウェトラーナ」は十一時過ぎに朝鮮竹邊灣の東方約十海里の處に沈沒し、乘員四百六十名中、生殘者約三百名は亞米利加丸に救助せられた。

【驅逐艦「ブイスツルイ」の擊沈】 又曩に「スウェトラーナ」と別れ、單獨西方に逃走したる敵驅逐艦は「ブイスツルイ」にして、我が新高及び叢雲に追擊せらるゝや、到底脱走の見込なきを認め、遂に朝鮮竹邊灣の北方數海里なる海岸に到りて、自ら擱岸破壞し、其の乘員は悉く陸上に逃れしも、尋いで我が端艇員に降伏した。

* * * * *

【驅逐艦「グロームキー」の擊沈】 第五驅逐隊の不知火は、二十八日午前八時三十分頃、對馬の東岸に於て、敵の裝甲巡洋艦「モノマーフ」及び驅逐艦「グロームキー」の漂航せるを發見し、直に之に向ひしに、「モノマーフ」は前夜の我が水雷攻擊に傷つき、沈沒に瀕したるが爲め、直に軍艦旗を下して降意を表せしも、「グロームキー」は忽ち全速力を以て北方に逃走した。是に

【驅逐艦不知火】 於て不知火は「モノマーフ」の處分をば附近に在りし我が假裝巡洋艦に讓り、自ら「グロームキー」の追擊に向つた。然るに不知火は昨日の戰鬪に於て、一汽罐を破られたるが爲め、速力大に減退し、追躡三時間に及びしも容易に敵に追及すること能はず、十一時二十分頃には既に朝鮮蔚山の沖合に達し、動もすれば敵を逸せんとした。偶我が第二

【第六十三號】 十艇隊の第六十三號艇は此の時東方より來り、敵の前方に現れしが爲め、敵は進退茲に谷まりて、健氣にも決戰を期し、忽ち艦

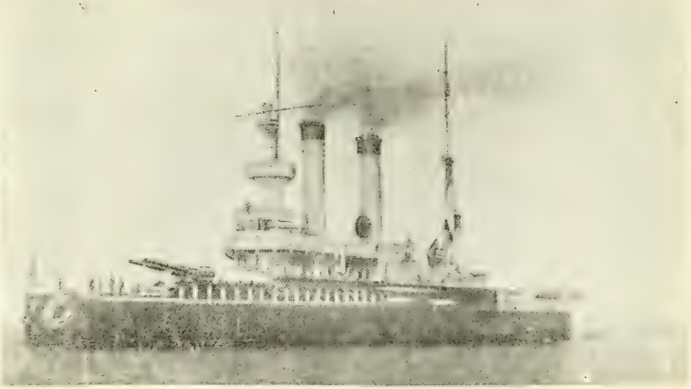
首を旋らし、猛然として不知火に向ひ突進し來つた。不知火は直に之を邀へ、三百乃至八百米突の近距離を以て、互に激烈なる旋廻戰を行ひ、第六十三號艇も亦同四十分頃より戰鬪に參加し、三隻の艦艇解けつ、結びつ、卍巴と相追ふの狀、恰も雛龍の爭ふが如く、接戰實に四十分間に及んだ。此の【敵艦の勇戰】間敵は或は巧に魚形水雷を發射して、殆ど我を危からしめ、或は我が砲彈の爲め、軍艦旗の落下するや、直に之を再揚する等、極めて勇敢に奮戰したるも、遂に我が砲火の爲めに、汽罐及び備砲の全部を破壞せられ、艦長ケルン中佐以下乘員の過半數は死傷し、艦は全く停止して、砲火亦沈默するに至つた。仍て不知火及び第六十三號艇は、之を捕獲せんが爲め、直に敵艦に迫りしに、生殘の敵兵は或は端舟に乘じ、或は海中に投じて降を乞ひたるを以て、不知火は敵兵の救助收容に從事し、將校以下四十五名を捕獲した。又第六十三號艇は敵艦に近づき、之を蔚山に曳航せんと努めしも、艦體の彈孔恰も蜂窩の如く、浸水漸次增加して、遂に午後零時四十分頃、蔚山の北東方約十五海里の處に沈沒した。此の時敵の艦上には逃げ後れたる七名の敵兵尚ほ殘留せしを以て之を捕へ、【敵艦内の慘狀】且つ艦内を搜索したるに、甲板は全然粉韲せられて破屋の如く、體軀碎け手足斷れたる數多の死屍は、彼方此方に横り、或は砲の引金を握りたる儘斃れたるもあり、或は發射管を擁したる儘死したるもあり、牛肉をい、たゝきたる如き肉塊は四方に飛散し、紅を流したる如き鮮血は甲板に漂ひ、汽罐室には熱湯に燒爛して白膨となりたる數名の敵兵、虛空を摑んで悶死せるあり。艦橋には艦長及び一候補生の相重なりて、碧血の裡に戰死せるあり。悲壯凄慘の狀、人をして酸鼻に堪へざらしむるものがあつた。敵の奮鬪斯の如く勇烈なりしが爲め、不知火も亦敵彈の爲め右舷汽罐及び操舵機を破壞せられて、一時運轉の自由を失し、遂に同一場處に旋轉しつゝ敵に對するの已むを得ざるに至り、左右戰舷を更ふること數回に及び、敵彈を被ること二十餘個に達し、乘組杉浦中尉(正雄)外下士卒四名の負傷者を生じた。

敵の戰艦「スウオーロフ」、巡洋艦「スウエトラーナ」及び驅逐艦「グロームキー」は、露國艦【敵艦隊中の三勇艦】隊中最も壯烈なる最期を遂げたるものにして、縱令戰利あらずして沈沒するに至りしと雖も、其の勇行は永く露國の青史を飾るに足るものであらう。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

【裝甲海防艦「ウシャーコフ」の擊沈】敵の裝甲海防艦「ウシャーコフ」は、前夜我が水雷攻擊に惱まされて逃げ迷ふ際、遂に味方軍艦と分離し、群を離れし濱千鳥の、獨り淋しく浦鹽に向ふ途上、二十八日午後三時頃、數十條の煤煙、迥に行く手の空に簇立するを發見した。敵か味方かと、心を配りつゝ進むうち、漸く近づくに及び、四隻の露國軍艦二十餘隻の我が軍艦に取り圍まれあるを認め、倏ち艦首を旋らして、南方に引き返した。是より先き我が艦隊は「ニコライ」一世以下四隻の降伏敵艦を包圍して、之が捕獲に從事中、敵艦「ウシャーコフ」の單獨北航し來るを發見し、東郷司令長官は島村司令官をし【磐手、八雲】て、磐手、八雲の二艦を率ゐ之に向はしめた。

装甲海防艦「アドミラル、ウシャーコフ」



「ウシャーコフ」は我が兩艦に追跡せらるゝを覺るや、這は叶はじと汽機の全力を盡して逃走を力めしも、艦は遂に我に及ばず、距離は次第に減じて、午後五時頃には早や一萬米突内外に近づいた。

島村司令官は東郷大將の命に依り、砲撃開始に先だち、敵に降伏を勸めんが爲め左の信號を掲げた。

Your admiral surrendered,

I advise you to surrender.

（汝の司令官は降伏せり、予は汝に降伏を勸告す）

【敵艦長勸降に應ぜず】 「ウシャーコフ」艦長は之を見て、無禮なる敵の言條かな、我は陛下の命に依りて本艦を預るもの、戰はずしてオメ〳〵敵に降るべきにあらず、生ある間は決して艦を敵手に委せず、と部下を勒して戰備に就かしめ、五時三十分答信の代りに砲火を開いて戰を挑んだ。

我が二艦は、小癪なる敵の振舞かなと、直に之に應じて戰鬪を開始し、猛烈たる砲火を敵艦に注いだ。敵は舊式の海防艦一隻にして、我は二隻の新式装甲巡洋艦、勝敗の數は戰はずして既に明である。斯くて砲戰約十餘分、我は未だ一彈を被らざるに反し、敵は既に多大の損害を受けたるものの如く、砲火は次第に衰へ、五時五十分頃には艦も亦全く停止するに至つた。我が兩艦は益〻敵に迫りて其の周圍を繞航しつゝ、緩徐なる砲撃を行ひしに、敵は永く我が砲火に浴するを嫌ひて、自ら爆沈を企てたるものの如く、六時十分蓊鬱たる黒煙高く天に沖すると共に、艦は漸次沈降して、遂に右舷に傾倒した。是に於て我が軍艦は直に端舟を派出して、敵兵の救助に努め、約二百四十名を收容したるも、艦長ミクルフ大佐以下八十餘名は、或は彈丸に碎け、或は海中に溺死するに至つた。

* * * * * *

【驅逐艦「ベドウイ」の降伏】 曩に二十七日午後五時頃、薄暮と共に、旗艦「スウォーロフ」を退去して驅逐艦「ブイヌイ」に移乘したる敵の司令長官ロジェストウエンスキーは、艦隊の指揮權をネボガトフ司令官に讓り、味方巡洋艦隊の後方に續航せしに、「ブイヌイ」は機關損傷の爲め、速力大に衰へ、同夜遂に他艦と分離し、且つ石炭缺乏の爲め到底浦鹽斯德迄航行し難きに至つた。此に於て參謀長等は、今後の行動に關して協議したる結果、日本の海岸に近づき、司令長官を上陸せしめたる後、艦を

爆沈し、若し又途中に於て日本軍艦に遭遇したる際には、戰鬪を交へずして、降伏することに決し、尙ほ之に就きてロ提督の意見を求めた。此の時ロ提督は眠より覺め、苦しき中にも最と力ある語を以て、「予が在るの故を以て顧慮することなく、予を以て此の艦に在らざるものと爲し、必要の所置を斷行せよ」と答へた。斯くて同驅逐艦は、途中獨り我が海岸に向つて航走中、二十八日天明の頃、味方巡洋艦「ドミトリー、ドンスコイ」の驅逐艦「ベドウイ」、及び「グローズヌイ」と共に北航せるに會し、乃ち之に情を告げて、司令長官をドンスコイに移乘せしめんとした。然るにロ提督は何故か「ドンスコイ」に移ることを肯ぜず、驅逐艦「ベドウイ」の石炭豐かにして、機關完全なるを聞きて、之に移乘し、直に

【ロ提督「ベドウイ」に移る】「グローズヌイ」と共に、「ドンスコイ」、「ブイヌイ」と別れ、北方に向ひ航走した。砲聲を聞きては右に避れ、煤煙を見ては左に避け、意を八方に配りつゝ戰々として航行するうち、同日午後二時過、南西の方位に當り、二條の煤烟低く海面に靡くを認めた。見付けられては一大事と、益々程を早めて鬱陵島の西方に向ひ、姿を島影に隱さんとした。半歲の遠航に艦底穢れ、汽機弛みたる驅逐艦は、速力兎角意に任せず、先きの煤煙は次第に近づいて、早や船體を現した。見れば二隻の日本驅逐艦！　艦首に蹴上ぐる波は、雪よりも白く、煙突より噴き出す煙は墨よりも黑く、唯一直線に己に向つて突進し來つゝある。

「ベドウイ」は到底脫出の難きを認め、後より續く「グローズヌイ」を麾き、全力を盡して浦鹽斯德に到るべきを命じ、己は司令長官を助けんが爲め、降伏することに決し、速力を弛めて、檣頭に白旗及び赤十字旗を掲揚した。戰鬪を期したる「ベドウイ」の水兵等は、之を見て大に憤慨し、中にも某大尉の如きは、ロ提督の故を以て、艦を敵に交附するの不條理なるを唱へ、部下に向つて艦の爆沈を命じた。されど幕僚並に他の將校等は、自ら降伏の責を負ふべきを叫び、百方水兵等を慰撫するに努めた。

【我が驅逐艦漣及び陽炎】是より先き我が第三驅逐隊の漣及び第五驅逐隊の陽炎は、前夜敵艦隊を襲擊したる後、再び戰備を整へて鬱陵島に航進中、二十八日午後三時過、同島の南西方約四十海里に於て、前方に當り一抹の煤煙模糊として水際に斷續せるを發見し、直に速力を增して、之に向つた。已にして午後四時頃距離漸く近づくに及び、其の敵の驅逐艦二隻なるを知り、益々之を追躡して、同四十五分頃、距離約四千米突より砲擊を開始した。此の時敵の一番艦は應戰しつゝ全速力を以て北西方に逃走せしも、二番艦は忽ち速力を緩めて其の檣頭に白旗を揭げ、且つ重傷者ありとの信號を揭げた。是に於て陽炎は敵一番艦の追擊に向ひ、漣は敵二番艦の捕獲に向つた。

【ロ提督我が軍の俘虜となる】是の降伏艦こそ、乃ち「ベドウイ」にして、其の士官室には敵の司令長官ロジェストウエンスキー中將が、重傷に惱されつゝ横つて居たのである。我が捕獲員は斯くとも知らず、敵艦に迫りしに、敵の參謀長は我に向ひ、告ぐるに情を以てし、且つ長官は傷重きが故、移動せざらんことを懇願した。漣艦長相羽少佐は之を諾とし、ロ提督をば其の儘「ベドウイ」に殘し、其の檣頭に我が軍艦旗を揭揚し、漣之を曳きて回

航の途に就いた。

【驅逐艦「グローズヌイ」の遁走】 又敵の逃走艦に向ひたる陽炎は、益々速力を增して敵を急追し、四千乃至六千米突の距離を以て、砲戰を繼續すること約二時間に及びしも、敵は速力意外に優大にして、遂に之を北方に逸した。而して此の驅逐艦は乃ち「グローズヌイ」にして、三十日午前浦鹽斯德に到着した。

【「ベドウィ」の降伏論】 敵驅逐艦「ベドウィ」の降伏たるや、其の情狀、大にネボガトフ少將の場合と異るものがある。卽ちネボガトフ少將の降伏は、優勢なる我が艦隊に包圍せられて、脫出の途なく、全滅を期して戰ふか、將た乘員を救助する爲め、降伏するか、二者其の一を選ぶより外、他に途がなかつたのである。然るに「ベドウィ」の場合に於ては、其の勢力彼我全く同一にして、排水量に於ては彼れ寧ろ我よりも優勢であつた。且つ其の速力に至りても、彼我殆ど軒輊なく、脫出の望亦無きにしもあらずである。現に其の一艦「グローズヌイ」の如きは、我が陽炎の追躡を脫して遂に能く浦鹽斯德に到達したではないか。抑も初めロ―提督の乘艦を選ぶに當り、「グローズヌイ」、「ベドウィ」の兩艦中より、特に「ベドウィ」を採りたるを以て見れば、機關並に其の他の現狀、「グローズヌイ」よりも優良なりしは明である。されば「グローズヌイ」にして尙ほ能く我が追擊より脫し得たりとせば、「ベドウィ」と雖も決して脫出の望なしといふことは出來ない。是に因つて之を觀れば、「ベドウィ」は此の時戰ふも逃るゝも己の意の欲する儘であつたのである。而も一彈を發することなく、降旗を揭げたる所以のものは、唯戰鬪に依つて、司令長官の身に萬一の危害の及ばんことを恐れての爲めとしか思へない。艦隊司令長官たるロ―提督一人の身は、誠に他の將卒百人にも優して貴重なるものである。併し其の貴重なるは、艦隊指揮の重任を有するが爲めである。既に重傷を負うて艦隊の指揮權を拋棄したるロ―提督は、唯是れ一個の海軍中將たるに過ぎずして、戰鬪力上より言へば、運彈の一兵卒にも及ばぬのである。此の一個の海軍中將の萬一の危難を救はんが爲め、戰鬪力完備せる驅逐艦を敵に交附するの可否は、茲に更めて論ずるまでもないことである。然りと雖も部下として上官の危難を救はんとするは、人間として最も崇むべき情である。吾人は茲に「ベドウィ」の降伏に關して、深く其の正否を論究するを好まない。唯讀者が賢明なる常識の判斷に委せんと欲するのである。一方には身を殺して部下を助けんとする上官あれば、一方には責を己に負うて上官を救はんとする部下がある。

【兵は人道と相容れず】 之を道德上より觀ずれば、誠に賞讚すべき行爲であらう。而も軍律は決して之を許さない。是に於てか嗚呼兵は凶器なるかな!! を叫ばざるを得ない。

* * * * * *

【裝甲巡洋艦「ドンスコイ」の擊滅】 我が主力艦隊は竹島の南西方に於て、ネボガトフ艦隊の捕獲に從事中、二十八日午後四時三十分頃、西方に當り、一條の淡煙波際に靉くを發見し、

【第四戰隊】 瓜生第四戰隊司令官は東鄕司令長官の命に依り、第四戰隊(浪速、高千穗、明石、對馬)及び第二驅逐隊(朧、電、曙)を率ゐて、之が偵察に向つた。已にして五時五十分頃に至り、第四戰隊は鬱陵島の南方に於て、西方遙に敵の裝甲巡洋艦「ドミトリー、ドンスコイ」の單

驅逐艦「ベドウイ」

獨北方に向ひ航進しつゝあるを認め、直に之を追躡しつゝ、無線電信を以て敵に勸降を試みた。敵は我が電信を了解せざるものか、何等の應答をも爲さず、益速力を増して一意逃走を力めしが爲め、第四戰隊は速力を極めて之を追ひしも容易に敵に接近することが出來ない。恰も好し、此の時我が音羽、新高の兩艦は西方より來りて敵に向ひしが爲め、敵は俄に針路を北方に轉じ、爾後彼我の距離大に減じ、七時四十分砲撃を開始するに至つた。

【音羽、新高】是より先き音羽、新高は竹邊灣附近に於て、敵の巡洋艦「スウェトラーナ」及び驅逐艦「ブイスツルイ」を撃滅したる後、主力艦隊に合せんが爲め、東航中、驅逐艦朝霧、白雲を合し、尋いで午後六時過東方に當り「ドンスコイ」の北航するを發見し、直に全速力を以て之が追撃に轉じた。適〻第四戰隊の東方より敵を追うて來るを認め、之と協力して左右兩側より敵に迫り、午後七時過鬱陵島の南方約二十海里に於て漸く敵に追及し、戰鬪を開始した。

【「ドンスコイ」】又敵艦「ドンスコイ」は、前日の晝戰に於ては、僅に甲板並に端舟等に輕微の損傷を被りたるに過ぎず、同夜亦我が水雷攻撃を受けしも、幸に命中を免れしが、此の時遂に僚艦と相分離するに至つた。已にして翌二十八日天明に至り、驅逐艦「ベドウイ」、「グローズヌイ」を合し、尋いで又司令長官ロジェストウエンスキーの乘れる驅逐艦「ブイヌイ」に會し、司令長官を「ベドウイ」に移したる後、「ブイヌイ」を率ゐて浦鹽斯德に向ひ航進した。然るに幾もなく「ブイヌイ」は汽罐故障の爲め到底航海に堪へ難きに至りたるを以て、「ドンスコイ」は「ブイヌイ」乘員並に同艦に收容せる「オスラービヤ」乘員を自艦に移し、自ら「ブイヌイ」を撃沈した。斯くて「ドンスコイ」は獨り尚ほ航海を繼續中、午後五時頃右舷に我が第四戰隊を發見し、次いで左舷に我が音羽、新高を認め、到底衆寡敵せざるを以て鬱陵島に到り、擱岸自沈せんと決し、全速力を以て同島に向ひ急進した。然る【左右挾撃】に此時「ドンスコイ」の速力は僅に十二三海里を超えず、終に我が軍艦に追及せられて左右兩舷より挾撃を受くるに至つた。

やがて彼我の距離次第に接近するに從ひ、戰

鬪は益激烈となり、我が六隻の軍艦より猛射する彈丸は、恰も霰の瓦屋を打つが如く、頻に敵艦に命中し、或は舷側を打つて紅焔の迸るもの、或は甲板を碎いて猛煙を揚ぐるもの、黄昏の波に映じて凄じく、敵は死力を盡して奮鬪せしも、多勢に小勢、見る見る煙突は破られ、大砲は毀され、艦長、航海長以下死傷續出し、殊に艦内には二百七十餘名の「オスラービヤ」及び「ブイヌイ」の乘員群集するが爲め、一彈碎くる毎に、死傷數知れず、伏屍累々、碧血漾々、光景轉た慘烈を極めた。時に日は既に西海に沈んで、暮色低く垂れ、多數の我が驅逐艦は恰も餌を狙ふ鷲の如く、耽々として機の到るを待つて居る。敵の乘員は一刻も早く、鬱陵島に達せんものと、心ばかりは急げども、舵機は損じて操縦意に任せず、汽機亦壞れて、速力僅に五海里に減じ、蝸足遲々として牛歩の如く、眼前に聳ゆる鬱陵島も遠きこと千里の思がある。

【腐つても鯨は鯨】

我が艦隊は夜に入るに先つて敵を撃沈せんと、愈猛烈なる砲火を注ぎしも、腐つても鯨は鯨、老朽と雖も、流石は裝甲艦、雨より繁き我が彈丸も、遂に敵の舷側を打ち碎くこと能はず、夜暗と共に敵を驅逐艦に讓りて、砲撃を中止するの止むを得ざるに至つた。是より先き東郷司令長官は、瓜生司令官より「ドンスコイ」發見の報に接するや直に

【夜闇】

應援の爲め淺間を急派せしも、同艦は敵に達するに先だち夜に入りし爲め、遂に戰鬪に參與するに至らなかつた。

【我が驅逐艦の襲撃】

一艦隊の砲撃終るや否や、隙て機を窺ひたる我が驅逐艦朧、電、曙、朝霧、白雲及び吹雪の諸艦は、直に敵に向つて驀進した。此の時敵は鬱陵島を距つること僅に數海里に過ぎず、我が驅逐艦の襲撃を聞きつゝ、跛足蹣跚として遂に漸く同島に達し、直に乘員が上陸を開始した。我が驅逐艦は敵の砲火を冒し、午後九時頃までに逐次攻擊を決行したるも、敵は尚ほ未だ沈沒に至らず、僅に殘存せる二三の端舟を以て、徹宵人員の上陸を行ひ、翌天明再び艦を深處に引き出し、

【「ドンスコイ」自沈す】

自ら海水弁を開きて之を沈沒せしめた。

此の戰鬪に於て第四戰隊の旗艦浪速は、敵の一彈に水線下を貫通せられ、浸水するに至りしも、直に應急修理を施し、又音羽は一彈を受けて、船體に多少の損害を被り、卒二名重傷を負ひしも、其の他の各艦は一も損害を被らなかつた。而して鬱陵島に上陸したる敵兵七百七十餘名は、後俘虜として我が軍艦に收容せられた。

* * * * * *

「ドンスコイ」の擊滅を最後として、我が聯合艦隊の全艦艇は、一先づ根據地に引上げ、茲に日本海に於ける龍鬪虎擊の大海戰は、振古未曾有の大捷を以て、光輝ある終を告げた。

【帝國萬歲】

天皇陛下萬歲！　帝國萬歲！　海軍萬歲！

捷報一たび天聽に達するや、五月三十日

【優詔東郷大將に降る】

東郷司令長官に左の優詔を賜はつた。

聯合艦隊ハ敵艦隊ヲ朝鮮海峽ニ邀擊シ奮戰數日遂ニ之ヲ殲滅シテ空前ノ偉功ヲ奏シタリ

朕ハ汝等ノ忠烈ニ依リ祖宗ノ神靈ニ對フルヲ得ルヲ懌フ惟フニ前途ハ尙遼遠ナリ汝等愈ヨ奮勵シテ以テ戰果ヲ完ウセヨ

皇后陛下並に皇太子殿下よりも夫々戰捷に對して、優渥なる令旨を賜はつた。

【東郷大將の奉答】東郷大將は勅語に對し、左の奉答文を上つた。

日本海ノ戰捷ニ對シ特ニ優渥ナル勅語ヲ賜ハリ臣等感激ノ至リニ堪ヘス此海戰豫期以上ノ成果ヲ見ルニ至リタルハ一ニ陛下御稜威ノ普及及ヒ歷代神靈ノ加護ニ依ルモノニシテ固ヨリ人爲ノ能クスベキ所ニアラス臣等唯益奮勵シテ犬馬ノ勞ヲ盡シ以テ皇謨ヲ翼成センコトヲ期ス

令旨に對しても夫々奉答する所があつた。

嗚呼「汝等の忠烈に依り祖宗の神靈に對ふるを得るを慳ぶ」との聖勅、死者は以て瞑すべく、傷者は以て慰むべし。

十八　戰果戰績

東洋の海權を回復し、以て戰局の敗運を既倒に支へんが爲め、露國上下の重望を負ひ、半歲の日子を費し、一萬五千海里の波濤を越えて來航したる婆羅的艦隊は、五月二十七、八日の海戰に於て、脆くも我が聯合艦隊の一擊に粉碎せられ、其の慘烈なる最後の狀況は、既に次を逐うて述べた所である。されど

【敵艦の末路】又其の巡洋艦、特務艦及び驅逐艦等の中には、尙ほ若干の行方不明のものがある。而して此等艦船の爾後の行動を詳叙するは、唯徒に記事の繁冗を來すと、讀者の倦怠を招くとに過ぎずして、戰術研究以外に於ては興味極めて薄きを以て、特に之を省略し、玆に敵艦船全部の末路を一括略述し、以て

【戰果】此の大海戰の戰果を校量すると共に、聊か其の戰績の及ぼす所を概説せんと欲するのである。

●戰艦「クニャージ、スウォーロフ」（排水量一三、五一六噸）
二十七日の晝戰に於て、沖の島北方に沈沒。乘員約九百五十名中、艦隊司令長官以下約二十名は我が軍の俘虜となり、他は全部戰死。

●戰艦「イムペラートル、アレクサンドル」三世（排水量一三、五一六噸）
二十七日の晝戰に於て、沖の島北方に沈沒。乘員約八百五十名中、一人の生存者だになし。

●戰艦「ボロヂノ」（排水量一三、五一六噸）
二十七日の晝戰に於て、沖の島北方に沈沒。乘員約八百五十名中、生存者唯一人のみ。

●戰艦「アリョール」（排水量一三、五一六噸）
二十八日、竹島附近に於て我が艦隊に降伏。乘員八百餘名は我が軍の俘虜となる。後之を石見と命名せらる。

●戰艦「オスラービヤ」（排水量一二、六七四噸）
二十七日の晝戰に於て劈頭第一沖の島北方に沈沒。乘員約九百名中、味方驅逐艦に救助せられて浦鹽斯德に逃れしもの約百七十名、我が軍の俘虜となりしもの約二百十名、殘り四百餘名は艦と運命を共にす。

●戰艦「シソイ、ウェリーキー」（排水量一〇、四〇〇噸）
二十七日の夜襲に於て損傷。翌二十八日對馬の北東沖合に沈沒。乘員約六百六十名中、約六百名は我が軍の俘虜となる。

●戰艦「ナワリン」（排水量一〇、二〇六噸）
二十七日の夜襲に於て、對馬の北東沖合に沈沒。乘員約六百九十名中、生存者

備に三名のみ。

●裝甲巡洋艦「アドミラル、ナヒーモフ」（排水量八、五二四噸）

二十七日の夜襲に於て損傷。翌二十八日對馬の東岸に沈沒。乘員約六百三十名中、生存者五百二十餘名は我が軍の俘虜となる。

⊗戰艦「ニコライ一世」（排水量九、六二三噸）

二十八日、竹島附近に於て我が艦隊に降伏。乘員約七百七十名中、ネボガトフ司令官以下約七百六十名は我が軍の俘虜となる。後壹岐と命名せらる。

⊗裝甲海防艦「ゲネラル、アドミラル、アプラクシン」（排水量四、一二六噸）

二十八日、竹島附近に於て我が艦隊に降伏。乘員約四百二十名は悉く我が軍の俘虜となる。後沖島と命名せらる。

⊗裝甲海防艦「アドミラル、セニャーウヰン」（排水量四、七九一噸）

二十八日、竹島附近に於て我が艦隊に降伏。乘員約四百二十名は悉く我が軍の俘虜となる。後見島と命名せらる。

●裝甲海防艦「アドミラル、ウシャーコフ」（排水量四、六四八噸）

二十八日の戰鬪に於て隱岐の東方約六十海里に沈沒。乘員約四百二十名中、生殘者三百四十名は我が軍の俘虜となる。

●裝甲巡洋艦「ドミトリー、ドンスコイ」（排水量六、二〇〇噸）

二十八日の戰鬪に於て大破し、遂に鬱陵島附近に自沈。乘員約五百二十名中、四百九十餘名は我が軍の俘虜となり、他は戰溺死。

●裝甲巡洋艦「ウラヂーミル、モノマーフ」（排水量五、五九三噸）

二十七日の夜襲に於て損傷。翌二十八日對馬の東岸に沈沒。乘員約五百名中、四百六十餘名は我が軍の俘虜となり、他は戰溺死。

◎巡洋艦「オレーグ」（排水量六、六七五噸）

二十七日夜、戰場を脱し、六月三日馬尼刺に竄入。武裝を解除し、米國官憲に抑留せらる。戰死十五名、負傷三十餘名。

◎巡洋艦「アウローラ」（排水量六、七三一噸）

「オレーグ」と共に、六月三日馬尼刺に竄入。武裝を解除し、米國官憲に抑留せらる。戰死十四名、負傷九十餘名。

◎巡洋艦「ジェムチウグ」（排水量三、一〇六噸）

「オレーグ」と共に、六月三日馬尼刺に竄入。武裝を解除し、米國官憲に抑留せらる。戰死十二名、負傷二十餘名。

●巡洋艦「スウェトラーナ」（排水量三、八六三噸）

二十八日の戰鬪に於て、竹邊灣の東方に沈沒。乘員約四百六十三名中、約三名は我が軍の俘虜となり、他は戰死。

●巡洋艦「イズムルード」（排水量三、一〇六噸）

二十八日戰場を脱し、二十九日浦鹽斯徳の北方約二百海里なるセント、ウラヂミール灣に入港の際、坐礁自沈。乘員は陸路浦鹽に入る。負傷十名。

○巡洋艦「アルマーズ」（排水量三、二八五噸）

二十七日夜戰場を脱し、二十九日浦鹽斯徳に入港。戰死五名、負傷十名。

⊗驅逐艦「ベドウイ」（排水量三五〇噸）

二十八日、我が驅逐艦に降伏。乘員七十餘名は我が軍の俘虜となる。後皐月と命名せらる。

●驅逐艦「ブイヌイ」（排水量三五〇噸）

二十八日、汽罐破損の爲め自沈。乘員

七十餘名は一旦「ドンスコイ」に收容せられ、後我が軍の俘虜となる。

○驅逐艦「ブラーウイ」（排水量三五〇噸）

二十七日「オスラービヤ」乘員約百七十名を救助收容し、同夜戰場を脱し、三十日浦鹽に着す。

●驅逐艦「ブイスツルイ」（排水量三五〇噸）

二十八日の戰鬪に於て、竹邊灣の北方に沈沒。乘員七十三名（外に「オスラービヤ」の乘員十名あり）は、我が軍の俘虜となる。

●驅逐艦「グロームキー」（排水量三五〇噸）

二十八日の戰鬪に於て、蔚山の北東方に沈沒。乘員約七十五名中、五十四名は我が軍の俘虜となり、他は戰死。

●驅逐艦「ブレスチャーシチー」（排水量三五〇噸）

二十七日夜戰場を脱し、南西に逃走中、損傷の爲め、二十八日朝五島の北西方に於て沈沒。乘員約七十五名は同行の驅逐艦「ボードルイ」に收容せられ、上海に逃る。

◎驅逐艦「ボードルイ」（排水量三五〇噸）

二十七日夜戰場を脱し、南西に逃走中、途上驅逐艦「ブレスチャーシチー」の乘員を收容し、上海に向ひしに、途中石炭を消盡し、海上に漂蕩すること數日、漸く英國汽船に發見救助せられ、六月四日上海に入港。武裝解除の上清國官憲に抑留せらる。

○驅逐艦「グローズヌイ」（排水量三五〇噸）

二十八日戰場を脱し、三十日浦鹽斯德に着す。

●驅逐艦「ベヅウプリヨーチヌイ」（排水量三五〇噸）

二十八日の戰鬪に於て、見島の北方約四十五海里に沈沒。乘員約七十五名中一人の生存者なし。

●假裝巡洋艦「ウラール」（排水量八、二七八噸）

二十七日の晝戰に於て、沖の島北方に沈沒。乘員中、約三百三十名は味方運送船「スウヰーリ」に救助せられて上海に逃れ、五十餘名は我が長門、石見の沿岸に漂着し俘虜となる。

●運送船「ルス」

二十七日の晝戰に於て、沖の島北方に沈沒。乘員中、五十餘名は味方運送船「スウヰーリ」に救助せられて上海に逃る。他は戰死せるが如し。

◎運送船「スウヰーリ」

二十七日夜戰場を脱し、二十九日上海に入港。清國官憲に抑留せらる。

●運送船「イルツイシ」（排水量七、五〇〇噸）

二十七日の晝戰に於て損傷し、二十八日石見國濱田港北方の海岸に到りて沈沒。乘員二百五十八名は我が軍の俘虜となる。

○運送船「アナヅイリ」

二十七日晝戰中、假裝巡洋艦「ウラール」の乘員を收容して同夜戰場を脱し、長驅遁走七千海里。六月二十七日マダガスカル島に着し、尋いで本國に歸航。

○運送船「コレーヤ」（排水量六、一六五噸）

二十八日朝戰場を逃れ、三十日上海に入港、清國官憲に抑留せらる。

●工作船「カムチャーツカ」（排水量七、二〇〇噸）

二十七日の晝戰に於て、沖の島北方に沈沒。乘員三百餘名中、六十四名は我が長門の沿岸に漂着して俘虜となり、他は

戰死せるが如し。

⊗病院船「アリヨール」（排水量五、七四〇噸）

海牙條約違反の廉を以て、二十七日午後沖の島附近に於て、我が軍艦の爲めに抑留せられ審檢の結果、捕獲せらる。後捕保丸と命名せらる。

○病院船「カストローマ」

海牙條約違反の嫌疑を以て、二十七日午後沖の島附近に於て、我が軍艦の爲めに抑留せられ、審檢に附せずして特に解放せらる。

尚ほ之を統計換記すれば左の通りである。

● 我が艦隊に撃沈せられたるもの

- 戰艦
  - 「クニャージ、スウォーロフ」
  - 「イムペラートル、アレクサンドル」三世
  - 「ボロヂノ」
  - 「オスラービヤ」
  - 「シソイ、ウェリーキー」
  - 「ナワリン」
- 裝甲巡洋艦
  - 「アドミラル、ナヒーモフ」
  - 「ウラヂーミル、モノマーフ」
- 裝甲海防艦 「アドミラル、ウシャーコフ」
- 巡洋艦 「スウェトラーナ」
- 驅逐艦
  - 「ブイスツルイ」
  - 「グロームキー」
  - 「ベヅウプリコーチヌイ」
- 特務船
  - 「ウラール」
  - 「ルス」
  - 「カムチャーツカ」

● 我が艦隊に撃破せられて自沈したるもの

- 巡洋艦 「ドミトリー、ドンスコイ」
- 驅逐艦
  - 「ブレスチャーシチー」
  - 「ブイヌイ」
- 特務船 「イルツイシ」

● 坐礁自沈したるもの

- 巡洋艦 「イズムルード」

○ 我が艦隊に捕獲せられたるもの

- 戰艦
  - 「イムペラートル、ニコライ」一世
  - 「アリヨール」
- 裝甲海防艦
  - 「ゲネラル、アドミラル、アプラクシン」
  - 「アドミラル、セニャーウヰン」
- 驅逐艦 「ベドウイ」
- 病院船 「アリヨール」

○ 中立國港灣に逃入し抑留處分を受けたるもの

- 巡洋艦
  - 「オレーグ」
  - 「アウローラ」
  - 「ジェムチウグ」
- 驅逐艦 「ボードルイ」
- 特務船
  - 「コレーヤ」
  - 「スウヰーリ」

○ 自國港灣に到着若くは歸航したるもの

- 巡洋艦 「アルマーズ」
- 驅逐艦
  - 「ブラーウイ」
  - 「グローズヌイ」
- 特務船
  - 「アナヅイリ」
  - 「カストローマ」（病院船）

彼我艦艇沈沒位置圖
凡例
敵ノ沈沒艦艇
A 病院船二隻抑留
B 降服
C 「ベドウイ」降服
(一) 第六十八號艇
(二) 第三十四號艇
(三) 第三十五號艇
1 「オスラービヤ」
4 「カムチャーツカ」
5 「スウオーロフ」
6 「アレクサンドル三世」
7 「ボロヂノ」
8 「シソイウエリーキー」
9 「ナワリン」
10 「アドミラルナヒモフ」
12 「ベズウプリョーチヌイ」
13 「スウエトラーナ」
14 「ブイストルイ」
15 「グローズヌイ」
16 「ウシャーコフ」
17 「イズムルード」
18 「ドンスコイ」
19 「ブレスチャーシチー」
20 「イルツイシ」
鬱陵島
竹島
隠岐列島
日御碕
濱田
見島
角島
油谷灣
下關
沖ノ島
對馬
壹岐
佐世保
宇久島
五島列島
巨濟島
迎日灣
蔚山灣
釜山
129°E
130°E
131°E
132°E
133°E
33°N
34°N
35°N
36°N
37°N
38°N

(第五圖)

即ち我が艦隊の爲めに撃沈、若くは捕獲せられたるもの二十一隻、損傷の爲め自沈したるもの五隻、中立港灣に竄入して抑留せられたるもの六隻に達し、初め朝鮮海峽に現れたる三十八隻の艦船中、其の能く目的地たる浦鹽

【浦鹽斯德に逃れしもの僅に三隻】

斯德に到達し得たるものは、僅に小巡洋艦一隻、驅逐艦二隻に過ぎない。而して其の乘員の損害に至りては、戰死大約五千名、俘虜亦六千百餘名を算し、其の他戰爭終結迄、中立國に抑留せられたるもの二千名を下らない。之に反し我が艦艇の喪失は、唯小水雷艇三隻のみにして、人員の死傷も亦全艦隊を通じて戰死百十餘名、負傷者五百八十名に過ぎず、而も負傷者中、重傷と認むべきは、僅に二百名に滿たずといふに至りては、何たる大勝、何たる奇捷であらうか。戰後僅に數年を經たる今日に於てさへ、尙ほ神話的奇蹟を尋ぬるの感がある。之を世界の歷史に徵するに、サラミス大海戰の如き茫漠たる遠き昔は知らず、紀元以降の海戰に於ては、斯の如き光輝ある戰捷を發見することが出來ない。世人は海戰といへば、トラファルガーを聯想し、海將といへばネルソンを想起する。而も其のトラファルガーの海戰に於て

【トラファルガー海戰との比較】

は、戰捷軍たる英國艦隊に於ては、全人員の約一割は戰死し、司令長官ネルソン亦旗艦「ビクトリヤ」號の艦上に殪れ、且つ數隻の軍艦は大損傷を被りたるのみならず、敗北軍たる佛西聯合艦隊三十三隻中、其の十一隻は英軍の圍を衝いて脫走したのである。之を日本海海戰に於ける結果と比較すれば其の戰果の大小は自ら明である。併しトラファルガーの海戰に於ては、佛西聯合艦隊は三十三隻なるに對し、英國艦隊は僅に二十七隻なりしことを忘れてはならぬ。

日本海海戰に於て我が艦隊の收獲したる絕大なる戰果は、右述べた如くである。然らば此

【戰績】

の戰果に依つて導かれたる戰績は、果して如何なるものであらう？ 又我が國民は此の戰捷に對し、果して如何なる注意を拂うて居るであらう？ 提灯行列や祝勝會を以て、此の大戰捷を帳消しにすることなく、少しく眞面目に研究して欲しいのである。

夫れ火の暖きを知らんと欲せば、先づ氷の冷きを知らざるべからず、戰捷の難有さを知らんが爲めには、先づ敗戰の苦痛を究めねば

【彼我勝敗の地を更へたらば如何】

ならぬ。此の海戰若し不幸にして、彼我の勝敗其の地を代へ、制海の權敵手に歸したりとせんか、我が帝國の被るべき結果は果して如何であらう？

【軍事上に及ぼす結果】

之を軍事上に見れば如何？ 當時滿韓の野に在りし百萬に近き我が軍隊は、後方輸送の途全く絕えて、食ふに糧食なく、戰ふに彈藥なく、進んでは敵を敗る能はず、退いては本國に還るを得ず、連戰連勝の常勝軍も、餓死するか、敵に降るか、二者其の一を選ばねばならぬのである。是に至りては旅順の勇戰も、奉天の大捷も、唯是れ實を結ばざる、美花一朝の姸を誇りしに過ぎずして、十萬の生靈を喪し、巨億の資財を費して獲たる所、空しく之を敵手に捧げねばならぬのである。

加之我が沿岸は到る處、敵襲を被りて住民其の堵に安ずる能はず、海上交通は全く杜絕して、諸島嶼は敵の占領に任せねばならぬのである。此の時に當り縱令國民皆銃を取つて海岸に堵を作るも、敵に取りては是れ烏を嚇す案山子にも及ばぬのである。

【通商上に及ぼす結果】

之を通商上に見れば如何？ 海外貿易は全然破壞せられ、煤煙の跡近海に絕え

て、埠頭汽笛の聲を斷ち、商賈は資産を破りて、工場は雀羅を張り、久しきに亙れば國民漸く飢に迫るのである。彼の浦鹽艦隊が僅に數日間、東京灣外を暴したる時、婆爾的艦隊が約一箇月間、安南沿岸に滯留したる際、我が通商上に受けたる打撃の如何に大なりしかを思はゞ、制海權を失ひたる後に於ける我が帝國通商の如何に悲慘なるべきかは、思ひ遣ることが出來る。

【財政上に及す結果】之を財政上に見れば如何？　開戰以來連戰連勝の我が公債と、連戰連敗の露國公債とは、此の海戰までは倫敦市場に於て、殆ど同一價格であつたのである。連戰連勝にして尚ほ且つ然りとすれば、若し敗戰の悲運に接せんか、我が財政の信用地を拂うて、國家的破産するの外はあるまい。

【外交上に及す結果】之を外交上に見れば如何？　英國の如き我が同盟國は暫く措き、其の他の列國は尚ほ依然として我に同情を寄せるであらうか。弱者に同情するは、我が國民の性情なるも勝者に同情するは、由來歐米人の性質である。殊に事大思想の強き清韓兩國の如きは、尚ほ克く我に好意を表したであらうか。

敗戰に基づく四圍の狀況は、斯の如く悲慘なるものである。

【然るとき國民の決心は如何】此の時に當り、我が國民の採るべき道は如何であらう？　全國を焦土と化し、國民最後の血の一滴までも奮鬪するか、否れば露國の命ずる所惟れ從ひ、降伏に等しき和を乞ふの外はあるまい。連戰連勝でさへ講和の條件は彼が如きものであつた。若し露國にして我の死命を制するに至らば、如何なる過大の要求を持ち出すかも知れない。臺灣を奪はるゝも可なり、北海道を奪はるゝも尚ほ忍ぶべし。唯大日本帝國なる獨立國の存在を危うすることなくんば、幸なのである。東郷大將が其の信號に「皇國の興廢此の一戰に在り」と言ひしもの、決して誇張の言ではない。

十九　捷因如何

婆爾的艦隊來る！　婆爾的艦隊來る！！　惡魔襲來の如き其の聲は、如何に久しく我が國民の胸を刺戟せしことよ。

敵艦隊朝鮮海峽に現る！　砲聲殷々終日絕えず！

霹靂の如き一信の飛電は、如何に烈しく我が國民の心を痛ましめしことよ。

敵艦隊全滅！　敵司令長官降伏！！

鈴聲鏘々、號外四方に飛びしとき、我が國民の血は如何に踊躍せしことよ。

前年四月、其の編成の發表せられてより、一年有餘の間、我が國民をして常に懊惱として奧齒に物の插まりたる如き心地せしめたる婆爾的艦隊も、あはれ日本海の一戰に敗れて、殆ど遺ずなく、國民は茲に初めて

【十年の溜飮一時に下る】十年の溜飮一時に下りしが如き思がした。此の海戰に於ける我が戰果の大にして、戰績の偉なるは、前述べた如くである。大凡天下の事物、因あれば必ず果あり、果あれば必ず因がある。我が聯合艦隊が物質的勢力略ぼ相等しき敵に對して、此の嚇々たる大捷を博し得たる所以のものは、是れ果して如何なる原因に由るであらうか。謙讓にして功に誇らざる

【御稜威と天佑と神助】東郷大將は、之を以て陛下の御稜威と天佑と神助とに歸して居る。其の陛下の御稜威に因るは、素より謂ふまでもないことである。併しながら之を窺たる天佑と、

神助とに歸して顧みざるは、國民として餘に無責任であると信ずる。吾人は今軍人としてでなく、國民の一人として聊か之が因由する處を攷覈闡明せんと欲するのである。

二十箇月に亙る戰雲血雨も漸く霽れて、日露兩國間の平和は、玆に克復し、我が聯合艦隊

【凱旋觀艦式】

は偉勳を奏して、堂々東京灣に凱旋した。艨艟海に滿ちて、檣桁空に簇り、軍容益整うて、艦旗愈鮮である。秋氣森嚴、金風肅颯たる十月二十三日、車駕親臨して凱旋の觀艦式を横濱沖に擧行あらせられた。十里の海濱、拜觀の人を以て埋められ、遠近の海上、拜觀の舟を以て掩はる。誠に照代の盛事である。國民は海軍萬歲の叫びに咽を嗄らし、凱旋の將士は海軍萬歲の聲に耳聾するばかり。長日月の間陣中に嘗めたる苦楚辛酸も唯此の熱誠なる歡聲に消散した。

こゝ横濱の一旗亭に集れる數名の人士、「フロックコート」あり、羽織袴あり、髯あるあり、頭髪油に輝くあり、中にも變りたるは、虎髯短長、顏面鐵よりも黑き、一人の短劍士官である。教育家、實業家、新聞記者、軍人と、世界に掉す途こそ違へ、昔は同じ學窓の下に、語り合ひ、なぐり合うたる者ばかりである。

【同窓の集會】

杯盤既に幾獻酬、人々の面は熱し、耳は熱し、遠慮氣兼を留守にして、各我儘勝手の氣焰を吐き散らして居る。短劍士官の戰爭話も既に終りて、玉山將に頽れんとする時、何人よりか、何故に我が日本は露國に勝つたかとの問題が提出せられた。近き將來の代議士、遠き未來の大宰相を以て自ら任ぜる辯護士A君、朦朧たる醉眼をば潤と開き、既に議會の壇上に立ちたるかの如き態度を以て、

【捷因研究の緊急】

「諸君！　本問題は吾人國民として今日研究すべき、最も緊急且つ重要なるものであると信ずる、苟くも戰後の經營を講ずるに方りては、先づ此の問題を研究解決し、其の我の勝ちたる所は、益之を奬勵し、彼の負けたる所は深く之を鑑み、以て夫々計策を運らさねばならぬのである。唯徒に皮相の觀、主我の念に驅られて、事を爲すが如きは、是れ此の光輝ある戰捷を永久に保持するの途でない、(ヒヤ〳〵謹聽)抑も神武開闢以來、我が國礎を危うしたる國難が二つある、卽ち其の一は元寇の來襲にして、他の一は今回の戰爭である、何れも若し一歩を誤らば、我が帝國は制を他人に受けねばならぬのであつた、幸にして前には膽、甕の如き鎌倉の獅子兒、北條時宗の在るあり、後には畏多くも允文允武の大元帥陛下の在しますありて、仇を千里に退け給ひ、我々今日からして暖き酒も飲める次第である。ゲープ。(「ウイスキー」のがぶ飲は誰の御蔭だ。歴史の講釋ならば本職のC君が控へて居る！)シーッ馬鹿ッ！　他人の發言權を侵害すると、場外へ摘み出すぞアハ……さて更めて諸君！　ウ……議題は何だつたかね……ゲープ」

社會の木鐸と無冠の帝王とを以て、自ら任じ、自ら慰むる新聞記者B君は、此の時議長氣取りに、

B「自稱未來の宰相A君の議論は問題外なるを以て發言權を取り消します」

A「何だと、發言權を取り消すぢや、失敬な、貴樣に貰つた權利ぢやない、――誰から貰つたつて？――誰からも貰はない、オレに先取の權があるんだ、(幾ら職掌柄だつて、さう權利や義務を振り廻すなよ、よ

し、おやア勝利を譲つてやらう、又勝利か、が、兎に角議論の結末を付けなくツちや、折角の卓說も佛作つて目を入れず、になるからね、……之を要するにだ、――此の小さき日本のダビッドが大なる露國のゴライヤスにうちたる所以はだ、――我は

【國體說】立憲國で彼は專制國だからだ、――つまり彼は政府と人民との意思が疎通しないからだ、ゲープさうだ――是が分らなけりや、明日オレの所へ聞きに來い、……マアN君一つ飲め！　何と言つても君等がやつて呉れたからさ、ね――

B君は有るか無きかの髭を撚りつゝ、

B―實戰者たるN君を前に置いて言ふのは、聊か失禮かも知れぬが、……成程戰爭を爲たのは軍人である。併し之をして勝たしめたのは、

【國民の後援】國民である。國民の後援が無かつたならば、軍人如何に勇敢なりと雖も、迚も思ふ儘に働くことは出來ないであらう、併し吾輩の言ふ此の國民の後援なるものは、一二の富豪が、御獻奉公として、いや／＼ながら獻納する軍資金などを言ふのではない、卽ち、國民の輿論より成る、熱誠なる後援を言ふのである、可憐の少女が、心籠めたる慰問袋は、如何に戰士の士氣を勵ましたであらう！　美しき纖手によつて縫かれたる繃帶は、如何に傷者の痛みを和らげたであらう！　而して此の國民の輿論を喚起したるものは、卽ち我々新聞記者である、故に他日論功行賞のある曉には、軍人よりも、誰よりも先づ勳章を戴くものは我々であらうと信ずる、ハヽ……

五紋の羽織袴に、近眼鏡を掛け、薄き朝鮮髭をダラリと生したる、中學校の先生C君は、手酌で一杯グッと干し、

C―凡そ世の中に背の皮の厚いものは、猿に如くはなし、面の皮の厚いものは、新聞記者に優るものなしと言ふが、中にもB君の如きは、靴の底皮に適する方だね、聞けば政治家は、戰捷の原因を立憲政治に歸し、新聞記者は、之を新聞の筆力に依ると云ふ、是に至つては僕は教育家として、戰勝の原因は國

【教育の普及】民教育の普及に因ることを絶叫せざるを得ない。抑も我が帝國の教育……―

と、容貌の優しきに似ず、C君の論鋒中々鋭い。B君漸く之を制して、

B―貴様の教育論なら、もう澤山だ、中てられると又四五日休まにやならぬからね、此の忙がしい際に、そんなに休まうものなら、忽ち此の口が干上がつて仕舞ふ。勳章を貰つたら、半分わけてやるから、今日丈は教育論は許して呉れ……―

艷々したる頭髮を二つに分け、金の指輪の三つも嵌めたる白面のM君、有象無象等が何を饒舌る！　と言はんばかりに、奥歯の金を光らしつゝ、

M―國會が滿場一致で軍備を可決したつて、新聞記者が筆を禿して國民の元氣を鼓舞したつて、教育家が舌を爛らして忠君愛國を說いたつて、直接戰爭に必要なるもの

【軍費の調達】は金力さ、金が無ければ、軍人如何に力んだとて、一發の彈丸も買ふことは出來ないんだ、そこに至ると戰捷第一の功は、我々實業家卽ち資本家だね、アハ……併し我々ばかりの獨り天狗では、結着が付かない、審判官として、戰爭に最も關係あるN君の意見を聞かうではないか

先程より長鯨の九川に飲ふ如く、他人の話を聞くともなく、聞かぬともなく、獨り滿を引

きつゝあり、海軍將校N君は、眼光りのする眼に、ギョロリと一座を見廻し、

N「オレなんかにやア、そんな世間並の事は判らないさ、唯打て！　と云や打つ、止め！　と云や止めるばかりだ、ドンと叩りや、キャッと參る體で、そんな悠長なことを考へて居られるかい、強い方が勝つたまでさ、……が、何だね、諸君の説に依ると、若し負けたら、責任は矢張り、諸君が負うて異れるんだらうね、ハヽ……」

M「こいつは、いゝきはどい所で逆襲されたね」

B「寄る丈寄せて置いて、唯一撃に撃ち取るなどは、流石東鄕さんの手下だけあるね」

N「全勝は戰はず、敵に依つて勝を制すさ」

此の時緊急動議として、二次會開催の案、M君より提出せられ、滿場一致を以て可決せられた。

* * * * * *

【捷因如何】 之を日露戰役全般の捷因に就きて考ふれば、國民の後援も、議會の協賛も、教育の普及も、軍費の融通も、皆其の一因であるであらう。併し茲には專ら日本海海戰なる一局面に於ける捷因に關して、説かんと欲するのである。

【天、地、物、人の四要素】 抑も戰鬪の運命を支配するものは、天、地、物、人の四要素である、天とは風雨寒暑の變化を云ひ、地とは山野河海の利害を云ひ、物とは艦船銃砲等の堅脆を云ひ、人とは戰に從ふ將卒の賢愚怯勇を云ふのである。而して此の四要素中、天時、地利は、陸戰に於てこそ戰の勝敗上に大なる關係を有するも、海戰に於ては敵味方共に等しく、其の利害を受くるのである。即ち風の順逆日の向背の如きは、一に將帥たるものの能否に依つて、利ともなり、又害ともなるのである。日本海海戰當日に於ける怒濤も、濛氣も、彼の苦む所は我も亦苦んだのである、之を以て【天時地理は海戰に影響せず】海戰に於ては、天地の關係は、勝敗の數と、殆ど影響する所がないと云つても宜いのである。されば艦戰砲熕等の物質的關係は、如何であつたらうか。抑も、彼【物質勢力は彼我相如く】我兩軍殆ど相匹儔せることは、前既に詳説したる所である。是に於てか、【捷因は人に在り】此の大海戰戰捷の原因は之を人に歸せねばならぬ。然り而して人なるものの戰鬪力は何であるか？　之を分解すれば、技術及び精神の二つである。技術とは、主將の帥兵上に於ける才能より、一卒の操砲上の技倆に至るまで、皆之に屬するものである。精神とは愛國心の旺弱、士氣の消長、軍紀の振弛等を云ふのである。我が艦隊勝利の原因、敵艦隊敗滅の理由が、技術、精神の如何に屬するやは、今更めて論ずるまでもなく、前段記述したる戰鬪の狀況に照して、凡そ推知することが出來るであらう。

【技術の訓練と精神の修養】 抑も技術なるものは、數月若くは數年の訓練に依つて、之を熟達することが出來る。而も精神に至りては、斯かる短年月間に於ては、到底十分なる修養の出來るものでない。幸にして我が帝國には、吾人の祖先より傳へられたる日本魂なるものがある。我が國民は生れながらにして、此の精神の幾分かを享有して居るのである。

【日本魂と毛髮と眼】 然りと雖も我が國民が日本魂を有するは、我が日本人が黑き毛髮と、黑き眼を有するのとは、大に其の趣を異にして居るのである。吾人日本人の有する黑き毛髮と、

黒き眼は、是れ天然の賜なるも、日本魂なるものは、是れ吾人の祖先が熱血と、紅涙とに依つて、鍛へ上げたる人爲的のものである。之を譬ふれば、吾人の毛髪と、眼とは、山

【石塊と名刀】

河に磊々たる石塊にして、日本魂は是れ百錬、研磨の正宗の名刀である。石塊は百年之を溝泥の中に置くも、其の質を變ずることはない。正宗の名刀に至りては、常に之を磨き、之を拭ふにあらざれば、忽ち腐銹を生じて刃は虧け、身は蝕ひ、遂には新割にも劣るに至るのである。然るに古來、明光々として萬國に冠たりし我が日本魂なる名刀も、拜金主義と、物質主義の風潮に吹き曝されて、近來漸く腐銹を生ぜんとして來た。唯幸に日清、日露兩戰役の荒砥に掛けて、僅に其の銹を研ぎ落したるも、而も常に陸離たる光芒と、鋭利なる切味を保たしめ、何時にても其の用に應ぜしむるには、平常の拭磨

【鐵礦と名刀】

こそ大切である。夫れ鐵礦より名刀を作るは、困難なるも、鋼塊より之を作るは、比較的容易である。然れば鋼塊となつて生れ來りたる我が國民は、鐵礦として生れたる他國民に比し、精神修養上多大の天惠を有せるものと云はねばならぬ。我が國民たるもの、此の天惠を空しうすることなく、益、切磋琢磨して、萬邦無比の此の皇國を無窮に擁護せねばならぬのである。

されど又戰鬪なるものは、決して精神のみで勝てるものではない。例へば百人の決死隊、劍を揮つて突撃するも、隘路を扼せる一門の機關銃に敵することは出來ない。將士肉彈となつて敵艦に打つ付かるも、巡洋艦は遂に戰艦に及ばぬのである。卽ち精神如何に剛勇

【一挺の銃は遂に一門の砲に敵せず】

なるも、一挺の銃は、到底一門の砲に勝てないのである。併しながら百發百中の一砲は、克く百發一中の百砲に抗することが出來る。是に於てか技術なるものの必要が起るのである。故に日本魂なるものも、熟練なる技術と、堅鋭なる物質的勢力とがあつて、始めて完全なる奏功を見ることが出來るのである。我に日本魂あり、軍艦なくとも、大砲なくとも、戰爭は何時でも勝てるなどと、迷想を懷くものあらば、是れ國家を誤るの賊子にして、噬臍の悔何ぞ及ばざるに至るであらう。

勢力相如く一隻の戰艦を以て、一隻の戰艦と戰へと言はゞ、吾人は必ず勝つべきを誓ふも、一隻の戰艦を以て、二隻の戰艦と戰へと言はゞ、吾人は或は其の勝つ能はざるを憂ふるものである。

二十　戰後の覺悟

一たび清國を破つて、漸く世界に存在を認められたる、我が帝國は、再び露國に勝つに及んで、嶄然として世界列強の班に伍するに至り、今や國運隆々として旭日昇天の勢あるに至つた。世界を以て白人の爲めに造られたるかの如く、己惚れて居る歐米人中には、早くも嫉妬の眼と、僻み根性とを以て、我を

【黄禍說東力西漸】

誣ふるに好戰國民を以てし、或は黄禍說を唱道し、或は東力西漸を憂惧し、中にも或國の如きは、我が國勢の隆昌を憂ふるの餘り、嫩にして摘まずんば斧を用ふるに至らんとの懸念を以て、頻に我に對して、挑

【隣家の壁】

戰的態度を執つて居るものもある。隣家の壁を高くするは、或は彼の勝手たるべきも、強風一過、我が屋上に倒るゝの虞あるに至

れば、我も亦之に應ずるの途を講ぜねばならぬ。吾人の隣家の壁は漸く高くして、已に我が家の光線を遮らんとして居る。我も亦今にして屋を高うし、階を重ぬるにあらざれば、我等の家族は日光缺乏の爲め、遂に病に斃るゝか、否れば壁倒れに壓死するに至るであらう。

【長屋生活と屋敷住居】今や我が家の負擔は非常に大である。此の上屋を高うし、階を重ぬるは、隨分苦しいであらう。併し是れ又已むを得ざる勢である。長屋生活と、屋敷住居とは、其の日々の入費に於て、種々の掛物に於て、相違あるは、是れ自然の結果である。若し屋敷住居の費用を厭ふならば、再び元の長屋生活に舞戻るより外はないのである。

抑も國力充實、財政整理、殖産興業、民力休養、皆是れ今日我が帝國に於て爲さねばならぬ所にして、其の何れを先きにすべきかは、正に經世家の攻究すべき問題である。而して

【軍事と政事的研究】吾人は軍人として政事に容喙するの自由を有せざるも、軍人の見地よりして、今日軍事上に於ける帝國の地位と、列國の形勢とを考査して、之に應ずる策を建て、之を國民に警告するは、吾人の義務であると信ずる。併しながら是の如きは、元と本書の目的とする所でない。故に茲には唯極めて簡單に、吾人の希望を述べて、以て卷末の結と爲さんと欲するのである。

【國是】凡そ一國には必ず國是なるものがある、米國の唱ふる「モンロー」主義、露國の取りたる侵略主義、英吉利、獨逸の帝國主義、瑞西、白耳義の中立主義など、即ち國是である。政策は時の爲政者に依つて變更左右せらるゝも、國是は大權の發動と、國民の輿論に依るの外、猥に政府の意見に依つて動かさるゝものでない。而して國是には、政事的並に軍事的の兩面がある。已に軍國主義を以て國是

【軍是】と爲す以上は、之に應ずる軍是なるものが確立せられねばならぬ。例へば英は海主陸從主義を以て、露は陸主海從主義を以て、各軍是として居る。然るに我が帝國に於ては、或は海主陸從を唱へ、或は陸主海從を說き、未だ上下一貫せる國防の方針なるものを認めない。其の陸を主とするか、海を主とするかは、今茲に論ぜず、唯主を充實する爲には、從は之を犠牲に供するは、已むを得ざる所である。

【富國にして而して後に強兵か強兵にして而して後に富國か】夫れ富國にして而して後に強兵を養ひ得るか、將た強兵にして而して後に富國と爲り得るか、史を繙いて之を案ずれば、古來富國にして、久しく強兵を保ち得たるもの稀なると共に、強兵にして永く貧國に苦みたるものも、亦甚だ稀である。畢竟富は多くの場合に於て、人間を墮落せしむるものである。貧は多くの場合に於て人間を激勵するものである。希臘、羅馬の衰滅も、我が源平の興亡も、

【元氣ある貧と墮落せる富】皆是れ墮落せる富が、元氣ある貧に打ち負けたのである。前車の覆るは、後車の戒とかで、我が國民にして、常に國力の緊張を希ふならば、兵を強くして、多くの富を貪らないのである。徒に貧を嘆ちて、武備を忽にせんか、國家の前途は誠に憂ふべき至りである。

【富國弱兵】古より富國弱兵にして、能く其の社稷を保ち得たるものあるを聞かない。併しながら、此に強兵と稱するは、徒に勇を恃んで、戰を好むを云ふのではない。唯國防を充實して、外侮を禦ぐに足る丈の武備を云ふのである。戰爭の悲慘にして、人道に反するは、

前既に述べた如くである。而も此の戰爭を未發に防ぐものは、平和會議にあらず、仲裁裁判にあらず、唯其の國の軍備である。

凡そ平和の保障の爲めに要する軍備費は、戰爭の爲めに投ずる軍事費よりも、遙に廉價である。日露役戰に要せし我が軍事費は、陸海軍を合せて、實に十五億餘圓の巨額に達した。若し戰前に於て假に其の十分の一を投じ、戰艦十隻を製造し置きたらんには、露國は彼の如き暴慢なる擧動を執ることなく、從つて戰爭を未發に防ぐことが出來たであらう。更に一歩を進め、若し不幸にして今後或國と開戰するの已むを得ざるに至りしとせんか、敗戰の爲めに被る損害は、豫め軍備充實の爲めに要する經費に比して、幾十倍に達するかも知れない。過般の戰爭に於て、露國の軍費約二十八億圓、之に樺太、滿洲に於ける土地並に造營物等を合算すれば、其の額は更に驚くべき多額に達するであらう。今之を彼我海軍のみに就きて比較するに、我が海軍軍事費は、總額二億二千五百餘萬圓(陸軍軍事費の約五・五分の一)にして、而も其の内より日進、春日の購入費、筑波、生駒等の建造費、並に我が海軍に於て捕獲したる艦船物品の價格等を計算するときは、實際戰爭の爲めに被りたる損害は、僅に六千七百餘萬圓に過ぎない。之に反し戰敗國たる露國に於ては、其の亡失したる艦船のみにても其の額尠くも四億圓を降らないであらう。

抑も生命保險や、火災保險は早世したる時、又は火災に罹りたる時の利益のみにして、豫め死亡や火災を防止するの力はない。されど軍備は啻に開戰の際に於ける勝利を保險するのみならず、尙ほ戰爭を未發に防ぐの效力がある。故に苟くも保險の必要を認むる人は、軍備充實のより多く必要なるを覺り得るであらう。

雨は牖戸の閉るを待つて、始めて降るものにあらず。今日にして明日の變化を窺測し能はざるは、現時に於ける國際關係である。【現時に於ける國際關係】利害一たび相反すれば、今日の與國も、明日の敵國と爲り、國力一たび衰ふれば、昨日の獨立國も、今日は他國の屬邦と爲るもの、敢て珍らしくない。本書稿を起してより未だ一年ならぬに、大韓國は日本朝鮮州と改まり、日露協商結ばれて、昨の仇敵も、今や親友となつた。而も一年以前に起工したる戰艦は、今日尙ほ未だ竣工しない。抑も國際の紛擾は、國技館の相撲と異り、我が軍備の氣合の熟するを待つて突れるものでない。縱令立ち遲れて、唯一突に突き落されても、物言ひを付くべき行司も居らねば、審判を爲すべき四本柱の檢査役も居らないのである。【國際の紛擾と國技館の相撲】さればとて第二の日進、春日は、さう何時でもあるものではない。億兆の金を積むも、一隻の驅逐艦さへ得られぬこともあるであらう。吾人は我が國民が常に浦鹽艦隊の爲めに東京灣を嚇かされた當時、並に波爾的艦隊がホンコーへ灣を出發したる當時の感を忘れざらんことを望むのである。

國大と雖も、戰を好む時は必ず亡び、天下安しと雖も、戰を忘るゝ時は必ず危し。

日本海海戰日本公報

（東郷聯合艦隊司令長官報告）

第一

（二十七日午後著電）

敵艦見ゆとの警報に接し聯合艦隊は直に出動之を撃滅せんとす本日天氣晴朗なれども波高し

第二

（同日夜著電）

聯合艦隊は本日沖の島附近に於て敵艦隊を邀撃し大に之を破り敵艦少くも四隻を撃沈し其他には多大の損害を與へたり我艦隊には損害少し驅逐隊水雷艇隊は日沒より襲撃を決行せり

第三

（二十九日午前著電）

聯合艦隊の主力は二十七日以來殘敵に對して追撃を續行し二十八日竹島附近に於て敵艦「ニコライ」第一世（戰艦）、「アリョール」（戰艦）、「セニャーウヰン」（裝甲海防艦）、「アプラクシン」（裝甲海防艦）及「イズムルード」（巡洋艦）より成る一群に會して之を攻撃せしに「イズムルード」は分離して逃去せしが他の四艦は須臾にして降伏せり我艦隊には損害なし

捕虜の言に依れば二十七日の戰鬪に於て沈沒したる敵艦は「ボロヂノ」（戰艦）、「アレクサンドル」第三世（戰艦）、「ジェ

「ムチウグ」(巡洋艦)外三隻なりと云ふ
捕虜海軍少將ネボガトフ以下約二千

第四

（三十日午後着電）

五月二十七日午後より翌二十八日に亘り沖の島附近より鬱陵島附近までの海戰を「日本海の海戰」と呼稱す

第五

（同上）

聯合艦隊の大部は前に電報したる如く一昨二十八日午後竹島附近に於て敗殘敵艦隊の主力を包圍攻擊して其降伏を受け追擊を中止し之が處分に從事中午後三時頃更に南西方面に敵艦「アドミラル、ウシャーコフ」の北走するを發見し磐手、八雲は直に之を追擊し先づ降伏を勸告せしも敵之に應ぜざりし故午後六時過已むを得ず之を擊沈し其生存者三百餘名を救助收容せり又午後五時北西に敵艦「ドミトリー、ドンスコイ」を發見し第四戰隊及第二驅逐隊之に追及し日沒後に至るまで猛烈に砲擊せしも擊沈するに至らず夜に至り第二驅逐隊之を襲擊し其結果不明なりしが昨日に至り第二驅逐隊は「ドミトリー、ドンスコイ」の鬱陵島の東南岸に擱坐せるを發見し目下春日と共に其處分中なり又漣は一昨二十八日夕鬱陵島南方に於て敵の驅逐艦「ベドウイ」を捕獲せり同艦には二十七日の戰鬪中沈沒したる敵の旗艦「クニャージ、スウォーロフ」より敵艦隊司令長官ロジェストウエンスキー中將、エンクィスト(？)少將及幕僚以下八十餘名移乘し居りしを以て悉く之を捕虜とせり

右兩將官は共に重傷なり又千歳は一昨二十八日朝北航の途上敵の驅逐艦一隻を發見して之を擊沈し新高及叢雲は同日正午頃竹邊灣附近にて敵の驅逐艦一隻を擊破して擱岸せしめたるの報告に接せり今までに得たる諸報告及捕虜の言を綜合するに二十七日より二十八日に亘れる戰鬪に於て擊沈したる敵艦は「クニャージ、スウォーロフ」、「アレクサンドル」三世、「ボロヂノ」、「ドミトリー、ドンスコイ」、「アド

ミラル、ナヒーモフ」、「ウラヂーミル、モノマーフ」、「ジェムチウグ」、「アドミラル、ウシャーコフ」、假裝巡洋艦一隻、驅逐艦二隻にして捕獲艦は「ニコライ」一世、「アリョール」、「アドミラル、アプラクシン」、「アドミラル、セニャーウヰン」、「ベドウイ」の五隻なり尙ほ捕虜の言に依れば敵の戰艦「オスラービヤ」は二十七日午後三時、四時の交大破の後沈沒し又「ナワリン」も沈沒せりと云ふ其外第三戰隊は同日日沒頃敵艦「アルマーズ」が進退自由を失ひ將に沈沒せんとするを目擊せしと云ふも暫く疑を存し未だ報告に接せざる二十七日日沒後より決行したる我驅逐隊、水雷艇隊襲擊の成果と共に之を後日に調査報告せんとす

我艦隊諸艦艇の損害に就きては未だ詳細の報告に接せざるも本職の視界内に在りしものには一も大破したるものなく孰れも尙ほ作戰任務に從事しつゝあり死傷も未だ調査に暇なきも第一戰隊に於て將校以下四百餘名あり

依仁親王殿下は御無事に在らせられ三須司令官は二十七日の海戰に輕傷せり

第六　（同上）

「オスラービヤ」(戰艦)、「ナワリン」(戰艦)の沈沒は確實なりと認む

(備考)戰艦「シソイ、ウェリーキー」も亦二十八日午前沈沒せるの確報に接せり故に敵の損害を計算すること左の如し

戰艦	「クニャージ、スウォーロフ」(一三五一六噸)	擊沈
同	「イムペラートル、アレクサンドル」三世(一三五一六噸)	擊沈
同	「ボロヂノ」(一三五一六噸)	擊沈
同	「オスラービヤ」(一二六七四噸)	擊沈
同	「シソイ、ウェリーキー」(一〇四〇〇噸)	擊沈
同	「ナワリン」(一〇二〇六噸)	擊沈
巡洋艦	「アドミラル、ナヒーモフ」(八五二四噸)	擊沈
同	「トミトリー、ドンスコイ」(六二〇〇噸)	擊沈
同	「ウラヂーミル、モノマーフ」(五五九三噸)	擊沈
同	「スウエトラーナ」(三七二七噸)	擊沈
同	「ジェムチウグ」(三一〇六噸)	擊沈
海防艦	「アドミラル、ウシャーコフ」(四一二六噸)	擊沈
特務艦	「カムチャーツカ」(七二〇〇噸)	擊沈
同	「イルツイシ」(七五〇七噸)	擊沈
驅逐艦	三隻	擊沈

戰艦「アリヨール」（一三五一六噸）　捕獲
同「インペラートル、ニコライ一世」（九五九四噸）　捕獲
海防艦「ゲネラル、アドミラル、アプラクシン」（四一二六噸）、　捕獲
同「アドミラル、セニャーウヰン」（四九六〇噸）　捕獲
驅逐艦「ベドウイ」（三五〇噸）　捕獲

即ち敵の損害を艦種に區別すれば左の如し

	擊沈	捕獲	計
戰艦	六隻	二隻	八隻
巡洋艦	五隻		五隻
海防艦	一隻	二隻	三隻
特務船	二隻		二隻
驅逐艦	三隻	一隻	四隻
總計	十七隻	五隻	二十二隻
噸數總計	十五萬三千四百十一噸		

右の外巡洋艦「アルマーズ」（三二八五噸）は沈沒の疑あり
俘虜中將ロジエストウエンスキー、少將ネボカトフ、少將エンクイスト（?）以下三千餘名

（三十一日著電）

第七

佐世保軍港に送りし各戰利艦は昨三十日夕刻までに其の乘員の陸送を了り全く我有に歸せりロジエストウエンスキー中將は海軍病院に收容せられたり前報告に戰利艦「ベドウイ」の捕虜中に「エンクイスト」少將あるを電報したれども後者は全く無線電信の誤謬なるを知れり取消されたし

露國病院船「アリヨール」、「カストローマ」の二隻抑留に關する聯合艦隊司令長官報告の要領

五月二十七日敵艦隊に從ひ朝鮮海峽に來れる露國病院船二隻は海牙條約違反の嫌疑あり且つ作戰上重要の必要ありたるに依り一時之を抑留し翌二十八日佐世保軍港に引致せしめたり

（三十一日著電）

第八

其後續々到達せる麾下各部隊よりの報告を綜合するに敵の戰艦「オスラービヤ」は二十七日海戰の初期に大破して隊列を脫し午後三時過第一に沈沒したること確實なり又戰艦

「シソイ、ウェリーキー」巡洋艦「アドミラル、ナヒーモフ」及「ウラヂーミル、モノマーフ」は已に二十七日の晝戰に撃破せられたる後同夜我驅逐隊水雷艇隊の水雷攻撃に大破し全く戰鬪航海力を失ひ對馬附近に漂流し翌朝に至り我假裝巡洋艦信濃丸、八幡丸、臺南丸、佐渡丸等之を發見して將に捕獲せんとせしも幾何もなく皆沈沒せり其生存者約九十五名は右假裝巡洋艦及沿岸民家に收容せられたり又戰艦「ナワリン」は二十七日日沒後我水雷艇隊攻撃の結果水雷四發命中し沈沒せること其生存捕虜の言に依り確實なり又敵の巡洋艦「スウェトラーナ」は二十八日午前九時頃竹邊灣沖に於て新高、音羽の一隊に追撃せられ遂に撃沈せられたりとの新高艦長の報告に接す其他敵艦「アウローラ」、「アルマーズ」も二十七日夜の我水雷攻撃のため撃沈せられたるの疑あり又前報告撃沈敵艦中に「ジェムチウグ」を算したれども稍疑あるを以て正確の調査を了るまで暫く之を取消す

茲に報告する所と前電報告とを綜合すれば敵艦隊の主力たりし戰艦八隻、裝甲巡洋艦三隻、及裝甲海防艦三隻は悉く撃沈又は捕獲せられ其手足たりし二等巡洋艦以下も大部分撃滅せられたるを以て此一戰に於て敵艦隊は事實上已に全滅に歸せり我艦隊の損失に付ては其後の報告に依り二十七日の夜襲に際して三十四號艇三十五號艇及六十九號艇の三隻が敵の防禦砲火に撃沈せられ其乘員の大部分は僚艇に救助收容せられたるの外損失と認むべきものなく驅逐艦以上は其損害の程度豫想外に尠く一として今後の戰鬪航海に支障あるものなし若し夫れ麾下將卒の死傷に至りては對戰の頭初に當り其多數を豫期したるに其後の死傷報告比較的僅少にして今日の所之を八百以內に算す是等死傷報告は到達次第着々電報し成るべく速に家族の慰安に努めんとす

今回の海戰は彼我海軍共に殆ど其全力を捧げて對抗し戰場の局面頗る宏大なりしのみならず當日の天候濛氣深くして砲煙煤煙を混ぜざるも尙ほ展望五里以外に及ばず爲に晝戰に於ても麾下各部隊戰狀を本職の眼界に置くこと能はず加之戰鬪二晝夜に亙り麾下各部隊は各方面に離散せる敵を追撃し今尙ほ戰後の諸任務に從事せるものさへあれば全軍の戰鬪詳報に至りては尙ほ數日の後にあらざれば進達すること難し

第九

（三十一日著電）

敵艦「ドミトリー、ドンスコイ」の生存者を收容して本日午後歸合したる春日艦長の報告に據れば「ドンスコイ」は一昨二十九日朝排水を中止し「キングストン」を開き自ら沈沒し其乘員は盡く鬱陵島に上陸したるものにして同艦の生存者中には沈沒敵艦「オスラービヤ」及驅逐艦「ブイヌイ」よりの收容者あり右「ブイヌイ」は二十七日午後敵の旗艦沈沒の前司令長官ロジェストウエンスキー以下幕僚を收容し此際一彈を受け尋で「オスラービヤ」の乘員三百餘名を收容したるも航海困難なるを以て司令長官以下幕僚を僚艦「ベドウイ」に移し北方に逃走中二十八日朝「ドンスコイ」に邂逅し其乘員を悉く該艦に移し「ブイヌイ」は自ら沈沒せりと云ふ又「オスラービヤ」生存者の言に據れば同艦は二十七日戰鬪の初期第一の命中彈を司令塔に被り司令官フェリケルザム直に戰死し次で連續慘烈なる集彈を被り午後三時過僚艦の間に沈沒せりと云ふ又「ドンスコイ」生存者の言に據れば二十七日晝戰中驅逐艦二隻が亂軍の中に沈沒せるを目擊せりと之を事實とすれば敵驅逐艦の沈沒したるもの前後六隻と爲れり

（備考）「ブイヌイ」はロジェストウエンスキー乘艦の上浦港に到達せる旨露國に於て公表せりとの噂するものあり

第十

（六月一日著電）

一昨三十日北方の追擊より歸り直に南方の搜索に赴きたる磐手、八雲の一隊は只今（六月一日午後）歸著せり同隊は鳥島附近より上海航路の兩側を隈なく搜索せしも遂に敵影を見る能はざりしと云ふ又島村第二艦隊司令官（磐手坐乘）の報告に依れば二十七日の海戰中午後三時七分敵艦「ジェムチウグ」が磐手の前面約三千米突に於て同艦の猛射に遭ひ約十分時にして沈沒せしこと確實なりと當時該艦火災に罹り其騰煙海面を掩ひ我他の諸艦よりは「ジェムチウグ」の沈

沒を目撃する能はざりしを以て先に暫く疑を存し置きしものなり

第十一

（六月二日著電）

敵の特務艦船中去る二十七日の海戰に撃沈せられたるは假装巡洋艦「ウラール」、運送船「イルツイシ」、工作船「カムチヤーツカ」外一隻なり右一隻は敵艦隊が給炭用として隨伴したる曳船二隻中の一にして捕虜の言に據り其沈沒したるを知れり

海戰當時戰場に現在せし敵の艦船中今日までに其行方不明なる者は二等巡洋艦「オレーグ」、「アウローラ」、三等巡洋艦「イズムルード」、「アルマーズ」、特務艦三隻、驅逐艦二隻、曳船一隻にして其他は悉く撃滅又は捕獲せられたり右殘艦中「オレーグ」、「アウローラ」は二十七日の海戰中我第三戰隊の射界内に入り時々火災を起せしを目撃したるを以て假令殘存せりとするも其の戰闘力の回復には多數の日子を要すべしと信ず

確定詳報

天佑と神助に因り我聯合艦隊は五月二十七八日敵の第二、第三艦隊と日本海に戰ひて遂に殆ど之を撃滅することを得たり始め敵艦隊の南洋に出現するや上命に基き當隊は豫め之を近海に迎撃するの計畫を定め朝鮮海峽に全力を集中して徐に敵の北行を待ちしが敵は一時安南沿岸に寄泊したるの後漸次北行し來りしを以て其我近海に到達すべき數日前より豫報の如く數隻の哨艦を南方警戒線に配備し各戰列部隊は一切の戰備を整へ直に出動し得るの姿勢を持して各其根據地に泊在せり果然二十七日午前五時に至り南方哨艦の一隻信濃丸の無線電信は敵艦隊二〇三地點に見ゆ敵は東水道に向ふものの如しと警報し全軍踴躍直に發動し各部隊は豫定の部署に準して對敵行動を開始せり午前七時內方警戒線の左翼哨艦たりし和泉亦敵艦隊を發見して敵既に宇久島の

北西二十五海里の地點に達し北東に航進するを報じ巡洋艦隊（片岡中將直率）東郷（正路）戰隊續で出羽戰隊も午前十時、十一時の交壹岐、對馬の間に於て敵と觸接し爾後沖の島附近に至るまで此等の諸隊は時々敵の砲撃を受けしも終始能く之と觸接を保持し詳に時々刻々の敵情を電報せしかば此日海上濛氣深く展望五海里以外に及ばざりしも數十海里を隔つる敵影恰も眼界に映ずるが如く未だ敵を見ざる前既に敵の戰列部隊は其第二、第三艦隊の全力にして特務艦船約七隻を伴ふこと敵の陣形は二列縱陣にして其主力は右翼列の先頭に占位し特務艦船は後尾に續行せること又敵の速力は約十二節にして尙ほ北東に航進せること等を知り本職は之に依り我主力を以て午後二時頃沖の島附近に敵を迎へ先づ其左翼列先頭より擊破せんとする心算を立つるを得たり主力隊（主戰艦隊（東郷大將直率）裝甲巡洋艦隊（上村中將直率））瓜生戰隊及各驅逐隊は正午頃既に沖の島北方約十海里に達し敵の左側に出でんがため更に西方に針路を執りしが午後一時三十分頃出羽戰隊、巡洋艦隊及東郷（正路）戰隊等も敵と觸接を保ちつゝ相前後して漸次に來り合し同時四十五分に至り正に我左舷南方數海里に始て敵影を發見せり敵は豫期の如く其右翼列の先頭に「ボロヂノ」型戰艦四隻の主力艦隊を置き「オスラービヤ」、「シソイ、ウェリーキー」、「ナワリン」、「ナヒーモフ」より成る一隊左翼列の先頭に占位し「ニコライ」一世外海防艦二隻より成る一隊之に次ぎ「ジエムチウグ」、「イズムルード」の二艦は兩列の間に介存して前方を警戒せる者の如く尙ほ其後方濛氣の中に「オレーグ」、「アウローラ」以下二三等巡洋艦の一隊「ドミトリー、ドンスコイ」、「ウラヂーミル、モノマーフ」其他特務艦等數海里に亙りて連綿續航するを仄に認むるを得たり是に於て全軍に戰鬪開始を令し同時五十五分視界内に在る我全艦隊に對し『皇國の興廢此一戰に在り各員一層奮勵努力せよ』との信號を揭揚せり而して主戰艦隊は少時南西に向首し敵と反航通過すると見せしが午後二時五分急に東に折れ其正面を變じて斜に敵の先頭を壓迫し裝甲巡洋艦隊も續航して其後に連り出羽戰隊、瓜生戰隊、巡洋艦隊及東郷（正路）戰隊は豫定戰策に準し孰も南下して敵の後尾を衝けり之れを當日戰鬪開始の際に於ける彼我の對勢とす

主力艦隊の戰況

敵の先頭部隊は主戰艦隊の壓迫を受けて稍其右舷に轉舵し午後二時八分彼より砲火を開始せしかば我は暫く之に耐へて射距離六千米突に入るに及び猛烈に敵の兩先頭艦に集彈せり敵は之が爲め益東南に撃壓せらるゝものの如く其左右兩列共に漸次東方に變針し自然に不規則なる單縱陣を形成して我と竝航の姿勢を執り其左翼列の先頭艦たる「オスラービヤ」の如きは須臾にして撃破せられ大火災を起して戰列より脫せり此時に當り裝甲巡洋艦隊も既に盡く主戰艦隊の後方に列し我全隊の掩撃砲火は射距離の短縮と共に益顯著なる效果を呈し敵の旗艦「クニャージ、スウォーロフ」二番艦「アレクサンドル」三世も大火災に罹り戰列を離れ敵の陣形愈亂れ後續の諸艦亦火災に罹れるもの多く其騰煙西風に靉きて忽ち海上一面を蔽ひ濛氣と共に全く敵影を包み主戰艦隊の如きは爲に一時射撃を中止せるの狀況なり又我軍に於ても各艦多少の損害を蒙り淺間の如きは後部水線に近く三彈を受けて舵機を損じ且つ浸水甚しく一時止むを得ず列外に落伍せしが幾もなく應急修理して再び戰列に入れり

之れ午後二時四十五分に於ける彼我主力の戰況にして勝敗は既に此間に決せり我主力隊は如此敵を南方に撃壓し煙霧の中敵影を發見する毎に緩除に之を砲撃しつゝ午後三時頃には既に敵の前路に出で約南東に向針しありしが敵は俄に北方に向首し我後尾を回りて北走せんとするが如きを以て主戰艦隊は急に左十六點に一齊回頭し日進を嚮導として北西に向ひ裝甲巡洋艦隊も其通跡を過ぎたる後正面を變じて之に續き再び敵を南方に撃壓し之を猛射し午後三時七分敵艦「シェムチウグ」は裝甲巡洋艦隊の後方に突進し來りしも遂に我砲火に因り多大の損害を蒙り既に戰鬪力を失ひたる「オスラービヤ」も同時十分に沈沒し孤立せし「クニャージ、スウォーロフ」は益大破して其一檣二煙突を失ひ全艦煙焰に包まれて操縱する能はず混亂せる爾餘の諸敵艦も更に多大の損害を受けつゝ又其針路を東方に採れり是に於て主戰艦隊も亦一齊に左十六點に回頭し裝甲巡洋艦隊之に次ぎ逃ぐるを追うて益敗敵を掩撃し時々機を見て水雷發射をも試み午後四時四十五分頃に至るまで主隊の戰鬪に就ては別に著しき現象なく終始敵を南方に壓して砲撃を繼續したるに

過ぎず此間壯烈の事績として特記すべきは千早及朧瀬(順太郎)驅逐隊が午後三時四十分の頃鈴木(貫太郎)驅逐隊が午後四時四十五分の頃敵の廢艦「スウォーロフ」に對し勇敢なる水雷攻撃を決行したることにて前者の奏效は確實ならざりしも後者より發せし一水雷は敵艦の左舷後部に命中し須臾にして艦體十度許傾斜するを見たり此兩回の襲撃中朧瀬驅逐隊の不知火及鈴木驅逐隊の朝潮は附近敵艦より猛射せられ共に一彈を受けて一時危殆に陷りしも幸にして遂に無事なることを得たり午後四時四十分の頃に至り敵は北方に血路を開くを斷念せしにや漸次南方に向ひて遁走するものの如く依て我主隊は裝甲巡洋艦隊を先頭とし之を追撃せしが少時にして遂に敵影を煙霧の中に失し南下すること約八海里行く行く我右方に離散彷徨せる敵の二等巡洋艦以下特務艦船等を緩射し午後五時三十分主力艦隊は再び針路を北方に執りて敵の主力を索め裝甲巡洋艦隊は南西方に折れ一敵の巡洋艦に迫り爾後日沒に至るまで此の兩戰隊は全く離して各別の行動を執り又相見る能はざりき

主戰艦隊は午後五時四十分頃其左舷近距離に在りし敵の特務艦「ウラール」に一撃を加へて直に之を撃沈し尙ほ北方に索戰し航進せる際左舷艦首に當り敵主力の殘艦約六隻の一群が北東に向ひ遁走しつゝあるを發見し直に近づきて之と竝航戰を再始し漸次敵の前方に出でて其先頭を撃壓せしかば敵は始め北東の針路を採りしも次第に西方に屈折し遂には北西に向針するに至れり此竝航戰は午後六時より日沒まで連續し敵は大破の餘其砲力減少せるに反し我沈著なる射撃は益其威力を逞うし「アレクサンドル」三世と見えたる敵艦は早く列外に出でて後方に落伍し先頭に占位せし「ボロヂノ」型戰艦は午後六時四十分頃より大火災を起し七時二十三分に至り俄然爆煙に包まれ一瞬時に沈沒せり蓋し火災の彈藥庫に及びしならんか又當時南方に在りて敵の巡洋艦隊を北方に追撃しつゝありし裝甲巡洋艦隊の諸艦は已に傾斜して進退自由ならざる「ボロヂノ」型敵艦一隻が午後七時七分敵艦「ナヒーモフ」の側に來り遂に顚覆沈沒せるを目撃せり後日捕虜の言に依り是れ即ち「アレクサンドル」三世にして主戰艦隊の見たるものは「ボロヂノ」なりしを知るを得たり

此時夕陽已に春き我が驅逐隊、水雷艇隊は東南北の三面より漸次に敵に迫り已に襲擊準備姿勢を執れるを以て主戰艦隊は次第に敵に對する壓迫を弛めて日沒(午後七時二十八分)と共に東方に變針し同時に本職は龍田をして全軍北航して明朝鬱陵島に集合すべしと傳令せしめ玆に當日の晝戰を結了せり

出羽、瓜生戰隊、巡洋艦隊及東鄕(正路)戰隊の戰況

午後二時戰鬪開始の令下に出羽、瓜生戰隊巡洋艦隊、東鄕戰隊は孰れも我主力艦隊と分離し敵を左舷に見て反航南下し豫定戰策に準じて敵の後尾に占位せる特務部隊及「オレーグ」「アウローラ」、「スウェトラーナ」、「アルマーズ」、「ドミトリー、ドンスコイ」、「ウラヂーミル、モノマーフ」等の巡洋艦隊を脅威迫擊せり出羽、瓜生戰隊は終始共同連繫して午後二時四十五分より先づ敵の巡洋艦に對して反航戰を開始し漸次敵の後尾を旋擊して其右方に出で更に竝航戰を試み爾後優速力を利用し機宜我正面を變じて或は敵の左に顯れ又は右に繞り攻擊を持續すること約三十分にして敵の後方部隊は漸次に動搖潰亂し其の特務艦船の如きは遂に右往左往して爲す所を知らざるの狀態に陷れり此間午後三時を過ぐるの頃「アウローラ」と見えたる敵艦單獨敵中より突進し來りしも我が猛射に多大の損傷を負うて擊退せられ又午後三時四十分頃突擊し來りたる敵の驅逐艦三隻も爲す所なくして擊攘せられたり出羽、瓜生戰隊協力攻擊の效果は午後四時の交に及んで著しく發展し敵の後方部隊は全く潰亂して個々分裂し其諸艦船皆多少の損害を受けたるものの如く特務艦船中には既に操縱の自在を缺けるものあるを見るに至れり

瓜生戰隊は午後四時二十分頃三檣二煙突を有する敵の特務艦船一隻(或は「アナヅイリ」ならん)が一方に孤立するを認め直に近づきて擊沈し尋で四檣一煙突の特務艦船(或は「イルツイシ」ならん)を猛射して殆ど之を擊破せり此頃より巡洋艦隊、東鄕艦隊も來り加り出羽、瓜生戰隊と協同して共に潰亂せる敵の巡洋艦及特務艦船を掩擊しつゝありしが午後四時四十分の頃北方より我が主隊に壓せられたる敵の戰艦(或は海防艦)四隻南下し來りて其巡洋艦に合力せしか

ば瓜生戰隊、巡洋艦隊の如きは少時近距離に於て之と對戰するの苦境に陷り孰も多少の損害を受けしも幸に大ならざることを得たり

之より先き出羽戰隊の旗艦笠置は其左舷炭庫水線下に一彈を蒙りしが爾來浸水漸く增加し其應急修理のため波靜なる所に行くの止むを得ざるに至り出羽司令官は自ら笠置、千歳を率ゐ麾下の他艦は之を一時瓜生司令官の指揮の下に屬せしめ午後六時油谷灣に赴き其將旗を千歳に移し夜に入りて出港北行せしも笠置は修理に時間を要し遂に翌日の追擊に參加する能はざりき

又瓜生戰隊の旗艦浪速も後部水線に敵彈を蒙り爲に午後五時十分同戰隊は一時避戰して其損所の應急修理を爲せり

此時に當り敵は南北兩方面共に既に全軍潰亂滅裂の悲境に在りしを以て午後五時三十分の頃裝甲巡洋艦隊が我主隊と分離して此方面に來り南方より敵の巡洋艦を追擊すると同時に敵は群を爲して悉く北方に遁走し瓜生艦隊、巡洋艦隊及東鄕戰隊も共に之を追擊せしが其途上に於て既に進退の自由を失せる敵の廢艦「クニャージ、スウォーロフ」及工作船「カムチャーツカ」を發見し巡洋艦隊、東鄕戰隊は直に其擊滅に轉じて午後七時十分「カムチャーツカ」を擊沈し尋で巡洋艦隊に隨伴せる富士本水雷艇隊は突進して「クニャージ、スウォーロフ」を襲擊し同艦は尙ほ艦尾の小砲一門を以て最終の抵抗を試みしも遂に我が水雷二發の下に沈沒せり時に午後七時二十分なり幾もなく此等の諸戰隊は鬱陵島集合の電令に接し孰も戰を止めて北東に向進せり

各驅逐隊及水雷艇隊の戰況

二十七日の夜戰は晝戰の終結後直に各驅逐隊及水雷艇隊に依り猛烈果敢に開始せられたり

此日朝來南西の强風浪を揚ぐること高く小艇の操縱大に困難なるを認め本職が直率せし水雷艇隊の如きは晝戰開始に先ち暫く三浦灣に避泊せし程にて夕刻に至りて風較和ぎしも浪尙ほ靜らず洋中の水雷攻擊は我に不利尠からざるの狀況なりしも然も各驅逐隊及艇隊は此一遇の時機を失するを恐れ皆風濤を冒して日沒前に來り會し各先を爭うて敵に當り藤本驅逐隊は北方より矢島驅逐隊及河瀨艇隊は北東方向より敵主力の先頭を壓し吉島驅逐隊は東方より廣瀨(順太

郎)驅逐隊は南東より其後尾に迫り福田(昌輝)大瀧、近藤(常松)青山、河田の艇隊等は南東より敵の主力部隊及其左後に併行せる巡洋艦の一群に追尾し日沒の頃次第に三面包圍の形勢を爲せり敵は此勢威に屈したるにや日沒後倉皇南西に避け更に東方に變針したるものの如く午後八時十五分矢島驅逐隊が第一擊を敵主力艦隊の先頭に加へたるを始として各驅逐隊、水雷艇隊一時に突進して敵の周圍に蝟集し午後十一時頃に至るまで連續激烈なる肉薄襲擊を決行したり敵は日沒より探照砲火を以て極力防戰せしも遂に此攻擊に耐へず其隊艦相失して四分五裂の狀態となり各血路を求めて任意に運動せしかば我襲擊隊の追躡と共に茲に一場の大混戰を現出し少くも敵の戰艦「シソイ、ウェリーキー」裝甲巡洋艦「アドミラル、ナヒーモフ」及「モノマーフ」の三隻は此間我水雷に罹りて全く其戰鬪航海力を失ひ又我軍に於ても福田艇隊の第六十九號艇(司令艇)青山艇隊の第三十四號艇(司令艇)及河田艇隊の第三十五號艇の三隻は襲擊の際敵彈の爲め擊沈せられ驅逐艦春雨、曉、雷、夕霧、並に水雷艇雁、第六十八號、第三十三號艇等は敵彈又は衝觸等のために多少の損害を被り爾後一時戰鬪に參加し難く死傷も又比較的尠しとせず就中福田、青山及河田艇隊の死傷最も多し但し沈沒水雷艇三隻の乘員は友艇雁、第三十一號及第六十一號艇等に依り救助收容せられたり

後日捕虜の言を聞くに當夜水雷攻擊の猛烈なりしは殆ど言語に絕し我艦艇連續肉薄し來りしを以て其應接に遑なく且其距離餘り近き爲め備砲俯角の度を過ぎ照準する能はざりしと云ふ

前記のものの外鈴木(貫太郎)驅逐隊及爾餘の水雷艇隊は當夜他方面に索敵せしが鈴木驅逐隊は二十八日午前二時の比韓崎の北東微東約二十七海里の地點にて敵艦二隻の北走するを發見して直に之を襲擊し其一隻を轟沈せり後日生存捕虜の言に依れば轟沈せられたる此戰艦は敵艦「ナヴァリン」にして同艦は兩舷に連續二發宛の水雷命中し少時にして沈沒せりと云ふ爾餘の諸艇隊は終夜各方面を搜索せしも遂に獲る所なかりき

二十八日の一般戰況

二十八日黎明前日來の濛氣拭ふが如く主戰艦隊、裝甲巡洋

艦隊は既に鬱陵島の南方約二十海里に達し爾餘の戰隊並に前夜の襲撃を果したる各驅逐隊等も各航路を異にし順次後方より集合の途上に在り午前五時二十分本職は敵の退路を遮斷する爲め麾下巡洋艦隊を以て東西に捜索列を張らしめんとする際後方約六十海里に占位して北進しつゝありし巡洋艦隊は早くも敵影を發見して東方に當り艦隊の煤煙數條あるを警報す幾もなく同戰隊は敵に近づき復報じて曰く敵は戰艦四隻(後に至り一隻は海防艦たるを知る)巡洋艦二隻より成り今北東に向針すと是れ間はずして殘敵の主力たるや明なり此に於て主戰艦隊、裝甲巡洋艦隊は其針路を反轉し漸次東方に向ひて敵の前路を扼し東郷、瓜生戰隊も亦巡洋艦隊に合して敵の後方を抑へ午前十時三十分の頃竹島の南方約十八海里の地點に於て全く此敵を包圍せり敵は即ち戰艦「ニコライ」一世、「アリョール」、海防艦「ゲネラル、アドミラル、アプラクシン」、「アドミラル、セニャーウキン」及巡洋艦「イズムルード」の五隻にして他の一隻の巡洋艦は遂に南方に後れて當時其影を失す固より敗餘の敵艦已に多大の損傷を負へるのみならず我優勢に抵抗し得べきにあらざれば主戰艦隊、裝甲巡洋艦隊が先づ砲火を開くや須臾にして敵艦隊司令官ネボガトフ少將は其部下と共に降意を表し本職は特に其將校以上に帶劍を許して之を受けたり然るに敵艦「イズムルード」のみは降伏に先ち其快速力を以て南方に遁れ我東郷戰隊に遮られて復東方に走れり此時油谷灣より歸港したる千歳も其朝途上に於て敵の驅逐艦一隻を擊沈したる後此地に來り會し直に轉じて「イズムルード」に追尾せしが遂に及ばずして之を北方に逸せり

是より先き瓜生戰隊が北航の途上に在るとき午前七時の頃西方に一隻の敵影を發見し音羽、新高の一小隊を有馬音羽艦長の指揮の下に之が擊滅のため分派せしが同隊は午前九時に至りて漸く敵に近接し其敵艦「スウェトラーナ」が一驅逐艦を伴へるものなるを知り益之を追窮し戰鬪約一時間の後午前十一時六分竹邊灣沖に於て全く「スウェトラーナ」を擊沈し尚新高は其時來會したる驅逐艦叢雲と共に殘れる敵の驅逐艦「ブィースツルイ」を追擊し午前十一時五十分遂に之を竹邊灣の北方約五海里の無名灣に擱岸破滅せしめたり而して右二敵艦の生存乘員は我特務艦亞米利加丸及春日丸に

依り悉く救助收容せられたり

敵の降伏を受けたる聯合艦隊の大部は尚後尚其地附近に漂泊して敵艦四隻の捕獲處分に從事しつゝありしが午後二時頃南方より戰艦「アドミラル、ウシャーコフ」の來るを發見し磐手、八雲の一隊は直に之に向ひ午後五時過其南走するを追及して先づ降伏を勸告せしも之に應ぜず反て彼より砲火を開きしかば止むを得ず砲擊して遂に之を擊沈し其生存者約三百餘名を救助收容せり又驅逐艦漣、陽炎は午後三時三十分の頃鬱陵島の南西約四十海里に於て東方より遁走し來る敵の驅逐艦二隻を發見し極力之を北西に追躡し午後四時四十五分追及して戰鬪を開始せしに敵の後續驅逐艦は白旗を揭げて降意を表せり依て漣は直に之を捕獲せしに此驅逐艦は「ベドウイ」にして敵艦隊司令長官ロジェストウエンスキー中將及其幕僚の移乘し居るを知り其乘員と共に之を捕虜と爲せり尚陽炎は他の驅逐艦を追擊して午後六時三十分に及びしも遂に之を北方に逸せり又午後五時頃西方に索敵したる瓜生戰隊及矢島驅逐隊は敵驅逐艦「ドミトリー、ドンスコイ」の北走するを發見し之を追尾して午後七時鬱陵島の南約三十海里に至りし頃恰も好し竹邊灣方向より來會しつゝありし音羽、新高の一隊並に驅逐艦朝霧、白雲、吹雪等が既に西方より敵に迫りて砲擊を開始し瓜生戰隊と共に之を夾擊するの好位を制し左右相待ちて日沒後まで之を猛擊し殆ど敵を擊破し得たるも未だ擊沈するに至らずして遂に夜に入り其影を失せり此攻擊中止と共に吹雪及矢島驅逐隊等連續之を襲擊し其效果不明なりしも翌朝に至り「ドミトリー、ドンスコイ」は鬱陵島の東南岸に漂ひ遂に沒沈したるを發見せり而して同島に上陸したる其の生存者は春日、吹雪等にて救助收容せられたり

聯合艦隊の大部が北方追擊の戰果を收むるに汲々たる際南方前日の戰場に於ても亦相應の鹵獲ありたり此日早朝戰場掃除の任務を持して出發したる特務艦信濃丸、臺南丸、又八幡丸は韓崎の北東約三十海里の地點に於て戰艦「シソイ、ウエリーキー」が前夜の水雷攻擊に傷つき將に沈沒せんとするを發見し之が捕獲の手續を了して其乘員を救助收容せり而して該艦は午前十一時零五分終に沈沒せり又驅逐艦不知火特務艦佐渡丸も午前五時三十分頃對馬琴崎の東方約五

海里に於て敵艦「アドミラル、ナヒーモフ」が沈沒に垂んとするに會し續て又た敵艦「ウラヂーミル、モノマーフ」が著しく傾斜して其附近に來るを發見し孰も佐渡丸にて捕獲處分を爲しゝに二艦共に大破して浸水甚しく遂に其乘員を救助し得たる後午前十時の交相前後して沈沒せり其時又敵の驅逐艦「グロームキー」も此附近に來りしが遽に北方に遁逃せしを以て不知火は直に之を追擊して蔚山沖に至り午前十一時三十分頃水雷艇六十三號と協力攻擊し敵砲の沈默するに及んで之を捕獲し其生存乘員を捕虜とせり

該艦も亦大破して遂に午後零時四十三分に沈沒したり其他麾下砲艦、特務艦等にて戰場附近の沿岸等を搜索して救助收容し得たる擊沈敵艦の乘員尠からず戰利艦五隻の捕虜と合して其數殆ど六千に達す

以上は五月二十七日午後より二十八日午後に亙れる海戰の經過にして其後當隊の數部は尙ほ遠く南方に敵を搜索せしも遂に又其隻影を見ず日本海を通過せんとせし敵艦隊約二十八隻にして我擊滅又は捕獲に洩れたりと認むるものは巡洋艦、驅逐艦及特務艦各數隻に過ぎず而して此の二日間の戰鬪に於て我艦隊の失ひたる所は水雷艇三隻のみにして其他多少の損害を蒙りたる者あるも一として今後の役務に支障あるものなし又死傷は全軍を通じ將校以下戰死百十六名負傷五百三十八名にして其細別は別に報告せるが如し

此對戰に於ける敵の兵力我と大差あるにあらず敵の將卒も亦其祖國のために極力奮鬪したるを認む然も我聯合艦隊が克く勝を制して前記の如き奇績を收め得たるものは一に天皇陛下の御稜威の致す所にして固より人爲の能くすべきにあらず殊に我軍の損失死傷の僅少なりしは歷代神靈の加護に依るものと信仰するの外なく嚮に敵に對し勇進敢戰したる麾下將卒も皆此成果を見るに及んで唯々感激の極言ふ所を知らざるものの如し

（備考）戰場に現れたる敵艦船

戰艦 八隻内
- 六隻 擊沈 「クニャージ、スウォーロフ」、「アレクサンドル三世」、「ボロヂノ」、「オスラービヤ」、「シソイ、ウェリーキー」、「ナワリン」
- 二隻 捕獲 「アリョール」、「ニコライ」一世

四隻 擊沈 「アドミラル、ナヒーモフ」、「ドミトリー、ドンスコイ」、「ウラヂーミル、モノマーフ」、「スウェトラーナ」

巡洋艦 九隻内
- 三隻 馬尼剌ニ逃走抑留「アウローラ」、「オレーグ」、「ジェムチウグ」
- 一隻 浦鹽斯德ヘ逃入「アルマーズ」
- 一隻 ウラヂミール灣ヘ逃走擱岸破壞「イズムルード」

海防艦 三隻内
- 二隻 捕獲「アプラクシン」、「セニャーウヰン」
- 一隻 擊沈「ウシャーコフ」

驅逐艦 九隻内
- 四隻 擊沈「ブイヌイ」、「ブイスツルイ」、「グロームキー」外一隻
- 一隻 捕獲「ベドウイ」
- 一隻 上海ヘ逃入武裝解除「ボードルイ」
- 一隻 上海ヘ遁逃ノ途損害ノ結果沈沒「ブレスチャーシチー」
- 一隻 不明
- 一隻 浦鹽ヘ逃入「ブラーウイ」

假裝巡洋艦 一隻 擊沈「ウラール」

特務船 六隻内
- 四隻 擊沈「カムチャーツカ」、「イルツイシ」、「アナヅイリ」、「ルス」
- 二隻 上海ヘ逃入武裝解除「コレーヤ」、「スウヰーリ」

病院船 二隻 抑留「アリヨール」、「カストローマ」、内「カストローマ」ハ解放

合計 三十七隻内
- 二十隻 擊沈
- 五隻 捕獲
- 二隻 逃走後破壞若クハ沈沒
- 六隻 逃走後抑留若クハ武裝解除
- 一隻 不明
- 二隻 抑留（一隻解放）
- 二隻 逃走

日本海海戰露國公報

（リネウヰッチ將軍五月二十九日附報告）

(1)

浦鹽斯德に入港したる巡洋艦「アルマーズ」の艦長が報ずる所に依れば娑羅的艦隊は五月二十七日對馬海峽に於て日本艦隊と交戰せり「ボロヂノ」、「オスラービヤ」兩戰闘艦及び巡洋艦一隻は沈沒し「アレクサンドル」三世は大に破損しロジェストウエンスキー提督は開戰の初に負傷して他艦に移され「アルマーズ」は艦隊より離れたり戰爭は夜に入りて繼續せられたるも其結果明かならず

(2)

（驅逐艦「ブラーウィ」艦長ツルノーウォ大尉報告）

本艦は五月二十七日午前九時艦隊と分れたるが當時「オスラービヤ」及「スウォーロフ」型一隻を除き他の諸戰艦は戰陣を作り快速力にて航進せるを認めたり午後四時本艦は猛烈なる十字火を受け六時砲彈は本艦の艦橋を貫き上部汽罐室爆發し前部汽罐二個蒸汽主管及前檣共に破壞せり本艦は成るべく本艦の人目に觸るゝを避けんが爲め大檣を下し日中煙突を白色に塗替へたり五月二十九日夜に至り第三蒸汽管爆發し爾來本艦は五海里以上の速力を以て汽走すること能はず又石炭缺乏を告げたるより一切木造の部分を焼棄せり五月三十日大檣を揭げ浦鹽斯德に着港せり

(3)

（外務省著電）

（「イズムルード」艦長「フェルゼン」男より六月一日ウルガ灣（浦鹽の北方約二百海里）發露國皇帝宛電奏）

「バルチック」艦隊は五月二十七日對馬海峽に進航せるに茲に敵の全艦隊と邂逅せり

砲火は午後一時二十分を以て開かれたり敵の砲火は先づ旗艦「スウォーロフ」と「オスラービヤ」とに集注せり黄昏前に於て「オスラービヤ」、「アレクサンドル」三世及「ホロヂノ」は沈沒せり「スウォーロフ」、「カムチャーツカ」及「ウラール」は甚しく破壞せられ遂に行く處を知らず是に於て艦隊指揮の權はネボカトフ少將に歸したり

黄昏より「ニコライ」一世、「アリヨール」、「アプラクシン」、「セニャーウキン」、「ウシャーコフ」、「シソイ、ウエリーキー」、「ナワリン」、「ナヒーモフ」及「イズムルード」の各艦は上述の順位にて北方に向ひ進航し我艦（「イズムルード」に戰艦に傳令の任務を負へり二隻の巡洋艦卽ち「ナヒーモフ」及「ナワリン」なるべし）は艦列より遮斷せられ再び相見ること克はず

戰艦は十四海里の速力を以て進航せしが此間幾度か敵の水雷艇に攻撃せらる殊に艦列の兩端に在るものを然りとす翌朝黎明に至り我艦隊を爲すものは「ニコライ」一世、「アリヨール」、「アプラクシン」及「セニャーウキン」のみなるを確知

せり（即ち、「シソイ、ウェリーキイ」及「ウシャーコフ」の喪失せるを意味す）

二十八日曉天水平線上に敵煙を認む本職之をネボガトフ司令官に傳へたるに司令官は是に於て速力を進めたり「セニャーウヰン」、「アプラクシン」の兩艦は遲航の爲め艦後に落ちたり午前十時に至れば日本艦隊は先づ我左舷に顯れ次で右舷に轉見す同時に敵の巡洋艦隊は我後方より左舷を壓せり我艦は隊列より分隔せられ再び之に投合することと不可能となりたるを以て浦鹽斯德に向け進航することに決したり本職は敵の追蹤を受けつゝ全速力を以て進めり石炭の不足と敵の巡洋艦に出會するを免れんが爲め本職は途中航路を轉じてマチミール灣（ソルガ灣より稍北方に當る）に向へり我艦は二十九日夜を以て同灣に着きしが會貝黑咫尺を辨ぜず午前一時半我艦は全く灣入口の暗礁に乘上げたり

石炭を除すことも僅に十噸有へ艦體を浮上げしむること到底不可能と認めたるを以て本職は乘組員を上陸せしめたる後艦の敵手に落つるを防がんが爲め之を爆沈せり

海戰中水兵の負傷者十名あり士官及其他の水兵は總て安全なり

(4)

（六月五日附マニラ發）
エンクイスト海軍少將報告

海戰は二十七日に始れり日本艦隊は午後一時四十五分北方に現れ夫より戰鬪に入れり敵の戰略は我艦隊の浦鹽斯德に達するを防ぐにありき我艦隊が針路を北方に執らんとする毎に敵は優勝なる速力を以て常に我艦隊の先頭を壓したり敵の戰鬪艦は我の重なる戰鬪艦に砲火を集中し九隻の日本裝甲巡洋艦及驅逐は獨立に運動し我戰鬪艦を挾撃せんことを試みたり交戰中我巡洋艦は此の敵艦に對して行動する必要あり爲めに我運送船をして甚だ困難の地位に陷らしめたり

夜に入り敵は水雷攻撃を開始せり其結果如何は彼我艦艇を區別し能はざりしに由り本職之を明言するを得ず本職は屢北方に逃れんことを企てしも累次の敵の攻撃は本職をして南に逃るゝの止むを得ざるに至らしめたり

二十八日朝本職は我主力艦隊の所在を失し敵の全艦隊の攻撃を受くるの危險に瀕し我巡洋艦は既に多大の損害を蒙り加ふるに石炭の缺乏を來したるを以て遂にマニラに向ふことに一決せり本職麾下水兵の行動は稱讃に餘りあり

(5)　六月六日附上海發（ライノフェンスタイン海軍少將報告）

驅逐艦「ボードルイ」號艦長の報告に曰く

戰爭は二十七日午後一時に始れり午後七時頃驅逐艦「ブイヌイ」號は旗艦「クニャージ、スウォーロフ」艦側に赴き頭部に負傷したるロヂェストウエンスキー提督を引取れり我艦隊は當日左記の順序に於て北進せり

「ニコライ」一世、「ボロヂノ」、「アレクサンドル」三世、「アプラクシン」、「セニャーウヰン」、「ウシャーコフ」、「シソイ、ウェリーキー」、「ナワリン」、「ナヒーモフ」は右縱隊に「スウェトラーナ」、「アルマーズ」、「オレーグ」、「アウローラ」、「ドミトリー、ドンスコイ」、「モノマーフ」は左縱隊に運送船及び水雷艇は右縱隊の間に位置せり而して午後七時半巡洋艦は左方に轉向せり若干時の後「ドミトリー、ドンスコイ」、「モノマーフ」、「イズムルード」、「アルマーズ」、「スウェトラーナ」は更に北方に轉じ「アウローラ」、「オレーグ」、「ジェムチウグ」は南方に驅逐艦「ボードルイ」及「ブレスチャーシチー」も亦十節の速力にて之に從へり二十八日午前一時過此等南向諸艦は對馬海峽を通過せしも「ブレスチャーシチー」は午前五時沈沒し其乘組將校四名下士卒七十五名は「ボードルイ」之を救助收容せり「ボードルイ」は南方に航行を繼續せしも遂に巡洋艦を見失ひ加ふるに石炭及艦體の木製部分を焚き盡し遂に進退谷まるに到りしが英國汽船は之を發見し上海迄曳き行きたり

清國官憲は「ボードルイ」號に對し二十四時間内に出港せんことを求めしも同夕上村艦隊はサッドル島に到著し加ふるに同艦は大洋を航行する爲めには石炭不十分なるを以て其出發は卽ち同艦を失ふに至るの外なきを以て本職は同艦を上海に止むることに決定したり

露帝とロ提督との電報往復
竝にネボガトフ少將の電奏

ロジェストウエンスキー提督は我軍に收容後左の電報を露國皇帝陛下に電奏方東郷聯合艦隊司令長官に依賴し來りたるを以て許可せられたり

ツァールスコエ邑に於て

皇帝陛下

五月十四日(五月二十七日)午後一時三十分對馬南端と日本との間に於て十二隻より成る日本艦隊主力及十二隻より尠からざる巡洋艦隊と戰鬪を開始せり

二時三十分「スウォーロフ」は中央位を去るの止むを得ざるに至れり

三時三十分幕僚の一部及小臣は知覺を失ひたるまゝ「ブイヌイ」に移されしが同艦には已に沈沒せる「オスラービヤ」乘員一部を收容しありたり

艦隊の指揮權はネボガトフに委せり「ブイヌイ」は夜間艦隊と相失せしが翌朝二隻の驅逐艦を伴へる「ドンスコイ」に遭遇して「オスラービヤ」の兵員を同艦に移し又小臣は「ベドウイ」に移され「グロームキイ」と共に前進せり

十五日(二十八日)の夕刻「ベドウイ」は二隻の日本驅逐艦に降伏せるを知れり

十七日(三十日)「ベドウイ」は佐世保に引致せらる

十八日(三十一日)ネボガトフ佐世保に在りと聞く

侍從將官　ロジェストウエンスキー

露國皇帝陛下は在本邦佛國公使館を經て左の勅電をロジェストウエンスキー提督に賜はりたり

六月九日午後發電

佛國公使　アルマン

ロジェストウエンスキー提督宛

唯今左の勅電に接し候に付閣下に傳達致候

ロジェストウエンスキー提督、朕は卿及艦隊の全員が露國及朕の爲に戰鬪に臨み身命を抛ち誠實に其任務を盡したるを深く嘉す上帝は卿に名譽の戰勝を冠するに至らざりしも卿等不朽の勇武は向後祖國の恒に誇とする所となるべし朕は卿が速かに全快せんことを望む神は卿等を慰藉せらるべし

ニコライ

ネボガトフ少將は我國に收容後間もなく左の電報を露國皇帝陛下に電奏方東郷聯合艦隊司令長官に依頼し來りたるを以て許可せられたり

聖彼得堡

皇帝陛下

謹んで奏す前夜の激戰の後五月十五日(二十八日)戰艦「ニコライ」一世、「セニャーウヰン」、「アプラクシン」、「アリョール」及巡洋艦「イズムルード」は浦鹽斯德に向け進航の途次二十七隻の日本軍艦(水雷艇を算入せず)の爲に包圍せられたり彈丸の缺乏大砲の破損及「アリョール」の戰鬪力喪失の爲に敵艦隊に抵抗を試むるは絕對に不可能なる狀態に在り且此上二千四百の人命を失ふは無益なるのみならず亦避くべからざりしを以て高速力を利用して逃走したる「イズムルード」を除くの外他の四隻は士官以上の帶劍を許し且士官以上の宣誓の上本國に歸還するを得る樣日本政府に對し盡力すべしとの條件を以て降伏するの已むを得ざるに至れり右條件は日本皇帝陛下の寬大なる聖意に依り御承諾を得たり小臣は右に付て陛下の御聖鑒を仰ぐ

戰死者

海軍大尉男爵　ミルバフ

海軍少尉　ツユーピンスキー

下士卒　六名

重傷者

艦長　ユング（「アリヨール」艦長）

負傷者

艦長　スミルノフ（「ニコライ」一世艦長）

陸軍中佐　テオドチエフ

陸軍大尉　クーロシユ

海軍少尉　スイコフスキー

下士卒　二十名

軍艦「アリヨール」の死傷者を除く

ネボガトフ

尚六月十二日に至り更にロジエストウエンスキー提督よりもネボガトフ少將以下の降伏に關して左の電報を露國皇帝陛下に電奏方依賴し來りたるを以て許可せられたり

皇帝陛下

陛下の御親電を拜受したる數時間前に至り小臣は戰艦「アリヨール」、「ニコライ」、「セニヤーウキン」、「アプラクシン」が五月十五日（二十八日）敵に降伏したるの報道に接せり小臣は此災害を聞き茫然爲す所を知らずこれ全く小臣一人の責任に對するものと思惟す小臣は茲に悲慘の狀況に在る者に對し陛下の御聖鑒を切願す

ロジエストウエンスキー

右二將官の電奏に對しては其後何等の勅答なし而してネボガトフ少將以下降服士官は露國皇帝陛下の允許なき以上は宣誓歸國を欲せざるに付又此上永く海軍の手に於て右將校等を留置くことは雙方に取りて不便なるを以て將來露國皇帝陛下の勅許來りたるときは宣誓歸國を許すとの條件を附してネボガトフ少將以下投降士官を陸軍俘虜收容所に移すことゝせり

日本海海戰感狀

感狀

假裝巡洋艦 信濃丸

明治三十八年五月中敵艦隊ノ北上ニ對シ連日連夜ノ哨戒勤務ニ服シ同月二十七日拂曉早クモ敵艦隊ヲ發見シ其確實迅速ナル警報ハ聯合艦隊ノ作戰ヲ利セシコト少ナカラス其功績大ナリトス仍テ茲ニ感狀ヲ授與スルモノナリ

明治三十八年六月二十日

聯合艦隊司令長官 東郷平八郎

(當時ノ指揮官)
信濃丸艦長海軍大佐 成川揆

感狀

軍艦和泉

明治三十八年五月二十七日午前早ク敵艦隊ト觸接シ爾後敵ノ砲火等ニ屈セス敵ヲ監視シテ我陸軍運送船等ヲ掩護シタルノミナラス詳カニ時々ノ敵情ヲ觀察報告シ聯合艦隊ノ作戰ヲ利セシコト少ナカラス其功績大ナリトス仍テ茲ニ感狀ヲ授與スルモノナリ

明治三十八年六月二十日

聯合艦隊司令長官 東郷平八郎

(當時ノ指揮官)
和泉艦長海軍大佐 石田一郎

感狀

軍艦千早

明治三十八年五月二十七日ノ海戰中機ヲ見テ屢敵艦隊ニ接近シ水雷發射ヲ試ミ且ツ大破セル敵ノ旗艦「クニャージ、スワロフ」ニ對シ附近敵艦ノ猛射ヲ冒シテ突進シ勇敢ナル水雷攻撃ヲ遂ケタルハ其武勇顯著ナリトス仍テ茲ニ感狀ヲ授與スルモノナリ

明治三十八年六月二十日

聯合艦隊司令長官 東郷平八郎

(當時ノ指揮官)
千早艦長海軍大佐 江口麟六

感狀

第五驅逐隊

明治三十八年五月二十七日海戰中大破セル敵ノ旗艦「クニヤージ、スワロフ」ニ對シ附近敵艦ノ猛射ヲ冒シテ突進シ勇敢ナル白晝攻撃ヲ遂ケ且ツ日沒後ヨリ諸驅逐隊艇隊ト共ニ猛烈果敢ナル夜襲ヲ續行シ翌二十八日ニ至リ不知火ハ敵艦「アドミラル、ナヒモフ」ヲ捕獲シ更ニ蔚山沖ニ於テ第六十三號艇ト共ニ敵驅逐艦「グロームキー」ヲ撃沈シ又叢雲ハ竹邊灣附近ニ於テ新高ト共ニ敵驅逐艦「ブイストルイ」ヲ撃滅ス其功績多大ニシテ武勇顯著ナリトス仍テ茲ニ感狀ヲ授與スルモノナリ

明治三十八年六月二十日

聯合艦隊司令長官　東郷平八郎

(當時ノ編制及指揮官)

第五驅逐隊司令海軍中佐　廣瀬順太郎
不知火艦長海軍少佐　桑島省三
叢雲艦長海軍少佐　島內桓太
夕霧艦長海軍少佐　田代巳代次
陽炎艦長海軍大尉　吉川安平

感狀

第四驅逐隊

明治三十八年五月二十七日ノ海戰中大破セル敵ノ旗艦「クニヤージ、スワロフ」ニ對シ附近敵艦ノ猛射ヲ冒シテ勇敢ナル白晝攻撃ヲ遂ケ且ツ二十八日午前敵艦「ナワリン」ヲ奇襲シテ之ヲ轟沈ス其功績大ニシテ武勇顯著ナリトス仍テ茲ニ感狀ヲ授與スルモノナリ

明治三十八年六月二十日

聯合艦隊司令長官　東郷平八郎

(當時ノ編制及指揮官)

第四驅逐隊司令海軍中佐　鈴木貫太郎
朝霧艦長海軍少佐　土師勘四郎
朝潮艦長海軍少佐　南里團一
村雨艦長海軍少佐　小林研藏
白雲艦長海軍少佐　鎌田政美

感狀

第十一艇隊

明治三十八年五月二十七日夕刻大破セル敵ノ旗艦「クニヤージ、スワロフ」ヲ襲撃シテ之ヲ轟沈ス其功績少ナカラス仍テ茲ニ感狀ヲ授與スルモノナリ

明治三十八年六月二十日

聯合艦隊司令長官　東郷平八郎

(當時ノ編制及指揮官)

第十一艇隊司令海軍少佐　富士本梅次郎
第七十二號艇長海軍大尉　笹尾源之丞
第七十三號艇長　司令兼務
第七十四號艇長海軍大尉　太田原達
第七十五號艇長海軍大尉　河合退藏

感状

第一艇隊
第十七艇隊
第十八艇隊

明治三十八年五月二十七日夜各驅逐隊ト共ニ風濤ヲ冒シテ敵艦隊ニ肉薄シ多大ノ死傷ヲ顧ミス猛烈ナル襲撃ヲ遂ケシノミナラス敵艦隊ヲ四分五裂ノ情態ニ陥ラシメ間接ニ翌二十八日ノ追撃戦ヲ利セシコト尠シトセス其功績大ニシテ武勇顕著ナリトス仍テ茲ニ感状ヲ授與スルモノナリ

明治三十八年六月二十日

聯合艦隊司令長官　東郷平八郎

（當時ノ編制及指揮官）

第一艇隊司令　海軍少佐　福田昌輝
第六十七號艇長　海軍大尉　中牟田武正
第六十八號艇長　海軍大尉　寺田平吉
第六十九號艇長　司令兼務
第七十號艇長　海軍大尉　南郷次郎
第十七艇隊司令　海軍少佐　青山芳得
第三十一號艇長　海軍大尉　山口宗末郎
第三十二號艇長　海軍大尉　人見三良
第三十三號艇長　海軍大尉　河北一男
第三十四號艇長　司令兼務
第十八艇隊司令　海軍少佐　河田勝治
第三十六號艇長　司令兼務
第六十號艇長　海軍大尉　岸井政重
第六十一號艇長　海軍大尉　宮村暦造
第三十五號艇長　海軍大尉　副島村八

感状

第九艇隊
第十艇隊

明治三十八年五月二十七日夜風濤ヲ冒シテ敵艦隊ニ迫リ有效ナルヘキ襲撃ヲ遂ケタルノミナラス敵艦隊ヲシテ潰亂分裂セシメ間接ニ翌二十八日ノ追撃戦ヲ利セリ其功績少ナカラス仍テ茲ニ感状ヲ授與スルモノナリ

明治三十八年六月二十日

聯合艦隊司令長官　東郷平八郎

（當時ノ編制及指揮官）

第九艇隊司令　海軍中佐　河瀬早治
蒼鷹艇長　司令兼務
鴈艇長　海軍大尉　栗屋雅三
燕艇長　海軍大尉　田尻唯二
鴿艇長　海軍大尉　井口第二郎
第十艇隊司令　海軍少佐　大瀧道助
第三十九號艇長　海軍大尉　大金實
第四十號艇長　海軍大尉　中原彌平
第四十一號艇長　海軍大尉　水野廣德
第四十三號艇長　司令兼務

感状

驅逐艦　漣
驅逐艦　陽炎

明治三十八年五月二十八日鬱陵島ノ南方ニ於テ敵ノ驅逐艦二隻ト戰ヒ其一隻ヲ捕獲シ敵ノ主將ヲ擒ニス其功績大ナリトス仍テ茲ニ感状ヲ授與スルモノナリ

明治三十八年六月二十日

聯合艦隊司令長官　東郷平八郎

（當時ノ指揮官）

漣艦長　海軍少佐　相羽恒三
陽炎艦長　海軍大尉　吉川安平

日本海海戰死傷者人名表

戰死

艦艇名	官職	氏名
三笠	海軍一等兵曹	太田正太郎
同	海軍二等兵曹	岡本喜代八
同	海軍三等兵曹	吉田菊次郎
同	海軍一等水兵	中井初之助
同	同	星川高吉
同	同	福岡直藏
同	海軍三等水兵	松川利吉
同	同	穴山謙治
敷島	海軍大尉	行廣清太
同	海軍三等兵曹	島岡甲
同	同	平野源次郎
同	同	有田助市
同	海軍三等厨宰	坂井種七
同	海軍一等水兵	中村長四郎
同	同	平野榮一郎
敷島	海軍一等水兵	東莊五郎
同	同	町田金市
同	同	瀬尾義忠
同	海軍二等水兵	西野常吉
同	海軍二等信號兵	木野定次郎
同	海軍三等水兵	藤本廣人
富士	海軍一等水兵	宮腰松藏
同	同	永坂竹次郎
同	同	王秋文吉
同	海軍一等水兵	粂石新作
同	海軍二等水兵	芝田五十吉
同	同	宗田宗太郎
同	同	中南源右衛門
同	同	鋤柄仁右衛門
朝日	海軍大尉	森下基一

朝日	海軍三等兵曹	上野又一郎
同	海軍一等水兵	前田正幹
同	同	森助太郎
同	海軍二等水兵	富澤義丸
同	同	佐々木惣七
同	同	山本安太郎
同	海軍三等水兵	河井元治郎
春日	海軍一等水兵	高橋初太郎
同	同	貝原丈四郎
同	同	池田作五郎
同	海軍二等水兵	飯田庄藏
同	海軍三等水兵	林謙治
同	同	玉井嘉平
同	同	藤井元市
日進	海軍中佐	松井健吉
同	海軍一等筆記	松井尚敏
同	海軍三等兵曹	中島文彌
同	海軍一等信號兵	伊藤清次郎
同	海軍四等水兵	田中與次郎
同	割烹	稲垣駒太郎

出雲	海軍一等水兵	永田幸平
同	海軍二等水兵	川畑六右衛門
同	海軍二等機關兵	副島儀八
同	海軍三等水兵	北岡龜太
吾妻	海軍一等兵曹	大坪仁藏
同	海軍三等兵曹	阪内講平
同	同	諏訪現末
同	海軍一等水兵	井上善三郎
同	同	和田定次郎
同	同	三浦伊勢藏
同	海軍二等水兵	小林惣一
同	同	村田友作
同	同	水島金藏
同	同	加藤豐吉
同	海軍三等水兵	中尾由平
淺間	海軍三等兵曹	中村勘藏
同	海軍一等水兵	尾越柳一
同	海軍二等水兵	藤田豐吉
八雲	海軍三等兵曹	田鎖丹治
同	海軍一等機關兵	石崎與一

八雲	海軍四等水兵	金澤三之丞
常磐	海軍二等水兵	中本太三郎
磐手	海軍二等筆記	星野定彦
笠置	海軍二等機關兵	松下島吉
千歳	海軍一等水兵	中森彦四郎
同	同	飯田利吉
新高	海軍一等兵曹	吉田秀三郎
音羽	海軍少尉	宮崎敬次郎
同	海軍一等兵曹	日野仙三郎
同	海軍二等水兵	牛田甚之助
同	海軍三等水兵	太田清
同	海軍四等水兵	植田顯治
同	給仕	宮澤勇三郎
浪速	海軍中尉	小高謙之助
明石	海軍二等水兵	櫻井年松
同	同	猪熊惣平
同	同	伊藤菊次郎
同	海軍四等水兵	井口定市
對馬	海軍一等水兵	横山辰之助
同	同	金谷要太郎

對馬	海軍三等水兵	山下文平
同	同	嵐惣吉
和泉	海軍二等水兵	古川德太郎
同	同	坂井定三郎
同	給仕	加福喜洋次
朧	從僕	長沼瀬
雷	海軍中尉	池田宏平
不知火	海軍一等水兵	山口勘一郎
同	海軍一等機關兵	沖長之助
同	同	末藤嘉一郎
同	同	川村喜作
第一艇隊	海軍一等機關兵曹	鈴木政太郎
同	海軍三等兵曹	佐藤啓次郎
同	海軍三等機關兵曹	坂野恒久
同	同	三田德藏
同	同	山田藤七
同	海軍一等機關兵	宇佐美喜十郎
竹敷要港部所属艇隊	海軍中尉	多伊良丈一
同	海軍二等兵曹	富田尚武
同	海軍二等機關兵曹	兒玉利明

艦船名	官職	氏名
竹敷要港部所屬艦隊	海軍三等信號兵曹	松永孫七
同	海軍三等機關兵曹	吉田武平治
同	海軍一等機關兵	後藤欣次
同	海軍二等水兵	林藤五郎
竹敷要港部所屬艦隊	海軍二等機關兵	楢崎彌作
第十八艇隊	海軍一等機關兵曹	一見信次郎
同	海軍一等水兵	豐村恒雄

重傷

艦船名	官職	氏名
三笠	海軍少佐	菅野勇七
同	海軍大尉	村越八郎
同	海軍少尉	安野康
同	海軍兵曹長	境吉次郎
同	海軍一等兵曹	叢山熊吉
同	海軍二等兵曹	大川嘉藏
同	同	安達松太郎
同	海軍三等兵曹	關田興太郎
同	海軍三等樂手	大日向萬吉
同	海軍一等水兵	須藤政太郎
同	同	出水辰藏
同	同	中林爲次郎
同	同	栗坂守信
三笠	海軍二等水兵	上松兼吉
同	同	長永了觀
同	同	島倉松次郎
同	同	伊藤周七
同	同	菊地惣次
同	同	若松定吉
同	同	野村幸平
同	同	小川馬次郎
敷島	海軍大尉	油谷堅藏
同	海軍少尉候補生	白濱清
同	海軍二等水兵	西本卯吉
同	同	松室善次
同	同	新山辰五郎

敷島	海軍三等水兵	中村助市
同	同	安部又郎
富士	海軍少佐	高橋鎗吉
同	海軍兵曹長	寺西益次郎
同	海軍一等兵曹	前田寅一
同	同	藤光利一
同	海軍二等兵曹	三宅縫三郎
同	海軍三等兵曹	松下政吉
同	同	池田藤吉
同	海軍一等水兵	松井彌吉
同	海軍二等水兵	今井榮吉
同	同	大網圓七
朝日	海軍一等信號兵曹	柳沼庫次
同	海軍二等水兵	鈴木勇一郎
同	同	倉内庄三郎
同	同	神田新吉
春日	海軍一等兵曹	上野袈裟太郎
同	海軍三等水兵	濱崎猪之助
同	海軍三等機關兵	淺原龜太郎
日進	海軍少尉候補生	高野五十六

日進	海軍一等兵曹	高須儀助
同	海軍一等水兵	下川萬次郎
同	海軍三等水兵	東野修藏
同	同	越後清吉
同	海軍四等水兵	中瀬伊作
同	海軍四等機關兵	村上重吉
同	同	二橋良顯
出雲	海軍一等水兵	山本惣吉
同	海軍一等主廚	篠原仲之助
同	海軍二等水兵	福島喜十郎
同	海軍三等水兵	清原武夫
同	海軍四等水兵	中島林助
吾妻	海軍中佐	東郷靜之介
同	海軍一等水兵	早川儀三郎
同	同	小川銀次郎
同	同	橋本一
淺間	海軍二等水兵	佐藤勝太郎
同	海軍三等兵曹	田丸近次郎
同	海軍一等水兵	伊與木笹三郎
同	海軍二等水兵	奧野清吉

輕傷

艦艇名	官職	氏名
淺間	海軍二等水兵	榎本文吉
同	海軍二等機關兵	池内熊一
同	海軍四等水兵	岸岡順二
同	同	古谷實雄
八雲	海軍二等機關兵	木川靜
磐手	海軍三等機關兵曹	柴田賢司
笠置	海軍一等看護手	山口道夫
同	海軍二等主廚	永井作二
同	海軍三等木工	戸上信太郎
千歳	海軍二等水兵	中尾榮松
新高	海軍三等水兵	村山常治
音羽	給仕	盛田安八
浪速	海軍一等水兵	塚本敬次郎
對馬	海軍一等水兵	吉澤榮吉
同	海軍四等機關兵	岩田利男
橋立	海軍少尉候補生	伊藤源太郎
同	海軍一等兵曹	山口源次郎

艦艇名	官職	氏名
橋立	海軍二等兵曹	藤牧末藏
同	海軍一等水兵	中釜孫一郎
和泉	海軍一等水兵	川原善二
不知火	海軍二等信號兵曹	築地七之助
同	海軍一等水兵	北川金之助
朝潮	海軍三等筆記	大槻利藏
第十七艇隊	海軍上等兵曹	西村元之助
同	海軍一等水兵	川添直計佐
同	同	原田確二
同	同	磯崎喜之助
第十八艇隊	海軍大尉	副島村八
同	海軍上等兵曹	瀬戸口彌次郎
同	海軍一等水兵	佐藤小一郎
同	同	大石儀七
同	海軍一等機關兵	内田音吉
同	同	松山彦行
同	同	牛尾傳

三笠	海軍中佐	松村龍雄
同	海軍少佐	飯田久恒
同	海軍大尉	清河純一
同	海軍一等兵曹	時田清太郎
同	同	岡部吉之助
同	同	上野德松
同	海軍一等信號兵曹	大島彰
同	海軍一等機關兵曹	北梶與三松
同	海軍一等筆記	島野一松
同	海軍一等樂手	詫摩尙彥
同	同	朝比奈允
同	海軍二等兵曹	清水乙吉
同	同	坂口末松
同	同	中島多三郎
同	同	武平仁吉
同	海軍二等機關兵曹	柘植末吉
同	海軍三等兵曹	太田直吉
同	同	安東久兵衛
同	同	松原茂好
同	同	水島捨吉

三笠	海軍三等兵曹	若堀平之丞
同	同	吉田仁太郎
同	同	佐藤信吉
同	同	神野貞吉
同	海軍三等厨宰	岡田米助
同	海軍三等樂手	竹内啓助
同	同	伊藤揮代士
同	同	渡邊恭
同	海軍一等水兵	澤井三代記
同	同	大野榮助
同	同	三歩一彥次郎
同	同	八木市太郎
同	同	西山治郎吉
同	同	磐田政一
同	同	中島友五郎
同	同	多賀太郎治
同	同	菅三次郎
同	同	上野萬次郎
同	同	小林久太郎
同	同	佐藤悌吉

三笠	海軍一等水兵	小谷品藏
同	同	船木運吉
同	同	嘉藤七太郎
同	同	金森安五郎
同	同	小澤政一
同	同	川田政吉
同	海軍一等信號兵	瀧澤甚左衛門
同	同	大浦正吉
同	海軍樂生	本田源治
同	海軍二等水兵	野々山音次郎
同	同	橋本常次郎
同	同	茂木米藏
同	同	岩村長作
同	同	村瀬定三郎
同	同	桐谷安治
同	同	大畑孫三郎
同	同	良知縫藏
同	同	柚木吉三郎
同	同	長沼英司
同	同	佐々木佐一郎
三笠	海軍二等水兵	窪田國次郎
同	同	水口永藏
同	同	椿仲藏
同	同	佐藤善太郎
同	同	村山與三郎
同	同	寺田常次郎
同	海軍二等信號兵	高橋正治
同	海軍二等木工	朝本久衛
同	海軍二等機關兵	三石千一郎
同	同	畑松太郎
同	海軍三等水兵	清水富藏
同	同	萬屋德藏
同	同	石上千代作
同	同	譽田長治
同	海軍三等信號兵	片山木之助
同	海軍二等樂生	加瀬順一郎
同	海軍四等水兵	山岸勇太郎
同	同	北川豐藏
同	同	島正了
同	同	下畑廣吉

三笠	海軍四等水兵	田中澤治
同	同	袖長光治
同	同	松代利七
同	海軍四等機關兵	清水正利
敷島	海軍大主計	黑田太一郎
同	海軍中尉	森田但次
同	海軍三等兵曹	園田德次郎
同	海軍一等水兵	松本鶴吉
同	同	佃逸太郎
同	同	城道岩太郎
同	同	岡田久吉
同	同	深野早吉
同	海軍二等水兵	伊規須松次郎
同	同	西山龜十
同	同	納新藏
同	同	大下八藏
同	海軍二等機關兵	川淵久吉
同	同	宮村直彦
同	海軍二等主厨	武田金八
同	海軍三等水兵	池口勘太郎
敷島	海軍四等水兵	白石森彦
富士	海軍大機關士	安部富次
同	海軍中佐	志摩猛
同	海軍少尉候補生	池田光一
同	海軍一等兵曹	原田七三郎
同	同	木藤源太
同	海軍二等兵曹	七宮貫四郎
同	海軍二等機關兵曹	山部源七
同	海軍一等水兵	松木作次郎
同	海軍一等機關兵	東原三郎
同	海軍二等水兵	片桐市太郎
同	同	南野利吉
同	海軍四等水兵	廣瀨陸一郎
朝日	海軍中尉	合田四郎
同	海軍三等兵曹	田中多摩藏
同	海軍一等水兵	小山長之助
同	同	阿部由藏
同	同	河村善平
同	同	鹿山力藏
同	同	澁谷卯吉

朝日	海軍一等水兵	氏家鐵五郎
同	海軍一等信號兵	阿部龜吉
同	海軍二等水兵	楠政治
同	同	伊藤善太郎
同	同	山口七藏
同	同	神田新吉
同	同	橋場淺吉
同	同	市川重作
同	同	橋詰清十
同	同	伊藤乙松
同	海軍二等信號兵	成田銀藏
同	海軍三等水兵	久保田吉藏
同	海軍三等主厨	飯村英一
春日	海軍中尉	右田熊五郎
同	海軍少尉候補生	三浦誠輔
同	海軍三等兵曹	山下惣市
同	同	丹羽米吉
同	海軍一等水兵	木須源五郎
同	同	東捨六
同	同	曾我採助

春日	海軍一等水兵	河村榮吉
同	海軍二等水兵	毛利仙治郎
同	同	山本市太郎
同	同	神原松太郎
同	同	稻垣忠三郎
同	同	西武平
同	海軍二等機關兵	橋本增吉
同	海軍三等水兵	濱根榮藏
同	同	關一馬
同	同	山田與助
日進	海軍中將	三須宗太郎
同	海軍少佐	田中行尙
同	海軍中主計	太田利一
同	海軍少尉	田中恒藏
同	海軍上等信號兵曹	伊藤富五郎
同	海軍一等兵曹	角源太郎
同	同	堀內作平
同	同	湊久次郎
同	海軍一等信號兵曹	京谷松次郎
同	同	窪作次郎

日進	海軍二等兵曹	大谷定藏
同	同	出口直一
同	同	宮本和三郎
同	同	伊藤與三郎
同	同	鈴木芳藏
同	同	西澤直治
同	海軍二等機關兵曹	渡邊健造
同	海軍三等兵曹	梅田善十郎
同	同	山田駒吉
同	同	岡崎近太郎
同	同	吉田小三郎
同	同	吉川芳三郎
同	同	中村末松
同	海軍三等機關兵曹	新飯田新作
同	海軍一等水兵	中西伊三郎
同	同	桝田熊次郎
同	同	丸子新之助
同	同	石坂三次郎
同	同	竹下甚之助
同	同	中易源二

日進	海軍一等水兵	西田八右衛門
同	同	楠本嘉藏
同	同	水島六次郎
同	同	阿賀善七
同	同	井端留次郎
同	同	西村丞太郎
同	同	坪内三松
同	同	兼松光次郎
同	同	永田清太郎
同	同	瀬田平藏
同	同	藤田福松
同	同	村田秀七
同	同	西木伊太郎
同	海軍一等信號兵	岩佐武右衛門
同	同	平塚峰次
同	海軍一等機關兵	加賀谷佐吉
同	同	藤井忠次郎
同	海軍一等主厨	津村榮次郎
同	海軍二等水兵	小川力
同	同	森下乙吉

日進	海軍二等水兵	山田兵治
同	同	大西末次郎
同	同	森田力次郎
同	同	鎌田仁吉
同	同	庄司鶴次郎
同	同	山田千代松
同	同	水谷輝一
同	同	中辻庄太郎
同	同	小倉爲市
同	同	石見鐵五郎
同	同	石原增吉
同	同	加藤武定
同	同	白石忠七
同	同	武田忠四郎
同	海軍二等機關兵	太田好彦
同	海軍三等水兵	加藤政吉
同	同	梶藤勝三郎
同	同	柴田彦太郎
同	海軍三等信號兵	中尾丘郎
同	海軍三等機關兵	福原豐吉

日進	海軍四等水兵	白津友次郎
同	同	吉田英吉
同	同	白見重次郎
同	同	大竹鐵次郎
同	同	中川勘三郎
同	同	熊谷小八郎
同	同	高橋傳
同	同	山本三次郎
同	同	橋本石太郎
同	同	上道恭次
同	海軍四等機關兵	一ノ關東吉
同	同	山田嘉藏
出雲	海軍少尉候補生	覺張榮三郎
同	海軍一等船匠手	出口卓平
同	海軍二等兵曹	森長十
同	同	鮫島與太郎
同	海軍三等兵曹	佐野德松
同	海軍一等水兵	湯治金四郎
同	同	居組岩藏
同	海軍一等機關兵	小林德治

出雲	海軍一等水兵	柏木清夫
同	同	田中兵藏
同	同	長岡林之助
同	同	竹山國平
同	同	川村巳之助
同	海軍二等信號兵	宮田清藏
同	海軍二等機關兵	鬼丸由太郎
同	海軍三等水兵	吉永吾市
同	同	春藤春吉
同	海軍三等信號兵	福田四郎
同	海軍三等機關兵	大場德次
同	海軍四等機關兵	松田耕造
同	給仕	星野覺
吾妻	海軍少尉候補生	竹中德太郎
同	海軍上等兵曹	中村兼次郎
同	海軍一等兵曹	本多清作
同	同	小林源太郎
同	海軍二等兵曹	松平愼四郎
同	海軍三等兵曹	宮本松太郎
同	海軍一等水兵	松波末三郎

吾妻	海軍一等水兵	川瀨領右衛門
同	同	小林一二郎
同	同	出來德藏
同	同	高橋忠吉
同	海軍二等水兵	荒增廉造
同	同	内田金右衛門
同	同	遠藤兼松
同	同	桝谷金元
同	同	伊藤玉次郎
同	同	中村三之丞
同	同	澤野德松
同	同	吉田末作
同	海軍二等信號兵	堺音吉
同	同	中合又次郎
同	海軍三等機關兵	高岡與三次
同	海軍四等水兵	安藤榮吉
同	海軍四等機關兵	伊藤權太郎
淺間	海軍船匠長	酒井辰五郎
同	海軍三等兵曹	藤井助藏
同	同	尾崎延太郎

淺間	海軍三等兵曹	前川喜八
同	海軍一等機關兵	關幸次郎
同	海軍二等水兵	高宮熊七郎
八雲	海軍一等兵曹	松島仲助
同	海軍一等水兵	國分粂吉
同	海軍一等木工	萩山丹治
同	海軍一等主廚	深谷丑藏
同	海軍二等水兵	吉水俊雄
同	同	伊藤伊平
同	海軍二等機關兵	角谷得二
同	海軍三等水兵	坂田三木三
同	海軍一等兵曹	豐岡次右衛門
常磐	海軍三等機關兵曹	竹内伊三郎
同	海軍一等水兵	島谷常三郎
同	海軍一等木工	朝野庄次
同	同	管伊平
同	同	伴榮太郎
同	海軍二等水兵	村上六助
同	同	岡田源一
同	同	弘中又一

常磐	海軍二等水兵	加藤六太郎
同	海軍三等機關兵	滿井正一
同	海軍四等水兵	川崎役太郎
同	同	山下二郎之進
同	海軍四等機關兵	坂本政治
磐手	海軍船匠師	松崎安平
同	海軍三等兵曹	江口軍太郎
同	同	木村喜一郎
同	海軍三等船匠手	矢野富市
同	海軍一等水兵	池田岩太郎
同	海軍二等水兵	加野爲右衛門
同	海軍二等木工	宮原萬吉
同	海軍二等機關兵	有角與一郎
同	海軍三等水兵	小林熊太郎
同	海軍四等水兵	田爪宗義
同	海軍四等機關兵	和泉梅吉
同	給仕	中里義忠
同	從僕	富永智藏
千早	海軍二等機關兵曹	山下庄七
同	海軍一等水兵	佐藤辰五郎

千早	海軍二等水兵	中島友吉
同	海軍四等水兵	氷見常次郎
笠置	海軍軍醫少監	横井太郎
同	海軍一等兵曹	八木傳次郎
同	海軍二等水兵	千々岩友次郎
同	同	北野友
同	同	沼田善助
同	海軍三等水兵	笠井昌盛
同	海軍二等水兵	黒部與三郎
千歲	同	仙福菊松
同	海軍四等水兵	松井庄太郎
同	海軍一等水兵	小山助治郎
新高	海軍二等水兵	大石常三
同	海軍大尉	石川庄一郎
音羽	海軍少主計	野村環二郎
同	海軍一等兵曹	津田熊次
同	海軍三等兵曹	八巻徳三郎
同	海軍一等水兵	高橋辰藏
同	同	礒矢末吉
同	同	田村留吉

音羽	海軍一等水兵	山本萬助
同	同	菊池兵右衛門
同	同	熊澤豐吉
同	同	管野清作
同	海軍二等水兵	飯田梅吉
同	同	大川保三郎
同	同	千葉作藏
同	同	新倉久次郎
同	同	千葉運三郎
同	海軍三等水兵	長崎八郎兵衛
同	同	岩瀨榮太郎
同	同	野村清次
同	同	太田惣市
同	海軍四等水兵	藤生林次郎
同	同	飯野春治
同	從僕	三田薫
浪速	海軍上等兵曹	出村伊之介
同	海軍一等兵曹	田坂文治
同	海軍一等機關兵曹	河越熊治
同	海軍三等兵曹	千田九兵衛

浪速	海軍三等厨宰	目黑國太郎
同	海軍一等水兵	山崎健壽郎
同	同	横山重吉
同	同	飯浦勘之助
同	海軍二等水兵	古澤米三郎
同	同	日黑圓藏
同	同	加藤太平
同	海軍二等木工	永長敬次郎
同	海軍二等機關兵	星酛次郎
同	海軍三等水兵	小松薫
高千穗	海軍二等機關兵曹	中川由藏
同	海軍一等水兵	岸田豐藏
同	海軍二等機關兵	天木惠吉
同	同	田鎖德之助
明石	海軍一等水兵	重岡駒次郎
同	海軍一等木工	大倉榮三郎
同	海軍二等水兵	中西慶次郎
同	同	八木喜代藏
同	海軍二等機關兵	佐野巳之助
同	海軍四等水兵	中田隼三郎

對馬	海軍中佐	山崎米三郎
同	海軍一等筆記	八尋伊之助
同	海軍三等兵曹	伊地知壯一
同	同	梅垣嘉吉
同	海軍一等水兵	新宮辰太郎
同	同	菅原久八
同	同	上島外鐵
同	海軍二等水兵	大島宗吉
同	同	細野庄三郎
同	海軍二等機關兵	谷千代藏
同	同	野村壽三郎
同	海軍三等水兵	森儀三郎
同	海軍三等機關兵	岡田作市
同	海軍四等水兵	澤村安二
同	同	中村長之
松島	海軍一等水兵	織田音治
橋立	海軍一等兵曹	山岡嘉藏
同	海軍二等水兵	廣瀬長次郎
同	海軍三等水兵	坂場勇
須磨	海軍一等信號兵曹	佐々木兼七

須磨	海軍三等兵曹	和田卯右衛門
同	海軍一等水兵	藤原藤次郎
秋津洲	海軍二等水兵	王子田熊次郎
同	同	井手上克己
和泉	海軍一等兵曹	中村勝太郎
同	同	岡山乙松
同	海軍一等水兵	渡邊清
同	海軍二等水兵	松浦竹太郎
同	海軍二等木工	石田政吉
同	海軍二等機關兵	仁藤權之助
千代田	海軍二等水兵	梅本久松
同	海軍二等機關兵	笠原德一
吹雪	海軍一等機關兵	齋藤良助
霰	同	渡邊福次郎
朧	海軍中軍醫	高橋元眞
同	海軍一等兵曹	千田又次郎
同	海軍一等水兵	北川龜吉
同	同	飯島丑松
同	同	吉成春吉
同	海軍一等信號兵	富田鋭次郎

雷	海軍中軍醫	伊藤紀道
同	海軍上等兵曹	山田作太郎
同	海軍上等機關兵曹	大宮司要人
同	海軍二等機關兵曹	中島忠作
同	海軍三等兵曹	野中喜三郎
同	同	多屋治
同	海軍三等機關兵曹	田中留吉
同	海軍一等機關兵	田村辰五郎
同	同	志村龜次郎
同	同	丹羽時藏
同	同	田中安次郎
同	海軍二等機關兵	大宮松二
曙	海軍上等機關兵曹	湯目吉十郎
同	海軍三等兵曹	久板榮四郎
同	同	加藤伊勢松
同	海軍一等水兵	矢島金五郎
薄雲	海軍一等兵曹	朱雀萬太郎
漣	海軍一等機關兵	鹽地虎吉
不知火	海軍中尉	杉浦正雄
同	同	酒井重之助

不知火	海軍三等兵曹	窪田藤藏
同	同	筑紫鐵五郎
同	海軍三等機關兵曹	御堂長太郎
同	海軍一等信號兵	須崎善市
同	海軍一等主厨	藤森嘉助
同	海軍二等水兵	清田乙熊
同	海軍二等機關兵	古賀藤右衛門
第一艇隊	海軍三等兵曹	鈴木彌七
同	海軍一等水兵	佐久間辰藏
同	海軍一等機關兵	羽成德藏
同	海軍三等信號兵	川越由藏
同	海軍三等筆記	室賀次郎
第九艇隊	海軍一等水兵	久保一角
第十艇隊	海軍三等機關兵	淺井房吉
第十一艇隊	海軍一等水兵	田島繁喜
同	同	森安平
第十七艇隊	海軍少佐	青山芳得
同	海軍上等機關兵曹	上原喜太郎
同	海軍一等兵曹	諸岡儀市
同	海軍三等筆記	大浦綱次郎
第十七艇隊	海軍一等水兵	廣瀨太吉
同	同	判田種吉
同	同	伊藤立右衛門
同	海軍一等機關兵	米良力
同	同	南部喜之助
同	同	松本利藏
同	同	藤安末吉
同	同	矢次定吉
同	海軍二等機關兵	阿部好
同	給仕	山城宗市
第十八艇隊	海軍中尉	山中義勇
同	海軍中機關士	岸田東次郎
同	海軍一等水兵	石井伊三郎
同	海軍一等機關兵	淵上今朝一
同	海軍一等機關兵	小西平治郎
同	海軍二等水兵	大庭八郎

著者の言葉

僕が『此一戰』を書くに至つた動機や目的は書頭の自序に述べた通りで、言ふ迄もなく其の主目的は帝國海軍があの奇蹟的大捷を博したる日本海海戰の眞相を世間に紹介するにあつたのであるが、それと同時に傍ら之に依つて海事知識の普及と軍事思想の發達とを圖るにあつたのである。何しろ日露戰爭頃に於ける日本國民の軍事知識殊に海軍に關する知識の幼稚であつたことは誠に驚くべきもので、海軍專門の新聞記者ですら、十二吋砲と十二珊砲とを混同したり、巡洋艦と戰艦との性能の區別が判らない者が少くなかつたのである。それも其筈で、當時の軍人は新聞記者と言へばゲヂ〳〵の如く忌み嫌ひ、面會するさへ快しとしなかつたのである。從つて軍人が筆を執つて書物を書くなどは軍人精神の墮落ででもあるかの如く考へて居たのであるから、一般國民に軍事知識が乏しかつたのも決して無理ではなかつた。

それが此節では何うだらう。陸軍も海軍も、大に社會化して、省內に新聞班や宣傳部を設け、大臣を初め下級軍人に至る迄も、新聞記者は勿論一般國民と成るべく接近を力むる樣になり、營門や舷門を開放して兵員を映畫の材料に使用することすら厭はなくなつたのである。殊に海軍では以前は軍人以外は猫の子一匹でも軍艦に乘せることを許さなかつたのだが、近來はヤレ演習ぢや、ヤレ射擊ぢやと云つては、代議士や新聞記者を案內までして乘せる樣になつた。僅に二十年にも足らぬ間に世相も變れば變るものである。

右の樣に軍艦は舷門を鎖し、軍人は口を閉ぢ、世人は海軍の事に關しては全然無知識であつたところへ、偶『此一戰』が出たのであるから、恰も渴したる者が水を見付けたかの樣な觀が無いでもなかつたらしい。此書が意想外なる世間の歡迎を受けたのは主として此時機に投じた爲めであると信じて居る。そして之を書いた頃の僕は一般軍人に通有なる盲目的軍國主義の信仰者であり、明治初期に生れた者に普遍なる侵略的帝國主義の讚美者であつたことを茲に斷つて置く。

今日から此書を讀み返して見ると、其文に於ても、其想に於ても、拙劣卑低誠に汗顏に堪へぬものであるが、それでも之を書いた當時には人知れぬ苦心もしたものである。尤も當時海軍軍令部で『日露海戰史』の編纂に從事して居たから、公報的材料には不足はなかつた。且又躬ら實戰に參加して戰況を見知して居たから、記述に對する自信は十分にあつた。唯併し僕は水雷艇の甲板から艦隊戰鬪の外況を見物したのであるから、軍艦內部の戰況に至つては、形式的報告と自己想像とに依る外はなかつたのである。故に此點に對する非難や叱責は甘んじて受けざるを得ないのである。

扨て柄にもなきことを思付き、愈々筆を執るとなると、忽ち直面した問題は敍述の方法と形式と讀者の標準とであつた。普通の小說の如くあまりに平易に碎き過ぎては戰爭の豪壯味が無くなる。と云つて教科書の如くあまりに專門に走り過ぎても戰爭の興味が無くなる。そこで讀者の標準を中學校の三四年程度に置き、淡

文くづしの口語體に依ることと決めた。愈戰鬪開始の幕となつて更に困つたのは戰記の參考書である。戰爭の書物は日本には、『保元物語』や『平治物語』から『源平盛衰記』や『太平記』などがあり、支那には、「漢楚軍談」や「三國誌」などがあるけれども、何れも一騎打の物語で團體戰鬪を書いたものがない。殊に海戰記となると壇の浦合戰では參考にならない。近代海戰記としては小笠原長生氏の「海戰日錄」(日清戰爭黃海海戰)があるけれども、之とても艦艇の進歩に依つて十年間に餘程事情が異つて居る。

斯様な有様で、第一に現代海戰に適切な表現詞がない。就中形容詞がない。有るのかも知らぬが無學の僕には見付からない。夫れに加ふるに前述べた様に世人の海軍知識が乏しい爲め、海軍の術語を其まゝ使つたのでは讀者に了解が出來難い。一々說明を加へると教科書的になつて記事がダレて仕舞ふ。相當注意したけれども、夫れでも尙ほ田山花袋氏から何かの雜誌で「著者は日本海の海戰を記實的に書かうとせずに說明して聞かせるといふ程度で筆を執つて居る」との批評を受けた。誠に當然な評であると自分も思つた。そんな斯んなで何遍か行詰つて、時には字を半分書いた儘原稿を一月ばかりも机の側に打ちやつて、柄にも無いことを始めたものぢやと後悔したこともあつた。其かはり愈脫稿するまでは誰にも相談せず、誰の助言も請はず、徹頭徹尾自分の思ふまゝに書き綴つたのである。唯卷末にある海軍充實の意見は、脫稿後當局の認可を受ける際其意を享けて書き足したのである。

此書を書くに際し僕の特に意を用ゐた點は敵軍に關する記事である。兎角舊い日本人は大和魂萬能病に犯されて、平時でも感情的に外國人を輕侮する癖がある。殊に戰時に在つては敵愾心の昂奮する爲めか、敵に對しては頭ごなしに罵詈讒謗を加ふるが常である。日露戰爭の場合も其例に洩れず、新聞雜誌などの戰爭記事を見ると日本軍は鬼神の如く強く、敵軍は蟲ケラの如く弱い様に書いてある。尤も海陸共に我軍連戰連勝であるから日本軍が強く露軍の弱かつたことは爭はれぬ事實であつた。併しながら露軍の敗れたのは當然敗れるべく軍隊其ものに缺陷のあつた爲めで、必ずしも露西亞人其ものが個人として怯弱であつたのではない。日本海に全滅したる婆爾的艦隊の如きも、其組織に於て、其編制に於て、其機械力に於て、其訓練に於て、敗けるべき多くの缺陷を持つて居たのである。

勇敢なる敵に對して敬意を表するは武士道の精神であり、人間性の美點である。弱き敵に勝つことは大なる名譽ではない。強い敵に勝つてこそ眞の名譽である。敵の實力を察せず、敵の敗因を究めず、唯敗れたるが故に弱しとして罵詈輕侮することは、國民の眞の勇氣を鼓舞する所以でなく、却つて國民をして盲目的己惚に墮せしむるものである。日本國民の或者は既に此病氣に罹つて居る。現代の戰爭に機械力と經濟力とを無視せる大和魂盲信連が其れである。

僕は斯かる見解の下に、一は勇敢なりし敵に對して武士の同情と敬意を表すると共に一は斯かる勇敢なる敵に勝ちたる我軍の更に勇敢なりしことを國民に示す爲め、或は隊としての、或は個人としての、敵軍の勇行をば見た儘聞いた儘を率直に赤裸に書くことに力めた。あの悲壯なる敗戰の際には尙ほ幾多の勇行美談が潮冷き日本海の底深く永久に葬られて居ることであらうと思ふ。

此拙著に對しては、新聞雜誌其他知己未知の各方面から多くの讃辭的批評を頂戴した。其等の中で僕の此微意を酌んで吳れた者は、獨り雜誌「學生」に於て「此一戰」を讀むと云ふ題の下に、

（前略）

此書を讀んで先づ嬉しく思はるゝは啻に委しく我軍の偉勳を記したるのみならずして大に敵軍を審にしたるに在り、而して寄せ得べき限りの同情を寄せたるに在り。武士は物の哀れを知る、著者の態度が既に日本武士の精神を發揮せるを見る也

（後略）

と評した故大町桂月氏ばかりであつたと記憶する。

冬初めて稿を起しながら、牛歩頗る遲々として、いつしか夏となり、豫定の轉任時期も次第に接近するので公務の方も片付けねばならず、結末を急いで夏の末に兎も角も脱稿した。初めて同室の先輩小笠原長生氏（當時大佐？）と丸橋彦三郎氏（當時中佐？）とに供覽し、出版其他のことに就いて種々援助を受けた。最初某書肆に出版の相談をしたら無印稅なら引受けても良いと云ふ。別に印稅が欲しい譯ではなかつたけれども、御情的に出版してやると云ふ様な態度がイヤだつたので、同僚より巖谷小波氏を介して更に博文館に交涉し、遂に同館より出版することとなつたのである。

扨て次の問題は書名である。「此一戰」と云ふ書名は今日では非常に良名として世間に認められて居るけれども、最初二三の人と名前を擇んだ時には、何だか間の拔けた緊張味を缺いたものとして候補名より省いたのである。それを出版者側の意見によつて復活採用したもので、當時著者としてはあまり感服しなかつたのである。併し今日より考へれば此以上の良名は無い。元來書物の名前などいふものは何でもない様に思つて居たが、息子の名を決めるよりも餘程むつかしいことを知つた。かくて擔任の仕事も終り、地方へ轉任を命ぜられて東京を離れることとなつたので、校正其他出版一切の事は丸橋氏を煩はしたことを序ながら玆に深く感謝する。

此一戰が初めて世に出た頃には櫻井忠溫君の「肉彈」が熱狂的に歡迎されて讀書界を風靡して居る時であつた。櫻井君と僕とは共に伊豫松山の生れで同じ中學校の出身である（尤も僕の方が數年の長ではあるが）。それに東郷大將の幕僚として海軍作戰の實際の案劃者であり、簡潔流麗なる名文戰報の作者として有名であつた故秋山眞之氏も亦同郷の先輩であつた。其他鄕里よりは俳句界に於ては故正岡子規子を御大として河東碧梧桐、高濱虛子、故内藤鳴雪などの大家輩出し、現文相勝田主計氏なども綿入か人絹かは知らぬが「即興や……」など十七字文學もやるし、「へちま」の何とかを初め二三の文學的著書もある。現陸相の白川大將の如きも巧みに鋒鋩を收めて居るけれども、「乃公の出世は報告がうまかつた爲め」と自讃して居るさうであるから、之も一廉の文章家らしい。

斯く數へ來ると世間の人々が、松山の人間と言へば猫も杓子も文章を作り俳句をひねくるが如く考へるのも無理はない。左れば幾回となく松山と文學との關係に就いて質問を受けた。併し僕の知れる範圍に於ては夫れは唯偶然の現象であつて何等歴史的因由の存する譯ではあるまいと信ずる。其證據には現在の松山人にして著名なる純文學者や流行の作家などは一人

として見當らない。

僕等の如きは少年時代から札付の亂暴者惡戯者で、書は姓名を記すれば足るなどと項羽を氣取つて、文章などは柔弱者の携る業であると輕蔑したものである。殊に海軍出身と決心して後は、兵學校の入學試驗に英漢數以外の普通學の無いことを幸として、中學校の作文の時間などは殆んど席に着いたことはなかつた。然るに其後入學試驗に作文其他一般普通學が加へられることになり大に狼狽したが、天罰踵を廻さず、忽ち作文で落第した。左れば後年文筆を弄して書物を書かうなどとは當時全く夢想だもしなかつたのである。

ところが運命の神は時々罪な惡戯をする。日露戰爭中僕は一水雷艇長として、あの戰史空前の壯烈と悲壯とを極めた第三回旅順口閉塞の掩護並に隊員收容の任務に從事した。其際閉塞隊司令部から、閉塞隊の記錄を編纂するから其材料となる樣なものを書いて出せと云ふ通知があつた。規定の戰鬪報告は既に提出してあるのだから其以上は面倒でもあり且つ閑も無かつたので無精を構へ、二三度催促を受けた後漸く當時見たまゝ感じたまゝを書き綴つて送つた。幸か不幸か既に原稿締切後であつたと見えて閉塞隊記錄に載せる譯にも行かず、と言つて海中へ捨てる譯にも行かず、仕方なしに何處かの新聞か雜誌へ送られたらしい。軍艦には從軍記者が許されなかつたので海戰記事が珍らしかつた爲めか、全國の新聞に轉載せられて、「砲煙漠々砲聲轟々が天下の名文などと煽てられ、一躍して海軍部内の文章家に成り濟ましたのである。人間名を爲す亦易いかなの感なきにあらずであつた。

之が因縁となつて戰爭後海軍軍令部へ引き出され、「日露海戰史」編纂に從事することゝなつた。「此一戰」は實に此時の副産物である。水雷艇の狹き士官室で無意識に書いた一文が僕の後半生を支配するに至らうとは當時思ひも及ばなかつた。

「此一戰」は可なり好く賣れた。しかも實際に書物が賣れた以上に評判が高かつた。之が爲め印税で五萬圓儲けたとか、十萬圓儲けたとか、途方もない噂さへ耳にした。噂の十分の一にせよ、二十分の一にせよ、兎に角僕に取りては豫期せざる收入である。別に恥づべき惡錢では無いけれども、俸給を貰つて居ながら内職稼ぎと言はれては軍人氣質が許さない。そこで富友から多大の補助を貰ひ、私費留學の允許を得て、戰時戰後の二回、西洋見物と洒落たのである。

最初の外遊は戰爭第三年目と第四年目とで、正に濟戰の最絶頂であつた。英佛伊等を巡遊して、現代文明國の戰爭なるものが如何に大規模であり、之に比すると日露戰爭の如きは子供の軍ごつこに毛の生えた位に過ぎず、日本の如き經濟要素に貧弱なる國は到底今日の戰爭に堪へ得るところにあらざることを覺つた時、僕は愛國的見地より戰爭を否認せざるを得なかつた。

次回の外遊は休戰後僅に半歳、恰も醉つぱらひが醉の力で手當り次第に皿小鉢を叩き割り、醒めて後頭抱へて悔んで居ると同樣、聯合國民は五年の長年月に亙つて自ら破壞し盡した戰の跡を眺めて、戰爭に勝ちながら後悔と疲勞とに茫然自失して居る時であつた。僕は先づ北佛の戰跡を訪ね、其狂暴たる破壞、其殘忍なる殺戮の跡を見て、滿目唯荒涼、滿心唯悲哀、僕は人道的良心より戰爭を否認せざるを得なかつた。

更に敗戰の獨逸に入り、人は藁パンを齧つて營養不良に痩せ、物は軍用に徴發せられて殆んど完物を見ず、往年世界を睥睨してユーバーアルレスを誇りたる獨逸人の意氣と獨逸の繁榮今何處ぞと顧みたる時、僕は柔順に軍國主義侵略主義の幻滅を感ぜざるを得なかつた。

要するに現代の戰爭なるものは、不幸にして負くれば國家民族の壞滅を意味し、幸に勝つても子弟と骨肉の血を以て野草を肥す以外に、大衆の生活に寸毫の幸福を齎すものでないことは、歐洲戰爭が最も明確に、最も雄辯に之を立證して居る。

外遊前數箇月、軍國主義の鈍刀を振り翳して姉崎正治博士の平和論に打つて掛つた僕は、此に至つて潔く甲を脱いで博士の門に降らざるを得なくなつた。戰爭の害毒、軍備の危險、軍國主義の亡國、是れ僕が二回の外遊に依つて覺り得たる唯一最大の土産であつた。伯林滯在中、在留邦人の天長節祝賀會の席上、僕は人類の幸福、世界の平和の爲め、軍備撤廢論を述べて同席の陸軍將校と深更までも論戰したこともある。露西亞のソビエート政府よりも僕の方が軍備撤廢の大祖かも知れぬ。

軍事思想鼓吹に依つて得たる印税を以て平和主義を買ひ得たのも佛家の所謂因果の輪廻であらう。

此書は敢て凶險なる軍國主義を鼓吹せるものではないが、幾分なりと軍國主義や好戰心を刺戟する嫌があるので、出版者の好意ある了解を得て數年來增版を停止して居たのである。然る處今回改造社から之を本全集に加へたいと云ふ交渉に接したので大に躊躇はしたが、既に時世も變つて居るし、讀者の思想も進んで居るし、今では單なる歷史的文學に過ぎないとの見解の下に之を承諾した次第である。

斯樣な書物が文學書として本全集に編收せらるゝ價値があるや否やは僕は知らない。唯併し明治より昭和にかけて蒼天の星の如く現はれたる無數の書籍の中、此書も亦天の一隅に極めて微かな光の一絲を印した小さき流星の一として本全集に加へられたることを光榮とする。

何か著者の言葉を書けと云ふ命に依り與へられたる頁を駄言に汚すこと件の如し。

昭和三年十二月初旬　　著者識

年譜

明治八年
五月二十四日愛媛縣伊豫國溫泉郡三津濱に生る。父光之は舊伊豫松山藩士。母ナホ。一兄三姉あり。

明治九年
母ナホ死亡。

明治十年
擧家松山に歸住す。

明治十三年
父光之死亡。遺孤分散一人づつ親戚に寄食することとなり、著者は母方の伯父笹井方に引取らる。

明治十四年
松山巽小學校に入學、初等八級。

明治二十二年
松山高等小學校卒業、伊豫尋常中學校第二學年に入學。

明治二十三年
惡戯年と共に激しく伯母の手におへず、遂に笹井を逐出され、勞働生活の兄の家に寄寓、共に苦慘なる自炊生活を爲す。

明治二十四年
陸軍幼年學校入學を志望せしも友人の勸に依り海軍兵學校志願に變更す。

明治二十五年
此頃より海軍兵學校入學試驗科目たる代數、英語、漢文以外の課目は、學校にて多く出席せず、放縦自炊生活と相俟つて學業漸く荒む。

明治二十六年
七月、中學校卒業試驗落第、退校す。
八月、初て海軍兵學校入學試驗を受く(廣島にて)。代數にてはねらる。
學友と共に郷里の「海南新聞」を配達す、月酬九十七錢也。

明治二十七年
七月、兄病死。爾後單獨自炊生活を爲しつつ兵學校入學試驗準備の爲め自修。郷黨の餓鬼大將たり。
八月、海軍兵學校入學試驗を受く。痔核の爲め身體檢査に不合格。
十一月、生年月を十年十月と訂正す。

明治二十八年
海軍兵學校入學試驗科目に普通學科加へられ大恐慌、大狼狽。
四月、愛媛縣尋常中學校五年級へ再入學。
自炊を止めて下宿す。
八月、海軍兵學校入學試驗受驗。漢作文科にて不合格。

十二月、同校追加募集試驗に合格。

明治二十九年

二月、海軍兵學校生徒を命ぜられ、廣島縣江田島なる同校に入學。同級生六十二名、中に現中將野村吉三郎、小林躋造等あり。

明治三十一年

十一月、海軍兵學校卒業、少尉候補生に任ぜられ、軍艦比叡（初代）乘組を命ぜらる。

明治三十二年

實地練習の爲め北米西岸に遠洋航海を爲す。歸航後軍艦千代田に配乘。

明治三十三年

正月、海軍少尉。

爾後吳水雷艇隊附、上海警備陸戰隊小隊長、水雷術練習所附、初瀨乘組、鳥海航海長心得等を經（此間に中尉となる）。

明治三十六年

十二月、海軍大尉、第十艇隊艇長に補せらる。

明治三十七年

二月、日露開戰、第四十一號水雷艇長として朝鮮海峽並に旅順方面の戰役に從事す。

明治三十八年

日本海海戰に參加す。

明治三十九年

海軍軍令部出仕を命ぜられ『明治三十七八年海戰史』編纂に從事す。初めて東京に居住す。

明治四十三年

『戰史』編纂の餘暇を以て『此一戰』を書く。

九月、第二十艇隊司令に補せられ舞鶴に赴任。

明治四十四年

『此一戰』發刊。

明治四十五年

二月、佐世保海軍工廠檢査官より海軍省文庫主管に轉じ、再び東京に居住す。

大正二年

時局に鑑み日米戰爭假想記『次の一戰』を書きしも都合により發表を見合はす。

大正三年

一友人の窮迫を救ふ爲め『次の一戰』の原稿を寄與す。「一海軍中佐」の匿名を以て金尾文淵堂より刊行す。書中、軍事と外交との機微（機密にあらず）に亙る點ありたる爲め問題となりて匿名發覺し、無認可出版の廉を以て謹愼を命ぜらる。問題の書として大に讀書界を賑はしたるも、同年八月、歐洲戰爭勃發し日本も亦參戰するに及び、當局の對米外交上の意思を尊重し、刊行後三箇月にして絶版とす。

十二月、『次の一戰』絶版の埋合せとして金尾文淵堂より『戰影』（旅順海戰私記）を「一海軍中佐」の匿名（當局の認可を得て）を以て發刊す。此書は著者最も會心の作なりしも刊行の終末を詳にせず。書肆の店頭に殆んど其姿を見ずして湮滅したるは遺憾なり。

『日獨戰史』編纂事業に着手す。

大正四年

編纂事業に倦み海上勤務を强願の結果、軍艦出雲副長、尋いで軍艦肥前副長。多年艦隊並に陸上勤務の爲め艦務の狀態一變せるに驚き、大に間誤付く。

大正五年

七月、私費留學の許可を得、戰時の歐洲見學の爲め横濱出發。印度洋、九月、倫敦着、英佛伊を視察。

大正六年

八月、米國を經て歸朝。

海軍軍令部出仕、軍事調査會の事に從ふ。

十一月、十二月、「東京朝日新聞」に「無名氏」の號を以て「滯歐記」「バタの臭」を連載す。

大正七年

海軍大佐。

大正八年

一月、「大阪每日新聞」所載姉崎正治博士の軍國主義攻擊論に對する駁論を「中央公論」に載せ、大に軍國主義の提灯を持つ。之より先數年來新聞雜誌等に屢所見竝に評論を書く。

三月、友人の給費に依り再び私費留學を出願、認可を得、戰後の歐洲視察に赴く。時に休戰後僅に半歲、佛國の戰跡を訪ねては戰爭の害毒を目睹し、獨逸の慘狀を見ては軍國主義の幻滅を覺認し、思想の大轉化を來す。

大正九年

五月、歸朝。

九月、軍令部出仕。

大正十年

正月、「東京日々新聞」の依賴により新年記事として『軍人心理』を書く。現役軍人の筆としては聊か大膽露骨に過ぎたり、果然物議を生じ「上官の許可を得ず文書を以て政治に關する意見を公表したる」科に依り謹愼處分を受く。

謹愼明け後當局より再出勤の勸ありしも、軍隊は最早や永住の境にあらざるを思ひ、現役引退を希望す。

八月、豫備役に編入、軍服に永久の別を告ぐ。

大正十一年

渡歐航海記『波のうねり』を金尾文淵堂より發行。

華府會議開催、尾崎咢堂翁等と軍縮運動に從事す。

爾後軍事竝に社會評論に筆を執る。

昭和三年十二月二十日印刷
昭和四年一月一日發行

現代日本文學全集 第四十九篇

著者 櫻井忠溫
著者 水野廣德

發行者 山本美
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地

印刷者 杉山愛二
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一ノ一二

發兌
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地
改造社
振替東京八四〇二番
電話芝(43) 一一二一番 一一二二番 一一二三番 一一二四番

株式會社秀英舍印刷

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03001 7719

改造社